

刹那の夢と嘘の玩具

月影 梨沙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

10歳の少女、洲先 瑞穂は、ジョウト地方を旅するポケモントレーナー。

可愛かったヒメグマが狂暴なりんぐマに進化してしまったり、ロケット団との戦いで手に入れたタマゴから特別な力を持ったグライガー生まれたりと、騒動に巻き込まれていく中で――。

瑞穂は、惨たらしい死体とともに佇む、紫色の長い髪の少女と出逢う――。

愁いを帯びた瞳に、微動だにしない白い表情をした少女の名は、射水 氷。

戦いの中で協力し、少しずつ友情を芽生えさせていく瑞穂と氷。

しかし、それは必然であり、罪と哀しみに満ちた過去を抉り出す出逢いであることを、

彼女たちはまだ知らなかった――。

※本作はウェブサイト「ポケモンセンターin19番水道」にて2007年まで掲載されていたものを再公開にあたり加筆・修正・改題したものです。

目次

#1 秘密。

満月の夜に

1

悪意の檻

12

偽りの希望

26

#2 傷痕。

闇に堕ちた街

42

対決

57

決別は鮮血と共に

70

変わらぬ気持ちと後悔と

81

交錯する辛い思いで

91

去りゆく勢い

102

抱擁と約束と

113

#3 姉妹。

すれ違い哀しみ

123

秘事は青空に消え

136

死喰らいの夜

148

再会は涙の予兆

160

街は闇に堕ちて

177

巡る抉る愁いの足音

190

#4 狂気。

月卿雲客

203

三月庭訓

220

雲心月性

232

羞花閉月

245

光風霽月

257

水月鏡像

270

#5 妖魔。

静かなる波紋

286

孤独なる出逢い

299

赦されざる残光

312

愚かなる暴挙

328

底見えぬ微笑

339

晒される羞恥

354

#6 憑依。

接続+授与

366

救済÷伝達

380

追求↓発見

392

欲求×創造

408

憤慨△加速

418

消失∥増殖

430

#7 視界。

魂に再会すると

442

やがて解け消える雪のように

454

神の殺気に

466

赤黒き神域を舞う、蒼き翼

476

一欠片の狂気

493

最期の景色は

506

#8 無力。

月夜の咆哮

520

その視線は死の瞳

534

闇の再来

545

逃げられぬ惨劇の中で

555

哀しき強襲

569

棄てられの自我に

585

#9 侵蝕。

偽りの私が見た黒

595

消えた妹

609

或る計画

620

悲劇の演出家

634

少女の自我

645

悲しみと怒りと獣と

656

妖獣の叫び

672

小さき身体は真紅に染まり

687

#10 過去。

霞んだ記憶

699

永久に続く、終わりなき闇

711

紅翼の霊

724

月照らす、少女の過去

741

忘却と束の間と

752

死劇の発端

763

#11 幻牙。

黒い霧雨

776

無色の残留思念

793

濁りし呪屍

806

真紅の刃

823

蒼き記憶の光粉

834

白い微笑

847

#12 悲歌。

生存者

—

861

繰り返しの死

—

873

沈んだ涙

—

889

深暗い海を見つめる瞳

—

904

見えない殺意

—

917

彷徨いの末と衝動

—

928

波は荒れ、熱線は放たれ

—

939

孤独な二重奏

—

951

#1 秘密。

満月の夜に

強くても、力がなければ意味がない。
力があっても、強くなければ意味がない。



少女は夢を見ていた。

夢の中では、荒廃した大地が広がっていた。空は闇に覆われ、月は見えない。無数の流星が光だけが見える。その光は次々と地平線に突き刺さり、虹色の波導を撒き散らし、大地を侵食していく。

少女は、朽ちていく大地の上に、茶色の巨体が立ち尽くしているのを見た。巨体は空を見上げ、降り注ぐ流星を見つめていた。

呆然と空を見上げる巨体へと、少女は声をかけた。その声は響かなかつた。流星の轟

音が無惨にも掻き消し、誰にも届くことはなかった。少女は叫び続けた。涙が頬を伝い足下へ落ちた。雫が弾ける。消音を突然解除されたテレビのように、少女の声の波は瞬時に辺りに響きわたった。

流星の一つは巨体を貫いた。少女の声は巨体へは届かなかった。大地の崩壊する音と共に虚しく波打つだけだった。

そこで夢は途切れた。

少女は目を開いた。冷たい液体に全身を犯されているかのような不快感が、全身を包み込み、少女は身震いした。

「ここは、何処——」

胸の奥で少女は眩いた。緑色の視界に映るのは、黒くてごつごつとしている塊。手を伸ばせば、それにはすぐに触れられそうなのに、透明な何か、少女の白く華奢な指先を阻む。

少女は、自分の指先を拒む透明な何かをじつと見つめていた。そして、そこに小さな刻印がなされているのを見つけた。溺れるような意識の中で、少女は目を凝らし、刻印の意味を考えた。考えながら、また深い眠りへと沈んでいった。

“ No. 7 ” の刻印。その意味。その思考だけが、最後に残った。



冷たい汗が額から流れ落ちた。汗は白い頬を伝い、二の腕まで辺りまで達して消えた。小さな身体が微かに震え、軽い寝返りをうつ。

木の幹に寄りかかり、小柄な女の子が蹲るように眠っていた。何か恐い夢でも見ているのか、可愛らしい童顔が、時折苦しげに歪んでいる。澄んだ水色の髪を二つに束ねたツインテールが、寝返りの度に揺れた。髪の毛の隙間から覗く頬は、頼りなさげなか細い四肢は、雪のように白い。

柔らかそうな身体をくねらせ、ポケモントレーナーの少女、洲先瑞穂は目を覚ました。軽く息を吐き、自慢のツインテールの先端についた汗を振り払う。脱力したように木の幹にもたれ、虚ろな視線で辺りを見回しながら、先程まで見ていた奇妙な夢の内容を思い起こして、自問に近い呟きを漏らした。

「変な夢だったな。何だったんだろう、今のは」

瑞穂は掌で額を撫で、ゆっくりと空を仰いだ。だが、無数に生い茂る葉っぱに覆い尽くされ、本来の青い空は隠れている。感じることはできるのは、木々の静かな息づかいだけだった。湿気を多分に含んだ空気が肌にまとわりつき、不気味な感触を残す。太陽

の光は、背の高い木々に阻まれ森の奥底まで届くことはない。その為にこの森は、ウバメの森は常に薄暗く、湿った空気に包まれていた。

「もう、こんな時間だ。ちよつと寝過ぐしちやつたかな」

瑞穂は腕に付けたポケギアに目をやり、木の幹を支えにしながら立ち上がった。すぐ傍に置いていたウエストポーチへ手を伸ばし、身に着ける。眠気に緩んだ身体を引き締めるように軽く背を伸ばし、腰についた土埃を払うと、少女は森を後にした。

透き通るような青空から光の帯が降り注ぎ、長く続く一本道に広がっていた。光を遮る葉も幹も、何も無い風景。瑞穂は眩しそうにそれらを眺め、降り注ぐ光を避けながら歩いた。

瑞穂はポーチから一枚の紙を取り出して広げ、掲げるように見つめた。一週間前に預けたフシギソウを引き取るために必要な、育て屋の預かり証明書だった。

「おい、そこのピックアップガール。俺とポケモン勝負しろ！」

「はい？」

突然の大声に驚いて、瑞穂は反射的に手にしていた証明書をポーチに戻し、振り返った。

視線の先に立っていたのは、短パン小僧のような風貌をした少年だった。少年は、モ

ンスターボールを持って仁王立ちしている。自信に満ちあふれた少年の顔に、まるで鏡を見ているかのような気恥ずかしさを覚えて、瑞穂は思わず顔を背けた。

「あの、何の用ですか？」

少年から眼を逸らしたまま、瑞穂は訊いた。

「おまえ、馬鹿か？」

鼻を鳴らし、少年は笑った。瑞穂は横目で少年の顔を見つめた。唇がひきつっている。嫌味な笑い方だった。

「ば、馬鹿って言わなくてもいいじゃないですか」

「人の話を聞いてなかったのか？ 俺はポケモン勝負をしろって言ったんだ」

反論する隙を与えずに、少年は手に持っていたンスターボールを瑞穂の鼻先へ突きつけた。

少年の言動に微かな怒りを感じながら、瑞穂は首を引き、鼻先に突き付けられたボールを避けた。上目遣いに少年の顔を、自信と優越感に満ちた表情を見つめ、困ったように眉を潜める。

今の状況は、瑞穂にとって圧倒的に不利だった。手持ちのポケモンで一番頼りになり、強い実力を持つポケモンであるフシギソウは育て屋に預けており、現在の手持ちはたったの1匹だけ。それも、残っているのはあまりバトルが得意でないポケモンだっ

た。

押し黙る瑞穂に我慢の限界がきたのか、少年は蔑むように少女を睨んだ。

「お前、ポケモントレーナーだろ？ 勝負を挑まれたら、とつと準備しろよ！」

少年の怒気に気圧されたように、瑞穂は後ずさった。膝が小刻みに震える。身体の芯から響いてくる震えを必死に堪えながら、瑞穂は自分が怯えていることに気付いた。

「ルールはどうする？」

「あの、私は今、一匹しかポケモン持ってなくて——」

それだけを声に出すので精一杯だった。瑞穂は情けなくなった。不意に情けない自分が我慢できなくなつて、目頭が熱くなった。

「ダメエなおい。やつぱお前も、そこら辺のザコトレーナーと同じだよ。いいぜ、ザコ相手の特別ルール。1対1で相手をしてやるぜ」

少年は吐き捨てるように言う、モンスターボールを放り投げた。中から出てきたのは、炎タイプのポケモン、マグマラシ。流線型の鋭い体躯が特徴的なポケモンだった。逆立つ体毛のように見えるのは、燃え盛る背中の炎であり、その熱は少し離れた瑞穂にも感じ取る事ができる。

「私は、バトルするなんて一言も言っていないのに」

口でそう言いながらも、瑞穂は咄嗟にモンスターボールを取りだして放り投げた。こ

のまま無視して去ってしまえば試合放棄として負けと見なされ、トレーナーとしての評価は大きく下がる。だが、手持ちのポケモンが心許ない時は、いたずらにポケモンを傷つけるべきではないという判断から勝負を回避することも珍しくない。

瑞穂は勝負を受けることを選んだ。大人しい少女の中に隠れた、父親譲りの負けず嫌いな性格が、試合放棄を許さなかった。半ば、自棄になつてもいた。

瑞穂が繰り出したのはノーマルタイプのポケモン、ヒメグマ。小熊の人形のような小さく丸っこい姿をしており、瑞穂がヒメちゃんと呼んで、昔から可愛がつているポケモンだった。

勝負が始まつて数分と立たない内に、ヒメグマは追い込まれていた。翻弄され、手も足も出なかった。ヒメグマには動きが鈍いという弱点があり、マグマラシの素速い動きについていくことができなかったのだ。そして、弱点を補うだけの力を、ヒメグマの小さな身体は持ち合わせていなかった。

「マグマラシ！ 体当たりだ！」

少年の指示で、マグマラシは一直線にヒメグマへと向かっていく。

「ひ、ヒメちゃん！ 受け止めてから、乱れひっかき！」

鈍い音がした。ヒメグマは、突進してきたマグマラシを受け止めていた。だが、マグマラシの力は予想以上に強かったようで、ヒメグマの腹部にはマグマラシの頭がめりこ

んでいた。

ヒメグマはあまりの痛みに耐えきれず、呻き声をあげた。

「ヒメちゃん！ 大丈夫?!」

瑞穂の声など聞こえなかったかのように、ヒメグマは両腕でマグマラシの身体を掴み、腹から強引に引き抜くと、短い爪で鋭い爪で斬りつけた。

マグマラシはヒメグマの両腕を振りほどき、大地を蹴りつけて跳び上がった。ヒメグマが渾身の思いで繰り出した乱れひつかきは、宙を舞うマグマラシの遙か下で空気を切った。

「そんな!」

瑞穂は叫んだ。少女の叫び声を、せせら笑うかのように少年は言った。

「全然、動きがなくなってねえじゃねえか。バカじゃねえの?」

マグマラシは太陽を背にして地面に降り立つと、電光石火の勢いで、再びヒメグマの懐に肉迫する。瑞穂は動揺のあまり、ヒメグマに指示をだすことすら忘れていた。少女の動揺ぶりを見つめ、少年は笑い出した。そして、叫んだ。

「マグマラシ! トドメの火炎車だ!」

マグマラシの周りが激しい炎につつまれた。回転しながらヒメグマに突っ込んでいく。

「や、やめて！ やめてくださいよー！」

瑞穂は我を忘れて叫んだ。その途端、マグマラシの炎がヒメグマの身体を覆い尽くした。猛火の中で、ヒメグマはもがき苦しんだ。

「も、戻って！ ヒメちゃん！」

瑞穂は、ヒメグマをボールへ戻した。

今すぐにも逃げ出したい衝動に駆られて瑞穂は胸を押さえた。適わないことは初めから解っていた筈だったが、こんなに早く勝負がつくとは思わなかった。

「へッ、この程度でやられちゃうなんてな、ヨエえ。」

少年は下品な笑みを浮かべ、瑞穂の目の前に掌を突き出した。

「え？ なんですか？」

瑞穂は震える声で訊いた。

「なんですか？ じゃねえよ。ほら、はやく賞金を寄せよー！」

「あ——」

路上のポケモンバトルでは、負けたトレーナーが勝ったトレーナーに対して、今持っているお金の半分を「賞金」と称して渡さなければならない。ポケモントレーナー協会は、このような行為を禁止しているが、実際には強いポケモントレーナーの育成という国家規模の目標のために、黙認されているのが現状だった。

瑞穂は俯いたまま、少年にお金を渡した。

「たったの240円かよ。貧乏人だな。ま、こんだけ弱けりや、無理もないけどな」

思いつく限りの悪態をつき、マグマラシをボールへ戻すと、少年は振り向きざまに瑞穂の頭を張り飛ばした。

乾いた音が響いた。瑞穂の目の前に火花が散った。少女は口を開いたまま、呆けたようにその場に座り込み、紅く腫れた頬を掌で押さえた。胸元の冷たい部分から、瞳へとこみ上げてくる涙を喉元で堪えつつ、か細い声で呟く。

「どうして、叩くんですか——」

「弱い奴が、強い俺に逆らうからだよ。弱い奴はな、強い人間に逆らっちゃいけないんだよ。だけど、お前はそれを破った。罰みたいなものなんだよ」

「そんな決まり、無いですよ。無いです」

項垂れた瑞穂の瞳から、堪えきれずに溢れた涙がこぼれた。情けなさや悔しきで、顎と肘が振るえ、何度も上下した。

「あるんだよ。俺はな、強いポケモンだけがポケモンだと思ってるんだ。弱いポケモンなんてな、ポケモンじゃないんだよ。お前のポケモンも、ポケモンじゃねえよ。ペット以下だな。人形ごっこがしたいなら、自分のお家でやれよ」

悪態をすべて吐き出し終え、少年は駆け出した。

「ちよっと、まって！」

瑞穂は少年を呼び止めた。少年は振り向いた。汚い物でも見るような目つきだった。彼にとって、瑞穂は用済みの存在だったのだから。道ばたに転がっている石ころよりも、どうでもいい存在だったのだから。

「なんだよ、ザコトレナー！」

膝の震えが甦った。ヒクつく喉を懸命に抑え、瑞穂は訊いた。

「あなたの名前——」

「ああん？ お前みたいなのに付き合ってる暇無いんだよ。俺は！」

「名前、教えてくれないかな？」

「うるさい女だな。俺はゴールドってんだよ。とつとと消えろ負け犬！」

少年は最後の罵声を瑞穂に浴びせ、視界から消えた。

瑞穂は項垂れたまま、白い息とともに呻き声を吐いた。冷たい涙の雫が少女の唇を濡らし、手の甲に滴り落ちていく。透明な液体は空の色を映しだしていた。少女の哀しみをそのまま複写したかのような、青く暗い色を。

悪意の檻

乾ききつた掌が微かに動いた。ぼんやりと開いた瞳が捉えるのは、白い筈の雲が、青い筈の海が、すべてが夕焼けの色に染まっている光景だった。

水平線の奥に、沈みかけた太陽の姿を認識すると同時に、瑞穂は顔を上げた。涙の跡が残る白い頬を掌で拭い、呆けたような焦点の合わない瞳で空を見つめた。あれから、どれだけの時間、ここで泣き、眠っていたのだろうか。

足に付いた砂を払い、瑞穂は立ち上がった。その時だった。腰につけたヒメグマのモンスターボールが微かに震えた。

「な——なに？」

瑞穂は即座にボールからヒメグマを出した。ヒメグマは体毛の所々が焦げてはいるが、火傷などはしていないようだった。

「どうしたの？ ヒメちゃん」

言いながら瑞穂は、心配そうにヒメグマの顔を覗き込んだ。刃物のような鋭い形相が見えた。誰だ、これは。瑞穂は息を呑んだ。怒り狂ったその表情は、人形のように可愛

らしい彼のものでは無かった。別の何かが、ヒメグマの身体の中に入り込んで、這いずり回って、彼の顔をここまで豹変させてしまったのではないかと、瑞穂は一瞬だけ疑った。

これ程までに怒り狂うヒメグマの表情を、割れてしまったような形相を、瑞穂は初めて見た。と、同時にヒメグマの怒りの根の深さに、少女は気づき、悲しげに眼差しを降ろした。

「そうだよね——」瑞穂は、ヒメグマの額を撫でた。「ヒメちゃんも、悔しいよね。ごめんね、ヒメちゃん。私がつと、ちゃんとしていれば、私が、もつとしっかりしてたら——」

不意に先程までの悔しさと、自分への情けなさが胸の中に甦った。言葉を飲み込み、瑞穂はヒメグマを抱きしめた。搾りきった筈の涙が溢れ、こぼれ落ちてくる。

「私さ、ダメトレーナーなんだ。私が悪いの、全部。私がだらしないから、ヒメちゃんも痛い思いして、悔しい思いして——」

瑞穂の言葉を掻き消そうとするかのように、ヒメグマは咆哮した。夕日と落ちた満月の空に鋭く大きな叫び声が木霊した。咆哮と同時に、ヒメグマの体が暗闇の中で光りだした。その輝きは彼自身の叫びに呼応するかのように、強さを増していく。

瑞穂は驚き、ヒメグマから離れ、眼を見張った。

「ヒメちゃん——？ どうしたの？ ヒメちゃん！」

何度も繰り返しい問かけ続ける瑞穂の声にも、ヒメグマは応えなかった。ただ一心に空を見つめ、そこにぽっかりと空いたような光の穴を、目を睨み続けていた。次第に大きく膨らんでいくヒメグマの身体と放たれる光。やがて、ヒメグマの光は、彼の見つめる月の輝きと重なり合った。再び咆哮が起こった。その声はヒメグマのものではなかった。低く野太く、辺り一面に広がる草原を震えさせるほどの大きな声だった。

「進化——」瑞穂は呟いた「ヒメちゃんが、進化した」

光は少しずつ消えていった。光が完全に消え去った後に残ったのは、満月の光を背にして立っている巨大なポケモンの姿だった。

ヒメグマの姿はそこには無かった。巨大なポケモンは瑞穂へと振り向いた。瑞穂はポケモン図鑑のボタンを押し、サーチコマンドを入力した。

「リングマ——冬眠ポケモン。ヒメグマの進化形」

ヒメグマは進化していた。かつての小さく可愛らしい身体からは想像できないほどの、大きく逞しく、そして凶暴な顔つきのリングマへと。

「ヒメちゃん——じゃないね。進化したんだから、今日からリンちゃんだね——良かった。良かったね」

瑞穂は恐る恐る、リングマの足へと抱きつき、呟いた。

刃物のように鋭く伸びた牙。長い手足、長い爪——それに、ちょっと恐い顔。リングマには、ヒメグマだった頃の面影が全くなかった。まったく、別のポケモンだった。だが、瑞穂は嬉しかった。これでもうリングマは悔しい思いをしなくてすむかもしれないから。

リングマは、満月の空に向かって咆哮した。それは、ヒメグマがヒメグマでなくなる直前に発したそれと、よく似ていた。



瑞穂は「ポケモン育て屋さん」と大きく書いてある正面のドアを押して、中に入った。建物の中は明るく、夜の闇に慣らしていた瑞穂は強い光に眼を眩ませた。

視界が元に戻ると、瑞穂は辺りを見回した。正面のカウンターには老婆と老人が座っている。少女を観察でもしているかのように、その4つの瞳は、じつと瑞穂へと向けられていた。

瑞穂は老夫婦と思われる2人に会釈した。老婆は言った。

「お嬢ちゃん、なんの用か?」

「1週間前、こちらにポケモンを預けたんですけど、引き取りに——」

瑞穂は、言いながらカウンターの前に歩み寄った。

「1週間前ね」

老人は、年齢を感じさせない野太い声で言った。心なしか笑っているように見える。老婆の落ち着き払った態度が、逆に不自然かつ不気味な印象を瑞穂に与えた。

「お名前はなんというんじゃね？」

「洲先瑞穂といます。これは証明書です」

瑞穂は、預かり証明書を老婆に手渡した。

「はいはい、ピクニックガールの洲先瑞穂さんね。たしか、フシギソウを預けた」
「そうです」

老婆が目で合図をすると、老人は投げやりに言い放った。

「すまんの。お嬢ちゃんのフシギソウな、逃げてしまったようじゃ」

「え——」

瑞穂は思わず声をあげた。

「今、なんて言いました？」

声は上擦っていた。少女の声とは対照的に、老人と老婆の声は落ち着いている。

「いや、だから逃げたって」

「逃げた？」

その一言を胸の中で何度も反芻した。だが、瑞穂がその言葉の意味を解するには、多少の時間が必要だった。

「逃げた」って、どういうことですか？」

「だから、逃げたんじゃって」

老人は目を細めた。

「いや、さつき行ってみるとな、見事に檻が壊されててな——」

「檻?! 育て屋なのに、ポケモンを檻なんかには?!」

瑞穂は身を乗り出して叫んだ。

「いや、違う違う。言い間違えただけじゃ!」

「育て屋なのに、簡単にポケモンに逃げられるなんて、どうかしてます!」

「お嬢ちゃんのフシギソウは、とても強かったからの。簡単にドアを破ることが出来たんじゃ」

老人の隣で、老婆が落ち着き払った様子で口を挟んだ。

「とにかく、なんとかしてくださいよ。大切な友達なんです!」

瑞穂は震える唇を噛みしめながら叫んだ。

「しつこいわね……」

老人は横目で老婆を伺った。老婆はコクリと頷く。次の瞬間、老人はカウンターを跳

び越えて、瑞穂の肩を掴んだ。とても老人とは思えない身のこなしだった。

「な、なにするんですか。放して下き——」

瑞穂が言葉を吐き出し終える前に、老人は物凄い力で少女の肩をグツと自分の腹へ近づけた。顔が老人の胸にくい込んで、瑞穂は息が詰まった。

声が出なかった。瑞穂は声にならない呻り声をあげて、手足をバタバタと振り回した。

だが、瑞穂の必死の抵抗も、老人の怪力の前には無意味だった。老人は瑞穂を持ち上げ、建物の外に出た放り投げる。柔らかで冷たい草むらの感触が、背中に突き刺さった。



瑞穂の視界の中央で、銀色の円が輝いている。まるで、その部分だけが別の空間のように見える、少女はそれが月であるということを暫くの間、忘れていた。

薄い雲から透けて見える月の輪郭を眺め、瑞穂は胸の中で呟いた。今夜ほど、月を意識した夜は無いな、と。

瑞穂は上半身を起こした。長く息を止めていたせい、草むらの叩き落とされたせいなのかは分からないが、身体が痺れていた。

「怪しい」小さな声で瑞穂は繰り返した。「怪しいよ、これは」

冷たい風が、水色のツインテールを慌ただしくはためかせた。髪を掌で押さえ、瑞穂は立ち上がった。眼を細め、育て屋の所々ペンキの剥げた白い壁を見やった。

「このままにしておくわけにはいかないよ。調べなくちゃ」

瑞穂は呟きながら、建物の裏側に回り込んだ。小さく黒い扉が隠されている。この扉は、他の角度から見たのでは絶対に気付かない場所に設置されていた。余程、重要な扉なのだろうか。忍び込もうという意志が無ければ見つけられるものではない。

瑞穂は黒い扉を少しだけ開き、中の様子を伺った。

「この部屋、何だろう。工場みたい」

中は薄暗かった。申し訳程度の電灯がチラホラ見受けられるだけで、部屋全体を照らすような照明は何も見当たらない。その代わりに、天井クレーンやフックなどが幾つも設置してある。

自分にしか聞こえないような小さな声で、瑞穂は呟いた。

「何かを運ぶため？ 育て屋が一体、何を運ぶのかな」

誰もいないのを確認し、瑞穂は建物の奥へと忍び込んだ。クレーンの部屋の扉を開け、廊下に出た。廊下にも人の姿は見えない。辺りは静まり返っている。

廊下には3つの扉があった。瑞穂は一番手前の扉を開き、部屋の中を覗き込んだ。

「ここも真つ暗だ」

部屋の中に光は無い。瑞穂は眼を細め、闇に遮られた部屋の奥を凝視した。底知れぬ暗闇の奥から、得体の知れない鳴き声が響いた。

「この声、まさか」

少女の瞳に、黒い闇よりも冷たく理不尽な光景が映りこんだ。

「非道い——」

銀色の鉄格子が見えた。乱雑に積まれた檻の中に、ポケモン達が閉じこめられていた。

瑞穂は見開かれた瞳を泳がせた。血の臭いがした。殆どのポケモンが瀕死であり、気を失っていた。

鉄格子を破ろうとしたのか、爪が剥がれ落ちているポケモン。泣き叫ぶあまり、喉から血を出しているポケモン。凍死しかけているポケモン。発狂して小さな鉄格子の中を暴れ回っているポケモン——

「こんな——こんな所、育て屋なんかじゃない。だとすると、ここは一体——」
地獄のような光景を見つめながら、瑞穂は考えた。

「そこで何をしている？」

男の野太い声が、背後から聞こえた。瑞穂は即座に声のする方へと振り向いた。

育て屋の老人が、狭い廊下に立っていた。その口許に浮かぶ笑みは、おおよそ老人の表情というものからかけ離れていた。ジグソーパズルのピースの中に、一つだけ別のパズルのピースが混じっているかのような違和感を、瑞穂は感じた。

「何もしてません。ただ、見つけただけです」

「見つけた？ この部屋のことか？」

「そうですね。それと、あなた達のやろうとしていることも」

老人は眉を潜めた。瑞穂は言葉が続けた。

「あなた達は育て屋なんかじゃない。自分達を育て屋と偽って、預かったポケモン達を盗んでいる。違いますか？」

「証拠は？」

「私の後ろにある部屋ですよ。それに、裏の入り口にあったクレーン。あんなもの育て屋に必要ないですよね？ あれはポケモンをトラックなどに搬入するために設置してあるんじゃないですか？ そして、何より——」

瑞穂は微かに俯き、下唇を湿らせた。上目遣いに老人を見つめる。

「あなたはお年寄りじゃない。どうして、自分の姿を偽る必要があります？」

老人は黙ったまま、自分の顔を覆う仮面を剥ぎ捨てた。男の変装は解かれた。瑞穂は静かに目を見開き、寒々と息を吐いた。

「やっぱり——」

それは緑色短髪の若い男だった。

「お前の言うとおおり、育て屋なんていうのは大嘘だ」

冷静な口調で男は言った。

「ポケモンをあんな所に閉じこめておくなんて許せない。それに私のソウちゃんは、何処にいますか?」

「甘いわね、お嬢ちゃん」

突然、若い女の声が背後から響いた。瑞穂に振り向く暇は無かった。

「えっ——」

何かを打ちつける音が木霊した。続いて、倒れる音。

瑞穂は後頭部を殴られ、そのまま廊下の上に倒れた。朦朧とする意識の中で、瑞穂は自分を殴りつけた人物の方を見つめた。

金髪の若い女だった。その手には、老婆が持っていた杖が握られている。

床でのたうちまわる瑞穂はを、若い女は汚い物でも見るかのような目つきで睨んだ。

「まったく無様ね。あんたが忍び込んだりしなければ、私たちもこんなことをせずにするんだのよ」

女は冷たく言い放つと、手に持っていた杖を勢い良く振り下ろした。悲鳴と呻き声が一瞬で途切れた。

瑞穂は動かなくなつた。ピクリとも。少女の意識が落ちていく先は、背後に広がる闇と同じくらい暗く冷たかつた。

氣を失つた瑞穂の細い身体を見やり、女は呟いた。

「——で、どうする?」

「まだ、生きているようだが」

「アレ」と一緒に始末してしまうつてのはどう?」



月は黒雲に覆われていた。豪雨が大地を溶かし、海を掻き回している。

降り注ぐ雨粒が少女の身体を濡らす。そのあまりの冷たさに、瑞穂は目を覚ました。

「ハイハイは——」

細く華奢な身体に自由はなかつた。全身をロープのようなもので縛られていたのだ。瑞穂は身体を振り、身体の自由が許す範囲で、辺りを見回した。

「お目覚め？」

瑞穂の背後で、女は呟いた。

「こんなこととして、私をどうするつもりなんですか？」

「消えてもらう。それだけよ」

足に水飛沫が跳ねた。瑞穂は息を呑み、足もとへと視線を移した。眼下に広がっていたのは、蒼く深く口を開けている海。

「私を、海に突き落とすつもりですか？」

「そうよ」

「な！　なんてことを——や、やめてください！　やめてください——」

瑞穂は藻掻き抗った。だが、ロープはきつく締められており、解くことも緩めることもできなかつた。少女は、悲痛な呻きを漏らした。

「さよなら。アレと一緒に、海の底に沈んでしまいなさい」

女は言い放ち、手にしたりモコンのスイッチを押した。

身体が傾いた。瑞穂はそのまま落ちていった。死へ直結した海の底へと。

海流の勢いは、瑞穂の想像を遙かに超えるものだった。冷たい水が瑞穂の全身を犯し、縛られた身体を更に奪っていく。

瑞穂の身体は、暴れ狂う海流に弄ばれ、奥へと底へと押し込められていった。

「助けて——」

か細い声で瑞穂は呟いた。その一瞬の隙をついて、大量の海水が少女の身体へと流れ込む。

「助けて、助けてください——」

瑞穂の切なさに満ちた声は、誰にも聞こえることなく海の底へと沈んだ。



偽りの希望

自分を呼ぶ声。呼びかける声。ひどく懐かしい、記憶の奥底にしまわれた声。その呼び声に瑞穂は瞼を開いた。射し込んでくる光。感覚の無い胸元に、暖かみが甦る。

瑞穂は目の前に佇んでいる人影を見つめた。薄青色の幻想の中で、人影は一人の女性へと姿を変えた。

水色の長髪に透き通るような白い肌をした女性だった。瑞穂は、女性の美しさに驚くとともに、先程まで感じていた懐かしさを思い出した。

「誰——？」

瑞穂は訊いた。声は出なかった。泡のような白い線が波紋のように広がっていくだけ。ただ、波紋に乗って音だけは伝わる。

「私は——」一瞬躊躇い。「私の名前は、洲先雪菜」

「雪菜？ どこかで聞いたことある名前。そうだ、私のお母さんの名前」

似ている——と瑞穂は思った。雪菜と名乗る女性の姿は、瑞穂とよく似ていた。雪菜を3分の2くらいに縮め、髪型をツインテールにすれば、瑞穂と瓜二つだった。

「お母さん、なの?」

「そうなんだろうね。似ているもの——当たり前だけど」

「私、死んじゃったのかな? だから、お母さんがここにいるの?」

瑞穂の母親は、瑞穂を産んだときに死んでいた。瑞穂は母親の顔を見たことがなかった。物心つくときには既に、母親の写真はすべて父親の手によって処分されていたから。何故母親の写真捨ててしまったのか。その疑問を父親にぶつけたときに、父は母親の名前だけは教えてくれた。だが、写真を捨てた理由は教えてくれなかった。その日は、喧嘩になり、瑞穂は泣きながら眠りについた。

枕に顔を押し付け、漏れ出る嗚咽。背中が意思に反して小刻みに震え、それが惨めな気持ち膨らませ、瞳から零れる涙は、さらに増していく。喉のヒクつきを堪えつつ、息を吸うと、枕の生地匂いが鼻を擦った。今でも、今だからこそ、その匂いは鮮明に思いつける。

脳裏に蘇る、幼い頃の記憶。これが走馬燈つていうのかなと、瑞穂は考えた。やっぱり私、死んじゃったんだよね?

雪菜は首を横へ振った。

「違う。私からだ、瑞穂に会いに来ただけ」

「天国から? だって、お母さんは——」

「あの世なんて無い。天国もね。人間が勝手に想像した世界だもの。人間は死んだら、消えるしかないの」

「でも、お母さんはここにいるよ？　ここにいるじゃない！」

「違うの。あなたが、瑞穂がここにいるのなら、私はここに存在してはいけない——」

「どうして？　意味がわからないよ。お母さん？」

雪菜は微笑みを浮かべ、瑞穂の身体を見つめた。

「それにしても本当に、私が子供だった頃にそっくりね——」

消えていた。瑞穂の視界から、その言葉を最後に雪菜は消えていた。



冷たい海が裂けた。水飛沫の音が響き、海の裂け目から巨体が身を起こした。海水を滴らせながら、茶色の巨体は灰色の砂浜へ向けて歩き出した。

巨体の身体には無数の体毛が——今は濡れているが、乾けば柔らかく暖かそうな体毛が——生えていた。身体の大きさに対して小さな顔には、鋭い瞳と裂けているかのような大きな口が付いている。口から覗く刃のような牙が、巨体の凶暴さを際立たせている。普通よりも1.5倍はあろうかという、大きなリングマである。

微かな唸り声をたてるリングマの腕の中で、瑞穂は蹲っていた。眠っているのか、気を失っているのか。小さく白い身体は時折、意識のない震えを見せるだけだった。

眠りながら、瑞穂は抱いていた。濃いオレンジ色をした卵を。少女の呼吸に合わせるように、卵は鼓動を繰り返している。

リングマは、瑞穂の細い腕に抱きかかえられた卵と瑞穂の寝顔を交互に眺めた。透き通るように白く、柔らかな瑞穂の頬を撫でると、リングマは腕の中に抱きかかえた小さな身体を強く揺さぶった。

瑞穂は目を覚ました。ごわごわとした感触に驚いて、即座に半身を起こした。見開いた瞳が、リングマの顔を覗き込む。

「リンちゃん、助けてくれたの?」

リングマの濡れた身体にしがみつき、瑞穂は耳元で囁いた。リングマは頷いた。

瑞穂は礼を言い、リングマの身体から降りた。その時初めて、瑞穂は胸に抱いた卵に気付いた。まじまじと卵を見つめ、瑞穂は呟いた。

「これ、ポケモンの卵なんだろうけど。どうして私がこれを抱いてたんだろう」

卵をリングマに預け、瑞穂は体中についた砂を払った。

「あの2人、私たちと一緒に、何かを処分するって言っていたような気がする。もしかしたらこの卵が、あの2人が処分したかったものなのかもしれない」

砂浜を昇り、瑞穂は細い道の上から浜辺を眺めた。風が吹き、薄灰色の砂が舞い上がる。顔に降りかかる砂を掌で防ぎながら、少女は呟いた。その口許が、掌の後ろに隠れた。

「なんにせよ——直接、訊いてみるしかない。前は油断しちゃったけど、今度はそうはいかない」

瑞穂は砂浜を後にし、育て屋へと急いだ。



「う、嘘——」

育て屋を目の前にして出た言葉は、それだけだった。呆然と立ち尽くす瑞穂の眼前で、大勢の警察官が、檻の中に閉じこめられているポケモン達を助けだしていた。驚くべきことに、育て屋の壁には大きな穴が空けられている。誰かが強引に突入した跡なのだろう。

「あの、巡查さん」

指揮を執っているジュンサー（警察官）に、瑞穂は声をかけた。

「ん、何？」

「私、この育て屋にポケモンを預けてたんですけど」

「ああ、それなら、あそこの」

ジュンサーは、リストを手に持ち解放されたポケモン達を数えている警察官を指さした。

「男の人に言つてね。あなたのポケモンも見つかるはずだから」

「そうじゃないんです。それに、あのポケモン達の中に、私のポケモンはいないです。もう、別の場所へ移動させられているんです」

瑞穂はかぶりを振り、事の次第をジュンサーへと説明した。

「お願いです。あの2人に会つて話をさせてください」

瑞穂の言葉に、ジュンサーは暫くの間思索し、徐に白バイの座席を軽く叩いた。

「いいわ、じゃあこれに乗って」

ジュンサーに連れられてやってきた先は、コガネ警察署の地下にある留置場だった。

留置場の壁は灰色に統一されていた。薄気味の悪い灰色の建物を眺める内に気分が悪くなったのか、瑞穂は思わず口を押さえた。胸が抑えつけられたようだった。

「あの2人、何者なんですか？ 育て屋を偽って、預かったポケモン達を盗むことは簡単

です。でも、盗んだポケモンを、彼等はどこかへ運んでいた。天井クレーンにしても、個人で簡単に用意できる物じゃ無いはずです」

できるだけ周りを、気味の悪い壁を見ないように務めながら、瑞穂は訊いた。

「ロケット団よ」ジュンサーは短く応えた。

ロケット団。その組織の名に、瑞穂は聞き覚えがあった。時折ニュースでも取り上げられる、大規模な犯罪組織である。最大の特徴は、ポケモンマフィアという別名の通り、悪事にポケモンを利用しているということである。最近では、トキワシテイ・ポケモンセンターの爆破事件や、サントアンヌ号占拠事件などで知られていた。

ジュンサーの立ち会いのもとで、瑞穂は檻の中にいる2人の前に立った。

檻の中で自分を見つめている2人の顔を、瑞穂は見つめ返した。一人は老人に変装していた男で、もう一人は、瑞穂を気絶させ、卵とともに海へと棄てた女だった。

「お——お前は」

老人に扮していた若い男が、驚いたように目を見開いた。彼等は、瑞穂がもう死んでいると思いきんでいるのだから無理もない。

「まさか、あの海に放り込まれて生きているとは。しぶといわね」

ロケット団の女は毒づいた。男とは違い、驚いているわけではないようだった。ただ、作戦に失敗したのを悔しがっているように、瑞穂には思えた。だが、表情には余裕

があった。この状況すらも、楽しんでいるかのようだった。

「教えてください」徐に瑞穂は切りだした。

「ソウちゃんは、私のフシギソウは、今どこに居るんですか？」

「知らないな」男は応えた。「俺達の仕事は、ただポケモンを確保するだけだ。確保した後のポケモンが、組織の何処へ運ばれているかは、俺達にも伏せられていた。もつとも、知っていたとしても、お前には教えられないがな」

逮捕されているというのに、男の態度は太々しかった。それが余計に瑞穂の、掴み所のない不安をかき立てていた。少女は眼を細め、微かに敵意を込めて男を睨み付けた。

「無事なんですよね？　場所が解らないだけで、ちゃんと無事ですよね？」

「どうかしら」

少女の白い頬がピクリと震えた。女は口許に笑みを浮かべ、興味深げに瑞穂の表情を眺めていた。

「それって、どういう意味です？」

「私達ロケット団は、ただポケモンを利用して金を稼ぐ集団じゃ無いって事よ。馬鹿で間拔けなトレーナーからポケモンを盗んだりするだけじゃ無い」

歯軋りの音が聞こえた。意地悪そうに口許を歪めた女から眼をそらし、瑞穂は小さく

俯いた。そこで初めて、齒軋りの音が、自分の立てた音だと気付いた。挑発に乗ってはいけないと、少女は自分に言い聞かせた。どうしてだろう、いつもはこんなことで、怒ったりしない筈なのに——冷静でいなきや。でないと——

瑞穂は気付いていなかった。握り締めた掌に汗が冷たい汗が滲んでいることを。水色の美しい髪に隠れたこめかみに、薄く青い筋が浮いていることを。連れ去られたフシギソウを心配するあまり、不安になるあまり、彼女自身の安全装置が、既に外れていることを。

女は続けた。怒りを堪えて俯いている瑞穂を、落ち込んでいると勘違いしたのか、からかうような口調だった。

「盗んだポケモンは、確かに闇ルートで捌くことが多い。それで小金を稼ぐ。稼いだお金で、さらに珍しいポケモンを盗む。でもね、ロケット団はそんなケチな組織だと決め付けて貰っちゃ困るわ」

瑞穂の後ろに立っているジュンサーを、女は一瞥した。

「あんたのフシギソウ。今頃、組織の実験材料にされてるかもね」

「実験材料？ 何です、それは」

「フシギソウなんて大して珍しくもないポケモン、売ったところでたかが知れているのよ。ロケット団にはね、より強いポケモンを生み出すための研究セクションがあつて、

値打ちのないポケモンはそこへ送られることになってるの。だから今頃は、解剖とかさ
れているかもね」

瑞穂の顔は火照っていた。忙しなく続く呼吸を落ち着かせようと、胸に手を当てた。
掌に滲んだ汗が、胸元に染み込んでいく。

「何ですか？ 解剖？ 私が訊きたいのは、そんな事じゃ無いですよ」

「じゃ、何が訊きたいの？ あんたのフシギソウが、今頃は解剖されて、グチャグチャに
引き裂かれて、棄てられてるって言うって欲しいの？ それとも、あんまり抵抗するから、
実験前に撃ち殺されてたりして。それでも、新型拳銃の実験にはなるわね」

ガタン。音がした。鉄格子と何かが触れた音だ。瑞穂は身を乗り出していた。
女の首筋を掴み——両腕で締めつけていた。女は苦しげに喘いでいた。

瑞穂は女の首を握り締めたまま、鉄格子へと揺さぶった。女の頭に鉄格子がぶつか
り、鮮血が散った。

「意味が分からない——」瑞穂は静かに、感情の無い声で叫んだ。

「ふざけないでくださいよ。私が訊きたいのは、そんな事じゃない！」

女が絞められた首筋に手を伸ばし、身体を仰け反らせた。瑞穂は、小さな身体からは
想像もできない力で女を手前へと引きずりこみ、血にまみれた鉄格子の隙間から女の顔
を覗き込んだ。

「何故ここにゐるんですか？」

少女は顔を上げた、そこには黒い影が走っていた。

「消えてしまえば良いのに。ここから、私の前から、死んでくださいよ」

呂律が回つていかなかった。語尾が不明瞭に掠れていた。焦点の合わない瞳には、涙が溢れていた。

首を絞めていた手を離す。女はげえげえ言いながら、床に伏した。瑞穂は女の額を掴み上げると、もう片方の手で、女の顔を叩きつけた。

女はコンクリートの床に転がった。隣の男は、なす術もなく座り込んでいた。

鉄格子から首を出し、瑞穂は吠えた。歯を剥き出しにし、可愛らしい童顔を醜く歪めて、泣いていた。鉄格子を握り締めた手の甲には、女を殴り倒したときについた血が、こびり着いていた。

ジュンサーは瑞穂を抑えつけ、鉄格子から引き離した。羽交い締めになれながらも、瑞穂は叫き散らし、小さな身体で藻掻いていた。

「離してくださいっ！ 離してよ！ 殺すんだから！ 殺してやるんだからっ！」

「何言ってるの！」

瑞穂は抵抗した。だが、虚しいと悟つたのか、やがて脱力したようにその場に座り込み、泣き伏した。少女の泣き声が、灰色の壁に反響していた。



「気持ち解るわ、でも、あれはやり過ぎよ」

1階ロビーの自動販売機にコインを投入しながら、ジュンサーは言った。

ベンチに、瑞穂はぐったりとした様子で座っていた。頬を流れる涙を盛んに拭いながら、少女は震える声でジュンサーに訊いた。

「私、何も覚えてないんです。昔から、そうでした。切れると見境が無くなるのは。頭の中が飛んでいってしまったようで、身体が私の物じゃ無くなるみたいに——気が付いたら、相手の子が泣いてて。それで、よく苛められたんですよ。私が、悪いんですけどね」

ジュンサーは、ジューズ缶のプルタブを開けて瑞穂に手渡すと、首を竦めて見せた。

暫くの沈黙のあと、瑞穂は呟いた。

「巡查さん」

「なに？」

「もう一度、あの2人と話をさせてください」

ジュンサーは、即座に答えた。

「駄目よ」

「どうしてですか？」

瑞穂は思わず立ち上がった。断られる原因は分かっていたが、それでもなお食い下がらずにはいられなかった。

「これ以上あなたを、あの2人に近づけるわけにはいかない。自分でも解るでしょ」

小さく頷き、瑞穂は項垂れた。

「解りました。それじゃ、ソウちゃんの搜索、お願いします」



コガネ警察署から出たとき、夕闇は既に沈み、地平線の辺りを微かに紅く染めていただけだった。遠くのコガネシティの派手な電飾が、暗闇を待ちわびてもいるかのよう
に輝いてみえる。

「これから、どうしよう——」

一人になって、瑞穂は呆然と眩き、思わずため息をついた。これから、どうすればいいのだろう。少女は途方にくれ、何気なく薄い闇の広がる空を見上げた。

「え——?」

瑞穂は自分の目を疑った。空に見えるのは満月だった。記憶が正しければ、昨日の夜も満月だった筈だ。どういう事なのだろうか。

考え込む瑞穂の傍らで、不意にモンスターボールがカタカタと震えだした。昨日の夜と同じように。

瑞穂は、すぐさまモンスターボールからポケモンをだした。それはポケモンではなかった。瑞穂がいつの間にか腕に抱いていた、オレンジ色をしたポケモンの卵だった。震えの原因は、激しく振動する卵だった。

「もしかして、産まれるの?」

瑞穂は、興奮しながら卵に目をやった。卵に亀裂が入った。もうすぐ生まれる。誕生する。少女の口から、眩きが漏れる。

「がんばって——」

タマゴの亀裂が広がる。パキパキと音が響き——タマゴが完全に割れた。産まれた。

卵の中から出てきたのは、紫色で羽の生えたポケモンだった。

「可愛い」

瑞穂は眩くと、さっそくポケモン図鑑を開いた。

「グライガー……とびさそりポケモン、いつもは崖に張り付いている。獲物を見つけると羽を広げ 風に乗って襲いかかってくる。」

ポケモン図鑑の説明を聞き終わると、瑞穂はおもむろに言った。

「はじめまして、グラちゃん。私の名前は瑞穂」

「グラー？」

グライガーは、首を傾げた。言葉の意味を理解できていないのだろう。だが、瑞穂は構わずに続けた。

「これから、よろしくね」

「グライガー……」

グライガーは、そう叫ぶと瑞穂に飛びついてきて頬をすりすりしてきた。どうやら、瑞穂のことを母親だと思ったらしい。

瑞穂は、グライガーを抱きしめた。グライガーは嬉しそうに笑っていた。

グライガーをモンスターボールに戻すと、瑞穂はタマゴの殻を片づけ始めた。

その時、ふと殻の破片の一つに非常に小さな刻印が成されているのを瑞穂は見つけた。昼間じっくり眺めていても発見できない程、小さな刻印を。

瑞穂は、殻に刻印されていた記号を呟いた。

「sl/207f151mc(150)——ls(n)——?」

一見すると、意味のないようにも思える。瑞穂は殻の破片をこつそりとウエストポーチに忍ばせた。

瑞穂は、タマゴの殻を片づけ終わると言った。

「——これから、どうしようかな」

それは、先ほどまでの不安に満ちた口調とは、まったく違っていた。モンスターポール越しに、グライガーの陽気な笑い声が聞こえる。それが瑞穂の心を明るくさせていた。

「ソウちゃんを捜さないと、それに——やりたいことは、やらきややらないことは沢山あるから」

瑞穂は立ち上がり、歩き出した。ネオンの輝きが眩しい、コガネシティへ。その先に続く、まだ知らぬ新しい街へ。

真つ暗な空を厚い雲が覆った。月は見えなくなつた。雲は一晩中、月を覆い隠していた。今日が満月だったのか、昨日が満月だったのかは、もう誰にも分からない。

そして少女はまだ知らない。卵の刻印に隠された秘密を。

#2 傷痕。

闇に墮ちた街

どんなに美しい輝きをもつ宝石でも、光がなければ輝くことはできない。どんなに他の景色よりも際だつて見える黄金でも、闇の中にあつては、すべて色の無い塊でしかない。そんな形容は、この街、コガネシティにもあてはまる。

太陽が空にあるうちは、ジョウト地方最大の商業都市として燦々と輝いている——ように見える、この街。しかし、ひとたび太陽が落ちて、街全体が暗い闇につつまれたとたんに、状況は一変する。

夜になり、闇に包まれ途端、この街はジョウト地方最悪の劣悪な環境で有名な、闇に墮ちた街と化す。

そんな夜の街を一人の女が歩いていた。その足取りは重く、夜だからこそ映える派手な電飾を見回しながら、溜息混じりに呟いている。

「なんやこの街も、さもしゆうなつたなあ」

久しぶりに歩く夜の街。彼女の視線の先に移るのは、派手な看板でも電飾でもなく、その奥に沈んでいる闇だった。今まで眼を背けてきた分、より鮮烈に見える、この街の

邪悪な部分。

「やめてよ。やめてつてば！ 誰か助け——」

何処からか女の悲痛な呻き声が聞こえてきた。彼女は立ち止まり、瞳だけを動かすようにして辺りの様子を伺った。女の声は路地裏から響いていた。

不良に犯されているんやろか、と彼女は思った。できることなら助けてあげたい。だが、その体は動かなかった。下手に助けに行けば自分も襲われてしまうのではないか。その危険を怖れていた。

女のうめき声は、次第に激しさを増していく。

「いやあ、やめてよ——」

何かの折れる大きな音がした。女のうめき声は、途切れた。断ち切られたかのように、唐突に。

彼女は俯き、下唇を軽く噛んだ。小刻みに震えはじめる彼女の身体は、情けない自分への怒りだった。背中に背負った牛乳瓶が、意気地のない自分を嘲笑っているかのよう
に、カチャカチャと冷たい音を立てる。

こんな夜の街を女一人で出歩くから襲われるんや。

彼女は必死に自分へと言い聞かせた。それでもしなければ、今すぐにも悲しみと情けなさのあまり、泣き出してしまいそうだったから。

例外もあるが、夜のコガネシティを若い女が一人で出歩けば、確実に襲われる。殺されることも少なくはない。それはコガネシティの人間ならば皆知っていることだった。理由は知らないが、こんな街を夜に一人で出歩いている女の方に落ち度があるような気もしてくる——頭の中では。理屈では。

だが、感情はそんな考えを許したりはしない。

首を振った。辺りを見回した。男達の気配はない。やっぱり自分は『例外』なのだと思つた。そして、その例外に甘えている自分が悔しかつた。

コガネシティで「ダイナマイトプリティギャル」とあだ名される程の美人である彼女が、夜のコガネシティをブラブラしても襲われない理由が、一つだけある。

彼女は、コガネポケモンジムのジムリーダーだった。名前はアカネ。いくら不良共といえども、コガネジムのジムリーダーを襲うことはできなかった。

昔、なにも知らない不良がアカネを襲つたことがあつた。しかし不良は、逆にポケモンをアカネに出されてボコボコにされたあげく、コガネシティ中に響きわたる程の大声で泣かれてしまい、あつさりと逮捕された。それ以来、街の不良どもはアカネには寄りつこうともしない。

アカネは、ふうとため息をついた。

「だいが、遅うなつてしもたなあ」

今日の昼間、彼女は、親戚の運営する牧場に牛乳をもらいに行っていたのだが、ちよつとしたトラブルに巻き込まれてしまったため、帰ってくるのが予定よりかなり遅れてしまったのだ。

「きゅ——くうう——」

その時、再び声が聞こえた。アカネはうんざりした。

「ああ——や——やめて——」

その声は、なにかを嫌がっているように聞こえる。そして、怯えている。

ガキツ——

何かの音も聞こえる。何の音かは考えるまでもなかった——誰かの壊れる音。

アカネは急いでその場から立ち去ろうとした。はやく暖かい自分の家に帰りたいかった。面倒な事に巻き込まれるのはもう沢山だ、とすら思った。

細々とした悲鳴が、アカネの耳を突き抜けた。アカネの我慢は切れた。即座に音のする路地裏へと駆け込んで、大きな声で叫んだ。

「アンタら、なにしとんねん。恥ずかしいんか!」

男達は驚きながらも、こちらを——アカネの立っている方を睨み付けた。しかし、相手がアカネだと認めるやいなや一目散に逃げ出していった。

「大丈夫か? こんな所、一人で歩いてたら危ないで。気いつけや」

アカネは、倒れている少女に声をかけた。少女は水玉リボンをつけており、人形のよう可愛らしく白い顔をしていた。だが、衣服は切り裂かれ、ボロ布のように汚れていた。

突然、水玉リボンの少女は起きあがった。青ざめた顔をしている。その放心しきった瞳は、アカネの顔を捉えてはいなかった。恐怖と痛みに覆われて、何も見えてはいなかった。

礼も言わずに、少女は逃げるように一目散に駆け出していった。少女の長い髪の毛がアカネの鼻先を掠めた。街の奥に消えていく少女の背中を見つめながら、アカネは肩を落とした。

遅すぎたと、アカネは後悔した。遅すぎたのだ、なにもかも。



「あの、コガネジムって、どこにあるか知りませんか？」

ふいに後ろから、女の子の声が聞こえた。アカネは驚いて後ろを振り返った。街の光を背にして、少女が独り、ぽつんと突っ立っている。涙で潤んだ瞳は、訴えかけるようにアカネへと向けられていた。胸を押さえている両腕は怯えからか震えている。

「コガネジムやて？」

アカネは、聞き返した。

「はい。コガネジムです。この辺りにあるはずなんですけど——」

少女は、澄んだ水色のツインテールをわなわなと震わせながら答えた。

「ああ、一応知ってるで。案内したるわ」

「本当ですか？　ありがとうございます」

少女は言った。それまでの硬い表情が嘘のように消え、柔らかかに微笑んでいる。ささくれ立ったアカネの心にとって、その微笑みは、まるで天使の救いようだった。

「コガネジムを探してたうちゆうことは、嬢ちゃんはポケモントレーナーなんやな」

コガネジムへ向かう道中で、アカネは歩きながら少女に訊いた。

「はい。そうなんです」

少女は、洲先瑞穂と名乗った。瑞々しい稲の穂という名の意味そのままに、少女の肌は白く艶やかで、握り締めた掌は瑞々しく柔らかかった。この辺りではあまり見かけないタイプの美少女。ただ、10歳という年齢の割には幼い印象があり、身長も、朗らかな顔つきも、胸の大きさも、7、8歳位が妥当なところではないだろうか。少女と言うよりも幼女と言った方が、しっくりくるかもしれない。本人は、怒るかもしれないが。

アカネは、辺りを執拗に見回しながら歩き続けた。コガネシティの大通りは、一見すると華やかに輝いているように見える。しかし、その裏側では耳に入ってくるもののない、黒い呻きが絶えず響いているのだ。その呻きは、ビル風よりも激しく冷たく、アカネの指先を震わせている。

「ところだな、女の子が一人でこんな夜の街をウロウロしたらアカンで。ここらは物騒やさかいな」

アカネは、そう言うのと、少女の顔をまじまじと見つめた。この娘、今までなんも無かつたんが奇跡なくらいや——と、アカネは思っていた。この近辺の不良どもは女に飢えている。そこへ、こんな可愛らしい少女が迷い込んできたら、真つ先に餌食になるのは確実だった。

「そうなんですよ。ここの人達、みんな怖そうな人ばっかりで」

そこまで言つて、瑞穂は言葉に詰まった。

そやから、ウチにジムの場所を訊いたんやな——と、アカネは頭の中で、言葉が続けた。コガネジムのジムリーダーであるアカネだが、見た目はそこら辺にいる、ミーハーな姉ちゃん達と同じなのだ。少なくとも、この街の不良よりはモノを訊きやすいはずだ。

ウチに訊いた、その判断は正しい。アカネは心の中で頷いた。もし仮に、この少女が

そこら辺の不良に道を聞いたりでもしたら、もう二度とこちらの世界に帰ってくることはできなかつただろう。死にたくなるような酷い仕打ちを受けたあげく、コマギレにされてコガネ湾に沈められて終わりだ。

「ホンマに危ないねんで。襲われてからやつたら、遅いんやから」

言いながら。うやむやに語尾を掻き消しながら。アカネは、ボロ布同然になつてしまつていた水玉リボンの少女を思い起こした。放心しきつた瞳。逃げ出していく時の、惨めな後ろ姿。

「いくらなんでも、襲われたりしませんよ。私、まだ10歳ですよ」

瑞穂の言葉に、アカネは首を振り、少女の顔を覗き込みながら思った。甘いで。確かに、この娘はまだ10歳かもしれない。そうは、見えんけど。そやけど、関係ないんや。幼くても、こここの連中には。ましてや、こんなにかわい子をほうっておく訳ないやん——

「あの、どうかしました？」

少女は、物思いに耽つているアカネを心配そうに見上げていた。アカネは、突然の眼差しにどぎまぎしながら答えた。

「な、なんでもないで。それよりも見えてきたで、あつこがコガネジムや」

瑞穂の問いかけを避けるように、アカネはネオンの光の奥に見える、こじんまりした

建物を指さした。コガネジムは、立待月の光を受けて穏やかに光っていた。外から射し込む光の合間に、静かにその身を横たわらせている。

「やっぱり、閉まっていますね」

「そりやまあ、こんな夜中やもんな」

ポケギア（時計）は、夜の10時を示していた。普通のポケモンジムは、夕方の5時くらいまでで閉まってしまう。当然のことながら、コガネジムの明かりは消えていた。

「それじゃあ、アカネさん。どうもありがとうございます」

瑞穂は、アカネの方を向いてお辞儀をした。

「“それじゃあ”って、どないするつもりなん？」

「ポケモンセンターに戻って、泊めてもらうんです。コガネジムの場所は、解りました」

言い終わるかいなかのところで、アカネは瑞穂の腕をグツと引っ張った。

「な……なにするんですか!?! アカネさん」

瑞穂は、驚いた様子で言った。

「夜のコガネシティは、一人で歩いたらアカン言うとるやないか」

「でも——それじゃ私どうしたら」

すると、アカネはジムの扉を、ドンドンと叩き始めた。

「ちよ……アカネさん?! そんな事したら、怒られますよ」

瑞穂が口に手を当て、驚いた様子で言った。そんな瑞穂の言葉を無視して、アカネは大声で言った。

「ウチや、アカネや、はよここ開けてな」

コガネジムの窓から明かりが漏れ、扉が開いた。開かれた扉の奥から出てきたのは、アカネよりも少し若い少女だった。少女は、アカネを見るなり言った。

「アカネさん。遅いやないですか！ 今、何時やと思ってるんです！」

「ごめん、ごめん。いろいろ、あつてな。遅うなつてしもうたんや」

アカネは、頭をかきながらごまかした。

「とにかく、話は中でききます」

少女は、帰ってくるのが遅れたアカネに対して、怒っているようだった。

「あのう」

「なんや？ 瑞穂ちゃん」

「アカネさんって、このジムのトレーナーなんですか？」

少女が口を挟んだ。

「なに言うてんの？ アカネさんは、このジムのジムリーダーやで。知らんかったん？」

「じ……じむりーだー?! 本当ですか、アカネさん」

アカネの方へと向き直り、瑞穂は訊いた。

「え? ま、まあな。いや、隠すつもりやなかったんやけど」

「とにかく、ジムの中に入ってから話しても遅くないですよ。もう、すでに遅れてるんやから」

「アスカちゃんは、いつつも嫌味なこと言うなあ」

アカネは呆れたように顔をしかめ、瑞穂をジムの中へ招き入れた。



無秩序に建ち並ぶ高層ビル群。

その中の1つに、コガネホテルと呼ばれるビジネスホテルがある。たいていは、このコガネシティに出張に来たビジネスマンが泊まるのだが、珍しいことに2日前から、2人の少女が宿泊していた。

ホテル3階の一室で、その2人の少女は俯きながら話し合っていた。

「なんで、なんで、こんな目に遭わなきゃならないのかな」

真つ暗な部屋の中で、1人目の少女は涙声で言った。

「運が、悪かったのよ」

真つ暗な部屋の中で2人目の少女は囁き、1人目の少女に寄り添った。突き放すような冷たい、冷静な口調だった。

「私が、代わりに行けばよかった」

2人目の少女の言葉に、1人目の少女は慌てた。涙声のまま言った。

「駄目よ。あんな思いするのは、私一人で充分だから」

「でも、私だったら、何とかなつたかもしれないわ」

「それは、そうだけど——そうよね、私は失敗作なもの」

1人目の少女の悲しげな呟きに、冷静な口調だった2人目の少女は、少し語調を強めた。

「それじゃ、私みたいに成功した方が良かったとでも言いたいのか?」

「そうじゃ、ないけど——」

暗闇の部屋は、暫くの間、重たい沈黙に包まれた。その沈黙を破つたのは、1人目の涙声をした少女だった。

「私、もう死にたいよ」

嘘でも冗談でもなく、少女の本音だった。その言葉に含まれた危険な部分を察知した

かのように、もう一人の——二人目の少女の口調は、冷静さを失いかけた。突き放すような冷たい話し方は変化し、不安げな色が濃かった。

「なに言ってるの姉さん。〃 2人で静かに暮らそう〃 って、約束したじゃない」

「もう耐えられないよ、毎日をビクビクしながら過ごすのは」

「それと、これとは関係ないわ」

姉と思われる少女は、うなだれながら言った。

「ほんとに、耐えられないんだもの」

姉はそのままベッドに倒れ込み、咽び泣いた。

「何でこうなったの？ それまでは、みんな平和に暮らしてたのに。おかしいよ、私達だけ、こんな事になるなんて——」

「それは、今日のことを言ってる？ それとも昔のこと？ 昔の事なら、もう忘れた方が

いい。姉さん、前に私にそう言っていたのに」

「両方よ——」

姉の嘆きを聞いて、妹はふっとため息をついて言った。

「確かに、私も理不尽だと思う——でも、仕方がない」

「〃 仕方ない〃——ね。そう言われて、私は5年間も我慢し続けていた」

姉の泣きは、次第に激しさを増していく。

「ねえ、姉さん」

「なに？」

「姉さんを犯した男って——なにか特徴とかなかった？」

「そんな事聞いて、どうするつもり？」

「別に——なにも」

姉は目をつぶり、声を搾りきるようにして呟いた。

「二の腕に、ニドリーノのタトゥが——あった」

「ニドリーノのタトゥ、ね」

「でも、もうそんなの、どうでもいい」

「姉さん？」

姉は、ベッドのシーツを堅く握りしめた。

「もう嫌だよ——こんなの」

姉は再び、思い出したように咽び泣いた。部屋の空気が小刻みに震えだした。妹は姉

の泣き声を背に眼を細めて、呟いた。

「姉さん——私を、一人にしないでよ」

しかし、姉からの返事はなかった。



対決

朝の心地よい日差しが、窓からそそぎ込んできた。

眩しい光を受けて、瑞穂は目が覚めた。ベッドから半身を起こして、深く息を吸い込む。そこで瑞穂は、昨日の夜にアカネの好意で、コガネジムに泊めてもらった事を思い出した。

ぐうと背伸びをしてから、瑞穂は窓の外へと目をやった。明るく賑やかなコガネシテイの街並みが覗く。夜の物騒で怪しい雰囲気など欠片もなく、朝早くから人々は目的の場所へと急ぎ歩いている。まるで、コインの裏と表のようだと、瑞穂は思った。同じコインでも裏と表では全然絵柄が違う。昼と夜とでのコガネシテイの変わり様は、それと良く似ていた。

瑞穂は二の腕で目を擦りながら、慌ててベッドから飛び起きた。腕のポケギアを見やると、すでに9時を過ぎていた。父親によって徹底的に早寝早起きを躾けられた瑞穂にとつて、寝過ぎすのはあまり気分の良いものではない。

「やっちゃった。寝坊しちゃった」

でも、昨日は遅かったし、仕方ないかな。と、心の中で呟いて、瑞穂は辺りを見回し、

着替えるためにベッドから降りようと足を伸ばした。

その時、瑞穂は誰かが自分の腰の辺りを抱いているのに気付いた。思わず飛び上がり、おそるおそる掛け布団をめくると、そこから顔を出したのは熟睡中のアカネだった。

「アカネさん？ こんな所でなにしてるんですか」

頭の中が混乱してきているのを、何とか抑えながら瑞穂は訊いた。しかし、心地よさそうな寝息をたてるアカネには、まったく聞こえていないようだった。どんな夢を見ているのかわからないが、くねくねと体を上手く振らせて、掛け布団の中に潜り込む。

瑞穂は、ただ呆然とアカネを眺めていることしかできなかった。

慌ただしく駆ける足音が、廊下から響いた。足音の正体は、このジムのトレーナーの少女。アスカだった。アスカは、部屋の扉を物凄い勢いで開け、問いつめるように瑞穂の方を見た。

「瑞穂はん。ここに、アカネさん、おらへんか？」

「え？ アカネさんなら、この布団の中で寝てますけど」

瑞穂は、アカネの眠っているベッドを指さしながら言った。アスカは一気にベッドに歩み寄り、掛け布団を勢いよくはがした。しかしアカネは、何事もなかったかのように、

平和な寝顔をこちらに向ける。

それを見て、アスカはいよいよ頭にきたのか、真つ赤な顔をして大声で叫んだ。

「こらーアカネ！ 今何時やと思つてんのや！ はよ起きんかい!!」

窓ガラスが、割れそうなほどの勢いで激しく振動した。瑞穂は、そのあまりの大声に気を失いそうになり、耳を押さえながら床に座り込んだ。

さすがのアカネも、この大声には驚いたのか、ベッドから飛び起きた。きよとんとした様子で辺りを見回している。

「あ、アスカちゃん。瑞穂ちゃん、おはよう」

「おはよう」——やないでしょ！ もう九時ですよ！ ジムの開業時間を過ぎてるんですよー！」

そう言われても、アカネは落ち着いたような、眠たいような感じで言った。

「そんな慌てることないやん。『都合により11時から開業』ってな感じの看板を立てていたらええだけのことやんかあ」

「そんな事いうて、昨日も丸一日休んだやないですか!」

「あれは用事があつたんやつて。それはアスカちゃんかて、知つてることやないの」
「午前中までに帰ってくるハズやったのにな——」

物凄い剣幕でアスカは、アカネを睨み付けた。

「せやから昨日も言うたやないの。じいちゃんトコに泥棒がきたんやって」

アカネもたまらず反論したが、アスカも負けてはいない。

「嘘いわんといてくください。どーせ、向こうで遊びほうけたたんですやろ」

「だからあ、ちやうつて」

アカネはぐつたりと、その場にへたれこんだ。

「あのお、ちよつといいですか？」

瑞穂が、呆れた様子で口を挟んだ。2人が言い争っている間に、着替えをすませてしまっている。

「なんやの？」

アカネとアスカは、同時に聞き返した。

「そんなこと言い争ってる暇、ないんじゃないんですか？」

的確な瑞穂の言葉に、アカネもアスカも一様に頷いた。

「そうですよ、アカネさん。こんな事してる場合やないです」

「そ——そやね」

そう言うのと、大急ぎでアカネは着替えを始めた。アスカは急ぎ足で部屋を後にした。その間に、アスカは舌を出して言った。

「アカネさん、いくら寝ぼけてても自分の部屋を間違えんといってくださいよ」

真夜中のこと。アカネはトイレに行った帰りに自分の部屋と間違えて、瑞穂の寝ている部屋に入ってしまったのだ。そして、そのままなんの疑問も抱かずに、そこにあったベッドで寝入ってしまった。

それを聞いて、瑞穂は思わず吹き出した。

極度の方向音痴は、アカネの得意技の一つだという。



アスカに案内されて、瑞穂がやってきたのは、コガネジムのバトルグラウンドだった。地面は整地されており、ほのかに土の香りが漂ってくる。

間違いない。何度もテレビとかで見たことがある、真正正銘のジムのバトル場。私は今、そこに立っているんだ。

そう思った途端、胸に何か重たいモノがのし掛かってきた。瑞穂は急に緊張し始めた。体が堅くなり、指は小刻みに震えている。

グラウンドの反対側では、アカネが試合で繰り出すのであろうポケモンの入ったモンスターボールを見つめていた。外から見ることで、ポケモン体調や様子を判断しているのだろうか。そんなアカネの表情は引き締まっていて、朝のぼんやりとした雰囲気はど

ここにも感じられない。朝に見たアカネさんとは別人みたいだ、と瑞穂は思った。自分も負けてはいられない。

アカネは、バトルグラウンドを挟んで反対側に突っ立っている瑞穂に気がついた。

「瑞穂ちゃん。あらためて自己紹介するわ。ウチがコガネジムのジムリーダー、アカネや！」

「わ……私は……、と……と……と……。」

自分で思っている以上に瑞穂は緊張していた。唇が震えてきて、口から出てくる言葉を吃らせた。

「へ？　今、なんていうたん？」

瑞穂の緊張を知ってか知らずか、アカネが耳に手を当てて聞き返した。

胸に手を当て、思い切り深呼吸をして、やっと落ち着きを取り戻した瑞穂は、今度こそ大声で言った。

「私はトキワシテイの、えくと……洲先瑞穂ですっ！　よろしくお願いしますっ！」

そしてブンつと機械の様に、思い切り頭を下げた。顔を上げた瑞穂の顔は、よく熟れた赤い果物のように紅潮していた。

瑞穂の緊張しきった様子を見て、アカネは半分笑いながら、少女を落ち着かせようと声をかけた。

「そこまで緊張せんでもええで」

瑞穂は赤く火照った顔を、さらに赤くした。

「き……き……緊張なんて……し……してません！」

それが強がりであるというのは、誰の目から見ても明らかだった。アカネは笑い出した。

「その様子やと瑞穂ちゃんは、ジム戦は初めてみたいやな」

「は……は……」

再び深呼吸をして、瑞穂は答えた。

「初めてジムに挑戦するトレーナーとのバトルでは、使用ポケモンは2体までって決まっとるんや。瑞穂ちゃんは、それでもええかな？」

いいもなにも、瑞穂は今、たった2匹しかポケモンを持っていない。

「はい。お願いします」

瑞穂が了解すると、審判のような格好をした少女が、やってきて言った。

「これより、コガネジムジムリーダー・アカネと、挑戦者・瑞穂のジムバッジをかけた公式戦を行う。両者、準備はできましたか？」

アカネは余裕の表情をしながら言った。

「ウチはいつでもOKやで。瑞穂ちゃんは、もう試合に出すポケモンは決めたんか？」

しつこいようだが、瑞穂は今、2匹しかポケモンを持っていない。それに昨日から、ジムバトルで最初に出すポケモンは決めていた。

「私も、準備はできてます」

両者の準備が完了すれば、いよいよジムバトルの開始だ。審判は正面を向いて、グラウンドに向かい合った。

「公式戦、時間無制限。使用ポケモン2体——試合開始ッ！」

審判の合図と共に、アカネと瑞穂は同時にモンスターボールをグラウンドへと投げた。

静まり返ったコガネジムのバトル場に、2つの鳴き声が響いた。

「グライガッ！」

「ピッピッ！」

鳴き声からもわかるように、『ピッピ』と『グライガー』というポケモンの鳴き声だ。

最初にグライガーを繰り出したのは、瑞穂の作戦である。動きの遅いリングマは先発には向いていない。そこで空を飛べて、比較的どんな相手であつても対応できるグライガーを出したというわけだ。

だが、安心してバトルに投入したというわけではなかった。瑞穂は心配していた。グ

ライガーはリングマに比べて、圧倒的にバトルの回数が少ない。いわばバトル慣れしていないのだ。もっともリングマも、進化してから一度もバトルをさせていないのだけども。

対するアカネは、ピツピを繰り出してきた。ピツピというのは、薄いピンク色をして、背中にちよこんと小さな羽が生えている可愛らしいポケモンである。

「ピツピ——ですか」

正直、瑞穂は驚いていた。いや、拍子抜けしていたと言つてもいいだろう。ピツピはその可愛らしい容姿から、女の子には大人気のポケモンだが、お世辞にも強いポケモンとは言えない。ジムリーダーだというので、もっと凄まじいポケモン——例えばニドクインとか、ケンタロスとか——そういうポケモンを出してくるだろうと瑞穂は読んでいた。

だが、その予想は大きく外れた。

ピツピが相手なら、バトル慣れしていないグラちゃんでも、楽に勝てるかも。

一瞬、そんな考えが、油断が瑞穂の頭に浮かんだ。しかし、すぐに先ほど浮かんだ考えを、油断を瑞穂は押しつぶした。これはアカネさんの作戦かもしれない。油断は禁物だ。

いくらジムバトル初体験の瑞穂でも、そのくらいの事は心得ている。

「ピッピ！ おうふうく、ビンタや！」

アカネは声を張り上げ、ピッピに指示を出した。と、同時に瑞穂は、ピッピが既にグライガーの懐に潜り込んでいることに気付いた。

アカネの指示する通りに、ピッピは往復ビンタを繰り返した。グライガーの身体が、ピッピの小さな腕に何度も翻弄される。ピッピの往復ビンタを喰らい、グライガーは蹠跟めいた。しかし、空中に浮かんでいることが幸いしたのか、すぐに体勢を整えた。

「グライちゃん！ 毒針攻撃！」

グライガーは、蠍のような尻尾から、無数の毒針を発射した。グライガーの分類は『とびさそりポケモン』である。当然、毒針の威力は強烈だ。発射された毒針は、一斉に青白い光は放ちながら、ピッピへと一直線に向かっていく。

しかし、ピッピもアカネも、一向に慌てている様子は無かった。

「ピッピ、光の壁！」

アカネの指示にしたがって、ピッピは両手を前に出した。ピッピの周りに、光のできた壁がぼんやりと浮かび上がった。バリアーのようなものなのだろう。毒針は、光の壁を突き抜けることができずに勢いを失い、ピッピの周りに小さな音を立てて落ちた。

「な——光の壁ですか」

光の壁——特殊な光で壁をつくり、相手の攻撃から身を守る技である。

毒針攻撃がいつも簡単に跳ね返されてしまった事に、瑞穂は驚いた。

「グラちゃん！ 切り裂く攻撃で、光の壁を破って！」

グライガーは、右手のハサミを思い切り振り上げ、一気に光の壁に叩きつけた。金属バットで中華鍋を叩いたような大音響が、バトル場に響きわたった。反動で、グライガーは地面へ吹っ飛ばされた。

光の壁にはヒビ一つ入っていない。まったく効果は無いようだった。

「そ——そんな——！」

「ピツピの光の壁に、その程度の攻撃は通用せんぞ！」

アカネは誇らしげに言い放った。

「く……！」

瑞穂は、何とか打開策を見つけようと、必死になって考えた。だが、すべての攻撃を弾く、強力な光の壁に、瑞穂は冷静さを失い欠けていた。このまま取り乱したら、いつかのバトルの二の舞だよ。でも、待って。あの格好のまんまじゃ、ピツピは攻撃できないんじゃないかな。

「グラちゃん、攻撃をやめて。ピツピの体力が消耗するまで待つて！」

言われたとおりに、グライガーは攻撃をやめ、バトル場の上空を滑空し始めた。たしかに、光の壁をだしている状態では、ピツピは動くことは出来ない。瑞穂の作戦は成功

したかに見えた。

「甘いで、瑞穂ちゃん！」

アカネは口元に笑みを浮かべながら言った。

「え？」

「たしかに、この格好のまんまやと、ピツピは動けへん。でもな、指くらいは動かせるで
！」

アカネの言う意味が、まだ瑞穂にはよく解らなかつた。指だけ動かしても、グライ
ガーに攻撃などできるはずがない。

アカネは自信に満ちあふれたな様子で、ピツピに指示を出した。

「ピツピ！ 指をふる攻撃や！」

ピツピは人差し指を立てて、左右に振りだした。指先が素早く左右に動き、空を切つ
て小気味良い音を立てる。

「ピイー！！」

指を振り終わると、ピツピは大きな声で鳴いた。その瞬間だった。ピツピの目前に突
然、星形をしたエネルギー体があらわれて、グライガーめがけて飛んでいった。

星形のエネルギー体は、グライガーの体に突き刺さった。

「グウ——グラー——ガアアッ！」

痛みのあまり、グライガーが悲痛の叫びをあげる。

決別は鮮血と共に

「グラちゃん——大丈夫?！」

思わず、瑞穂は叫んだ。瑞穂の心配を余所に、グライガーは体を震わせ、突き刺さったエネルギー体を振り払っている。振り払われたエネルギー体は、徐々に空気の中へと溶けて消えていった。

「スピード……スター?！」

「そう、大当たりや」

「この技、もしかして指を振る」

「もしかしなくても、指を振る。さっき言ったやろ?！」

からかうように微笑み、アカネは言った。

指を振る。指を振ることで脳細胞を刺激し、通常ではできないような技を使うことのできる技である。この技の隠された利点は、“指を振るだけ”で技を使えるという所にある。つまり、動かなくても、攻撃できる。

瑞穂は恐れた。こちらの攻撃は完全に防がれ、相手からの攻撃は多種多様。このまま

では、ピツピに少しのダメージを与えることもなく負けてしまう。

勝利を確信したかのように、アカネはピツピに指示を出した。

「ピツピ。もう一度、指を振る攻撃やで！」

ピツピは再び指を降り始めた。技の発動まで、あと数秒しかない。

もう一度、技を受けたら、グラちゃんもたない。この危機を脱するためには、光の壁を打ち崩すしかないのは、瑞穂にもわかっていた。——でも、どうすれば。

リングマに交換してみることも考えたが、それで光の壁を打ち崩せるという確証はない。とにかく今は、グライガーの力を信じてみるしかないのだ。

ピツピの指が、先程と同じように空を切つて小気味良い音を立てている。その音を聞きながら打開策を考えていた瑞穂は、ふと閃いた。

グライガーに向かって、瑞穂は力の限り叫んだ。

「グラちゃん！ 嫌な音をだして！」

グライガーは即座に両手のハサミを振り上げて、擦りあわせた。耳が張り裂けそうなほどの雑音が、バトル場全体に響いた。

「いやっ！ なんやの？ これえ……」

凄まじい雑音に、アカネはバトル中であることも忘れて、思わず手で耳を塞いだ。いくら光の壁でも音は通ず。ピツピもバトルを忘れて、耳を手にあて、塞いだ。

その瞬間、ピッピを守っていた、光の壁は跡形もなく姿を消した。

「グラちゃん！ 恩返し——じゃなかった、お返しだよっ！」

耳がおかしくなりそうなのを、必死で我慢しながら、瑞穂は大声で言った。少女の言葉にあわせるように、グライガーは両腕のハサミを構え、一直線にピッピに突撃した。

ピッピは吹っ飛ばされた。地面に叩きつけられる。ぐったりと地面に伏したピッピは目を回し、そのまま動かなくなった。

「あっ！ ピッピ！ も——戻るんや」

倒れたピッピを見て、アカネは哀叫すると、ピッピをモンスターボールに戻した。

「結構やるなあ——あの子」

アカネは小さく呟くと、瑞穂の方を向いて、挑発気味に話しかけた。

「やるやんか瑞穂ちゃん。でもな、ウチのとおっておきのポケモンに勝てるやろか？」

「とおっておきのポケモン、ですか——」

復唱しつつ、瑞穂は戸惑った。先程のピッピでさえも苦戦したのに、さらに強いポケモンをだされては、勝てる見込みはない。

このままグラちゃんていくよりも、リンちゃんに交換した方がいいかもしれない。そう思った瑞穂は、グライガーのモンスターボールを出して言った。

「グラちゃん、戻って」

グライガーは、素直にモンスターボールの中へと戻った。モンスターボールにグライガーが戻ったのを確認すると、瑞穂はリングマのモンスターボールを投げて声を上げた。

「お願い！ リンちゃん！」

瑞穂の投げたモンスターボールから、リングマが飛び出した。

「グオオオオッ！」

リングマは、けたたましい叫び声をあげながら、大地を踏みならした。

「へえ、リングマかいな。それじゃウチも、いけっ！ ミルタンク！」

アカネはモンスターボールを投げた。

「みるみるくみるみるく」

不思議な鳴き声をあげ、モンスターボールから現れたのは、乳牛ポケモンのミルタンクだ。ピツピと同じくピンク色をしたポケモンだが、大きさはピツピの何倍もある。

この巨体で、押しつぶされたら小さなポケモンは、ひとたまりもないであろう。瑞穂はグライガーを戻しておいて良かったと思った。

アカネはすばやく、ミルタンクに指示を出した。

「ミルタンク、転がる攻撃を喰らわしたれっ！」

ミルタンクは、リングマの方へ転がりながら高速で近づいてくる。だが、ミルタンクの自分を顧みない大技を目の前にしながらも、瑞穂は落ち着いていた。

「リンちゃん。まだ間に合うよ、左へ避けて！」

既に一勝しているからか、瑞穂の指示には余裕が感じられた。だが、瑞穂の指示を聞いていたにも関わらず、リングマは、まったく動こうとはしなかった。リングマの様子を見て、瑞穂は慌てて叫んだ。

「どうしたの？ リンちゃん！ ねえ、ねえ……！」

瑞穂の必死の問いかけを、リングマは無視し続けた。

その瞬間、ミルタンクの転がりアタックが、リングマの顔面に激突した。

「がああああっ……！」

リングマの悲痛の叫びが、バトル場に木霊する。激しく呻くリングマの巨体は、バトル場の中央にズドンと崩れ倒れる。

バトル場の皆が、そう思った……しかし……。

一閃。

眩い光が広がった。瑞穂は驚き、思わず光から眼を背けた。リングマの口からは、強力な熱と衝撃波を伴う熱線が発射されていた。破壊光線だった。

光はやんだ。突然の攻撃を受けたためか、怒りに燃えた視線をミルタンクにそそぎ込

むリングマ。しかし、もはやミルタンクには、戦うほどの力は残されていなかった。

破壊光線を真つ正面から受けたミルタンクの体は、バトル場の反対側まで吹き飛ばされていった。体中に、無数の焼けこげた傷跡が浮かび上がっている。

瑞穂は予期しないリングマの反撃に、凄まじい威力の破壊光線に、半ば唾然としていた。

「ミ……ミルタンク……！」

アカネは目に溢れる涙を堪え、ミルタンクに駆け寄ると抱きついた。ミルタンクは命に別状はないようだが、放っておけば危険な状態だった。流れ出る涙を拭おうともせず、アカネは瑞穂とリングマの方を見やった。その瞬間、彼女は驚愕し、口をあんぐりと開いた。

リングマの口から、白色の光が漏れていた。その光の意味は、リングマが次に撃つ破壊光線をチャージしているということに違いなかった。

アカネは叫んだ。

「ウチの負けや。瑞穂ちゃん！ はよ、そのリングマ戻してや！」

その一言で、我にかえった瑞穂は、リングマを戻そうとモンスターボールを掲げた。だが、それに気付いたリングマは即座に反転し、振り返りざま瑞穂の持っていたモンスターボールを弾き落とした。

「ああっ！ リンちゃん、なにをするの！」

弾かれたモンスターボールは地面を落ち、転がった。

リングマは、再びミルタンクの方を向いた。同時に、口から破壊光線を発射した。

「やめてっ！」

瑞穂とアカネは、同時に叫んだ。

バシユウウウツッ！

リングマの破壊光線は、ミルタンクの頭を掠めて、コガネジムの壁をぶち抜いた。

破壊光線が外れたのを見て、リングマは軽く舌打ちし、三発目の破壊光線を撃とうと構えた。その一瞬だけ、リングマに隙ができたのを、瑞穂は見逃さなかった。

リンちゃんを戻すなら、今しかない。そう直感した瑞穂は、モンスターボールに飛びつき、ボタンを押した。ボールから赤い光が発せられ、リングマを包んだ。リングマは光と共にボールに吸い込まれていった。

「はあ……心臓止まるかと思うたわ」

ミルタンクを抱きしめたまま、アカネは溜息をついた。その表情は青ざめたままで、動揺しているのは明らかだった。

瑞穂は無言のまま立ち尽くしていた。

「瑞穂ちゃん、どないしたん？」

目から流れ出た涙を拭いながら、アカネは訊いた。

「(う)……(う)めんなさい……」

それだけを口走り、瑞穂は走り去った。旋風のように素早く、少女の姿は消えた。

「瑞穂ちゃん？ どこ行くん！」

アカネの声は、瑞穂には届いていなかった。



コガネジムの裏で、瑞穂は呆けたように立ちすくんでいた。少女の脇を撫でるように、冷たい風が駆け抜けていく。

「出てきて——リンちゃん」

震える肩を堪えながら、瑞穂はリングマの入ったモンスターボールを開き、リングマを呼んだ。

「グウウウ——」

低く重い呻り声をあげながら、リングマは瑞穂に向き合った。だが、リングマは即座に瑞穂に背を向け、ふてくされていられるかのようになり、あさつての方向を見上げた。

瑞穂は、リングマの態度の意味が分からなかった。何故、自分に対して、わざと小馬

鹿にするような態度をとるのか、理解できなかった。

「ねえ、リンちゃん、どうしたの？　なんか様子が変だよ」

心配そうに眉を潜め、瑞穂はリングマに訊いた。リングマは背を向けたまま、何も答えようとはしない。

「どうしたの？　何で無視するの。ねえ、答えてよ——リンちゃん」

焦れてきた。瑞穂は、一歩前へと踏み出し、背を向けるリングマに近づいた。リングマは答えない。無言のまま、その場に突っ立っている。

苛立つ気持ちを抑えながら、瑞穂はリングマの顔を覗き込んだ。だが、少女を嘲笑うかのように、リングマはわざと視線を遠くに向けた。

瑞穂は苛立ちを隠しきることができなかった。語調を少しだけ強め、リングマに詰め寄る。

「ちよつと、聞いてるの？　リンちゃん！」

ピクリと微かに、リングマの短い耳が動いた。先程まで、遠くの景色を捉えていた瞳が動き、瑞穂の幼く蒼白な表情に狙いを定めた。彼は、少女を睨み付けていた。

突然、鋭く睨まれ、瑞穂はたじろいだ。少女の顔いっぱいに哀しみが浮かんでいた。信じていた誰かに裏切られた、その瞬間の表情が張り付いていた。出会った時から今まで、そんな風に睨み付けたことなどなかったから。

ゆっくり2、3歩後ろに下がりを、瑞穂は悲しげな声で呟いた。

「どうしちゃったの、リンちゃん。進化しちゃったから？ だから、そんな風に、私のこと無視するの？ それなら、昔の方が——良かった」

リングマは、さらに鋭く瑞穂を睨み付けた。少女の言葉が引き金になったのか、歯軋りの音がギリギリと響いてくる。

瑞穂は、リングマの視線に屈することなく、もう一度呟いた。目には今にもこぼれ落ちそうなほどの涙が溜まっていた。

「昔の方が、良かったよ。なんで、そんなになっちゃったの——リンちゃん」

叫び声が轟いた。裏路地を震撼させるような、大きな声。リングマは空へ向かって激しく咆哮していた。

瑞穂の目から涙がこぼれ落ちた。涙は頬をつたって、次々と流れ落ちていく。ぼろぼろとこぼれ落ちる涙を、気にもせずに瑞穂は言い放った。

「リンちゃんなんか、嫌いだよ。そんなリンちゃん、いらぬよ。大嫌い」

言ってしまった。後戻りのできない、決別の言葉を、瑞穂は涙と共に吐き出した。そう、もう後戻りはできない。瑞穂は濡れた唇を震わせ、リングマからの答えを待った。

瞳から流れ落ちる少女の涙が、赤みを帯びていた。頬をつたい、胸を通り過ぎて行く

先の地面は真っ赤に染まっていた。

痛い、と少女は感じた。もう遅かった。瑞穂の右胸からは、決別の証である鮮血が激しく吹き出していた。



変わらぬ気持ちと後悔と

体中の体液が、吹き出してしまわないだろうか。

そう思えるほどに赤い体液は、鮮血は激しい勢いで瑞穂の胸から噴きだしていた。全身を駆ける痛みの原因を確かめるため、瑞穂は自分の胸を恐る恐る見やった。

瑞穂の右胸は鋭く切り裂かれていた。薄青色をしたポロシャツの裂け目からはリングマの爪痕が覗き、白い肌は裂けていた。真紅に染まっているのが見える。乳白色の皮膚の裂け目からは、真っ赤な胸の肉がはみ出し、吹き出す血によって踊っていた。

「リ……リンちゃ……ん……？」

暫くしてから、途切れ途切れに瑞穂は言った。涙と鼻水にまみれた顔が血色を失って、次第に青白く変色していく。

リングマは、目を細めながら瑞穂を見つめていた。彼の腕は、瑞穂の血で真っ赤に染まっていた。時折、その雫が爪の先から滴り落ちる。

瑞穂は顔を上げ、リングマを悲しい瞳で睨んだ。リングマの血塗られた鋭い爪の先には、瑞穂の小さな乳首が張り付いている。少女は目を見開き、言葉にならない悲鳴を上

げた。

「あ……あああ……う……」

少女は蹠跟めきながらコガネジムの外壁にもたれ、激しく嘔吐いた。

「う……ええ……う……」

呻くような声が出た。朝に食べたものが弾かれたように、次々と胃の中から駆け上つてくるような気がした。そうしている間にも、激しさを増していく胸の出血。

体中のものを、全て吐き出し終えた瑞穂は、萎れた草木のように、その場に倒れこんだ。ドス、と音がした。30キロに満たない軽い身体であろうとも、この時ばかりは重そうに響いた。血の水たまりに落ち込んだ瑞穂は、それでもなお、身体を振らせて意識を保とうとつとめた。だが、体を振らせれば振らす程、意識は遠のいていく。

瑞穂の体は動かなくなつた。リングマは、微動だにしなくなつた少女の身体に触れた。彼は、息を呑んだ。急に怯えたように辺りを見回し、首筋に滲んだ汗を拭う。足下が震え始めた。

「瑞穂ちゃん！ どこいつたんやー！」

張り上げるようなアカネの声が、リングマの耳の中に飛び込んできた。リングマは身を起こした。逃げるように、慌ててその場を走り去つた。

少女は取り残された。置き去りにされた瑞穂は、ただ独り血塗れに沈んでいる。

コガネジムのロビーにある、ソファアの上で、瑞穂は意識を取り戻した。

瑞穂は、ゆっくりと目を開いて半身を起こすと、辺りを見回した。着ていた水色のポロシャツは脱がされており、その代わりに包帯が体を包んでいた。目の前には、心配そうな顔をしたアスカが、じつと瑞穂を見つめている。アスカは、瑞穂が目を覚ましたことに気がつくのと、さっと振り返ってアカネを呼んだ。

「アカネさん、瑞穂はんですが、目を覚ましました」

ミルタンの体調を看ていたアカネは、アスカの声に頷くと、瑞穂の顔を覗き込んだ。具合の悪そうな顔を無理に緩めて微笑み、アカネは訊いた。

「どや？　瑞穂ちゃん。胸の傷の具合は。痛かったら、病院いこか？」

胸の具合——そうだ、私は。

胸を切り裂かれたことを思い出した瑞穂は、急いで自分の胸の具合を確かめた。血が吹き出していた傷口はガーゼで覆われていた。手際よく止血されており、痛みも少ない。どうやら、そんなに心配することはなさそうだ。

「大丈夫みたいです。そんなに痛むわけじゃないですし」

アカネとアスカは胸をなで下ろした。

「それは良かったわ。まあ、血はぎょうさん出とったけど、傷のほうは意外に浅かったよ
うやし」

安心からか、アカネは少しだけ明るさが戻った。横からアスカが口をはさむ。

「それもあるけど、ウチのカンペキな応急処置のおかげです。アカネさんは隣で、泣きながら右往左往してただけですよん」

「ウチがいつ、泣きながら右往左往したんや?」

「嘘いわんといってください。そういうええ聞きましたよ、瑞穂はんのリングマ相手に手も足も出なかつたって」

そこまで言つて、アスカは慌てて口をつぐんだ。リングマの事に触れられたくないのは、アカネだけではなく瑞穂も同じである。

「あつ! そや、コガネ百貨店に買い物にいかなかんかつたんや。ちよつと、出てきます」

自分の失言をもみ消すように、わざとらしくアスカは言った。

「それなら、ウチがいつたるで」

アカネの言葉を無視して、アスカは立ち上がった。逃げるように部屋を後にする。2人きりになった部屋で、瑞穂はポツリと呟いた。

「あの……アカネさん……?」

瑞穂は、おずおずとアカネの様子を伺っていた。

「ん、どないしたん?」

「ミルタンク、大丈夫ですか？ あんなに怪我させちゃって。ごめんなさい」

「瑞穂ちゃんは、謝ることも心配することあらへん。それにミルタンクは大丈夫やで。なんていうても、ウチの自慢のミルタンクやさかいな。一晚、安静にしとつたら、すぐに良くなる。それよりも——」

アカネは急に真剣な顔つきになった。

「なあ、瑞穂ちゃん。あのリングマの事なんやけどな」

微かに俯いた瑞穂の表情を直視しながら、アカネは続けた。

「進化したばっかりやろ、あのリングマ」

「どうして、解るんですか？」

瑞穂は顔を上げ、驚きに目を見開いた。アカネは、やつぱり、と言いたげに肩を竦めていた。

「解るで、そのくらい。瑞穂ちゃんのリングマ、ヘンやったからな。瑞穂ちゃんの指示を聞かず、さらに反抗までしとつた」

締めつけられるような痛みを堪え、瑞穂は掌で胸を押さえた。鼓動の音が響く。次第に大きくなっていく響きが、少女の動揺を物語っていた。

「そうなんです。リンちゃん——私のリングマ、進化した途端に変わっちゃった。姿だけじゃなくて、性格まで。あの頃の、優しかった頃からは想像できないほど」

壁に掛かった時計の鳴る音が部屋を包んだ。瑞穂は言葉に詰まったのか唇の端を嘔みしめ、壁に掛かった時計を見やる。

「進化した時は嬉しかったです。でも、進化してすぐに抱きしめたとき、リンちゃんは遠くを見てました。怒りました。私は進化してから一度も、リンちゃんを外へは出しませんでした。恐かったから。だけど、そのせいで私のこと、嫌いになっちゃたのかもしれない」

「それは、ちゃうと思うで」

不意にアカネは口を挟んだ。

「違うとは？」

「あのな、あのリングマは、自分の力を制御できへんかっただけや。急激な進化に、リングマ自身がついていかんのや」

「だけど！ リンちゃんは、私の言うことを聞いてくれませんでしたよ」
「そやない」アカネは首を振った。

「リングマも戸惑ってるんや。自分の力にな。どんなに力があっても、その力を制御する強さがないと、意味が無いんや。そして、こないだまでヒメグマやった——小さな子供に、そんな強さがあるわけない」

アカネの言葉の意味を飲み込みきれずに、瑞穂は顔を強張らせた。だから、どうした

の？ だからって、私の言うこと聞かなくてもいいのかな。だからって、私のことを、傷つけるなんて酷いよ。

「それじゃあ——」

瑞穂はアカネの顔を見る気にはなれなかった。弱々しい声で、反論するしかなかった。

「どうしろって言うんです？ 私に。どうせ私は、小さいし力も無いですよ。この間も、ポケモンバトルで負けました。負けた相手に、罵倒されましたよ。こんな弱い私に、どうしろって言うんです？ ただ、ニコニコして周りの人の機嫌を伺ってるだけの私に、何ができるんですか！」

瑞穂は立ち上がった。涙に溢れている目の周りが、真っ赤に腫れていた。噛みしめた唇から、音にならぬ呻きが響いた。

「なあ、瑞穂ちゃん」

掴み所の無い、不安定な苛立ちを紛らわすように、瑞穂はコップの水を呷った。少女の背中を追いかけるように、アカネは落ち着いた様子で話しかけた。

「あんた、あのリングマに何を言ったんや？ ウチのミルタンクに破壊光線を撃つた時は、まだリングマは力を制御できないだけやった。反抗するにしても、モンスターボールを弾くだけで、瑞穂ちゃんに危害は加えてへん。凶暴なりにも、分別はあったんや。」

なのに、リングマは瑞穂ちゃんを切り裂いた。何を言ったんや、もしくは、何をしたんや？」

「嫌いつて、言いました。大嫌いつて」瑞穂の声は、そっけなかった。

「私、何か悪いこといいました？ だつて——」

掌を前へ突きだし、アカネは瑞穂の言葉を制した。

「後悔してへんのか？ ほんまに、リングマのことが嫌いになつたんか？」

瑞穂は押し黙った。

「瑞穂ちゃんは、リングマとどのくらい一緒にあったんや？ 1ヶ月？ それとも半年

？」

「もつとです——」

「それなら、もう解つてるはずやろ。力を制御できないリングマの弱さを助けてあげられるんは、自分しかおらへんつてことに。リングマが、自分の力に戸惑つてるんは、瑞穂ちゃんが、正面からリングマに向きやつてあげへんからや。上辺だけで喜んで見せただつて、リングマは恐がられていることに気付いてるで」

瑞穂はコップを握り締めていた。小刻みに震える背中を見られたくなかつた。惨めだつた。

「だから、どうすればいいんです？ 私は、リンちゃんよりもずっと小さくて、力もない

んですよ。それに、恐いです。また、いつ切り裂かれるか——今度は、殺されるかもしれない」

蹲る瑞穂の肩に、アカネは手をやった。さするように、揺するように瑞穂の身体を撫でながら、アカネは呟いた。

「理解してやるんや。さつきも言うたけど、リングマは力はあるけど弱いんや。だから、力を制御できない。あの子の強さになってあげられるんは、あの子を一番理解しているはずの、瑞穂ちゃんしかおらんのだや。弱いとか、背が低いとか、そんな関係ない。今まで一緒にいたのは、瑞穂ちゃんが、あの子より力があつたからか？ あの子より大きかつたからか？」

違いますよ、と瑞穂は呟いた。

可愛かつたからとか、よく懐いてくるとかじゃないですよ。もちろん、私の方が喧嘩が強かつたからとか、何でも言うこと聞いてくれるからでも無いです。そんな、言葉で簡単に説明できるような理由じゃない。

——リンちゃんとは色々な場所へ行ってみたかつたから。

「関係無いんや。進化しようが、性格が変わろうが、お互いが持つてるもんには変わりはないんや」

瑞穂は頷いた。アカネに抱きしめられるように立ち上がり、嗚咽した。

「思い出してみるんや。初めて出会ったときの事を。自分にとって、あの子が何なのかも、思い出せるはずやから」



交錯する辛い思いで

夕日は沈みかけていた。淡い緋色に沈んでいるウバメの森に、一匹の大きなリングマが蠢いていた。コガネシテイから逃げてきた、瑞穂のリングマだった。

数日前、まだヒメグマだった頃のリングマが、瑞穂と一緒に特訓をしていた場所だった。彼は今、目の前の巨木をじっと見つめていた。その巨木には、無数の小さな傷跡が残っていた。

傷跡を見つめながら、リングマは思っていた。僕は、なんであんな事したんだろう。

見た目とは裏腹に、リングマの一人称は“僕”だった。凶暴そうなリングマの姿でありながらも、心は大人しかったヒメグマの時と、何ら変わっていない。

でも、何かが違う。

それがわからないから、こんな所で独りぼつちなんだ。

僕が姉さんのために「強くなりたい」って願ったら、いつの間にか、僕の体は大きくなってた。姉さん——とっても喜んでくれた。だから、僕も凄く嬉しかった。

——でも、本当に何かが違うんだ。

あの日以来、この身体になってからずっと、僕が僕で——自分が自分でなくなったよ
うな気がしてならないんだ。

リングマは拳を強く握ると、目の前の巨木にむけ長い爪を振り回した。ズドン。巨木
は、大きな音を立てて、リングマの脇に倒れる。

この爪が——リングマは自分の掌を見つめた。血糊は乾いていた。色は消えず、こび
り着いている。

この爪が、姉さんを傷つけたんだ。僕、どうかしちやったの？ どこかがおかしいの
？

リングマは、横倒しになった巨木に、なおも鋭い爪を振り下ろす。横倒しのまま巨木
は、バリバリと音をたてて粉碎された。

ヒメグマとリングマの最大の違い。それは、自然界で生きるための本能の有無なのか
もしれない。子供のヒメグマは、親に守られながら生活している。しかし一度、大人の
リングマに進化してしまえば、たった1人で生きていかなければならない。それも弱肉
強食の世界で。

いかに人間に育てられたヒメグマであろうとも、進化して、大人になれば、眠ってい
た闘争本能、防衛本能が目覚めても、なんら不自然ではないはずだ。事実、ヒメグマは

進化してから、本能の声に言われるままに行動していたのだから。

あのとき、本能は教えてくれた。僕は強い、と。そして、人間は弱い、と。

僕はリングマなのに、姉さんは人間なんでもん。なんで僕の方が強いのに、僕より弱い姉さんの言うこと聞かなきやいけないの？ 僕の方が力は強いし、体も大きいし。僕は、僕のしたいように、やりたいようにしてるだけなのにさ。

それなのに姉さんは、僕のこと怒ってさ——弱っちいくせに。だから、無視してやっただ。ボクの方が、強いんだもん。姉さんみたいな弱っちい奴に文句なんて言わせない。なのに、偉そうに——すこしだけ怒りながら——文句を言うから。

僕の方が強いんだぞ！ って、教えてやろうと思っただ。でも、そしたら、姉さん、すぐく悲しそうな顔したんだ。そして、姉さん——こう言っただ。

昔の方が良かった——大嫌い——って。

——酷いよ。

リングマは、遠くに微かに見える夕日に向かって咆哮した。

彼は、リングマは、姉と慕う瑞穂のために、力を得るために、自分を捨てた。それなのに、姉は彼の事を嫌い、あげく、昔の方が良かった等と、暴言を吐いた。それは、彼にとって、耐え難い苦痛であることに違いなかった。

気付いたときには、姉は胸から血を吹き出しながら、棒つきれのように倒れていた。

爪には姉の小さな乳首がこびり付いていた。腕は姉の返り血で真っ赤に染まっていた。

彼は、そこでやっと、自分のしたことの重大さに気がつき、ここまで逃げてきた。

リングマは、粉々になった巨木が散らばる地面を激しく叩く。ウバメの森全体に響くような大きな音がし、地面が地震のように震えた。

ヒメグマの時の面影をまったく残していない、リングマの鋭い目から、今まで我慢してきたものが流れそうになった。その度に、リングマは地面を叩いて堪える。叩く、叩く。

彼の悲しみの分だけ、ウバメの森は悲鳴をあげ、生い茂る木々を揺らした。

その時だった。リングマの頭の中で、何かが弾ける音がした。再び、野生の本能が、彼に語りかけてきたのだろうか。

何か、イヤな予感がする。

リングマは、地面を叩くのをやめた。何だか、とても嫌な予感を感じ取っていた。それは昔、彼の——リングマの両親が死んだときに感じたものと、全く同質のものだった。

また、誰かが死ぬ。昔と同じように。誰か、誰だろう。大切な誰か。大切な、誰か。今のリングマにとっての、大切な誰か。

考えるまでもなかった。そんなの、1人しかないではないか。

姉さん？

瑞穂が死ぬ。誰かに殺される。

だが、不吉な予感を感じ取っていながらも、リングマはその場から動かなかった。助けになんか、いきたくなかった。誰が、助けになんかいくもんか。

リングマは、心の奥底で呟いた。

いい気味だ——あんな奴、僕を嫌いな奴なんて、あんな小さくて、自分勝手な女なんて、死んじやえばいいんだ——

○●

雪が積もっていた。切り立った崖には、寒さに負けずに草木が生えている。皮膚を突き刺すような冷たい風が、深い谷を越えて吹き荒れていた。

どこだろう、ここ。

始めてくる場所ではないような気がした。なんだか、どこかが、懐かしいような気がする。

不意に、小さな子供の声が聞こえてきた。ふと、後ろに目をやると、比較的傾斜が緩やかな坂に、子供が2人遊んでいる。その内の1人は青い髪をした人間の女の子……ま

だ、4歳くらいだ。もう1人は、とても小さな、子供のヒメグマ。

はしやいで、じゃれあっている2人の子供を見つけ、思い出した。これは、子供の頃の——6年前の自分なんだと。

女の子は、ヒメグマとは2週間前に知り合ったばかりだった。学校で苛められたのをきつかけにして、父親に内緒で家を出てきた——つまりは家出だった。

泣きながら、走りながら、やってきた場所は、一般人は立入禁止のシロガネ山だった。険しい山道を、暫く無言で歩いているうちに足は疲れ、また空腹にも耐え切れずに、女の子はその場に座り込んだ。

おなかすいた。もう、かえろう。女の子は気まぐれな思考を巡らせて、そう思った。だが、日は既に暮れてしまっていた。いつのまにか道に迷ってしまっており、帰ることもできない。暗闇の中で女の子は、急に心細くなった。

女の子は座り込んだまま、わあわあど泣き出した。

「くらいよお、さむいよお……、ぱぱごめんさい、たすけて！」

女の子が、そう叫んだ、その時だった。目の前の大きな岩の後ろから、パパでもなく父さんでもなく……、母親の身体が覗いた。リングマの。

「ああ……。た、たべられちゃうよお」

女の子は、メスのリングマを見て、驚きのあまり後ろに転んだ。転んだ拍子に足を

捻ってしまった。もう、痺れて歩けない。

リングマは、じりじりと女の子の方に迫ってくる。

「たすけて、たすけて……」

一步も動くことが出来ないままに、女の子は助けを求め続けた。しかし、誰にも聞かえていない。目の前のリングマを除いては。

だがリングマは、女の子の目の前で立ち止まると、ゆつくりとしゃがんで腕に抱いていた何かを降ろした。

「え……?」

思わず呟いた女の子の足下には、小さな小さなヒメグマが、にこやかに微笑んでいた。それが、なにを意味しているのか、女の子には、なんとなく理解できた。

「このこの……おともだちになってほしいの?」

女の子は、怖ず怖ずとリングマに聞いた。

リングマは、微かに頷いたようだった。

その後、3日後に大搜索の結果、女の子は発見されて連れ戻された。しかし、それでも女の子は、放課後に隙を見つけては、ヒメグマの所に遊びに行っていた。

「ひめちゃん! つぎ、なにしてあげよう?」

鬼ごっこした後、荒い息のまま女の子は、ヒメグマと並んで座りつつ訊いた。

「『ふたりかくれんぼ』する?」

ヒメグマは首を横に振った。

「う〜んと……、じゃあ、『ふたりだるまさんがころんだ』しようよ!」

ヒメグマは、またも首を横に振った。女の子は、ヒメグマが自分からかかっていることに気付いた。ちよつとした苛立ちで、プクツと頬が膨れる。

「もお〜……ひめちゃん、なにしたいの?」

ヒメグマは、楽しそうに笑うと、地面に爪で何かを書きだした。四角い箱のようなものを書き終えたヒメグマは、女の子の方を向いて、それを指さす。

「わかった! ひめちゃんは、『ふたりかんけり』がしたいんでしょ?」

思わず女の子が言うと、ヒメグマは、うんうんと頷いた。その瞬間、ヒメグマの頭の中で、何かが弾ける音がした。

「じゃ、やろう! 『ふたりかんけり』!」

女の子は、そう言う勢いよく腰を上げた。しかしヒメグマは、動こうともしない。

「あれえ? どおしたの、ひめちゃん」

ヒメグマの様子が、おかしいことに気付いた女の子は、ヒメグマの顔を覗き込んだ。

そして、女の子は言葉を失った。さつきまでの笑顔とはうってかわって、ヒメグマの表

情は、今にも泣き出しそうだった。

「どおしたの？ どおしたの？ どこかいたいなの？」

女の子の呼びかけにも、ヒメグマは全く反応しない。やがて、ヒメグマの瞳からは大粒の涙が次々とこぼれてきた。

呆気にとられている女の子を尻目に、ヒメグマは泣き、悲鳴をあげ続けた。

「キュ〜！ キューー！ キューー！」

いつの間にか、ヒメグマの柔らかな体毛は、涙で濡れていた。

「どおしたの……？ ひめちゃん……」

銃声が響いた。女の子は身体をひきつらせた。女の子の独り言も、ヒメグマの最後の悲鳴も、銃声によってかき消されていた。

「な……なに？ なんなの？」

女の子は驚いて辺りを見回すが、周りは既に元の静けさを取り戻していた。しかし、その静けさは、長くは続かなかった。

ズドン、という轟音が、辺りに鳴り響いた。まるで、何かが墜落したような音だった。

「なんなの……なんか、こわいよ」

周囲の異変に、女の子は驚きを通り越して、恐怖すら感じていた。いつの間にか、ヒ

メグマは女の子に抱きついていて、その眼は真つ赤に腫れ上がっていた。「ひめちゃん。いちど、おかあさんのところにもどろうよ」

震えながら女の子は、ヒメグマに同意を求めた。だが、ヒメグマは答えなかった。ただ啜り泣く声だけしか、幼い瑞穂の耳には届いていなかった。

幼い頃の瑞穂が、ヒメグマと出会った場所……シロガネ山の深い谷。

その谷のすぐ横に洞窟がある。ヒメグマとリングマの寢床、つまりは巣だった。

「ここにちわ。おじやまします……」

泣き疲れて寝入ってしまったヒメグマを抱きかかえながら、瑞穂はおそろおそろ、洞窟を覗き込んだ。しかし、そこにいるはずの、リングマ……、つまりヒメグマの母親はいない。外を見回しても、リングマの気配すら感じられなかった。

こんなことは初めてだ。

いままで、ヒメグマと一緒に遊んでいるときは、絶対にリングマは洞窟の中で休んでいた。しかし今、そこにも、どこにも、リングマの姿は全く見当たらない。

洞窟の辺りに、大人の人間の足跡がいくつかあることに、瑞穂は気付いた。

なにが、あつたんだろう——

瑞穂が一人で考え込んでいると、抱かれて眠っていたヒメグマが目を覚ました。

「あ……、ひめちゃん。おきたの？」

ヒメグマは、悲しげに俯いて、ただ手のひらに染み込んだ蜜を舐めるだけだ。瑞穂の問いかけには、全く答えない。

そんなヒメグマを、瑞穂はただ見つめることしかできなかつた。

しばらくして、ヒメグマは震える指で、谷の方を指さした。それに気付いた瑞穂は、おそるおそる、谷の方へと歩み寄つた。

その日、瑞穂とヒメグマは、一日中、言葉を失つたままだつた。

意を決して覗き込んだ、その谷底には、破裂したリングマの亡骸が転がっていたのだから。



去りゆく勢い

「お姉ちゃん！ そんなところで寝てたら風邪ひくで！」

後ろから関西弁の女の子の声が聞こえてきた。その声は大きく、瑞穂を現実の世界に引き戻すのに充分すぎる程の音量だった。瑞穂は目を覚ました。

後ろを振り向くと、7歳くらいの女の子が、瑞穂を食い入るように見つめていた。黒い髪をポニーテールにしており、紺のオーバーオールを着ている。関西弁の女の子は、人懐こそうな笑みを浮かべていた。

「あ……余計なお世話やったかな？」

「そんなことないよ。こんな所で寝てたら、風邪ひいちゃうから。ありがとう」

日は西に傾き、既に夕焼けも終わりに近づいていた。この公園、自然公園に吹く風も、次第に冷たさを増していくばかりだ。

アカネと別れた後、瑞穂はコガネシティ中を探し回ったが、結局リングマを見つけられることは出来なかった。もしかしたらと思つて、自然公園までやってきたのだが、やはりリングマは影も形も無かった。途方に暮れて、そのまま公園のベンチに座り込んでし

まった所までは覚えていた。怪我と疲労のせいで、そのまま眠り込んでしまったのだらう。

その時、瑞穂のお腹が鳴った。女の子は楽しそうに笑った。

「もしかして、お腹空いてるん？ そやったら、これあげよか？」

女の子はオーバーオールポケットから、小袋に包まれたビスケットを取り出して、瑞穂の目の前に差し出した。再び、瑞穂のお腹が鳴る。よく考えたら瑞穂は、昼食を食べていなかった。朝食にしても、すべて吐き出してしまったので、食べていないのと同じだった。

「ほんとに……食べてもいいの？」

今にも噛みつきそうな顔で、瑞穂は訊いた。女の子が頷くと同時に、瑞穂はビスケットを口の中に放り込み、噛み砕くと飲み込んだ。

「ありがとう。私、朝からなにも食べてなかったの」

「そうやったんか。どうりで、食べるの早いわけや——」

女の子は、そこまで言うのと、急に慌てたように腕につけた時計を見やった。

「あ。ウチ、もう行かなあかんわ。お姉ちゃん、バイバイやな。」

「そうなんだ……さよなら……」

瑞穂が言い終わる頃には、女の子は既に公園の外に消えていた。

——名前くらい、訊いておけばよかったかな。

独りぼっちになった瑞穂は、強い西日を眩しいと感じながら、心の奥で呟いた。



あんな事、言うつもりなかった——つい、口から出任せ言っちゃっただけなの。『許して』なんていわない。私が悪かったんだから。

お願い。私の身体、切り裂いてもいいから。せめて……一度でいいから、私の前に出てきて欲しい。そして、謝りたいの。『ごめんなさい』って。

考えれば考えるほど、自分がリングマに酷いことを言ったという思いが強くなっていった。ポケモンは、リンちゃんは、人間に、私に都合のいい道具じゃない。ちよつと、思い通りにならなかつたからって、「嫌い」だなんて言うなんて。私なんて、ポケモントレーナーになる資格なんかないよ。なんであんな酷いことを、平気で言っちゃっただろう。それに、どうして、リンちゃんの気持ちに、気付いてあげられなかつただろう。

日の落ちたコガネシティを駆けながら、瑞穂は自己嫌悪に陥っていた。いつの間にか、辺りは真つ暗になってしまっていた。

空腹も限界に達し、足は痙攣を起こしそうになるほど疲労していた。しかし、どんな状態であろうとも、瑞穂は走るのをやめない。

このまま「さよなら」するのだけは、嫌だった。こんな後味の悪い別れ方だけはしたくなかった。

「リンちゃん……どこ？ どこにいるの……？」

走りながら、瑞穂は呼んだ、大切な友達の名を。

「お願い……リンちゃん。でてきて……。私が悪かったから……」

そう呟く度に、心が痛んだ。胸の奥が貫かれるような痛みだった。それこそ、切り裂かれるよりも苦しい痛みだった。

瑞穂の瞳には、涙がたまっていた。今にもこぼれ落ちそうな雫を、少女は必死で我慢していた。だが、我慢にも限界がきた。一粒の涙が、瑞穂の頬をつたっていく。

涙を振り払うかのように、瑞穂は走り続けた。痛いけど、寒いけど、苦しいけれど。そんな身体にムチ打って走り続けた。

「許してもらえないわけなのに、謝ったからって、どうにでもなるわけなのに。どうして——どうして、こんなに焦っているだろう、私は」

いつの間にか瑞穂は、コガネシティの路地裏に入り込んでしまっていた。光りすらも侵入を拒む、闇の世界に迷い込んでしまったことに、まだ瑞穂は気付いていなかった。

それだけ、リングマを見つけることに必死になっていたのだから。

突然、瑞穂の足に丸太状の何かが引つかかった。走っていた瑞穂は、そのまま一回転して、地面に背中を打ち付けてしまった。

「痛い！ なんなんだろう、今の」

眩きながら瑞穂は、なにが足に引つかかったのかを確かめようと、背中をさすりながら後ろを振り向いた。

「え……？ っこれ……」

硬直した。瑞穂の足には、赤々とした液体がへばりついていていた。だが、転んだときに擦り剥いたわけではなかった。

そこにあるのは、胴体だった。頭も、手足も、陰部も、全て切り取られた、胴体だけの屍。無言のまま、押し黙ったまま瑞穂は辺りを見回した。手足があつた。横の壁に杭で刺されていた。虫の標本のようなだった。

頭と陰部は、どこにも見当たらなかつた。屍の大きさや形から判断して、瑞穂とあまり変わらない年齢の女の子のものだと容易に推測できた。

凄惨な死体を目の前に、瑞穂は悲鳴をあげることでもできなかつた。ただ蒼白な顔で、その場に座り込んで、惨たらしい死体を眺めることしか出来なかつた。

「お嬢ちゃん……、何して、遊んでるのかな？」

「おや。見ちゃ駄目なんだよ、それは」

瑞穂の背後から男の声が出た。少女は機械仕掛けの人形のように、ぎこちなく後ろを振り返った。そこには2人の若い男が、嫌らしい笑みを浮かべながら、だらしなく立っていた。

一人は金髪で無精ヒゲを生やしており、もう一人は黒い長髪を靡かせていた。金髪の男の左太股にはデルビルのタトゥーがあり、長髪の男は右の二の腕にニドリーノのタトゥーがあつた。

2人の男が、この街の不良であることは、瑞穂でもすぐにわかつた。そして今、瑞穂の背中に触れている冷たい胴体の持ち主が、彼等の仕業によつて命を落としたことも。

「あ……、あの……。その……、え……ええと……」

言うべき言葉が見つからない。瑞穂の声は、かつて感じたことのない恐怖に震えていた。

「お嬢ちゃん、何が言いたいんだ？」

「お兄ちゃん達と、遊びたいのかい？ 楽しいよ」

男達は優しく、しかし、その瞳の奥に悪魔の炎を漲らせながら言い放つた。その言葉は、瑞穂の足を凍り付かせ、逃げられなくするのに、十分な邪気を含んでいた。

悲鳴もあげられない。ガタガタと震える瑞穂に、男達は少しずつ近づいていく。「この人……、ですか？」

それだけ言うのがやつとだった。本当なら、この人は何なんですか？ どうしてこんなことになってるんですか？ と、訊きたかったのだ。

じりじりと、瑞穂に詰め寄りながらも、金髪の男は、瑞穂の問いに答える。

「失敗したんだ。」

そう言うのと、男達はゲラゲラと下品に笑った。

「失敗……？」

瑞穂は思わず後ずさる。背中 of 亡骸は、瑞穂に押されて、ずるずると動いた。

「そう、失敗したんだよ。これさ、俺が遊んでやろうとしたとき『嫌だ！』なんて叫ぶからなあ、不良品だったんだよ。俺達は、叫ばれると困るのにな」

長髪の男は、腹を抱えて下品に笑い続けた。

「だから、これで叩いてやったんだ。そしたら、動かなくなるしよお……つたく、とんだ貧乏くじを引いたぜ」

男の背後には、黒い工具箱が置いてあった。工具箱からは、血が付いたままの、鉋や鋸……金槌などが飛び出ている。これが、あの女の子の身体をバラバラにしたんだ。瑞穂は背筋が凍る音を聞いた。間違いない。あの女の子は、この男の人達に殺されたんだ

！
「うう……きやああー！」

瑞穂は叫び、一目散に逃げ出そうとした。だが、遅かった。肩を掴まれ、少女は顔面を胴体だけの死体に無理矢理押しつけられた。声をだすことはおろか、呼吸も難しい状態にさせられていた。

鼻に、ぬおつと死臭が漂う。両肩は、金髪の男にぐいぐいと押さえつけられていた。激痛が瑞穂を襲う。

「い……痛う……」

「逃げようなんて思うなよ……お嬢ちゃん」

金髪の男は、そう言うのと、瑞穂を仰向けにし、着ていた服をビリビリと引きちぎる。そして、グライガーのモンスターボールを遠くに投げ捨てた。

「これみたいになんたいのかい？」

金髪の男は、枕のようにされている、胴体を指さして言った。

瑞穂は、恐怖にひきつった顔を、ぶんぶんと横にふる。

「もう、遅いけどな」

「そう、お嬢ちゃんは、みちまった」

「抵抗しなけりや……」

「たつぷりと、俺達が楽しんだ後、沈めてやる」

「抵抗すりゃ……」

「沈めた後、俺達が楽しむだけだ」

どちらにしろ結果は、同じだ。

「もつとも……」

「お前みたいな、ロリータ。俺は、興味ないけどな」

精気を失ったかのような顔をしている瑞穂をよそに、2人の男は、なにやらかにやらいながら、瑞穂の着衣を全てはぎ取った。

父親とリングマと、だれにも秘密の6歳年上の彼氏にしか見せたことのない純白な裸体が、2人の卑しき男達の前にさらされた。

瑞穂は始めて、恐怖を超えた、なにかを感じた。……助けて……だれか……助けて……。恐れと羞恥心からか、瑞穂は思わず、目をつぶった。

「なんでえ……キズモノか？」

昼間、リングマにつけられた、胸の傷を見て、長髪の男は呟いた。

べろりと、金髪男の舌が瑞穂の胸の傷口を舐め回した。別に痛いわけではなかったが、瑞穂は歯軋りしながら呻いた。

チラリと男の方を見やると、いつのまにか、男の下半身と瑞穂をさえぎるモノは、何

もなくなっていた。ただ空気だけが、男の股間の震えを瑞穂に知らせている。

長髪の男は、ニヤニヤしながら、こちらを眺めていた。

「前座は終わりだ……」

瑞穂の体を舐め続けながら男は言うのと、黒々とした汚い股間を一気に、少女へと密着させた。

「……………うう……………」

……………助けて……………。

瑞穂は、泣き叫んだ。少女の股間に生暖かい物が触れた。力がでなかった。全身が火に炙られたように熱かった。覆い被さってくる男の身体は臭く、重たい。

少女は虚しい抵抗を続けた。白い裸体は男の身体の中で必死に藻掻いていた。少女の唇から涎が滴る。細い腕が、萎びたように力なく垂れる。ビクン、ビクンと身体を震わせる瑞穂の表情には、感情の一欠片も残ってはいなかった。茫洋と見開かれた瞳は、自分の中に入り込もうとする、長く太い異物を映しだしている。

「ううう……………うつつうう……………」

男の異物から溢れる粘液が少女の股間を濡らす。少女は瞳を閉じた。何も見たく無かった。何も聞きたく無かった。何も感じたくなかった。

辺りに、一瞬だけ静寂が走った。

男の気配が、沈黙に紛れて消えた。

抱擁と約束と

異変を感じて、おそるおそる瑞穂は目を開けた。金髪の男はいなかった。見上げると、長髪の男が脂汗をかきながら、瑞穂とはあさつての方を向いて叫んでいた。

「サミジマ！ 大丈夫かつ！」

路地裏の奥まで、サミジマという名の、金髪の男は吹き飛ばされていた。サミジマの無防備な下半身に、そして上半身にも、いくつもの火傷が浮き出していた。

この火傷の形に、瑞穂は見覚えがあった。破壊光線の直撃をうけたときの火傷の形。

瑞穂は、サミジマが倒れているのとは正反対の方を向いて呟いた。

「……リン……ちゃん……」

そこにリングマはいた。

リングマは怒りに満ちた表情で、もう一発、こんどは長髪の男の方に向けて破壊光線を発射した。破壊光線独特の、大音響が辺りに響きわたった。

「くそっ！」

長髪の男は、間一髪のところまで破壊光線を裂けた。路地裏の壁をよじ登り、どこかへ

走り去った。

サミジマは、路地裏の奥で、ぐったりとしたままだった。体中が沸々と煮立つような熱さと痛みは、サミジマの逃げる気力を失わせるのに充分だった。

痛みからか、突然、サミジマは悲痛に泣き叫び始めた。

「あ……アギイツイー！　づ……痛ウウツ！」

瑞穂は、男の体中に浮き出た、火傷を目の当たりにして、息を呑んだ。昼間コガネジムで見た破壊光線とは、桁違いの威力であることに気付いたのだ。

激痛にのたうちまわるサミジマは、自分の目の前に巨大な影が伸びているのを見た。まっすぐ闇の中に立つ、リングマの姿だった。男は、このリングマが先程自分を吹き飛ばした破壊光線を放ったことに、即座に気付いた。

「うあ……ヒ……ヒイ……！」

叫んだサミジマの体は、恐怖のあまり震え始めていた。なま暖かいものが、サミジマの股座から、勢いよく流れ始める。

失禁していた。

臭いたつ空気のなか、リングマは怒りに満ちた瞳で、サミジマを睨み付けた。

こいつが姉さんに、非道いことした男。それを思うと、我慢できなくなる。リングマは鋭い爪が揃った腕を、闇夜に振り上げた。

「た……たすけてくれ……」

掠れた声で男は、リングマに命乞いをした。

ふざけないでよ、姉さんが許しても、僕が許さないよ。もつとも、僕も姉さんのこと傷つけちゃったけど。

姉さん。僕のこと、許してなんかくれないよね。僕だって、姉さんに酷い事しちゃってたんだものねあの傷のせいで、お嫁にいけなくなっちゃたら、姉さん、僕のこと一生、恨むよね。僕が意地を張って、どっか行ったりしなかつたら、姉さんこんな目に、あわずにすんだんだものね。

でも——やっぱり嫌だよ。僕は姉さんと一緒に居たい。僕って、すごい自分勝手だよ
ね。

「アギヤアアアアアアア！」

リングマの鋭い爪は振り下ろされた。サミジマの体は勢いよく引き裂かれた。傷口からは大量の血が飛び散り、サミジマはこの世のものとは思えぬ程に絶叫した。

サミジマの足下には、切り離された性器が鮮血にまみれて、だらりと落ちていた。

リングマは、それを見つけて拾い上げた。男の性器は小さく萎んでおり、見窄らしかつた。

握り潰した。サミジマの性器は、鈍い音と共に破裂した。リングマはサミジマを担ぎ

上げると、遠くへと放り投げた。

「ギャアアアアア！」

サミジマの絶叫は、そこで途切れた。なにかの落ちた大きな音の直後に。リングマは力を抜き、下唇を軽く噛んだ。

もう、姉さんに、近づかないでよ。僕は、自分で自分をうまく制御できないんだから。

リングマは、冷たくなりかけている瑞穂の体を優しく揺すった。

瑞穂の瞳は焦点を失いかけていた。なにも聞こえていない、なにも見えていない。ただ、男の断末魔のような悲鳴だけは、聞こえていたようだった。

「リンちゃん……あの男の人は……？」

リングマは、首を横にふった。それは「殺してはいない」という意味だった。

冬の冷風に吹かれて、瑞穂の体は段々と暖かみを失っていく。顔色が少しずつだが青白くなっていく。少女は、なにも羽織っていないのだから無理もない。

リングマは、瑞穂の体をそっと腕に抱いた。暖かい。昔は、いつもヒメグマだったときのリングマを抱いて、一緒に寝ていた。その時の暖かみと同じだった。

ベッドの中で2人は、2人だけの秘密をいくつも隠し持っていた。もちろん今でも。なんだか凄く、懐かしかった。

「ありがとう。すごく、あったかいよ」

変な気分だった。悲しくないのに、なんだか悲しい。なんでだろう。なにかが、心に引っかかっている。

暫くしてから、瑞穂とリングマは、同時に言った。

「あの……あのね、リンちゃん……」

「がう……ぐあ、ぐあ……」

人間である瑞穂には、ポケモンの言葉は分からない。いや、ポケモンに“言葉”という概念があるかどうかすら、明確にはなっていない。ポケモンであるリングマにも、人間の言葉は理解できないはずだ。

だが、そんなことは今の2人にとって関係なかった。どうやっても断ち切れなかった2人の絆であれば、言語の違いなど、簡単に超越できるはずなのだから。

居待月の光の下で、瑞穂とリングマは、お互いの暖かみを感じ取っていた。



「リンちゃん……ごめんなさい。あんなこと言うつもりなんて、全然なかった。ただ、なんだかリンちゃんに馬鹿にされたみたいで悔しかったの。だって私は、リンちゃんに比べたら、背も低いし、力もないし。そう思ったら、また、頭がカツとなっちゃって。あ、

何言つても、言い訳みたいに聞こえちゃうよね。なんて言つたらいいんだろう」

なんと言つたらいいのか。言うべき言葉が見つからずに困惑する瑞穂を見つめ、リングマは細々と呟いた。

もう、いいよ、姉さん。

「え……？」

瑞穂は考えてもみなかった、リングマの反応に驚いた。リングマは、瑞穂の体をさらに強く抱きしめた。

それ以外に、なにもいらぬ。それが、答えだった。瑞穂を強く抱きしめたまま、リングマは悲しげに言つた。

僕つてさ、すごい自分勝手だよ。そんな、そんな僕だから、僕はさ、姉さんのこと、見殺しにしようとしたんだよ。『死んじやえはい』だなんて思つてたんだよ。

わざと姉さんのこと、怒らせて。しかも、姉さんのこと傷つけて。だから姉さんは、ボクのことを許さないで。姉さん、優しいか。だからボク、調子に乗つちやつたんだ。

だから、ちよつとシヨックだったかな。嫌い、なんて、姉さんに言われたの初めてだったから。

でも、僕、自分勝手なんだよね、本当は許して欲しいんだ。ごめんなさい。だから、許してください。僕さ、姉さんと、少しだけだけど……離れてみてわかつたんだ。

一緒にいたい。ボクは、姉さんと一緒にいたいんだ。いつしか、リングマは涙声になっていた。

瑞穂は、泣きじやくるリングマの姿を見たくはなかった。とても、悲しくなるから。

「リンちゃん、約束したよね……？」

……約束……？

「ほら、リンちゃんのパパが亡くなってから、リンちゃんずっとずっと泣いてたでしょ……？ そのとき、約束したじゃない」

リングマは、思い出した。たしかに、そんな約束をした。

うん、思い出したよ。あの約束だね？……。

「そう、リンちゃんさ、『もう二度と泣かない』って、約束するかわりに」

そこまで言っつて、青白かった瑞穂の顔が急に紅潮した。

「とつ、とにかくさ、泣いちゃだめだよ、リンちゃん。これ、約束なんだから」

リングマは、こくりと頷いた。その顔は、瑞穂と同じく真っ赤に染まっている。その時、どこからか水玉模様のリボンが、風に吹かれて瑞穂の腕に絡みついた。

「わあ、可愛いリボン」

瑞穂は、リボンを手に取り、リングマの肩につけた。

「すごくよく似合うよ、リンちゃん。」

瑞穂にそう言われて、リングマは照れて頭を掻いた。危うく、抱きかかえていた瑞穂を落としてしまうところだった。

一瞬の静寂。

なにも邪魔しない、だれにも邪魔されない。

それだけで、充分だった。

リングマは、瑞穂の首筋が湿っているのを感じた。

「姉さん……、泣いたでしょ？」

「う……。そ……。そうだよ」

「そんなんだからさ、いつまでたっても『泣き虫』とか、言われて苛められちゃうんだよ」

「だいぶ前の、話じゃない……それって。でも、よく覚えてたね……」

「姉さんだって……覚えてるじゃない」

「夢を見たの。6年前の」

「あ、偶然。ボクも見たんだ。昔の夢」

「リンちゃん……変わったよね」

「うん。でも、姉さん、全然変わってない」

「え……………」

「『泣き虫』なのは、全然変わってないよ」

「あ、ひどい！　じゃあ、約束する。『もう二度と泣きません』ってね」

「ほんとに、守れる？」

「大丈夫！　そのかわり…………」

「そのかわり？」

「もつと、強く抱いてよ…………」

硬直。

「あれ、リンちゃん。聞こえなかった？　もつと強く抱いてつて…………さむ…………」

瑞穂が「寒いから」と言う前に、なにかちよつと勘違いしている、リングマは、瑞穂をギュツと抱きしめた。そういえば、瑞穂は今、なにも着ていないのだ。

「ありがとう、リンちゃん」

それが、その日、瑞穂の最後の言葉だった。走り疲れたし、ほとんど何も食べてないし、怖い思いしたし。瑞穂の体力は、既に限界を超えていた。

暖かいリングマの腕の中で、瑞穂は眠るように、気を失った。

…………約束だよ…………。



#3 姉妹。

すれ違い哀しみ

月の光を浴びながら、少女は物思いに耽っていた。

滑らかで雪のように白い肌が、より一層、白色を帯びている。強すぎず弱すぎず、汚れた下界を優しく照らすその光は、物事を考えるときには最良の光だった。

少なくとも少女は、そう思っていた。

穏やかになれる。そんな感じがした。だが、この日だけは違っていた。歯を噛締め、食いしばる乾いた音が、コガネホテルのバルコニーに響いている。艶やかで腰のほうにまで達している、紫色のロングヘアが細やかに揺れている。

「なによ——それ」

もう何十回、同じことを呟いたのでろうか。他に言うべき言葉など見つかるはずがないのに。慰め、守ってくれるはずの親もいない。帰るべき故郷もない。そして唯一の肉親であり、もつとも信頼し、もつとも頼りにしていた姉も、ベッドに籠り、この世界のすべてとの接触を拒むかのように、眠っている。少女の姉は、この街の、コガネシテイ

の汚らわしい男達に犯されていた。

何故、こうも悪いことばかりが、続くのだろうか。

無表情のまま、少女は月を見上げた。丸いが少しだけ欠けている月が、硝子のように透き通った瞳に映った。漆黒の空に彩られた宝石のように、月は輝いている。だが、それがどんなに幻想的でも、美しかったとしても、少女の心を癒やすことはできなかった。

何故なら、少女の心の傷まで月の光は届かないから。暗く濁った心の表面を照らすことはできても、一番奥の、一番深い部分にある傷までは届かないから。

「なによ——それ」

同じことを、何回くらい呟いたのだろうか。少女は思考の片隅で考えた。私は何をしているのだろうか。何で、こんなことに、なっちゃったんだろう。

黒々としたノースリーブのワンピースが怒りに震え、風に煽られてはためいた。冷たい冬の風が吹いている。空気は微かに死臭を含んでおり、少女はそれを吸い込むのを拒否するかのように軽く息を吐いた。鋭利な表情とは不釣り合いな、可愛らしい黄色のリップンが、はらはらと風に吹かれて揺れた。

ゆつくりと少女が後ろを振り返ると、ガラス越しに姉の姿が見えた。布団を頭から被り、なにかに怯えているように眠る姉の姿は、痛々しく虚しかった。

「なによ……それ……」

洲先瑞穂が、コガネジムのベッドの中で、アカネと共に静かな寝息をたてていたとき、少女はいつまでもコガネシティを見下ろしながら、同じ呟きを発し続けていた。



体が、軽いような、重いような……不思議な感覚の中に彼女はいた。目の前では、記録映画のように、自分の姿が映し出されている。所々、白い靄がかかっている、全体像は見えないのだが、紛れもなくそれは自分の記憶だった。

「これは、夢なの？」

彼女は訊いた。答えは返ってこない。その代わりに、目の前のスクリーンは別の記憶を映し出した。

映像の中で、何かが彼女の体を強く押さえつけていた。激痛が彼女を襲う。彼女は抵抗していたが、相手の力に押されて、なす術は無かった。

「ねえ、答えてよ……。これは、なんなの？ どこなの？」

彼女は叫んだ。

月の光が照らされた。その“何か”の全体像が、一瞬だけだが彼女の目に映った。そ

れは男だった。いや、野獣の一人だとしても言った方が適切かもしれないかった。

彼女は恐る恐るスクリーンを凝視した。そこには紺のジャンパー、黒いジーパンを着た、長髪の男がニヤニヤと笑っている様子が映し出されていた。

男は彼女の髪を引っ張り、その場に引きずり倒していた。嫌らしい笑みを浮かべながら、男は彼女の身体を舐めるように見つめた。

「い………いたい………うう………」

彼女は、か細いうめき声をあげた。引きずり倒されたときの痛みで蹲っている。その時、彼女は男の二の腕にタトウのような模様を見つけた。ニドリーノのタトウのように見えた。すると、目の前のスクリーンが、突然真つ暗になり、何も映っていない状態になった。

「なに………? どうしたの………。ねえ、どうしたの?」

彼女の問いかけは、モヤモヤとした不思議な空間に、虚しく響いた。

暫くして、再びスクリーンに、自分の姿が映し出された。先程よりも、多少時間が経過しているらしい。

彼女は犯されていた。金髪の男は、犯されている彼女の身体を眺めている。スクリーンの中の彼女は、ただ呆然と、焦点のあつていない瞳で夜空を見上げているだけだった。苦しいのか、時折、顔を歪めて悲痛なうめき声を発している。

「きゅ……くう……」

彼女の頭についた水玉模様のリボンが、狂ったように揺れていた。細く華奢な身体が、折れてしまいそうなほどに彼女は身体を振り、男の身体に抗っている。

「や……やだ……」

思わず彼女は呟いた。彼女の目の前で、記憶の中で、彼女は泣き叫んでいた。

「ねえ、やめて！ 誰か、この映像を停めて！ お願い！」

彼女の叫びは誰にも届かない。何故なら、スクリーンの中の自分自身の声に、掻き消されてしまったのだから。

背中を砕かれたような痛みに、彼女は泣き叫んだ。男は彼女の足首を掴み、子供の玩具のように乱暴に握り締めている。男の臭い息が鼻先を掠めた。彼女は顔を背けたが、男の汚い身体は、既に彼女の身体を浸食していた。異物が彼女の細い身体を貫いていた。

「ああ……や……や……」

……嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ……

彼女の頭には、拒絶の叫びが鳴り響く。しかし、それは無意味であり、なにより手遅れだった。

「誰でも、いいから、はやくこの映像を停めてっ！」

半ば自棄になって、彼女は叫ぶ。

「やめてっ！ やめてよっ！」

叫ぶと同時に、彼女は目を閉じた。スクリーンの中の自分は、涙声になりながら、細々とした苦悶の悲鳴をあげていった。

救いはなかった。自分の身体と精神が音を立てて崩壊する音が、彼女の耳に鳴り響くだけだった。最後に聞こえる硝子瓶の鳴る音だけが、不協和音として彼女の耳に焼きついた。



朝日は既に、かなり上方に昇っていた。朝と言うよりも昼に近かった。コガネホテルの足下からのびる影も、次第に短くなっていく。

眠っているように静かな303号室は、突然の叫び声で目を覚ました。

「いや……ああっ！」

掛け布団を蹴り飛ばし、叫び声を上げながら射水。冷は飛び起きた。悪い夢でも見ていたのか、全身から汗が滲み出ている。羽織っていたパジャマは、ぐっしよりと濡れていた。

物音で異変に気づき、彼女の妹である射水 氷も目を覚ました。バルコニーでそのまま寝入ってしまった妹は、ゆっくりと部屋の方を覗き込んだ。姉はベッドから転げ落ちている。飛び起きた反動で足を痛めたのか、その場で蹲っていた。

「姉さん？」

氷は小さな、虫の鳴くような声で呟いた。滑るようにしなやかに部屋の中へ入り、妹は蹲る姉を抱きかかえた。

「姉さん、大丈夫？ 落ち着いて。ここには、私達しかいない」

妹に言われ、冷は落ち着きを取り戻した。痛みを堪えて、疲れ切ったようにベッドに座り直す。

「大丈夫？ 姉さん」

目を細めて冷を見つめ、氷は心配そうに呟いた。だが、表情は微動だにしない。無表情という仮面が張り付いたまま、凍りついているかのようだった。姉である冷ですらここ数年、氷が感情を表に出したところを見たことがない。

「大丈夫だよ……ちよつと、足を打っただけ」

静かに俯き、冷は言った。

「姉さん」

「ん……なに？」

「生身の身体じゃ、この寒さは辛いでしょ。なにか、暖かい飲み物でも飲む？」

痛みのために、冷は今まで気付かなかったが、この部屋には暖房が無かった。いくら昼頃だとはいっても、凍てつくような冬の寒さは厳しかった。

冷は首を縦に振りながら、氷に訊いた。

「うん、そうね。暖かいもの欲しいな。ミルクティーとか、ある？」

「ミルクティーね。わかった」

氷は、ショルダーバッグの中からティーバッグを取り出した。ティーバッグを入れたティーカップに、ポットの熱湯をそそぎ込む。紅茶の良い香りが部屋に充満した。冷蔵庫からミルクを取りだし、紅茶へ注ぐ。

ティーバッグを取り出してから、ミルクティー完成まで、ほんの数秒だった。冷は、氷の異常なまでの手際の良さに、いつもながら驚いていた。

逆に言えば、つい最近まで、こんな事ばかりをさせられていたことを意味していた。それを思うと、何故もつと早く、この計画を実行しなかつたのかと悔やんでしまう。

なにより、氷が可哀相だった。あの時の、一番、辛かった時期の氷のことは、もう思い出したくもない。

でも——今でも、その状況は、あまり変わっていないのかもしれない。

——だって、私は。

「姉さん。ミルクティーできた」

氷は、冷の目の前でティーカップを持ちながら立っていた。

「あ……ありがとう……」

そう言つて、冷は氷からミルクティーを受け取ると、一口すすつた。甘く暖かなミルクティーが、のどを通つて、お腹へと伝つていく。冬の冷気に冷やされた、冷の体はホンの少しだけ暖かみを取り戻した。

「どう？　姉さん。おいしい？」

ミルクティーにつかつたミルク瓶を冷蔵庫にしまいながら、氷は訊いた。冷は、はにかみながら微笑んで見せた。

「うん。おいしいよ。氷のつくる料理は、なんでもおいしいもの」

姉の笑顔を見て、氷は一安心したのか軽く息を吐いた。

「よかつた、姉さんに喜んでもらえて」

氷はミルク瓶を冷蔵庫の中に押し込んだ。ミルク瓶は冷蔵庫の中のジュース瓶とぶつかり、カチャカチャと冷ややかな音をたてた。

その瞬間、冷の眼の色が変わつた。

「あ……ああ」

乾いた叫び声を上げ、冷は蒼白になつた顔をふるふると左右に振つた。彼女は悪夢の

最後に聞いた、あのミルク瓶の冷ややかな音を忘れてはいなかった。

夢で見た、スクリーンの情景が、今、自分の目の前で再生し始めた。

コレハ、ゆめナノ？ ネエ、こたエテヨ……。コレハ、ナンナノ？ ドコナノ？!
「い…………いや…………うう…………」

突然、冷は呻き声をあげた。そして苦しそうに表情を歪め、身体を無理矢理に振った。

姉の不可解な行動に気付いた氷は、驚いて冷に話しかけた。

「姉さん？ 姉さん、どうしたの？ どうしたの？」

妹の問いかけで、冷は正気を取り戻した。冷は怯えた様子で、目の前に立ちつくしている氷の顔を見つめた。

「…………た」

思うように声が出ないのか、意味の分からない言葉が姉の口から発せられた。

「え？ 姉さん、今なんて——」

言ったの？

「…………見えた」

だから、なにが…………？

と言いたいのを、氷は堪えた。表情から察するに、良からぬものを見て——思い出し

てしまったのだと、推測したからだ。

細々と、冷は呟いた。

「もう、二度と思い出したくない、昨日の夜の——夢」

「——夢？」

思わず、氷は聞き返した。

「それは、確かに——」

夢だった方が、良いに決まってる。

夢だった方が、どれだけ楽なことか。

夢だった方が、これほど苦しまずにすんだのに。

夢だった方が……、いえ、夢であってほしかった。

……でも、これは、現実なの……。

「なんで……」

逃げようとするの？

「どうして……」

逃げようとするの？

氷は、次から次へと沸き上がる言葉を、心の中でかみ殺した。今の姉に、そこまで言

うのはあまりにも酷だから——

冷の白く細い腕に鳥肌がたっているのに、氷は気付いた。

ミルクティーを一気に飲み干した冷は、突然、布団の中に潜りこんだ。甦った悪夢よりも非道い記憶が、か弱い冷の心を突き刺していた。

——闇——暗闇——ギラつく男の眼——叫び、呻き、悲鳴、羞恥、血涙、恐怖、死——

いつしか、冷は震えていた。

「姉さん……」

氷は悲しい瞳で、姉を見つめ続けることしかできなかつた。それでも尚、その表情は変わらなかつた。

「嫌……もう疲れた……」

布団の中から、冷のくぐもつた声が聞こえてくる。その声は、哀しみに満ちていた。

「疲れたって——姉さん。私達は、まだこれから」

溜まりかねて、氷は言った。その瞬間、冷は再び布団から飛び起きると、氷を睨みつけながら言った。

「これから……？ 私に、これから何があるって言うのよ……？」

冷は、体ばかりではなく、唇に至るまで震えさせながら続けた。

「これからなんて、なにもない。なにも良い事なんてあるわけないよ。それに、なんで、あんな目に……あうの……水も一回、同じ目にあつてみたら解るわ。死にたくなるよ。絶対。ああ、もう、……いやだいやだ……イヤダイヤダ……」

氷は、姉を見つめたまま制止していた。

「もう嫌だよ……辛いよ……死にたいよ……」

冷の眼は、沢山の涙で溢れていた。氷にとつて、そんな姉を見るのは辛かった。

「そんな事……言わないで。それに、姉さんが死んじゃったら、私はどうなるの……どうすればいいの？」

錯乱していた冷の表情が、少しだけ元に戻った。

「姉さん、死んじゃったら、私は独りぼっちになるの……？ そんなの……」

嫌に決まっている。

氷は、冷を強く抱きしめていた。一晩中、外で眠っていたせいなのか、雪のように冷たい肌が、ヒヤリと冷の体を包んでいた。

秘事は青空に消え

「ひ……ひよう……」

驚いた。

“あの事件”以来、氷が、感情に流されることなど、初めてだったから。そのことに関しては、冷は、少しだけ嬉しく思う。しかし冷は、そんなことに喜んでいられるほど、穏やかな精神状態ではなかった。

「誰だって、いつかは一人にならなきゃ、ならないのよ。私だって、この間まで一人だった」

冷は、つつけんどんに答えた。

「どうして。私がいたじゃない——」

氷の心配も、今の冷にとつては、なんの意味もなかった。つまり、冷の受けた精神的な傷が、それほど深かったという事だった。

恐怖からか、唇が震え、言葉が良く聞き取れなくなり、冷は明らかに取り乱しているように、氷には見えた。

2、3度、問答を繰り返す内、冷の眼から涙が溢れ出た。それはポロポロと、毛布に落ちて染み込んでいく。

「姉さん、本当に大丈夫？」

あまりの姉の取り乱しように、さすがの氷も顔を強張らせた。冷は、なにも答えなかった。これが答えだ、と言わんばかりに、ポロポロと涙だけがこぼれ続ける。蒼白く震える冷の顔は、もはや既に自分の姉ではないように思えた。

氷は、ゆつくりと冷の背中をさするが、冷の様子は一向に落ち着かない。

「もう……泣かないで……」

「あなたに、私の何がわかるの？ 解らないわ。理解してほしいなんて思わない。だって絶対に解らないんだもの！ 私の気持ちなんて、誰も解らないのよっ!!」

冷の取り乱し方は、頂点に達していた。体は涙のシャワーで濡れ、なおかつ震えは、おさまる気配すらない。

「解らない……私の気持ちなんて誰にも……、絶対に解らないわ！」

その叫びと共に、冷は嘔吐した。吐いたのだ。あまりの緊張に、胃が耐えきれなかったのだろう。先程飲んだミルクティーが、次から次へと逆流していった。ツンとする胃酸の臭いが、部屋にたちこめる。

「……あ……、あ……氷……？」

暫くしてから、正気に戻った冷は、おそろおそろ氷を見上げた。氷は悲しげに項垂れていた。

ただ、一言呟いた。

「姉さん……、涙」

「え？ ……ああ……」

相変わらず、冷の眼からは、涙が溢れ出てたままだった。

「とまらない」

「……なんで……。とまらない……？」

「そう、とまらない……」

涙が、止まらない。

止めようと思っても、いうことを聞いてくれない。涙顔のまま冷は、氷に語りかけた。

「氷……ごめん……」

「いいよ……、気にしてないから。でも……」

氷は、眼を閉じた。

冷は、訊く。

「でも……、なに……？」

「姉さん……最近、変わったよ……昔と全然違う……」

私が……？

他に……、誰がいるの？

「そんな……だって……」

そこまで言いかけて、冷は、慌てて口をつぐんだ。

私は、誰なんだろう。

射水 冷……氷の『姉』。

ほんとに、そうなのかな……。

私は、本当に、氷の『姉』なんだろうか。

もしかしたら、違うかもしれない。

氷にとつての『姉』は、こんな、ひ弱な女じゃないはず。

私は、変わったんだろうか。

あの世界で生きるために、変わることを強制されたのかもしれない。

それとも、氷にとつての『姉』は、最初から私じゃないのかもしれない。

それって……。

まさか……、まさかね……。

まさか……。それでも……。それじゃ……。そんなの……。

『妹』は、……でも、そのうちに……。

「そ……、そうよね。た……たしかに……たしかに、私は変わった」

口では、そう言っているが、明らかに冷は狼狽していた。そんな冷の様子を見て、氷は心配になった。

「あ……、姉さん……。私、そんなに酷いこと言った……？」

それを聞いて、冷は慌てて首を横にふった。

「違う……違うよ……」

「それじゃ……、どうして……」

そんなに、狼狽えているの……？

そう、訊きたかったが、やめた。姉が、元に戻っただけで、十分であり、それ以上無駄なことはしたくなかった。

氷が黙ったままにいるのを、冷は静かに見つめている。

……もう、遅い……なにもかも……。

そう、冷は思った。

そして、心に決めた。

これ以上、氷が傷つくのを見たくないから……そして自分も……。

まだ黙っている氷に対して、冷は立ち上がり言った。

「ちよつと、散歩に行つてくるね」

「え…………？　でも…………」

心配そうな氷をよそに、冷は、ドアを押して外に出た。

「大丈夫…………。私なら…………大丈夫だから…………」

やつとのことで、冷の瞳から涙が消えた。

氷は、悲しそうな様子で冷の後ろ姿を眺めていた。



つきぬけるような青空の中で、太陽は燦々と照り光っている。人口密集地コガネシティで、雲もなくこれほど天気の良い日は、数ヶ月ぶりだった。

「はあ…………」

そんな青空に一番近い場所、コガネ百貨店の屋上のベンチで、コガネジムのジムトレーナー少女アスカが、プリンを頭に乘せて、ため息をついていた。

「ウチつて、なんでこんなに口が悪いんやろか…………」

そう言うのアスカは、ガクツと項垂れた。

深く落ち込んでいるアスカとは対照的に、頭に乗っている『風船ポケモン』プリンは

嬉しそうに、買ってもらったアイスキャンデーを、ペロペロと嘗めている。

「はあ……。いっつも、いっつも……余計な事ばかり言うてしまうし……」

そんな、アスカの事など気にもせず、プリンは陽気に小躍りした。

落ち込んでいるアスカは、陽気なプリンの行為に、嫌気がさしてきた。ついに我慢できずに首を激しく横にふった。

「ぶ……ぶりゆり？　ぶりゆ〜！」

頭から振り落とされたプリンは「なにすんのよ?!」と、でも言いたげな表情で、アスカを睨んだ。アスカも負けじと、プリンを睨みながら言い放つ。

「あんたバカやろ?!　ウチが、こんなに落ち込んだるのに、よりによって頭の上で暴れるやなんて……。いったいどういう神経してるんや?」

バカと言われてプリンは、さらに憤慨した。

ポケモンであるプリンには、言葉の正確な意味までは解らなくとも、相手の表情や、言いつ、声色などで、大体の意味なら解るのだ。

「ぶりゆりゆー！　ぶりゆりー！」

そう言うと、ぶくうくと、プリンの体が膨れる。

これこそプリンが、「ふうせんポケモン」に分類される所以だ。

いつものアスカならば、膨れたプリンの可愛さで、怒りも収まるのだが、今日だけは

違っていた。

「いっつも、いっつも、膨れりやええいうもんやないで！ それになんやねん。ウチのアイスキャンデー。ほとんどなくなってもうとるやんか！」

アスカは、プリンの手元を指さした。丸々と膨らんだプリンの短い手には、嘗められて元の4分の1くらいの大さきになってしまった、アイスキャンデーが、しっかと握られている。

「それ、ウチのアイスキャンデーやで！ 返してや！」

そう言うと、アスカはプリンのアイスキャンデーめがけて、手を伸ばした。しかしプリンは、びよんと跳び上がり、アスカの腕を避けた。

小馬鹿にしたような、プリンの態度に、アスカはどうとう本気で頭にきた。

「いい加減にせんかい！ なんで、ウチの言うこと、聞いてくれへんねん!!」

顔全体を真っ赤にし、湯気を上げながら、アスカは大声で叫んだ。そのあまりの形相に、いままでやりたい放題だったプリンも、さすがに怖じ気づいてしまったようだ。

「ぷ…………ぷり、ぷりゆく…………。！」

拍子に、プリンは、背中から転んだ。アイスキャンデーは手から離れて、どこかへ飛んでいってしまう。

起きあがったプリンは、いまにも泣きそうな顔を、アスカに向けた。

「な……なんやねん。そ、そんな顔しても無駄や。ウチには通用せえへんで！」

そうアスカに言われて、プリンはぷいっと横を向いた。それを見て、アスカは呆れ、思わずため息をついた。

「なんや……、やつぱり、嘘泣きやつたんかい」

そのとき、後ろからアスカを呼ぶ、若い女の声が聞こえてきた。

「あの……、このアイス、あなたのですよね……？」

そう言われて、アスカが振り向いた先には、アスカと同じくらいの年頃の女性が、ドロドロになったアイスクャンデーを手を持って、立っていた。女性の紫色の髪は艶やかで、童顔なアスカとは対照的に、どこことなく大人の雰囲気を漂わせている。

「あ、そやで、ありがと……」

そこまでお礼を言いかけて、アスカの顔色が一気に、青ざめた。相手の女性の肩には、溶けたアイスクャンデーの一部がベツトリとへばりついていたのだ。プリンが投げたアイスクャンデーが、彼女に当たってしまったということは容易に想像できた。

「あの……、どうかしました？」

真つ青な顔のアスカを見て、彼女は首を傾げた。

「あ、ご……ごめんな。その洋服代は、ウチが弁償するから……、許してや……。あ、ほら、プリン！ あんたも謝りんかい！」

アスカは、足下で拗ねているプリンを担ぎ上げた。

「もしかして……、これのことで、謝ってくれてるんですか?」

彼女は、肩についている洋服のシミを指さしながら言った。

「ホンマに、ごめんな。洋服代は絶対に弁償するから……」

頭を下げたアスカを見て、彼女は、手をふりふりしながら応じた。

「い、いいですよ。弁償なんて……」

「へ?」

予想だにしなかった答えに、アスカは呆然と彼女の顔を見つめた。

「ど、どういふことなん……?」

「弁償だなんて、大袈裟ですよ。なにも、そこまでしなくても……」

「でも……、なんか、悪いなあ……。その洋服、高そうやし……」

アスカは、彼女の着ている服を、マジマジと見やる。それに気付いたのか、彼女も自分の服を、チラリと見た。

「この服は、一昨日、妹がつくってくれたんです。『寒いでしょ』って」

「そやったら、なおさら……」

彼女は、少し俯いて、首を横にふる。

「とにかく、いいんです。もう、私には必要ないですから」

「そ……そうなん……？　ほんまに、ごめんな」

アスカがそう言うのと、彼女は完全に溶けてしまったアイスクャンデーを手渡して、展望テラスの方へ、行ってしまった。

脱力したように、アスカは、その場に座り込んだ。

「変なの……。弁償する、言うてんのに」

口ではそう言いながらも、アスカは多少、ホツとしていた。

弁償するとは言うものの、結局、お金を持っていないアスカは、アカネに事情を説明して、お金を貸してもらおうしかない。そんなことになったら、アカネになんと言われるか……、たまったものではないのだ。

「まあ……、よかったかな……」

そう呟くと、アスカは、抱いていたプリンを、地面に降ろした。

「もとはといえば、あんたが悪いんやで」

プリンを、叱りつけた、その時だった。

……きれいな、あおぞら……。

さっきの彼女の声が、聞こえたような気がした。アスカは、ふと彼女がいるはずの、展望テラスを振り返った。

「あれ……、おらへん」

彼女の姿は、そこにはなかった。

ドスッ!

グワシヤッ!

その音は、アスカの耳に、長く焼き付くことになる。

○
●

死喰らいの夜

彼女が見た最期の風景は、透き通った青空だった。

「わあ……、きれいな……青空だね……」

彼女が呟いた瞬間、自分の背骨が粉々に碎ける音が、耳に響いた。続いて、頭蓋が崩れ、頭皮が弾け、鮮やかなピンク色をした脳味噌が辺りに飛び散り、ズタズタになった後頭部からは、腥血と脳漿がとめどなく吹き出した。

内蔵は、衝撃でグチャグチャに掻き回されて破裂し、体中の穴という穴から、血にまみれた汚物が垂れ流された。

しんと、辺りは静まり返った。彼女の頭に付いていた水玉のリボンが、風に吹かれて何処かへと飛んだ。水晶のように澄んでいた瞳は白く濁り、上目遣いに、路上に立ちすくむ人々を睨み付けていた。

誰かの悲鳴が響いた。静寂は途切れた。彼女の屍体を見つめ続ける人々の中の、何かが決壊した。悲鳴は連鎖的に倒れていくドミノのように、瞬く間に響きわたった。

悲鳴の振動は、汚物に塗れた彼女の体を震わせるのには、十分過ぎた。



同日、午後7時36分。

コガネ中央病院の霊安室の前に、少女は立っていた。少女は微かに天井を見上げて首を振り、腰の方まで伸びた紫色の長髪を振り払っている。その仕種は、子供とは思えない程に妖艶で落ち着き払っていた。

医者と思しき白衣の男が、少女に気付いた。男は眉を潜めた。こんな時間に、こんな場所で女の子が何をしているんだ？ 訝るような男の瞳はそう言っていた。監視するように不思議な少女を眺め続け、少女が一向に立ち去る素振りを見せないのを不審に思い、男は話しかけた。

「君さ、ここは子供が遊んで良いような場所じゃないんだ。ここは病院だよ？ ほら、ご家族の方はどこ？ 迷子なら、その階段を降りたところに——」

「家族はいない。誰もいない」

少女は吐き捨てるように呟いた。鈴の音のように、小さく澄んだ声だった。

「誰もいない？ 大人をからかうとただじゃすまないぞ。ここは、大人しか入れない場所なんだ。子供がうろうろしちゃ、いけない場所なんだよ！」

男は、少女の言葉を鼻先で笑った。微動だにしない少女の態度に焦れたのか、男は少女の漂白したように白い腕を握り、強く引いた。少女は上目遣いで、睨むような視線を送り続けている。

「ほら、早く出て行くんだよ！」

「うるさい——」

少女の——射水 水の瞳の色が変わった。男の声が急に途切れた。少女からの視線が、黄色い危険な色を帯びていた。極端に搾られた少女の眼球が、人間のものではないように、彼には思えた。男は震える指先で胸と首筋を押さえ、痙攣しながら床に倒れた。

「く？ か、身体が痺れる——」

男は唇の端から涎を垂らしながら喘いでいた。必死に顔を上げる。感情を拭い取った無表情な、少女の顔が見えた。幼い顔つきだけに、余計に表情の無さが目立った。

「何だこれは。身体が動かない？ 君の仕業か？ これは、これは一体なんの真似なんだ！」

男は少女に訊いた。氷は男を無視し、霊安室に入ろうとしていた。男は声を張り上げた。

「待つんだ！ そこは、子供が遊ぶような場所じゃない」

男は痺れた身体を堪え、掠れた声で叫ぶ。氷は、男を睨み付けた。
「静かにして」

氷は眩き、麻痺している男の顔を踏みつけた。男の意識は途切れた。男が静かになつたのを確認し、氷は霊安室の重い扉を開き、部屋の中へと踏み込んだ。霊安室の中は、消毒液のような異臭に満たされていた。

氷は目を細めて辺りを見回した後、もう一步、足を踏み込んだ。一步ずつ、足を前へ進める度に、心臓が緊張で深く鼓動する音が、耳に響いてくる。

一番奥の台座の前で立ち止まり、氷は台座に被せられている緑色のシートを、静かに捲った。

「姉さん——」

氷は、思わず息を呑んだ。緑色のシートの下には、変わり果てた姿の姉が、落下直後の状態そのまま、横たわっていた。

ゆっくりりと、氷は姉の腕に触れた。冷たい。

「姉さん、どうして——」

無惨な姉の遺体を前に、氷は眩いた。

「どうして、私を置き去りにして、自分だけ死んじゃうの」

姉は答えない。

「どうして、姉さんが死ななきやいけないの」
姉は答えない。

氷には、解らなかつた。姉が、自分で自分を殺した理由が。自殺した理由が。姉は何故、死ななければならなかつたのか。

氷は病院を後にした。既に辺りは暗くなっている。冷たい夜の風が、氷の紫色の長髪を靡かせた。

暗いとは言うものの、街の中央はビルの明かりや店の電飾などで、まだ明るい方だった。この街の路地裏は、時に『闇に堕ちた街』と形容される程、闇に満ちているのだから。

無表情のまま、氷は月を見上げた。居待月は銀色に光っている。その光に誘われるかのように、氷は歩き出した。歩きながら、氷は考えた。姉が死んだ今、これから自分は何をするべきなのか。

どう生きるべきなのか。なんのために生きるべきなのか。

答えは見つからない。いや、正確には、1つだけ見つけていた。漠然とした、行く末は見えていた。だが、それは無視して捨てた。

暫く街をさまよい歩いていると突然、氷の足が止まった。

「……………うう……………」

どこからか、遠くない場所から、女の子が苦しんでいるような声が聞こえてきた。辺りを見回し、その声が路地裏から漏れていることを確認すると、氷は闇に満ちた空間へと入り込んだ。

静まり返った暗い路地裏で、女の子の呻き声だけを頼りに、氷は進んだ。声が近いのを感じ、氷は柱に身を潜めて、声のする方を覗き込んだ。その情景を見て、氷は即座に目を背けた。

そこでは男が2人、水色のツーテールの少女を凌辱して遊んでいた。遊ばれている少女の隣には、同じ年頃と思われる少女の、コマギレになった死体が転がっている。

少女は泣き叫ぶ。小さく白い裸体は恐怖と痛みで震えていた。時折、鳴き声に混じって呻きが聞こえる。男は笑いながら少女の胸を、そして股間を舐めていた。

非道い。これが——人間の本能？ 違う。“これ”は異常だ。姉さんも、この女の子のような苦痛を受けた、そうなんだ。だから？ だから、死んじやったの？

自分の姉も、このような愚かな醜い男によって、死に追いつめられたのだろうか。そう思うほど悔しく、憤りを感じ、しまいには殺意すら湧き出た。溜まらなくなり、氷は男達を止めに入ろうと身を乗り出した——その時だった。

闇に閃光が走った。その閃光は、少女を舐め回している男を、遙か虚空へと吹き飛ばした。もう一人の男は、間一髪で閃光を避け、壁をよじ登り、どこかへ走り去ってしまった。

た。

氷は突然のことに驚いた。だが、その驚きを表情に出すことはなく、即座に閃光の発射方向を見やった。２メートル程もある長身の何かが立っていた。太い腕に鋭い爪、閃光を発射したと思われる口からは、煙が出ていた。

巨大な影は、すぐさま男に詰め寄り、鋭い爪で切り裂いた。張り裂けんばかりの絶叫が響いた。それは男を担ぎ上げると、どこかへと投げ飛ばした。激突の音と共に絶叫が途絶えた。

凄まじい情景を目の当たりにしながらも、氷は冷静さを保っていた。

謎の大男と、少女に気付かれないうちにしながら、氷は男の投げ飛ばされた場所へ走った。

「た……助けてくれ……」

路地裏の奥。真つ暗な闇に、更に墨を流し込んだかのような場所に、男は倒れたまま呻きを上げていた。暗くてよくは見えないが、男は金髪で無精ヒゲを生やしたており、左の太股にデルビルのようなタトウが刻まれていた。

男……いや、野獣だ……、自分の姉を死に追いつめた奴と、同じ種類の動物だ……。

氷は、そう思いながら、ゆつくりと男に近づいた。次第に、暗闇から男の身体が鮮明に浮かび上がる。そして、氷は目を細めた。男は、体中に煮立っているような火傷を

負っていた。さらに股間からは夥しい出血。服は完全に燃え尽きており、辛うじて生命を維持しているように思えた。

「助けて……助けてくれ……」

涙に歪んだ顔を持ち上げながら、男は氷に懇願した。のたうちまわり、惨めに命乞いの言葉を吐き出し続ける男の顔を蔑むように眺め、氷は吐き捨てるように言った。

「自業自得ね。早く、死ねばいい」

氷の言葉は憎悪に満ちていた。男は顔を醜く歪めて絶叫した。

「助けてくれエー！ 頼む！ お願いだア！ 俺ハ死ニたくネエエエエエツッ！」

惨めだ。惨めすぎる男の叫びに、氷は微笑した。男の絶叫に隠れて、少女は呟く。自業自得……だ、と。

氷は、今まで生きてきた中で、最も心躍っている事に気付いていた。こんなに楽しい事は初めてだ。醜く愚かな輩に、私的な制裁を与える事が、こんなに楽しいなんて――

心の奥底から溢れ出す笑いを、なんとか押し殺しながら、氷は呟いた。

「この街で、二の腕にニドリーノのタトゥーがある男を知らない？ 教えてくれたら、助けてあげてもいい――」

震え、縛れる舌を必死に操りながら、男は氷の問いに答えた。

「ああ……、知ってる。裏切り者だ……。あいつ、俺の事を見捨てて、自分だけ逃げやがったんだ」

「さっきの……、さつき逃げた男……？」

「そうさ、あの野郎……、今度会ったら……」

男は歯軋りしながら、拳を震わせ、冷たい地面を睨み付けていた。

「——で？ その男の名前は、なんて言うの？」

「レイエ……、レイエだ」

「レイエ……ね。ありがとう。……ところで……あなた、名前は？」

「サミジマだ。いいから、早く助けてく……」

男の言葉を聞き流し、氷は顔を上げた。恐怖に顔をひきつらせたサミジマの髪を小さな掌で掴み上げる。前へ向けた視線の先に、汚らしく醜い男の顔が映った。

次の瞬間、サミジマの腹に太い杭のようなものが貫通した。背中から内蔵が飛び出て散る。あんぐりとあけられた口からは、汚血が吹きだした。氷は掴んでいた手を離す。男はその場に崩れた。

氷は、微笑を浮かべながら、しばらくサミジマの屍を眺めていた。

どこからかやってきたアーボが、サミジマの死骸に食いついた。骨がバギバギと音をたてる。生臭い肉が、食いちぎられ剥がれ落ちた。後には、生々しい血痕だけが残った。

月に背を向け、立ち去る間際、氷は呟いた。

「馬鹿な男……」



早朝。辺りには白い霧がかかり、どこまでも広がる風景を覆い隠している。

「ねえ、パパ、どこ行くの——どこ行くのっ?」

大声を発しながら、少女は父に抱きついた。染みついた消毒液の臭いが、ツンと鼻を突き刺す。

父は、少女を抱きかかえ、ゆっくり地面へと降ろした。しばらく少女の顔を見つめた後、背を向け歩き出す。自分の家とは正反対の方向へ。

「パパあ……、どこ行くの……答えてよ……」

ぴたりと父の足が止まった。そして、少女に背を向けながら言った。

「瑞穂の……、手の届かないところに行くんだ」

それを聞いた少女は、激しく首を横に振り、叫んだ。

「やだあ! そんなのヤダよう! 私、独りぼっちになるのは嫌だよ……」

「独りぼっちじゃない……、お友達のヒメグマとフシギダネがいるじゃないか」

少女は、家のベッドで眠っているはずの、ヒメグマとフシギダネを思い浮かべた。

「……で、でも……」

そう呟いた少女の瞳から、ポロポロと涙が溢れ出た。

「パパは悪くないんですよ！　なんで……、どうしてなの……っ！」

「子供は……知らなくてもいいことだ……」

そう言い放つと、父は全速力で坂道を駆け下りた。まるで疾風のようなだった。

「待つてよお……。パパ、パパ……！」

後を追いかかけようとする少女の足は纏れて、少女はその場に転んだ。

「待つて、待つて、待つてよう……」

父の姿は、深い霧の奥に消えた。少女は泣きながら、父の後ろ姿を眺めることしか出来ない。いつの間にか少女の隣には、心配そうに見つめる、ヒメグマとフシギダネの姿がある。

「ヒメちゃん……。ダネちゃん……。う……。パパが、パパが……」

心臓が、ギリギリと痛む——あの時の痛みとは、違う次元の痛みだった。

少女は、二匹に泣きついた。啜り泣く声だけが、霧の空間に、いつまでも虚しく響いていた。

再会は涙の予兆



『昨日、午後3時頃、コガネシティ2―56区、コガネ百貨店の屋上から、身元不明、推定15歳ほどの女性が転落し内蔵破裂で死亡した事件で、コガネ地方警察は、目撃者の証言、現場の状況などから自殺と断定し、女性の身元の確認を急いでおり……』

——イヤな夢、を見た——

ベッドから飛び起きた瑞穂は、荒い息づかいで、辺りを見回した。なんだか懐かしい臭いがする。白一色の狭い部屋にも見覚えがある。

病院……、コガネ中央病院。瑞穂は即座に、ここが何処であるのかを思い出した。

瑞穂の着ている、薄い桃色のパジャマは汗で、ぐっしよりと濡れていた。ベタベタしている。

上半身を起こして、窓から外を眺めた。コガネシティ全景が見える、そして昼の強い日差しが眩しい。

『……41番水道での、高速客船『グラシヤラボラス号』の火災事故から、4日が経過し

ましたが、深い霧のため、依然、搜索は難航しており、乗客・乗員49名の生存は、絶望視されて……』

つけっぱなしになっているテレビから、ニュースが流れている。テレビの横では、リングマとグライガーが、大きな軀をたてて眠っていた。

リングマもグライガーも、悪夢に魘される瑞穂のことを心配して、深夜中、ずっと起きて見張っていてくれたことなど、瑞穂は知る由もない。

瑞穂がグイと背伸びをすると、真つ白なドアが開いた。ドアから入ってきたのは2人の女性だった。

「あ、起きてたの」

白衣を着て、ルビー色の髪をした、医者らしき女性は、瑞穂に話しかけた。医者とはいうものの、まだ17歳で、所々に幼さが残っている。

「うん」

そう答えた瑞穂が、汗だらけなのをみて、女医は驚いて訊いた。

「すごい汗。どうしたの？」

「ちよつと、イヤな夢を見た」

「そう、大丈夫？ 瑞穂ちゃん」

瑞穂は少し微笑んで、首を横にふった。

「大丈夫。私には、リンちゃんと、グラちゃんがいるし。この病院も、ノゾミちゃんがいるから、安心だし……」

瑞穂がそこまで言うと、女医の隣に立っているジュンサーが溜まりかねたように口を開いた。

「あのね……。そういう個人的な会話は、私の話が終わってからにしてくれない？」

キョトンとしながら、瑞穂はジュンサーの方を向いた。

「ごめんなさい。巡査さん」

「警部補よ」

事も無げに自分の階級を訂正すると、コガネ警察署、刑事課強行犯係のジュンサー警部補は事務的な口調で、事件現場を捜索したときの話しを شدした。

「アナタの言っていた場所を探したら、やつぱり遺体が見つかったわ……。それもバラバラのね。状況も一致していたし、目撃証言からアナタがその犯人に襲われたのも、間違いないこともわかった。だから、その太股にデルビルタトウの男は指名手配しておいたわ。捕まるかどうかは、解らないけど……」

「絶対に、捕まえてください……!」

隣で静かに話を聞いていた、女医の桃谷望が、大きな声で言った。

「許せないよ……。そんなの。人を殺して、バラバラにするなんて……。瑞穂ちゃんまで、

非道い目にあわせて……。絶対に許せない！　そうでしょ？　瑞穂ちゃん」

小さく、ゆつくりと瑞穂は頷いた。

「だから、お願いします！　絶対に捕まえてください……！」

望はそう言うと、じつとジュンサーの瞳を見つめた。ジュンサーは望の剣幕に、いささか驚いたようだが、小さく2、3回頷いて言った。

「わかっているわ。こちらも出来るだけ犯人逮捕に努力するつもりよ。でも……。この街の治安の悪さは、普通じゃないから、難しいの……。最近この街、世界標準世界標準、世界標準……。って、騒がしいけど、犯罪までグローバルスタンダードにされちゃ、たまわないわよ……。」

「大変……。ですね……。」

思わず愚痴をこぼすジュンサーを見て、瑞穂は同情心からか、呟いた。

「ありがとう。まあ私が言うのも何だけど……。この国のケーサツは、不祥事多いけど、検挙率は先進諸国の中でナンバー1なんだから。心配しなくていいわ。……。それよりも、いいの？」

「なにがですか？」

瑞穂は、突然の問いに、首を傾げた。

「カウンセリングよ。あんな事件に巻き込まれたのに、ホントに大丈夫なの……？」

俯き、何か考えているような仕草の後、瑞穂は言った。

「やっぱり大丈夫です。あの時は、リンちゃんが助けてくれましたし……」

チラリと、瑞穂は横で眠っているリングマを見やった。

「でも……、あんな非道い遺体見たら……。さつきだつて魔されていたみたいじゃない」

「さつきのは違うんです。昨日の事件とは関係ない夢で……。それに、人の遺体には、慣れていきますから」

「遺体に慣れてる……?」

驚いて、口あんぐりのジュンサーに、すかさず望が説明を加えた。

「あ、その、瑞穂ちゃんは、トキ大の医学部卒なんです。医学部つて、あの、解剖実習とか、よくやるんで、だから、遺体には慣れてるんです。……だよね……瑞穂ちゃん?」

「あ……。うん、そう……。そうなんです。正確には携帯獣医学部ですけど」

警察関係者に、変な誤解をさせるわけにはいかない、とばかりに瑞穂は、首を縦に振った。

「なんだ……。そうなの……。こんなにちっちゃいのに、大卒ねえ……」

その時、ジュンサーの腰についている携帯電話が、メロディを奏でた。

「ちよつと、ごめんね。……はい、私よ。え？　そうよ……、わかった。今行くわ」
話し終わると、ジュンサーは、携帯を元の場所にしまった。

「ちよつと事件が起こったみたいだから、私行かなきゃいけないの。それじゃあね」
そう言うと、ジュンサーは目にもとまらぬ速さで、部屋を飛び出していった。

ジュンサーが去ると、瑞穂は、柔らかに微笑みながら言った。

「……3ヶ月ぶりだね、望ちゃん」

「うん。卒業してから、もうそんなに経つんだ……。ヒメちゃ……じゃなかった、リンちゃんも、大きくなつたしね。ミズホちゃんは、どう？　なにか変わったことない？」
相変わらず病室には、テレビのニュースと、リングマ、グライガーの軀だけが響いている。

瑞穂は、しばらく俯いてから、言った。

「なにがなんだか……、わからないくらい……変わった事ばかりだよ」
「え……？」

テレビから、昨夜起こった、凄惨な殺人事件の報道が聞こえてくる。

『本日未明、コガネシティ2―4ナリ区で発見された、幼女のバラバラ死体は、コガネシティ在住、鋭田 昭吾さんの長女、鋭田 美子ちゃん、9歳であると断定され、コガネ地方警察は、目撃証言から、犯人の指名手配を……』

この街に来るまでの経緯を、瑞穂から聞いた望は、しんみりとした表情になった。発作……。軽蔑の眼差し、言葉。別れ。喧嘩。いざこざ。決別。涙。危険……。事件。

「そうなんだ……。いろんなことが、あつたんだね……」

瑞穂は軽く唇を噛んで、俯いたままだ。

「ねえ……。瑞穂ちゃん。そんなに辛い目にあうんなら、やめちゃえば……。？ ポケモントレーナーなんて」

それを聞いて、瑞穂はサツと顔を上げて言った。

「それはイヤ……。それに、ソウちゃんを捜さなきゃいけないし……」

「旅は……。続けるつもりなんだ……」

こくり、と瑞穂は頷いた。

「ねえ、なんで、旅なんかするの……？ 私にはわからない。瑞穂ちゃんなら、どんな病院やポケモンセンターにも、就職できるのに……」

深いため息をついて、瑞穂は答えた。

「実は……。私も、最近なんで旅を……。ポケモントレーナーをしてるのかわからなくなってきたやつなんだ……。でもね、辛いことや苦しいことがあっても、リンちゃん達と旅をしてると、なんだか楽しいの……」

「そう……なんだ。……まだ、よくわからないけど……」

「うん……」

ほんの少しばかりの沈黙――

暗い話題を少しでも明るくしようと、望は突然、語調を明るくした。

「そ、それにしても、ビックリしちゃったよ……。瑞穂ちゃんがスツパダカで運ばれてきたときには……」

「う……。それは……」

瑞穂の顔が、強張り、そして淡いピンク色に染まった。そして、小さな声で呟いた。

「……ミタ？」

「なにを……？」

「だから……、そのお……」

火照った顔を俯かせて、瑞穂は恥ずかしそうに、拳をモジモジさせている。

「ああ……、そういうこと。しっかりと、見たよ」

「やっぱり……」

「瑞穂ちゃんって、まだまだ子供だね。まだまだ、私には遠く及ばないよん」

「う……。うう。恥ずかしい……」

湿った瑞穂のパジャマから、勢いよく湯気が吹き出した。そんな瑞穂を見て、望はク

スクスと笑った。

「ふふ……。瑞穂ちゃん自身は、全然昔と変わってないね。その素直なりアクションとかさ」

熱っぽい身体を冷やすかのように、腕を2、3回廻すと、瑞穂は天井を見上げながら呟いた。

「はあ……。昔と変わってない……。か。いつまでも、子供のまんまなのかなあ……。私って」

「でも私は……。そんな瑞穂ちゃん、好きだよ」

ふう、と息をはいて、望は口元に笑みを浮かべた。そして言った。

「すこし眠った方がいいね……。瑞穂ちゃん。今、替えのパジャマ、持ってくるから」

「うん……。ありがとう」

望は振り返り、つけっぱなしになっていたテレビのスイッチに手を伸ばした。

『……トキワ・洲先クリニックでの、点滴に不整脈用剤が混入し、お年寄りや幼児などの13人が死亡、20人以上が後遺症を被った、事件の裁判で、カントー高等裁判所、荻菜裁判長は、森田 條馬被告に、逆転無罪判決を言い渡し……』

ニュースを聞いて、テレビを消そうとしていた望の手が、ピタリと止まった。そして、青ざめた顔を瑞穂の方に向け、言った。

「み……瑞穂ちゃん……」

「あれから……、もう、3年も経つんだ……」

「そう……だね……」

瑞穂と望は、青ざめた顔で、お互いを見つめ合っている。汗で濡れたパジャマを、瑞穂は始めて冷たいと感じていた。



どこまでも流れる、河。沸き立つ湯気は、冷たいシャワーにかき消される。

冷たい。冷たい。冷たい。……しかし、動かなくなった姉の冷たさに比べれば、どれほど生温いだろうか。

しばらくして、氷がタオルを体にまいた姿で、バスルームから出てきた。ベッドに座ると、氷は携帯パソコンのディスプレイを見つめた。

『1件の着信あり』

ディスプレイを徘徊していた矢印は、即座に届いたメールを開く。

差出人：法雅希 祐介 宛先：y o t 3 2 5 @ p o i . f r e e w a y s . * * . *

*

件名：*****

俺だ、法雅希だ。

姉さんが、自殺したそうだな。相変わらず苦労しているみたいだな。

俺も力になってやりたいが、いかんせん、今の状況じゃ身動きがとれない。

それと、お前の姉さんが死んだのは、アイツらには気付かれてない、安心しろ。

例の件は、もう少しだけ時間がかかりそうだ。

それと、パスワードを教えてください。でないと閲覧できない。

あと、大丈夫なのか？ このメールでお前の居場所とかバレたりしないのか？

今コガネシティにいるんだろ？

だったら、今日の午後8時から10分間は、気をつけた方がいいぞ。

キーボードのキーを叩きながら、氷は疑問に思った。

……今日の午後8時から、なにが起こる？……なにかが？……。

ものの数秒で、差出人への返信を書き終わると、氷は、冷やした牛乳紅茶を一口啜った。

……気をつけた方がいい？……それは、もしかして……。

噂には聞いていた。おそらく今日、決行されるのだろう。その計画が——まだほんの一部であるとは思うが——

窓の外から見える景色から、陰謀の囁きが聞こえたような気がした。

差出人：雪女 宛先：norri52@ho.tr.ne.**

件名：*****

ありがとう。例の件は、わかり次第、メールで知らせて。

パスワードは『3745tr』だから。

〜このメールでお前の居場所とかバレたりしないのか？

それなら大丈夫。

あの鯖は、元々私が構築したものだから、絶対にバレたりすることはない。そのためになんかわざわざ、鯖に穴を開けといたんだもの。

メールを送信し終わると、氷はベッドに横になった。灰色の天井を眺めながら、ひとり孤独に呟く。

「私は……、こんな風にしか生きることが……できない。残念、だけど……」
太陽が西に傾きつつある頃、氷は短い眠りに落ちた。



空が赤々と染まる頃、瑞穂は短い眠りから覚めた。

大きな欠伸をすると、テレビの横で寝ているハズのリングマ達を見やる。グライガー

は、相変わらず軒をたてて眠っているが、リングマは起きて瑞穂のベッドの隣に座っていた。

「リンちゃん、起きてたんだね」

瑞穂がそう言うと、リングマはぐうと頷いた。その瞬間、瑞穂のお腹が、ぐぐうと大きな音をたてる。それを聞いてリングマは笑った。瑞穂も、顔を赤らめながら苦笑した。

「ふふ……。そんなに笑わないでよ、リンちゃん」

ドタドタドタ……。

廊下から、誰かが勢いよく走ってくる音が、響いてくる。

「あれ……。誰の足音だろう……」

意識せず瑞穂がそう呟いたとき、病室のドアが勢いよく開いた。

ドアからは、紺のオーバーオールを着た、7歳くらいの女の子が飛び込んできた。瑞穂は、どこかで覚えがあることに気付いた。昨日の同時刻、自然公園で瑞穂にビスケットを譲ってくれた、あの女の子だ。

「あ……！ キミは……」

「グルウウウウウウツ……！」

啞然としている瑞穂の問いかけも、警戒しているリングマの唸り声も、全て無視して、

女の子は言った。

「かあさん！ あと、どのくらいなん?！」

……沈黙。

その女の子は、百合ゆかりと名乗った。鮮やかなオレンジ色のトレーナーに、オーバーオール。ちょこんと短いポニーテールが黒く輝いている。

驚いた様子をしている瑞穂の『沈黙』という問いに、ゆかりは照れながら、答えた。

「あちゃ。……ごめんなさい！ 部屋、違えてもうたみたいや……。ここは……何番室なん?！」

「403番室……。だったと思うけど……」

呆然としながら、瑞穂は言った。

「本当は、何番室にいくつもりだったの?！」

「303番室……。つちゆうことは、ウチは3階に行かなアカンのに、4階まできてもうたんか。ああ……。相変わらず間抜けやなあ、ウチは。」

ゆかりは頭を掻きながら笑った。瑞穂も、それにつられて笑うしかない。苦笑いしながらも、瑞穂は背中であぐらをかいているリングマを気にしていた。昨日、あんな事があつたらだらうか。リングマは突然の事で、今にもゆかりに飛びかかりそうだった。

リングマの警戒心を解くために瑞穂は、なおも照れ隠しの笑いを続けているゆかりに

話しかけた。

「あのさ……キミ。昨日、自然公園で、私にビスケットくれた子だよな？」

「ん……」

ゆかりは、しばらくまじまじと瑞穂の顔を見つめた。そして驚いたように、大声で言った。

「そや、思い出した！」

「思い出して、くれた？」

「あんときのお姉ちゃんやん！ だから、言うたやろ。あんな所で寝とったら、風邪ひくって」

……はい？……。瑞穂は、目を丸くした。

「……大丈夫なん？ 入院せなアカンほど、ひどい風邪ひいてしもたんやろ？ はあ

……、ウチがもつと早う、お姉ちゃんを起こしとけば、こんなことには……」

ひとりで延々と喋り続けるゆかりをみて、瑞穂は思わず、本当に笑い出した。

「お姉ちゃん……？ なんて笑うん？」

笑い終えて、咳き込みながら、瑞穂は答えた。

「違うの……。違うんだもん……」

ゆかりは、きよとんとししながら、首を傾げた。

「変な、お姉ちゃんやな……」



街は闇に堕ちて

差出人：法雅希 祐介 宛先：y o t 3 2 5 @ p o i . f r e e w a y s . * * . *

*

件名：*****

調べといたぞ。それにしても、とんでもねえ奴だな。〈これ〉

〈TR DB〉

『検索完了・該当犯罪者（1）』

NO. 1610146 『レイエ・ミャーライズ』 年齢：26歳 性別：男 出身地：

スタケシティ

住所：不定 職業：無職（元フリーカメラマン）〈現在位置〉〈詳細〉

犯歴：

傷害・威力業務妨害・強姦致死傷・強姦致死傷・死体遺棄・強盗・強姦・強姦致死傷・死体損壊遺棄・

強盗強姦致死・死体損壊遺棄・わいせつ目的略取・殺人・死体損壊遺棄・強姦致死傷・強姦致死傷

〈TR DB〉

データベースに記載されているレイエの犯歴を見て、氷は意識せずに目を細めた。目を細めるのは、おもに嫌悪感を感じたときの彼女の癖である。

「ごうかんちししようごうかんちししようしたいいきごうとうごうかんちししよう……」

男の犯歴をつらつらと音読しながら、氷はデータベースの〈現在位置〉の項を開いた。ディスプレイに、人工衛星によって撮られた、コガネシティの全景が写る。

拡大。拡大。……ノイズが激しいため、よく見えないが間違いなく、そこ写さ

れている男は——

真つ黒な長髪に、本能を剥き出しにした醜い顔の野獣。レイエ・ミャーライズ。

「捕まったら、死刑、確実ね……」

氷が眩く間に、男は見られているとも知らぬまま、アパート『ハゲンテイ』の一室へ入っていった。

携帯パソコンの電源を切ると、氷はおもむろに立ち上がり、壁に掛けてある時計を見る。やる。

午後6時58分 47秒。

窓の外を見ると、既に日は落ち、暗い闇が顔を出していた。

ホテルの外に出た氷の瞳に、消えかけの夕日、その光が差し込む。

眩しい……。眩しかった。はやく、この街が完全に闇に墮ちてしまえばいいのに……。

氷は、夕日とは全く逆の方向へと歩いていく。奴等の——そして、氷の——計画実行まで、あと3千と576秒に迫っていた。



リングマは、百合ゆかりに軽い嫉妬を覚えていた。それほどまでに、瑞穂とゆかりは意気投合していたのだ。

……だが、悪い気分ではなかった。むしろ楽しい。グライガーが仲間になったときと同じ気持ちに近い。

これまでの旅のこと、リングマのこと、グライガーのこと、大学時代の思い出……。

会話の最中、瑞穂もゆかりも、本当に楽しそうだった。つられてリングマも思わず笑顔になる程に。

「ところでな、お姉ちゃんは、なんで入院してるん？ 風邪やないんやろ？」

ゆかりは瑞穂に尋ねた。もう既に窓の外は真つ暗になっている。

「それはね……」

瑞穂は、パジャマのボタンを外して、平らな胸をさらけ出しながら言った。

「(こう)いうことなの」

瑞穂の白い胸、右胸には、一本の赤い筋が走っていた。それは傷跡。リングマとの決別の証……の筈だった傷跡だ。乳首は抉り取られており、みるからに痛々しい。

「あ……」

痛々しい傷跡をみて、ゆかりは顔をしかめた。

「痛そう……」

「ちよつとだけ、ね」

瑞穂は笑った。それを見て、ゆかりは不思議に思った。

……なんで、笑えるんや？ こんなに酷い傷やのに……。

「そんなに深い傷じゃないんだけど、黴菌が入っちゃったみたいだから、検査してもらおうと思つて」

「なあなあ。一体、どないして、そんな傷ついてもたん……？」

ゆかりはいつものまにか身を乗り出して訊いていた。この酷い傷の原因が知りたかったのだ。

「それは、ね……」

そう言うと、瑞穂はチラリとリングマを見やった。リングマは申し訳なさそうに俯いている。

「リンちゃん、と、喧嘩、しちゃった、の。それで、ね……」

……え……?!

途切れ途切れに話しながらも、瑞穂は顔に笑みを浮かべていた。

……なんで、笑えるん？ 悔しくないん？ なんて怒らへんの……？

押し黙ったままのゆかりを見て、瑞穂は心配になった。

「ユユちゃん。どうかしたの……？」

「え……？　な、なんでもないで」

瑞穂の一言で、我に返ったゆかりは、大きく頭を振った。

「そう、それならいいんだけど……。それと私、心臓が弱いから……。それも検査してもらおうと、ね」

「お姉ちゃん。心臓が……。弱いんか……」

瑞穂も、今度は笑っていなかった。笑えるはずがない。このことが彼女……。瑞穂の人生を大きく狂わせる事になったのだから。こんな体にならなかつたのなら、瑞穂は今、ここにはいなかったであろう。それは、それでいいのだが……。でも……。笑っていない瑞穂の、整った白い顔を見ながら、ゆかりは思い出していた。

……。どこか、似てる……。と。

「ところでさ、ユウちゃんは、どうしてこの病院にいるの？」

今度は、瑞穂がゆかりに訊ねる番だ。

ゆかりは「待ってました」とばかりに、ニヤリとして答えた。

「ウチな、もうすぐな、お姉ちゃんになんねん！」

「それって……。つまり」

「母さんな、もうすぐ、赤ちゃん産むねん。男の子なんや」

そう言うのと、ゆかりは満面の笑みを浮かべた。それを見て、瑞穂も思わず微笑んだ。



冷たい風が吹き荒れる中、アパート『ハゲンテイ』の前で、氷は立ち止まった。一息おいて見上げた寝待月は、へそ曲がりな黒雲によって、隠されてしまっている。

チツと舌打ちすると、氷は、拳を握りしめた。心の準備のために。ふと、思いついたように見やった腕時計は、きっかり7時58分を示していた。

ゆかりは瑞穂と別れた後、駆け足で、母のいる303番室へと急いでいた。

「あちゃく、すつかり、お姉ちゃんと話し込んでしもた……」

多少後悔はしたが、その分、楽しかった。瑞穂と話していると、なんだか懐かしい感じがしてくる。

……なんでやろ……。階段を駆け降りながら、ゆかりは思った。もしかしたら、こんな感じやったんかな。妹って。でも、ウチはもうすぐお姉ちゃんや。

303番室の前では、看護婦が急いでいる様子で、あたりを見回していた。

「あの……、どないしましたん？」と、ゆかりは訊いた。

「今まで、どこに行っていたの！」

看護婦はゆかりを見つけたとたん、強引にその手を引いて歩き出した。

「痛い！ なにすんの!？」

たまらず、ゆかりは叫んだ。看護婦はゆかりを睨み付けながら言った。

「弟くんが産まれそうだっていうのに、何言ってるの!？」

「えっ!？」

遠隔操作装置のボタンを押すと、テレビから、賑やかな音が聞こえてきた。

「ぐら……?？」

その音で、今までグースカと軒をたてて眠っていたグライガーが、目を覚ました。

「あ、グラちゃん。起こしちゃった？ ごめんね」

そう言うところ瑞穂は、遠隔操作装置を操って、テレビの音量を下げる。

テレビに映っているのは、民間放送局の低俗バラエティ番組『ハチャメチャ、ヤツてる』である。

どうやら今日は、特別に2時間枠で放送しているらしい。他にいい番組ないかな。などと思いつつ、チャンネルを入れ替えていると、国营放送のアニメで『剣道キャプター 柘榴』の再放送が始まろうとしているのを見つける。

これにしよう、と決めた。この一応表向きには少女向け、なアニメは、瑞穂のお気に入り番組なのだ。

ちなみに他に瑞穂が好きなアニメは『剣道一直線』『美少女剣士』など、やたら剣道に
関するものが多い。

ドキドキしながら、瑞穂は壁掛けの時計を見た。7時59分、54秒。

あと6秒。あとそれだけで、アニメの主題歌が始まる。

瑞穂は、テレビと時計を、交互に見つめた。あと3秒、2秒、1……。

バチンッ!

何かが弾ける音がある。それと同時に、コガネシティ全体が光の波で覆われた。そし
て次の瞬間、光の波はその姿を消した。代わりにやってきたのは、闇。

「キヤ……。ま、まっくら……。?!」

瑞穂は驚いた様子で辺りを見回した。もちろん何も、見えない。リングマと、グライ
ガーにも、緊張が走った。あたりから、悲鳴に似た叫び声が聞こえた。泣き声も聞こえ
た。怒鳴り声も聞こえてくる。

停電。

この出来事を一言で表せば、それだけで済む。しかし事態は、これで終わらなかつた。

「これは……。まだ、第一段階に過ぎない……。みたい」

レライエの住むアパートの部屋の前で、氷は独りで呟いた。そして部屋の扉を強く叩

いた。突然の出来事にパニックになっていたレイエが、部屋から飛び出してきた。

「いい……タイミング、ね」

「誰だ……？ テメエ……」

自分の胸よりも低い背丈の、色白の少女の微笑を前に、レイエは怪訝そうな顔をするしかなかった。



停電は、発生から10分後ピッタリに回復した。

それから数時間後の、午後10時42分。就寝時間直前に布団に潜り込んだ瑞穂は、ふと不審に思った。

「ここ、病院だよね。それじゃ停電しても、自家発電できる設備になってる筈なのに……なんで……」

ニュースでは、コガネシティの大停電については、原因不明としか報道されていない。

原因がどうであるにしろ、病院は停電するはずはないのだ。それなのに、なぜ……？
……どうしたの？……とでも言いたげな顔で、リングマは瑞穂の顔を覗き込んだ。考

えてるの。ポツリと瑞穂は独り言を呟いた。

「やっぱり変だよ……。病院が停電したら、大変な事になるのに……」

大変な事は、既に起こっていた。瑞穂の呟きから数秒も経たぬ間に、廊下から涙声の叫び声が聞こえてきたのだ。

「嫌や……。もう嫌やッ！」

そして走る足音。それは、段々と403番室へと近づいてくる。

……。どこかで聞いたことのある声……。

瑞穂がそう感じた瞬間、病室の扉がガチャンという音と共に、開いた。

「あ、ユユ……。ちゃん？」

開いた扉の向こうに立っていたのは、ゆかりだった。体中汗だくのまま、泣きはらし
ていると思われる真っ赤な瞳で、瑞穂を呆然と見つめている。普通ではないゆかりの状
態に、息を吞んでから瑞穂は訊いた。

「どうしたの……」

しんだ。しんで、しもうた。

「死んだ……。誰……。が？」

そんなことは、訊くまでもなかった。

信じたくなかった。

「よーたいきゅーへん、やて。ウチの目の前でな、めっちゃ……苦しそうに死んだんや」

「おかあさんも……亡くなったの……?。」

微動だにせず、ゆかりを見つめながら瑞穂は訊いた。ゆかりは、ゾンビのように首をぎこちなく縦に振った。その時、望が看護婦と一緒に、403番室に飛び込んできた。

「よかった……。突然、飛び出して行くから……。ずっとこの部屋にいたの?。」

そう言う望は、棒立ちになっているゆかりの肩に手を掛けた。

「サワラんといて!。」

そう叫ぶとゆかりは振り返り、いきり立ったように望の手を払い除けた。

「何が『よかった』や!。ちっともよかないワ!。この、人殺しッ!。」

「あ、その……。」

「やつぱり、そや……。医者はな、みんな人殺しや……。!。みんな人殺しなんやつ!。」

「そんな……。」

ゆかりにそう言われ、望はガクリと、その場に項垂れた。瑞穂は、ゆかりの剣幕に驚きながらも、声を掛ける。

「ユユちゃん。気持ちにはわからなくもないけど、お、落ち着こうよ……。ね?それにお医者

さんは、人殺しなんかじゃ、ないよ……。」

激しく床を踏みならし、腕を振り回しながら、ゆかりは叫き散らした。

「ウルサイ！だまつとけ！ 医者は人殺しやツ！ ひとつろしい……ひとつろしひとつろしいツ！」

怒りに歪むゆかりの目から、涙が流れた。透き通った綺麗な涙——だと、瑞穂は感じた。

みんな死んでしまえばええんや。ウチの事なんか、誰も本気で心配なんてしてくれへんもん……。

ゆかりは看護婦を突き飛ばすと、走り去っていった。涙を残して。



巡る抉る愁いの足音

このメスガキと会ってから、何時間が経過しただろうか……。レイエは自分の部屋で、血の涙を流していた。本能のみで行動するこの男に相應しい、本能の、体の痛みからくる涙を。

「いたい……？」

氷は笑っていた。冷たい瞳と口からのぞく白い歯が、レイエの体を恐怖で凍り付かせた。

「姉さんは、もつと傷ついていた……」

そう眩きながらも、本当に自分が今していることが、姉の為なのかはわからない。だから……。だから、こんな風に生きることしか、出来ないの？

そんな思いを振り払うかのように、氷は、『腕』の力を強めた。ギリギリと万力のように、腕はレイエの首にくい込んでいる。

レイエは呻いていた。血反吐を吐きながら、継るような目つきで氷を見つめた。助けにくれとでも言いたげな表情をしている。

「あの男も、こんな惨めな眼をしていた……。サミジマ、とか言っていた、ような……」

「サミジマ……。オマエ、サミジマを知ってるのか？」

殺したわ、私が。と、氷は微笑しながら答えてやった。レイエの唇は震えている。

「殺した……。サミジマは死んだ……。死体は？ それじゃ、死体はどうやって始末したんだ。沈めたのか？」

「そんな愉快なこと、しないわ」

再び氷の口から、白い歯が覗いた。牙のごとく鋭利に光っている。

手を離すと、レイエは床に尻餅をついた。アウツ！という痛みの声が漏れた。

どこだ……。どこだ?! 俺の左目。そうだよ、ヒダリメ、だよ。

抉り取られた左目を捜して、レイエは床を這い蹲った。ブツブツと謔言のように何かを呟きながら。

「バケモンだ……。こいつ、このガキ、バケモンだ。人間じゃねえ。人間じゃ……。助けて」

そうよ。私はある意味、人間じゃない。バケモノでも結構。

「でも、アナタも、にんげんデハナイワ……」

上げていた爪先を降ろした。ブチュという音と共に破裂し、生臭い液体が吹き出し

た。まずは目玉から。

レイアイエは恐れおののき仰け反った。「たすけて」そう顔に書いてある。

氷の腕は、レイアイエの体を舐め回すように撫でた。少しでも力を加えれば破裂するだろう。グチュツと。そう思うと、笑いがこみ上げてくる。堪えきれずに少し放出した。

「フフ……、アハハハハハハハハ……」

笑えるじゃない、私。今までずつと、我慢してきたのね。でも——

「こんな下品な笑いは、今夜限りにするわ」

殴った。吹き飛んだ。鮮血が。その度にレイアイエは命乞いした。そして私——氷は、それを笑い飛ばした。助けて、許して、お願いします、ごめんなさい、お許してください、助けて、助けて、助けて。

「イヤ」

その一言の度に、レイアイエの顔はグニヤリと歪んで、泣いた。私は笑った。

こんな事に意味があるの？ これは復讐なの？ ただの道楽？

そんな事はどうでもよかった。……待て、なんのために生きるかなんて関係ない？

——私、自分を見失っている？

汗だくになって、外に出た。後ろを振り向くと、口が張り裂け、四肢がラゴブロック

のようにバラバラな、男の屍が張り付けられている。

ここまでするもりは、なかつた筈なのに……。

「なにを……したの？ 私が？」

指先が震えていた。気持ちいを落ち着けるために空を見上げた。寝待月は、まだ黒雲に隠れている。

笑っていた。口先が自分でも信じられないくらい滑らかに動いていた。

何故？

これじゃあ……アイツラ、と……、大差ないじゃない。

怖くなった。自分は教育されていた、自分はしっかり学んでいたのだ。

全力で走り出した。運命には逆らえない、逆らえないなら……せめて——

私の人生を、こんなのにしたアイツラに、一矢報いたい。でもそれは、復讐とは名ばかりな『快樂』の追求ではないの？ あの女と——アイツラと同じなのではないの？



子宮破裂。

望の口から発せられた、ゆかりの母親の死因は、瑞穂の耳の中で反響していた。学生

時代に講義の後、望と「怖いよね、子宮が破けるなんて……。」と話し会ったため、よく覚えている。

（ウチが生まれるときな、もの凄い難産やったんやて。てーおーせつかい、つちゆうので生まれたんやもん。もしかしたら、ウチ、ここにおらへんかったかもしれないへん……）

そう言つて苦笑いしながら肩をすくめたゆかりを、瑞穂は思いだしていた。以前に帝王切開で分娩した場合、次回の分娩時に子宮破裂の恐れがあるのは、常識である。

（もちろん、産婦人科の先生は、そんなことわかってたよ……）と、望は弁明していた。

みるみる涙目になっていく望を、瑞穂は宥めることしかできなかつた。

（だけど、オペを始めようとした途端に、原因不明の停電が起きたらしいの。それで医療機器が……）

虚しく時間だけが過ぎていったというわけだ。そして、ゆかりの母も弟も、死んだ。

ゆかりを追いかけ、階段を駆け上りながら、瑞穂はつい先程の事を思い出している。

（私、どうしたらいい？ 私、なんにもできないよお……。どうしたらいい？ 瑞穂ちゃん、教えてよお）

そう言うのと、望は床に蹲り泣き始めた。瑞穂と同様、泣き虫な性格なのだ。

どうしたらいい……？　こんな時、私なら、どうする？

息が苦しくなるのを我慢しながら、瑞穂は自問した。

星は見えない。都会の闇の中では、雲でさえも嫌な性格になってしまふのだろうか。

コガネ中央病院の屋上で、ゆかりは遠い遠い地面を睨み付けていた。

落ちたら、痛いやらな……。でも、生きているよりはマシやろ……。

ゆかりは靴を脱いだ。そして、重力に身を任せた。

これで、楽になれるんや。ゆかりはそう思つて、眼を閉じようとした。

瞬！

なにかが、何ものかが、ゆかりの目の前を高速で通り過ぎた。

「な、なんやの!？」

それに驚き、ゆかりは後ろに仰け反つた。そして後ろに控えていたリングマに抱えられた。もしもリングマが、ゆかりを抱えていなかったならば、ゆかりは尻餅をついていたところである。

「危なかつたあ……。ナイスだったよ、グラちゃん！リンちゃん！」

苦しうに、ぜいぜいと息を荒げながら、瑞穂が屋上に駆けつけてきて言った。電光

石火を終えたグライガーと、ゆかりを抱いたままのリングマは、同時に瑞穂へ向けて、ガッツポーズをして見せた。

「放して……放してや……!」

リングマの腕の中でジタバタと藻掻くゆかりに、瑞穂は語りかけた。

「やめようよ……、ユウちゃん。そんなことしても、意味ないよ」

「あ、あんたらに、ウチの何がわかるねん! なんもわからへんやろ!」

叫き散らすゆかりに、我慢できなくなったのか、リングマはゆかりを軽く突き飛ばした。

……オマエこそ、僕たちの、姉さんの何を知ってるんだよ……?

と言いたげな顔で、ゆかりを睨み付けている。

「なにすんの……、痛い……。痛いやん」

涙でくしゃくしゃになった顔で、ゆかりはゆっくりと起きあがった。腕が震えている。数滴の涙がしたり落ちて、掌と地面を哀しみの色に染めていた。

「ここから落ちたら、もつと痛いんだよ……。それとリンちゃん、暴力はダメ」

そう言いながら瑞穂は、ゆかりの目の前に座り込んだ。ゆかりは俯いて、涙声で、ポツリポツリと呟いている。

「そんなん……、わかってる。でも、ウチどないしたらええの?」

「それは……」

瑞穂は口ごもった。そこまで考えてはいなかった。

「ウチには、もう誰もおらへんのや……。姉ちゃんは3年前に病院で死んだ。いりよーみす、やったかな……。よう覚えてへんけど……。それが原因で、こんどは父さんがア
ル中になつてもうて……。せーしん病院で暴行されて、死んだ……。ウチと、母さんの
2人きりになつて、こんどは母さんも弟ごと、死んでもうたんやで……。」

瑞穂は喉が灼けるような感じがした。明るく振る舞っていたゆかりに、そんな過去があるとは思わなかったのだ。

（医者だな、みんな人殺しやつー）と言った、ゆかりの気持ちだが、なんとなく分かるような気がした。今回の件はまだしも、ゆかりは家族全員を病院で『殺されて』いたのだから……。

「ウチ、どうやって生きていけばええの？ どうせ、施設に入ったら……」

殺される、と思っっているのだろう。そうでなくとも、この娘を施設に入れるのはあまりにも酷だ――

「でも、だから自分で、自分を殺しちゃうの……？ そんなの間違つてるよ」

ゆかりは震えながら頷いた。寒いのだろうと思い、瑞穂は羽織っていたコートをゆかりに着せた。

「ごめん……なさい……」

涙を手で拭いながら、ゆかりは言った。

「謝る必要なんかないよ」

そう言つて首を振つた瑞穂に、ゆかりは抱きついた。

「お姉ちゃん……、なんで、そんなにウチのこと、心配してくれるん？　他の人はみんな

言葉だけで、中身全然空っぽやったのに……」

「友達だから……。なんて言つたら、偽善者みたいだけど……。友達のこと、心配するの

はあたりまえなもの」

ゆかりの小さく弱々しい体を抱きしめながら、瑞穂は呟いた。

「友達だから……。か。友達やったら、胸を切り裂かれても、なんも文句いわへんの？」

「リンちゃんのこと？　それは、もう仲直りしたもの」

あつさりと瑞穂は答えた。

ゆかりは顔を上げて、瑞穂の顔を凝視した。そして、ふと思いついたように眼を見開く。

「やつと……。、思い出したわ」

「何が？」

「お姉ちゃん似てるねん、3年前に死んだ、ウチの姉ちゃんに。生きてれば、お姉ちゃん

くらしいの年やし」

そう言われて、瑞穂は3年前に死んだゆかりの姉を想像しようとした。

「あ、似てるのは、顔やなくて、雰囲気やで」

「雰囲気が……? 私の、雰囲気って、どんな?」

「そのトロ そうな雰囲気!」

ゆかりは無理矢理にでも笑った。瑞穂は心外そうな表情で言う。

「トロ そう、 って……。それは、あんまりだよお……」

「そうかなあ? 優しそうで、ウチは好きやで。」

ふう、と息をはくと、2人は見つめ合った。瑞穂は黒雲の晴れた後の、星空を見つめている。

「ねえ、ユユちゃん。私と一緒に行かない?」

「一緒に? お姉ちゃんのトレーナー修行の旅に? 足手まといにならへんの?」

瑞穂はゆつくりと首を横にふった。

「旅は、1人よりも2人、2人よりも3人、3人よりも4人で行った方が楽しいもの。ね?」

リングマとその肩に座っているグライガーは、同時に頷いた。

「どうする? ユユちゃん。一緒に行こうよ。旅にさ。辛いことも、苦しいこともあるか

もしれないけど、ついさっき気がついたんだ、そういうのも、また一興だ、ってね」

ゆかりはおもむろに立ち上がった。いつの間にか、すこし固ゆでではあるが、笑顔になっていた。だが、涙は流れ続けていた。悲しくもあり、嬉しくもあった。涙は揺れる。涙を振り切れるようになるまでには、まだ時間がかかるだろう。

それでも、泣いた後は、笑えなきや。どんなに時間がかかろうとも、いつか本当に笑える日を見つけないきや。ゆかりは思っていた。瑞穂と一緒にいれば、すぐにでも本当に笑える日が、戻ってくるのではないかと。

拳を夜空に振り上げて、ゆかりは大声を張り上げた。

「お姉ちゃん、ゲットやでー」と――



数日後、退院した瑞穂と望は、ゆかりの母の葬式に出向いた。

葬式の最中も、ずっとゆかりは泣いていた。ムリもない。しかし3年前の自分と比べて、ずっとしつかりしているな、と瑞穂は感心した。

「ごめんなさい、人殺し、なんて言うてしても……」

「謝らなければならぬのは、私の方よ。いくらなんでも無神経すぎたわ。ごめん」

望はそう言うと、ゆかりに何かを手渡した。それはモンスターボールだった。

「受け取って……、瑞穂ちゃんと一緒に旅にでるんでしょ？ 私からの餞別ポケモン、メタモンよ」

「私は……死んでも、葬式なんてしてもらえないわ……。」

目の前で行われている、だれかの葬式を眺めながら、氷は独り孤独に呟いた。

氷は悩んでいた。突然襲ってきた、あの感覚に。鮮血が迸ったときの、あのゾクゾク感、快感に。

そんな自分は嫌だ……。しかし、自分で自分を抑えきれない。その内、『あの自分』は、本当の自分を越えてしまうかもしれない。

それでも、続けるのか——？

復讐を。



まだ誰も知らない。この3人の少女に、運命の足音が近づいていることを。その足音が、悲劇の繰り返しに兆しであることすらも。

そして、運命は冷酷に、非情に、少女達の内に秘められた『愁い』を抉りだすことに

なるのだ
—



#4 狂気。

月卿雲客

『見よ、悔る者たちよ。驚け、そして滅び去れ。

私は、あなたがたの時代に一つの事をする。

それは、人がどんなに説明して聞かせても、

あなたがたのとうてい信じないような事なのである。』(『新約聖書 使徒行伝』)



ここは、どこだろう。

ただ一つ解るのは、ここが私の本来いるべき場所であるということ、だけだ。

少し前から私は、自分が普通ではないことに気付いていた。普通ではなく、特殊なのだけど……。それが私にとってプラスになるのか、マイナスになるのかは、よく解らない。突然、頭が痛くなって、体中が熱くなって……。そして意味不明な声が聞こえてく

るのだ。

(前方、47*68確認。攻撃開始。技、選択。……4。はっぱカッター。発射準備、完了。発射……。)

なにがなんだか解らない……。なにがなんだか解らなくなって、気がついたら、とても疲労しているのだ。

私の隣には、彼がいた。息をふうふうとはきながら、どこかを見つめている。

彼は、最近になって、私と一緒に行動することが多くなった。そして彼も、私と同じで、普通ではない、特殊だった。

彼を監察していて、解ったことが一つある。私と彼は、ご主人様に利用されている、ということ――

苦手な小鳥ポケモンの囀りが聞こえる。ざわざわと、風で木々の擦れる、心地よい音が聞こえる。分厚い葉っぱの天井から、少しだけ、一筋の太陽光が差し込んでくる。

気持ちがいい。

やはり私は、本来ここで住むべきなのだ。そう、この森で。

「リリイ、ライム……、調子はどうか？」

私と彼から数メートル離れた場所で、ご主人様は訊いた。ご主人様の言葉の、細かいところまではよく解らないが、今までの経験で大体の意味は理解できるつもりだ。リ

リイというのが私の名前。ライムというのが彼の名前。調子はどうか？、というのは、私と彼の健康状態もしくはは精神状態の善し悪しを訊いているのだろう。

私はいつもと同じように、ちよこんと頷いた。それが、体調は良好、という意志表示なのだ。彼も、私と同様に頷いている。

ご主人様は、口元に微笑を浮かべながら言った。

「そうか、それなら、行くがいい……、開始だ」

重そうなコートのポケットから何かを取り出したご主人様は、その何かに向かって喋った。

「そして、滅び去れ……」

ご主人様が、普段『キーワード』と呼んでいる、その言葉。意味が分からない……。その言葉に、なんの意味があるのだろうか……。私には理解できない。

ご主人様の手の中にある何かが、赤々と輝き始めた。嫌な輝きだと、いつも思う。

頭が痛くなってきた。体が熱い。……特殊な者のみが起こす「発作」の前触れ。体を震わせ、必死に「発作」に抵抗しようと試む私は、チラリと隣にいる彼を見やった。

彼も私と同様に「発作」を起こしている。体をうねって、体をブルブル震わせて……。

頭が……頭が割れそうに痛いよ。ご主人様、助けて。

目の前にある風景が、幻のような風景になり、ウネウネと波打つ。

痛い。頭が砕けちゃうよ。壊れる？ 痛い……痛いんだってば……。声だよ……。いつもの……、いつものあの声が聞こえてきた……。怖いよ……。

『前方263m。感知。反応物、不明。接近』

私は走り出した。全速力で、全速力を超えて、全速力を遙かに超えて……。燃えるように体が熱い。砕けるように頭が痛い。

死ぬ……？ 私、このままじゃ……。死ぬ。



「なあ、お姉ちゃん。そろそろ休憩しようやあ〜」

ゆかりは瑞穂に疲れた様子で訴えた。

膝はガクガク、かかとはギシギシ、喉はカラカラ、お腹はぺこぺこ。もう体力の限界だ！と言わんばかりに、近くにあつた切り株に腰掛けている。

「そうだね……そろそろ、休憩しようか」

そう言つて瑞穂も切り株に腰掛けた。しかし本当の所、別段瑞穂は疲れているわけではない。故郷から旅だつて3ヶ月、それなりに鍛えられた瑞穂の足腰は、この程度では

疲れることを知らないのだ。

だが、ゆかりは旅を始めてたったの3日。疲れるのもムリはない。

ゴクゴクと水筒の水を飲む、ゆかりの横顔を眺めながら、むしろ瑞穂は凄いと思った。3ヶ月前の自分だったなら、この時点で既に疲労で倒れて、病院へ逆戻りだろう。コガネっ娘ならではのタフさだなあ、と瑞穂は少しだけ羨ましく思った。

沢山の草木が生い茂るウバメの森は、昼でも夜のように薄暗い。それもその筈。木々の葉が、降り注ぐ太陽の光を、独り占めしてしまうからだ。風で葉と葉が擦れて、ザワザワという、森林特有のBGMが常に流れている。小鳥ポケモンの囀りは、さながらサウンドエフェクト、といったところだろうか。

瑞穂とゆかりは、ヒワダタウンを目指して、ウバメの森を横切っている最中なのだ。

「はい、お姉ちゃん」

水を飲み終えたゆかりは、そう言って水筒を瑞穂に手渡す。ありがとう、と言って水筒を受け取る瑞穂の白い頬を見つめながら、ゆかりは訊いてみた。

「なあ、お姉ちゃん」

「ん？　なあに？」

「やつぱりウチ、足手まといやろ？　お姉ちゃん、ホンマは休憩せんでも大丈夫なんやろ

「？」

水を飲もうとしていた瑞穂の手が、ピタリと止まった。困ったような顔をしながら、ゆかりの方を向いている。そして、躊躇いがちに瑞穂は言った。

「ホントは、別に休憩しなくても、私は大丈夫なだけど……」

「やつぱり、ウチ、足手まといやよね……」

ゆかりがしよげ込むのを見て、瑞穂は首をゆっくりと横にふった。

「そんなことないよ。逆に凄いなと思う。私なんかよりも、全然タフな体してるもの」

そう言われて、ゆかりは自分の体、全身をまじまじと見つめた。細く、華奢な瑞穂の足とは対照的に、ゆかりの足はとても丈夫そうである。

「まあ、タフいうたら、タフやけど……」

「そのうち、慣れるよ。ユウちゃんも、コガネっ娘だもん」

「あ、でも、ウチ、元々はトキワシテイに住んでたんやで。2年くらい前にコガネに引越したんや」

瑞穂は意外そうな顔をして、ゆかりの言葉に耳を傾けている。その割にはコガネ弁が上手だな、と感じた。どう聴いても、何年もコガネシテイに住んでいたとは思えなかった。

水筒をしまうと、瑞穂は背伸びをしてからリユックを漁った。

「ちよつと早いけどさ、ついだから、お昼ご飯にしよう」

「さんせい！ ウチ、歩きすぎてお腹ぺこぺこやったんや」

ゆかりはスカスカになってお腹を、やんわりとさすりながら言った。

朝、森にはいる前にコンビニで買った弁当は、リュックサックの中に入れていた筈だ。

あれ？

ガサゴソとリュックを漁る瑞穂の顔が、段々と蒼白に近くなつていくのを、ゆかりは見た。

「お姉ちゃん？」

そう言われて、瑞穂は今にも泣き出しそうな顔を、ゆかりに向けた。向けた、とはいもの、その瞳はもはや焦点を失っている。

重ねて、ゆかりは訊いた。

「どないしたん？」

「ない」

「はあ?!」

「忘れた」

「お弁当を？」

「トイレに……、行ったとき、汚いと思って……お弁当だけ、出してたの……。たぶん、その時に……」

涙目を擦りながら、瑞穂は茫然自失のまま言った。

「今、食べ物は何？」

「なっしんぐ」と、瑞穂は、両手をふりふりしながら答えた。

ゆかりは頭が真つ白な何かに浸食されるのを、確実に感じていた。続いて、真つ青な何かが。最後は、真つ赤な溶岩だ。

「お、お、お……」

真つ赤な溶岩のせいで、上手く言葉が出てこない。瑞穂は、ただただその言葉を待っているかのように、座り込んでしまっている。

「お、お姉ちゃんの、アホッツ!!」

ゆかりの絶叫は、ウバメの森全体に響きわたった。



なに？ 今の音……。

私はゆつくりと起きあがった。気絶していたんだと思う。そうだ、気を失っていたん

だ――

頭の痛みは消えていた。顔がなんだか冷たい。火照った顔に水を浴びせているよう
な……。

起きた？

私は突然の声に驚いて、辺りを見回した。この森の中心部に位置する湖、ウバメ湖。透き通るような美しい水。太陽光が水に鏡のように反射して、薄暗い森を照らしている。湖の底にある、もう一つの太陽……。そんな表現がよく似合った。

彼女……。そこにいたのは彼女だった。光り輝くウバメ湖のほとりに、彼女は立って、こちらを見つめていた。くりくりつとした瞳に、つやつやの肌をしている。その顔からつくり出される微笑みは、同じ女性である私のものとは明らかに違っていた。

心の底から温もりが伝わってくるような、優しい微笑みだった。

大丈夫だった……。？ 突然倒れてるから、ビックリしちゃった。

彼女はそう言うのと、私のすぐ隣に座った。

私は彼女に訊いた。あなたが、助けてくれたの？と。

チラリとこちらを見やって、彼女は頷いた。そうだよ……。、と言いながら。

なぜ……？

あなた、私と同じみたいだもの。

私の問いに、彼女はそう答えた。

たしかに、私とあなたは同じ生き物よね。でも、だからといって助ける義理は……。

あるよ。

彼女は私の言葉を途中で遮ると、立ち上がった。

『困ったときはお互い様』って、昔おじいちゃんが教えてくれたの。

そう言った彼女は、私に湖の透き通った水を差しだした。

飲めば、すぐ元気になるよ。と彼女は言う。

ありがとう。

私は礼を言い、水を飲み干した。体の中が洗われるようだ。

彼女はこちらの方を向くと、興味津々な顔で訊ねた。

あなたは、この森の集落の出身じゃないよね。どこから来たの？

解らない。私はそれだけ言った。

わから……ない？と、彼女は聞き返す。

そう、解らない。私が何処から来たのか。私は何処で生まれたのか。

私の父や母は誰なのか、何処にいるのか。私は何ものなのか……。何も解らない。

ふと横を見ると、彼女は黙ったまま、こちらを見つめている。

かわいそう……。彼女は悲しそうな瞳をしながら呟いた。

あなた、とつてもかわいそう、と。

そうね。そう答えるので精一杯だった。一步、私に詰め寄ると、彼女は言った。

ねえ、私の集落で——私の仲間達と、一緒に暮らさない？

あなたと、一緒に？

私は息を呑んだ。私と、一緒に暮らす……。仲間達と？——仲間。その言葉が、私の

心の奥に、痛いほどに響いていた。

そうだよ、みんな歓迎するはずだよ。いこう！ 私の集落に！ と言って彼女ははしやいだ。

そんな彼女の言葉を聞きながら、私は、悪くない、と思っていた。

同じ仲間同士……。ヘンテコなご主人様や、カタブツな彼と一緒に生きるよりは……。

ずっと、ずっと楽しいはずだ。

ずっと、ずっと楽しい……。

ずっと、ずっと……。



広い広いウバメの森を歩きながら、ゆかりはため息混じりに言った。

「人はパンのみに生きるのではない……かあ。でも、今はパンがなければ生きられないい……」

「パンが無くて、ご飯があれば生きられるよ」

ゆかりの悲痛な言葉を聞いて、瑞穂はゆつくりと応える。そんな瑞穂を見て、ゆかりはムツとした表情で言い返した。

「んなこと言うても、今はパンもご飯もなんにも食べ物、食べられるもの、なんにも、かんに、ないやんか！」

「ごめん……」

ゆかりの睨み付けられ、瑞穂はシユンと俯いた。

午後2時30分。お昼のご飯、ランチャタイムはとつくの前に済んでいなければいけない時間だ。だが、瑞穂が弁当をウバメの森前のトイレに忘れてしまったため、ランチャタイムも、ただの休憩時間と化していた。

せつかくの楽しみにしてたランチャタイムが、中止。

ゆかりのお腹は真空状態、瑞穂の心は重荷がドツサリ。

どうにも、こうにも、食べ物がない……。

ゆかりは、リングゴの芯でも食うで！とばかりに、真空状態の腹をさすりながら、辺りを見回している。

お芋の煮込みうどんが食べたい……、なんて思ってたられない。

私のせいで、ユユちゃんがお腹をすかしている……。心の重荷が、瑞穂には辛かった。

そんなわけだから、まさに損なわけで。無駄金使ったゆかりと、落ち込んだ瑞穂の足取りは、次第に遅くなる。いつしか立っているのか歩いているのか、わからないくらいになっちゃった。

ゆかりは、まだお腹をさすっている。溜息をつくとき、掠れるような声で、嫌味を言っているかのように、暗く呟いた。

「ウチは、お弁当は、いつつも残さず食べとったんやで……」

だから、なんなのかな？と訊きたいのを、瑞穂はグツと堪えた。非が自分にあるのは明白だったからだ。第一そんなことで怒るのもバカげているではないか。

そもそも『そう言うのも、また一興だ』と言ったからには、それを実践しなければならぬまい。

こういうのも、楽しいし。でも、少しだけ辛い……かな？ あ、少しだけ、じゃないかも……。

「ほんとに……ごめん」

すこしばかり暗く、悲しそうな声色で瑞穂は言った。突然そんな口調で謝られても、ゆかりは困つてしまふばかりだ。

枯れ葉が一枚、瑞穂とゆかりの間に落ちて、カサリと音をたてた。

こうやって、ワガママ言つて、いつの間にか相手になれなくなるんだ。ゆかりは、指先をもじもじとさせながら、瑞穂の様子を伺つた。自分も、言い過ぎたことを謝ればいいのだ。だが、こつ恥ずかしくてなかなか謝れない。そうしている内に本当に謝りたいと思つても謝れなくなるのだ。

ゆかりの姉は、もう、この世にいない。姉が病院の事故だったかミスだったかで死んでから、ゆかりにはワガママを言つて甘えることのできる人がいなくなつた。

父は、姉の死のショックから立ち直れず飲んだくれになり、母といえ、いつの間にかそんな父の言いなりになつてしまつていた。

(ごめんね。父さんがあだから……、ゆかりには、かまつてあげられないの……)

もう数年前になるだろう、母の言葉が、つい先程のことのように浮かんだ。公園での1人遊びを始めるようになったのはその頃からだったろうか。学校での友達は、ゆかりの性格が明るいためか沢山いた。だが、遊ぶときはいつも1人、孤独だった。友達といると、『甘え』が出てしまふかもしれない……。子供ながらにそんな危惧を抱いていたの

だ。そんなわけだから、父が精神病院に入院すると聞いて、ゆかりは小躍りをしたほど嬉しかった。しかし、父がすぐさま精神病院での暴行事件で死に、母は知らぬ間に妊娠していた。そして勝手に死んだ。

誰にも甘える暇はなく、ゆかりはここまで来てしまったのだ。

ゆかりは考えていた。それなのに、なんで今、こんなに落ち着くんやろう……、と。答えは、簡単な事だった。『お姉さん』は、すぐ隣にいるではないか。

「お姉ちゃん。これからは気をつけてな……」

すこし申し訳ないような感じで、ゆかりは言い。瑞穂はそれに答えた。

「うん」

「あ、ちよつち言い過ぎたかな、って思ってる……。ウチ、ワガママ、やろか……？」

「それでもないよ」

「ホンマに？」

「ホントホント。それに前にも言ったでしょ？　こういうのも、また一興だ、って」

瑞穂は顔をあげ、森の新鮮な空気を肺一杯に吸い込んだ。こうすると、怒りも悲しみも、負の感情が全て洗い流されるように感じる。瑞穂の真似をして、ゆかりも大きく息を吸い込んだ。

ふわふわ、とした甘い香りが、ゆかりの鼻の粘膜、そして胃袋さえも刺激した。

「なあ、お姉ちゃん……」

「なあに？」

先程とはうってかわり、さすががしきさえ感じられる瑞穂の顔が、ゆかりに向いた。

不思議そうな表情をしながら、ゆかりは訊いた。

「お姉ちゃん、香水とか使ってるん？」

「ううん」瑞穂は首を振った。「私みたいなコドモが、香水なんかつけないよ」

「おしゃまやと思われるもんな」

「そうだね。」瑞穂は微笑したようだ。口元が緩んでいる。「でも、どうして、そんなこと訊くの？」

「なんや、甘い香りがすんねん。この香り、胃に響くわあ……」

そう言われて、瑞穂は眼を閉じ、鼻をヒクつかせた。確かにこの香り、どこかで嗅いだことのある香りだ。どこかで……。

別に懐かしいというわけではない。いつか頻繁に嗅いでいた香りだ。

「確かに……、いい匂い……」

「やろ？ 胃、胃に響くう……」

ザッ！そんな音がして瑞穂が目を開くと、そこにゆかりはいなかった。

「ゆ、ユウちゃん?!」

ゆかりは走っていた。香りのする方向へ。

「どこいくの?」

「気になるやんか、香りの正体」

「ああ、それは……」

答えを言う前に、ゆかりは茂みの中へと踏み込んでいってしまった。ご丁寧「お姉ちゃんも、はよ、おいでやく!」と言ってくれている。

「ふう……」

瑞穂はため息をついたが、それはどこか楽しげだった。一人っ子である瑞穂は、なんだか突然、妹ができたみたいなの錯覚をおこしていた。

家族を失ったもの同士、気が合うだけかもしれないが……。

「私、半袖にハーフパンツなんだけど……」

あの、その格好でこの茂みを通るの?

「痛そう」

ご苦労様です。

三月庭訓

なによこれ。

集落を前に、彼女は涙混じりの上擦った声で、そう呟いた。

私が彼女を見つめると、彼女の唇は震え、そして怯えているように見える。

彼女は放心の面持ちで呟いた。なに？ 何が起こったの……？と。

私は答えなかった。

なんとなくではあるが、目の前の風景の意味を理解していたにも関わらずに、だ。

酸っぱいような臭いが辺りにたちこめている。木々に阻まれ、それから逃れられた僅かな日光は、これでもか、とばかりに現実を照らし出していた。

現実とは、常に残酷な物なのかもしれない。いや、残酷が現実なのだ。そんな残酷——という名の現実——に耐えきれない者が選ぶ路、すなわち逃避行動が、狂気をうむのだ。

狂気を持たないと思われている者でも、見えない狂気を隠している。

プライドは十分に狂気に成りうるし、テレビアニメに映っている架空の美少女、もしくは黄色く愛らしい架空の生き物を見ながら「萌え萌え〜」などとホザいている人間も、

間違いなく狂気に侵されている。

全く愚かなことだ。架空の創造物に心を奪われるとは……。

そんな人間は、本来社会的に抹殺されるのだが、この社会全体が狂気を帯びている今、何も社会には望めない。

だからこの世界は狂気に溢れている。

そして強すぎるイデオロギーも、また狂気と成りうる。

……私は、そんな人間の持つ『狂気』から生まれたのかもしれない。

間違いない、私は、あの男のイデオロギーから生み出された『狂気』なのだ。

ツクラレタ、狂気。

なんなの、これ。何があったのよ。誰か……、返事をして。へんじを……へんじして……よお。

そんな彼女の言葉もまた、狂気に侵され始めている。

彼女は何かを呟きながら、一歩前へ歩みでた。

シヤリ、という、葉っぱの心地よい音色も、彼女の耳には届いていない。

私も彼女の隣に進み出た。彼女の横顔は艶があり美しかった。恐怖が全面に表れていることを除けば。

現実、正面を向くのと同時に再び、私の前面に飛び込んでくる。

なに、簡単な事だ。

『みんな死んでいた』

それだけだ。ただ、それだけだ。

これが現実なのだ、残酷なのだ。それに耐えられない人間は、抹殺されるべきなのだ。それをあの男が拒むが故に、私が生み出された。

愚かだ。愚かすぎる。なぜ逃げる、なぜ隠れる、なぜだ……。

こんな事をする必要が何処にある！

ど、どうしたの……？と、彼女は怯えながら、私に訊いた。

なんでもない、と答え、私は彼女の顔を見つめた。

間違いない、よ……。

なにが、何が『間違いない』の？

彼女の小さな眩きを、私は聞き逃さなかった。

私の問いに、彼女は薄暗く湿った空を仰ぎ見た。

『朱と蒼の死神』……ただの噂だと思ってた。でも、本当にいるなんて……。

恐怖からだろうか、彼女は私に寄り添い、話し始めた。

この数日ね、遠出した仲間が、沢山、斬り殺されているのが見つかっているの……。

赤い剣を持っているのと、青くて目にも止まらない速さで動くのが、別々に目撃され

ていて、

集落のみんなは、『朱と蒼の死神』って、呼んで恐がってた……。

私は信じてなかったけど、と彼女は付け加えた。

つまり、この有様は、その死神のせいだって言いたいわけね？

私がそう言うと、彼女は小刻みに頷いた。

そうとしか、考えられないよ。こんな非道い、こんな……。

彼女はそう言つて泣き崩れた。嗚咽が凄惨な元集落に響く。

たしかに、非道い。50程の命が、こうもあつけなく切り刻まれているのだ。

これから、どうしよう。

傷心の彼女を連れて、私は生きていけるのだろうか？

私は、泣き狂う彼女を前に、呆然とそんなことを考えていた。

一瞬にして全ての仲間を惨殺されて失った、哀れな彼女の事を……。

しかし、それは杞憂に終わった。

彼女の泣き声は、鋭い音に掻き消された。彼女は何にも逆らわぬまま、地面に倒れた。私が驚く間もなく、彼女の体は、横に綺麗な切り口で真つ二つに裂けた。

ビュババ、シユウウウ……。

ヌルヌルとして透明な彼女の体液が、私の顔を濡らした。酸っぱい臭いが鼻を覆つ

た。彼女は、最期の言葉を、私に聞かせてくれた。

私の体……どこに、いったの？

彼女は、事切れた。艶やかで綺麗な彼女の顔は、もはやただの亡骸の頭になっていた。その死相は、現実には耐えきれずに、狂ったように歪んでいた。それでも、せめてものの救いは、彼女が痛みを感じずに死ねたということだろう。

誰が殺った……？

私は反射的に、彼女の死骸の周りを見回した。

オマエか。

私は言った。その先には、彼が立って身構えている。

オマエが彼女を殺ったのか。

再び私が彼に訊くと、彼はこういった。

これが運命だ、と。

運命だと……？ あの男に良いように利用されるのが運命なのか？

ご主人様を、侮辱するな。

彼は赤い剣を突き立て、私を睨み付けた。

これでいいのか？

私は叫んだ。あの男のしようとしていることがオマエには解っているはずだ。こん

なことをして、なんになるんだ

彼は高く跳び上がり、私に言った。?!

俺だけは、生き残る、と……。俺は『ライム』だから。生き残る運命にあるから、と……。生き残って、やらなければならぬことがあるから、と……。

彼の瞳がみるみる赤みを帯びていく。彼の体の色と同じ、血の色に。

私は彼の発作を感じ取った。このままでは、殺される。私は逃げようとした。だが、発作状態の彼のスピードについていけないはずがなかった。

『朱の死神』の剣は『蒼の死神』の脳天を突き抜けた。

死神の正体に今更気がついて、なんの意味もないではないか……。

ザクリ、という音と共に、私の視界は闇に消えた。

私の体液が、薄暗い森に吹き出した。

いつかどこかで見たとような、透き通った色をしている。

それは同じ味がした、彼女の体液と。

「やったな……ライム。お前が最強だ」

ライムの主人は、倒れているリイを見下ろしながら言った。シワだらけの、その顔は、どこか笑みを浮かべているようにも見える。

「こいつは使える。私の計画に、ピッタリだ……」

男はライムを連れて、足早に薄暗い森から立ち去っていった。



ウバメの森は、ジョウト地方のなかでも、かなりの広さを誇る森である。

そんな広い森に、幼い子供がポツンと一人、切り株に座っていた。

子供の名前はツクシ。一応これでも、ヒワダジムのジムリーダーである。たとえ子供であろうとも、この国では実力さえあれば、ジムリーダーにでもなれるのである。事実、ツクシはヒワダタウンで一番の、ポケモントレーナーなのだ。

切り株に腰掛けながら、ツクシはツナマヨネーズのサンドイッチが入った包みを開いていた。

「やつぱりサンドイッチは、ツナマヨにかぎるよ。あ、いい匂い」

サンドイッチから、パンのほのかな香りと、ツナの芳ばしい香りが漂ってきた。ゴクリと唾を飲み込むと、ツクシはサンドイッチを手に取り、口に運んだ。

「うん、おいしい」

もぐもぐと口を動かしながら、ツクシは呟く。

(おいしいに)

（決まってる、です）

（なんと言っても）

（私達がつくったから、です）

ふとツクシの耳に、双子ちゃんのリミとクミの声が聞こえたような気がした。彼女らは、ツクシが森に行くのと知って、朝の5時から準備して、このお弁当を作ってくれたのだ。

「そうだね」

誰もいないのを知っていながら、ツクシは森に笑いかけた。

その微笑みに答えるかのように、緩やかな風が吹き、森は騒めく。その風に運ばれるように、木々の間から、バタフリーが飛んできた。

ツクシは飛んできたバタフリーに目をやり、話しかけた。

「どう？バタフリー。なにか見つかった？」

「フリー、フリフリユウ、フリー」

バタフリーは、ゆっくりと首を横にふる。ツクシは残念そうにため息をつきながら言った。

「そう……、やっぱり見つからなかったんだ……」

その時だ。

ガサガサと、森の木々が激しく騒ぎ始めた。風ではない。風が原因ではなく、もっと直接的な要因ではないか。それは、段々と近づいてくる。そう、すぐ近く。

すぐさまツクシとバタフリーは、身を屈めながら、小さな声で言った。

「何かが、近づいてくる。バタフリー、用心して」

音をたてないように頷くと、バタフリーはツクシにすり寄った。

ガサガサ。

既に『何か』は、目の前にいてもおかしくない程の至近距離にいるはずだ。ツクシとバタフリーは、いつでもその『何か』に飛びかかれるような姿勢をとった。

ガサツ!

『何か』は茂みから勢いよく飛び出してきた。

あり……?!

誰?この子?

茂みから飛び出してきたのは、ツクシの予想とは異なっていた。

女の子。ツクシよりもいくらか年下の、活発そうな女の子だ。オレンジ色のトレーナーに、オーバーオール。小さなポニーテールが、頭から角のように生えている。

「キミ……誰?」

「あんたこそ、だれなん?」

お互いが静止しているところへ、もう一人、女の子が茂みから飛び出してきた。

先程の女の子とは違い、どちらかといえば、おとなしそうな印象を受けた。青いポロシャツに、茶色のハーフパンツ。煌めくような水色の髪が、ツインテールになっており、ちよこなんと左右から垂れている。

「はあ、やっと追いついた……」

「キミ……誰？」

ツクシは凍り付いたまま、先程と全く同じ質問を繰り返した。

はつとした様子で、おとなしそうな女の子が答えた。

「あ、はじめまして。瑞穂っていいです。あの……あなたは？」

「ツクシ……だけど。で、そっちは？」

「ウチはゆかり。あ、そや、お姉ちゃん、この辺りからやで香りがでとるんは……」

「たぶん、そのバタフリーの『甘い香り』だと思うよ」

半ば呆れた様子で、瑞穂はゆかりに言った。

自分の名前を言われて、バタフリーはじろじろと瑞穂を見つめた。

もつと早く言っておけばよかった、と瑞穂は後悔していた。そうしておけば、こんな所まで走ってくる必要などなかったのだから。幸いだったのは、茂みが全て、シオレナグサだったことだ。そうでなかったなら、瑞穂の足のきめ細かい肌は、ズタズタになっ

ていただろう。

「バターフリーが、どうかしたの？」

自分のバターフリーが話題となり、気になったツクシは訊いてみた。

「あ、なんでもない、こつちのことだから……」

「あゝッ!!」

ゆかりの大声が、突然辺り一面に響いて、瑞穂の言葉を掻き消した。

いい加減、その大声には瑞穂もウンザリしてくる。耳が痛い。

「どうしたの?」

困ったような顔する瑞穂と、驚いたような表情のツクシは、同時に訊いた。

「おいしそう」

うつろな眼で、ゆかりはツクシの膝元にあるサンドイッチの弁当箱を見つめている。

食いしばった口元からは、いまにもヨダレがこぼれ落ちそうだ。

「ほんとだ……おいしそう」

瑞穂までも、ゆらゆら揺れながら、サンドイッチに視線がいつている。

あ、ヨダレが。

たらたらたら……。

「ねえ」ツクシは、呆然とそんな2人を眺めた。「まだ沢山あるからさ、よかつたら……」

ゆかりも瑞穂も、2人とも、ツクシのその言葉を待っていた。
「食べる……？」



雲心月性

『この民に行つて言え、

あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。

見るには見るが、決して認めない。』(『新約聖書 使徒行伝』)



夕焼け空は、何者にも平等だ。平等に紅く染まり、平等に眩しい。しかし、彼らは紅く染まりはするが、眩しくはない。

不平等だ。

しかたがない、彼らは命が尽きているのだから。

不公平だ。

目の前に転がっている、真つ二つとなつた彼女と、今ここに立つてそれを眺めている私。同じ命なのに、同じ生き物なのに、なぜ私だけが助かったのだろう。

傷は痛むが、それほど苦しくはない。どうせ『発作』が始まれば、痛みなど全く感じ

ないのだから。

なぜ、私と彼は『発作』を起こすのだろうか。そして元主人の手元の機械から発せられた、怪しい赤い光……。

解らないことは沢山あった。

あの男は、一体何がしたいんだ……。人間という生き物は、自分の許容を超えるモノに対して、どこまでも残酷になれる。それが狂気。……狂気を持つ人間は、心が驚くほど小さな『臆病者』なのかもしれない。

では、あの男は、狂気を持つ破壊の力を、何処へ向けようとしているんだ……。なんのために……。

頭が痛い。

また……。また発作？

ハア、ハア、ハア、ハア……。

苦しい。

瞳が夕焼け色に染まっている自分が、そこにいた。

私は、どこかへ走り出した。どこへ……。いくの？



「女の子が2人だけで、こんな薄暗い森を歩くのは危険だよ。どうせボクも明日にはヒワダの町に帰るから、一緒に行かない？」

ツクシがそう言ってくれたときは、正直、瑞穂は嬉しく思った。別に、この森が怖いというわけではない。暗い森には慣れている。正確には、その後続く言葉が、瑞穂とゆかりを喜ばせたのだ。

「食料の事は心配しなくていいよ。いざというときのために、大目に持ってきてあるから」

あらかじめ買っておいた食料全てを、瑞穂は34番道路のトイレに忘れてしまっているのだ。

ただ、……タダ食いやからちよつと、気が引けるけど……。

「もちろん、その分のお金はしっかり払うから……」

瑞穂のその言葉を聞いたとたん、ゆかりはビックリ仰天、驚いた。その後すぐに開かれた、ヒソヒソ論争は、当然といえば当然だが、瑞穂に軍配が上がった。

……もちろん、ウソやろ？

……ウソなんて、つくわけないじゃない。

……ホンマに払うん？ ……もちろん。

「せっかく、タダやったのに……」

夕暮れ時、ゆかりは、まだブツブツと文句を言っている。そんなゆかりを全く無視して、瑞穂は薪に使えそうな木を捜して歩いていった。

空は鮮やかで気味悪いぐらいのオレンジ色に染まっている。小鳥ポケモンは、もう自分の巣へと帰ってしまったのだろうか、気配すらない。

「あ、丁度いい木、発見」

そう言つて、瑞穂は指を前方に指しだした。瑞穂の指さした先には、薪にするのにピッタリな、細い雑木がはえている。

「でも、お姉ちゃん。こんな木、どないして切るんや?」

ふくれっ面のまま、ゆかりは訊いた。どうやら、先程のことが、いまだに不服らしい。

「それなら大丈夫」

そう瑞穂は答えると、腰から二つモンスターボールを取り出して宙へ放り投げた。

「出てきて、リンちゃん、グラちゃん」

パシユという音と共に、リングマとグライガーがモンスターボールから飛び出してきた。2匹を見比べて、瑞穂は言った。

「リンちゃん、グラちゃん。お願い、この木をさ、この位の大きさに切つて欲しいんだ」

身振り手振りで、言いたいことを伝えようとする瑞穂に、リングマとグライガーは、こくと頷いた。早速、リングマはグオオと吠えながら、鋭い爪で木を次々と切り刻んでいく。

ザクザクザクツ！　みるみる内に雑木は原型を失っていく。

「凄い……」

瑞穂とゆかりは、呆然とリングマの仕事を眺めている。

あの時、もしかしたら私、真つ二つになつてたかも……。瑞穂の背中を冷たい汗が流れた。

が、しかしそれとは対照的に、グライガーの仕事は欠伸が出るほど遅い。

もちろん、グライガーはグライガーなりに一生懸命やってくれているのだが、懸命にやっているとかいうのとは、それ以前の問題で……。斬れないのだ、木が。手のハサミを何度振り下ろしても、木には少しばかり傷が付くだけ……。これでは斬れるはずがない。

グライガーは落ち込み、その場に座り込んでしまった。枯れ葉がパリパリと音をたてた。

「あ、グラちゃん……」

すっかり悄げ込んでしまったグライガーを見て、瑞穂は声を掛けた。

「リンちゃん、ちよつと……」

「ガウ？」

呼ばれて、絶好調、得意満面のリングマは瑞穂の方を振り向いた。

……どうしたの？、と顔に書いてある。

「アレ、作ってくれる？」

お安い御用だよ、と言わんばかりにリングマは木を削り、すぐさまソレを作り上げた。

「なんやの？」ゆかりは、瑞穂に手渡されたソレを見て首を傾げた「木刀、みたいやけど

……」

「そう、木刀だよ」

簡易製作木刀を手に握った瑞穂は、グライガーに目で、ちよつと見てて、と合図をした。

「いい？いいよ」

「いく、つて……なにすんの？」

ゆかりの問いには答えず、瑞穂は木刀を目にも止まらぬ速さで振った。

シユツ……、という音が一瞬だけ聞こえた。

その、あまりの素早さに、ゆかりとグライガーは息を呑んだ。気のせいだろうか、振つた瞬間、剣先が蒼白く光つたようにも見えたのだ。

ゆかりもグライガーもただただ、啞然とする中で、リングマだけはニヤリと笑っている。

「……で……」ようやくゆかりの口から言葉が発せられた「だから、どうなん?」

木刀を振つてから数秒経つても、瑞穂にも木刀にも変化はない。グライガーも同じ気持ちらしく、……だからどうした……?という気持ちであらわにしている。

「すぐにわかるよ」

瑞穂はそう言つて、リングマと顔を見合わせ、笑つた。ますます意味が分からない。

ギシッ!

突然、雑木の一本に亀裂が入つた。

ギシギシギシッ……、と音をたて、口をアングリと開けたままのゆかりとグライガーの目の前に、ドスッ! という音響をたてながら、雑木は倒れた。

雑木の切り口は、糸鋸で斬つたかのように、滑らかである。

「これ……お姉ちゃんが斬つたん?」

数秒の後、信じられない、といった顔で、ゆかりは瑞穂に訊いた。

グライガーに至っては、なにがなんだか解らずに、ひきつった笑みを浮かべている。

「うん。……影蘭流剣術、奥義『鎌鼬（かまいたち）』っていう技なの。この技はね、風……つまり空気を利用してモノを斬ることができる、っていう理論を元に独自に考案された技なんだ。空気を利用するから、力のない私や、グラちゃんでもできる筈だよ」「お姉ちゃん、なんでそんな技を……」

「あ、私ね、剣道が趣味なんだ。前に言わなかったっけ？」

ハア……。ため息をつき、ゆかりは疲れた様子で、隣にいる筈のグライガーを見やった。しかしグライガーは、もう、そこにはいなかった。

グライガーは、瑞穂に飛びついていった。

……ねえ、どうやったら今の技、できるの……？　そう訊いているように見える。

「それはね……」瑞穂は笑いを堪えているようだ「練習あるのみ、だよ」



朔。

これまで毎日、闇夜を切り裂いてきた月も、2、3日の休養が必要らしい。気色の悪

い夕日が落ちて、何時間ほど経過しただろうか。

や……。

やめて……。

(やめて……ください)

少女は懇願した。しかし、アイツはけたたましく笑って、少女をその場に引き倒した。

(ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……)

少女は涙を流しながら懇願した。アイツは耳が張り裂けそうなほどの大声で笑った。

アイツは少女の背中を踏みつけた。少女は涙まみれの呻きを発した。

ストン、と目の前に、少女の目の前に、小さな黄色い何かが落ちてきた。

(ああ、ああ……) 少女は恐怖からか、身を縮ませた(やめて……)

バチン！電撃が発せられ、少女は5 m程弾け飛んだ。痛みからか、のたうちまわる少女の腹に、アイツは容赦なく蹴りをいれた。

(ゲフツ……ううう……) 少女は口から血を吐いた。痙攣を起こしているように身を震わせて、怯えるような目つきで、相手を見つめた。

後頭部を踏みつけられた。グシャ、という音と共に、少女の幼くも美しい顔が、四散

した。

バキバキツ。少女の前歯は、粉々に砕け、血涙と混じり口から流れ出た。

(やめて……)

アイツは動くこともままならぬ少女の頬を、思い切り蹴り飛ばした。

バギ、と顎の骨が、へし折れる音が聞こえた。

それが悪夢であると認識するには、長い時間を要した。氷は、横になりながら、星すらも輝かぬ闇夜の空を睨み付けている。

今日は新月であり、月は見えない。

たとえ、さっきのが夢であつたとしても『現実にあつた、過去』を拭い去ることはできないのだ。あれは夢でない。自分の過去が、時を超えて夢という形で再現されたものなのだ。

時を司る森の神さまも、ずいぶんと意地悪なことをしてくれる、と氷は思った。現在よりも、氷は過去を恐れていた。違う、過去を憎んでいるのだ。

氷の表情は崩れない。だが、少女の全身には、冷たい汗が流れていた。

「姉さん……」と氷は闇に呟いた。鋭利で静かな普段とは違った、悲しそうな涙声だった。

「ねえさん……、わたし、どうしよう……。もう戻れないよ、だって……。わたし、人殺し

になつちやた……。」

闇しか映っていない瞳から、不覚にも一筋の涙が流れ落ちた。

私らしくもない、涙なんて……、と氷は細く白い腕で目を擦った。

……死にたいと思ったときも、どうしようもなく苦しかったときも、姉はいつも慰めてくれた。姉がいなかったなら、支えてくれなかったなら、私は、もう死んでいる。

しかし、その姉は、もう現世にはいない。過去の記憶として、おぼろげな状態でのみしか存在しない。

そう思うと、余計に悲しくなった。

悲しくない、悲しくなんてない。まだ夢を見ている、まだ夢から覚めていないだけ。

氷は、そう自分に言い聞かせた。

辺りは凍りつきそうなほどに、静まり返っている。どこからか、いい匂いが漂ってきた。旅人が、この森でキャンプでもしているのだろうか。

「ダメね、煮込みすぎて素材の味が台無し……」

そう呟いて氷は目を閉じた。今の自分には、料理を作っても食べてくれる人がいない。もしかしたら、そんな現実を直視したくないだけなのかもしれない。

ふと思いついて、目を閉じたまま、氷は自分の首筋を優しく撫でた。首筋には、普通に見ただけでは気付かないような、小さな刻印がなされている。

えす。える。すらっしゅ。えいち。えす。えふ。にじゅうさん。はいふん。ぜろ。
えす。かつこ。わい。

『sl/Hsf23-0s(y)』と刻まれている。

ふう、と氷は息をはいた。

この小さな刻印が、自分の命であり、自分の力でもあるのだ。

「私は……」と、氷は言いかけた。その時だった。

ガサツ。

すぐ側の茂みから、物音が聞こえた。氷は起きあがり、目を光らせた。

ガサツ。

茂みから飛び出してきたのは、青い、一匹のナゾノクサだった。しかし、普通のナゾノクサではなかった。頭には刃物で斬られたような傷があり、そして――

瞳は赤々、ギラギラと光っていた。

狂っている、と氷は直感した。

急いで立ち上がろうと氷が体を動かすと、ナゾノクサは頭からはっぱカッターを飛ばした。

ザシユ、シユウウウ……。

はっぱカッターは、氷の肩にグサリと突き刺さった。肩から血が吹き出た。

「ク……、なに、突然……」

そう呟くと同時に、氷は腕でナゾノクサを殴りつけた。ナゾノクサは数メートル程飛ばされ、木にぶつかりその場に倒れた。呻きを上げると同時に、ナゾノクサの頭の傷跡から、体液がドビュツと飛び出した。

起きあがり、冷たく自分を睨み付けている氷をにらみ返すと、ナゾノクサは突然、毒の粉を振りまいた。毒の粉は辺りに一帯に散乱し、ナゾノクサの姿を包み隠す。

「逃げる、つもり、ね……」

氷の言葉通り、毒の粉が消える頃には、ナゾノクサはその姿を消していた。

なんだったのだろう、今のは。

氷は再び横になり、目を閉じた。少なくとも、肩の傷が癒えるまでは、安静にしていなければならぬ。

ヒワダタウンへは、明日の夜までに着けばいい。

今は、時が経つのを待つだけだ。

そう、今は。



羞花閉月

ウバメ湖に沈む、もう一つの太陽も、本当の太陽が沈むと共に姿を消した。ツクシ達は、森の命の源でもある、この綺麗な湖の畔にテントを張ることにしたのだ。

空は黒い闇に覆われたが、この薪の火が消えるには、まだ早い。

辺りは、ぼんやりと薄く明るく、光っている。

「きれいな、水海だね」

得意料理であるカレーの鍋を掻き回しながら、瑞穂は目の前に広がる湖に心奪われていた。リングマは、瑞穂の言葉に頷きながら、瑞穂の背中を眺めている。

抱いたら、気持ちいいんだろうな……、そんな言葉が、リングマの脳裏に浮かんだ。

そして、自分がヒメグマの時は、何度となく一緒にベッドで眠っていたことを思い出した。

その時は何も感じなかったのに……。

でも今なら、なんだか知らないけれど、何かを感じることが出来る。いや、感じたい。

突然、リングマの胸が、激しく鼓動した。体全体が熱くなって、汗が噴き出してくる。

なに変なこと考えてるんだろう、ボクは……、と頭の中の妄想を必死で振り払おうと藻掻いた。

しかし、モヤモヤとした妄想は、ドンドンとリングマの頭で膨らんでいく。我慢できないよ。

荒い息づかいのまま、リングマは瑞穂の無防備な肩に、手を掛けようとした。

「どうしたの?」

気配を察したのか、瑞穂は手を休めて、リングマの方を振り向いた。リングマは驚いて、イタズラが見つかった子供ののように、身を縮ませた。

「リンちゃん?」 瑞穂は首を傾げた。「なんか、変だよ」

小さく首を振って、なんでもないよ、という意志表示の後、リングマは言った。

「ガウガウ、グアウ、ガウガウガウガア……」

ボク、何も変なこと考えてないよ。ボク、変なことは何もしようとしてないよ。ボク、別に、姉さんを、その、あの、じゃなくて……、だから……。

「ごめん。なんて言いたいのか、よくわからないよ」

もし瑞穂が、リングマの言葉の意味を解していたなら、逆に怪しまれたかもしれない。瑞穂は、しばらくの間、狼狽えるリングマの顔を眺めていたが、ふと思いついて辺りを

見渡した。

「あ、そうだ……」

リングマは、瑞穂の注意がよそへ行き、ホツとした様子で、どうしたの？と訊いた。

「グラちゃん、どこにいるんだろう。もうすぐご飯できるのに……」

— そういえば、先程からグラライガーの姿を見かけない。辺りを見回しても、グラライガーの姿は、どこにもなかった。

「どないしたん？ 2人とも」

瑞穂とリングマが辺りを見回しているところで、メタモンを腕に抱えながら歩いてきたゆかりが声を掛けた。ゆかりのメタモン、その名もメタりんはいつの間にか、すっかりゆかりと仲良しになっていたのだ。

瑞穂はメタモンと戯れ合っているゆかりの方を向いて訊いた。

「ねえ、ユウちゃん。グラちゃん、どこにいるか知らない？」

「えくと」ゆかりは、湖とは正反対の方角を指さした。「あっちの方で、なんかやつとつたで」

「なんか、つて、なにしてたの？」

「ほら、夕方に、お姉ちゃんがやつとつたやつやん。なんて言うたかな……、あの」

「影蘭流剣術奥義、鎌鼬、のこと？」

瑞穂のその言葉に、ゆかりはポンと手を叩いた。

「そや！ その、カマドウマってやつや」

「かまいたち、なんだけど……」

「どつちでもええやん。かまどうまでも、かまいたちでも」

それもそうだと瑞穂は思った。この際、技の名前など、どうでもいいのだ。

「ユユちゃん、これお願い」

そう言うのと、瑞穂はゆかりにカレー番を頼んで、駆け出した。

「おねえちゃん、どこいくん？」

「グラちゃんを呼んでくる」

瑞穂が走り去ってしまうと、ゆかりはカレーを強引にかき混ぜながら呟いた。

「お姉ちゃんも、大変やな」

……姉さんの『大変』の、4分の1くらいは、キミのせいだけどね……。

リングマはほくそ笑み、ゆかりに目を向けた。

ゆかりの肩に乗っているメタモンは楽しそうに、ゆかりと戯れ合っている。

「メタりん、今日は一緒に寝よか？」

ゆかりにそう言われて、メタモンは嬉しそうに飛び跳ねた。

……羨ましいな。

無意識にリングマは思った。

ボクだつて……、

姉さんと……、

戯れ合いたいし、一緒にベッドで眠りたい。

それができないのは、リングマにも解っていた。もし瑞穂とリングマが、昔と同じように一緒にベッドで眠つたとしたら、リングマが大きすぎて、瑞穂がベッドから落ちてしまいかもしれないし、寝返りでもリングマが打とうものなら、瑞穂は、プチツという、なんとも可愛らしい音をたてて潰れてしまいかもしれない。戯れ合うにしても、気がついたら瑞穂の体が雑巾のようにネジれてた、なんて恐ろしいことになりかねない。

ボクは、なんのために進化したんだろう……。

姉さんを守るため？　姉さんにバトルで勝つて欲しいから？

……解らない。

リングマは逃げるようにゆかりとメタモンから目線をそらし、湖を眺めた。

(わあ……暖かい……。ありがとう、リンちゃん)

数日前に、初めて瑞穂を抱いた時の感触を、リングマは思い出ししていた。そういえばボク、姉さんに抱かれたことはあっても、姉さんを抱いたことは一度しかないや。

(私さ、ダメトレーナーなんだ……。私が悪いの……全部)

昔のボクを抱きながら、泣きながら姉さんはそう言っていたつけ。そうじゃ、ない。

違うよ。

姉さんは、ダメトレーナーなんかじゃない。

そう思つて、気付いたら、ボクの姿形は変わっていた。でも、今も昔も変わっていないことが一つだけある。

ちよつと恥ずかしいけど、ボクが、姉さんを好きなこと――

リングマは、赤らめた顔で、月のない夜空を見上げた。

……あの日は、満月だったつけ……。



なんどやつても上手くいかない。

どんなに工夫をしても、成功しない。

おいらの技は、どこがいけないんだろう……。

グライガーの自慢のハサミは、摩擦で既にボロボロになっていた。痛くないはずがない。『かまいたち』を成功させようとするあまりに、グライガーは焦りすぎているのだ。

なんとしてでも、一刻も早く、かまいたちを会得しようとする気持ちで一杯なのだ。

……おいらが、かまいたちを覚えたら、みずほちゃんはきつと誉めてくれる、喜んでくれる……。

誉めてくれる、誉めてくれる、誉めてくれるはずだ。きつと……。

腕が痛いにもかかわらず、笑みさえ浮かべながら、グライガーは深く深呼吸をした。息を整え、目を閉じて、空気の流れを皮膚で感じ取る。

そして腕のハサミを思い切り振る。空気を裂く、乾いた音。

目を開いて、前方の杉を睨み付ける。しかし……、何も起こらない。また失敗だ。ハア……と軽いため息をつくと、またグライガーは深呼吸をした。

再び、息を整え、目を閉じて、空気の流れを……。

「ごはんだよ。グラちゃん」

背後から自分を呼ぶ声に、すぐさまグライガーは、目を開けてから振り向いた。瑞穂が、はあはあと荒い息をしながら、こちらを見つめている。

「グリアー！」

了解！の返事と同時に、グライガーは瑞穂の肩に飛び乗った。

「鎌鼬の練習してたんだった？」

帰り道、歩きながら瑞穂はグライガーに訊いた。

「ぐら、ぐらい」

……ちよつと、ぐらいは……。

そうなんだ、と瑞穂は呟くと、グライガーの方を見やった。グライガーのハサミは傷だらけで、血が滲んでいる。瑞穂はそれを見た途端、あつ、と声をあげ、息を呑んだ。

「グラちゃん、ケガしてる……。そこまで頑張ることないのに……」

まるで自分がケガをしたかのような表情で瑞穂は言った。

クライガーは首を左右に振った。……頑張る！ たくさん、たくさん、頑張るの！

「そう……」瑞穂は感心したような顔をした。「あとで、傷治しのクリーム塗ってあげるね」

それを聞いて、グライガーは楽しそうに飛び跳ねた。瑞穂はニコリとしながら、グライガーの頭を撫でた。

「それだけ元気なら大丈夫だね」

「グウ〜ライ、ガア〜！」

……おいらは元気だけが、取り柄だもん……。

ケラケラと笑うグライガーを見ながら、ふと瑞穂の表情が曇った。

「でも……、そんなにすぐ鎌鼬はできないと思うよ」

「ぐらい？」

……なんで……？

「私はできるまでに、丸々4年もかかったの。リンちゃんは、もう練習して5年目だけど、いまだにできないみたいだし……。焦らない方がいいよ」

……みずほちゃん、わかってないなあ。

リン君でもできないんだ、って……。だから、挑戦のしがいがあるってものなのにさ。

漆黒の月を背に、グライガーは高らかに笑って見せた。

「グラ……ちゃん？」

その笑いの意味が分からず、瑞穂は首を傾げるばかりだ。

「グライガー〜！」

……絶対、成功させてみせるぜ……！！



一步、足を前に出すごとに、体のあちこちが悲鳴をあげる。頭の傷からは、なおもヌルヌルとした体液が流れ続け、締めつけられたように苦しい。耐えられない。これ以上、体を酷使すれば間違いない、私の命は尽きる。

いつもと同じで、発作の最中の記憶はなかった。

私は、いつから、どこで、なにを、いつまで……。それらが、すつぽりと抜け落ちて
いるのだ。

荒い息をしながら、私はそばにあった杉の木にもたれ、空を見上げた。頼みの綱である月も、今日は黒く、いつもの眩いばかりの光はない。

朦朧とする意識の中、ゴゴゴゴ、という音が聞こえてきた。

ついに幻聴か……？ それとも私の頭が、とうとう体と離れる時が来たのか？

しかし、そのどちらでもなかった。

離れたのは、私の頭と体ではなく、今、私がもたれかかっている杉の木の幹と根であった。

ズドンという音を響かせ倒れた杉の木を見つめながら、私は呆然と立ちつくしている。
る。

なにが、あった……？

私は震える足を堪えながら、辺りを見回した。誰もいない。何者の気配もない。そんな
なおかしなことがあるのだろうか……。

突然、木が真つ二つになるなんてことが……。普通では、ありえないことだ。理由として
考えられることは、ただ一つ。

あらかじめ……、この木は真つ二つだったということ……？

誰が？ さんのためにそんなことを？

まったく、今日という日は、解らないことだらけだ。

私は、横倒しになっている杉の幹を跳び越え、再び歩き始めた。いつまでも、ここにいるわけにはいかない。この森の生命を切り尽くさねないからだ。

このまま私は傷を負ったまま、アテのない旅を続けなければならないのだろうか……。

いつそ、あの彼女と同じように死ねたら、どれほど楽なことだろうか……。

しばらく歩いて……、どれだけ歩いたのかは見当もつかないほど歩いた。疲れ切り、もう頭には思考の欠片すら見当たらない。

遠くに、光りが見えた。明るく、柔らかな光が広がっているように見える。その奥に広がっているのは、湖だ……。そう、彼女と私が出会った、あの湖。

そこに人間が見えた。いっぴき、にひき……。全部で三匹いる。

その中で、人間の一つが、こちらに、私に気がついたのか、こちらの方を見つめている。

女の子だ。水色の艶やかな髪を、左右で束ねており、年齢は7、8歳といったところか。柔らかな光りに、その白く滑らかな肌が照らし出されている。

ひどく驚いた表情で、女の子は立ち上がり、こちらに近づいてきた。

その時、突然、目眩が私を襲った。視界が波打っているのが自分でもわかる。倒れな
いようにと踏ん張ると、頭から半透明な体液が激しく吹き出した。

刻々と目の前が歪んでいく。女の子の幼く可愛らしい顔も、それに合わせて歪んだ。

近づいてくる。

女の子よりも早く、冷たく泥臭い地面が。

ドス、と音が聞こえたと同時に、私の意識は闇に溶けこんでいく。

キヤ……、という、女の子の凍った悲鳴だけが、耳にこびりついた。



光風霽月

『また、上では、天に奇跡を見せ、

下では、地にしるしを、

すなわち、血と火とたちこめる煙とを、

見せるであろう。

主の大きいなる輝かしい日が来る前に、

日は闇に

月は血に変わるであろう。』（『新約聖書 使徒行伝』）



包帯を巻かれたナゾノクサは、疲労からか、ぐつぐつと眠っている。頭の傷は深く、放っておけば命すらも危うい状態だったが、幸いなことに、瑞穂の適切な応急処置によつて一命を取り留めていた。

「どうしたんだろ……このナゾノクサ。こんな酷いケガして、なにがあったんだらう」

寝入っているナゾノクサを見つめながら、瑞穂は呟いた。ゆかりも、瑞穂の言葉に頷いている

「なんや、刃物なんかで、斬られたような傷やね」

「うん。傷痕から見て、かなり大きくて鋭いもの……だと思う。少なくとも事故とかじゃなくて、誰かに斬りつけられたんじゃないかな……」

瑞穂はナゾノクサから目をそらし、ゆかりとツクシを見つめた。

「それって……」ツクシは、俯いていた顔を上げた。「例えば、どんな刃物なのか……？」

訊かれて、少し考えているような仕種の後、瑞穂は口を開いた。

「鎌……かな」

「カマ……？」

ゆかりとツクシは驚きの声をあげた。瑞穂は真面目な顔で、小さく頷く。

「そう、鎌。大鎌と言った方が正しいかもしれないけど……。この切り口や、深さから見たら、たぶん剣みたいな真つ直ぐな刃じゃなくて、すこし普通とは違う、曲がったような刃物だと思えないの……」

「でも誰が、そんな……」ゆかりは悲しそうに俯いた。「こんな非道いことしたんやろ」

「そこまでは、わからないよ……」

そう言うところ、悲しい気持ちを落ち着けるため、牛乳コーヒーを一口啜った。しかし、こんな気分では、何を飲んでも苦いと感じない。

許せない。たとえどんな理由があろうとも、ナゾノクサにここまで酷い傷を負わせた、その張本人は絶対に許せない。一体、誰の仕業なんだろう……、と瑞穂は心の中で問うた。

「人間がやったん……ちやうかな？」

ふと、ゆかりは顔を上げ、凍りついたような表情で呟いた。それを聞いて、瑞穂もツクシも、同じく凍りついたかのように、動きを止めた。

「人間がやった……って、どういう意味？」

ツクシは、ゆかりの顔を正面から見据えながら、訝しげに訊いた。

「その、まんまの意味やん。……そう言うたら、この森、炭職人がよく木を切りにくる場所やろ？ もしかしたら、仕事の邪魔になるからいうて、ナゾノクサを……」

「あの人達は、そんな事、絶対にしない」

熱り立ったように、ツクシは拳を切り株に叩きつけた。そのあまりの剣幕に驚いて、瑞穂は手に持っていたカップを落としてしまった。地面に突っ伏したカップの中から、黒々とした牛乳コーヒーが流れ出る。

「あ、やだ……」ぼしちやった」

瑞穂は土のついたカップを拾い上げ、ゆかりとツクシを見やった。

ツクシはしばらくの間、ゆかりを睨んでいたが、ふと目線を外して項垂れた。

「ごめん。つい興奮しちゃって。……でも、キミの言うことは違う。あの人は、炭職人の人達は、ポケモンが好きだ。だから、あんな事は絶対にしない」

「それに、炭職人の人なら、大鎌なんか使わないと思うよ」

そう瑞穂は付け加えると、ゆかりの肩に手を添える。突然に怒鳴られたためか、ゆかりの眼には涙が浮かんでいた。

「怒鳴ら、なくても……、ええやん……」

今にも泣きそうな声で一言だけ発すると、ゆかりは湖の方へとそっぽを向いた。湖は涙の色や、とゆかりは苦し紛れに考えた。

嫌な雰囲気になっちゃた……と、瑞穂は背中から汗がでるのを感じた。そのためか、瑞穂はできるだけだけ明るい声を出した。

「なにかのポケモンにやられた、とは考えられないかな……?」
「………というところ?」

「嫌みたいなのを持っているポケモンは、何種類かいるでしょ? 例えば、ストライクとか、カブトプスとか、ハッサムとか……グライガーとか」

途端、グライガーのモンスターボールがピクンと震えた。

……おいら、何か悪いことした……?」

中のグライガーが問いかけているような、感じがする。瑞穂は、モンスターボールを軽くさすつて、グライガーの問いかけに応えた。

「あ……、もちろん私のグラちゃんは、そんな悪いことはしないけど」

「たしかにポケモンかもしれない。だけど、この森には、そんな大型のポケモンはいないよ。考えられるとしたら、パラスだけど……。パラスじゃ、あんな大きな傷にはならない」

「トレーナーのポケモンかもしれへんやん」

瑞穂とツクシの2人が考え込んでいるところへ、ゆかりが振り向き、口をはさんだ。

ゆかりはツクシの顔を睨みながら、……。どや、ウチもなかなか賢いやろ……。?というような表情をしている。どうやら、ゆかりは、意地でも自分の思いつきを正解にしたいようだ。

「でも、トレーナーが、ここまでするかな……。?」

ゆかりの顔が落胆に沈んだ。お姉ちゃんは、ウチの味方やないの?という寂しげな顔で、ゆかりは眼を背けた。

思わず胸が詰まるのを感じながら、瑞穂は続けた。

「それに、このナゾノクサは、私が近寄っても全然逃げようとしなかった。人間のせいでも傷ついたのなら、その時、逃げるなり、攻撃したりするはずだよ。だから、むしろ人間には、慣れてるんじゃないかな」

「つまり、このナゾノクサは、トレーナーのポケモン、っていうこと？」

「そこまではわからないけど。野生のナゾノクサじゃないと思う」

突如、あくじれつたい！とばかりに、ゆかりは立ち上がり大声で捲し立てた。

「だからッ！ 誰がナゾノクサを傷つけたんか、って訊いてるんや！ 野生とか、トレー

ナーのポケモンとか、関係ないやん！」

「少なくとも、人間のせいじゃない、ってことは確かだけどね」

ツクシがそう言うと、ゆかりは面白くなさそうに腰掛けた。

んなこと、わかっとなるわ……、とばかりにフンと鼻息をたてて吐き捨てた。

「どうせ、ウチはアホや」

「そんなに言わなくても……」

瑞穂は頭が痛くなるのを感じながら、声を掛けるも、ゆかりはそっぽを向いたまま答ええない。困り果てた様子で、瑞穂はツクシの方をみやった。

ツクシは微動だにせず、何かを考えているように見える。

何を、考えているんだろう……、瑞穂は薪の炎に照らされ映る、ツクシの頬を眺めた。

しばらくして、ツクシは瑞穂の顔を見やった。

どうしたの？というような表情をする瑞穂の瞳は、透き通った栗梅色をしていた。



目が覚めた。

静かに起きあがると、隣には女の子の白い顔が見える。

頭の傷は痛むが、先程よりはだいぶマシになった。

体中が、白い布で覆われている。包帯と呼ばれるものであろうか。

また、私は他人に助けられてしまった。今、自分が生きていることの安堵よりも、後悔の念が先に私を襲った。

このままではいけない。このままでは、この女の子達を巻き込んでしまう。

そう、彼女のように……。

「あ、目が覚めた？」

私に気付いて、女の子は振り向き、声を掛けてきた。

あの時と同じだ。

「……だから町の人達は、その赤い目をした生き物を『紅の刃と蒼い風』と呼んでいたんだ」

女の子の後ろでは、男の子が何かを話している。その言葉に、女の子は振り向いた。

「『紅の刃と蒼い風』……?」

「うん、数日前から、この森に出没して、人を襲うんだ。なんの前触れもなくね。町の人には『森の神様の化身』とかなんとか言って、森に近づかなくなっちゃったんだ。でも炭職人の人は、それだと生活ができないでしょう? 無理して森に入って、危ない目にあってる人もいる。だから炭職人の人達に頼まれて、調査のためにボクが、この森にやってきたんだ」

「……そうだったんだ」

「でも今日一日、探しても、見つけることはできなかったけど」

すると、男の子の隣に腰掛けている、別の女の子が振り向いた。額に青筋を立てながら、苦い表情をしており、怒っているように見える。

「で、そのなんたら刃となんたらの風、とやらは、このナゾノクサとなんか関係あるんか?」

「断定はできないけど、刃か風のどちらかに襲われたんじゃないかと思うんだ」

「ホンマか？ それ……」

「だから……」

「なんでや、おかしいんちゃうの？」

「あのねえ……」

2人のチグハグな会話に呆れたように、青髪の女の子はこちらを振り向いた。飲んでね、おいしいよ、とレイシの実のスープを差し出すと、女の子は私の頬を撫でた。一見、冷たそうに見えた、白い手は、暖かく、柔らかい。

そして、女の子は微笑んだ。

騒がしくて、ごめんね。傷、痛む？

私は首を小さく振った。痛くないわけではなかったが、余計な心配を掛けるわけにはいかない。

「このスープ、私がつくったの、熱いから気をつけてね」

言われるままに、私はレイシの実のスープを、一口啜った。

まずい。

味付けが極めて粗雑な上に、過ぎたるは猶及ばざるが如し、煮込みすぎて、素材の味も歯ごたえもあったものではない。一生懸命つくってくれたものであることはよく解るのだが、これはあんまりだ。この女の子は余程、料理のセンスがないのであろう。

スープの鍋の横には、カレーの鍋が置かれている。鍋は、相当にひどい焦げた臭いを発していた。カレーも同様に、煮込みすぎて、カレールーが焦げてしまっているのだ。

後ろで稚児のごとき言い争いをしている男の子と女の子は、このカレーを食べてしまったせいで、気分が悪くなってしまったのではないであろうか……？

「どお？ おいしい？」

私は、ぎこちなく頷くしかなかった。女の子を騙すのには気が引けるが、正直に首を振って、落胆させてしまうよりはいいだろう。

「だから、なんでそうやって、決めつけんねん！」

「なんで、そんなに怒るの……？」

「あんたが……、いきなり怒鳴るからやん……」

「それとこれとは……」

「関係、大アリや」

背中を繰り返される問答に呆れているのか、女の子は、頬をポリポリとかいた。

ホントにごめんね、騒がしくて。

そう言う女の子は、2人の方を振り向いた。

「ねえ、2人とも……、少し静かにしてくれないかな……。ナゾちゃん、ケガしてるんだ

よっ。」

……ナゾちゃん?
なんなのだろう!?

私の、新しい名前……?

(ねえ、私の集落で一緒に暮らさない?)

彼女の言葉が、私の脳裏をよぎった。いけない。やっぱり、このままではいけない。私は独りで生きなければならぬ。この女の子達まで、巻き添えにするわけにはいかない。

(そうだよ、みんな歓迎するはずだよ)

確かに、私は歓迎された。死体の山に。死臭は歓声だった。

呼んでいる。おいで、お嬢さん、あんたはもう、普通に生きることができない。だから、こっちにくるんだよ、と……。

(何があつたのよ。誰か……、返事をして。へんじを……へんじして……よお)

聞こえたはずだ。黄泉からの、返事が。

体が引き裂かれようとも、その時までには生きていたはずだ。

そして、訊いたのだ。

(私の体……どこに、いったの?)

どこにもない。彼女が纏うべき『体』は、もう使いものにならなくなっていたはずだ。この女の子にも、そんな苦しみを味わせろというのか？　できないよ、そんなこと。

「どこか、痛むの……？」

私の異変に気がつき、女の子は私に手をさしのべようとした。しかし、私はその手を払い除け、高く遠くに跳び上がった。

「ナゾちゃん……!?!」

女の子は驚き、ストーンと地面に着地した私を見つめた。言い争いをしてきた2人も、何事かとこちらを見やっている。

体が、煮立つような熱さに包まれ始めた。足腰は痙攣を起こしている。

「ナゾちゃん……、どうしたの……」

そう言いながら、女の子はこちらに近づいてくる。

くるな。こつちにくるな……。

湖の水面には、私の顔が映り込んでいた。眼が、眼が赤い……。

私は恐怖に近いモノを感じた。

「発作」が始まろうとしている。

このままでは、この女の子達が……。

「ねえ、ナゾちゃん？」

くるな……!

私は、女の子から逃げるように駆け出した。

しかし、女の子達は私を追いかけてくる。くるな、くるな、くるな……。

私よ、逃げ切ってくれ。

せめて、私が、私でいるうちに……。

死臭が近づいてくる。黄泉からの歓声が、再び聞こえてきた。



水月鏡像

この異臭に、嘘偽りはない。

ウバメ湖から遠く離れた、森の深部は紛れもなく、沢山の死骸に埋もれていた。辺りには酸っぱいような異臭と、腐敗臭が漂っている。

今日が新月だったのは、幸いだった。そうでなければ、月の光は容赦なく、その惨状をあますところなく照らしていただろう。

瑞穂は吐き気を堪えながら、辺りを見回した。

「非道い……ひどいよ……」

足下にも、幾重もの死骸が折り重なるようにして放置されている。その中の一つを手に取り、蒼白な顔をしながら、瑞穂は観察した。

頭部に外傷がひとつ。一太刀で頭から口元まで裂けており、その傷痕からは透明で異臭を発する液体が流れ出た。

「お……お姉ちゃん……怖い……」

酷く怯えた様子で、ゆかりは瑞穂の服の裾を引っ張った。

「見ない方がいいよ……」

ゆかりは、すぐさま瑞穂に胸に抱きついた。震えている。7歳の女の子にはあまりにも強烈な光景なのだから無理もない。

瑞穂はゆかりを抱きながら、亡骸をゆつくりと地面へと戻した。ゆかりのように、目を背けたい感情をなんとか抑えながら、一つ一つの亡骸を目で追っていく。子を抱きかかえながら、真つ二つに裂けている死骸。

果敢に戦いを挑み、八つ裂きにされ、原型すらもわからなくなった死骸。

逃げようとして足を刈り取られ、のたうちながら息を引き取った死骸。

口へ刃を押し込められ、中身をえぐりだされている死骸。

この惨状を泣きながら見つめ、地面に突つ伏す、二つに分かれた死骸。

死骸、死骸、死骸……。

あるのはただ、それだけだった。

恐怖に震えるゆかりの背中をさすりながら瑞穂は、その場に立ちつくしている。

「ツクシくん……。これ、もしかして、さつき言ってた……」

『紅の刃と蒼い風』の仕業かもしれない……。やっぱり本当だったんだ」

瑞穂とツクシは、お互いを見つめ合ったままだ。落ち着いたゆかりは顔を上げて、言った。

「でも、どこにもおらへんで」

「このナゾノクサ達……。殺されてから6時間以上は経ってるから、逃げていてもおかしくはないよ」

「それじゃ、さつきのナゾノクサは、ここのナゾノクサ達の生き残り、なのかな？」

「さあ……。そこまでは……」

さわさわと、森に木々の擦れる音が響いた。瑞穂はすぐさま、音のする方角を見やっ
た。そして、恐れからか目を見開た。

「あ……。あ……」

「どないしたん？ お姉ちゃん」

「あ……。あれ……！」

指さされた先には、赤い光が、二つ。ギラギラと輝いている。それは、まるで獲物を
目の前にした野獣の瞳のように見えた。

ツクシは電灯の明かりを、赤い光へと向けた。赤い瞳の正体を確かめ、瑞穂は驚きの
声をあげた。

「な、ナゾちゃん……」

そこには包帯にくるまれたナゾノクサが、殺気を漲らせ、こちらを睨み付けていたの
だ。先程と違い、瞳は赤々と光り輝き、その表情は猛獣の如く鋭い。

「ナゾちゃん……。これって、これ、どういうこと……」

瑞穂は唐突に姿をあらわしたナゾノクサに困惑の色を隠しきれない。

目が赤い。それってもしかして、このナゾノクサが『蒼い風』の正体なの？

「これ、なにかの間違いだよ……うん。なにかの間違い、勘違い……だよ」

「お姉ちゃん！危ない！」

ゆかりのとっさの一声で我に返った瑞穂は、目の前に迫った、はっぱカッターをギリギリの所で避けた。もし、ゆかりの一声がなかったなら、瑞穂の鼻から上がスツパリと切り落とされていたところだ。

「ありがとう……。ユウちゃんは、そのまま伏せてて」

背筋がヒヤヒヤするのを感じながら、瑞穂は体勢を立て直した。

「どうしよう」

「どうしようもない」ツクシはナゾノクサの攻撃をいつでも避けられる体勢をとった。

「戦うしかないよ」

「でも、ナゾちゃんは、ケガしてるんだよ……？」

「そんな場合？ このままじゃ、キミも、この子も、ここのナゾノクサと同じになる。それでもいいの？」

「それは……。」

「あのナゾノクサは、さつきボクの言った『蒼い風』に間違いない。たぶん、ここのナゾ

ノクサ達も、“このナゾノクサ”に殺られたんだ」
「でも……」

瑞穂は釈然としないまま、モンスターボールを手に取った。既にツクシは、モンスターボールを宙へと放っている。

「いけっ！ 勇敢なる虫ポケモンの戦士、スピアー！」

ツクシの声が発せられると同時に、モンスターボールの光りの中から、鋭い針が凄いい勢いで飛んでいく。しかし鋭い針は、ナゾノクサの残像に突き刺さるだけだ。本体には当たらない。ナゾノクサの動きが、あまりに素速いので、毒針が追いつかないのだ。

毒蜂ポケモンのスピアーは、毒針が当たらないとわかるやいなや、モーター音のような独特な羽音を辺りに響かせながら、ナゾノクサの赤い瞳の光りを追いかけていく。至近距離から攻撃すれば、いくら素速く動こうとも、攻撃をあてることができる、と踏んでいるのだ。

影は動いた。赤い瞳の残像が、幾重にも重なって、闇に浮かび上がっている。ナゾノクサは、肉眼では捉えられないほどの速さで、スピアーと瑞穂達の周りをまわっている。そして、奇怪な呻き声を発しながら、頭部から、はっぱカッターを発射した。

「あたるもんか、スピアー！ 高速移動！」

スピアーの羽音が一段と騒がしくなり、それに比例してスピアーの飛ぶ速度が上がっ

ていく。はっぱカッターは、スピアーの残像をすり抜け、空を切つて地面に落ちた。畳みかけるように、スピアーは両腕の鋭い毒針をナゾノクサに向けた。

「いまだ、スピアー！ ダブルニードル！」

ダブルニードルは、ナゾノクサの脇腹にくい込んだ。ナゾノクサは悲痛な呻きを上げた。頭部の傷からは、体液がまた溢れ出た。

我慢できずに、瑞穂はツクシの左腕をつかんだ。

「もうやめて、ツクシくん。ナゾちゃんが……、ナゾちゃんが死んじゃうよお」

放せ！とばかりに、振りほどくと、ツクシは瑞穂を見つけた。

「今しかないんだ。解つてよ……。そうしないと……」

バキィッ！

何かが、折れる音がした。2人は驚いて、スピアーとナゾノクサの方を見やった。

ツクシの表情が強張った。スピアーの左の毒針が、折れてしまっているのだ。このナゾノクサは、単に素速いだけではなかった。力も普通のナゾノクサよりあるのだろう。毒針を折られたスピアーは、フラフラと地面へと墜落し、苦しそうに身を振っている。

「ああー！」ツクシは絶望に近い声をあげた「スピアー……い！」

ナゾノクサは、そんなスピアーにトドメの溶解液を放とうとしている。

「やめて……、やめてよ……、大切なスピアーなんだ……なにもそこまで……」

頬をひきつらせながら、ツクシは息を詰まらせた。そんなツクシの懇願も虚しく、溶解液はスピアーの左腕をジワジワと溶かしつつある。

「やめてよ……」

ドス！

その瞬間、ナゾノクサの体が宙を舞い、木に激しく激突した。ナゾノクサは、モンスターボールから飛び出したリングマの爆裂パンチを、直接喰らってしまったのだ。

「ああッ！ リンちゃん！ もつと力を抑えて……。それじゃ、ナゾちゃんが……。それとツクシくん。早く、スピアーを戻して……」

言われるままに、ツクシはスピアーをモンスターボールへと戻した。

フンとリングマは鼻息をたてると、立ち上がりこちらを睨み付けているナゾノクサを見やった。相手のただならぬ殺気に、リングマの本能が敏感に反応した。

……コロス、コロス、コロス……。

あまりの殺気に、リングマですら思わず後ずさった。なんなんだ、こいつは――

「グオアアアアアアッ！」

お前なんかには負けるかッ！とばかりに、リングマは激しく咆哮し、ナゾノクサを睨み返した。口を広げ、手を広げ、叫び声と共に、破壊光線と衝撃波をぶちまけた。

ヴァアシウウウウツ!

閃光は一息の間もなく森を切り裂き、大地を抉りとり、木々を暗闇へと吹き飛ばした。遅れてやってきた衝撃波によって、枯れ葉が一拳に舞い上がる。

あまりの閃光の眩しさに、目を眩ませながらも、瑞穂は叫んだ。

「リンちゃん! 力を抑えて、つてあれほど言ったのにつー!」

それとなく瑞穂を無視しながら、リングマは漆黒の月をキツと睨み付けた。

……よけた……はかいこうせんをよけるなんて……信じられない……。

「ねえ……。ナゾちゃんは……?」

こちらに近づこうとする瑞穂を、リングマは慌てて制そうとした、その瞬間だった。

シユツ!

瑞穂の肌白い頬から、鮮血が滲みでた。足下には勢いを失った、はっぱカッターがヒラヒラと舞っている。瑞穂は頬を押さえたまま、呆然と眩いた。尾を引いたように、掌に鮮血が滴る。

「う……うそ……」

あまりに急な出来事に、瑞穂は硬直したままである。その頭上には幾つもの刃物。

リングマは、とつさに瑞穂を突き飛ばした。はっぱカッターはリングマの腕を容赦な

く斬りつけた。

「う……、り、リンちゃん！」

傷から赤々とした血が、吹き出す。瑞穂は悲鳴にも似た、叫びを上げた。

ドン！と大地を思い切り踏みつけたリングマの口から、こんどは夜空に向かって閃光が発せられた。辺りには大音響が響き、その場に伏せていたゆかりですらも、数メートルほど吹き飛ばされる。

……また、よけられた……。

リングマは、自分の発した衝撃波に打ちのめされ、その場に仰向けに倒れた。腕からの出血は、時を追うごとにひどくなっていく。破壊光線の連続発射は、リングマの身体に想像以上の負担をかけているのだ。

頬から流れる血を拭おうともせず、瑞穂は倒れたままのリングマに寄り添った。

「リンちゃん、しつかり……しつかりして……」

目には涙が浮かんでいる。頬からの血が、リングマの肩にポタリとたれた。リングマは小さく首を振ると、仰向けのままで、胸に力を込めた。

ハツとした表情で、瑞穂はリングマを見つめた。口から光りが漏れている。リングマは破壊光線を撃つつもりなのだ。

「ダメー！リンちゃん！……これ以上、破壊光線を撃ったら、リンちゃんの身体が……」

殺気を感じ取り、リングマは立ち上がると瑞穂に覆い被さった。背中に幾つもの刃物が突き刺さる。それらを取り払うと、空を向き破壊光線の発射態勢をとった。

体に力を込める度に、全身の傷から、鮮血が吹き流れていく。瑞穂の肩を、腕を、リングマの鮮血が染めた。とめどなく、血は滝のように流れていく。

「やめて……やめてよ……。もう、やめてっ……！」

そう叫ぶやいなや、瑞穂はモンスターボールをリングマに押しあてて戻した。放心状態の瑞穂に、幾つものはっぱカッターが襲いかかる。

瑞穂の、か細い二の腕に、パツクリとした傷がつき、血が流れ出た。

「くうっ……」

「瑞穂ちゃん……！」

吹き飛ばされたゆかりを抱き起こしたツクシは、思わず叫んだ。

殺される、と瑞穂は直感した。いつも以上に、自分が小さく、弱々しく思えた。

……私……どうしたらいいの……？

瑞穂はお化けに怯える子供のような声で、呟いた。

……おいらのこと、忘れたの……？

グライガーは、モンスターボール越しに、瑞穂に囁いた。

……ふん。ドーせ、おいらは弱つちですよ……

そうじゃないよ。だけど、リンちゃんでも歯が立たなかったのに——

……ほら！ みずほちゃん、やっぱりおいらのこと、弱っちだと思ってる……！

あ……ごめん。でも、本当に弱いのは私なの。独りじや……なにもできないんだもん……。

おいらだつて、独りじや、なくんにもできないよ？

そうかな……、と瑞穂は微笑んだ。

おいらを信じてよ。おいらだつて、グータラに見えるけど、やるときややるよ！

うん。グラちゃんのこと、信じる。ううん、信じてる。

……あ、それと……。

なに？

みんな無事だったらさ、こんどおいらと一緒に、お風呂入ってくれる？

「危ない！ 瑞穂ちゃん！」

森に、ツクシの叫びが木霊した。瑞穂の目の前には、鋭利なはっぱカッターが迫ってきていた。その瞬間、瑞穂の胸元から光が湧き出た。そして、はっぱカッターは一瞬の内に、粉々に切り裂かれた。

「お願い、グラちゃん！」

そう叫んで立ち上がった瑞穂の胸元の光から、グライガーが飛び出してきた。

闇に紛れたナゾノクサは、グライガーに標的を変更した。奇声をあげながら、グライガーへ溶解液を打ち出した。

グライガーは目にも止まらぬ速さで、溶解液をさらりと避けた。辺りを見回し、ナゾノクサを探し始める。赤い光は、残像現象によつて、いくつも闇に浮かび上がっている。どこだ。どこにいるんだ――

グライガーは瑞穂と顔を合わせた。そして、目で合図をした。瑞穂は驚いたように、瞬きをした。

「グラちゃん……、もしかして、あれをするつもりなの？」

……もちの、ろんろん……！とグライガーは頷く。

「できるの……？ それじゃ……つていう作戦は、できる？」

おいらを信じて……。

瑞穂は呆然としているツクシ達の方を向いた。

「ツクシくん。ユウちゃんを連れて逃げて！」

「え……？ でも……」

「いいから、早く！」

「う、うん……」

ゆかりを背負いながら、ツクシは森の奥に、姿を消した。

ツクシ達が逃げ終えるたのを確認すると、瑞穂ははっぱカッターをひよいひよいと避けているグライガーに合図をした。

「グラちゃん！ タイミングが大事だよ！」

グライガーは大声を発しながら、滑らかな自慢のハサミを思い切り振り回した。そして急降下すると、ナゾノクサの瞳を凝視し見つけだし、押さえつける。

ナゾノクサは藻掻いた。力のないグライガーでは振りほどかれるのは時間の問題かと思われた。

木々が動いた。そして、倒れてくる。何本もの木々が、ナゾノクサとグライガーめがけて倒れてくる。

グライガーは木にぶつかる直前で飛び上がった。

ドスンッ！

巨木の牢獄が、赤い瞳のナゾノクサを閉じこめた。

闇に、ナゾノクサの虚しい抵抗の音が響いた。



朝の日差しだ。

あ、森の匂いがしない……。

ここは、どこだ。

「凄いや、グラちゃん！ たった数時間で鎌鼬を修得しちゃうなんて」

あの女の子の、喜びに満ちあふれたような声が聞こえてきた。

目を開くのが怖い。

全てが幻かもしれない。女の子も、朝の日差しも……。

恐る恐る目を開くと、そこは灰色の箱の中だった。

グライガーと話していた女の子は、私に気付いて、こちらへと歩み寄ってきた。頬と

二の腕には大きな絆創膏が張ってある。

わざと怒ったような顔をつくると、女の子は言った。

「ナゾちゃん！ この傷の代償は高くつくよ、なんてね」

頬をさすりながら、女の子は微笑んだ。

女の子の背中の方で、リングマが体中を包帯に巻かれて眠っている。

そうか……、ここは病院……、ポケモンセンター、か。

眠そうに目を擦ると、女の子は私を抱きかかえた。

「ナゾちゃんって、変わってるよね。突然、目が赤くなって性格が変わっちゃうんだよ

ね。そうなったときの記憶って、あるの？」

私は、首を振った。覚えていない……。

ふう、と息をはき、女の子はその場に座った。

「ナゾちゃん。今日から、あなたは、私のポケモン……でいいかな？」

私は驚いた。なにを突然言い出すのだ……この女の子は。

「ヒワダタウンのポケモンセンターの設備じゃ、詳しくあなたの体を調べられないだつて。かといって調べないで、このまま森に返すのも危ないし……。だから、トレーナーであり、一応医者でもある私が預かることにしたんだけど……。ナゾちゃんは、それでいい……かな？」

それでいい……かな？と訊きたいのは私の方だ。

こんな危なっかしく、ややこしい私を本気で預かるつもりなのか？

女の子は微笑みながら、黙ってこちらを見つめている。

私は小さく、女の子の腕の中で、頷いた。

女の子の胸がドクンと強く波打つのを、私は間違いないと感じた。

「よかつたあ……。それじゃ、あらためて……。私の名前は、瑞穂つていいいます。これからよろしく、ナゾちゃん！」

……みずほ、というのか、この女の子は。

それでいいのか……？ 私は再び、みずほに問うた。

答えはない。

いつの間にか、みずほは私を抱きながら、心地よさそうな寝息をたてて、眠っていた。いくら大人びているとは言っても、やはり、まだまだ子供なのだ。こういう幼子には、私のような大人の保護者が必要というものだ。

私は、みずほの、幼く可愛らしい顔を見上げた。

本当に、それでいいのか……？

なぜなら、今、みずほが腕に抱いているのは、愚かな白髪ジジイによって生み出された——

『一欠片の狂気』なのだから。



#5 妖魔。

静かなる波紋

「どうしても、ダメなの……?」

薄暗い洞窟に、女の小声が響いた。どこか高飛車な、人を見下したような声色だった。辺りには蝙蝠ポケモン、ズバットの甲高い鳴き声が反響している。他には物音一つしな

い。
疲労と絶望で血走った目を、男は見開く。荒い息のまま、男は搾りきるように答えた。

「何度言ったらわかる……。俺には、師匠を裏切るような真似なんて、絶対にできない！」

男の体は、チタン製のロープでグルグル巻きにされている。ヘタに動こうとすれば、皮膚が切り裂かれ、血が溢れんばかりに噴きだしてしまうだろう。口には、何かギザギザした鋭く長いものをくわえさせられている。

「あつ、そう……」

女は怒ったような口調で吐き捨てると、男の腹を蹴りつけた。

「ゲフウツ……」

胃が熱くなり、喉の奥から沸き立った血が昇ってくるような感覚に男は襲われた。我慢できずに出した嘔吐物は、真っ赤に染まっている。

「やれ！」

女は強い口調で、誰かに命令した。

その瞬間、男の顔が火を噴いた。火花が散り、閃光が迸り、男の、声にならぬ悲鳴は、バチバチという音に掻き消された。

「あ、ああ、……ギヤアアアアアッ！」

身体が激しく痙攣を起こし、男は狂ったようにのたうちまわった。体中の皮膚が張り裂け、血が出て、肉が飛び出した。閃光は、男の体を包み込み、唸るような音をあげ、男の体に食いつく。一瞬のうちに焦げくさい臭いが辺りにたちこめ、男は硬直したまま、その場に倒れた。黒々となった男の体は、もうピクリとも動かなくなった。男は死んだのだ。

忌々しげに女は、動かなくなった男の頭部を踏みつけている。

「いつもより、ご機嫌ナナメだな……カヤ、なにかあったのか？」

背後から、別の男が無表情のまま、カヤという名の女に訊いた。

「ふん。ヒエンね、わかってるくせに……」

カヤは、なおも倒れた男の頭を踏み続けている。そんな様子を興味なさそうに見つめ、ヒエンという男は、腕を組んだ。

「たかがペットに逃げられたぐらいで、そこまでいきりたつこともないだろう？ このオペレーションが成功したら、ペットの一匹や二匹、俺が買ってやるさ」

「あつ、そ。そんな金で買えるようなペットはいらないのよ。もつと、こう……可愛がり甲斐のあるペットがいいわ」

「前のペットは可愛がっていたのか？ そうは見えなかつたが……」
「とっても可愛がってあげたのに、逃げるなんて……、許せないわ」

倒れた男の頭は、圧力に耐えきれず潰れる。グシャと頭蓋の碎ける音がし、ドロドロとした粘着性の血が床に流れ出た。

「だからといって、その男を殺すことはなかったんじゃないのか？ もうちよつと粘れば、利用できたかもしれんのに……」

カヤは、頭の潰れた男の胴体を蹴り飛ばして、ヒエンを睨んだ。
ふつ、と苦笑し、ヒエンはカヤを見据えている。

「大丈夫よ。まだ、手はあるわ……」



「ストライク！ 連続斬りだ！」

「乱れひつかきで受けとめて、リンちゃん！」

ストライクの鋭利な鎌と、リングマの研ぎ澄まされた爪が金属製の音を響かせた。素早い動きでストライクは、リングマを翻弄している。自棄になったリングマは腕を振り回すも、ストライクには掠りもしない。

瑞穂は焦った。ああ、どうしよう……、どうしよう。

既にグライガーは倒されている。ナゾノクサは、まだ頭の傷の経過が宜しくない。リングマがダウンしてしまつたら、それは即、瑞穂のジムバトルでの敗北を意味するのだ。

ここで負けるわけにはいかない。グライガーの善戦を無駄にするわけにはいかない。それはリングマも、瑞穂も同じ気持ちなのだ。

しかし現実には、そう甘くはない。

「左からくる！」

左から空気を震わせ迫る鎌を、リングマは寸での所で避けた。瑞穂の的確な指示がなければ、ストライクの鎌は間違いなく、リングマの脇腹を裂いていたであろう。右、左、上、左。次々と切り裂かれていく空気を避けながら、瑞穂は反撃の機会を伺う。

だが、ストライクに隙は全く見られない、さすがは虫ポケトレナー、ツクシ最強のポケモンだ。

じりじりとしてきた。もう我慢できない、とばかりにリングマは大きく口を開いた。破壊光線を発射するつもりなのだろう。だめだよ。それじゃ、避けられちゃう。

「ダメー！ 破壊光線だけは撃っちゃダメー！」

瑞穂の叫びに、リングマは振り向き、どうして？という顔で訊いた。

「破壊光線を撃つても、ストライクには避けられ……あ、危ない！」

瑞穂の声に反応して、リングマは振り向きざま、怪腕をブンツと振った。だが、手応えはない。攻撃の当たる寸前で、避けられたのだ。

「あー！」瑞穂は上空を指さした。「上からくる！」

「今だ、ストライク！ 居合い斬りだ！」

ストライクの鎌が日光に反射し、輝いた。鎌を、リングマは鋭く睨んだ。よく見て、よく見る、眼を背けちゃいけない……。

リングマの巨体を、ストライクの鎌が一刀両断、真つ二つに切り裂いた。

「り、リンちゃん！ いや……いやあああつ！」

瑞穂の悲鳴が木霊す。リングマの裂けた身体から、鮮血がビュワツ、と吹き出す。

誰の目にも、そう映った。

「グオオオオオオオッ！」

瑞穂の耳に、切り裂かれた筈のリングマの雄叫びが聞こえた。恐怖から閉じていた目を、瑞穂は開いて、リングマの方を見やった。リングマは、ストライクの鎌を受けとめていたのだ。手のひらから血が滴ってはいるが、たいした傷ではない。

「あ、影蘭流剣術護身術、真剣白刃取りだ……、すごいよ、リンちゃん」
感心している場合ではない。

「ストライク、振りほどくんぞ！」

と、ツクシの言う通りに事は進まない……いや、進ませてはいけない。こんな絶好の機会を逃すか、とリングマは鎌を強引に押さえつけた。

ストライクはリングマのなすがままに、地面へと叩きつけられた。

この体勢から繰り出す技は、ただ一つだけ。

「そのままカウンター、いっちゃえっ！」

「ガアアアアアア！」

リングマの太い拳が、ストライクの顔面にぶち当たった。衝撃でストライクは、木の葉のように飛ばされ、地面へと激突する。

すかさずリングマは、ストライクへと詰め寄った。もう一度、この隙にストライクへトドメの一撃を喰らわせるつもりなのだろう。立ち上がろうとするストライクの前面

には、燃えるような拳が迫っていた。

「えっ……?!」

瑞穂もツクシも、一様に驚いたような声をあげた。

燃えていた。

リングマの拳は、空気との摩擦で赤々と燃え上がっていたのだ。

バシユウウウツ!

炎のパンチはストライクの腹部に決まった。羽を動かしてもいないのに、空高く舞い上がったストライクの全身は炎に包まれた。

「も、戻れ! ストライク!」

そのツクシの慌てているような一言で、決まった。ツクシは自らの敗北を宣言したのだ。

モンスターボールへと戻ったストライクから目線を外すと、リングマは炎で焼け焦げた手を見つめた。

「やったね、リンちゃん!」

背中の方から、声が聞こえた。リングマは振り向いた。瑞穂が、リングマの胸に飛び込んできた。なんだか、とても小さい手応えがする。あまり力を込めて抱くと、潰れてしまいそうだ。

……姉さんって、こんなに小さかったっけ……？とリングマは思った。

胸の中で抱かれる瑞穂は、リングマと目を合わせると、微笑を浮かべた。瑞穂の笑顔は、炎よりもリングマの心を暖めるような気がする。

本当の、初勝利だね……。

いつのまにか2人は、そう、ささやきあっていた。



ヒワダジムのテラスには、柔らかな昼の日差しが差し込んでくる。

穏やかで昔懐かしい田舎町である、ここヒワダタウンは、大都市コガネシティとは違った魅力があった。

この町の名所は「ヤドンでの井戸」と呼ばれているらしい。まさしく、この町の雰囲気は、ヤドンのようにゆっくりとしているのだ。それは、めまぐるしく時の経つ、コガネやヤマブキとは、正反対である。

「のどかで、いいところだね」

瑞穂は、紅茶を啜りながら、ツクシに言った。

「そうでしょ？ なんだか、のんびりしてて、空気もおいしいし……」

「空気に、おいしいもマズイもあるん？」

ゆかりが、不思議そうな顔で、口を挟んだ。

「そりゃ、あるよ。深呼吸してみたらわかるはずだよ。清々しくて……肺胞が洗われるような気持ちになる筈だから」

「はいほー……？ なんやの、それ？」

そんなやりとりを見つめて、ツクシは苦笑した。

「まあ、とにかく、やってみなよ」

言われるがままに、ゆかりが息を大きく吸い込むのを見つめながらツクシは瑞穂に話しかけた。

「はい、瑞穂ちゃん。これがヒワダジムのリーダー、つまりボクに勝った証、インセクトバッジさ」

懐から赤いバッジを取り出したツクシは、それを瑞穂に手渡す。瑞穂は、とても嬉しそうにツクシの手からバッジを受け取った。

「ありがとう……。それにしても、ビックリしちゃった。まさかツクシ君がヒワダジムのジムリーダーだったなんて……」

「隠すつもりはなかったんだけど、ジムリーダーは、あんまり自分の身分をひけらかしちゃいけないんだ」

頭を軽く掻きながら、ツクシは弁明した。その時、ゆかりは吸い込んでいた息を思い切りはきだして、瑞穂を見やった。

「やっぱりわからへん」

「子供には、わからないのかなあ……」

「お姉ちゃんかて、子供やん！」

あ、そうだった、と瑞穂は苦笑した。

2人の稚児のようなやりとりを、ツクシは半ば呆れながら見つめている。

「あ、そうだ……」

なにか、思い出したような声をあげたツクシの方を、瑞穂とゆかりはサツと向いた。

「どうしたの……?」

「実は、さつき警察の人が言ってたんだけど、森でのナゾノクサの大量虐殺の現場を調べた結果、ナゾノクサ達は瑞穂ちゃんの言っていた通り、ポケモンの鎌のようなモノで斬られてたらしいんだ」

「それって、つまり……ナゾちゃんは無実、ってことだよな?」

瑞穂の嬉しそうな問いに、うん、と頷き、ツクシは続けた。

「でも、おかしいと思わない? あの森には、そんなポケモンは生息してないんだよ?」

「たしかに……そうだね」

考え込んでしまった瑞穂を余所に、ゆかりは得意満面の顔で2人の間に乗り出した。

「だからウチが言うたやん。トレーナーのポケモンが犯人なんやって、絶対」

ゆかりは、自分が言った、という部分を特に強調している。完全に納得していない様子ではあったが、瑞穂は頷いた。

「ユウちゃん言う通りかもしれない」

「でもさ、誰が……、誰がそんなことをポケモンに命令したんだろう」

どんなに考えても、その答えへは到達できないことなど、瑞穂は解っていた。でも、考えなければならぬ……。あんな非道い事をする人間を、許すことはできない。

それに、他にも不思議な事はあった。口では、ナゾノクサは森での大量虐殺にあまり関係ない、と言いながらも、瑞穂は、そこに言い様のない違和感のようなものを感じていたのだ。

……もしかしたら、ナゾちゃんの、あの不思議な能力は……。

どうしたの？ と、ツクシが訊くので、瑞穂は顔を上げ、取り繕った。

「あ、それとナゾちゃんも詳しく検査したしなきやいけない、と思つて。ほら、ナゾちゃ

ん、何か普通とは違う特殊な力を持つてるでしょ？ 私、なんとなく解るんだ……その力が、ナゾちゃんにとつて、重荷にしかなくなっていないのが……」

ツクシとゆかりは、瑞穂の言葉に一様に頷いている。

それなら、とツクシは口を開いた。

「この町は田舎だから、そんな設備どこにもないけど、キキヨウシテイのポケモンセンターだったら、そのナゾノクサを詳しく調べられると思うよ」

「ありがとう、ツクシ君」

そう言つて瑞穂は席を立つと、ゆかりの手を引いて歩き出した。

驚いたツクシは、慌てて2人を呼び止めた。

「ねえ、もう行くの？ もうちよつとゆっくりしていきなよ」

「でも……」

「大丈夫。知り合いに民宿の人がいるから、その人に言つて、泊めてさせてあげるよ。そうそう、温泉もあるんだよ……？」

温泉？

そう言われては、風呂好きの瑞穂が黙っている筈はない。

「温泉……。はいりたいな……。ユウちゃんは、どうする……？」

ウチに、訊かんといつてっ！と心の中で叫ぶゆかりも、嫌そうな表情ではない。同意を

表す、小さな領きを返すだけだ。

「それじゃ、決まりだね」

瑞穂は自分に言い聞かせるように、その言葉を繰り返した。



孤独なる出逢い

辺りは夕闇が支配を始めた。

いくらゆつくりとした雰囲気の時とはいえ、時は誰にも対しても平等だ。白い雲は空の色に染まり、鮮やかで見事なオレンジ色に輝く。

……気持ち悪い……。

赤々とした空を民宿の一部屋の窓から見上げながら、氷は思った。少女にとつて、空とは自分の心を投影するための、スクリーンに過ぎない。あれでは、まるで血の色。鮮血のカラーなのだ。

「女の子が一人で長旅ねえ……、なかなか感心な心構えだよ、うん」

民宿「あめふらし」の女将が、押入から布団を引っ張り出しながら、感心したように頷いている。ぼんやりと空を眺めていた氷は、女将の言葉に反応し、振り向いた。

「あ、ごめんなさいね。狭くて。でも、狭くても精一杯サービスしますからね」

氷の白い顔を見つめながら、女将はニツと笑った。

「……そうですか……？」

「は……はい……?!」

突拍子な氷の言葉に、女将はわけがわからず聞き返した。

「あの、それ、どういう意味で……？」

「女の子が1人で長旅するのは、そんなに感心するようなことですか……？」

女将は、しばらく呆然と氷を眺めていたが、口元を引き締めて布団を広げた。

「そりゃ、感心なことですよ。最近の子供は、みんな冒険心をなくしちゃまつてるからねえ……。まあ、ポケモントレーナーとなれば話は別ですがね、本当に最近の子供は、外で遊ばなくなりましたよ。あたしが子供の頃は……って、だいたい昔の事ですけどさ、よく近所の洞窟とか井戸とかへ冒険しに行ったもんですよ。ところが最近は、そういう『冒険』は、みくんなテレビゲームの中でできちゃう、それは、それで別に悪いことではないんですがね、でもテレビゲームの中で冒険したからって、本当の、現実の世界を冒険したわけじゃないですがねえ……」

女将は、しみみと天井を仰いだ。

「そうですね……」

顔色一つ変えず、微動だにせず氷は答えた。

「それに、意気地なしときた。1人じゃ、なくんにもできやしない。たくさんの人間とつるまないと安心できない、なんて悲しいじゃないですか。昔は、いじめっこ相手に、ガキ大将が1対1で決闘したもんですよ。でも今じゃ、たくさんのいじめっこが、1人の

子をいじめるなんてねえ……」

「怖いんですよ。一人でいるのは……」

暗くなった窓の外を背に、氷は、溜息をついている女将に言った。

「誰だつて、独りぼつちは怖いんです。だから、弱い人間ほど徒党を組みたがるものなんです……」

悲しげな女将の顔が、しばらくし再び明るさを取り戻していく。布団を敷き終えると、女将は朗らかな笑顔氷に向けた。

「だから、お嬢ちゃんは偉いじゃないですか。一人で、長旅するなんて、最近のヘタレた子供にはできませんよ」

氷は、ゴクリと唾を飲み込んだ。

私は、友達がいらないだけです。

私は、仲間がいらないだけです。

私は、帰るべき場所がないだけです。

次々と沸き上がる言葉を、氷は必死で制した。

できることなら、この人の良さそうな女将に、助けて！としがみつきたい。

しかし、それはできない。そんなことは、解っていた。

「それじゃ、あたしはこれで……、どうぞごゆつくり。あ、それと温泉は一階ですからね、

露天風呂ですよ」

女将が部屋から出ていくのを見届けると、氷は、先程敷かれたばかりの布団に横になった。そして、布団に顔を擦り付け、泣いた。

なぜ、泣く？

悲しみという感情は、大昔に殺したはずだった。でも、いま瞳から流れるのは、涙。

そう言えば、この間も森で泣いてしまったっけ……。

しばらく経ち、のっそりと起きあがった氷は、近くにあつた鏡で自分の顔を眺めた。

「……真っ赤……ね」

泣きはらした瞳は充血しており、艶やかだった頬は、少しばかりむくんでいる。

「たしか温泉は……」

一階だったはずだ。

部屋を出て、階段を降りると「露天風呂」という看板が扉の前に立てられている。その看板の角には、小さな文字で「ポケモンの入浴もOK」と書かれていた。

氷は扉を開けて、風呂場へと入っていった。



「ひゃー、気持ちいいね」

瑞穂は、さっぱりとした表情で空を見上げながら呟いた。

空では星々が輝き、ちりばめられた宝石のように美しい。おそらくこれほどの美しい夜空は、コガネシティのような大都市では見ることはできないであろう。

ぽかぽかと湯気のたつ白い肌は、冷たい風でキリリと引き締まって、気持ちがいい。これで、まさに露天風呂の醍醐味、と言ったところであろうか。

「リンちゃんも、グラちゃんも今日は、苦勞様。どお？ 気持ちいい？」

うん！

瑞穂の隣で湯に浸かっている、リングマとグライガーは、同時に答えた。グライガーは、生まれて初めての温泉にハシヤギっぱなしだ。リングマは、なぜか顔を赤らめ、瑞穂の方を向こうとはしない。

「はあく。」と、ゆかりは虚ろで眠そうな瞳で、星空を眺めている。ナゾノクサだけは温水を嫌い、一人で、隣の冷水に浸かっていた。

そんなナゾノクサを見つめながら、瑞穂はゆかりに声を掛けた。

「なんやの？ お姉ちゃん」と言い、ゆかりは瑞穂を見やった。

「あ、あのね。ナゾちゃんの事なんだけど……」

「あの、ナゾノクサがどないしたん？」

「あの時のナゾちゃん……、なにかに操られてるみたいじゃなかった？」

赤い瞳、野獣のような唸り声……、あれは普通のナゾノクサには見られない特性だ。

瑞穂は考えていた。もしかしたら、あのナゾノクサは、誰かに、何かによつて、意図的に操られているのではないか、と。もしくは人為的に、なんらかの法則によつて人やポケモンを襲うように、仕向けられているのではないか。

瑞穂の考えを聞かされたゆかりは、難しい話はわからへん、と断りをいれながらも、

「そやけど、誰が、なんのために、そんなことするん？」と、小声で言った。

「そう、なんだ……。もしナゾちゃんが、操られてるとしても、誰が何のためにそんなことをするのか、全然わからない……。でも、もしかしたら……。これは推測なんだけど、ナゾちゃんは、森でのナゾノクサ大量虐殺の犯人のポケモン、とまではいなくても、犯人と何らかの関係があるんじゃないかな……」

「え……。でも、ナゾノクサの死体の傷痕と、あのナゾノクサのはつぱカッターは一致しないんやで？」

うん、と意味深に瑞穂は頷くと、近寄ってきたグライガーを胸に抱いた。グライガーは、瑞穂の胸に刻まれている傷痕を、ペろりと舌で気付かれないように舐めはじめた。

「こうは考えられないかな……。例えば、ナゾちゃんは、その犯人のポケモンで、犯人はナゾちゃんに命令……。もしくは、ナゾちゃんの特異な能力を利用して、森のナゾノクサを殺させるように仕向けたんじゃないかな？ ……でも、ナゾちゃんは、命令に従わなかった。だから犯人はナゾちゃんと同じ能力をもったポケモンをつかって、命令に従わなかったナゾちゃんを殺そうとしたんじゃないかな？ ……それでも、ナゾちゃんはなんとか生き残って、重傷のまま彷徨っていると、私達と出会った……。」「って、ことは……」

「ナゾちゃんに傷を負わせて、森のナゾノクサを惨殺した張本人は、もしかしたら、ナゾちゃんと同じ能力をもっているかもしれない……。でなきや、いくらトレーナーの命令でも、ポケモンがあんな非道いことできるわけないよ」

悲しげに呟く瑞穂を励ますように、ゆかりは瑞穂の手をとった。

「まあ、キキヨウで詳しく調べれば、ある程度わかってくるんじゃないかな？ ……考えるのは、それからでも……。あ」と、ゆかりは入り口を見やった。

「誰か、入ってきよるで」

ガチャと音をたて、ガラス張りの入り口から、独りの少女が露天風呂へと入ってきた。年齢は——そう、10歳ぐらい……。しかし、大人びた顔つきのせいで、14歳ほどにも

見える。色白の瑞穂よりも、さらに白い肌をしており、髪は紫色で長い。……射水 氷 だった。

氷は、無表情のまま冷水へと入って、目を閉じた。

「うわ……。寒くないんかな、あの人……」

温水に浸かっている小さな女の子が、隣の水色の髪の少女に呟く声が聞こえる。チラリと彼女らの方向を見やり、氷は、その少女に見覚えがあることに気付いた。

艶やかな水色の髪を左右で束ねている、白い肌で、胸に傷のある少女……。

「……あの」

氷は、瑞穂の方を向いて言葉を掛けた。ゆかりは慌てて目をそらし、瑞穂は氷の方向へと向き直り訊いた。チラリと、胸に刻まれている傷が、お湯の中からのぞいた。

「え……、私ですか？」

「ええ」氷は小さく頷く。「以前に、どこかで、お会いしましたか……？」

「さあ……、ごめんなさい。記憶にないです……」

「そう……。私の勘違いみたい……」

氷は、それだけ言うと、再び目を閉じた。ゆかりはそれを確かめると、瑞穂の肩をついた。

「お姉ちゃん。そろそろ、あがろうや。もうウチ、のぼせそうや」

瑞穂とゆかりは、ポケモンをモンスターボールへと戻すと、足早に風呂場から出ていった。

独りになった氷は、夜空を見上げた。星が輝いている。それでも、氷の心が晴れることはないし、モヤモヤとした黒い獣の欠片は、どこまでも少女の心につきまとう。当然、一つの疑問も、然り。

「どこかで……、どこかで遭っているはず……」
どこだったであろうか……。

あの少女には、見覚えがある……。しかし、詳しくは思い出せなかった。

氷はゆつくりと立ち上がった。透き通るような純白の裸身が星々の光に照らされた。辺りには誰もいない。恥じる必要はないのだ。

しばらくは星を眺めてみよう、と氷は思った。



民宿「あめふらし」の灯が消えた。

夕食を終えて、瑞穂とゆかりは布団の中で安らかな寝息をたてていた。

「まま……ほほ……どこにいるの……」と、親指をしゃぶりながら、瑞穂は寂しげに寝言

を呟いている。

外は、田舎特有の静けさに満ちていた。

薄暗く狭い部屋で、氷は携帯パソコンのディスプレイを食い入るように見つめている。

……未確認の情報だが、既に1人殺されているらしい。明日、別の作戦を執行するよ。うだ。気をつけろよ。その作戦は、SCに一任されてる。SCのえげつなさは……いや、カヤの性格は、お前が一番よく知ってるだろ？ 無理はするな。いや、今ならまだ手を引ける。やめておけ。お前は無理して、そんな事する必要なんかないんだぞ？ 俺は、お前に、そのまま普通の生活に戻って欲しいと思ってる。でなきや、なんのためにお前の姉さんが犠牲になったんだ？ お前の姉さんは、お前がこんな事をするのを望んでなんかいないぞ。どうしても、そうしなきや、お前の気がすまないというのなら教えてやる。奴等は今、つながりの洞窟っていう場所に寝泊まりしてるはずだ。いいか、無理はするなよ……。

そこで、メールは終わっていた。

眼を細め「余計な、お世話よ……。」と、氷は吐き捨てた。手を伸ばし、パソコンの電源を切った。しばらく俯いたまま氷は物思いに耽っていた。

ごめん。……と詫びた。

でも、もう遅いんだもの。

私は、もう普通の生活には戻れない。

今、どう足掻いても、私は独りぼっちだから……。

あなたに来て欲しいけど、それはできないんだよね。

そう、もう遅い。

遅すぎる。なにかもが——

だつて今更、失われた過去が戻ってくるはずもないもの。今の私は、過去という名の迷宮に雁字搦めにされている。それはわかっているけど、もう、どうしようもない……。

薄暗かった部屋は、完全に闇に閉ざされた。少しずつ夢に引き込まれるのを感じながら、それでも横になろうとはしない。

悲鳴が聞こえる。

何かが、燃えている。

(逃げなきゃ……、氷、はやく逃げなきゃ!)

(姉さん……、でも、母さんと父さんが……)

二つの断末魔の叫びが、耳を貫いた。ぎやあああああつ、と。聞き覚えのある声だけに、首筋が震えるのを抑えることができなかつた。

(父さん……?) 母さん……なの?) 震えながら、眩いた。そして叫んだ。呼んだ。父の

名を。母の名を。しかし、返事が返ってくることはなかった。

(もう、ダメだよ……。はやく逃げないと、私達まで……)

(姉さん。あの人は、あれはなんなの？　なんでこんな非道い事するの……！　それに父さんは？　母さんは……、死んじゃったの？)

(わからない！　わからないよ！　そんなの！)

そう怒鳴られながら、どれだけ走っただろうか。

いつのまにか町の外れまできていた。水の流れる音が聞こえる。川だった。小さな水の流れがある。

一時の躊躇いもなく、飛び込んだ。

冬の川に。

数人の男の子達も、一齐に飛び込んでくる。

その内の殆どは、そのまま沈んでいった。もう二度と、彼らは浮かんでくることはない……。

寒かった。だから叫んでいた。

(寒い。寒いよ……。凍えそうだよお……)

光もない、音もない……。ただあるのは目の前に漂う、波紋だけ。

そして、なにかもが途切れた。



赦されざる残光

明日の幻影は、夢のまままで消えて。

残された希望、涙に、溶けこむ。

忘れたいと思う気持ちだけ、憎悪、呼び覚ます。

燃える荒野で、出会った君は、狂い、吠えたてる。

それだけ、これだけ、どうしたかな。

あれだけ、それだけ、どこにいる。

君だけ、あれだけ、なんだかな。

これだけ、君だけ、そこにいる。



田舎の朝は、早い。寒々とした薄暗い霧の中、老人達はジョギングで清々しい汗を流している。

「おはようございます」

瑞穂がそういうと、老人達は朗らかに挨拶を返し、微笑んだ。

「かわいいお嬢ちゃん。こんな朝早くから、お散歩かい？」

「あ、はい。気持ちよさそうだったので……」

「そうじゃろ、そうじゃろ」と、ジャージを着た老人の1人が頷いた。

「この辺りは自然がおおいからの。都会とは違い、空気もうまい」

大きく深呼吸した老人に倣って、瑞穂も深く息を吸い込む。汚れのない自然な空気は、体の中を洗い流してくれるような気さえしてきた。

空翠。

そんな言葉が、瑞穂の頭に浮かんだ。どこか懐かしい言葉。なぜだろう。どこかで聞いたことのある言葉だった。

「くうすい……」

思わず呟いた瑞穂の言葉を、老人の1人が聞いていたらしい。

「お嬢ちゃん、難しい言葉を知っているの……感心じやな」

それだけ言って会釈すると、老人達は走りだし、霧の向こうへと消えていった。辺りを見回しながら、瑞穂はゆっくりと歩き出した。どこかでポツポツの鳴き声が聞こえる。

散歩をしようと思ったのは、気持ちよさそう、というだけではなかった。もう一つ理

由がある。変な夢を見た。そして、まだ暗い内に目が覚めてしまったからなのだ。

白髪混じりな50歳ほどの初老の男。瑞穂の父親が、こちらを見つめていたのだ。

(あ……。パパあ！)

即座に瑞穂は父親に駆けていく。3年前に瑞穂をのこして行方を眩ませた、薄情な男に。男は、蔑むような目つきで、瑞穂を睨み続けていた。瑞穂は立ち止まり、そのあまりの形相に震えた。

(パパ……どうしたの。どうして、そんな目で私を見るの?)

あれが本当の、瑞穂のパパの素顔なのよ、と誰かが背中から語りかけてきた。

だれ?と振り向いたその先には、自分とそっくりな、水色の髪をした女が悲しげに見つめている。紛れもなく、それは写真と夢の中でしかみたことのない、瑞穂の母親だった。

(ママ……。ママだよね……?)

母親は頷いた。そして、消えていく。

どこにいくの? せつかく遭えたのに!

父親も遠ざかっていく。瑞穂を睨み付けたまま……。

ねえ、まってよ。また、私だけ仲間外れ……、独りぼっちなの?

そこで、夢から抜け出した。

「なんだか……嫌な、夢だったなあ……」

大切な……、大切な思い出を汚されたような気がした。

寒々とした霧の中を、瑞穂はゆつくりと歩き続けている。そんなぼんやりとした気分を消し去るかのように、ふいに声が聞こえた。

「なにをするんや！ やめろ！ やめんかい！ そうか……おまえらかつ！」

小さくて、よくは聞こえない。おそらく口を塞がれているのだろう。

「あ、なに……何の音？」

瑞穂は不安を感じ、すぐさま声のする方へと走った。

一本道に差し掛かり、目の前には大きな屋敷が建っている。間違いなく、あそこから声が聞こえてきたのだ。瑞穂が屋敷に近づこうとすると、屋敷から車が凄い勢いで飛び出し、瑞穂の脇を通り過ぎた。驚いて振り返り見ると、運転席と補助席に黒服の男が乗っている。そして後部座席では、老人が1人、なにかをしきりに叫んでいるが、窓ガラスに阻まれ聞こえない。

老人は後ろの一本道で突っ立ちながら、こちらを見つめている瑞穂に気付いたようだ。チラリと瑞穂を見やると、声を出さずに口だけ動かした。それは、まぎれもなく……、た・す・け・て・く・れ。……助けてくれ、と言っている。

老人の目が次第に虚ろになっていく。臉をおろし、老人は動かなくなつた。

我に戻り、必死で車を追いかける瑞穂だったが、車は朝焼けに照らされながら、彼方へ消えた。

モンスターボールを持ってきていればよかった、と瑞穂は後悔したが、もう遅い。突然のことに足が震えている。これって、もしかして……。

「誘拐……だよね」

風が冷たい。霧は晴れ、黒雲の隙間から弱々しい太陽の日差しが瑞穂の白い頬を照らしていた。

急いで屋敷へと引き返すと、立派な門から、中の様子を覗き込んだ。誰もいない。先程の老人は、この屋敷の持ち主なのだろう。主人のいない屋敷は、どこか寂しげな雰囲気染まっている。

とにかく、一度戻ろう、と瑞穂は思った。もしかしてツクシ君なら、この屋敷のことについて、何かを知っているかもしれない。



雨が降り出した。民宿の隣にある食堂「ヒノキ屋」で朝食を食べながら、氷は窓の外を見つめている。

白いご飯に、白味噌の味噌汁は、この国の定番の朝食メニューだ。サツトカムの照り焼きは、火加減が丁度よく、元プロである氷も思わず感心するほどだった。

「お姉ちゃん！ どこいつとつたん！」

昨日、風呂場で出会った女の子が、青髪の少女、瑞穂を見つけて大声で叫んでいた。

瑞穂は雨に濡れて、びしょびしょのまま、ゆかりに謝った。

「ごめん。散歩に行つてたの」

「ウチ、ホンマに心配したんやで……」

「あ、それよりも、ユウちゃん、はやくきて……」

「お姉ちゃん。朝ご飯は……？」

盆の上に乗っている朝食を、一気にかき込むと、ゆかりの手を引いて、瑞穂はヒノキ屋を後にした。

何をそんなに慌てているのだろう……、と氷は、その一部始終を見ながら思った。

味噌汁を啜りながら、もう後戻りはできない、と肝に命じた。決意はできている。昨日垣間見た夢が、その気持ちを強くかためた。

許せない。許せないからこそ、こうして、ここまで来たのだ。

朝食を終え、外へ出ると、雨は季節外れの雪へと変貌している。この空が、この冷たい雪が、今の私の気持ちなのだろうか。いや違う、違うはずだ。

そう自分に言い聞かせて、氷は歩き出した。



ツクシと一緒に、その屋敷に着いたときには、既に大粒の雪が舞い降りてきていた。

まったく、この真冬の降雪隊は、作戦決行の日付を間違えたと思えない。

「すごい雪……、こんな季節に、なんだか変だね……」

ラジオの天気実況では、気象予報士が狼狽えながら、異常気象、と言っていた。異常気象、と言えば聞こえはいいが、実際には気象予報士が皆、勘違いを起こしただけかもしれない。そうとしか考えられぬほど、異様……異常な気象なのだ。

「異常気象かあ……。お姉ちゃんも、今日は異常起床やったし」

ラジオの音を聞いて、ゆかりは嘲るように言つてのけた。瑞穂は、寒いよ、と窘めるに留まった。そんな事でいちいち苦笑していたら、体が持たない。

屋敷内部を片っ端から探索したが、特に怪しいものは見当たらなかつた。いや、怪しいものどころか、家の中はふだんとあまり変わっていないように見える。

「やっぱり、勝手に忍び込んでよかつたのかな……」と、瑞穂が不安げに呟いた。

本来ならば、警察を呼んで任せればいいのだが、間の悪いことに、この間のナゾノクサの大量殺害の現場検証で、皆が出払っているのだ。ただでさえ田舎の警察である。人材不足な感は否めない。

硬い表情を崩さずに振り向いたツクシは、静かに瑞穂の呟きに答えた。

「大丈夫。ガンテツさんは、ボクの知り合いだから」

ツクシの話すところによると、この屋敷の主人は、ガンテツという人であるらしい。ガンテツは、有名なモンスターボール職人であり、各地からボールの以来が殺到しているという。

たしかに屋敷には、モンスターボールの工房らしき小屋も見つかっているのだから、間違いない。

ジョウト地方だけでなく、全国にその名を知られる名工であるらしく、モンスターボールの製作依頼は、数えきれぬ程であるらしい。そのため、中には、依頼を断られてしまう人も少なくないという。

「そやったら、その爺ちゃんは、モンスターボールの依頼を断られた人に誘拐されたんやろか？」

ゆかりの言葉に、瑞穂は首を振った。

「でも、そんな人達には見えなかつたよ」

「それじゃ、ガンテツさんをさらった人達って、どんな恰好をしてたの？」
「ええと……。全身、黒尽くめな、2人組の男だった」

気を取り直して、再び屋敷内の搜索を行ったが、やはり怪しいところは全く見当たらない。屋敷の玄関で、雪が延々と降るのを見つめながら、瑞穂は訊いた。

「それじゃガンテツさんは、こんな広いお屋敷で一人暮らしたの？」

「いや。孫娘の女の子と一緒に暮らしてる。たしか……チエちゃんっていう名前だった。うーん、そうだなあ……」と、ゆかりを指さし「この子と同じくらいの背丈だったと思う」

「ちよつと、待って」瑞穂はゆかりから目を離して、慌てたように口に手をあてた。「それじゃ、変だよ」

「なにが……？」

「だって私が、連れ去られるガンテツさんを見た時は、ガンテツさんは1人だった。女の子なんていなかったよ。」

「家出中やったとか？」

さりげなくゆかりを無視し、瑞穂は屋敷の中を見渡した。

「それに……、家の中が、まったく荒らされてない。あの時、ガンテツさんは、すごい声で怒鳴ってた。ものすごく抵抗したんだと思うの。それだったら、家の中が少しは荒れ

ていたって……ううん、荒れてない方がおかしい」

「それって、どういう意味？」

ツクシの問いの答えに、瑞穂は詰まった。不自然だけれど、不自然である理由が見当たらない。ん？ 待って、なにか忘れてない……？

虚ろな目でこちらを見つめながら、ガンテツは、た・す・け・て・く・れ……と確かに言っていた。

（なにをするんや！ やめろ！ やめんかい！ そうか……おまえらかつ！）

『おまえら』……？ ガンテツの残した唯一の手がかりが、頭に浮かんできた。

「あ……そうだ……」

なにか、ひらめいたような表情を浮かべ、瑞穂は玄関の床を見渡した。目を皿のようにして何かを探している瑞穂に、ツクシは声を掛ける。

「ねえ、なにを探しているの？」

「たぶん、私の考えが正しかったら……あ！」と、瑞穂は食い入るように玄関の床を見つめた。

そこには、何か液体がこぼれた後のような、シミがついている。コンクリートの床に、水滴をこぼしたような小さなシミが、くつきりと。

「これは……何？」

恐る恐る訊くツクシに、瑞穂は意味深に頷き、そのシミの臭いを嗅いだ。

「間違いないよ……だとすると……」

なにか、間違いない、の？とツクシとゆかりは、瑞穂の顔を覗き込んだ。心配そうに見つめるツクシを、瑞穂は苦い表情で見上げた。

ポケギアに映しだされたマップを目で追いかけているながら、瑞穂は言った。確信だった。

「ガンテツさんは……この、つながりの洞窟って場所にいる」



見上げた空に煌めく、あの青い光は、なんだろう。

青い光は、黒雲に紛れて、消えていく。光が空から漏れている。そして、雪となつて地面へと舞い降りる。

つながりの洞窟を前に、氷は、雪の吹き荒ぶ空を見上げていた。今の私の心も、これほどまでに冷たく、荒んでいるのだろうか――

洞窟内へ入り、奥へと進む内に、体中に積もった雪が溶けて、冷水へと姿を変えていく。

姉さん。 私は、変わったの？

あの時……あの男達を殺したときに聞いた、自分の奇声。 笑声。 興奮。 快樂？

認めたくはない。 しかし、認めざるをえない。 それを清算するために、ここまでやってきたのだ。 こんな凄惨な、復讐……逆襲……怨恨……私刑を行うために。

かなり奥まで進んで、なにかを感じたのか氷は立ち止まり、鋭い眼光で暗闇の先を覗んだ。 足音が聞こえる。 そして、足音は確実にこちらに近づいてくる。 氷は静かに、しかし強く、地面を足で踏みならした。

「誰だ？ ……そこにいるのは……」

その音を聞いて闇の奥から声が聞こえた。 足音は早くなり、黒服の男が2人姿を現した。

「な……、おまえは……」

2人の黒服の男は、目の前の少女が氷であることを認めると、狼狽したような声をあげた。 氷は微動だにせず、黒服の男達を、蔑んだように見つめている。

「バイカに……フクジュね……。 まだ、覚えているわ」

黒服の男の片割れである、バイカは氷の言葉に反応し、唇を震わせた。 その隣でフクジュは、信じられない、といった感じで、目を剥いている。

「てつきり、カヤさんに叩き殺されたのかと思つてた……」

「お……俺もだ……」

その2人の言葉が気に障つたのか、氷は一步前へと歩み寄つた。2人は思わず後ずさる。まったく表情を変えないまま、目を細めて、氷は2人を眺めた。

「あなたには……」と、バイカを指さし「5千8百9十二回蹴られたわ。……そして……」

妖しい瞳をフクジュを向けた。その瞳に、憎悪の炎がのたうっている。

「あなたには、」指先をフクジュへと移し「5千4百6回踏みつけられた」

ゆつくりと手を下げ、2人に向き直り、氷は不気味な笑みを浮かべた。

「覚えてる？ 私、覚えてる。覚えてる……」

蹴られる度に、殴り倒される度に、踏みつけられる度に、骨が軋んで碎ける音が、耳に聞こえると同時に、心は涙となり、明日も希望も幻として、夢として見ることも許されず、ただただ瞳から頬をつたつて流れて、消えた。いつしか、涙すら、枯れ果て、憎悪で燃えるような荒野となつた心は、自らの熱で溶け、歪んだ。

「あなた達は、あの女と一緒に、私を……私の心を殺した。何度殺したら、気が済むの？ あなた達なんて、あの女がいなければ、何もできやしないくせに……」

「ふ……。おまえだって、カヤさんの前では、まるでネズミのように震えていたのにな。

お笑いだったぜ。ごめんなさい、ごめんなさい、って泣きわめく、おまえの惨めさはよ」

氷は、その言葉に拳を震わせた。

笑っていた……永遠に続く泣き声は、自分のものだった。殴られ、蹴られ、踏みつけられ、それでも立ち上げる自分……そう、また殴られるために。

「それは、昔の話よ。今は違う……」

「ほう？ どこが、どう違うんだ？ おチビちゃんよお」

フクジュが、おどけたように氷をからかう。相変わらず、無表情のまま、氷は話を続けた。

「あなた達は、知らなかったみたいね。私の力」

「なんの話だ？」

「へん！ 強がりも、いいかげんにしろよ。このクソガキ」

バイクがしびれを切らして叫んだ。氷は、男達を前に頬が緩むのを感じていた。雑魚だ。そう思った。こいつらの恐怖に歪む顔を想像し、ペろりと舌をだして、氷は妖笑した。

尋常でない氷の様子に、すこしばかり戸惑っている2人の男に向けて、氷は訊ねた。

「あの女は……、カヤはどこにいる？」

「道に迷ったのか？　だとしても、おまえみたいな生意気なガキに教えるかよ」

「そう。わかったわ、自分で捜す……」

氷は一言だけ呟き、小さく俯く。フクジュとバイカは、氷に背を向け立ち去ろうとした。

「……まったく、相変わらず、変なガキだぜ……なあ？　バイカ」

フクジュの問いに、バイカは答えなかった。不審に思い、フクジュは隣を向いた。バイカの姿はそこになかった。次の瞬間、ドス、という音でバイカがそこへ落ちた。

「おい！　どうした？　バイカ……。ヒイツ……！」

変わり果てたバイカの姿を目の当たりにし、フクジュの体に電撃が走った。慌てて氷の方を向こうとした。だが、体が反応しなかった。動かなかった。首筋に激痛が走っていたのだ。氷の瞳が襲ってきた。身を振る、動けない。全身が痺れたように、麻痺したようになり、膝から崩れそうになるのを、持ち上げられた。

氷がこちらを……フクジュを見つめている。フクジュは、その氷の姿を見て、戦慄した。笑みを浮かべながら、氷は上擦った声で呟いた。

「それよ……。ソノ顔ヨ」

「おまえ……、なにものだ……」

「見ての通りよ」

意識が遠くなつていく。視界がぼやけていく。

体中の力が抜けていく……。

両手がだらりと、下がった。悲鳴を発した。聞こえない？ もつと、もつと大きな声

で叫んだ。聞こえない……!?

もつと。もつと。大きな声で叫んで、助けを呼ばなければ。

聞こえない。聞こえない。光は？ どこにあるの？

胸の奥から聞こえる、心臓の波打つ音が消えていた。

氷の妖しい笑みは、萎んでいく汚れた瞳に焼き付いていた。



愚かなる暴挙

岩影に身を潜め、辺りに誰もいない、危険のないことを確認すると、瑞穂は安堵の溜息をもらした。つながりの洞窟に入って、すぐ絶叫が響いたときには、心臓が飛び出すほど瑞穂は驚いた。

「今の……誰の声だろう?」

洞窟の奥に進みながら、瑞穂は不安げに呟いた。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。今の声は、ガンテツさんじゃない」
「それなら……いいんだけど」

ヒワダタウン北部に位置するガンテツの屋敷から、このつながりの洞窟までは、走ったとしてもかなりの距離になる。雪の降る中、全速力で走ってきた瑞穂の、可愛らしい顔は蒼白になっていた。

荒い息をはきながら歩き続ける瑞穂を見て、ゆかりは心配そうに訊いた。

「お姉ちゃん……大丈夫なん? 顔、真っ青やで……」

「大丈夫だよ……。このくらい……」

「でも、お姉ちゃん……心臓が弱いんやろ?」

「大丈夫。ホントに大丈夫だから……」

洞窟の深部へと進むにつれて、辺りは暗さを増していく。ゆかりはメタモンを出して、懐中電灯へとメタモルフォーゼさせた。辺りは、ある程度の明るさを取り戻した。

メタモン電灯の灯りを頼りに前へと進みながら、ツクシは瑞穂に訊いた。

「ねえ、瑞穂ちゃん」

「ん……どうしたの？ ツクシ君……。」

歩きながら、瑞穂はツクシの方を向いた。先程よりはマシだが、まだ幾分顔色が悪い。庇うように胸を撫でるその姿は、どこか痛々しささえ感じさせる。

「なんで、ここにガンテツさんだけいるってわかるの？」

「ここにいるのは、ガンテツさんだけじゃないと思う」

「それ……どういう意味なん？」

「まさか……」 ツクシは、額に滲んだ冷汗を拭いながら「チエちゃんも、ここに？」

うん、と瑞穂は頷き返した。

「たぶん、そのチエちゃん、って子は、昨日の夜には、ガンテツさんをさらった人と同じ人に誘拐されてたんだと思うの」

「昨日の夜に!？」と、ツクシとゆかりは驚きの声をあげた。

「それでガンテツさんは夜中に、チエちゃんを捜して、ヒワダタウンを歩き回ったと思う。警察の人達は、丸々一日、ウバメの森の現場検証に行ってるから、自分で捜すしかなかった。でも、結局見つからなくて、帰ってきたところを、玄関に立ったところで狙われた……。あるときガンテツさんは『そうか、おまえらか！』って叫んでたから……」

「だから、家の中は、ほとんど荒れてなかった、つてわけだね？」

「うん」

再び頷いた瑞穂を見て、ゆかりが不思議そうに訊いた。

「そやけど、なんで、そんな回りくどいことしたんやろ？」

「ヘタに家の中で暴れられて、証拠を残したくなかったからだと思う。」

ツクシ君の話だと、ガンテツさんは滅多に外には出ない人だったらしいから、買い物にでたチエちゃんをさらって、それを心配したガンテツさんが外に出るのを待ってたんだよ。きつと」

ゆかりは納得したように頷いたが、こんどはツクシが訊いた。

「でも、だからって、なんで、ここにいてるってわかるの？」

「鎮静剤をつかってたから」

「鎮静剤……？」

「あ、ほら。あの、玄関の床に染み込んだ液体のことだよ。あれね、ケタミンっていう鎮静剤で、お年寄りや子供でも、比較的安全につかえるんだ。注射するときには抵抗されて、少しだけ、こぼれたのかも……」

「だけど、その鎮静剤と、この洞窟と、なにか関係あるの？」

「だって普通、相手をおとなしくさせるだけだったら、エーテル——クロロホルムでもいいけど——を嗅がせるだけで十分なもの。それなのに、わざわざ注射器を持ち出すって不自然だよ。だから、鎮静剤を打たなきゃいけないほど遠くに連れて行くんじゃないかな、って思ったの」

「そっか。それほど遠くにあつて、人が隠れられる場所って言えば、この洞窟か、ウバメの森くらいなものね。それにウバメの森は、いま警察の人がいるから……」

「そういうこと。……それよりも、さっきの悲鳴は一体なんだろう……」

ドスツ。

「そこまで言った瑞穂の背後から、何か落ちてきたような音が聞こえてきた。」

「なに？今の音……あつ……！」

振り返って瑞穂はそれを見た。少女の頬が、さらに蒼白くなり、口元が恐怖に歪んだ。

「なんやの？ お姉ちゃん」

「見ちゃダメ」

「え？」ツクシが、何事かと後ろを振り向こうとする。「なにが落ちてきたの？」

「見ちゃダメっ！」瑞穂は静かに、それでいて強い口調で制した。

瑞穂の強い口調にただならぬものを感じたツクシは、そこで動きを止めた。

「そのまま……」瑞穂は、落ちてきた何か、へと近づく。「そこで動かずに待ってて」

「うん……わかった」

ツクシ達が立ち止まったのを確認すると瑞穂は、落下物を訝しそうに眺めた。死体……それも裸体だった。ふたつの死体が、地面に突っ伏した恰好で横たわっていたのだ。

瑞穂は思わず唾を飲み込んだ。眼を背けたいのだが、そういうわけにもいかない。

たぶん、男の人……と、頭の中で、瑞穂は小さく呟いた。出血はない。首筋に小さな傷があり、その周りが黒ずんでいる。死体は、水分が完全に蒸発しており、ミイラのように縮んでいた。あんぐりと開いた口からは夥しく唾液が溢れ、頭髮は見るも無惨に抜け落ちている。

恐怖に歪んだ表情で見開いている眼。そこに映っているのは何だったのだろう――

なにか、恐ろしいものでも見たような、怯えている眼球を、瑞穂はゆっくりと覗き込

んだ。

「それは、なんなの？」

静寂の中、ツクシはおそろおそろ訊いた。ゆっくりと立ち上がりながら、瑞穂は悲しそうに答えた。

「男の人の……遺体。2人いる」

「死体……?!」

驚いたような声をあげ、ツクシは振り向こうと、体を振った。

「見ちゃダメ……。夢に出ちやうよ?」

「う……うん。」ツクシは動きを止める。「そんなに酷いの?」

瑞穂は問いには答えなかった。だが、その沈黙が全てを語っていた。しばらく、ふたつの死相を見つめて、瑞穂は思いもよらぬ事を口走った。

「この人達……、ガンテツさんを誘拐した人達だよ」

「えっ?!」

「ホンマなん?」

ツクシとゆかりは一樣に、驚いたような声をあげた。

「うん……。まだ、何かあるよ、この洞窟には……。私達の知らない、禍々しい何かがある」

瑞穂のその悲しげな言葉を聞きながら、ツクシは再び歩き始めた。冷たい足音だけが、薄暗く、不気味な洞窟に響いた。

「とにかく、先に進もう……」



そこに誰がいる。

微妙な空気の変化を感じた氷は、すぐ近くにあつた岩影に身を潜めた。向こうの様子を覗くと、そこには女と男が、縛られている老人に、なにかを話しかけている。老人は、既に虫の息になっており、険しい顔つきで、2人の女と男を睨み付けていた。

「なによ、その顔は！」

女はそう叫ぶが早いか蹴りつけ、老人の腹に食い込ませた。老人は、苦しそうに身を振り、その場に倒れ、血を吐いた。

……非道い。

その老人にかつての自分の境遇を重ね合わせてしまった氷は、思わず眼を背けた。

……あの女……カヤは、昔とまったく変わっていない……。

でも、それも、もう終わり。私が、あの女を殺せば、全てが終わる……。

もう、あの女の幻覚に振り回されるのは、限界だ。あの女を殺せば、私は解放される。

いままでずっと彷徨ってきた迷宮の出口を、やっと見つけられる……。

「おまえら、なんぞに……このワシが言いなりになるとでも思うとつたのか？」

血泡を滴らせながら、老人はカヤとヒエンを睨み付けた。ヒエンは腕を組み、カヤが老人を殺してしまわないように監視している。

白い歯を剥き出しにして、カヤは興奮したように叫んだ。

「ハハハッ……。いつまで、そんなこと言ってられるの？」

爪先を振り上げ、老人の顔を蹴りつけようとしたカヤに、ヒエンが割って入った。

「やめろ。まだ、殺すな」

「どいてよ！ こんなジジイ、とつとと潰してやるわ！」

「いいから、あの娘を連れてこい」

チツ、と舌打ちしながら、不服そうにカヤは洞窟の奥へと行き、縛られ、酷く怯えている女の子を連れてきた。カヤは、その場に女の子は突き倒した。

その女の子を見た途端、老人の顔が強張る。そして狼狽えたように、女の子の名前を呼んだ。

「ち……チエ……！」

「じいちゃん……た……たすけて……いた、い……いたいよう……」

女の子は老人を見つめながら、悲痛な呻き声をあげた。小刻みに身体が震え始め、涙が流れる。たすけて。たすけて。しゃくりあげながら女の子は、讒言のように呟いている。

老人の狼狽えように、ほくそ笑みながら、ヒエンは老人に言った。

「どうです？　これで私達に協力していただけますかな？」

背後では、カヤが血走った目で老人を睨み付けていた。その気になれば、すぐにでも女の子を締め上げることが可能なムチを、その手に握っている。

老人は、生まれて初めて、恐怖というものに押し負けそうになった。そんな感情が顔に出ているのか、カヤは、ざまあみろ、といった表情をしている。

一段と大きな声で、ヒエンは強調した。

「教えていただけませんか？　ジーエスボールとやらの在処を……」

「なんで……おまえ達が、GSボールを知ってるんや……」

老人の震えた問いに、ヒエンは微笑を浮かべながら答えた。

「私達の情報網を甘く見ないでいただきたいですな、ご老体。ジーエスボールなら、よく存じておりますよ。もっとも、実物を見たことはありませんが……、金と銀に光り、G

とSの刻印がなされているモンスタースターボールであると言うことぐらいなら」

そこまで言つて、チラリとヒエンは、老人の顔色を伺つた。一見、丁寧に見えるヒエンの言葉には、『もし、偽物でも渡そうものなら、容赦はしない』という、無言の圧力が加わつていたことは、誰の目から見ても明かである。

「どうです？ ジーエスボールの在処を教えてくださいませんか？」

「しかし……あのボールは……」

「別に構わないのですよ。そのかわり、お孫さんの命は保証しかねますが……」

ヒエンは冷徹な目で、カヤに合図を送つた。

……そんなガキ、おまえの好きにしていざ。自由に、殺してもかまわない。好きにしろ。どんな風にでも、殺して、このジジイの前で、晒し者にしてやれ。

その合図を受け、カヤはにんまりと笑い、モンスタースターボールを地面へと叩きつけた。ボールから迸る光の中からあらわれたのは、電気ねずみポケモンのライチュウだった。濁つた黄色い身体には、茶色い模様が浮かんでおり、可愛らしいが、どこか攻撃的な顔つきをしている。

カヤはライチュウのギザギザした尻尾を慎重につまむと、チエの口へと強引に押し込めた。チエは何も言うこともできず、ただただ涙を流し続けることしかできない。

こわいよ、いたいよ、たすけて……。



底見えぬ微笑

ライチュウの背中からは、バチバチと電気が弾けている。その気になれば、チエの身体は、電撃で弾け飛び、黒こげにされてしまっただろう。そんな孫の泣き声を聞き、老人は、それまでの弱腰が嘘のように怒鳴った。

「おまえら、あんなボールのために、人の命を奪うんか！」

「そうですよ」冷ややかに、ヒエンは言い放った。

「それに、もう既に死人はでていますよ。ご安心ください」

「な、なんやと？」

老人は目を剥いて、ヒエンを睨んだ。

「おや？心当たりはございませんか？ 彼も、ずいぶんと薄情な師匠をもったものだ

……」

「まさか……」

「あなたのお弟子さん……、あなたと同じで、ずいぶん強情だった。あなたからジーエスボールの在処を聞き出し、盗んでくるだけで、莫大な報酬を差し上げると申し上げたのに、事もあろうに断ってくる」

「……で、殺したんか？」

「そうですよ」ヒエンは、ライチュウの尻尾をくわえたまま動けなくなっているチエを見やった。少しでも動こうものなら電撃を喰らわしてやる、とカヤが小声で囁き続けている。

「どうやら、あなたのお孫さんも、お弟子さんと同じ方法で殺すことになりそうです」

精気抜けたように、老人はその場に萎みこんで、目を閉じた。

惨い……、惨すぎる。なぜ、あの青年が殺されなければならぬのだ。そう思うと同時に、熱い、沸き立つような怒りがこみあげてくるのを、確実に、間違いなく老人は感じていた。再び目を開き、出た言葉は震えていた。

「おまえら……絶対にくるさん」

「ほう……そんなふうに憤っていられるのも、そこまです。お弟子さんの惨めで、恥さらしな死体を見たら、怒る気も失せましょう」

洞窟の中に、寒々とした空気が流れた。そこに聞こえるのは、チエの噁り泣く声と、カヤの押し殺した笑い声だけだ。

口の中の尻尾がビリビリと痺れて痛い。今すぐにでも、吐き出したい。だが、そんなことをして想像する、数秒後の自分は、頭から煙をあげ、焦げくさい臭いを発しながら、その場に横たわる惨めな黒こげの死体なのだ。そう思うと、体の震えを抑えられない、

でも、動いたら……。

黒々とした岩に囲まれたその威圧感に、チエは、そのまま押しつぶされてしまいそうになる。恐怖は、太股のあたりを痙攣させ、口の中をカラカラに乾燥させた。

嫌らしい微笑みを浮かべながら、ヒエンは辺りを見回している。あの男の死体は、たしかあの辺りに……。

「それは、これのこと……？」

少女の声が、洞窟に冷たく響いた。氷だった。無表情のままヒエンとカヤを交互に見つめ、その場に立っていたのだ。少女の足下には、黒く焦げ、原型もわからないほどに炭化した、男の死体が横たわっている。

突然の事に、ヒエンは驚きを隠そうともせず、叫んだ。

「おまえ……水か……？」

「雑魚に用はない」

そう吐き捨てる、氷は、カヤへと目を向けた。黒いユニフォームに身を包んだカヤ。たしかに美しいが、その心は醜く歪んでいるのだ。

そんな醜い心を隠そうともせず、カヤは怒ったような表情で、氷を睨んだ。氷も負けじと、鋭く睨み返す。

「いまさら戻ってきてきても、遅いわよー！」

鋭く白い歯をむき出しにして、カヤは大声で叫んだ。すこし俯き、上目遣いでカヤを睨みながら、氷は言い放った。

「戻ってきた、つまりはないわ。私はただ、それなりのお返しをしに來ただけ」

「お返し？」ふん、と鼻を鳴らすと、カヤは腰に手を当てた。

「つまり、復讐……よ」

「復讐……？ 私は、あんなに氷……あんたのことを愛してたのに、可愛がつてあげたのに、なんでで事もあろうに、復讐されなきゃなんないのよッ！」

「おまえの愛情表現は狂ってるからだ」

カヤは歯軋りし、怒り漲るような目つきで氷に言った。

「おまえ？ 今、あんた、私の事を〃おまえ〃 って言ったわねっ！」

「言ったわ」

「この……」カヤは足を激しく踏みならし「私のペットの分際で、その態度はなんなのよっ！」

「私は、おまえのペットなんかになつた覚えはないわ」

啞然としながら、カヤと氷のやりとりを聞いていたヒエンが口を挟んだ。

「だが、おまえは、カヤのペット同然だった」

「黙れ、雑魚」

唇を軽く噛みながら、氷はヒエンをチラリと見やった。表情にはあらわれないが、こめかみがピクピクと動き、氷が憤っているのは明らかだ。

そんな氷の態度をせせら笑い、頭を掻きながらカヤは言った。

「ふん、まあいいわ、許してあげる。どうせ、私の愛に耐えられるのは、あんたしかいなんだもの。こんな事くらいで、あんたを殺しちゃうのは、勿体ないわ」

「体は耐えられても、心は耐えられなかった……」

「なに？」氷の眩きに、カヤは怪訝そうに眉をひそめる。氷は言葉が続けた。

「もう、嫌なのよ……。もう、沢山なのよ……。おまえに怯えながら生きるのは、もう嫌なのよ」

「だから、なんなのよ？」

氷の瞳が、妖しい光を帯びてきた。それに気付いたのか、カヤは相手に気付かれないように、身構えた。カヤの様子を伺って、ライチュウも主人に従い、いつでも氷めがけて突進できる体勢をとる。

「だから、殺してやる……」

そう言い放った氷めがけ、カヤの合図でライチュウが飛び出してきた。

「裏切り者は、始末される……か」

にやけ、腕を組みながら、ヒエンは他人事のように呟いた。

カヤは一步前へ踏み込むと、洞窟中に響きわたる大声でライチユウへの命令を叫んだ。次の瞬間、ライチユウから10万ボルトに達する高電圧流が放たれる。

氷は一步も動かず、目前まで迫った電流を見つめている。

バチウウウ
!

スパークし、辺りに弾けるような音が聞こえた。氷は電撃を喰らい、その場に倒れるはず、だった。しかし、氷は火傷ひとつ負っていないかった。氷への電撃は、何者かによって、遮られたのだ。

彼女の目の前には、紫の皮膜に覆われたポケモンが、宙に浮いていた。おそらく、その紫の皮膜が電撃を通さないようになっていたのだろう。そのポケモンは、完全にライチユウからの電撃を防いでいたのだ。

マントのような皮膜の中から、鋭い牙を持った、サソリのようなポケモンが姿をあらわした。両腕にはハサミがギリリと光り、尻尾は長く先は毒針になっているポケモン。グライガーだ。

「危なかったあ……大丈夫でした?」

疲労したような顔つきで、水色の髪をした少女が、背後から話しかけてきた。



薄暗く、冷たい洞窟は、一気にその緊迫度を増した。話す間もなく、2人の少女めがけて、電撃、第二波が襲いかかってきたのだ。

少女、瑞穂はとっさに身を屈め、グライガーの背後へと飛び込んだ。

「お願い、グラちゃん」

グライガーは再び皮膜を纏った。電撃が食いつくが、皮膜は電気を通さない。連続の攻撃に消耗したと見えて、ライチユウの電撃が止んだ。

グライガーは皮膜から顔を出して、瑞穂の腕の中に潜り込んだ。

「あなた……ナニモノなの……？」

電撃が止んだのを確認し、氷が瑞穂に訊いた。弾かれた電撃を受けたのか、頬が少しばかり焦げている。

「私？ 私 は、瑞穂。あなたは？」

「妖魔——バケモノよ」

意味がわからず、瑞穂はキョトンとした表情で氷の横顔を見つめた。

「それ、どういう意味……？」

「まって、キタわ」

2人の少女を交互に眺めながら、カヤはいきり立ったように拳を握っている。そのあ

まりの殺気に、瑞穂は背筋が凍るのを感じた。隣の女の子は、と見ると、足下が震えている。震えているのだ。

「突然、飛び込んでくるなんて、失礼なお姫様ね」

「突然、人をさらう方が失礼だと思いますけど。それに、あなた達、ロケット団ですね？」

「そうよ。でも、普通のロケット団とは違う。私達は……」

「やめろ」ヒエンが割って入った。「べらべら喋らず、とつとと2人とも始末しろ」

その瞬間、瑞穂の頬が緩んだ。

「2人だけとは、限りませんよ」

瑞穂がそう言うと同時に、岩影から瑞穂と同じ年頃の少年、ツクシが飛び出してきた。その隣には、ちよこんとゆかりが付き添っている。

「なにー！」

ツクシは一気にヒエンの懐へと詰め寄ると、モンスターボールを放り投げた。

「いけっ！ 誇り高き虫ポケモンの戦士。ストライクー！」

ボールが開き、中から蠟螂ポケモン、ストライクが閃光の如く飛び出した。

「ストライク！ 電光石火ッ！」

宙を飛んでいたはずのストライクの姿が消えた。幾つものストライクの影が飛び回

り、一同が見つめる間もなく、老人とチエのロープが切れた。

「ガンテツさん、チエちゃん。はやく、こっちに逃げるんだ！」ツクシは叫ぶ。

「そうはさせない」

ヒエンはオニドリルを繰り出して、ツクシに連れ添いながら逃げようとする老人を取り囲んだ。老人は立ち止まる。ここまでか、そう思った。目の前にいるオニドリルの研ぎ澄まされたクチバシが迫ってくる。

しかし、そのクチバシが老人に触れることはなかった。オニドリルの首は、氷によって握られている。苦しうにオニドリルは身を振った。

「す、すまんの……」ガンテツは氷を見つめながら言った。

「邪魔なのよ。はやく、逃げて……」

ツクシ達が洞窟の出口へと消えていくのを確認すると、オニドリルと地面へと叩きつけ、氷は瑞穂とゆかりに訊いた。

「あなた達は……逃げないの……？」

「私は、ロケツト団の人達に、ちよつと用事があつて……」

「ウチは、どこまでもお姉ちゃんについていくん。」

「そう……、でも、邪魔はしないで……」

そこまで言つて、氷はヒエンとカヤに向き直つた。

あれ……？ 瑞穂は氷を見た。やはり先程と同じく、足下が震えていた。

「氷……あんた、私のことが、恐いの？」

全てを見透かしたように、カヤは言った。凶星だったのか、ビクリ、と氷の顔が強張った。

「こ、こわく……なんか……」

「恐いでしょ？ いろいろ可愛がってあげたものね」

氷の頬はひきつっている。恐くない。恐くなんか無い。恐がつてなんかいない――

恐れている？ なにを。あの女を？ 恐い？ 恐いよ！ 恐くないの！

ただでさえ白い顔が、青ざめていく。隠し事が見つかった子供のような、寒々とした表情をしている。

「恐くない……」

「私に嘘をつく……どうなるか、わかってるわよねえ？」

この女には逆らえない。いま、まさに、その通りだった。事実、その一言だけで、氷の体はまったく動かないのだ。なんて、愚かなんだろう。こんな簡単な事を忘れていたなんて……。

この女には、私は逆らえない。恐いのよ。睨まれるだけで、死にそうなのよ。さつき

だって、簡単に避けられたはずの電撃に、なす術もなかった。

「恐いわよ」

「怖い。この人が……？」

隣の瑞穂が、驚いたように呟いた。抱いているグライガーが、心配そうに瑞穂の顔を見つめている。

「だから、おまえを殺しにきた。バイカも、フクジユも、私が殺した。次は、おまえを……オマエヲ殺す……」

「バイカもフクジユも、だど？ あの2人を殺したのか……」

カヤとは対照的に、ヒエンの表情が固くなった。

(さっきの、ミイラは……このコが……？)

瑞穂は先程見つけた屍体のことは口に出さなかった。だが、戦慄で背筋が震えた。先程見つけた、干からびた男達の死体が、この少女の言う、バイカとフクジユである可能性は、十分に考えられるからだ。

「そんなバカな……、あの2人が、おまえみたいな子供に……」

信じられない、といったように、ヒエンは1人首を振った。

笑いながら、しかし無表情で、

「なにも、知らないのね」

カヤと氷は、まったく同時に、呟いた。

ヒエンは驚いたように、カヤと氷の顔を見比べる。

「私が、なにを」知らない」というのだ？」

「全部よ」カヤは、口に手を当て、何かを考えている。「そう、何も知らない」

「何がだ！ 私は大体のことは知っている。おい！」ヒエンは氷を睨んだ。「おまえ、何を隠している！」

氷は答えない。ヒエンを完全に無視し、カヤだけを睨んでいた。

瑞穂とゆかりは、唾然としながら、その場に立ちすくんでいる。

「答えろ！」

ヒエンはしびれを切らした。所詮は悪人。いくら紳士を気取っていても、短気なのだ。そんな中、瑞穂は意を決して言った。

「あの……！ 少し、訊きたいことがあるんですけど……」

「何よ」と、カヤは瑞穂を見つめる。

「え、つと。つい最近、私のポケモンが、ロケット団に誘拐されちゃって……」

カヤは突然吹き出した。唇をピクピクさせながら、腹を抱えている。

「知らないわよ。そんなこと！」

「……でも、同じロケット団だと思って……」

「全然。言ったでしょ？ 私達は普通のロケット団とは違う、って。私達は……」
「言うな！」

怒り心頭のまま、ヒエンは遮る。カヤはヒエンを睨み付けた。

「いいじゃない！ そのくらい。私達は、ロケット団の独立工作部隊なのよ」

「独立……工作部隊。あ、独立……?!」

「察しがいいわね、お姫様」

隣で黙っていたゆかりが、瑞穂の服を引っ張った。

「どういふことなん？」

「独立……。つまり、ロケット団ではあるけれど……」

その時、氷が独り言のように呟いた。

「ロケット団特殊独立工作部隊……。通称、影の妖星……Shadow Comet
……。ロケット団の一部隊に過ぎないが、ロケット団のボス、サカキですら、その実体を掴みきれていない程、謎に包まれている。上層部や他の機関の束縛をまったく受けず、ロケット団の中では、ある意味、孤立している……」

「その通りよ」

カヤは面白くなさそうに呟いた。「私が説明するつもりだったのに」

ギリギリと歯軋りの音が響いた。ヒエンは、拳を振り上げる。

「ベラベラ組織の秘密を喋るな！ とつとこのガキ共を始末しろ！」

「ふん……。うるさいわね」

「私は上官だ！ 命令に従え！」

「上官のくせして、何も知らないのね……。笑わせるわ」

「なんのことだ！ どうでもいいから、はやくしろ！ 逃げられたらどうする！」

カヤは瑞穂と氷を指さした。目を見開いて、獲物を探した。どちらを可愛がろうか。ニヤリと笑うと、カヤはライチユウへ命令を下した。

「ライチユウ！ 10万ボルトよ！」

三度、ライチユウの電撃が、瑞穂を襲った。すぐさま、グライガーが飛び出し、電撃を弾き飛ばす。効果は全くない。グライガーに電撃が通用しないのを見るや、ライチユウはその標的を変更した。

氷に向き直り、電気ショックを放つ。氷は軽やかに、電撃を避けた。こんどは、ちゃんと避けることができた。そして、掠れる声で言い放った。

「いつまでも……。私が……。弱虫だと、思うな……」

「やっぱり怖い？ 私の事が恐いでしょう？」

せせら笑うカヤを、氷は今にも泣き出しそうな顔で、睨み付けている。

感情……。憎悪。表情、変貌。

「泣け！ 私、あんたが泣くのを見るのは久々なのよ！」

「私を、泣けなくしたのは、オマエだ！ 私の涙を枯れさせたのは、オマエだ！」

氷は叫んだ。その瞬間、肩に激痛を感じていた。思わず左腕を見やった。左腕は、もぎ取られていた。ライチユウの鋭い牙が、氷のか細い腕を引きちぎっていたのだ。

瑞穂は短い悲鳴をあげた。目の前で人間の腕が弾け飛ぶなど、始めて見た。氷の肩から、赤黒い血が、ドツと溢れて吹き出す。洞窟は深紅に染まった。ゆかりは、その場に崩れ倒れた。眼を真ん丸にして、怯えている。

「ハハハハハッ！ 痛い？ 痛いわよねえ？」

カヤは歪んだ笑みを浮かべている。

瑞穂は、氷がカヤに対して恐怖を抱いていた理由が、解ったような気がした。笑っている。笑っているのだ。何か、異様な、人間ではないような、人間。

夥しく吹き出す鮮血を見つめながら、氷はカヤを睨み返した。

そして、微笑を浮かべる。不気味な、それでいて底の見えない悪魔のような微笑みだった。

晒される羞恥

「これで、余計な事は、考えずにすむわ……」

カヤは身構える。瑞穂はただただ、呆然とその様子を眺めていることしかできない。氷の瞳が妖しく光った。ライチュウは、ピクリとも動かなくなる。痙攣していたのだ。

吹き出す鮮血が霧のようになり、氷の肩から、血ではない、紫色をした、異形な腕が飛び出した。一本ではない、何本も、まるで無数の蔓のように、わしゃわしゃと伸びていく。右の白い腕も、紫へと変色していく。パツクリと先が裂けるが、血は出ない。唇が膨らみ、氷の口から白く、鋭い牙が剥き出しになった。

瑞穂は、変貌していく氷の様子を見つめ、息を呑んだ。

眼球が破裂し、鮮血も程々に、腕に生えているのと同じ紫色の触手が伸びた。同じく、体中から無数に、紫色の触手が、白い肌を突き破っている。黒々としたワンピースが引きちぎれ、触手は氷の体を覆った。無数に絡まりあう触手の中に、少しでも氷の小さく白い裸体が覗いている。

咆哮した。少女の面影はなく、ただ、獣の雄叫びをあげているのだ。

「ギャーボー！」

絶句した。瑞穂はその触手の一本一本が、蛇ポケモンのアーボであることに気付いたのだ。

「う、ウソ……」

隣では、ゆかりが瑞穂に抱かれるように倒れた。ゆかりを抱きかかえる瑞穂。失禁に濡れたオーバーオールが生温い。

再び咆哮。無数の触手であるアーボが、一斉にカヤへと襲いかかった。

「ヒツ……ひい、い、ツ！」

ヒエンは金切り声をあげた。がくがくと忙しく震え、怯えながら、飛び退く。カヤは薄笑いを引き締めた。モンスターボールを手に取り、氷へ……異形へと投げつける。

その瞬間、異形の生物の触手は引きちぎられた。

鮮血が飛び、瑞穂の足下には、ビクビクと痙攣するアーボの首が転がっていた。異形はと見ると、緑色の唾液を滴らせながら、平然とカヤへと向かって前進している。

「ア……ひ、ヒエ……！」

纏れる足で、ヒエンは洞窟の奥へと逃亡した。先程までの余裕が嘘のようだ、と瑞穂は思った。

「あの、へボー！」

惨めに逃げ去るヒエンの背中を嘲るように見ながら、カヤは吐き捨てた。その目の前では、先程、異形の触手を切り裂いたサンドパンが。異形の攻撃にそなえ、構えている。

首のない触手は黒く、腐敗したように溶け、そこから新たに触手が生えてくる。華奢だった少女の体は、膨れ上がっており、まるで野獣、雪男のような風体へと変貌を遂げている。

「ライチュウ、そっちは、よろしく」

言うが早いか、痙攣の治まったライチュウはグライガーへ向けて高速星形エネルギー体を発した。今度は電撃ではない。瑞穂の指示で、グライガーは旋回、エネルギー体かわす。気絶したままのゆかりを抱きかかえながら、瑞穂は叫んだ。

「れ……連続斬り！」

グライガーのハサミが蒼白く光り、無数の空気の刃がライチュウを襲った。電光石火でなんとかかわすも、ライチュウは体勢を崩した。だが瑞穂は、この好機を待っていたのだ。

鎌風。

グライガー繰り出す鎌鼬の風圧で、ライチュウは吹き飛ばされ、岩で頭部を強打した。

目を回し倒れて、それきり動かない。

同様に異形と対峙していた、サンドパンも動かなくなっていた。痙攣しているのだ。異形の蛇眼によって、身動きを封じられている。蛇睨み。蛇睨まれ、痙攣、失神。口から、泡を吐き出しながら、白目をむいてサンドパンは力なく倒れた。

「相変わらず、醜い面ねえ……。醜い。醜い」

サンドパンとライチュウをボールに戻し、異形の顔を見つめながらカヤは呟いた。異形の生物は緑色のヨダレをしきりに太い腕で拭いながら、一歩ずつカヤへと近づいていく。

「ホントに、見憎い」

「ギャウ！ ギャオ、ゲギャー！」

オマエの、せいだ！

少女は、異形は、そう叫んだつもりだった。

「ふん……。私のせいじゃないわよ。勝手に責任転嫁しないでほしいわ。それとも、もう、自分が、なんでそんな醜い身体にされたのかも覚えていないくらい、アンポンタンになっちゃったわけ？ ノーミスまでバケモノになっちゃたわけ？ 笑わせるわ。笑わせる。ちゃんちゃらおかしい。とつとつ、復讐でもなんでもやれば？ 才馬鹿で醜い、バケモノちゃん」

異形は怒りを露わにし、緑色のヨダレを、カヤめがけ吹き出した。

あつさりとかヤはヨダレを避ける、ヨダレの付いた地面がジュウと音をたてて、溶けていく。溶解液だと、瑞穂はとっさに緑色の涎がなんであるかを見切った。よく見れば、異形の口元は爛れ、薄い煙が立ち上っている。

驚愕するとともに、瑞穂は不審に感じた。おかしい。異形と女を見比べてみる。

あの女の人、全然怯えていない……、むしろ余裕がある。何でだろう。笑っている。何かを企んでいるかのような、不気味な笑み。

いつだったか、偽の育て屋へ忍び込んで見つかったときの、男の緩んだ口元。

(フッフ……それはな……)

笑っていた。間違いなく。その男も企んでいた。その直後、振り返った自分を襲った、打撃。頭が割れたように痛かった。

(ううう、ううう……ああつ！)

響く、自分の呻き、悲鳴。

グライガーを戻し、瑞穂は唇を噛みしめた。あの女の人……何か企んです。何を？

その瞬間、瑞穂の視界に飛び込んできた。カヤの企み。カヤの握りしめているスイッチを。

カヤの笑みは、痛いほど瑞穂の瞳に突き刺さった。危ない！……それは直感だった。

「……死ね」

「危ない！」と、瑞穂はゆかりを抱いたまま、異形へと飛びついた。

カヤは握りしめているスイッチを押した。

ズゴオオオオン

！

爆音が響いた。外壁が炸裂した。瑞穂の周辺に幾つもの岩石が落下してくる。爆発だ。煙は充満し、洞窟が音をたてて崩れていく。煙の奥へとカヤは消えていった。

ゴゴゴゴゴゴ……。

崩れていく。洞窟の壁が崩れ、その中から大量の水が溢れて、飛び出した。突然の爆発で地下水脈に穴が開いたのだ。鉄砲水が、全てを押し流していく。異形も、少女も……。

全ては水に流されていく。

流されていく……。



特殊工作部隊専用のVTOLに乗り込み、離れていく地面を眺めながらカヤは溜息を

ついた。

「作戦失敗……か。遊びすぎたわ」

作戦を嗅ぎつけられ、警察がやってくることは、ある程度想定していたものの、まさか、幼い少女や、氷が来るとは思いもしていなかった。仕掛けていた爆薬も、まさか警察以外の人間に使うなどとは想定していなかった。爆薬が爆発し、地下水脈に穴を開けることも、予想していなかった。

そして、この作戦が失敗するなど、夢にも思っていなかった……。

予想外だらけだ！ カヤは、自分を笑った。自分の計画性の無さを、笑い飛ばしたかった。組織に属して初めての失態……。

今回の件が、カヤの自尊心を、どれだけ傷つけたか、想像に難くない。怒りの炎を瞳に漲らせ、カヤは無線機から聞こえてくる青年の声に、耳を傾けた。

「失敗したようだな」

「ええ……」

「ヒエンはどうした？」

「ふん……、おいてきたわ。あんなへボ」

「まあ、いい。どうせ、この作戦が失敗しても、『あの計画』には関係ないからな」

「お咎めナシ……ってわけ？」

「そういうことだ。ただ……」

「ただ……、なんなの？」

「帰投する前に、もう一仕事して欲しい。なあに、簡単な仕事だ」

「具体的に何をやるわけ？」

「『あの計画』の実行に向けた、最終実験だ」

座標確認用のディスプレイが光った。前方4.6キロメートル付近に、青く光る、謎の飛行生物が映しだされている。

「そのポケモンに、例のモノを……特殊電波発生装置を取り付けるだけだ……」



あの時と、同じだ。

冷たい水の中で、もがき苦しんでいた。泳げない、あの時の恐怖が未だに脳裏にこびりついている。

冷たいよ……冷たい、助けて！

そして途切れた。何もかも。全てが。自分が。運命が。それが、本当の地獄の始まりであることも知らずに……。

ここで時は止まっている。明日はない。明日と呼べるような明日は来なかった。

身体が、醜き姿が縮んでいく。元の姿へ、偽りの姿へと戻っていく。恐いよ……戻りたくない。元に戻ったら、みんな私を虐めるもの……。姉さん、助けて……。

ふいに誰かが手を引いているのを感じた。

そして、引つ張られる。ぐい、ぐい、と。空が近づいてくる。

姉さん？ 姉さんなの……？

相手は答えない。

……暗転。



瑞穂は、ゆかりと氷の手を握ったまま、洞窟の出口に倒れていた。手を振りほどき、立ち上がると、ずぶ濡れのまま氷は、倒れている瑞穂に呟いた。

「助けて……くれたの……？」

瑞穂は蒼白い顔をしたまま、動こうとはしない。氷は瑞穂の胸に、耳をあてた。鼓動が聞こえない。心臓が止まっていた。

その時、ゆかりが目を覚まして起きあがった。

「お姉ちゃん……、ど、どないしたん？」

「鼓動が……聞こえない」

ゆかりの顔がひきつった。すぐさま、泣きそうな声で氷に縋る。

「お姉ちゃん、なんで知らんけど、心臓が弱いんや……！ この洞窟まで来るのに、だいぶ負担がかかってもうたんや。そんな状態で、この冷たい水の中に入ったもんやから……。このままやったら、お姉ちゃんが……死んでまう……。」

座り込んだまま、ゆかりはポロポロと泣きじやくった。それを尻目に、氷は瑞穂の胸を、腕で思い切り叩きつけた。

「な、なにしてるん!？」

ゆかりは驚きの声をあげる。氷はそれを無視し、ただひたすら叩き続ける。

トクン……。

鼓動と同時に、瑞穂は眼を開いた。それを見て、ゆかりは涙を拭おうともせず瑞穂に抱きついた。

苦しそうに、瑞穂は氷の顔を見つめながら言った。

「ありが……とう……。」

「それは、こつちの台詞よ……。」

「あは……、泳ぐの……結構、得意だったんだ……けど、途中で、苦しくなっちゃって

……」

「無理は、ダメよ……」

「それは、こっちの台詞だよ」

瑞穂は微笑む。氷は呆れたように、立ち上がった。

「あなた……、本当の……名前、なんて言うの……？」

「ふぶき……ひょう……」

そこまで答えて、氷は歩き出した。着ているワンピースはボロボロに引きちぎれており、濡れている。冷たい雫が、体中から滴っていた。

「どこに……行くの？」

瑞穂の問いに、氷は振り返らずに応えた。

「どこでもいいわ……どこにもいけないけれど……」



あの計画の実行が、近づいてきた。

しかし、その計画すらも、少女達の運命の一端に過ぎないのだ。

そして、後に少女達は、気付くだろう。

この出会いよりも、遙か以前に、運命の歯車が回りだしていたことに――

#6 憑依。

接続十授与

「私たち一族　ことば　此処に刻む」



鳥ポケモンのけたたましい鳴き声が、国道36番線沿いのポケモンセンターに朝を告げる。窓から注ぐ陽光の光を浴びながら、瑞穂はパソコンのディスプレイを見つめていた。

キーボードを打つ、カチャカチャという独自の音が連続している。

まだ朝日が昇って間もない。ゆかりは柔らかなソファの上で静かな寝息をたてている。うつ伏せのままリングマは高軀をしていた。リングマの腹の上に座り、グライガーは柄にもなく真面目な表情で窓の外を眺めている。

パソコンの出力結果を見ながら、瑞穂は難しそうに表情を歪めていた。すると、その背後から、優しい女性の声が聞こえた。

「あら……、起きるの早いのね」

瑞穂が声に反応して振り向くと、そこにはジョーイが微笑みながら立っていた。ジョーイは何枚ものカルテを手で抱えながら、優しい視線を瑞穂へと向けていた。

急いでパソコンの電源を消すと、瑞穂は立ち上がった。

「おはようございます。女医さん」

「おはよう。こんな朝早くから、何を調べていたの？」

訊かれて一瞬、ビクリと肩を震わせたが、瑞穂は何事も無かったかのように答えた。

「な、なんでもありません」

「そう？ ……とここで、これから、あなたはどつちの方面へ向かうのかしら」

ジョーイの言葉に、瑞穂の意味が分からず、小首を傾げた。不思議そうな瑞穂の表情を読みとり、ジョーイは付け加える。

「実はね、この間、ここからヒワダタウンへ続く『つながりの洞窟』が、なぜか突然、崩落してしまったの。だから、ここからヒワダタウンへ行く場合は、ぐるっと遠回りしなきゃならないのよ」

それを聞いて、すぐさま瑞穂の顔が強張った。ジョーイは、そんな瑞穂の顔を不審げに見つめている。慌てたように、瑞穂は首を振った。

「あ、そ、そのお……、だ、だ、だいじよぶです。私たちは、そのお、キキヨウシテイの方へ行くので……」

「そうなの。それなら、問題ないわね」

さらりと、そう言うのと、ジョーイはそのまま、くると背を向けて行ってしまった。

ホツ……とする間もなく、ふと何かを思いだしたように、ジョーイは瑞穂の方を振り向く。

「そうだ。キキヨウシテイへ行くのなら、アルフの遺跡へ寄ってみるといいわ」

「アルフの……いせき……ですか？」

「そうよ。あの辺りは、謎の古代文明の遺跡があったり、古代ポケモンの化石が発掘されたりされてて、けっこう有名な観光地となっているのよ」

「そこまで言つて、ちよつと舌を出すと「もつとも、私は一度も行ったことが無いんだけど……」と付け加えた。」

瑞穂は興味があるらしく、ジョーイの言葉に耳を傾けている。しかし、それは興味と言うよりも、むしろ疑問に近かった。瑞穂は訊いた。

「古代文明の遺跡と、古代ポケモンの化石が、同じところから見つかったんですか？　すごい偶然ですね……」

「そうなのよ、変な話でしょう？　でもね、専門家の人が言うには、古代文明の遺跡と、

古代ポケモンの化石は、同じ1500年前の地層から発見されたいの」

「同じ、1500年前……。」

瑞穂は思わず呟いていた。1500年という、二つの時間の経過が、奇妙な符号のようには思えたのだ。

「まあ、百聞は一見如かず、よ。一度行って観てみるといいわ」

ジョーイは微笑みを浮かべると、そのまま行ってしまった。

ゆかりの寝顔を見つめながら、瑞穂は先程の話を思い出していた。

アルフの遺跡。1500年前から存在するという謎の遺跡。同じ場所から大量に見られる、古代ポケモンの化石。

その地に、新たな厄災が待ち受けているなど、その時の瑞穂は思ってもいなかった。



「アルフの遺跡やて……ホンマに行くん!？」

アルフの遺跡へ向かう途中で、ゆかりは興奮したように瑞穂に訊いた。瑞穂はゆかりのテンションの高さに呆気にとられながらも答えた。

「そうだよ。話を聞いたら、すごい変わった遺跡みたいだから、一回、観てみようと思っ

て」

「え……？ お姉ちゃん、知ってるん？」

きよとんとした表情をしながら、ゆかりは呟いた。瑞穂は、ゆかりの顔を覗き込んで、訊いてみる。

「知ってるって、何を？」

「こないだテレビでやっつたんやけど、最近な、アルフの遺跡から不気味な声が聞こえてくるんやて。女の人の声でな、『たすけてエ。ここからだしてエ』って」

「ここのうのは苦手だよ」と、瑞穂は背筋をぶるぶると震わせながら答えた。ゆかりはケラケラと、寒々と震える瑞穂を笑い飛ばす。

「キャハハ！ お姉ちゃんって、けっこう恐がり、ビビリ虫なんやな」

心外そうに、瑞穂は頬を膨らませた。頬がほのかなピンク色に染まっている。

「もう……。でもさ、ユウちゃんだって、この間、お漏らししてたじゃない」
「うっ……！ な、なんのことなん？」

ゆかりは、ドキリとした様子で瑞穂から、わざとらしく目をそらした。

「知らないふりしても無駄だよ。洞窟でビツクリして、そのまま卒倒しちやつたじゃない」

そこまで言われて、ゆかりは顔を真っ赤に火照らせて俯いた。周りの人達は何事か

と、こちらを向いて笑っている。額を手で押さえながら、ゆかりは小声で瑞穂に囁いた。

「は、恥ずかしいやん……」

「あ、ごめん。でも、最初に私のことバカにしたの、ユユちゃんだよ?」

「それは、そやけど」

「そう言えば……」瑞穂は、何かを思いだしたように手を叩いた「洞窟——で出会ったあの女の子——氷ちゃんて思い出したんだけど」

ゆかりは顔を上げ、瑞穂を見つめた。

「あ、ほら、あの子。てつきり年上かと思ってたんだけど、話を聞いたら、私と同一年だったみたい」

「まあ、お姉ちゃん、おチビやもんな」

「はいはい……どうせ、私はチビです……」

疲れたように瑞穂は頷くと、話を続けた。

「実は今日の朝、戸籍データベースを調べたんだけど、そこに『射水 氷』って名前は」

「なかったんやろ? あの、怪物姉ちゃんの名前。……どうせ偽名やと思たで」

ゆかりは、やれやれと、肩をすくめた。しかし、瑞穂は小さく横に首を振る。なにか

不気味なものを見ているかのような表情で呟いた。

「あつたよ」

驚きの表情でゆかりは瑞穂を見つめた。

「ホンマに？」

「うん」頷くと、瑞穂の顔が少しだけ曇った。「でも——」

「でも、どないしたん？」

「データ上では『射水 氷』って女の子は、5年前に亡くなっているの」

ゆかりは驚いたような表情をした。それは、次第に不気味げな色合いを濃くしていく。口をあんぐりと開けたままのゆかりへ、瑞穂は自分にも言い聞かせるように呟いた。

「しかも出身地とか、そういう類の情報が一切消えている、削除されているの。唯一、彼女のお姉さんの情報にまでは、辿り着いたんだけど……」

「で……でも、それは、人違いちゃうの？ 5年前に死んでるんやったら、おかしいやん」

もう一度、瑞穂は首を振った。そして、ポーチから何か写真のようなものを、ゆかりの前に差し出して見せた。

写真に写っている人物の顔を見た。ゆかりは驚愕に凍りついたまま、絶句する。震え

る指で写真を指さし、上擦った声をあげた。

「こ、この……この人……！」

小さく頷くと、瑞穂は説明を加えた。

「うん……。氷ちゃんのお姉さんで、名前が『射水 冷』っていうらしいの。偶然、顔写真が削除されてなかったから、プリントアウトしてみたんだ」

ゆかりは、まじまじと写真の中の冷を眺めてた。滑らかな紫の長髪。こおりのように透き通った白い肌。確かに洞窟で出会った少女——射水 氷によく似ている。ただ一つ違うのは、瞳が、何かに怯えるような冷たさを帯びていないことだけだ。

「似てる……でしょ？ その写真は、5年前に撮られたものらしいから、丁度、今の氷ちゃんの年齢と一致するんだ」

「あ、うん……」

ぎこちなく首を振ると、ゆかりは再び写真の中の冷を見つめた。不気味なくらいにそっくり。冷は氷に瓜二つだった。

水晶のような透き通った冷の瞳に魅入られながら、ゆかりは訊いた。

「ねえ、この人は今、どこに……」

瑞穂は眼を閉じた。そして、搾りきるように答える。

「この人も……5年前に亡くなっているらしいの……」

その一言は、寒々と瑞穂とゆかりの間を駆けめぐった。
なにかあったのだろう。5年前に……。

皮膚を切り裂くような、冷たい風が吹き荒れ、結晶の混じった砂埃が舞った。

叫び、そして突然、異形の姿へと変貌した少女。殺気を漲らせながら、放った言葉。
……復讐……。それが何を意味するのか、少女は何者なのか……。

謎だらけだ。解らないことだらけだ。

二人は思わず、灰色に濁った空を見上げ、救いを求めた。上空で、一羽の青く輝く鳥
ポケモンがキキョウシティへ向かって飛んでいく。

黒雲が空を覆い、またも、大粒の雪が舞い降りてきた。



延々と降り続く雪を見つめる、雪肌の少女——射水 氷は、遺跡近くの喫茶店でアイ
ステイーを啜っていた。一息つき、窓の外を見つめる。白い雲の間から漏れた光が、蒼
い雪を照らし出していた。

最近は天気予報がごとごとく外れている。この異常気象の原因はなんなのか。氷は、
心に妙な感じを受けながら、無造作に放つてある新聞の束の中から、氷は適当に一紙を

選んで広げた。

日付は昨日だった。桔梗新聞の三面には、小さく「つながりの洞窟崩落」の見出しが掲げられている。

「コガネシテイ・幼女バラバラ殺人事件・犯人未だ特定できず！」「キキョウシテイで原因不明の大雪！」「いま、怪談がブーム」

紙面を舐めるように読みながら、氷はカップをテーブルの上に静かに置いた。

たくさん人間が、常に死んでいる。命を落としている。私は、死ぬのだろうか？

ふと、復讐を終え、自分が、目的を喪ったときのことを思い浮かべた。

私も、死ななければならぬ。今まで、私は沢山の人間の命を漁って生きてきた……

酬いは受けなければならぬ。

ふと、物思いに耽る氷の眼に「森田修馬被告、無罪確定」の文面が飛び込んできた。

氷は思わず、細くなった眼を背けた。

あれから3年も経ったのか——あれは、悲劇だ。13人が死に、20人以上が程度の差こそあれ、後遺症害を被った。点滴用チューブに、不整脈用剤シヴェンゾリンが意図的に混入されていたのだ。院長は管理体制の甘さを指摘され、マスコミによる糾弾の恰好の的となり、事件後すぐに蒸発してしまった。しかし、マスコミは騒ぎすぎたことを反省することもなく、院長の一人娘を叩き始め、その結果、大学への裏口入学をでつち

上げられたことを苦に娘は自殺した。

思い起こし、氷は唇を強く噛みしめた。唇が切れ、赤黒い血が滲んだ。

本当に悪いのはマスコミでも院長でもないのだ……。なぜなら……。私が――

雪は降り止む気配すらない。いつまでも降り続け、やがて、その中に埋没できたなら、どれだけ幸せなことだろう。

過去は、いつまで私を縛り付けているつもりなのだ――

同じ頃、瑞穂達は巨大な人口丘の前に佇んでいた。雪が隙間なく敷き積まれた丘は、まるで大理石でできた墓石のようにも見える。

「ここが、アルフの遺跡……かあ……」

アルフの遺跡は、1500年前から存在するといわれる、謎の古代建築物である。誰が造ったのか、なんのために造ったのか。この遺跡に関する研究は10年前から行われているが、いまだに、その謎は解き明かされていない。

正体不明の遺跡。……UNKNOWN……

受付嬢からパンフレットを受け取り、瑞穂は入り口の奥へと進んだ。ひんやりと冷たい空気が、遺跡内部を充たしている。人工的な照明に照らされた遺跡の障壁には、幾つもの奇妙な模様が浮かび上がっていた。

朧気な回廊には、人の気配が全くない。

この大雪では、人々は遺跡を観光しようという意欲が出ないのであるか。瑞穂とゆかりは無言のまま、回廊をゆっくり歩いていった。

瑞穂の関心は、もはや遺跡の見学どころではなかった。気になって気になって仕方がなかった。射水 氷の冷たい瞳の奥に浮かんだ、怒りの意味が。

少女という偽りを纏った、忌まわしき本性——咆哮したときの、おぞましき顔。

「なんや……不気味なところやね……」

ゆかりが辺りを見回しながら、寒々しく呟いた。その言葉に同調し、瑞穂も頷く。影が正気を切り裂くかのように激しく上下した。

「そうだね……、そろそろ出ようか」

「うん」

その時、瑞穂は背後に視線を感じ取り、振り向いた。だが、そこには誰もいない。不気味な模様の壁が延々と続いているだけだ。

「なんやの？ いきなり振り向いて……」

不思議そうにゆかりが訊くと、瑞穂は怪訝な表情で呟いた。

「今……誰かに見られていたような気がしたの」

「そんなことあるわけないやん。ここにはウチらしかおらへんねんで？」

瑞穂は納得できないながらも、ゆかりの言葉に頷いた。

「そうだね」

口ではそう言いながらも、確実に何かがある、と瑞穂は思っていた。次第に足取りが速くなる。意識が何かに吸いとられるようにぼやけていく。変な感じだ。

影は光の死角で標的を見つめていた。瑞穂もゆかりも何かに憑かれたかのように、駆け出した。気配だ。何かの気配を感じる。

誘き寄せられたのか。はたまた自分達の意志によるものなのか。辿り着いた先は、行き止まりだった。息を荒げ、瑞穂は突然立ち止まる。ゆかりはその場に座り込んだ。

「なんだか、変な感じがしない……？」

「するする。なんでやろ……誰もおらへんのに、誰かいるような気がすんねん」

怯えたように瑞穂は辺りを執拗に見回した。だが、あるのは自分達の影だけだ。ゆらゆらと意識でもあるかのように揺れている。

その時、モンスターボールがピクリと揺れた。ボールから、グライガーが、何かを感じているような様子で飛び出してきた。

「グラちゃん、どうしたの？」

瑞穂は訊いた。グライガーは今にも泣きそうな表情で瑞穂に抱きついた。

「グラちゃん……？」

「どないしたん？」

横から、ゆかり訊いた。瑞穂は腕の中で震えるグライガーを心配そうに見つめながら答えた。

「何かに……怯えてるみたい」

救済・伝達

聞こえる。

聞こえる……。

グライガーの瞳が、また一段と潤んだ。瑞穂の腕から飛び出ると、グライガーは宙を睨みながら静止する。

「ねえ、どうしたの？」

そう瑞穂が訊くと、グライガーは手のハサミで、ちよんと耳の辺りをつついた。硬質なハサミだが、遺跡の冷ややかな空気よりも、ずっと暖かかった。

自分の耳を撫でながら、瑞穂は目を閉じた。先程のグライガーは瑞穂に、耳を澄ませ、と伝えたかったのではないか。そう思ったのだ。

しかし、何も聞こえない。

ゆかりは瑞穂に寄り添う。ふたつの影がひとつに重なった。

たすけて……。私をたすけて……。

苦しい……。ここから出して……。

聞こえた……。

正確には、聞こえたというよりも、頭に直に響くような感じだ。

「なに？ 今の声……」

すぐさま瑞穂は、ゆかりを見やった。ゆかりにも声が聞こえていたらしく、口に手を当て驚いた様子をしている。

「今の声……今、女の人の声が……聞こえた……」

空気が震えた。闇が、影が、ざあつと散っていく。何かを警戒していたようなグライガーが、雄叫びをあげた。

「グリアアアアツ！」

今まで一度も聴いたことのない、鬼気迫るグライガーの叫びに、瑞穂はハツと息を呑んだ。足下から伸びる影が、どんどんと膨らんでいくのが見える。影は分裂し、その中から、無数の黒々とした奇妙な物体が浮き出すように現れた。

ゆかりは仰けぞった。瑞穂は膝がガクガクするのを感じた。何これ？ それが正直な気持ちだった。

奇妙な形をした物体は、瞳のような部分で瑞穂達を舐めるように見回している。瞬間、無数に群がる物体にグライガーは、紫色の刃を振りかざした。眼が血走っている。先程からずつとまとわりつく恐怖に耐えてきた証拠であった。

物体は、刃に叩きのめされ、地面へと次々に落ちた。しかし謎の物体も負けてはいな

い。奇声を発し、瞳のような部分が虹色に発光したかと思うと、グライガーは蒼白い光に包まれ、壁へと叩きつけられた。

「きや………！ 大丈夫？」

悲鳴をあげ、瑞穂はグライガーに駆け寄った。痛みのものでたうっているグライガーを抱き上げると、額を優しく撫でた。その間にも、物体は虹色の瞳を爛々と輝かせ、瑞穂へと迫っている。ゆかりは叫んだ。

「お姉ちゃん！ 危ない！」

瑞穂はハッと物体を見やった。今まで暗くて気付かなかったが、物体は、遺跡の壁に刻まれた模様と、形状が酷似していた。

虹色の瞳から白色の光弾が発射された。瑞穂は思わず目を閉じた。グライガーが決死の覚悟で光弾へと飛び込んだ。皮膜で体を覆い、防御態勢をとる。光弾がグライガーへとぶつかり、はじけるように衝撃波が広がった。

瑞穂とグライガーは衝撃波によって、数メートルほど飛ばされた。

「きゃー！」

ゆかりは思わず、手で視界を覆った。

瑞穂は壁へと勢いよく叩きつけられ、全身の骨が砕け、頭蓋が陥没する、グシャ、という音を響かせながら、力なく倒れ、鼻と口から夥しく血を吹きながら、狂ったように

地面で転げ回り、辺り一帯に脳漿を撒き散らす惨めな様など、想像するだけでも耐えられない。

しかし、瑞穂は怪我ひとつしていなかった。青い特殊な光に包まれながら、ゆっくりと地面に着地したのだ。瑞穂は驚いた様子で、グライガーを見つめた。

グライガーの瞳は紫に輝き、体全体が青色調を帯びていた。その妖しい色の瞳は、どことなく射水 氷に似ている、と瑞穂は思った。

物体は、そのグライガーを恐れているように見えた。次の瞬間、無数の物体が、グライガーと同じく青い光に包まれ、弾け飛んだ。幾つかの物体は粉々に砕け散る。その破片は光りだし、吸い込まれるように消えていった。

「……………今の……………グラちゃんの手……………なの？」

呆然とした様子で瑞穂は呟いた。脱力しているのか、両手がだらりと垂れている。

物体にも意志が、恐怖心というものがあるのか、一斉にざわめき、消えていくのが見えた。

グライガーはと見ると、全ての力を使い果たしたのか、ドサリと音をたて地面に倒れた。

「あ……………、はやく逃げなきゃ……………」

瑞穂は辺りを急いで見回し、グライガーを抱きかかえようと、目を閉じたままにいるゆ

かりの手を引いて、遺跡の出口へと駆け出していった。



登音だけが哀しく、絶望を煽った。

また、ダメだった……。希望は消え、後には悲痛な毎日が続くのだと思うと、それだけで気が滅入る。逃げていく瑞穂の背中を見つめながら、影は再び集結していく。

誰も聴くことのできない笑い声を響かせて、男はそこに立っていた。余裕か、今の自分に満足しているのか……。永遠に訪れることのない、幸せ、を噛みしめている。

そう。幸せなのだ。

誰だって、人間ならば、幸せでありたいという意思を持っている。だが、その意思は時に暴走し、自分自身を蝕むことがあることを、まだこの男は知らない。

男は背後に、刺さるような視線を感じ振り返った。そして、苦笑した。

「なんだ、脅かすなよ……」

男は言った。睨んでいるような目つきで、少年は男を眺めている。見るもの全てを嫌悪するかのような、光のない瞳を目の当たりにして、男はたじろいだ。

「そ、そんな目で見るなよ。おまえのおかげで、僕はいま、とても楽しく暮らしている。

感謝するよ。……ところで、なんのようだ？」

銀色の長い髪を撫でると、少年は心情の読めない微笑みを浮かべた。柔らかそうな頬に刻まれた黒いタトウが、薄い光を帯びて輝いたように見える。

突然、少年は呟いた。頭の奥から響くような、不思議な声だった。

「警告しに来た」

「警告……だつて？」

腰を屈め、男は少年の顔を覗き込んだ。黒いタトウが一段と鋭さを増している。

「彼らは、意識、察知する力あり、外、拒む」

ふとした少年の言葉に、男は顔を歪めた。なんだい、そりや？ 俳句か……？

少年は壁に刻まれた紋様に触れた。紋様が黒々とした光を帯びて、少しばかり歪んだ。
だ。

「彼らは、外からやってきた意思を嫌う。気を付けた方がいいよ。彼らに嫌われたら、彼らは二度とキミの前に姿をあらわさない……」

男は得意げに鼻を鳴らした。

「大丈夫だよ。さっきの邪魔者だつて、あんなに簡単に追い出せたんだ。おまえも見ていたんだろ……？」

そこまで言つて、男はハッと息を呑んだ。少年の姿は、目の前から消えていた。残さ

れているのは三日月の描かれたカードだけだった。

「本当に……あいつは何者なんだ……」

男は恐れ怯えながら、影の中へと沈んでいく。

悲鳴が聞こえた。

たすけて……ここから出して……。

「あの2人を殺してくれたのはキミだね……」

少年の声が聞こえた。新聞を読みふけていた氷は、思わず顔を上げ、辺りを見回した。しかし喫茶店内には、少年の姿などない。気のせいね。氷は首をまわした。最近、疲れているのよ——

氷は首を傾げたまま、新聞に再び目を通そうとした。

「……ありがとう……殺してくれて」

気のせいなどではない。空耳などではない。

すぐさま氷は窓の外を見やった。雪の降りしきる中、彼はそこにいた。

少年は、白い顔に銀色の長髪をしていた。背は氷とたいして変わらないか、少しばかり彼の方が大きいだろうか。純白の平原で、少年は微笑みを湛えている。頬には、黒いタトウがあり、そこにはどうしようもなく妖しげな雰囲気漂っている。頬には、黒い

窓ガラスを隔てて、白色の少女と、黒いタトウの少年は対峙していた。

「あなた……何者なの……?」

聞こえないとはわかりつつも、氷は冷静を装い訊いた。少年は微笑みを維持したまま、氷を楽しげに眺めている。

「美しいね……。今日は何故だか、カワイイ女の子を、よく見かける……。さつきの青髪の女の子も可愛かったけど、キミはその娘とは、また違った魅力がある」

「質問に答えて……」

氷は少年の瞳を睨んだ。蛇睨みをするつもりなのだ。少年は平然とした様子で、氷を眺めたまま動かない。これには氷も焦りを隠しきれなかった。普通の人間ならば、体が痙攣を起こして、口から泡でも吹きながら倒れるはずである。

「ボクが、怖い……?」

核心を突いた少年の問いに、氷の肩がビクリと跳ねた。

(氷……あんた、私のことが、恐いの?)

カヤの優越感に満ちた言葉が、氷の脳裏に蘇った。

臆病者。

氷は立ち上がった。喫茶店を飛び出し、少年の立っていた場所へと走った。しかし少年は、既にそこにはいなかった。代わりに、三日月の描かれたカードが、雪で覆われた地面に突き刺さっている。

「逃げたのね……」

悔しさと安堵の狭間で氷は呟いた。氷の白い肌が雪の色に溶けこみ、まるで昔話にてくる雪娘のように見える。

「本当に、キミは美しいな……」

感嘆したような少年の呟きに、氷は驚いて振り向いた。喫茶店の中の、氷のいた席に座って、少年は飲みかけのアイスティーを飲み干していたのだ。

今度こそ、氷の表情が恐怖にひきつった。

「あ……あ……あなた——なんなの、何者なの……う？」

腰が抜けたのか、氷はその場に尻餅をついて倒れた。少年は笑いながら、ウエイターにジンジャーエールを注文している。

雪まみれになりながら立ち上がる氷を見つめ、少年は言った。

「ボクは、キミを恐がらせに来たわけじゃない」

「じゃあ、あなたは何者なの、誰なの……なんのために私に話しかけたの……？」

氷は少年の瞳を睨みながら訊いた。少年は小さく首を横に振り、囁くように氷へと告げた。

「あまり、ボクの眼を見ない方がいいよ……」

思わず、氷は少年の瞳から目をそらした。

やっぱりボクが怖いんだね。少年は心の中で呟きながら苦笑した。

「ボクは、キミに……」そこへジンジャーエールが運ばれてくる。ストローを口につけ、少しばかり飲むと、少年は氷の方へと向き直った。

「お礼を言いに来ただけさ……」



アルフの遺跡研究所は、アルフの遺跡から、歩いて3分ほどの場所にある。

研究所の主任研究員である葦崎教授は、延々と降り続ける雪と、白い平原を見つめていた。物思いに耽る彼の横顔は、教授という割には若く、30代ほどに見える。

既に研究を開始して10年以上が経ったのだ。長いような短いような……。2年前にトキワ大学から赴任してきた葦崎自身には、まだ、それほどの実感はないが、10年前から地道に調査を続けてきた研究員などは、一向に新しい発見がないことに諦めを感じているのだ。

なぜ、何も見つからないのか。葦崎は思っていた。

誰が、なんのために、このような大きな建造物を造り上げたのだろう。もしかしたら、謎は、永遠に自分達の前に姿をあらわそうとはしないのではないか。どうして？ どう

して、隠れようとするのだ。私の前に、全てを見せてはくれまいか……。

葦崎の手には、不思議な形をしたピースが袋に入れられたまま握られている。ピースは光っていた。もつとも、雪の光を反射させているに過ぎないのだが。

去年、遺跡内から大量に見つかった数々の遺物は、たしかに証言者ではあるが、決して真実を全て教えてくれようとはしない。永遠に答えの見つかることのないパズルを前に悪戦苦闘する自分を想像し、葦崎は思わず苦笑した。

そうさ、たしかに解けないパズルさ。断片のたりないジグソーパズル。

頭に積もった雪を振り払い、葦崎は研究所の方を向いた。あまり長い間、外にいれば、風邪をひいてしまうかもしれないからだ。

今までも、そしてこれからも毎日繰り返すであろう、深い溜息をつくとき、葦崎は深く積もった雪に足を取られながら、研究所へ入ろうとした。

「あれ……？　先生……葦崎先生ですよね……？」

自分を呼ぶ声が聞こえる。まさか。明らかに子供の声だ。確かに2年前までは先生と呼ばれていた。しかし教鞭を執っていたのは大学でのことだ。

「先生。私です」

たわいのない子供の悪戯だと思いつつも、葦崎は声のする方へと顔を向けた。小さな少女が2人、雪の上で手をつないで葦崎を見つめている。

青い、水色の髪を左右で束ねた少女は、寒そうに首をすくませていた。

「洲先君か……?」

驚いた様子で、葦崎は少女をまじまじと見つめた。名前を呼ばれ、少女はにこりと微笑むと、深々と頭を下げた。

「あの時は、お世話になりました」



追求↓発見

く彼らは 意識 察知する力あり 外 拒むく



「こんな所で、悪いんだがね……」

「あ、いえ。気を使わないでください。私が、なんの連絡も無しに押し掛けたんですから……。こちらこそ、お忙しい中、突然お邪魔して、すみません」

ホコリまみれの第2研究室のパイプ椅子に腰掛けながら、葦崎は笑った。よどんだ空気が掻き回される。瑞穂は肺の辺りが苦しくなったが、なんとか堪えた。

葦崎は、しばらく笑い続けていたが、小首を傾げる瑞穂の前に真顔に戻った。

「いや失礼。だがね、ここ数ヶ月、私は忙しいなどと思ったことが無かったものだから。ここに來てからは、先程のように意味もなく、ずっと遺跡を眺めているのだよ」

瑞穂は、どう受け答えしていいのかわからず、困ったように俯いた。再び笑い出し、葦崎は続ける。

「遠慮しなくていいのだよ。笑ってくれても結構だ」

「あ、あのう……」

泣きそうな瞳で見つめられ、葦崎は、この少女の性格を思い出した。人に気を使いすぎる。自分そつちのわけで、他人に尽くそうとする。自分だけを大切にする輩よりは、はるかにマシではあるが、それはいずれ身を滅ぼすだろう。

葦崎は、台座にもたれて眠っているゆかりへと目を移した。よほど疲れ果てていたようで、静かな寝息をたてている。

「おっと……洲先君は、そういう話は苦手だったんだな。ところで、あの子は？」

ゆかりへと向けられた葦崎の視点に気付いて、瑞穂は答える。

「妹です。……ってというのは冗談で、実は……」

瑞穂は、ゆかりが自分と一緒に旅をするまでの経緯を、葦崎に説明した。聞きながら、葦崎は俯いて、瑞穂の幼いながらも整った顔を見据えた。

「そうなのか……かわいそうにな……。父親も母親もいないとは」

「はい。それに私にはなんだか、それが他人事には思えなくて——」

痛々しげに呟く瑞穂の言葉が、葦崎の胸に重い影を落とす。ふと3年前、トキワ大で先史学の研究をしていた頃に出会った、瑞穂の姿を思い出したのだ。

資料室の片隅で、白衣姿のまま泣き続ける瑞穂に、葦崎は思わず声を掛けた。あの時

の怯えた表情。涙で潤んだ瞳――

怯えていた。無理もない。まるでこの世の全ての罰を受けているような表情。

(どうしたの？ お嬢ちゃん)

瑞穂は答えられなかった。言葉にならぬ呻きをあげ、狂ったように涙を流しつづけるだけだ。

もう、死んじやいたい。嫌なことばかりなんだもん。

叫んだ。しゃくりあげながら赤く腫れた脛を擦り、瑞穂はその場に座り込んだ。

生きていたって、死んでいたって、どっちもたいして変わらないじゃない！

瑞穂の叫びは、いつまでも葦崎の脳裏に灼きつくことになるのだ――

「先生……、どうしたんですか？」

心配そうな顔で瑞穂に見つめられ、葦崎は、はつとして辺りを見回した。

「いや……なんでもない」

この娘も、大きく美しくなったな。記憶と現在の交錯する意識の中、葦崎は思った。記憶のなかで泣き続ける稚児と、目の前の少女を重ね合わせてみる。

「そうか……、そうだな……。キミも、あの事件から立ち直ってくれたようだね」

「はい。よく言われます……。でも、ときどき思い出して、どうしようもなく悲しくなつて、夜中に独りでメソメソしちゃう時もありますけど」

それは仕方ないことだよ、と葦崎は天井を見上げ、目線を遠くへ送った。

「もう、あれから3年も経つのか……。やはり、お父様の消息は、まだ掴めないのかね？」

「それは……」

突然の問いに、瑞穂は白い頬を縦に振り、寂しげな口元を噛みしめる。隣で、ゆかりは何かモゾモゾと寝言を呟いている。葦崎は瑞穂の澄んだ瞳を覗いた。

「父が……今、どこにいて、今、何をしているのか、なんて見当もつきません。第一、なぜ突然、父が失踪したのか。その理由すらも私には理解できないんですから」

葦崎が不思議そうに眉をひそめた。それと同時に、研究室の時計がアラームを奏でた。

「お父様の失踪の理由が理解できない……？　なぜだね？　彼は、あの事件の責任を問われ、マスコミの糾弾に耐えきれず、キミを捨てて失踪した。その理由のどこが、理解できないのかね？」

「私には、父がそんな理由で失踪するとは、どうしても思えないんです」
「……と言うと？」

興味深げに、葦崎は瑞穂を促した。

「父は、事件直後、ひどく何かに怯えているように見えました。私は、あの事件には、ま

だ何か誰も知らない秘密があるような気がしてならないんです」

「誰も知らない……秘密……か。私は、考えすぎだと思うがね」

時計は12時を4分経過していた。消え入りそうなほど静かなアラームが鳴り止むと、葦崎は立ち上がり、瑞穂に手招きした。

「まあ、キミもお腹がすいただろう？ 私がおごろう。ゆかりちゃんも連れて、食堂までおいで。それに、さっきのことだけを言うために、キミはここまで来たわけじゃありません」



可哀相にね。

黒いタトウの少年は言った。だが、その表情に憐れみの色は浮かんでいない。

「口先だけね……。あなたが私の何を知っているの……？」

体中にまとわりついた雪を気にもとめず、氷は訊いた。少年はジンジャーエールを飲み干し、仰ぐように喫茶店の天井を眺めている。

「寒くないの？ そんな雪の中で。寂しくないの？ 独りぼっちで」

氷は少年の言葉に苛立ちを感じた。質問の答えになっていないからだ。

沈黙の時間がしばらく続くと、少年は落ち着き払った様子で窓の外へと睨みを利かせた。まるで、ボクの質問に答える、とでも言っているかのようだ。

氷は、動かなかつた。雪の中に隠れるように視線を落とし、口だけを小さく動かした。

「寒くはない……。逆に生暖かいくらいよ」

「生暖かい……？ マトモじゃ、ないね」

少年がかすかに笑つたように思えた。その微笑が、少年が自身の驚きを隠すためのものだと解ると、氷は少しばかり気が楽になった。

少年が自分の全てを知っているわけではない。そう感じたからだ。

この少年は、自分が風呂にはいるときに、冷水にしか漬かることを知らない。

この少年は、自分がシャワーを浴びるときに、冷水しか浴びないことを知らない。

一見特異に見えるその行動が、どれだけ氷の心の慰めになるかを知らない。凍りつくような冷たい水の中で洗われた者でなければ、その気持ちは解るまい。

窓の外で俯く氷を見つめながら、少年は苦笑した。

「キミは可哀相だ。孤独だ。不幸だ。美しいから、悩まなければならぬ。知っているかい？ 結局、人生を最後まで生き抜くのは、醜い生き物だけなんだよ？」

「私も、十分、醜いわ」

「でも、今のキミは美しい。」少年は、「今のキミ」の部分だけを強調した。

「ねえ。」少女は怯むことなく訊いた。「私のことを、どこまで知っているの……?」

少年は答えた。頬の黒いタトウが室内の照明を反射し、不気味に光っている。

「キミが、哀しい心を返り血で染めてから、ボクはずっと見ていた」

「変な表現を使わないで……」

「ありがとう」

「なによ……いきなり……」

「サミジマと、レライエを殺してくれて」

すぐさま氷は顔を上げた。頭に積もっていた雪が、ガサリと音をたてて地面へ落ちた。無表情であったが、その眼には恐れか、戸惑いの色が見てとれた。

「なぜ、そのことを……」

「彼らは、どうしようもなかった。ボクへの信仰心が薄かったから」

「信仰……? あの2人は、なにかの宗教にでもはいつていたわけ?」

「まあ、似たようなものだね」

そういうえば、サミジマとレライエには、この少年と似たようなタトウがあつたような気がする。この少年は、私がああ2人を殺してから、ずっと私のことを監視していたのか……?
か……?
?

柄にもなく、氷は不安になった。全てを、見ていた？

「神を信じるような人間には見えなかったけど、あの2人」氷は言った。

「信じてなかったさ。ボクも神なんて信じていないけど。彼らは、頭の構造が単純だった。だからボクは彼らを利用しようとしただけさ」

「利用……？」

「彼らをコガネシテイで野放しにすることさ。警察が容易に彼らを取り締まれないようにすればいいのさ。そして誘う。この街で思いつきり、自由なことをしたいだろう？」

……っつてね」

意味が分からない。氷は小首を傾げた。また雪が音をたてて落ちていく。

「そのことに、なんの意味があるの……？」

「死人がでる」

少年は、氷の顔が強張っていくのを見つめた。ストローで空になったグラスを掻き回し、少しばかり溶けた氷を口に含んで噛み砕き、飲み込んだ。

「実際、彼らの働きは素晴らしかった」

「最低でも、5人は殺していたわね」

「正確には13人。死体が発見されるなら、まだ幸せな方だ。大抵は、ゴミみたいにされて、海に沈められてる」

「私の姉さんもいれば、14人……。」

「あそこまで自分の欲情に素直な男は他にはいないだろうね」

「最低だわ。人間のクズよ」

「でも、そのクズを殺したのはキミだ。あの2人を殺して、キミは死人を増やした。ありがとう」

露骨に氷は嫌そうな表情をした。おまえの為にやったわけじゃない。

珍しいね、キミが感情を顔にだすなんて、と少年は再び苦笑した。

「で……」氷は少年の手元を見つめた。「死人を増やして、あなたは何をしたいの……？」

「ボクは何もしない。ただ……」

「ただ……？」

「裁きを待つだけ」

「裁き？ 誰を裁くの……？ 誰が裁くの……？」

少年は髪を掻き上げ、雪に埋もれる女を見据えた。氷は答えを待っている。余裕の微笑を口元に湛え、少年は深く息をついた。

「キミが知るべきではない。それに、信じないだろうしね」

氷は何も言わなかった、答えなかった。水晶のように澄んだ瞳を、ただ少年の方へと

向けているだけだった。

無言の時間が暫く続いた。少年は、ゆっくりと席を立った。

「傲慢、嫉妬、暴食、色欲、怠惰、憤怒、貪欲……って知ってるかい？」

「七つの大罪……ね。それが、どうしたの……？」

これらは、大罪であると同時に、人間の意識でもある、と少年は説明した。

「人間である以上、罪からは逃れられない。キミにもあるだろう？」

「私は、傲慢よ」

「キミは蛇だものね」少年は苦笑した。「とにかく、みんな罪人なのさ。だから裁かれなければならぬ」

ふいに少年の瞳から光が消えた。なにか得体のしれぬものを睨み付けているような、見るもの全てを嫌悪するような、恐ろしい瞳をしている。

「ところで、アンノーン……って、知ってる？」

光が失せた瞳のまま、少年は氷に問う。氷は答えなかった。



「キミの遭遇したポケモンは、アンノーンとしか言いようがないな」

瑞穂から遺跡内で体験したことを聞いた葦崎は唸るように呟いた。

暖房の効いた研究所内の食堂。瑞穂はホットケーキを食べ終え、緑茶を啜っている。ゆかりは、カレーライスを脇目もふらずに口へと運んでいた。

湯飲み茶碗をテーブルの上へ静かに置くと、瑞穂は、正面に座っている葦崎へと視線を移した。左の頬に寒気を感じる。窓の外では、まだ雪が降り続けているのだ。

「あんのおん……ですか？」

「そう。アンノーンに間違いない」

アンノーン。今まで何度か耳にしたことはあるが、実際に見たことは、これまで無かった。

ピンクのウエストポーチから電子式の図鑑を取り出して、瑞穂は検索のボタンを押した。

図鑑の画面が切り替わり、黒くて奇妙な形をしたものが映し出された。説明の音が鳴る。

『アンノーン……シンボルポケモン。昔の石版に記された文字に形状が酷似している。形状には個体差があり、現在26種類に分類される。古い遺跡などで発見されることが多いが、その生態については、研究が進んでおらず、まったくの謎に包まれている』

そっけなく説明を終えると、図鑑は沈黙した。すぐに瑞穂は図鑑をウエストポーチに

しまう。

葦崎は咳払いを一つすると、コーヒーカップに手を付けた。

「今、聞いてもらったとおり、アンノーンは、全く謎に包まれたポケモンだ。いや、もはやポケモンと呼んでいいのかどうかも分からない」

「それは、どういう意味ですか……？」

コーヒーを啜る。葦崎は、湯気に向こう側に座っている水色の髪の少女に視線を送る。カップを置き、口元をティッシュで拭いとつてから、答えた。

「アンノーンは、限りなく既存の生物概念から程遠いポケモンなんだ。ある日突然、増殖したかと思うと、次の日には、すべて消失していることもある。しかも、発見されるのは、決まって古代遺跡からなのも謎だ」

もつとも、そのことについては、私なりの仮説があるのだが……、と言いかけて、葦崎は慌てて口をつぐんだ。

「そうですね。私も初めて見たときは、ポケモンだとは思いませんでした。まるで……、幻を見ていたみたいで……」

「アンノーンを目撃した人は、大体似たような証言をしている。この遺跡でアンノーンが目撃されること自体は、さして珍しいことではないからね」

瑞穂は視線を落とした。時間帯のせいもあってか、食堂は大勢の研究員で賑わって

る。

「実は……」瑞穂は声を潜めた。「一つだけ、気になることがあるんです」

「気になること……?」

「はい」腰に付けたモンスターボールを葦崎の前に出し「この子が、さつきからずっと怯えてるんです」

葦崎は目の前に置かれたモンスターボールを見つめた。そして二度三度、解ったように小さく頷くと、言った。

「これも珍しいことではないよ。エスパータイプのポケモンにはよくあることだ。アンノーンは特殊な精神波を常に発生させているから、その影響をうけたのだろう」

「あの……グラちゃん、エスパータイプのポケモンじゃ、ないんです」

瑞穂の言葉を聞いて、葦崎は眉を潜めた。「なんだって?」

「このモンスターボールに入っているのは、グライガーです」

すぐさま葦崎は身を乗り出した。カップが衝撃で揺れる。ゆかりは不思議そうに彼を見た。

そんなことがある筈ない。彼は言った。そんなことがある筈ないんだ。

「エスパータイプでもないポケモンが、特殊な精神波を感知することなど、できる筈がない……。それはキミも知っているだろう?」

「はい……知っています。ですけど、グラちゃんは本当に怯えているんです。それに――」

「それに……何だね？」 葦崎は身を乗り出したまま、瑞穂を促した。

「私たちがアンノーンに襲われたとき、グラちゃんは普通ではない特殊な力を使っています」

「特殊な……力？ なんだね、それは？」

「サイコキネシスです」

葦崎は目を剥いて呟いた。そんなこと、あり得ない。

サイコキネシスとはエスパー系のポケモンが得意とする技である。脳から発している精神波を増幅し、強力な念動力を操ることができるのだ。

「グライガーはエスパータイプではない……。サイコキネシスを発動させることも、アンノーンの特異精神波を感知することも常識ではありえない」

驚いている葦崎を、瑞穂はじつと見つめている。キミはどう思う？ 葦崎の眼は、そう瑞穂に訴えていた。

「考えられるとするなら……、グラちゃんは、エスパータイプと同様の、超常能力を有しているのではないのでしょうか？」

「しかし……なぜ……」

「思い当たる節があります」

再びウエストポーチの中から、瑞穂は茶色い破片を取りだして、葦崎に見せた。

「これは、グラちゃんタマゴの殻です」破片の中央部を指さし「ここをよく見てくださ
い……」

破片には小さく刻印がなされていた。『s1/207f151mc(150) | 1s

(n)』と。

「それが、どうしたのかね？」

瑞穂は、グライガーが、ロケット団が処分しようとしていたタマゴから産まれたことを話した。

「たぶん、この刻印は、管理番号か何かだと思います」

「つまりキミは、超常能力を有するグライガーが、どこかに生息していて、それをロケット団が

乱獲している……と言いたいのだね？」

「そうです。もつともロケット団が、グラちゃんのタマゴを『処分』しようとした理由までは解りませんが」

瑞穂は破片をウエストポーチにしまいこんだ。葦崎は冷めたコーヒー飲み干して、黙っている。ただ一言、小さく呟いた。

「信じられん……」

「私もです」

葦崎は窓の外を、じっと見つめている。しかし、次に瑞穂の口から告げられた真実は、更に葦崎を驚愕させることになる。

「あと、気のせいかもしれないですけど……、変な声が聞こえたんです」

「変な声……?」

「女の人の声でした。助けて……って。あ、でも、たぶん気のせいです……」

葦崎は突然立ち上がった。蒼白だった。

「本当に……?」

相手の驚きのように、瑞穂は戸惑った。「え、その……思い過ごしです」

「ウチも聞いたで!」 ゆかりが横から口を挟む。カレーは既に平らげられていた。

葦崎は息を呑んだように見えた。忙しなく瞬きをすると、瑞穂の手を引いた。

「教えてくれないか? 声の聞こえた場所を」

「はい?」

「私の考えが正しいとすると……大変なことが、既に起こっているはずだ」



欲求×創造

それは、歪んだ愛の形。

彼は罪を犯した。だけど、キミにも解るはずだよ。彼の気持ちが——そう、少年は言った。

いつの間にか少年は、氷の目の前に立っていた。白銀の髪の毛が雪と戯れている。

「解らないわ」氷は答えた。

「いや、キミには解るはずだ。孤独だった、彼の気持ちが。自分のために、アンノーンの力を彼は受け入れた。接続し、力を授与された」

氷は答えない。その瞳を足下へとむけ、俯いている。一步一步、少年は氷へと歩み寄っていく。

「アンノーンは、彼のような罪人の意識を察知し、具現化する力を持っているんだ」

「それは、さっき聞いた……」

「なぜポケモンが、そんな力を持っていると思う？」

氷は何も答えない。口を閉じたまま、微動だにしていない。

「なぜ、アンノーンは、古代文明跡から大量に発見されると思う？」

氷は何も答えない。妖しげな瞳が、いつもとは違う、悲しみに満ちていた。

「どうして、その古代文明は滅んだと思う……？」

氷は何も答えはしない。降りしきる雪の中、ただそこに存在するだけの少女なのだ。

古代人も、現代人も、過ちを犯したんだ。だから、裁かれなければならない。みんな、自分だけを大切にしているんだ。裁かれなければならないんだよ——自分以外はどんなってでもいいと考えている愚かな人間を。

少年の憎悪とも、悲しみともつかぬ演説が、少女を苦しめていた。

「あなたに、人間を裁く権利があるの？」

氷は訊いた。少年は、とってつけたような微笑みを浮かべた。

「ボクが裁くわけじゃない」微笑み撤回し。

「彼も……いずれ裁かれる。そう、遠くはない、もうすぐ。キミにも、解るはずだ……解るはずだ……。キミは人間ではないのだから」

「私も……人間は嫌い……」沈黙。雪も止まったかのように。

「だけど……人間でも、すべてが愚かというわけではないわ」

「それは、キミが人間に甘い証拠さ」

再び、沈黙。空気も止まり。

「みんな……人間は、裁かれなければならぬ」

少年は、頬の黒いタトウを指で撫でた。タトウが波打つ。

「彼の……あの男の裁かれる時がきたみたいだ……ついてくるといい……」

少年は突然、氷に背を向けて、歩き出した。遺跡の方角へ。

「あの男には、正当な裁きが下される。キミも見るといい……」

そして、すべての人間への裁きが近づいていく。

ボクは、それを待っているんだ。



壁には先程と同じく、奇妙な模様が刻まれていた。

アルフの遺跡内部は、冷たく湿っている。葦崎は寒くないように、上着を羽織った。不気味なほどに静かな、恐ろしいくらいの静寂が辺りに広がっている。ただ足音だけが、木霊し、静寂の不協和音となっていた。

薄暗く、まるで空気のぼやけているような回廊を歩きながら、葦崎は独り言のように呟いた。

「あくまで、私の仮説に過ぎないのだが」と前置きし。

「アンノーンは、人間の意識……いや、心を察知し、それを具現化する力をもっている……それは知っているね？」

「はい」瑞穂は頷く。「でも、それは単なる言い伝えじゃないんですか？」

「うむ……。アンノーンによって具現化された世界には、その人の心が投影される……。もつとも、それは、この遺跡から発見された碑文に、そう刻まれているに過ぎない。だがね、もし碑文に刻まれていることが本当だとしたら……」

「先生は、その碑文が真実を書き示していると考えているんですね」

「瑞穂は頷いた。そして、瑞穂を見下ろして言葉を続ける。

「今までに、アンノーンの捕獲例は数えきれぬ程あった。しかし、人間の意識を読みとり、それを具現化した前例はない……。それゆえ人々は、碑文に刻まれた古代文明人からのメッセージを、本気にしなかった。だが、私はずっと疑問に思っていた。これほどの巨大な建造物を造りだしてしまうほど優れた文明を誇った人々が、なぜ碑文に真実を刻まなかったのか……」

瑞穂から視線をそらし、葦崎は辺りの模様を眺める。

「もしかしたら、古代文明人は碑文に真実を刻んでいたのではないか……。そう思ったんだ」

「でも、アンノーンに人の意識を具現化する力はなかったんですね……？」
「それが、私たち現代人の思い違いだとしたら？」

「え？」

空気が震え、瑞穂は息を呑んだ。 葦崎は宙の一点を見据えている。

「アンノーンは個体によつて幾つもの異なった形状をもつだろうか？ もしかしたら、それらが複数集まることによつて始めて、人間の意識を具現化することができるのではないのだろうか……。 私たちは、アンノーンの一体一体を別々に研究していたのだから」

「あの……。 それと、不思議な女の人の声と、どう関係があるんですか？」

瑞穂に訊かれ、葦崎は懐から四つ折りになっていた新聞を取り出した。

目の前に差し出され、瑞穂は爪先立ちながら新聞を覗き込む。 昨日付けの桔梗新聞だった。

呆然と新聞を眺める瑞穂に、葦崎が囁いた。

「……」と、小さな記事を指さし「見てみるといい」

葦崎が指定した記事の見出しは『いま、怪談がブーム』となっている。

訳の解らないまま、瑞穂は新聞記事を読み続けた。 そして、その一行を読んだ途端、あつ！と声をあげた。

アルフの遺跡では、ここ最近、若い女性が次々と行方不明になるといふ事件が続発している、と書かれていた。

歩調を早め、葦崎は言った。「アンノーンだよ……その事件の原因は……」

「でも、その事件と、アンノーンに……何の関係があるんですか?」

「誰かが、この遺跡で願ったんだ。アンノーンは、その願いを聞き入れ、具現化させた。行方不明になった女性達は巻き込まれ、アンノーンの創りだした意識世界に閉じこめられたのだろう。……いや、もしかしたら、彼女たちを閉じこめること自体が、目的なのかもしれない」

「な……、誰が……何のために、そんなこと……」

瑞穂の疑問に、葦崎は答えなかった。お互いに無言のまま、歩き続ける。

無限に続くと思われる回廊は、しばらく歩いたところで終わっていた。回廊の先には、無数の石像が墓場のように整然と建てられている。

石像の一つ一つに、斑模様のコケが生え、積み重なっている年月の重みが伝わってきた。灯明台の頼りない灯りが、不自然なほどの表情をもって、瑞穂と葦崎を照らしている。

瑞穂の背丈の2倍、葦崎の背丈の1.5倍はある、巨大な石像を見上げ、その彫刻の細やかさに瑞穂は見惚れた。とても、1500年前に造られたとは思えない。

「これほどの細かい彫刻は、現代の技術でさえ、造るのは難しいのだそうだ」
 歩きながら葦崎は説明した。瑞穂は躍動感溢れる石像を見つめ、思った。
 これほどの優れた文明が、なぜ滅んだのか。



「神の命令に、背いたからさ」

遺跡内部の朧気な灯りが、少年の銀髪と鍵型のピアスをオレンジ色に染め上げていた。

少年は続けて言った。だから滅んだ。裁かれたんだ。

氷は何も言わない。澄んだ瞳だけが、濡れたように少年のいる風景を包んでいる。

少年の冷弁は止まらない。

——人間は、過ちを繰り返した——

「過ち……う？」

「人間の意識は、強くなりすぎた……。欲望へと姿を変えてしまった。意識は言葉となり、言葉は偽りとなり——やがて、罪が生まれた」

「三流の詩——戯れのポエムね。まるで」

嘲るように鼻をならし、氷は少年から眼を背けた。

しかし、次に少年の口から発せられた言葉の意味が、氷の唇を強張らせた。

「人間は、存在すること自体が間違っていたんだ」

人間は、存在すること自体が間違っている。

「なぜ……？」氷は、訊いた。

「人間は、人間自身を、同種族ですら理解できないほど愚かなんだよ。理想を理想とも思わず……、ひたすら自分の視点からしか、物事を考えられないんだ。その結果がキミだ。人間は、キミのようなキメラを平気で生み出した。これは生命に対する冒涇だと思わないかい？ 人間は神を気取っている……それも罪だ」

「私を否定しないで」氷は鋭い目つきで、少年の首筋を睨んだ。

「それに私はキメラじゃない……」

「だけど、人間でも、ポケモンでもない」

「確かに私は人間でも、ポケモンでもない。それに、自分の身体は嫌い……自分を呪うこともある。こんな身体になんてなりたくなかった。なんで、こんな身体にされなければいけないのか。ずっと考えたこともなる。でも、答えはでなかった。でるはずない。運が悪かった——その一言で、すべて説明がついた。納得できないけれど、そうとでも考えなければ、やりきれないのよ……。納得できる答えなんて、見つからないもの。だつ

て、これは私が望んだこと。生きるために、私は自分の身体を売った。それだけのこと……なのに——」

そこまで言つて、氷は自分の頬が濡れていないか、確かめたくなくなった。人前で涙を流すことは、心に傷をもつ少女にとつて、耐え難い苦痛であるのだ。

少年に気付かれぬよう、氷はさり気なく頬を小指で拭いた。濡れていた。

少年に笑われた。そんなに苦しかったんだね……。同情ではない、嘲笑を含んだ言葉が氷を襲った。

少女は吠えていた。次の瞬間、腕だけが破裂し、紫色をした邪蛇が飛び出し、少年の頭を引きちぎろうと牙を剥きだした。

しかし、少年は動かさず、少女の……水の怒りに燃えた瞳を直視した。異形の右腕は少年の目前まで迫ってきている。

倒れた。口をあんぐりと開き、喘ぎながら首もとをしきりに掻きむしっている。白く濁った唾液が口元からこぼれた。充血した瞳は、そのまま相手へ向けられていた。まるで金縛りにあつたように全身をヒクつかせ、呻き声を上げて、視線が地面に落ちた。

そこで不思議な痙攣は治まった。氷は震えながら起きあがり、少年を見つめた。直視できなかった。

「キミに、ボクを殺すことはできない。でも、ボクもキミを殺すことはできないけれど——

「
氷は怯えたようにその場に座り込んだ。もう二度と、少年の瞳を直視できそうにな
い。」

ボクが怖いんだね？ あんた、私のことが怖いよね？

悪魔の声が、頭の中に渦巻いた。怖いのか？ 怖い？ 怯えてるのね。私のことがそん
なに怖い？

自分が、酷く弱々しく感じられた。

「ふふ……。そんなんじや、レライエやサミジマに、笑われるよ？」少年は笑った。

「ええ……。そうね——」小さく弱々しい声が、氷の口から辛うじて発せられた。

かつて自分が裂き喰らったサミジマが、最期にみせた恐怖の表情を、氷は思い出して
いた。

私も今、あんな惨めな表情をしているのね——



憤慨△加速

く彼らのために 私たち 旅立つく



「ここです。ここで、私はアンノーンに襲われて、不思議な声を聞いたんです」
瑞穂の声を聞きながら、葦崎は探るように辺りを、遺跡の中を見回していた。辺りの壁は、先程の衝撃で多少崩れており、床に散乱している。

破片を踏んでしまわないように、慎重に足下を見ながら、瑞穂は壁の一点を指さした。

「このあたりから……声が聞こえてきたような気がしたんですけど……」

自信なさげな瑞穂の言葉に、葦崎は小さく頷くと、壁を手でゆっくりと撫でた。

「この辺りか……、特に変わった所は何もないが……」

瑞穂を振り返り「洲先君。グライガーをだしてくれ」

「あ、はい」瑞穂はモンスターボールのボタンを押した。「お願い、グラちゃん」

陰鬱な灯火とは全く違う、眩い光の中からグライガーが飛び出した。

やはり怯えている。潤んだ瞳は、いつもの陽気なグライガーのものとはかけ離れていた。

「ごめんね……グラちゃん。でも、少しだけ、先生と私に協力して。お願い」

グライガーは頷いた。腕に抱いて、グライガーの震えを感じたとき、瑞穂の心は痛んだ。ここまで、ひどく怯えているグライガーを、むりやり出すことはしたくなかった。

「うん……たしかに、なにかを感じているようだ……」

「でも、そんなに怯えるほど、アンノーンは恐ろしいポケモンなんですか……?」

「さつきも言ったとおり、複数集まることで、アンノーンの本来の力が発揮されるのだから……」

菫崎の言葉は、そこで止まった。別の声に、掻き消されたのだ。

たすけて。そう響いた。まるで、永遠に続く山彦のように。

ここからだして。そう聴こえた。まさに壁の中から、頭の芯に響くような声だ。

2人は一様に、声のする壁の一点を見つめた。グライガーも同様に。既に荒い息づかいで。

「聞こえました?」瑞穂が訊いた。

寒いよ。痛いよ。怖いよ。恐いよ。どこにいるの？ ソウちゃんはどこ？

光球は語り続ける。無数のアンノーンは、瑞穂に群がっていた。黒々とした異形の奥に、水色の髪をした幼い少女が呆然と立ちつくしている。瞳は焦点を失っていた。

これが、洲先瑞穂の意識なのか。葦崎の首筋に、冷たい汗が流れた。

愛してる。好き。憎い。知りたい。嫌だ。思い出したくない。嫌い。好き……。

次から次へと見え隠れする瑞穂の意識を目の当たりにし、葦崎は眼を伏せた。優しさの中に憎悪と苦悩の入り乱れた瑞穂の心を、葦崎は直視したくなかった。澄んで優しい瞳の奥に、朗らかで可愛らしい笑顔の内面に、瑞穂の深い闇が隠れていたのだと思うと、どうしようもなく、やりきれない、虚脱感に包まれるのだ。

恐い。怖いよ。気持ち悪い。憎い。助けて。大好き。大好き。友達だよね？ 愛してる。

瑞穂の心の、光と闇は交錯し、一斉に騒めいている。その時、アンノーン達の中の一体が、人間の、瑞穂の声で、話しているのが聞こえた。

「コノ、にんげん。なかまニナレナイ」

それに答えるようにもう一体のアンノーンが、瑞穂の声のまま、片言で言った。

「ナレナイ。なかまニナレナイ。コレいじょう、コノにんげんニカカワルコト、いみナイ」

「コノにんげん。ワタシタチヲ、ひつようトシテナイ」

「ほかニ、なかまハ、イナイノカ……」

アンノーン達は、辺りを見回した。その中を駆ける、紫の閃光には気付かなかつた。

縦一閃に青い光が走り、一直線上に漂っていたアンノーンの体が真つ二つに割れた。風圧に押され、アンノーン達はちりちりバラバラに吹き飛ばされた。その先で、グライガーは、怒りの表情でアンノーン達を睨んでいた。

葦崎はすぐさま瑞穂へと駆け寄る。焦点を失った瞳のまま立ちつくす瑞穂は、そのまま前のめりに倒れた。葦崎が抱きかかえなければ、顔を床に打ちつけていたところだ。

「洲先君。大丈夫か？ 意識はあるかね？」

その言葉が聞こえたのか、瑞穂の瞳に意識の色が戻った。ゆつくりと葦崎の腕の中から起きあがり、恐れ戦きながら壁の中へと消えていくアンノーンを、見やった。

耳に、かすかに、自分の囁きを感じながら。

「コワシテクレ。ワタシヲ、コワシテクレ」

辺りに静寂が蘇った。アンノーン達は、その姿をどこへともなく隠したのだ。

グライガーと同様、瑞穂は怯えながら葦崎の大きな掌を握りしめる。涙目だった。ま

だ、あどけなさが残る、白く美しい整った顔を震わせながら、瑞穂は呟く。

「あ……あの、私、いったい……なにが……」

「何もなかったよ。心配することはない」

「でも……、私、今、ものすごく、変な気分なんです」

「変な気分……?」

「さつき、気持ち、よかったです。怖いくらいに気持ちよくて——不安も、怒りも、恐れも、なにもなくて、すごく心地よかったです」

瞳に溜まった涙を拭うと、瑞穂は続けた。肩ががくがくと震えている。

「ぱぱがいて、ままがいて、みんな笑って……」呻いて「でも、不自然に気持ちがよくて、だから、その分だけ、怖くて……。なんとか、現実に戻ろうとして……」

「賢明な判断だったね。」葦崎は微笑んで「私だったら、とても、そんなことはできないよ。大丈夫、心配することはない。キミには、なにも起こっちゃいない」

蒼白の面持ちで、瑞穂は立ち上がり、グライガーを見やった。グライガーは、壁の一点をひたすら睨み付けている。心なしか、瞳が紫色に染まっているように見える。

「グライちゃん。さつきはありがとう……」瑞穂は顔を上げた。「そこに、なにかあるの?」

頷きを返し、一瞬のうちに、グライガーは遺跡の壁をハサミで打ち砕いた。壁の破片

が吹き飛び、大穴が一つ。瑞穂と葦崎は驚愕し、止まった。

「な、なんてことを……貴重な文化遺産を……」

瑞穂は狼狽えた。「ぐ、ぐ……ぐ……ぐ……グラちゃん……な、な、一体なにを……?」

「グラッ!」と声をあげ、グライガーは穴の中をハサミで示した。

「え……? やつぱり、そこに……なにか、あるの……?」

瑞穂は小さく首を傾げた。グライガーに近づき、穴の中を覗き込んだ。

笑っていた。幸せそうだった。だが、そこは闇に包まれていた。

あッ……。小さな叫びをあげ、瑞穂の動きが止まった。葦崎も不審に思って、穴の中を覗いた。

瑞穂も葦崎も、そしてグライガーも、そこにいる筈のない闇に驚いていた。

「こないでよ……、しつこいね。せつかく、見逃してあげたのに、また来るなんて……」

男の声だった。小柄だが、小太りで、脂ぎった黒い長髪の前髪をしきりに手で払いのけている。黒縁眼鏡の分厚いレンズが、妖しく、怪しく、光っていた。周りには漆黒の霧が、男を包み隠すようにたちこめている。

男の醜い容貌と不気味な雰囲気、葦崎は身震いした。

小太りの男の周りには、幾つものアンノーンがぐるぐると回っている。

「どうして僕の幸せの邪魔をするの？　こんな所になんのようなの？　用がないなら帰ってよ」

血走った眼を見開き、男は言った。見れば見るほど、醜い。

「あの……、ここで、なにをしているんですか……？」

果敢にも瑞穂は訊いた。艶やかな水色の髪が、かさかさとして揺れている。男は顎を突き出し、嫌らしい笑みを浮かべた。

「ここで……なにをしているかだつて？　そうだな……なんと云えばいいのか……」

霧の闇が集まり、黒々とした物体へと、その姿を変えていく。幾つものアンノーンが、いつしか男を守るように、漂っていた。

瑞穂は穴の中に踏み込んで、男を見つめた。菲崎もそれに続く。アンノーンの群れに驚きながらも、瑞穂は再び問う。黒い霧が揺らいだ。

「ここで……なにをしているんですか……？」

「上を……見てみたら……？」

男は不適な顔を上へと向けて、黄色い歯を剥き出しにして笑った。

菲崎は、男の言葉通り、天井を見上げる。菲崎はそのまま言葉を失って、立ちすくんだ。不審げにその様子を見ていた瑞穂の頬を、生暖かい液体がつついていく。頬を手で拭い、その液体が赤い色をしているのを見て、瑞穂は息を呑んだ。

瑞穂は、恐る恐る上を見た。喉が渇くのを感じた。目眩がした。

女が3人、天井に張り付けられている。皆、目の眩むほど、美しい娘たちだった。茶色い髪をした女が、今にも消え入りそうな小さな声で、しきりに、謔言のように呟いていた。

たすけて、ここから出して。たすけて、ここから出して。……涙は枯れていた。怯え、震え、目を閉じている。現実とも悪夢ともつかぬ、この空間を直視したくない気持ちはよくわかった。

今、生きているのは彼女だけだ。そう思ったと同時に、瑞穂の背筋が冷たく濡れた。

1人は、眠るように死んでいた。腕がだらりと垂れ、その先が黒々と変色し、蛆が湧いている。もう一人は、血走った眼を左右に向けながら死んでいた。首筋が切り裂かれており、いまだに血が滴っている。その首筋には彼女自身の爪痕がくつきりと残り、また彼女の爪は、赤々とした血糊に染められていた。

「狂ったんだよ。その女は……」

瑞穂は、そう呟いた男の顔を睨んだ。葦崎は、ただ口を動かすだけで、何も言葉にならないでいる。

「狂ったから、自分の喉を、爪で掻き切って死んじゃったんだ……バカみたい……」

男は冷たく笑った。

「狂ってるのは——あなたですよ」

断言した。瑞穂は臆することなく、男の醜悪な眼の奥を睨んだまま、動かないでいる。

「これは……なんなんですか……？」

大体の予想はついていた。瑞穂は悟ったのだ。以前、コガネシティで襲われたことのある瑞穂には、男という生き物が、どれほど、どこまで残酷になれるかということ、よく知っている。

瑞穂は、この男の笑いの中に凶々しく歪んだ憎悪を感じ取ったのだ。

「こいつら……笑ったんだよ……」

純粹だった。純粹な憎悪が、男のただでさえ醜い男の面を歪曲させた。

喉の渇きがひどくなってくるのを瑞穂は感じた。奥歯を噛みしめ、男を見つめる。

男は語った。男は休暇を利用して、独りでこの遺跡に旅行に来ていたのだという。そして、そこで、遺跡の中で男は、3人組の美しい女性たちを見つけたのだ。男は独りだった。男に『男』としての本性が走った。男は女性たちに声をかけた。

「あの女ども……僕が話しかけても、無視したんだ……。ちよつと見て呉れがいいからって、調子に乗りやがって。僕のこと、ブサイクって言って、笑ったんだ。笑ったん

だよ」

女は男を嘲笑った。なによ、この、ブサイク。寄らないでよ、汚いわねっ！

男は吠えた。

女たちは笑いながら逃げていった。しかし彼女たちの行方を黒い物体が遮った。

「驚いたよ……。なんととっても、自分の思い通りのことができるんだからな」

驚く男の元へ、銀髪の少年があらわれて言ったのだ。「それはね、アンノーンというんだよ」

アンノーンは、キミを選んだ。アンノーンはキミの願いを叶えてくれる。夢のような道具だよ。

のぞみハナンド。かなエテヤロウ。よくぼう、おまえノナカニアル。すべて、ハキダセ。

「事実、アンノーンは僕の望みを叶えてくれた」

「あなたの……望み……？」

「あの女たちを、僕の手で裁くこと。それ相応の罰を与えること」

そして犯してやる。僕のものにしてやる。奪ってやる。それが僕の幸せ。男の表情から、薄汚れた心が覗く。瑞穂は眼を背きたい衝動をなんとか抑えた。

「そして、僕は、あの女たちに罰を与えた。そして……」

少年の去った後、男は自分と彼女たちだけの世界を望んだ。アンノーンは、その世界を簡単に創り上げた。男は彼女たちを天井に縛り付けることを望んだ。アンノーンが輝き、女たちは天井に縛り付けられた。

許さない。男は思った。アンノーンは、彼女たちを許さなかった。

女たちは怯え続けた。男は、女を、自分の思いのままに傷つけ、犯し「……殺したんだ」

最初の犠牲者は黒い髪をした女だった。男の体を、あまりに彼女が拒絶したので、男が彼女の首を折ったのだ。すぐに彼女は静かになった。

2人目の犠牲者は髪を金色に染めている女だった。日に日に腐敗し蛆が湧き、屍臭を発する最初の犠牲者を見せつけられ、狂ったのだ。訳のわからぬことを叫き散らし、暴れた後、喉を自分の鋭い爪で掻き切った。

血が吹いた。女は血走った瞳を廻して吐いた。舌を噛み切っていたのだ。

瑞穂は黙ったままだった。葺崎は青ざめた顔をしている。

「やっぱり……おかしいですよ。間違ってます、こんなこと……」

その声は怒りに震えていた。瑞穂は拳を握りしめて、掌に滲んだ汗に気付いた。

消失Ⅱ増殖

「おまえに、何がわかる……?」

男は言った。おまえに。何が。わかるんだ？ 僕の、俺の、何が、わかるんだ……?

「おまえに、容姿にも何もかもに恵まれたお前達に、俺の気持ちが変わるのか？ いや、理解できるはずはない」

あまりの男の形相に、今まで怯まなかった瑞穂も、思わず後ずさった。男の狂気で、殺気で、瑞穂の表情に恐れが浮いた。男は続ける。

「逃げるのか？ 逃げられると思うのか？ おまえたちは俺のことを知った。そして俺を否定した。それで本当に、逃げられるとも思っているのか……?」

葦崎は背後に何者かの気配を感じて振り向いた。出口は消えていた。消したのだ、アンノーンが。

男は口を動かした。声は出ていない。アンノーンの姿が男の足下から次々と浮かび上がる。声が奪われていた。男の声は男の口からは発せられなかった。アンノーンの体が奇声を発した。

「おまえが、おれノ、なにヲ、シツテイル……。おれノ、きもちモシラナイクセニ。おれ

ガ、サバイテヤル。コロシテヤル」

アンノーンが一齐に瑞穂を捕らえようと、近づいてきた。光弾が発せられ、瑞穂は横へ飛びついて、それをすんでの所で避けた。床にめり込み、光弾が炸裂した。地面が抉られ、破片が辺りに飛び散った。

「先生は、伏せていてください！」

瑞穂に言われるままに、葺崎はその場にかがみ込むように、伏せた。

それを確認し、瑞穂は胸に抱いていたグライガーを解放し、もう一つ、モンスターボールを投げた。

「グライちゃん……！ それに、ナゾちゃんもお願い！」

ボールから光が迸り、ナゾノクサがその姿をあらわすと同時に、アンノーンが真つ二つに割れた。地面に落ちたアンノーンの上に、はつぱカッターがヒラヒラと舞い落ちる。

青い光が空を斬った。断末魔の悲鳴をあげ、アンノーンがバラバラに砕けた。グライガーの鎌鼬が、アンノーンを切り裂いたのだ。

黒い異形は束になって、ナゾノクサを押さえつけようとした。ナゾノクサは黄色い粉末を吹き出して、飛び上がり、痺れているアンノーンへはつぱカッターを発射した。

踊るように舞い上がって、グライガーはハサミを振り、青い光の筋が黒い霧を祓う。

瞳が紫の光を帯びてきた、叫び声をあげ、グライガーはハサミを振り回した。

アンノーンは、青い光に包まれて、弾け飛び、砕け、消えていった。

男はあからさまに狼狽していた。額には汗と脂が浮かんでいる。

「そんな……アンノーンが……、ありえない」

ナゾノクサをボールに戻し、グライガーを抱きかかえると、瑞穂は男の顔を直視した。

「すべて……すべてが自分の思い通りになるわけがないんです。もう、こんなこと、やめてください」

激しく頭を振り、男は食い入るような眼で消えていくアンノーンを睨んだ。口元から夥しく涎が溢れている。歯を食いしばり、立っている。痙攣しているように見えた。

「あ……あう……。違う。これハ。なにカノマチガイダ！俺は望んだ。望んだんだ。なぜ、叶えてくれない？ 答えてくれ。答えろ、アンノーンっ！」

叫び声をあげ、男は瑞穂の元へと駆け出した。拳を振り上げている。

瑞穂は危険を感じた。男は狂った。自暴自棄になり、自分を殺そうとしている。

男の懐から、鈍く光る刃物が飛び出した。口を開いて、眼をしつかりと瑞穂を睨む。頭のなかには、既に血塗れになって死んでいる、瑞穂の姿が映し出されていた。

「ころシテヤル。ころシテヤル。おれヲひいていスルナ！ おれヲばかニスルナ！ おれ

ノきもチガ、オマエニワカルカ!? しネ、しネ! ころシテヤルツ!」

俺を否定するな……俺を馬鹿にするな……。それが男の究極の望みだった。俺を否定するな。叫いた。狂ったように、叫き立てる。俺を馬鹿にするな。俺を否定するな。俺の望みを叶えてくれ。

しかし、それは男の言葉ではなかった。刃先が光る。瑞穂は身を屈めた。

叫び声が揺らいだ。冷たい音とともに、瑞穂は、そこに無数の意識をみた。皆、泣いていた。



外は吹雪だった。雪が吹き荒れ、道は白に埋まった。

少年は頬のタトウを撫でる。鍵型のピアスが、風に吹かれて揺れていた。

「裁かれただろう……? あの男」

「そうね……。でも、あなたが現れなければ、あの男は罪を犯さずにすんだ——」

不快そうな顔で氷は言った。顔を背けている。少年は嗤笑した。辺りが暗くなってきた。夜が始まるうとしているのだ。

「それは、違う」

「何が違うの……?」

「人間は、存在自体が罪なんだ。それに、ボクが現れなくても、誰かが同じ罪を犯す。同じ人間だから」

氷は、もう、何も言わなかった。何を言っても意味のないことを悟ったのだ。

一歩足を踏み出せば、その後は簡単だった。すぐに、2歩目が続いた。少年と氷の距離が少しずつ開いていく。その隙間を埋めるように、雪が降り積もった。

「最後に教えて」氷が言った。歩きながら振り返らずに。「お礼を言いに来るためだけに、ここに来たの?」

「いいや。裁きの準備に来た。お礼は、そのついでさ」

「準備って——あなたは、どうやって人間を裁くつもりなの?」

「ボクが裁くわけじゃない」

言い切って、少年は振り返った。白い闇の中へと、氷は消えていく。

「待って……」少年は言った。嗤ってはいなかった。

氷は止まった。しかし少年の方を見ようとはしなかった。

「ボクに……ついてこないかい……?」

「なんで、そんなこと訊くの……?」

「キミは美しい。それに、いずれキミは、ボクを理解してくれる筈だ。だからボクと

……」

氷は再び歩き出した。少年は口を噤んだ。追いかけてよともしなかった。

消えていった。あとには沈黙だけが残った。少年は俯いていた。なぜ、あんなことを言ったのか。いつしか氷の不思議な魅力に取り憑かれて自分の身に気付いた。氷と自分は、どこか共有している部分がある。少年は漠然と考えていた。だから惹かれるのだ。

少年は軽く舌打ちして、空を仰いだ。同時に携帯が鳴った。

「ボクだ……」峻厳な顔つきと態度で、少年は言った。相手は事務的な口調で訊いた。「いままで、どこに行っておられたのですか……？」

「訊くな、私用だ。……それと、少しばかり面白いことをしてみようと思う」
『『裁き』』に関係する内容なのですか？」

「そうだ。僕たち……いや、私たちの理想に少しでも近づくための……」

——理想って、なんだ——？

そこで少年は口ごもった。気を紛らわすために、雪の地面を踏みしめ、歩いた。

「ねえ、レミエル……。ボクは、本当に選ばれた者なんだろうか……」

「何を仰います。先代の御子息のなかで、唯一生き残ったのは、あなた様なのですよ」

「そうだね……。ボクは選ばれたんだよね……。それじゃ、今から帰る」

携帯を懐にしまい、少年は胸を押さえた。自分は、いつしか氷に惹かれていた。だから殺せなかったのだ。同じだ。少年は思った。選ばれた者でも、同じなのだ。苦しきは。誰でも――

苦しみの気持ちは同じなのだ。



彼女は泣き続けた。

友人を同時に2人も失い、そして自分自身の命までもが危険に晒されたのだ。悪夢から覚め、母親にしがみつき泣きじやくる子供のようにならぬように。彼女の肩はいつまでも震えていた。

彼女は、何も言えないでいる瑞穂と葦崎に泣きながら訊いた。

「私たち……そんなに非道いことしたの？ 殺されなきゃならないようなことしたの？ 教えて……教えてよ……」

無惨な二つの屍体を前に、瑞穂は息の詰まるような思いで彼女を見つめていた。

彼女はしゃくりあげながら続けた。

「だって……だって……あの時は……」

弁明のしようがなかった。彼女に弁明する権利などなかった。そこで彼女は押し黙った。歪んではいたが、男は正しかった。正しかったが、彼女たちは間違っていた。

男は絶対に許せない。若い彼女たちの命を奪い、それで平然と自分の正当性を主張していた。許せない。しかし、彼女たちが男にした仕打ちが、男にとつてどれほど残酷なものであつたかを考えると、瑞穂は鬱々とした気分になる。心の迷宮は深く浅く、すれ違い、争いを、憎しみを生む。

彼女は裁かれたのだ。

瑞穂は、二つの屍体と涙の止まらない彼女を乗せて去っていく車を、雪の降る中見送った。辺りは既に真つ暗になっていた。肩に手が掛かるのを感じ、瑞穂は振り返った。葦崎が優しげに立っていた。

「先生……ユウちゃんは……」

「大丈夫。もう、眠っているよ」

「そうですか……」

雪をはらい、葦崎の部屋に入る。戸棚には、3年前に撮った瑞穂の写真が飾つてあつた。瑞穂は驚いた様子で、写真をまじまじと見つめている。気付いたのか葦崎が苦笑した。

ゆかりはベッドの上で、眠っていた。柔らかい掌が小さく動いた。そして、寝返りをうつ。

「私……ずっと疑問に思っていたんです」

葦崎が瑞穂を見た。小さく頷く。瑞穂が何を言おうとしているのか、葦崎には解っていた。

「アンノーンが、なんで人間の意識を察知し、それを具現化するのか。どうして、人間の望みを叶えようとするのか。そんな人間にとって都合のいい能力を有していたのか……」

「キミは、その答えがわかったのかい？」

「先生は、だいぶ前から、その可能性を考えていたんですよね……う？」

すこし微笑みただけで、葦崎は何も言わなかった。瑞穂は微笑み返し、続けた。

「アンノーンは、人間が創りだした始めてのポケモン……かもしれないですよね。あれほどの遺跡を造ったり、あんな細かい像を造ることのできる優れた文明です。自分の夢や、望みや、欲望を叶えてくれるような、人間にとって都合のいいポケモンを創りだせても不思議じゃないですよね」

「あくまで、推測だけだね」

「確かに推測ですけど、もし正しいとするとアルフの遺跡は……」

「アンノーンの製造工場……という解釈が成り立つ」

「だから、アンノーンは古代の遺跡でしか見つからないんですね」

アンノーンに襲われたとき感じた快感。あれは、麻薬のようなものだ。瑞穂は思った。自分がいる、夢が具現化され、そこにある。それに飛びつかない人間はいない。

瑞穂は感じた。恐ろしかった。実際に、夢をみた代償は、大きかったようだ。

「しかし古代人の創りだしたアンノーンは完全ではなかったようだね。でなければ、あんな事は起こるまい」

葦崎は言ったが、瑞穂は首を横に振った。

「たぶん、違うと思います。アンノーンは、あれで完全だったんです」

「どうしてだね？ あれでは、欠陥品じゃないか」

「たしかに、利用する人間の立場から見れば、明らかにアンノーンは欠陥品です。でも、アンノーンが物体ではなく、機械でもなく、生物であるならば、その能力は有って然るべきだと思います」

「皮肉なものだな……」 葦崎は暗い顔で言った。

「アンノーンはポケモンです。道具じゃないんです。生きています。古代の人達は、アンノーンを創るべきじゃなかったんです。アンノーンに憑かれて、古代文明は滅び、アンノーンは数千年も孤独であることを強いられた……。間違っていたんです。結

局、お互いが苦しい思いをしただけなんです」

瑞穂の頬は火照っていた。悲しみが瞳に浮かんでいるようだった。

「人間はいつの時代も……変わらぬものなんだね」

葦崎の言葉も哀しげだった。雪のふる滅びの遺跡を、瑞穂は窓をとおして見つめている。胸の奥には、床に落ちたナイフの音が染みついていた。

あのととき、恐る恐る瑞穂は顔を上げた。男は、既にそこにはいなかった。消えていた。消滅していた。しかし、ただ消滅していたわけではなかった。アンノーンが一体、増えていた。増殖していた。そのアンノーンはくるくると回った後、張り裂けんばかりの奇声を発し、壁の中へと消えていった。

幻はそこで途絶えた。

女の瀕死の体と屍体が天井から落ちてきた。腐敗していた屍体は潰れた。鈍い音をたてていた。哀しみと孤独に満ちた、男のナイフの鋭い音とは対照的だった。

部屋は消えていた。瑞穂たちは回廊に立っただけだった。もちろん、男はそこにはいない。

あの人はどうなったのだろう。瑞穂は呆然と思いついて出していた。掌を窓ガラスにつけて考える。ひんやりと冷たい心地よさが瑞穂の体を軽く痺れさせた。

アンノーンは、仲間を欲しがっていたのだ。孤独だったのだ。夢を、欲望を、希望を、

望みを叶えるふりをして、その実、その人間の力を奪い、アンノーンへと、仲間へしよ
うとしていたのだ。そして、あの男はアンノーンへと姿を変えさせられた。不幸にも、
夢を見た代償だったのだろうか。

アンノーンは人間を欺いていた。仲間が欲しい。孤独は嫌だ――

古代も、現在の人々もアンノーンに喰われていただけなのだ。人間は、アンノーンの
幻に酔い。アンノーンは、酔いしれた人間に寄生していたのだ。

そして、ある日、人間の殻を破り、アンノーンは増殖した。

今も、遺跡では男は泣き叫んでいるに違いない。誰もいない。仲間が欲しい。青年が
独り、近づいてきた。欲望が見える。憑依した。話しかける。願いを叶えてやる、と
……。

後に、この青年は知るだろう。そして叫ぶに違いない。誰もいない。仲間が欲しい。
終わらない、永遠に。

「Parasiteか……」瑞穂は呟いた。

隣のベッドから聞こえる、ゆかりの静かな寝息が、一日の終わりを告げている。

今夜は眠れそうにない。



#7 視界。

魂に再会すると

異常だ。

風を切り空気を凍えさせ、雲の間を縫うように飛びながら、伝説の蒼い光は思っていた。

翼を振り、空を翔るその姿は、まさに伝説の名に恥じないほど優雅で気品に満ちている。

激しく鳴いた。野太い声が雲の中に響きわたった。

まるで不安に駆られるように飛び続けた。本来ならば、来てはいけない場所であるにも関わらず。

異常だ。もう一度、確かめるように考えた。おかしい。空気が乱れている。空も、雲も、太陽も、朝も、昼も、夜も、星も、月も乱れている。なにか強大な力によって、この星を構成する全てが、ねじ曲げられたようだ。

それ故に不安なのだ。

動揺していた。すぐそこまで接近している人間の気配にすら気づけぬ程、集中力が落

ちていた。

ライトが眩しく光る。鋼の機体が唸りをあげて近づいてきた。人間の造り出した鋼の鳥であった。二発、誘導弾を鋼の鳥は発射した。身を翻しそれを避け、迎撃体勢にはいった。体の輝きと同じ青い光を、口から吹いた。爆音を響かせながら雲の中に消え、鋼の鳥は気配を消した。蒼い光線は雲を突き抜け、上方へと飛んでいく。辺りを見回す。下だ。

そう感じたときにはもう遅かった。鋼の鳥の先端から針のようなものが打ち出され、首筋に刺さった。痛みは感じなかった。なにも感じなかった。感覚が消えていた。

そして、知らないところで、意識しないうちに時は流れる。

感覚が、意識が戻ったのは、すべてが終わった後のことだった。



黒の嵐だった。

雪の嵐が止んだかと思えば、今度は涙の洪水が巻き起こっているのだ。

涙の一滴一滴は、ごく僅かであるが、すべてを集めれば雨を降らし、海をつくることができる。海は生命を生んだ。海が神の涙であって欲しい。意味もなく、そう思った。

生暖かい雪解けの風が、俯いている皆の間をすり抜け、少女の頬を貫いた。枯れ葉が落ちる。誰も、これから腐っていくこうとする木々の方を見ようとはしない。すべては終わったのだ。

太陽が照り光り、それまで虐げられてきたことの欲求を吐き出していた。今日、熱射病で死んだ人間は、独りよがりな太陽の不幸な犠牲者だろう。

犠牲者。その言葉が心に引つかかり、瑞穂は胸が詰まった。表情が歪んでいないか、気になって窓ガラスに映りこんでいる自分の顔を覗き込む。いつもと同じだ。ただ、瞳に涙がたまっていることを除いて。

泣いてはいけない。自分に言い聞かせた。泣いてはいけないのだ。すべては終わったのだから。

鼻を吸り、瑞穂は、隣で俯いているゆかりの手を強く握った。ゆかりは驚いた様子で瑞穂の顔を見たが、すぐにまた俯きに戻った。ゆかりの眼は赤く腫れている。

棺が運ばれてきた。遺族の一人に無言のまま勧められ、瑞穂は棺を覗いた。あの時のままだった。彼の蒼白な顔は、どこか微笑んでいるように見える。

特別に美しいというわけではなかったが、どこかに人を和ませるような暖かみがあった。

棺の蓋を閉じ、釘を打つ。小石を手に持ち、遺族が打ちつけていく。音が鳴る。鎮魂歌か。

枯れ葉が踏まれた。誰かに。音をたて、ちぎれる。皆、棺を見つめていた。

竈の中に棺は押し込められ、前面に位牌と遺影が置かれた。彼は笑っている。

焼香した。瑞穂とゆかりもそれに続いた。竈に火が入り、煙と煙が空へと昇っていく。そして彼も魂も。もう二度と話すことも、触ることもできない彼は、雲の奥へと消えていった。

喪服姿の人々は、流れるように控え室へと入っていく。瑞穂もそれに続こうと思い、竈に背を向けた。

「あの……」

自分を呼ぶ声に気付き、瑞穂は振り返った。中年の女性が独りで立っていた。気丈にも、その眼に涙はない。ゆかりに、控え室へ行っているように、と眼で合図をし2人きりになると、瑞穂は訊いた。

「私……ですか？」

彼女は頷いた。また、生暖かい風が吹き、瑞穂の黒い服は揺れた。

「私は、氈瓜トウガの母の、氈瓜ナエといひます」

ナエと名乗った女性は、軽く頭を下げ一礼した。瑞穂は彼女を見た。

彼女の顔は、彼の優しげな表情と、とてもよく似ていた。

キキョウ通り沿いの喫茶店『枸櫞』に入り、ナエと瑞穂は腰を下ろした。

ナエはコーヒーを、瑞穂はナエに勧められて、レモンティーを注文した。ウエイトレスが去ると、瑞穂は訊いた。

「あの……」

「なに？」

「こんな時に、喫茶店なんかについて、大丈夫なんですか……？ あ、余計なお世話ですね——」

運ばれてきた御絞りで手を拭きながら、ナエは息をはいた。窓の奥に目をやる。視線の先には騒音とともに黒い煙を吐きながら、車が行き来している。

「まあ、大丈夫ということはないけど、会葬者のお相手は夫がしてくれているし、それになにより……」

ナエは視線を落とした。人気アイドルの新曲がBGMとして流れている。耳障りだった。

「どうしても、できるだけ早く、あなたと話がしたかったの」

彼女は顔を上げ、瑞穂の白く可愛らしい顔を見つめた。そこに、どこか既視感のようなものを感じて、ナエは目を見開いた。

「あなた、どこかで見たことがあると思っただら……此花みなとに似ているって、言われな
い。」

此花みなと、とは可愛らしい童顔と抜群の歌唱力で、最近注目を浴び始めた人気アイ
ドルのことである。今、流れているBGMも、此花みなとの曲だ。ナエは、それで思い
出したのである。

「はい……よく、言われます……。それよりも、あの、私と話がしたかったって、どうい
う意味ですか？」

「トウガの……あの子の最期を聞きたいの」

瑞穂は止まった。眼を伏せ、声を絞るように言った。

「すみませんでした……」

「あなたが謝ることはないわ。あなたのお陰で、トウガは無駄に死なずにすんだんだか
ら……。そうだわ、これを……」

ナエは懐から小さなバッジを取りだして、瑞穂に見せた。そのバッジがキキョウジムの
ジムリーダーに勝った証の、ウイングバッジであることに気付き、瑞穂は驚いた様子
で、ナエを見やった。

「どうしてこれを……？ それに、なぜそのことを……」

「昨日、キキョウジムのハヤトさんにお会いしてきたの……そこで、今日、あなたに逢う

ことをお伝えしたら、このバッジを渡すように頼まれたの」

バッジを受け取り、瑞穂は背中に汗が浮いていることに気付いて、体を震った。本来、貰うべきものでないことは解っていた。これは、自分が貰うべきものではない。だが、このバッジを受け取るべき人は、もう、この世にはいない。いないのだ。

胸が痛んだ。ナエも同じことを思っているらしく、顔を伏せている。

「本当に……すみませんでした」

深く頭を下げた。瑞穂の肩は小刻みに震えている。ナエは慰めるように応えた。

「謝らないで……。それよりも、聞かせてくれる？ あの子のこと……」

小さく頷き、瑞穂はナエの顔を直視した。強い日差しがガラスで反射し、2人は眼を細める。もう、こんな形でしか償えない。そう思っていた。

もう、こんな形でしか、彼の魂とは再会できないのだから。



その日は雪が降っていた。

いや、その日に限らず、ここ数日、季節外れの大雪が続いていたのだ。気象予報士が口を揃えて異常気象と言っていた。原因は、特殊な寒気団によるものらしい。

さすがに、こうも雪ばかりが降り続けると、瑞穂もゆかりもいいかげんに飽きてくる。足を取られて歩きにくいし、着衣に雪が染み込むと、冷たいのだ。ゆかりなどはあからさまに空へ向かって罵倒を浴びせたほどであった。

だが、その日は違っていた。瑞穂だけでなく、ゆかりすらも雪に見とれた。美しいのだ。それまでの不満を忘れさせてくれるほど青く澄んだ、輝きの雪。

瑞穂たちはキキョウシテイ近くに差し掛かり、休憩所でひとまず休むことにした。そして雪に見とれた。

「ねえ、ユウちゃん」

「ん……なんやの？」

言葉に反応し、ゆかりは瑞穂の方を向いた。

「ここ数日、変な天気が続くね」

「そやね……」 ゆかりは頷く。「けどもう、ええ加減飽きてきたわ」

「うん。こんなはずつと雪が降ってたらね……さすがに飽きちゃうよね」

美しいが、単調に降り続ける雪を眺め、瑞穂は小さく溜息をついた。ゆかりは肩をすくめ、灰色の空を仰ぐ。空はいつもと変わりはない。いつまでも同じ。

「変な天気って言うたら……何週間前やったかな、お姉ちゃんと出会う、ちよつと前にな……」

目線を遙か遠くへ向け、ゆかりは話し始めた。信じられないようなものを見たような眼をしていた。

「満月が続いたんや」

「え？」

息を呑み、瑞穂は聞き返した。胸が奇妙な音をたてて鳴っているのが自分でもわかった。

「それって……」そこまで言い、瑞穂は慌てて口をつぐんだ。

「あの時、ウチ独りで家にいたんや。暇やったから、ずっと空みてて気付いたんや。あの日、2日連続で満月やった。昨日も、今日も満月やったんや」

ウチの気のせいかもしれない。その、ゆかりの付け足しは聞こえていなかった。瑞穂には、目の前で舞う雪が、なにか別のものに見えてきた。ぼやけてきた。

喉が意識してもいないのに唸っている。悲鳴のようなものが聞こえた。しかし、瑞穂の耳には入らなかった。羽ばたきの音。ゆかりが肩を揺すっている。激しく。

二度目の満月。あの時、リングマとグライガーの背後に光っていた星は満月。満月だった。気のせいではなかった。たしかに自分は、2日連続で満月を見たのだ。たしかに月は、昨日も今日も満月だったのだ。なぜなのかは見当もつかない。ただ一つだけ言えることがある。

異常なことだ、ということだけ。

「お姉ちゃん！」

大声でゆかりは瑞穂に言った。瑞穂はハツとして立ち上がった。次の瞬間、目の前を無数の羽音をたてながら、オニスズメの集団が通過した。羽ばたきの風が砂雪を巻き上げ、瑞穂は思わず顔を覆う。

羽音が過ぎ去った。なにか叫き声のような音が聞こえる。悲鳴のような音も、はつきりと聞こえる。瑞穂はすぐに駆け出し、いまだに風の震える中、オニスズメの集団を眼で追いかけた。

オニスズメは怒っている。凄まじい雄叫びを聞いて、ハツキリと感じた。怒りの対象は、なんなのか。そう思い、瑞穂は視線をオニスズメの追いかける方向へと向けた。

炎だ。白く赤く燃え上がる炎だ。見た途端、みるみる額に汗が浮いた。

「あ……あれは……」

深く積もった雪に足を奪われながらも、瑞穂は走り出した。ゆかりが慌てて後を追いかける。

赤い炎は一瞬で白く翻り、飛び上がっている。喫驚し足がもつれ、そのまま瑞穂は雪の中に倒れた。ゆかりが寄り添い、なんとか抱き起こす。口に入った雪を吐き、ゆかりに礼を言い、空を見上げる。

どんよりと灰色に染まっている空の一点に、白い炎が揺らめいていた。

瑞穂はそこに馬の姿を見た。白い炎は、またメラメラと赤く濃くなる。影兎という言葉がよく似合った。着地し、たてがみが真の炎であることに気付いた。馬は尻尾を振り、火の粉が舞う。威嚇しているようだった。

「ポニータ……あれはポケモン……」

駆け寄りながら瑞穂は譫言のように呟いた。ポニータという名の馬のようなポケモンは尻尾を降り続けている。ポニータの周りの雪は水蒸気となり、後には茶色い地肌が剥き出しになった。

オニスズメはポニータを睨み付けている。そして、鳴いた。オニスズメ集団の親玉による合図で一斉に襲いかかった。

よく見ればポニータは、盛んに燃えるたてがみ以外は、すり切れ、そこから血が滲み出していた。オニスズメにやられたのだろう。長期間、駆けていたせいも、息も荒い。

瑞穂は跳び上がり、オニスズメの大群を押しつけモンスターボールを投げた。グライガーが飛び出す。突然のことに驚いたのか、怯んだのか、オニスズメの大群は少しだけ後退した。

「こんなに大勢で、一匹を苛めるなんて卑怯だよ……。グラちゃん。オニスズメたちを追い払って！」

「そうだよ。卑怯、アンフェアだよ。こんなの大勢で。それに、よく見るとこのポニー
タ、まだ子供だし。」

相手を傷つけない程度にグライガーがハサミを振るのを見ながら、瑞穂はポニータの
首筋を優しく撫でた。先程は遠くから見ただけで熱く感じた、たてがみの炎だったが、
今は不思議なことに、なにも熱くない。

「グラー……ッ！」

鳴き声と雪が弾けた。雪の上に傷だらけのグライガーが横たわっている。相手が多
すぎたのだ。瑞穂はグライガーを抱きかかえた。全身に嘴でつつかれた跡が残ってい
る。思わずオニスズメを睨んだ。

オニスズメの一匹が執拗に瑞穂の胸に抱かれるグライガーに襲いかかろうと、嘴を前
面に突きだした。

瑞穂は再び睨んでしまった。

拳が飛ぶ。血が舞った。雪が真紅に染まった。

激痛を感じ、手の甲を見て、瑞穂は息を呑んだ。皮が剥がれ、赤い血が滴っている。
殴っていた。

やがて解け消える雪のように

襲いかかったオニスズメの一匹が雪の上に転がっている。嘴が、あり得ない角度に曲がっている。オニスズメの一団が、明らかに狼狽えていた。

それまで人間の事など馬鹿にしていたのだ。自分が追いかければ逃げ出す。人間など、飼っているポケモンさえいなければ非力だ。そう思いこんでいた。常識が通用しない。目の前に立っている小さな少女ただ独りに、オニスズメたちは恐れ戦いていた。

瑞穂の膝は震えている。手の甲の出血は止まる気配がない。傷ついたグライガーが喘いでいる。瑞穂はリングマのモンスターボールに手を伸ばしかけた。しかし途中で、首を振った。

自分でやるべきだ。なぜかそう思った。なんの前触れもなく。自分のポケモンを守るために、自分のポケモンを戦わせ傷つけても意味がないではないか。グラちゃんも、リンちゃんも、いつも私を助けてくれる。こんな時ぐらい、自分の力で守りたい。自分のポケモンもロクに守れないで、なにがトレーナーだろう。

ポケモンの力を借りなければ、自分のポケモンを守れないのなら、ポケモンがポケモ

ントレーナーになった方が、まだマシだ。

自棄を起こしたのか、意地になっていいのか。それは瑞穂にも解らなかつた。

瑞穂の気持ちに、オーラに圧倒されているのか、オニスズメの大群は微動だに出来ないでいた。たつた独りの少女を相手に、である。一齐に襲えば、すぐに命を奪うことができるではないか。

誰も動かない。羽ばたきの風だけが瑞穂のシャツをなびかせている。

グライガーを抱く力が強くなつた。ずっと見つめる。そうしないと負けてしまいうだつた。

痺れを切らし、オニスズメの親玉が雄叫びをあげた。誰も襲おうとしない。オニスズメの親玉だけが鋭い嘴を向け、接近してきた。風が舞い起り雪吹雪が起こつた。

睨んだ。瑞穂は傷ついていない方の拳をオニスズメに振り上げた。

「ダメ……、なにもしないで。私は守りたいの。やめて……」

呟いていた。自分の声を聞きながら、瑞穂の体は浮き上がり雪の上に倒れた。瑞穂の拳を難なく避け、オニスズメが羽で激しい風を舞い起こしたのだ。

三度、親玉は啼いた。金縛りにあつていたような一群が、一齐に瑞穂へ襲いかかろうとした。

「くっ……」眼を閉じた。ゆかりの呼ぶ声が聞こえる。

体中に痛みを感じた。つかれている。鋭い嘴が瑞穂の白い皮膚に次々と食い込む。叫び声をあげた。負けるもんか。そう叫んだつもりだったが、結局ただの悲鳴に変わった。

情けない、非力だ、無力だ。そう思った。意識が遠くなる。強い風が吹いた。意識が流れた。

気を失ったら負けだ。気力で意識を引き戻し、ゆっくりと目を開けた。

オニスズメたちは、もうそこにはいなかった。体中の痛みも消えていた。体を起こし、辺りを見回して、瑞穂はそこに、それまでとは比べものにならないほど巨大な鳥を見た。

「あ………このポケモンは……」

長く鋭利な嘴と、凛々しく厳しい瞳がオニスズメたちを怯えさせていることに気付いて、瑞穂は立ち上がった。オニスズメの進化形である。啼かない、特に威嚇するわけでもない。だがオニスズメたちは恐れている。

「オニドリル………！ 乱れ突き！」

突然、空から声が聞こえた。何かに着地した音を聞き、瑞穂は後ろを振り向いた。

穏やかそうな少年だった。雪をクツシヨンにして空から舞い降りた少年は、意思の強さが凝縮されているような、黒く輝く瞳で、オニスズメたちを見つめていた。

オニドリルは嘴を大きく振った。空気が音をたてて震える。オニスズメたちは恐怖に駆られ、弾き飛ばされたように空へ空へと散っていく。後には親玉と、傷ついたオニスズメだけが残された。

胸を張り、今度こそ威嚇するようにオニドリルは啼いた。悲鳴をあげながら親玉も逃げだした。

少年は前へ歩み寄ると、瑞穂の足下に転がっている傷ついたオニスズメを抱き上げた。弾かれたようにゆかりが抱きついてくる。瑞穂の手の甲にある傷を見て、ゆかりは顔をしかめた。

「あ……あの、助けてくれてありがとう」

礼を言う瑞穂の顔を、少年は睨み付け、すぐさま腕に抱いたオニスズメを見せつけた。オニスズメは苦しうに身を振っており、折れ曲がった嘴からは血が流れている。

「非道いじゃないか……こんなことするなんて……」

唇を噛みしめ、少年は怒ったような口調で、瑞穂に言葉を叩きつけた。呼吸の小さくなっていくオニスズメを目の当たりにし、瑞穂はしよんぼりと俯いた瞳を地面へ向ける。

「それは……その……」

「理由なんて聞いても仕方がない。オニスズメを傷つけたのはキミだろ？ だからあん

な目に逢うんだ。自業自得だよ」

力なく項垂れたままの瑞穂の手に、傷があるのを見て、少年は語調を少しだけ弱めた。少女の後ろには、傷ついたポニータとグライガーが心配そうな眼差しを向けている。

「ふう……とにかく、ポケモンセンターに行こう。ここじゃ、ゆっくり話せないし」

少年が手をあげ合図をすると、オニドリルは跳び上がり虚空に消えた。それを目で追いかけて、少女の方を見ずに、少女の手を握る。驚くほど柔らかい感触が握り返してきた。

蒼い雪が降り続く。地面に残る幾つもの血痕が、少しずつ消えていく。瑞穂が小さく息を吐くと、いつの間にか息は白い結晶に変わった。見つめたまま動かない。

それが彼との出会いだった。たった、それだけの出会い。



「そうなのよ……。鳥ポケモンに関しては、うるさかったから。あの子は」

ナエは溜息をついてから、苦笑した。そこにどこか寂しげなものを感じたが、瑞穂は口には出さなかった。

「それから、私とトウガ君は、キキョウシティのポケモンセンターに行ったんです」

瑞穂がそう言ったところで、ウエイトレスが注文されたコーヒーとレモンティーを運

んできた。

「はい、お砂糖、どうぞ」

「ありがとうございます」

ナエは沈み込んだ瞳のまま、瑞穂にグラニュー糖の入ったスティックをを手渡した。グラニュー糖をレモンティーに入れ、掻き回す。ナエはじつと瑞穂の手元を眺めていた。カチャリと音をたてながらカップを持ち、コーヒートを啜り、ナエは仰ぐように天井を見つめる。まるで息子が天井で待っているかのような眼差しだった。瑞穂も天井をみた。

誰もいなかったが、心が揺らめくような不思議な感覚はした。

「トウガ君……始めは、すぐ怒ってたみたいでした。無理もないですよ。私、トウガ君の大好きな鳥ポケモンを傷つけちゃったんですから……」

「でも、あなたが、人が相手であろうと、ポケモンが相手であろうと、暴力を振るうようには、とても見えないんだけど」

「私、怒ると……キレちゃうと、変になっちゃうんです」

瑞穂は肩をすくめた。

こうして向かい合っていると、目の前の少女が怒るさまなど、想像もできない、とナエは思った。

「でも、あなたが悪いわけじゃない。あなたは、助けた。守った。むしろ、正しい事をしたと思うわ」

「そうでしょうか……」

「どうして……？ それじゃ、そのままポニータを見殺しにした方が正しかったと思うの？」

ナエはカップを置き、レモンティーを見つめる瑞穂の顔を直視した。

「それはそうですけど……。あのとき……言われたんです」

「誰に……。もしかして、あの子に……？」

頷くと、瑞穂は胸に手を当てた。少しばかり痛みを耐えているようだった。

「あの子に……なんて言われたの？」

水色をした瑞穂の髪がかすかに揺れた。レモンティーを掻き回しながら、黙ったままで、なにも言わず、頬には汗が浮いている。暑いのだ。

ナエは扇子を取りだして扇ぎます。やがて、瑞穂は消え入りそうな声で語り始めた。涙声だった。胸を突かれたような痛みを、ナエも感じた。



キキョウシティは、普段は伝統のある美しい街なのだという。だが瑞穂自身は、そうは思えなかった。先程眺めた雪があまりに美しかった反動であろうか。車が排ガスを撒き散らし、雪をはね除け、後には黒く汚れた泥雪が辺りに散らばっている。空には黒雲が漂い、寒々とした空気が流れていた。

ポケモンセンターの窓から、キキョウシティの景観を眺めながら、瑞穂は溜息をついた。自分のポケモンを守るためとはいえ、この手で殴りつけたのだ、ポケモンを――。

傷つき、包帯を巻かれた手の甲を、瑞穂は握りしめた。痛みが頭の頂点まで響いてくる。そばにいたゆかりが、不安げに顔を覗き込んできた。

「ポニータは、たいしたケガじゃないみたいだよ」

声が聞こえた。瑞穂が振り向くと、少年は溶けた雪をはらいながら、歩み寄ってきた。

「でも……」少年の顔が曇った。「オニスズメの方は……」

「酷いの……?」

頷きながら少年は、口元を手で撫でた。

「命に別状はないみたいだけど、当分は飛べないそうだよ」

「あつ……。そ、そう……」

瑞穂の肩が震えていた。掠れたような声しか出なかった。

「ごめん……」

「ボクに謝られても……。謝るなら、オニスズメに直接、謝りなよ」

頂垂れたまま近くのソファに座り、瑞穂はオニスズメに襲われるまでの経緯を説明した。黙ったまま、少年は瑞穂の話を聞いていた。少年は話を一通り聞くと、タオルを瑞穂へと手渡した。そこで始めて、瑞穂は自分の体が濡れていることに気付いたのだ。

「ここ数日、変な天気が続いていただろう？ だから、オニスズメたちのストレスは、頂点に達していたんだ。きっと、あのポニータは、オニスズメの縄張りに勝手に踏み込んだんだよ——だから、襲われた。」

少年は言ったが、瑞穂は納得できないでいた。

「たったそれだけのことで、あんなに大勢で、たった独りのポニータを襲うの？ 卑怯なんじゃないかな……。そういうの。卑怯だよ」

「敵だと思ったんだよ」少年の眉が厳しく歪んだ。

「自分達の、一族の生命を脅かすような敵が来たと思ったんだよ。そんな敵に甘い態度で臨んだら、殺されてしまうかもしれないんだよ？ オニスズメの一匹一匹は、とても弱いんだ。敵は大勢で追い払わなければ、逆に皆殺しにされてしまうかもしれないだよ？ それでもまだ、卑怯って言うの？」

「その……それは……」

瑞穂は、しどろもどろになり反論すらできなかつた。少年は続ける。

「大体、いくら自分のポケモンを守るためとはいっても、あそこまでオニスズメを傷つけるなんて、普通じゃないよ。やりすぎだ。オニスズメは、どうなつても——傷ついても

——いいとも思っているの?」

「そやけど、あのととき、お姉ちゃんは、ああするしかなかつたんや」

俯いたままにも言えないでいる瑞穂を見かねて、ゆかりが口を挟んだ。ゆかりの口元は、やるせない気持ちからか、曲がっている。

「あのととき、お姉ちゃんがオニスズメを殴らんかつたら、お姉ちゃんや、お姉ちゃんのポケモンは、もっと酷いケガしてたかもしれないへんのやで。そんな、偉そうにいわんといや」

「それじゃ、オニスズメはケガをしてもいいと思っているんだね?」

「誰も、そんなこと言つてへんやん!」

「そう言っているようにしか聞こえないよ。自分のポケモンだけが可愛くて、自分のポケモンだけを守つて、他の可愛くもない野生のポケモンなんて、どうなつてもいいって、キミは思っているんだろう? その考えの方が、よっぽど卑怯だよ!」

「ちやうわい! お姉ちゃんは、卑怯やないわ!」

「もう、やめて……。やめてよ……」

蹲るように頭を抱え込み、瑞穂は呻いた。

少年は我に返ったように辺りを見回し、瑞穂へと視線を移して頷いた。ゆかりは憤ったまま立ち上がり、ソファを蹴り飛ばすと、どこかへ走り去ってしまった。

気まずい沈黙が続いた。少年は沈黙を断ち切るように言った。

「その……言い過ぎた。ごめん」

「ううん。私がオニスズメを傷つけたのは本当のことだもの。それに、あなたの言ったことの方が、正しいと思うし……」

ゆつくりと少年は首を振った。瑞穂は不思議そうに少年の顔を見つめ、言った。

「私の名前……まだ言っていなかったね。私は瑞穂。みずみずしいの穂に、いなほの穂」

良い名前だね。少年は微笑み、瑞穂のかすかに濡れた髪に見惚れた。

「ボクはトウガ。ふゆの冬に、われわれの我」

しばらく、お互いは顔を見つめ合う。そして、トウガはゆつくりと言ひ聞かせるように呟いた。

「自分だけが、正しいとは思わない方がいいんだ。ボクも、そうだよ——」

瑞穂は頷く。水色の髪から澄んだ雫がしたたり落ちた。

「キミは正しいことをしたつもりかもしれない。誰も傷つけないキミの気持ちは解

る。ボクだって誰も傷つけたくはない。でも、結局、みんな傷ついた。キミも、キミのポケモンも、ポニータも、オニスズメも、みんな傷ついたんだ」

髪に染みだす雫を拭いながら、瑞穂の瞳は潤んでいる。泣き出すかと危ぶんだが、意外なことに、瑞穂は口元を引き締め、はつきりした声で答えた。

「そうだね……、絶対に間違っていることはあっても、絶対に正しい事なんて存在しないのかもしれない。みんな自分が正しいと思ってるし、みんな自分が間違っているとは思いたくないもの」

正論なんて所詮は虚しいもの。人間は自分だけを正しいと思っているから。遠くから、ゆかりが苛立ち紛れに床を踏みならす音が聞こえてきた。

所詮は虚しいもの。結局は空虚なもの。いずれは消え去る、蒼い雪のように。



神の殺気に

街が見える。灰色の雲のから覗く街は、人々に溢れていた。

翼を振り下ろすと、空気が裂かれた。冷たい風の奥に、赤い瞳が爛々と輝いている。

狂気は叫び、雲を振り払い静寂の中に身を寄せた。嵐の前の静けさだろうか。

殺せ。殺せ。殺気に満ちた声だけが聞こえる。殺せ。殺せ——抵抗すらできなかつた。抗うことは許されなかつた。殺せ。殺せ——

5歳くらいの子供がこちらに気付き、指さして、何かを言っている。ねえ、お母さん、あれ、なんなの？

幼子は、それきり何も言わなかつた。不思議そうに小首を傾げたまま、動かなかつた。母親は悲鳴をあげ、幼子に駆け寄る。信じられない。顔にそう書いてある。

殺した。次を殺せ。

幼子の母親は、そのまま動かない。ひきつった表情のまま、動かない。倒れる。湖の冷たい水が、二人を飲み込んでいく。消えていく。沈んでいく。

空気が凍った。人々も凍った。笑顔も、愛も、夢も、希望も、神の殺気に凍らされ、碎

けた。寒々とした街から、悲鳴が途絶えるとき、狂気に踊らされている神は、人々の前に姿をあらわした。

伝説は、常に最悪の形でやってくる。



アイスクリームで治ってしまうほど、ゆかりの怒りは浅かったようだ。笑みを浮かべ、ペロペロとアイスを舐め回すゆかりの姿を見て、瑞穂は胸をなで下ろした。

「もう……調子いいんだから」

苦笑し瑞穂は、冬我の方に向き直った。「ありがとう」

冬我もまた、財布をしまいながら笑っている。先程までの険悪な雰囲気は既に消えていた。

「ところで冬我くんは、鳥ポケモン使いなの？」

一呼吸置いてから、瑞穂は訊いた。

冬我の、オニドリルへの指示の方法やタイミングの取り方は、明かに鳥ポケモンに精通していることを示している。なにより鳥ポケモンを好きなのが先程の会話でわかった。

冬我は小さく頷き、窓を通して空を見上げた。

「ボクは、鳥ポケモン専門のジムのリーダーになるのが夢なんだ」

「そうなんだ……あれ？ それじゃ……」

「うん。キキョウジムのリーダーのハヤトさんは、ボクの憧れなんだ」

輝いていた。冬我の眼が、大空を舞う鳥ポケモンへの夢の眼差しに、燃えていた。

「大地を超え、空を超え、風を超えて、山を越える……凄いと思わない？ 大空を飛ぶんだ。自由自在に」

瑞穂は微笑みながら冬我を見つめ、呟いた。

「本当に、鳥ポケモンが好きなんだ……」

「え……？」 冬我は照れくさそうに舌を出した。「わかる？」

「よくわかる……。冬我くんの気持ち、私にもわかる。私も、ポケモンが好きだから」瑞穂は俯いた。「……好きなのに……」

傷つけた。それも、自分の拳で。自分の事しか見えていないからこうなるのだ。自分のポケモンだけを守ろうとするから、傷つけてしまったのだ。

ああするしかなかった。それは言い訳に過ぎない。言い訳に。

事実なのだ。どう真実が主観によって歪められようと、事実であることに違いはないのだ。

私は、オニスズメを殴った。傷つけた。その事実だけは消えない。

「どうしたの……?」

冬我に言われ、瑞穂は何事もなかったように顔を上げた。少しばかり瑞穂は青い表情をしている。冬我は瑞穂の心情を感じ取っていた。だが、あえてそのことには触れなかった。

「瑞穂ちゃんは、これからキキョウジムでジム戦をするんだらう?」

「うん。グラちゃんの傷が癒えたら、キキョウジムに行こうと思うの」

「そうなんだ……ボクも一緒に行つていい?」

不思議そうに瑞穂は小首を傾げた。

「いいけど……どうして?」

「キミが、ハヤトさんと、どんな試合をするのか観てみたくて」

瑞穂は冬我と一緒に窓の外を眺めていた。こうしてみるとこの街も綺麗だな。ふいにそう思った。

しばらくして、ゆかりが肩を引つ張つてきた。口の周りについているアイスクリームを、瑞穂にティッシュで拭ってもらうと、治療室の扉を指さして言った。

「さつき、ジョーイさんがお姉ちゃんのこと呼んどったで」

消毒液の臭いが立ちこめる暗室。治療準備室でジョーイは独り佇んでいた。

瑞穂が声をかけると、ジョーイは振り向き、一枚のレントゲン写真を指さした。写真に映されていたのは、ポニータでもグライガーでもオニスズメでもなかった。

「これ……見えるかしら？」

ジョーイは言った。瑞穂は頷いて、写真に映された異物を見つめる。

「これが……ナゾちゃんに……？」

小さな、しかし異物。ナゾノクサの左前頭部には、くつきりと丸い影が映っている。瑞穂にはそれが、異物が埋め込まれているように見えた。

「あなたのナゾノクサ。頭に何かを埋め込まれているわね……。なにか、心当たりはある？」

「ないことは……ないです」

ジョーイは机の上に置かれていた診療簿を取り、瑞穂へと手渡した。

診療簿の内容を舐め回すように瑞穂が読んでいる間、ジョーイは思惟しながら呟いた。

「あなたは、ここに来たとき言ったわよね。あのナゾノクサは普通のナゾノクサじゃない、って。時折、眼が赤く光って破壊衝動に駆られることがあるから調べてください、って。確かに普通じゃなかった。もつとも……その年で“破壊衝動に駆られる”なんて小難しい言葉を使うあなたも普通じゃないけれど」

「何かしらの形で結果が出てくることは予想してましたけど、まさか外科的な処置がなされていたとは、思いもみませんでした……」

そこまで言つて、瑞穂の眼の動きが止まった。診療簿に気になる項目を見つけたのだ。

「あの異物は、なにか特殊な電波を発しているみたいですね」

「そうですね。とても微弱で、なんとか計測できる程度の電波だから、ポケモンには影響ないと思うけど。さしずめ、特殊電波発生装置……といったところね」

「あの、何かの条件が重なると電波の出力が強くなる、ということは考えられませんか？」

「十分に考えられることだと思うわ。もつとも、電波発生装置の大きさから考えたら、どんなに出力を上げてても、半径2cm以上に影響を与えるのが精一杯ね」

「それで十分ですよ。中枢神経は異物の半径2cm以内にあるんですから」

ジョーイは振り向き、レントゲン写真を見つめた。白い影となつて映し出されている異物は、ナゾノクサの中枢神経部分から5mm程しか離れていない。

一通り写真を見てから、ジョーイは、再び瑞穂の方を見やった。瑞穂は診療簿に見入っている。

「取り除けるかしら……」

「女医さんは……自信あります?」

「残念だけど、私には無理だわ。あなたなら……あなたならできるかも」

「さすがのようにジョーイは、瑞穂の幼げな白く整った顔を、期待の眼差しで見つめている。」

だが、瑞穂は視線を診療簿から床へと落とし、ゆるゆると首を横に振るだけだった。

「あと、5mmほど中枢神経から離れていれば、なんとかできるかもしれませんが……、無理です。間違いなく中枢神経を傷つけてしまいます」

「そう……たしかに難しいわよね」

「オペは、諦めた方がいいと思います」

曖昧に頷くと、ジョーイはナゾノクサの入っているモンスターボールを手を取った。

「頭部に葉液が溜まっているみたいだから、ドレナージしておくわね」

「おねがいします」

瑞穂は丁寧に頭を下げ、振り向くと、扉のノブに手をかけた。ジョーイの声が追いかけてきた。ノブを握ったまま、瑞穂は相手の顔を見つめた。

「なんですか?」

「あなたのグライガー、どこにもケガなんてしていなかったわよ」

「そんな……。確かにグラちゃんは……」

オニスズメによつて、全身をつつかれていた筈だ。さつき見たときは、間違はなく体中に嘴の痕が残っていたのだから間違いない。

「そんな筈は……」

あり得ない。瑞穂は細々と、小さな声で咳いた。



「自分だけが正しいとは思わない方がいい……。か。あの子が言いそうなことだわ」

ナエは苦笑し、コーヒーに映りこんだ自分の顔を見つめた。瑞穂は一息つき、レモンティーに手を伸ばした。不意に、それまで流れていたBGMが途切れた。店内は異様な静けさに包まれている。

「人間は、みんなそれぞれ違うものね」

「はい……」

「あの子は……正しいことをしたのかしら」

瑞穂はレモンティーを飲もうとした手を急に止め、ナエの顔を怪訝そうな表情で見つ

めた。瞬間、どぎまぎした様子でナエは目をそらす。こめかみには、汗が浮いていた。

ティーカップを置いて、瑞穂は蒼白くなった顔で言った。

「どういう意味ですか？ 冬我くんがしたことは、正しいことじゃないんですか？」

「あなたから見たら、あの子のしたことは正しいかもしれない。でも……それは、あの子がするべきことじゃない。自分の命を捨ててまで、正しいことをするべきなの？」

カップを置いた。瑞穂は何も言えないまま俯いている。ナエは続けた。

「正しいわ。あの子がしたことは、間違っではない。でもそれは、あの子が望んだことなの？ あの子自身は、本当にそれでよかったの？」

肩をすぼめて瑞穂は、ナエの言葉を、その奥に詰め込められた心情を考えていた。

冬我が望んだのか。周りの人間が……もちろん自分を含めて……冬我に責任を押しつけたのか。だから、自分は裁かれかけたのか。裁かれた方が良かったのか。

それはわからない。真実など、いくらでも曲げられる。人は、それぞれ違う眼界を持つているのだから。

ただ、瑞穂は漠然と感じていた。彼の最期の言葉。彼の瞳に最後に映った世界。

彼は言ってくれた。見つめてくれた。そして、教えてくれた。

「冬我くんは、これで……自分で最後にしたがっていたみたいです」

「何を……？」

「犠牲を」



赤黒き神域を舞う、蒼き翼

風が吹いてきた。雪は固く、雹のようになり地面に降り注いでいる。

キキョウジムへと続く道は、泥雪に覆われ、まるで腐つてでもいるかのように見える。空は灰色の雲に覆われていた。時折、小さく揺らぐが、太陽は姿をあらわさない。

濡れた靴底を疎ましく思いながら、瑞穂は胸に抱いたグライガーを見つめていた。

「おかしいなあ……。確かにケガをしてたはずなんだけど」

グライガーは眠っている。寝息が胸の奥まで響いて、瑞穂は心地がよかった。

瑞穂の様子を横目で見ながら、冬我は腕を組んで、考え事をしているように小さく唸った。

「ボクも見たけど。確かに、あの時、グライガーには傷があつたよ」

「そうだよね……。どうして今は無傷なんだろう……」

紫色をしたグライガーの表皮を、白い指で優しく撫でながら瑞穂は呟き、考えた。

自分のグライガーは、普通のグライガーとは違う、特殊な力をもっている。今まで一緒に過ごしてきて、それだけはわかっていた。ただ、なぜ特殊な力をもつのか、具体的にどのような力を持っているのかまではわからない。

瑞穂は思いだしていた。以前にも同じ様なことがあったかもしれない。

「そうだ……」

「なに？」

「前にも似たようなことがあったの。以前、ウバメの森でグラちゃん、木を切る特訓をしてて、その時、ハサミはボロボロになっちゃったの。でも、よく考えたら、そのあと見たときにはハサミの傷は綺麗に治っちゃってた」

「本当に？」

「うん……間違いない」

冬我は不思議そうな顔で、グライガーの寝顔を見つめた。

瑞穂はグライガーの額についた雪を払いながら、呟いた。

「普通じゃ、考えられないよね……？」

「たしかに、そうだね」

二人の会話には興味を示さずに、ゆかりは空を見つめていた。雲は嫌いではなかった。だが、こうも曇りばかりが続くと、飽きてくるのだ。

「あ……あれ、なんやら……」

ゆかりは思わず呟いていた。雲の奥に、奇妙な光を見たような気がしたのだ。瑞穂は、ゆかりの言葉に反応して、空を仰いだ。

空が渦巻く。嵐のように激しく風が舞い起こっているのだろう。なにも不思議なことではない。ただ、嵐の中心だけが異常だった。

「赤い……。光ってる……」

思ったことが、そのまま口に出た。冬我も空を見て、首を傾げている。

「……最近、本当に変な天気が続くね。それに……」

「どないしたん？ 冬我兄ちゃん、なんや落ち着きないで」

ゆかりは訊いた。小さく頷くと、冬我は心配そうに呟いた。

「帰ってこないんだ」

「誰が……？」

「オニドリルさ。いつもは、しっかりと帰ってくるはずなのに……」

雲の流れが、少しばかり乱れた。ゆかりは大声を上げて、空を指さした。

「あれ……！ 冬我兄ちゃんのオニドリルちゃうん？」

冬我は再び空を見上げた。雲を突き破って、こちらへと迫ってくる小さな鳥が、オニドリルが見える。

目を凝らして瑞穂はオニドリルを見つめた。息を呑む。全身傷だらけだった。瑞穂たちから見て、前方の地面へと墜ち、そのままぐったりと動かなくなつた。

「お……オニドリル……！」

すぐさまオニドリルに駆け寄り、冬我はオニドリルの全身の傷を見回した。血に染まった羽毛の奥には、擦り傷のような軽傷から、骨が剥き出しになっている程の重傷まで、無数の傷が点在している。冬我はオニドリルを抱き寄せ、応急処置用に携帯している脂を傷口に塗りつけた。

朱に染まった手で、モンスターボールを取りだすと、冬我は顔を強張らせて呟いた。

「誰が、こんなことを……」

「あれ？」

冬我の後ろで、瑞穂が不思議そうな声をあげた。冬我は振り向いて訊いた。

「どうしたの？」

「オニドリルの羽根の先を見て……ほら」

言われて、冬我はオニドリルの羽根の先を見やった。羽毛をむしり取られ、晒された表皮が黒く変色している。先の方では、小さく透明な何か……。氷だ。氷の塊が付着している。

「凍ってる……っ？」

「うん」

瑞穂は顔を空へと向けた。雹が頬を貫いたような痛みが走った。

空気が冷たくなっていくのは、肌ですぐに感じる事ができる。あまりの寒さに鳥肌が立った。

雲に阻まれた赤い光は、相変わらずその場で、上空で佇んでいる。次の瞬間、閃光が迸った。蒼い、美しいとも思えるような澄んだ光が雲を突き抜けた。強風が踊った。瑞穂はゆかりを抱きかかえる。

何層にも重なる灰色の雲が、吹き飛ばされた。神々しい、蒼い鳥ポケモンが下界を見下ろしているのが見えた。

オニドリルは弱り果てた息づかいで、空を翼で指し示した。

冬我はゆつくりとモンスターボールを押しあて、オニドリルを戻すと、上空の鳥ポケモンを見つめた。氷のように透き通っている、美しい翼を広げて、鳥ポケモンは高い声で鳴いた。

「あのポケモンは、フリーザー……!」

「フリーザー……?」

「そうだよ。伝説のポケモン、フリーザーだ」

瑞穂は図鑑を取りだして、参考の欄を開いた。フリーザーの項はすぐに見つかった。

ボタンを押した。ポケモンにまつわる伝説を、ポケモン図鑑は素っ気ない声で話し始

めた。冬我は凶鑑の説明を暗記しているらしく、小さな声で口ずさんでいる。

鳥肌の立つ二の腕をさすりながら、瑞穂はその声に聞き入った。

「フリーザーは、冬を司る鳥の神である。

雪のふる場所にフリーザー在り。冬の訪れを告げながら、各地を飛び急ぐ鳥、フリーザーなり。

雹の墜ちる場所にフリーザー在り。下界の汚れた殺気嘆きながら、雲上で悲しむ鳥、フリーザーなり。

霧の満ちる場所に、フリーザー在り。自分の存在を悟られぬよう、霞噴く鳥、フリーザーなり。

吹雪の荒れる場所に、フリーザー在り。怒りで我を忘れる、蒼い翼の神の鳥、フリーザーなり」

それきり凶鑑は沈黙した。神の鳥、フリーザーは不気味なほど静かに、辺りを見回している。

瑞穂は冷たくなった二の腕を掌で震えるようにさすった。鳥肌は治まったが、体の芯からくる震えは止まらなかった。息を呑む。フリーザーを見つめる。

フリーザーの瞳は赤く爛々と光っていた。妖しいほどに。色香すら感じられた。だが、殺気だった。瑞穂は見とれそうになる自分言い聞かせた。あの瞳の奥にあるの

は、紛れもない殺気なのだ。どこかで見たことのある色だ、と瑞穂は感じていた。狂気を帯びた、真紅の色を。

「こつちにくるでー！」

叫ぶと、ゆかりはとつさに、瑞穂の水色の髪を左右で束ねた、ポニーテールを引つ張つた。

冬我は立ち上がる。フリーザーを直視している。瑞穂は我にかえり、視線をゆかりへと向けた。空気の震えで、フリーザーが一直線にこちらへと迫ってくるのがよくわかる。

「冬我くん。はやく逃げなきゃ……」

「冬我兄ちゃん？」

瑞穂とゆかりは口々に冬我に話しかけたが、彼は取り合わない。じつと睨み付けている。鳴き声が聞こえた。フリーザーだ。迫ってきている。すぐ目前まで。

業を煮やして、ゆかりは冬我の脇腹を蹴りつてた。目を丸くしている瑞穂を余所に、ゆかりは強引に冬我の手を引いて、路地裏へと隠れるように入った。

「兄ちゃん。目え覚めたか？」

風圧の刃が頬を掠めた。泥雪がはぜて散らばっていく。コンクリートビルの外壁が見るも無惨に削ぎ落とされていく。

瑞穂は純粋に恐怖した。翼が少しばかり触れただけなのに、コンクリートのビルでさえああなるのだ。人の体などは、造作もなく破裂し四散するだろう。想像して、瑞穂の肩が、びくりと跳ね上がった。路地裏に逃げ込むのが、あと少しでも遅れていたら、瑞穂たちも巻き込まれていただろう。

危ないところだった。そう安堵すると共に、沸き起る恐怖心が瑞穂の心を侵食していく。

仁王立ちでゆかりは、呆然と視線を宙へとむけている冬我に話しかけた。

「目え覚めたか、ってウチは訊いとるんやけど？」

「覚めたよ。でもさ、蹴ることないじゃない……」

「蹴られるのと、死ぬのと、どっちがええんや？」

「両方とも、勘弁してよ」

フリーザーが空中で旋回し、瑞穂を狙って急降下をはじめた。口元から蒼い光を発射した。跳ねた。瑞穂の体が、バネのように跳び上がった。蒼い光が、先程まで瑞穂の立っていた大地を凍てつかせた。

「はやく……！ もっと奥に逃げて！」

瑞穂は叫んだ。粉雪が覆い被さってくる。横に飛び込み、すんでの所で避けた。啞然とした様子で冬我は、フリーザーの攻撃を避けていく瑞穂を見つめている。小柄でひ弱

そうに見える瑞穂の白い体の何処に、フリーザーの猛攻を避ける程の力が隠されているのか。

焦った様子で瑞穂は急かした。かがみ込んで翼を避ける。

「どうしたの？ はやく……」

「逃げろって言われても……瑞穂ちゃんはどうするの？」

「私は大丈夫だから」

「でも……」

「ええから行くで！ ウチらがいても、足手まといになるだけや」

ゆかりが身構える。もう一発蹴りこもうとしているように見えた。シャツの袖を引かれ、冬我は路地裏の奥へと逃げ込んだ。

冬我とゆかりが安全な場所に逃げ込んだことを確認すると、瑞穂はモンスターボールを取りだして、投げた。ボールが開いて、リングマが飛び出す。瑞穂はそのまま倒れ、リングマに抱きかかえられた。

息が切れている。趣味の剣道のおかげで瞬発力には自信があつたが、体力はほとんどないのだ。

「リンちゃん。お願い。相手を追い払うだけでいいから……無理はしないで」

荒い息で瑞穂は言い、数歩退いた。

リングマは咆哮する。全身の筋肉に力を入れて、拳をフリーザーへと突き出す。掠りもしなかったが、リングマは吠えたまま足を踏み込んだ。大地が震撼した。雪と共に、砕けた地面が砂埃となって辺りに蔓延した。

瑞穂は隙を見逃さず、リングマを戻して、路地裏に走って逃げ込んだ。戻ったときには、フリーザーの姿は消えていた。

降ってくる雪は先程よりも量を増した。もつとも、視界が遮られるほどでないのが、救いだつた。

「ねえ、冬我くん」瑞穂は削ぎ落とされた壁を見つめながら呟いた。「オニドリルは……」
「うん。さっきのフリーザーにやられたんだ。オニドリルはフリーザーのことをボクたちには知らせようと……」

冬我は拳を握りしめた。既にそばにはフリーザーの気配はない。どこかへ飛び去つたのだろう。

腕のポケギアのスイッチを入れて、瑞穂はラジオの声に耳を傾けた。予想通り、フリーザーに関する報道がされていた。

「キキョウシテイ近辺に突如出現した謎の生命体による被害は、キキョウシテイ郊外で少なくとも、死者24人、行方不明者13人で、今後さらにその数は増えるものと予想

されます。行方不明者の方の氏名は以下の通りです。キキヨウ区、南雲善之ちゃん、南雲喜子さん、平池聡美さん……」

瑞穂はポケギアのスイッチを切った。ゆかりがこちらを見つめている。

「どうしよう」

「どうしようもないやん」

「そうだよね……」

立ち上がり、冬我は空を眺めていた。冷たい風が路地裏を駆けていく。

「あれは……」

冬我は叫んだ。瑞穂も空を見上げる。幾重もの影が瑞穂の視界を横切った。

鳥だった。大勢のピジョンが人を乗せて空を翔ている。キキヨウジムのトレーナー達だと、すぐに理解できた。ピジョン達の先鋒では一際大きなピジョン、いやピジョントが一軍を仕切っている。

啼いた。いや、吠えたと云った方が正しいかもしれない。一声で一軍は上昇を始めた。

「すごい……すごいよ」

興奮したまま、冬我は一軍を見送った。顔は朱色に染まり、声が上擦っている。

「今のが、キキヨウジムの……？」

「そうさ。キキョウジムの精鋭トレーナー達さ！　すごいなあ……」

「感心してる場合じゃないよ。今の人達……」

「あの人達なら、フリーザーを倒せるよ」

瑞穂の首が小さく動いた。ゆかりの肩を抱き寄せて、冬我の瞳を凝視した。

「でも、まだ、フリーザーが人を襲う理由がわかっていないのに……」

「フリーザーを放っておいたら、みんな死ぬ」

言われて、瑞穂は押し黙った。

外壁を削がれたビルの中から、ラジオのニュースが聞こえてきた。

死者28人。たったの5分間で、4人も増えている。

悲鳴が聞こえた。途切れた。

断末魔の叫びが、途切れた。

誰かの泣く声が聞こえる。胸の奥が空洞になったように、冷たくなっていくのを瑞穂は感じた。いつの間に、この街はこうなってしまったのだろう。先程までは、なんともなかった筈なのに。

災いが襲ってくるときには、前触れなんてないのかもしれない、と瑞穂は思った。

「とにかく、一度、ポケモンセンターに戻ろう」

冬我が言った。瑞穂は頷いて、歩き始めた。

鳴き声が聞こえなくなった。ただ、なにやら叫く声だけが風にのって聞こえてくる。

これが、犠牲か。瑞穂は俯き、息をはいた。

今は、フリーザーの赤い瞳だけが、脳裏に焼き付いている。体が震えた。怖い。恐い。ここままで純粋な恐怖を感じたことが、かつてあつただろうか。

既に、31人が殺されているのだ。

瑞穂は、叫び声をあげたい気持ちをも、懸命に堪えることしかできなかつた。



夢ではない、と自分に言い聞かせた。

あれから7時間も経過している。既に、灰色だった空は、赤黒く染まっていた。視線の先では次々と閃光が迸り、「翼」という名の刃が舞っている。

もう、震えてはいなかった。もつとも馴れたとか、度胸がついたわけではなく、目の前の出来事が、夢であるかのように見えてしまうようになってただけだ。

「ここからなら……よく見えるだろう？」

握りしめた拳を胸にあて、冬我は瑞穂の方を向いて、訊いた。瑞穂は唇のはしを噛み

しめながら頷く。胸の奥の、どこかに窮屈な感じがあったが、意識しないようにした。

黒く汚れた木製の手すりを強く握って、瑞穂は目の前の死闘を見つめている。

マダツボミの塔は、キキヨウシテイでもっとも高く、歴史を誇る建造物である。伝説では巨大なマダツボミからつくられたと言われているが、真偽は定かではない。

どちらにしろ、空で行われるフリーザーと、キキヨウジムトレーナー達の血みどろの死闘を静観するにはもってこいの場所であることは確かだ。

もちろん瑞穂には、このまま黙って、戦いを観ているつもりはなかった。それは冬我も同じだろう。冬我は片手にモンスターボールを握っている。瑞穂もいつでもモンスターボールを取り出せる構えでいる。今すぐにもフリーザーを抑えるための戦いを始めることはできる。

だが、二人はそれ以上、動かない。お互いの顔を見つめ合っているだけだ。もう片方の腕を、ゆかりがしっかりと握っているため、これ以上前へ進めないのだ。ずっと、ゆかりの視線が二人の背中を見つめている。少女の瞳には行かせまいとする意思が見てとれた。

行かせない。絶対に行かせない。行ったら、このまま還ってこないかもしれないのだ。そんなのは嫌だ。1秒たりとも独りになるのは嫌だ。ゆかりの目に涙が浮いた。

瑞穂は手に持ったモンスターボールを胸に胸に押しあてた。どうしたらいい？ 訊いたのだ。リングマは何も語らなかった。何も言わないことが、彼の答えだった。昔から、そうだった――

絶叫が響いた。フリーザーの啼声が辺りの空気を押し揺るがす。刀のように鋭い翼が空を斬った。十体いたピジョンとトレーナー達も、いまではたったの四体へ減っていた。フリーザーの力は圧倒的だった。冷凍ビームが自由自在に飛び、ピジョン達の退路をふさぐ。動けないでいるピジョンの元へ目にも止まらぬ速さで飛び、翼を振りかざす。ピジョンはなんとかわした。他のピジョンが一斉に、フリーザーの背後から攻撃を仕掛ける。突如、フリーザーが体中に纏っている光の粉末が、きらびやかな光を放った。

ピジョンの起こした強風攻撃が、光の力によってねじ曲げられ、一瞬のうちに、その威力を失う。

フリーザーは身を翻し、背後のピジョン達に向き直った。散開しようとするのを見越したように、フリーザーは冷凍ビームを発射し、ピジョン達の進路を阻む。

身動きのとれなくなったピジョン達は、恐怖にとり憑かれている瞳をフリーザーへと向けた。ピジョンとトレーナーの眼界からフリーザーの姿が消えた。

刹那。霧に紛れたフリーザーの巨体が、浮かび上がるようにピジョンの鼻の先にあらわれた。ピジョンは上昇する。間に合わなかった。フリーザーの翼がピジョンの腹を少しばかり裂いた。苦痛に呻きながら、ピジョンは体を振り、墜ちていく。

フリーザーは、もう片方の翼で、ピジョンに乗っていたトレーナーを薙ぎ払った。宙に、トレーナーの体が浮いた。フリーザーの斬撃。体が肩から腰の辺りまで裂ける。悲鳴すら上がらなかつた。ピジョントに乗っているリーダーらしき男は、退却を命じたようだった。

鮮血が飛んだ。いつの間にか、もう一人の体がピジョンから墜ちかけていた。

どうした？ リーダーらしき男は声をかけた。相手は答えなかつた。瑞穂は奥歯を噛みしめ、目を伏せた。冬我は頬を紅潮させ、現実を直視している。

腕が落ちた。喘ぐような声で、腕を裂かれた男は助けを求めている。

蒼い閃光が彼を覆った。悲鳴は凍りついた。墜ちていく。墜ちるところまで墜ちて、碎けた。主を失ったピジョン達は、叫びながら、全力で、フリーザーの元から逃げ去っていた。

いつしか、ジムトレーナー達は消えていた。フリーザーは赤い瞳で勝利の味を噛みしめているようだ。

叩き落とされた者、殺された者、逃げ去った者。方々に散っていったのだ。



一欠片の狂気

「ずるいよ。私たち……」

血の気の失せた顔で、瑞穂はぽつりと呟いた。冬我は、瑞穂の表情を見つめたまま、何も言わない。普段よりも更に白くなった瑞穂の幼顔が、先程とは違う不思議な、上品な妖艶さを帯びていた。

ごくり、唾を飲み込んだ。胸が熱くなった。冬我は頭を振った。こんな時に、不謹慎だ。

「ずるいよ……何も……何もしないなんて」

「でも、ボク達が行ったところで、足手まといになるだけだよ……？」

「それは……そうだけど……」

ゆかりが二人の腕を握る力を強めた。睨み付けているような形相をしている。

「だけど……どうして、あのフリーザーは人を襲うのかな……。さつきからずっと気になってたんだけど」

「まるで、殺気に操られているような感じだよね」

「殺気……か。狂ってるよ……。おかしいよ。こんなことするなんて」

狂ってる。狂気。赤い瞳。殺気。人形。傀儡。

瑞穂は、それまで漠然と感じていた既視感がなんであるかを思い出した。殺気だ。狂気だ。幾つもの、無数に散らばる点が、瑞穂の頭の中で、答えとなる一つの面を形成したのだ。

「一欠片の狂気……」

「今、なんて言ったの？」

「冬我くん。双眼鏡、持ってる？」

手渡された双眼鏡で、瑞穂はフリーザーの頭を覗いた。フリーザーは瑞穂とは反対側の方向を向いて、啼いている。だが、何も見当たらない。思い過ぎしかと思った、その瞬間、フリーザーが上昇した。首筋が見えた。

「やっぱり……」

「ねえ、どうしたの？」

瑞穂は冬我に双眼鏡を返し、フリーザーの首筋に目をやった。首筋には、先端に発信器がついている注射器のようなものが食い込んでいる。

双眼鏡をはずして、冬我は瑞穂を見やり、訊いた。

「あれは……なんなの？」

「特殊な電波を発生させる装置」

ポケモンは、ある特殊な波長の電波によつて、精神的や肉体的に強い影響を受けるといわれている。首筋や頭部に刺さった電波発生装置は、ポケモンの体内を流れるヌクレドシオを利用して稼動し、ごく微弱な電波を発生。ポケモンの中枢神経、もしくは大脳の動物的機能を狂わせる。その結果、ポケモンは意思や感情を失い、特殊電波の命令通りの行動を強制させられる。

「それじゃ、あの首筋に刺さっているのが、フリーザーを狂わせている……の?」
瑞穂から一通りの説明を受けた冬我は、小さくフリーザーを指さして訊いた。

「たぶん……じゃなかった。間違いないと思う。私のナゾノクサも、同じ装置を頭に埋め込まれているんだけど、あのフリーザーと暴れ方がそっくりだったから。もつともナゾちゃんに埋め込まれているのは、フリーザーのとは少し構造が違うみたいなんだけど。原理は同じものだと思う」

「それじゃ、あの装置さえ取り外せば……」

「フリーザーの暴走を止めることができる。それも、フリーザーを傷つけずに」

「でも、どうやって装置を取り外す? 暴れるフリーザーには近づけないよ? キキヨウジムのトレーナーの人達も、当分は戦えない」

指を立てた。自分の胸へと指して、瑞穂は言った。

「私が行く」

「え？」

「私の体重くらいだったら、グラちゃんでも十分に飛べるもの。それで……」

「ダメだ」冬我の口調は普段にも増して強かった。「無茶すぎるよ」

「でも、他に方法が……」

「確実性がなさすぎるよ。大型の鳥ポケモンでもフリーザーの速さには対抗できないんだよ？ グライガーで近づいても、冷凍ビームで打ち落とされるだけだ」

俯いて、瑞穂は口を閉じた。眼の色は悲しげで、涙が浮いている。

このまま、ここで観ていることなんてできない。逃げたままでもいいの？ 卑怯だよ、そんなの。私は、黙ってみていることなんてできない。

瑞穂の潤んだ瞳が訴えてくるかのように、冬我には思えた。だが、このまま行かせて、無駄に瑞穂を死なせたくはない。絶対に無理なのだから。

「無理じゃないよ……」

顔を上げ、意外にしつかりした声で瑞穂は言った。瞳は、もう潤んではいけない。

「地上からリンちゃん破壊光線でフリーザーの進路を阻む。フリーザーは身動きがとれなくなるから、その隙に近づいて、装置を取り外すの」

「破壊光線は、強力すぎて連続では打てないはずだろ？ それじゃフリーザーの動きには間に合わないよ」

「連弩って知ってる?」

「なに、それ……?」

「大弓のことなの。同時に何本もの矢を射ることができると。弓道をしてる私の友達に教えてくれたの」

それとこれとなんの関係が。そこまで考えて、冬我は出かかった言葉を飲み込んだ。

「破壊光線を、同時に二発撃つ……」

「うん……正確には三発。フリーザーを囲むように撃つ。そして動けなくなっているフリーザーに、近づいて装置を取り外す。」

「そんなこと……できるの?」

「リンちゃんならできると思う。私は信じてるし。リンちゃんもそれに伝えてくれるはず。ただ……三発分のエネルギーを同時に発射するから、反動で、リンちゃんは当分、破壊光線は打てなくなる」

「チャンスは一度きりってことだね」

「これで成功する確率はぐっと高くなったよね。だから、私が……」

「そうだね。だけど、キミじゃ駄目だ。ボクが行く。鳥ポケモンに馴れたボクが行った方がいい。瑞穂ちゃんは、リングマに指示をしてくれるだけでいいから」

「そんな……」

慌てたように瑞穂は首を振った。瑞穂の表情が沈み込んでいく。

「危ないよ」

「大丈夫……大丈夫だから」

「でも」

「ボクを、信用できないの？」

「信用してるよ。だから……恐いの。死んじやうかも……ううん、死んじやうよ。装置を取り外せても、間違いなく、その直後に冷凍ビームを浴びちやうんだよ？」

「瑞穂ちゃんは……そのつもりだったんだろう？」

瑞穂は俯いた。嫌だ。小さく呟いて、胸を押さえつけた。鼓動が胸をつたつて掌に響いてくる。強い鼓動だった。胸が苦しいのだ。

「お姉ちゃん……！」

それまで黙っていたゆかりが金切り声をあげていた。顔を上げ、瑞穂は身を乗り出した。そこに、既に冬我はいなかったのだ。

「ごめんな……オニドリル……。すぐに、すぐに終わるから。頑張ってくれ」

傷ついたままのオニドリルに跨り、冬我は空を翔ていた。フリーザーの元へと向かっている。

「冬我くん！ やめて……」

「ごめん。勝手なことして。でも、この街はボクの住む街なんだ。だからボクが守る。キミを巻き込んだんじやって、ごめん。でも、手伝ってくれるよね……お願いだから」

「嫌だ。嫌だよ。そんなの。私が行く」

冬我は何も言わずに、上空へと飛び去っていった。オンドリルは大声で冬我の決意を表すかのように啼いた。

瑞穂は叫んだ。風に邪魔されるため、声は冬我の元まで届くはずもない。塔の階段を駆け降り、瑞穂はモンスターボールを力の限り投げた。

リングマが飛び出してくる。瑞穂は上空のフリーザーを仰ぎ見ながら、言った。

「わかるよね？ さっき言ったこと、覚えてるよね？ できるよね？」

しっかりと頷き、リングマはフリーザーを睨み付ける。口を開け、破壊光線のエネルギーを溜め始めた。

息を切らせて、ゆかりが飛びついてきた。瑞穂にすぎるように、ゆかりは涙声で訴えている。

「撃つて！ 兄ちゃんを撃つてや！ 打ち落としてや！」

「ユウちゃん……」

瑞穂は首を横に振った。胸の奥が泣いている。首を横に振った自分に、冷徹な自分に

失望している。

そうではないと、瑞穂は打ち消した。彼は決意したのだ。犠牲となる決意を。だから邪魔をしてはいけないのだ、と思いきんだ。それでもしなければ、本当に冬我を撃ち落とす指示を与えてしまいそうになる。

「なんでなん？ あのままやったら冬我兄ちゃん……冬我兄ちゃんが……」

泥雪の地面に顔を埋めながら、ゆかりは泣き出した。肩が揺れている。しゃくりあげ、ゆかりは泥まみれになった顔で、瑞穂の足にしがみついて懇願した。

やめさせて。はやく冬我を撃って。やめさせて。

心の奥が騒がしい。瑞穂は自分の頬を叩いた。蒼白だった顔に、少しばかり赤みがさした。

「やめさせてや！ 冬我兄ちゃんは、お姉ちゃんのこと……」

そこまで言うとは、ゆかりは諦めたようすで、ぐったりと雪の地面に横たわった。上空では冬我がフリーザーへと一直線に向かっていている。冬我は叫び声をあげた。

フリーザーは冬我に気付き、冷凍ビームを発射した。冬我はオンドリルに指示を出して避けた。

赤い瞳をさらに輝かせ、フリーザーは羽ばたく。吹雪が舞い起こった。オンドリルは上昇し、吹雪を避けると、嘴をフリーザーへと向けた。

フリーザーがオニドリルへと翼を広げて向かっていく。

「リンちゃん。破壊光線！」

瑞穂は叫んでいた。リングマは3本の光の帯を撃ちだした。雪で覆われた地面が反動でびび割れる。衝撃波が地上を駆けた。泣いたままのゆかりを抱き寄せ、瑞穂は地面に伏せた。

前方。フリーザーの後方。左方。三方位を破壊光線に遮られ、フリーザーは動きを止めた。右方向から、オニドリルが接近してきた。フリーザーが首を擡げ、蒼い光を撃ち放つ。オニドリルは避けなかった。冬我がフリーザーの首筋へと手を伸ばした。力の限り引き抜く。抜けた。やったよ。やったんだ！ 冬我は喜びの声をあげたかった。

声が出なかった。辺りの景色が蒼い。体中が、感覚を失ったかのような脱力感に包まれた。眼を閉じた。何も見えなかった。体全体が燃えるように熱くなってきた。衝撃が走った。墜ちたのか。

暗い、闇の中に墜ちていくのを、冬我は確実に感じていた。

眼を開いた。瑞穂がゆかりを抱きながら冬我を見つめている。ゆかりの眼からは涙がとめどなく流れていた。

「やったよ。成功した」

「うん……うん……」

瑞穂は人形のように、ただ頷くことしかできなかつた。

冬我の全身は凍りついていて、頭だけは、凍つてはいない。それでも手の施しようがなかつた。

そこは路上ではなかつた。野戦病院のようだ。冬我的体は何層もの毛布にくるまれている。瑞穂達の背後には、冬我的憧れであつたキキョウジムのリーダー、ハヤトが顔を伏せて立っていた。

「オニドリルは……?」

頷かなかつた。瑞穂は悲しげに首を横に振つた。

「ごめんな……」それだけ言つた。「もうすぐ、行くから」

「いやや! そんなん! だって、冬我兄ちゃん……お姉ちゃんのこと……」ゆかりは冬我に抱きついた。

「いいよ。もう……。しかたないよ」

泣きじゃくるゆかりの頭を撫でながら、冬我はかすかに笑っている。やがて俯いている瑞穂を見やつた。

「本当なら、私が……」

「違う。キミが、こんなになる必要はないんだ。ここは僕の住む街なんだから」

「でも……」

「ボクで……最後だね」

「何が……？」

「犠牲さ」

瑞穂は、まるで胸を射抜かれたように、その場に蹲った。肩が小刻みに揺れている。俯いているので、涙が流れているのかどうかはわからないが、しきりに頬を掌で拭い、涙声で瑞穂は呟いた。

「冬我くんが……冬我くんが犠牲になる必要がどこにあるの？ わからないよ。私があるって言ったのに。……ひどいよ。私、ずっと冬我くんを殺したことになる。そんなの嫌だよ。私も行く。冬我くんと一緒に行く……」

「やめてよ、そんなこと。瑞穂ちゃんがいなかったら、ボクはたぶん無駄死にしていたと思う。ボクの最期に、少しでも意味をくれて……ありがとう」

「そんな……。どうして？ この街のために、なんで冬我くんが犠牲にならなきゃいけないの？ 冬我くんには、夢があるんでしょう？ ジムリーダーになるんじゃないの？

飛ばなきゃ。飛んでよ。大空を鳥ポケモンにのって優雅に飛ぶところを、私に見せてよ。見たかった。冬我くんが、山を越えて、空を越えて、風を超えるところ、見たかったのに」

「見せただろう？ つい、さつき」

立ち上がり、瑞穂は冬我の肩に手をかけた。冷たかった。体は既に死んでいるのだ。

「不思議だよ」

「何が……？」

「冷たくないんだ。寒くないんだ。むしろ……暑いくらいだよ。凍ってるのにさ」

何も答えられなかった。なんとやっていいのか、わからなかった。

「綺麗じゃなかった。この街、さつき墜ちるとき、見えたけど、全然綺麗に見えなかった。地面は泥でどろどろだし、ビルは薄汚れているし……」

「どうしたの……？ 突然……」

「ボクは、美しいこの街を守りたかった。でも、さつきは綺麗に見えなかったんだ。でも、ポケモンセンターで、キミと一緒に街を眺めたときは、とても綺麗にみえたんだ。キミと一緒にだったから、ボクはこの街を美しいと思えるようになったんだ」

「気のせいだよ。きつと」

「違うよ。キミがいたから、キミと一緒に眺めたら、この街を美しいと思えるようになったんだ。見せて……この街を。美しいこの街を。キミと一緒に見る。美しいこの街を」

頷いて、瑞穂は窓を開け、冬我を抱き起こした。ゆかりも手伝った。

窓から、キキョウシテイの街を三人で眺める。美しいと思った。冬我は涙を流し始めた。

「ほら……綺麗な街だろ。ありがとう。キミがいたから……」

冬我の声は途切れた。瑞穂は顔を伏せ、しゃくりあげながら冬我をベッドへ寝かせた。

キミがいたから。そう呟いた冬我の瞳から、光が失せた。

だが、冬我の視界には、三人で見たキキョウシテイの美しい景色が、いつまでも映りこんでいた。



最期の景色は

重苦しい沈黙が続いた。ナエは空になったカップを置いて、瑞穂を見た。少女は静かに俯いている。育ちが良いのだろう。まだ子供のくせに、礼儀は心得ているようだ。

目の前に置かれているレモンティーに、瑞穂は手をつけようとしなかった。既にお茶は冷めている。

「もう、ないのに……」

ナエは呟いた。瑞穂は申し訳なきように、ナエから目をそらした。

「いくら美しいからって、死んだら、もう、ないのに。冬我にとつての、この街は、もう、存在しないのに……」

「そう……ですか……」

瑞穂はナエの言うことを積極的に肯定する気はなかった。冬我の死が、無駄になつてしまうようで、忍びなかつたのだ。

「冬我にとつての、あなたは、もう、ないのに。死んでしまつたら、もう、誰もいないのに。なにもないのに。存在しないのに。夢も、親も、明日も、昨日までの思い出も、もう、ないのに。消えてしまうのに……」

ナエの眩きは、正しかった。

冬我は死んだ。そして、冬我の世界は、冬我の視界は消滅したのだ。

「そう……ですわ……」

曖昧に応えた。瑞穂は、冬我の最期をすべて語り尽くしたのだ。もう語ることは、なにもない。一息つき、レモンティーを飲もうとした。すぐに思い直して、その手を止めた。

ナエが、鋭い目つきで、瑞穂を見つめている。

「命をかけてまで、街を救うことがそんなに大事なの……？ 消えたのは、あの子の世界だけじゃない。私の視界からも、あの子の……冬我の姿は消えた。もう、二度と帰ってこない。残された者の気持ちも、考えてよ……」

「すいませんでした。私が、冬我くんを殺したようなものです」

「あなたがいなければ、すべてが滅んだ。私は、その方が良かった。こんなに悲しまずにすんだもの。あのまますべて滅んだ方が良かった」

「私は、そうは思いません」

瑞穂は俯きながら、眩いた。

「みんな滅んだら。みんなの世界が消えてしまいます。そんなの嫌です。冬我くんも、嫌だと思います。だから、冬我くんは犠牲になったんです。本当は、私がそうすべき

でした」

鋭く睨まれたような気がして、瑞穂は肩をすぼめた。

「どうして、冬我を止めてくれなかったの？」

「冬我くんが、決めたことだからです。止めたくありませんでした。というより止められませんでした。無理に止めたら、冬我くんの死は、無駄になってしまうと思っただけです」

「違うわ。あんたは、死にたくなかった。口だけで、そう言っただけで、冬我をそそのかしたんじゃないの？ だから、平気で冬我を死に急がせた。あんたが、自分を守るために冬我を犠牲にしたんじゃないの？」

「否定、しません。冷静に考えれば、そういう面もあったかもしれないかもしれません。だから、あえて、否定はしません。でも、あなたに、信じてもらえないのは悲しいです。私は冬我くんを信じていました。冬我くんも私のことを信じてくれました」

瑞穂の白かった頬が、ピンクに火照っている。怒りを堪えているようにみえた。

「レモンティー……飲まないの？」

突然、ナエは話題をレモンティーへと向けた。瑞穂は相手に気付かれないように、深い溜息をついた。

「飲みます。ナエさんのオススメですから……」

カップを手を持った。重い。喉が渴いているから、飲めば楽になれるのだ。

口にカップをあてた。しかし、飲まなかった。

「どうしたの？」

「やっぱり、嫌です」

「何が……？」

カップをテーブルに置いて、瑞穂は、ナエの歪んだ顔を直視した。

「私は、まだ、死にたくありません」

ナエの顔が、更にひきつった。瞳には驚きの色が浮いている。

「何を言っているの？」

「私は、冬我くんのためにも、生きなければなりません。私がここで死んだら、あの世で冬我くんに怒られると思うんです。それに、ユウちゃんを独りぼっちには、したくありません。私は死んじやいけないんです。死ぬことは許されません。たとえナエさんには傲慢に映つても……。大事な人と引き替えに繋ぎ止めた命だから。ここで死んだら、冬我くんに嫌われちゃいます」

「何を言っているのよ！」

たまりかねて、ナエは叫んだ。ウエイトレスが驚いてこちらを振り向いた。

「お客様……他のお客様の……」

「わかってるわ」

ウエイトレスが去り、ナエは瑞穂を睨んだ。冬我の母という仮面が剥がれ、凶悪な、純粹な憎悪が顔を覗かせている。

「ナエさん……最初から、私を、殺すつもりだったんですね？」

喉がヒクついている。こめかみに汗を浮かべ、ナエは瑞穂から視線をそらした。

「なんの……ことよ……？」

「しらばくれないでください。これは、シアン化カリウム……青酸カリ、ですね？」

黙ったまま、ナエはテーブルを見つめている。瑞穂は震える足もとに力を込めて、続けた。

「匂いでわかります。私、こういうのには少しだけ詳しいんです。このレモンティーには、間違いないく、毒、が混入されています。もちろん、私を殺すために」

「だが、入れたのよ？」

「あなたです」

「いつ？ 私にはレモンティーには触れていない。私が、毒なんて、いつ入れたのよ？」

瑞穂はレモンティーの側に置いてあった、グラニュー糖の袋をつまみ上げた。ナエの眉が動いた。袋の先端を瑞穂は凝視した。

「グラニュー糖の袋。あなたは、あらかじめこの袋の中に、毒を仕込んでおいたんです。」

そして私にレモンティーを注文させ、毒入りグラニュー糖の袋を手渡す……。私の記憶では、この袋は、あなたが私に手渡してくれたものですよ……。」

何も言わなかった。ナエはただ、黙って窓の外を眺めていた。

「私を、許してはくれませんよね……。私は冬我くんを殺しました。それは事実です。言い逃れは、できません」

「許せないわよ」ナエは、静かに、しかし恨めしく呟いた。「許せるわけ、ないじゃない」立ち上がり、怒りの形相で、ナエは瑞穂を睨んだ。瑞穂も、ゆっくりと立ち上がり、ナエの悲しい瞳を見つめている。

「あんたが殺したようなものよ。冬我は、死なずにすんだ。あんたがいたから、冬我は死んだ。あんたが死ねばよかったのよ。どうして、あんたが生き残って、冬我が死ななきゃいけないのよ！」

唇を噛みしめながら涙を浮かべている瑞穂の眼を見つめ、ナエは心の奥の怒りをぶちまけた。胸ぐらを掴むと、瑞穂は怯えたように首を横に振っている。絞め殺したかった——ナエは手に力を込めた。

「すいませんでした。ナエさんの言うことは、正しいと思います……。私が、かわりに死ねば良かったんです。でも、冬我くんのしたことは間違っています。それに、どうし

て、ナエさんは自分の視点からしか物事を考えないんですか？　あなたは、本当に、冬我くんの母親なんですか？　ちゃんと冬我くんの気持ちを考えたことがあるんですか？」

「あんたに言われたくないわ。冬我を殺した、あんたに言われたくはない」

首を絞められて、苦しげに、瑞穂は口を開いた。よだれが一筋、口から滴り落ちた。それでもなお、瑞穂はナエに語り続けていた。首を横に振っているが、抵抗しているわけではなかった。

「私なんかを殺して、なんの意味があるんですか？　冬我くんが悲しむだけなんじゃないんですか？　あなたは、自分の失ったものを必死で補おうとしている。でも、こんなことをすればするほど、ナエさん……あなたの失ったものは……冬我くんは、あなたから遠ざかって行くんじゃないんですか？」

「知らない。知らないわよ。私はあんたが憎い。それだけよ。冬我を殺したあんたをね」

「どうしてそんなに自分勝手なんですか？　今になって、冬我くんの言っていた意味がわかるような気がします。自分だけが正しいと思うな。これって冬我くんが、あなたに抱いていた感情じゃないんですか？」

首を絞める力が緩んで、瑞穂はその場に崩れ落ちた。咳き込みながら、瑞穂は口元を

フキンで拭った。

呆然とした表情で、ナエは虚空を見つめている。蹲るナエ。呻くような嗚咽が聞こえてきた。瑞穂は悲しげにナエを見下ろしながら、一言だけ、呟いた。

「ごめんなさい……」

涙に濡れた顔を、ナエは持ち上げた。瑞穂は背を向け、歩き出した。呼んでも振り返ることはないだろう。ナエは瑞穂の背中に向けて、言った。

「私は、気付かなかった。冬我の心の中を。待つて、洲先さん……。拾ってあげて」

「拾う……?」

「あの子の骨を、拾ってあげて。私は、結局最後まで、あの子の気持ちに気付かなかった。あなたにはあの子の骨を拾う資格がある。今、気付いたのよ。あの子が、あなたに抱いた気持ちが……。あの子は、この街のために死んだわけじゃない。あなたのせいで死んだわけでもない」

瑞穂は俯いた。ナエは立ち上がり、瑞穂を鋭く睨み付け、呟いた。

「あの子は……。冬我は、あなたのために死んだのよ」



突き抜けるような青い空の下。瑞穂は、独りで緑の丘の上に佇んでいる。

瑞穂は結局、ナエを許した。ナエはあれきり何も言わなかったが、小さく頷いてはいいた。大切な人を失えば、自分もあなつてしまうのだろうか。考えても、答えはでない。

ナエは結局、瑞穂を許した。どうして突然、許してくれたのか、よくはわからなかった。

黒々とした骨だけになった、冬我の体を思い出して、瑞穂は悲しそうに空を見つめた。誰だつて、死ぬのだ。だが冬我は早すぎた。もちろん、自分だつて同じなのだが。

穏やかそうな冬我の顔も、焼け、他の死人と同じように頭蓋だけとなって、集骨室で晒された。竹の箸で拾い上げた冬我の腕の骨は、生きているときとは対照的に、平べったく、細かった。

骨壺へと冬我の遺骨を納めると、ゆかりは途端に、わつと泣き出した。箸を持つ手が震えていた。

光り輝くフリーザーの粉が骨壺から吹きだしていた。フリーザーから装置を引き抜いたときに、冬我の体に付着したものなのだろう。瑞穂はこつそりと小さなガラス瓶に、粉を詰めた。形見にしようと思つたのだ。

あのあと、フリーザーは何処へともなく飛び去っていった。街は、元の姿を取り戻し

た。雪も、降らなくなった。それでも、瑞穂はこの街を、美しいとは思えないでいた。いや、もう、永遠に美しいとは思えないであろう。

瑞穂はモンスタールボールを握りしめ、大空へと放った。眩いばかりの光と共に、元氣になったオニスズメが飛び出した。羽ばたいて、瑞穂の周りをまわっている。

「オニちゃん……。もう、あなたは、自由だよ。どこへでも、行つていいんだよ。もとい場所、帰るんだよ。それと……。ごめんね。殴ったりして」

瑞穂は手を振った。オニスズメの背中から、何かが落ちた。瑞穂はかがみ込み、それを見つめた。紙だった。死ぬ前に、冬我がオニスズメに託した、メッセージだった。

……きせき 瑞穂ちゃんへ。

汚くて、読みづらい字でごめんなさい。

口ではああ言いましたが、たぶんキキョウジムの人達でもフリーザーにはかなわないと思います。

そうなったとき、瑞穂ちゃんは、きっと自分がフリーザーを倒そうとするでしょう。

ケガをした自分のポケモンを、ボロボロになりながらも守り抜いた瑞穂ちゃんですか
らね。

そして、瑞穂ちゃんは、フリーザーに殺されます。

そんなのは、嫌です。

だからボクは、瑞穂ちゃんが無茶なことをしようとしたときには、瑞穂ちゃんの代わりに死のう、と決心しました。

だからきつと、ボクは死んでしまおうでしょう。

いえ、瑞穂ちゃんがこの手紙を読んでいるということは、すでにボクは死んでいるという事です。

いまさら遅いかもかもしれませんが、ボクは、瑞穂ちゃんのことを好きです。

そのことを相談したら、ゆかりちゃんは、なぜかとても喜んでくれました。

それまで敵意を剥き出しにしていたのがウソのようでした。

その時、ゆかりちゃんは言ってくれたんです。

「男の子やったら、命をかけてでも、女の子を守らなあかんで」って。

ゆかりちゃんの一言がなかったら、ボクは死ぬ決心がつかなかったと思います。

ありがとう。ボクの言ったことを、素直に認めてくれたのは、瑞穂ちゃんが初めてでした。

それに、瑞穂ちゃんと一緒にいると、なぜか楽しかった。

忘れません。だから瑞穂ちゃんは、いつまでも瑞穂ちゃんのままいてください。

…… 氈瓜 冬我。

瑞穂は空を仰いだ。人に見られたくない何かが、瞳からこぼれ落ちそうになったから。

丘の緑が、風に吹かれて波打っていた。さわさわと風の音がざわめく。

泣いてはいけないのだ。自分に、何度も言い聞かせた。息をはいたが、胸の奥の闇は消えない。

「お姉ちゃん……」

背中の方から、ゆかりの涙声が聞こえた。腕で涙を拭いながら、ゆかりは小刻みに震えている。手に持っていた手紙を、瑞穂はすぐにウエストポーチにしまい込んで振り向いた。瑞穂は吸い込むように、ゆかりを抱き寄せる。涙が胸に染みていく。

「ウチが、殺したんや」

ゆかりは呻いた。瑞穂の肩を強く握っている。

「ウチ……冬我兄ちゃんに余計なこと言ったんや。だから、冬我兄ちゃん……」
「違うよ」

「なにが違うん……？」

涙にまみれたゆかりの顔を見つめ、瑞穂はハンカチを取りだし、ゆかりの顔の涙を拭いた。

「冬我くんは、私のせいで死んだの。だから、私が殺したようなものなの……」

暫くして、ゆかりは立ち上がった。上空を回り続けるオニスズメを仰ぎ見ながら呟いた。

「……もし、お姉ちゃんが死んどったら。冬我兄ちゃんの心も、死んでしもたと思う」

小首を傾げ瑞穂は、空を見上げているゆかりを見つめた。

「冬我兄ちゃんは、お姉ちゃんのことを、好きやったんやもん」

もう、何も言えなかった。

瑞穂は飛び去っていくオニスズメの背中を見つめ、目を閉じた。

目を開いたときには、オニスズメは既に青空の奥に消えていた。

苦しいだけだった。罪悪感に心が苛まれていく。忘れようとしても、絶対に忘れられない、悲しい罪悪感。だが、彼は瑞穂が苦しむのを望んではないはずだ。恐らく、彼は自分の死で、瑞穂が苦しむのを予想していたのだろう。だから手紙をオニスズメに託したのだ。

……私が、冬我くんにしてあげられる唯一の罪滅ぼしは……私は、私のままでいること……。

……私が、いつまでも、いつもの私でいること……。

「さようなら」

それだけ言って、瑞穂は丘を駆け降りた。ゆかりが慌てたように、瑞穂の後を追いか

けていく。もう二度と、振り返ることはなかった。そんな必要はなかった。
冬我と眺めた最期の景色が、いつまでも瑞穂の視界にあるのだから。



#8 無力。

月夜の咆哮

暗い地下の世界から抜け出て、少年はシャマインの庭で満月の浮かぶ星空を見上げた。月の光に照らされて、足下に広がる池の水が銀色の光を浮かべている。背後からは滝の音が、少年の心を見透かしたようにざわめいていた。

月は孤独だ。少年は、揺れる湖の水面に目をやり、映りこんでいる月を眺めながら物思いに耽っていた。黒々とした頬のタトウを撫でている。心の奥底で、紫色の髪をした妖しい少女が、寿命が尽きかけの蛍光灯のようにチカチカとあらわれては消えていく。誰なのか。自分にとって、彼女は何を意味する存在なのか――

少年の名前は、サリエル・ゼラキエルといった。

これは運命なのか――。四年前に父のフアヌエルが死んでから、サリエルはずっと考えていた。父の……いや、先祖のなしえなかつた「制裁」が、やつと実現できるところまで来ている。だが、なぜ自分が裁かなければならないのか。背負わされた重荷に、自分は耐えきれぬのだろうか。いや、今までは耐えてきた。それでも、もう限界が来ている。

るのではないか……？

考えれば考えるほど、不安だけが心に残る。そんな時は、こうやって外に出て、湖に映る月の姿を眺める。そうすれば不思議と、胸の奥で蠢く不安が消えていくのが自分でもわかるのだ。

「兄上様……ここにいられたのですか」

少女の呼ぶ声が聞こえ、サリエルは振り向いた。耳の鍵型ピアスが、かすかに揺れた。視線の先にサリエルと同じ眼をした少女が立っていた。彼の唯一の肉親、妹である。小脇に重たそうな本を抱えていた。白い胸元には、サリエルと同じ黒いタトウが刻まれている。どこか寂しげな眼差しが、胸の奥の少女と似ているのに気付いて、サリエルは戸惑いを感じた。

「ラツイエルか」

「はい。ラツイエル・アクラシエルです……」

少女ラツイエルは、サリエルの足下に広がる湖に目をやった。映りこんだ満月が揺らいでいる。サリエルの心の乱れを投影するかのようように。

「どうした？ ラツイエル」

「兄上様のことを、レミエルが捜しておりましたよ」

湖の揺らめきが大きくなった。月が獣のように曲がっている。不思議そうに小首を

傾げ、サリエルは訊いた。

「それだけを伝えるために、わざわざ？」

「はい。兄上様」

サリエルは小さく頷くと、ラツイエルに歩み寄り、そして通り過ぎた。少女の視線が追いかけてくる。逃げるように、サリエルは歩調を早めた。

「サリエル兄さん……じゃなかった、兄上様」

足を止め、サリエルは振り向きもせずには訊いた。正確には、振り向けなかった。

「どうした……？」

「私は、あと4日で、10歳になります」

「そうだな」

「私には、兄上様を殺せません」

「ボクは……いや、私はお前を殺せるぞ」

「わかっています。私は四年前の兄上様を見えていますから……」

「なぜ、そんなことを言う？」

「今すぐ私を殺してください。私は嫌です。兄上様と殺し合いをしなければならぬんです」

「運命だ、これも。心配しなくてもいい。4日後には苦しませずにお前を殺してやるか

ら」

少女は俯いたまま、兄に抱きついた。震えてもいない。ただ、悲しげなのだ。

「ありがとう、兄さん。……あ、兄上様」

抱いていた妹を放し、サリエルは歩き出した。ラツイエルはゆつくりと後を追いかけていく。湖を一度だけ振り返り、サリエルは階段を降りた。ラツイエルはそれに続きながら、兄に言った。

「——兄上様は、悩んでいます。それも、私のことではなく」

「わかるのか？」

「はい。兄上様が湖に映った月を見つめているときは、何かに悩んでいる時だと知っています。幼い頃から、ずっと兄上様のことを見ていたのですから。そして、死ぬときも……。さつき兄上様は、焼けるような、焦がれるような胸の病に、悩んでいたのです。う？」

「そうだ……」

曖昧に頷き、サリエルは階下の闇へと消えた。胸の奥の焼きつくような苦しみが、喉にもこみ上げてくる。

妹は幸せだな、とサリエルは思っていた。苦しまずに死ねるのだから。



目が覚めて、眠気で重たい頭を起こした。土の匂いが遠ざかっていく。森は眠っていた。遠くから聞こえる騒めきは、夜行性ポケモンが争いあう音なのだろうか。

ぼんやりと空を見上げた。星々の中央には、白銀の月が浮かんでいる。

辺りをまさぐり、寝袋から這い出た。立ち上がると、気怠さが足下から襲ってくるような気がした。まだ夜だ。瑞穂は腕時計を見たが、眼が霞んで、よく見えなかった。

悪い夢を見ていたような気がする。瑞穂は額に浮いた汗を拭って、溜息をつくしかなかった。

追いかけてくる、巨大な蒼い鳥。口元から発した閃光が全身を多い、叫びと共に激痛が襲う。場面が変わり、レモンティーを啜った。血を吐いた。のたうつ内に、意識が遠のいていく。喉元を搔いた。爪痕から、氣道が覗いた。息ができない。脂汗をかき、瑞穂は喘いだ。助けて。助けて。声も出ない。

苦しんで苦しんで、大抵はそこで目が覚める。まれに股座が生暖かくなっているときもある。思いついたように、瑞穂はハーフパンツの感触を確かめた。異常はない。思わず安堵の溜息が出た。夜尿など、ゆかりにバレたら笑われるどころでは、すまないだろう。

そういえば……。瑞穂は辺りを見回したが、ゆかりの姿が見当たらない。寝袋の中には誰もいない。トイレにでも行っているのだろうか。瑞穂は再び、額の汗を拭った。

ひどく蒸し暑いな、と瑞穂は感じていた。全身が汗でぐっしりと濡れている。

「暑く……」

歩きながら、瑞穂は着ていた上着を脱いで、地面に置くと歩き出した。数歩先に大きな池があるのだ。水は綺麗で、満月が水面に映りこんでいる。

下着を脱いだ瑞穂は、純白な裸体のまま、一度深呼吸をして、爪先を水面に差し込んだ。清らかな水面に波紋が広がった。目を閉じて、瑞穂は腰の辺りにまで身を沈めた。

「涼しくて……。気持ちいい」

いつしか瑞穂は、肩の辺りまで身を沈めていた。冷たい感触が肌を突き抜けて心地よい。手に持った小さな瓶を握りしめ、見つめながら、瑞穂は語りかけるように呟いた。

「冬我くん……。結局、私は守られるだけの存在なのかな……」

誰も答えてはくれない。水の波打つ音だけが、湖の静寂を引き立たせる。

守られるだけなんて嫌だ。私だって、誰かを守りたい、瑞穂は心の奥で叫んだ。自分は、誰かを守るための、力に欠けているのではないか。

焦りにも似た気持ちだが、瑞穂の心に湧き出た。何度訊いても、誰も答えてはくれない。

大きく息を吸い込んで、瑞穂は湖の底に潜った。泳ぐのは得意だった。こうして泳いでいると、悩みを忘れられるような気がするのだ。

水面から、大きな波紋と共に、瑞穂の顔が飛び出した。

忘れられない。空を見上げた。月が見える。満月だった。月の光が、白い瑞穂の体を照らしている。湖と一体化したような気がした。

瑞穂は右胸に刻まれた、一筋の傷痕を撫でた。痛みはないが、体の芯が締めつけられるような気がする。

(リンちゃんなんか……嫌い……)

今更ながら、なぜあんな事を言ってしまったのか。自分に力がないからなのだ。だから、自分より遙かに力のあるリングマに嫉妬してしまったのだ。

情けない。恥ずかしい……。瑞穂の頬が、次第に紅潮していく。瑞穂は顔を振った。頭から水を浴び、紅潮した頬を冷やした。

意味もなく息を吹いて、瑞穂はしばらくの間、池の水につかっていた。

何かが聞こえる。そう思ったのは、瑞穂が湖に入って、5分ほど経ってからだった。瑞穂は肩まで水につけ、用心深く辺りを見回す。月の光が瑞穂の手助けをしてくれたの

で、すぐに見つかった。

泣き声だった。噁り泣くような、悲しげな泣き声。聞き覚えのある、声だった。

「ユユちゃん……」

緑の茂みの狭間で、しゃがみこんで泣いているゆかりを、瑞穂は見つけたのだ。そりと近づいて、瑞穂はゆかりに声をかける。ゆかりはビクリとした様子で振り向いてきた。

「お……お姉ちゃん」

泣きはらした目が赤く腫れていて、ゆかりの怯えたような顔は、どこか痛々しい。

「どうしたの？ こんなところで、どうして泣いているの？」

「泣いてへんもん」

強がりを言って、ゆかりはごしごしと目を擦ると立ち上がり、水中の瑞穂を見つめた。ゆかりは、まだ冬我の死から立ち直れていない。それだけではない。母親の死や父の死、そして実の姉の死からも本当は立ち直れていないのではないか。瑞穂は憐れみの瞳をゆかりに向けた。普段、明るく振る舞っているゆかりだからこそ、独りでいるときに甦る、悲しみの反芻は耐えきれないものなのだろう。深の夜はいつも、ゆかりは誰に見せることも許さない涙を流し続けているのだろうか。

瑞穂の視線が痛いのか、ゆかりは俯いて、つとめて明るい声を出した。やはり痛々し

さは消えない。

「お姉ちゃんこそ……素っ裸で何してるん？」

「水浴びしてるの。今日、蒸し暑いでしょ？」

「うん。ウチもはいる！」

ゆかりは明るく言うのと、服を剥ぎ取って、湖に飛び込んだ。水しぶきが上がり、瑞穂は思わず顔を背ける。ゆかりは無理に笑っていた。

「気持ちええわ……」

「そうだね」

体が涼しくなった。瑞穂は陸に上がって、体をタオルで拭いた。ゆかりは湖で楽しそうに遊んでいる。少しでも元気になったゆかりを見て、瑞穂は小さく微笑んだ。

「なあ、お姉ちゃん」

「どうしたの？」

訝しげにゆかりが声をかけてきたので、瑞穂は振り向いて訊いた。

「なんや、変な音せえへん？」

「変な、音？」

言われて、瑞穂は手を添え、耳を澄ました。かさかさと草の擦れあう音はしている。しかしその音は、かなり遠くから聞こえてくる。

音が近づいてきた。唸り声のような音も混ざっている。

「ユウちゃん。たしかに誰かくる。そろそろ服を着た方がいいよ」

ゆかりに服を着させ、自分も着替えると、荷物をまとめて、瑞穂は音のする方を見つめた。音が更に近づいてきた。瑞穂は身構え、ゆかりを背後に回らせた。

「来た……！」

耳をつんざく叫び声が辺りに響きわたった。

光が、茂みの奥で燃えている。閃光が迸り、白い熱線が一直線に向かってくるのが見える。

爆発音。森の静寂を破るかのように、辺り一帯が光に包まれた。



「レミエル……ボクは、もう疲れた」

サリエルは深い溜息をついて、大広間アラボトの中央に位置する王座に腰掛けた。黒いタトウの刻まれた頬から、大粒の汗がしたり落ちたりしていく。汗を拭い取ろうと近づいた侍女を手で追い払い、サリエルは、正面に立っている初老の男を見据えた。

「新しい標的が見つかったのだな？ レミエル」

レミエルと呼ばれた初老の男はかすかに頷いた。掘りの深い皺の奥に、なにか得体の知れない不気味な雰囲気をも漂わせている。

だがサリエルは、この男を嫌いではなかった。むしろ頼れる側近として、父親の変わりとして、かなりの親しみを持ってさえいる。

「コガネシティ近くの小さな森なのですが……、いかが致しましょう?」

「いつもの通りでいいよ」

「かしこまりました」

再び頷くと、レミエルは立ち去る素振りを見せた。サリエルは戸惑いながら、レミエルを呼び止め、言った。

「調べて欲しいことがあるんだけど」

「なんでございましょう……?」

少しためらうと、サリエルは小声で呟いた。

「射水 氷という名の、女に関することを調べて欲しい。どんな些細なことでも構わない」

レミエルは眉を潜めた。サリエルは首筋にも汗を浮かせたが、レミエルは素直に頷いた。

「女……でございませうか」

「そうだ。何か、言いたいことでもあるのか？」

「ラツイエル様は、サリエル様が恋をしていると仰つておられました。サリエル様の恋のお相手とは、その射水という女なのですか……？」

余計なことを――

舌打ちし、サリエルはレミエルを睨み付けた。動揺している素振りにはレミエルにはない。なかば呆れ気味に、サリエルは苦笑した。レミエルはサリエルの側近であるが、昔から、ときおり保護者のような態度をとることがあるのだ。

「恋と言う程のものではない。ただ単に興味があるだけだ」

「興味、ですか」

「そうだ。その女を見てみると、まるで妹を見ているような錯覚に襲われる」

ほう……、というような目つきで、レミエルが眉を動かした。

「それほどラツイエル様に似ているのですか？」

「瞳が、な」

「瞳が……？」

思い出話をしているようなサリエルの言葉に、老獪なレミエルの表情が不思議そうに歪んだ。

自分の眼を指さし、サリエルはレミエルに言い聞かせた。

「寂しそうなんだ。いつ死んでもいいと思っっているような、悲しそうな瞳をしているんだ」

「そうですか……。ラツイエル様は、もうだいぶ前から覚悟をされておいでです」

俯きながら、レミエルは呟いた。浅黒い手の甲のタトウが波打っている。胸の奥を針で刺されたような感触がした。サリエルは、不意に声を詰まらせた。

「妹は、どうしてボクになついてくるんだろう……。？　最後には殺し合わなきゃならぬのに。ボクは、タブアエルには、なつかかなかつたよ」

「サリエル様はサリエル様、ラツイエル様はラツイエル様でございます。それよりも、タブアエル様を呼び捨てにはなさらぬよう……。？」

「死んだ奴を、わざわざ兄と呼ぶ必要はない」

不機嫌そうに言い放つと、サリエルは振り払うようにレミエルを退かせた。

扉が閉められる。眠ったように目をつぶり、サリエルは小さな溜息をついた。まぶたの裏で、笑うことのない少女が、こちらを向いて微笑んでいる。

幻だ——これは幻なんだ、と自分に言い聞かせた。妖しい微笑みは闇に吸い込まれていく。

跳び上がり、サリエルは目を見開いた。胸に手を当てて、荒い呼吸を整え、辺りを見回した。

いつもと同じ大広間があるだけだった。



その視線は死の瞳

幾重もの熱線が追いかけてくる。爆発が大地をえぐり取り、衝撃が瑞穂を吹き飛ばした。立ち上がり、後方のゆかりを確かめた。瑞穂の背中にびったりとついてきている。

「大丈夫？ ユウちゃん」

顔についた泥を二の腕で拭い取りながら、ゆかりは小さく頷いた。

再び爆発の火柱があがる。瑞穂は、ゆかりの手を引いて走りはじめた。閃光が迸る。森の木々が爆裂し、粉々になって降りかかってくる。

華奢な手で木の粉を払いのけると、瑞穂はモンスターボールを地面へと投げた。光が溢れ、中からポニータが飛び出すと、すぐさま瑞穂はゆかりと共にポニータに飛び乗った。

「お願い。ポニちゃん。できるだけ速く駆けて」

ポニータはいなくなると大地に蹴りとばし、一目散に木々の間を駆け抜けた。

熱線が一直線に向かってきた。ポニータは鬣を白く燃やすと、跳び上がり、熱線を避けた。着地と同時に、背後から爆音が響き、抉られた地面があたりに飛び散る。

瑞穂は腕で顔を守りながら、振り向いた。目を凝らし、追いかけてくる巨体の姿がぼんやりと浮かび上がる。鋭い牙、凶暴そうな眼、長い爪……リングマだった。口から熱線を吹きながら追いかけてくるのは、森に住んでいる、野生のリングマたちだった。

数匹、全部で6匹はいるだろう。息を吸い込み、破壊光線の光が口元を照らしている。6匹のリングマが一斉に破壊光線を発射した。ポニータのいななきが大きくなる。

抱きかかえるように、瑞穂とゆかりはポニータにしがみついた。目まぐるしい素速さで、破壊光線の網をかくぐり、ポニータは大きなリングマを跳び越える。

逃げ切れる。瑞穂ははつきりと確信した。このままいけば、逃げ切れる。

木々が入り組んで、迷路のようになって森の中に、蹄の音が響いた。続いて爆発音。何かのはぜるような音。爆風が木々をなぎ倒し、重たい足音が追いかける。何発も破壊光線の光が、上空へとのびて、月夜の空を明るく照らしていた。

その時だった。瑞穂が、その光の先に落ち込んでいく闇を見つけたのは。

慌てて駆けているポニータの動きを止めさせ、闇の底を見下ろした。足もとの小石が転がって、からからと渴いた音をたてながら、底へと転がり落ちていく。

「そんな……」

見下ろしながら、瑞穂は愕然とした。闇に吸い込まれそうになるほど深い谷の入り口

が眼下に広がっていたのだ。川の流れる小さな音が聞こえてくるが、呆然とした瑞穂の耳には聞こえてはいない。

青ざめた表情で、瑞穂は絶望に満ちた声を発した。

ポチャン、という嘔きのような小さな音が聞こえたような気がした。項垂れたままポニータの背から降りる。ゆかりを抱きかかえ、ポニータから降りして瑞穂は、背後から迫るリングマに神経を研ぎ澄ました。恐らく匂いを辿っているのだろう。確実にこちらへと近づいてきている。

「お、お姉ちゃん。どないしよう……」

慌てふためき、おろおろとポニータにしがみつきながら、ゆかりは訊いた。瑞穂は苦々しい顔で、辺りを見回している。

そうしている間にも、足音、殺気に満ちた唸り声、破壊光線の爆発音は、さらに迫ってきた。

失敗だった。瑞穂は己の失策を恥じて、唇の端を噛みしめた。端整な色白の顔が、悔悟に満ちている。小さな森なのだ。明るい内に森を抜けていれば、こんな事にはならなかったはずだ。事実、ゆかりは夜の森が恐いからと、森を抜けたがっていた。だが、瑞穂がそれを許さなかった。少しだけ、体力には余裕があったのにも関わらず。

原因は、笑いたくなるくらい些細なことだった。持久力のない瑞穂は、いつの間にか

体力面でゆかりに追い抜かれたのだ。瑞穂は悔しかった。拗ねていた、といってもいい。そしてゆかりも得意げに振る舞っていたのが、さらにシヤクに触った。だから瑞穂は、ゆかりの「今日中に森を抜けよう」という提案を、歯牙にもかけなかったのだ。

本当に悔しかった。だが、そんなくだらないことで冷静さを失った自分を責める気持ちの方が強かった。

馬鹿みたい。内心、心の奥で瑞穂は自嘲気味に笑った。本当に、馬鹿みたい。

全然、成長していない自分がそこにいた。……自分を責める気持ちがあるだけ、成長はしたのかな……？

私は自分勝手な女だ、と心底そう思った。他の人からは、優しいとか、思いやりがあるとか言われるが、全然そんなことはないではないか。

「お姉ちゃん！ 何してるん……？」

いきり立ったようにゆかりは、瑞穂のシャツを引っ張っている。

小さく頷き、瑞穂は冷静さを取り戻した瞳で、崖の周りを見渡した。吊り橋が見えたが、落ちていた。足音が近づいてくる。

ここは野生のリングマの縄張りなのだ。瑞穂は足音の聞こえる方を見やりながら考えていた。今日は満月。ちょうどリングマ達の出産の時期なのだ。当然のことながら、リングマは警戒心を強めている。このことやってきた自分達の方が悪いのではない

か？

怯え竦んでいるゆかりを腕に抱きかかえ、瑞穂は悲しげに呟いた。

「ご、ごめん……。ユウちゃんの言うとおりに、この森を昼間に抜けていけば、こんなことには……」

「いまさら、そんなこと言うてもしやあないやんか！」

「でも……私は……」

「知つとるで。お姉ちゃん、悔しかったんやろ？ そやからウチが言ったこと無視したんやろ？」

「……私、どうしたらいい？」

「お姉ちゃんは、お姉ちゃんのままであえんや。それよりも、どないするん？」

破壊光線が茂みを突き破り、瑞穂達に襲いかかった。ゆかりを抱き寄せ、瑞穂は横に跳び、破壊光線を避けた。爆音が響いた。

すぐさまポニータをボールに戻すと、立ち上がり別のモンスターボールを宙へ放つた。もう一方の熱線が瑞穂の目前まで迫ってきていた。慌てて、瑞穂は身構えたが、遅かった。

「お姉ちゃん！」

叫んだゆかりを余所に、破壊光線が瑞穂を直撃した。少なくともゆかりには、そう見

えた。だが、爆発はしなかった。不思議そうにゆかりは閃光の末端を見やった。

「ありがとう……リンちゃん」

瑞穂のリングマが煙の奥の中に立っていた。瑞穂の声も聞こえてくる。煙を振り払い、リングマは吠えた。瑞穂はリングマの背中にしがみついていた。

いつかと同じだ。また助けられた。瑞穂はゆっくりとリングマの背中から手を離れた。

野生のリングマ達が、茂みの中から飛び出してきたのを見つめ、瑞穂のリングマは一步、足を踏み出した。巨大な、リングマを目の当たりにして、野生のリングマ達は狼狽えているようだ。

咆哮した。先程まで威勢の良かった野生のリングマ達が、驚いて跳び上がり、小さく竦んでいた。

駆け寄ったリングマは、野生のリングマへ向かって手を振り上げ、振り下ろした。地響きが足もとを揺るがす。リングマの剛腕によって、数匹の野生のリングマたちが、一斉になぎ払われた。野生のリングマ達も負けじと応戦するが、瑞穂のリングマの巨体には、なす術もない。

数匹いた野生のリングマの中で、一番巨大なリングマが、瑞穂のリングマと組み合った。瑞穂のリングマは咆哮し、放り投げ、破壊光線を発射した。衝撃波が瑞穂を襲う。

野生のリングマの破壊光線とは威力が段違いだった。もうもうと土煙が吹きあがる。吹き飛ばされておののくリングマ達へ、瑞穂のリングマはもう一発、破壊光線を撃とうと腹の奥に力を込めた。

「ま、待つてリンちゃん！」

慌てたように瑞穂は、自分のリングマの前へ立ちふさがった。溜めていた破壊光線のエネルギーを上空へ吹き出すと、リングマは瑞穂の澄んだ瞳をじつと見つめる。

「この野生のリングマ達は、別に悪気があつて私たちを襲つたわけじゃないと思う。……というより、この出産期に、勝手に野生のリングマ達のテリトリーに侵入した私たちの方が悪いの。だから、これ以上はやめて。お願い」

目の前に突っ立っている瑞穂を抱きかかえ、リングマは渋々と頷いた。よろよろとゆかりは、その場に腰を抜かして座り込んでいた。

少しの間、両者の対峙には重い沈黙があつたが、それを破つたのは意外なことに野生のリングマ達だった。

脅えていた野生のリングマ達は、敵意を見せずに、ゆっくりと瑞穂へと近づいてきたのだ。リングマは、瑞穂を抱きしめたまま唸り声をあげ、野生のリングマ達を、鋭く睨み付けた。

思わず後ずさる野生のリングマ達を見て、瑞穂は自分のリングマに近寄ると、耳元で囁く。

「待ってリンちゃん。だから、私が悪かったから……。」

リングマの腕の中から飛び降りて、瑞穂は怖ず怖ずと野生のリングマ達の様子をうかがった。野生のリングマ達は、その巨体をひしめきあわせて、暗がりから訝しげに瑞穂の小さな体を見つめている。

数歩前進し、瑞穂は野生のリングマ達を直視した。相手は瑞穂の方を怪しんでいるかのように囁きあっている。

ぺこり、と頭を下げた。そんな瑞穂を見て、野生のリングマ達は立ちすくんだまま、驚きの表情を浮かべた。

「勝手に縄張りに入ってごめんなさい。……あの、すぐにこの森から出て行くから……。」

もう一度、深々と頭を下げると、瑞穂は後ろを振り返り、ゆかりとリングマを連れて森の出口へと歩き始めた。

……ガウ……！

待って、と野生のリングマが言ったような気がして、瑞穂は振り向いた。自分のリングマの巨体が側まで寄ってきて、ぼそぼそと耳打ちしてくる。

……お前、人間か？……って姉さんに訊いたんだよ……。

やや気抜けた表情で瑞穂は呟いた。隣ではリングマが唸りをあげて、野生のリングマ達を牽制している。

「人間か？　って聞かれても……。私は、人間だけど……」

リングマが瑞穂を押しつけ、威嚇するように野生のリングマ達の前に立ちふさがった。野生のリングマ達が脅えたように小さくなり、一カ所に集まって震えはじめた。

「り……リンちゃん。駄目だよ、そんな脅かすようなことしたら……」

慌てて止めさせようする瑞穂を無視して、リングマが何か早口で捲し立てている。不思議なことに、野生のリングマ達は次々と頷き、立ち上がって茂みの奥へ消えていった。

最後に残った一匹の野生のリングマが、瑞穂に手招きをしている。ぼんやりとその場に立ちすくしたまま、瑞穂はリングマと顔を見合わせた。

リングマが頷く。瑞穂も戸惑いながら頷いて、野生のリングマの元へと歩き始めた。

「お姉ちゃん……どこいくん？」

駆け寄って瑞穂と手をつなぎながら、ゆかりが訊いてくる。

「どこ……って言われても、私にもわからない」

「なんやそれ。罨やったらどないするん！」

思わず苦笑して、瑞穂は口元を手で押さえながら答えた。

「それはないよ。それに、この野生のリングマ達が私のことを呼んでいるのは間違いない」

呆れた様子で、ゆかりは溜息をついた。

瑞穂はリングマの暖かい腕を抱きながら、野生のリングマの後に付いていった。歩きながら瑞穂は頭の中に地図を思い浮かべてみた。どうも、野生のリングマ達は湖の方向へ向かっているようだ。

歩き続ける野生のリングマ達を、茂みの奥から、何者かが危険な目つきで見つめている。満月の光を浴びて、反射し、何者かの瞳が一瞬だけギラリと光った。

危険な視線を感じて瑞穂は振り向いた。茂みの奥を凝視したが、何者かの姿は既になかった。

……どうしたの……？

隣で瑞穂を護るようにして歩いているリングマが、瑞穂の顔を覗き込みながら訊いてきた。

「う、ううん。なんでもない。気のせいだよ……」

気配がないのを確認すると、瑞穂は振り返り、小さな笑みを浮かべた。

茂みの中で気配を消していた何者かは、誰にも聞こえないような小さな声で通信機に声をかけた。

「標的は、まだ確認できません。偵察を続行します……」

まだ、瑞穂は何も気付いていない。死の瞳が、遠くから、再び自分達を見つめていることに。



闇の再来

湖のほとりにそびえる巨木の下で、呻きに似た声が聞こえた。ひととき大きなメスのリングマが、巨木に支えられ、苦しそうに身を振っているのだ。湖まで案内してきた、一回り巨大な野生のリングマが、心配そうに彼女を指さしながら、瑞穂の方を見た。瑞穂は、意味ありげに頷くと、目の前で呻く巨体を、まじまじと見つめた。

彼女の周りを囲む野生のリングマ達は、皆心配そうに、ひしめき合っている。

苦しそうな息づかいで喘いでいるリングマの前に、瑞穂はしやがみ込み、手をとった。途端に野生のリングマ達が騒ぎ出した。怒っているものもいれば、脅えたように顔を歪める者もいる。牙を剥き出しにして今にも飛びかかろうとする、血気盛んなリングマの姿も、ちらほら見えた。

巨木にもたれているメスのリングマを横に寝かせ、布巾で体中に浮き出した汗を、瑞穂は拭き始めた。

「ガッー」

たまりかねたのか、一匹の若いリングマが爪を振り上げ、瑞穂の顔めがけて振り下ろ

した。瑞穂は動かなかつた。首だけを横にそらして難なく爪をかわすと、メスのリングマの様子を見続ける。

ここまで瑞穂を連れてきた首領格のリングマが、瑞穂を切り裂こうとした若いリングマを睨み付けた。

「グアアッ！」

一喝され、血気盛んだつた若いリングマは小さくなり、しよぼんと俯いた。

……邪魔をするな……！ 首領格のリングマは、そう叫んだのだろう。

「お姉ちゃん……どういふことなん？」

瑞穂のリングマに抱えられながら、ゆかりは横から瑞穂に尋ねた。

「つまり……このメスのリングマが苦しんでいるから、助けてほしい……つてことだよ
ね？」

横目でリングマを見ながら瑞穂は訊いた。リングマは小さく頷く。

メスのリングマの呻きが激しくなつた。まるで暴れているかのように、のたうつている。息を呑み、瑞穂はメスのリングマの肩の辺りを、強く擦るようにさすつた。彼女の呻きが、少しだけ小さくなる。周りで見ていた野生のリングマ達は次々に感嘆の息を吐いた。

「どないなん？ そのリングマの病気……」

ゆかりが訊くと、瑞穂は顔を向けた。暗がりによく見えないが、不安げなのは間違いない。もう一度、メスのリンググマに浮いた汗を拭い取ると、瑞穂は答えた。

「病気じゃなくて、骨盤位だよ」

「コツバンイ？」

「逆子のこと」

「つてことは、このリンググマ、妊娠してるんか……」

なるほど……と頷いているゆかりを余所に、瑞穂は立ち上がり、すぐ隣のリンググマに、囁くように言った。

「あの……。精神的に負担になると思うから、ここのリンググマ達には他の場所に移って欲しいんだけど……」

話を聞いて、リンググマは頷くと、首領格に叫んで、その旨を伝えた。首領格のリンググマは了解し、一同を連れて、渋々と森の深部に姿を隠した。あとに残されたのは、瑞穂とリンググマ、苦しげなメスのリンググマと、ゆかりだけだ。

「お姉ちゃん……大丈夫なん？」

ゆかりが、暗い顔で訊いてきた。患者の前で許される程度の笑みを浮かべ、瑞穂は白く華奢な腕を、星空へと向けた。

「まかせて。私は、こう見えても医者なんだから……」

満月が朝日に吸い込まれるようにして消えていく。

辺りに産声が響いた。時が止まったかのような沈黙の後、空気を押し揺るがす、鳴き声が広がった。メスのリングマは、体中の力を振り絞ったようで、ぐったりとしたまま息をはいている。全身に疲労の色が濃かったが、苦しそうではなかった。

「グアアアッ！」

隣にいたリングマが合図を出すと、茂みに潜んでいた野生のリングマ達が一齐に顔を出した。瑞穂の抱いている赤ちゃんヒメグマを認めると、彼らは歓声を上げた。歓喜の叫び声を聞きながら、瑞穂は、ぼんやりと微笑んでいる。

「やったやん！ お姉ちゃん」

嬉しそうに、ゆかりが話しかけてきた。瑞穂は、こくりと頷き、その場に座り込んだ。

「よかった……生まれたね……」

それだけ呟き、鳴き続ける赤ちゃんヒメグマをリングマに預けると、瑞穂は意識を失い倒れた。ゆかりが慌てて駆け寄り、瑞穂の様子を確かめる。

「お姉ちゃん！」

疲労からか、蒼白になってしまっている瑞穂の顔を覗き込んで、ゆかりは思わず吹き

出してしまった。

寝息が聞こえたのだ。とても大きな。

一晩中、母親リングマと共に戦い続けた瑞穂の体力も、既に限界を超えていた。瑞穂は、体全体に達成感を漲らせたまま眠っている。少女の寝顔は穏やかで、優しさを湛えていた。

若い野生のリングマが、眠り続ける瑞穂を、起こさないように、そっと抱きかかえた。柔らかな草むらの上に寝かせられて、瑞穂はその日、一日中、眠り続けた。



眠れぬまま夜が明けた。

ゼブルと呼ばれる寝室で、サリエルは少女の、妹の、白いうなじを優しく撫でた。ラツイエルは、ほのかな桃色に染まっている胸を、恥ずかしそうに手で押さえている。

抵抗はしなかった。サリエルの細い腕が背中にもわされた。お互い、火照っている。汗が全身に浮いている。燃えていると言ってもいいほど、体の芯が熱を帯びていた。

荒い息のまま、サリエルが妹の唇を吸った。虚ろなラツイエルの瞳が、潤んでいる。透明な、透き通った、一筋の涙が妹の頬をつたって、サリエルの胸元を冷たく濡らした。

サリエルは驚き、そして冷酷と言つてもいいような表情で、聞いた。

「なぜ……泣く？」

「兄上様。抱いてください」

表情を変えずに、サリエルは小首を傾げた。妹は——ラツイエルは声も上げずに、涙だけを流し続けている。恥ずかしそうに、頬を赤らめ、細い体軀を隠すように、シートの中に潜り込んだ。

サリエルはシートごと妹を抱き寄せ、生温い胸の中に顔を押し込む。

「抱いている……。それを拒んでいるのはお前だろうか？」

「私を、抱いてください」

ラツイエルの声は小さかったが、どこか胸に突き刺さるような、芯の強さがあつた。冷たく、愁いに満ちていて、まるで——

射水 氷のような。

あの女のような。……似ている。似ているのだ。

ラツイエルは、氷に似ている。いや、氷がラツイエルに似ているのか？

火がついたように、妹をシートから引きずり出し、サリエルは男としての牙を剥きだした。呻きが聞こえる。誰だ？ 妹か、あの女か。どうでもいい。今は、誰の呻きでも

構わない。呻きが激しくなる。違う……自分が激しいだけだ。呻きがぼんやりとする意識の中で大きくなっていく。

妹か。あの女か。違いはない。

どうしても、犯しても、侵しきれない部分があるという意味では、同じなのだ。

それは、心の奥底。なついてはくるが、妹は決して自分に心を許してはいないのだ。

あの女も、同じだ。絶対に自分の方を向くことのない、冷たい瞳。あの女……。あの女……。

快感が、体から吹き出した。息を弾ませながら、サリエルはベッドに横たわる妹を見つめた。妹は、悲しげにサリエルを睨んでいた。涙が溢れている。

「兄上様は……私を抱いてくださらない。どうして——私を抱いているのに、どうして兄上様は、私以外の女のことを考えているのですか？」

サリエルは答えに窮した。

「お前は、私の妹だ」

「答えになっていません」

「お前は、私が恋をしていると言いつらしているようだな？」

「ラツイエルは顔を上げて言った。瞳の色は変わっていない。」

「言いふらしてなどいません。ただ、レミエルに伝えただけです」

「それを、言いふらしている、と言うのだ。お前は、私が恋をしていると言うが、お前こそ、私に恋をしているのではないのか？」

「私は、兄上様のことが好きです。たとえ、あと四日で、兄上様に殺されようとも」

「では、なぜ私に心を許さない……？」

潤んだ目を細め、ラツイエルはか細い声で答えた。

「私は兄上様に、すべてを許しています。心も、そして体も」

「心の奥底までか？」

妹に、何かを躊躇うような素振りが見えた。

「それは……ごめんなさい……。私は、兄上様に心の奥底まで許すことができせん」

涙声に変わった。シーツに顔を埋め、妹は嗚咽した。

「兄上様は、あと四日で私を殺さなければなりません。私が死ねば、私は兄上様を失ったことになります。寂しいのです。兄上様を失うことを想像すると、たまらなく悲しくなるのです。もし私が兄上様に……兄さんに心の奥底まで許しちやったら、死ぬのが恐くなつちやいます……。兄さんは、私を殺さなきやいけない。それが決まりなの……。恐いよ。死ぬのは。兄さんを、本気で愛しちやったら、私、死ぬのが恐くなつて、私が兄さんを殺しちやうかもしれない。だって、そっちの方が楽だもん！ それなのに……私

は兄さんのこと、ずっと考えてるのに、兄さんは、他の女のことを考えてるなんて……酷いよ。私は、その女の代わりなの？ 酷いよ。兄さんなんか嫌い。だから、はやく殺して。もうこれ以上、兄さんを想って、死ぬときに兄さんを失うことを想像して、私は苦しみたくないの！」

ラツイエルは、兄を突き飛ばし、シーツを羽織ったまま外へと飛び出していった。階段を駆け降りる声が響く。唸るような泣き声が、寝室まで聞こえてきた。

ラツイエルと入れ替わりに、レミエルが寝室に入ってきた。全裸のサリエルを見て、レミエルは多少の驚きを隠そうともせず、言った。

「さ……サリエル様。決行は、三日後です……。ハルパスを派遣しました」

頷くと、サリエルはレミエルの皺だらけの顔を見つめた。長い銀髪を、疲れているかのように掻き上げ、次に呟いた。

「妹は……」

小さく息をはき、窓の外の光無き闇の奥を覗く。闇が心の奥に触れた。

「苦しんでいたんだね……」



太陽の光を浴びて汗を焔めかせ、瑞穂は背伸びをした。ヒメグマと仲間達が遊ぶのを眺めているのだ。

あの難産から三日が経った。心配されていた母体の健康状態も良好で、子供であるヒメグマも健康状態に特に問題はなく、元気に育っている。

草むらに座りながら、眠そうに目を擦ると、グライガーが近寄ってきて、木の枝を手渡してきた。きよとんと瑞穂は、グライガーを見つめる。遠くでポケモン達と遊んでいるゆかりが、笑いながら大声で言ってきた。

「お姉ちゃ〜ん！ その棒、投げてや！ 先に取った方が勝ちやねん」

微笑みを返して瑞穂は立ち上がると、手渡された木の棒を力一杯、空へ向かって放り投げた。くるくるとまわりながら、木の枝は森の奥へと消えていく。ポケモン達とゆかりは、一斉に木の枝を目指して、走り出した。

一息ついて湖の水で顔を洗うと、瑞穂は横になり、生い茂る芝生に身を沈めた。風が凩いでいる。湖の水面は静かに、光っている。

麗らかな日差しを浴びて、瑞穂は眩しそうに目を閉じると、そのまま眠りに落ちた。

逃げられぬ惨劇の中で

闇だ。決して見紛うことのない闇が、眼下に広がっている。

死の冷気が頬を撫でた。谷底に溜まった闇が、風に吹かれて二人を……少女とヒメグマを強張らせた。闇の中心に、鮮血が散っている。肉の欠片。充血し、見開いた眼。流れ続ける墨のように黒々とした、血。谷底に横たわる、巨体は間違いなく、あれは――

かつて、母と呼ばれたリンググマ。

戦慄した。抱いていたヒメグマが、狂ったような叫びをあげ、泣きわめいた。少女を……瑞穂を振り払い、母の亡骸へと向かおうと、四肢をバタつかせている。

ヒメグマの手を握りしめ、少女は引きずった。

「アブないよ。ひめちゃんまで、おちちやうよお」

少女はヒメグマを抱き上げ、鮮血にまみれた谷底の屍体を凝視した。破裂している。谷底から落ちたときに破裂したとは、到底思えなかった。

誰かに。そう、誰かが。誰が？ 誰が殺した？

当時は思いも付かなかった考えが、泉のように沸き上がってきた。

……当時？ そうだ。これは、夢だ。それも、とびきりの悪夢。

現実の過去を振り返り、冷静といつてもいい程の落ち着きをもつて、瑞穂は考えた。

銃声が聞こえていた。住処の前にあつた人間達の足跡。あらゆる状況証拠をかき集め、出てきた事実はただ一つ。——人間がリングマを殺した。

狂つたように暴れるヒメグマを抱きながら、瑞穂は声も出せないでいた。

足音が聞こえてくる。瑞穂は急いで、ヒメグマの口をふさいで、近くの岩場に身を隠した。

男だ。不思議な形のライフル銃を肩に抱え、男と男の手下達は谷底を不敵な笑みを浮かべながら眺めている。

あいつだ。胸の奥で、音にならぬ声が鳴り響いた。アイツが殺したんだ。殺した男は、谷底に石を蹴り落とすと、背を向け、どこかへと去っていった。

忘れるはずがない。男の手の甲には、黒々としたタトウが光っていたのだから。忘れない。皺だらけ顔をした冷酷な男の邪悪な笑みを、決して忘れない。

嫌な夢だった。また……悪い夢を見た。

照りつける太陽の光を避けるように、巨木からのびる影に身を寄せると、瑞穂はぐっ

たりと、額の汗を拭った。

目が覚めたとき、目の前には誰もいなかった。不安になり、立ち上がろうとしたが、できなかつた。腰が抜けていた。夢のせいで、腰を抜かしたことなど、初めてだった。誰かを呼ぼうとしたが、声すらでなかつた。

悪い夢だった。思い出すだけでも、冷たい汗が背筋に滲んでくる。

ウエストポーチからハンカチを取りだして、湖の水に浸して、顔にあてた。濡れたハンカチが、火照った頬を優しく冷やしてくれる。気持ちがいい。

さっぱりとした顔で、瑞穂は頭を振った。その視線の先に、小さな影を見つけるまでは。

瑞穂は目を凝らして、小さな影を見つめた。

ヒメグマだった。ヒメグマは近寄ると、泣きはらしている赤い顔を、瑞穂の胸に埋めた。

どうしたの？ 声に出そうとしたが、瑞穂の口から言葉は発せられなかつた。当然かもしれない。夢ではなく、かつて現実と同様のことを体験したときは、2週間、話ができなかつたのだ。

不吉な予感が、瑞穂の胸を突いた。夢ではなく、かつて現実と同様のことを体験したことがあるのだから。突然、理由もなく泣きわめくヒメグマ。ヒメグマと二人きりの自

分。

いや、決め付けるのはよくない。ヒメグマの涙にも理由があるかもしれない。杞憂であるかもしれない。

「ど……どう……したの……？　ゆかりお姉さんや、リンお兄さんと遊んでいたんじゃないの？」

喉を詰まらせながら、瑞穂は胸の中で啜り泣くヒメグマに訊いた。ヒメグマは答ええない。ただ、悲しげに、哀しげに啜り泣いているだけだ。

不安は頂点に達した。

ヒメグマを抱きかかえたまま立ち上がり、瑞穂は仲間達が走っていった方向を眺めた。あそこには、ゆかりもいる。自分のポケモン達もいる。野生のリンググマ達もいる。

落ち着け。落ち着くんだ。森の奥には、ヒメグマの仲間達が大勢いるではないか。

「そうだよ……それに、ヒメグちゃんのお母さんもいる……」

何も心配することなんて無いんだ、と瑞穂は自分に言い聞かせた。

胸の中が、ビクリと動いた。そしてヒメグマは、再び火がついたように泣き始めたのだ。

何も心配することなんて無い。それじゃ、なんでこの子は泣くの？

焦りにも似た、恐怖とも言えない、不気味な感情が心に湧き上がってきた。確かめるように、森の方を見た。そして、次の瞬間、少女は悪夢の続きを見ているような錯覚に襲われた。

銃声。

何かの爆発するような音で、辺りの空気は震撼した。

銃声。銃声。悲鳴。銃声。幾重もの破壊光線が、青空へとのびていく……。

森の奥から、信じられない音が、銃声が連続して聞こえてきたのだ。叫び声をあげ、ヒメグマは瑞穂の腕を振りほどき、森へと走っていった。

瑞穂も、すぐさま後を追いかけてようと走ったが、踏躓けて転んだ。起きあがったとき、既にヒメグマはいなかった。ふらふらと立ち上がり、瑞穂も森へと駆けていった。

駆けながら胸を押さえる。心の奥の不安が、膨張していく。何があつた？ 確かに森の奥から銃声が響いた。そして、そこには、ゆかりがいる。自分のポケモンがいる。野生のリングマ達、ヒメグマの母親……。

生い茂げ、入り組んだ木の枝をかき分け、ひたすら瑞穂は森の中を駆けた。

その時、何かがこちらへと、瑞穂の方へと急接近してくる。

危ない。そう感じて、瑞穂はとっさに横に跳び、なんとか衝突を避けた。体勢を立て直し、瑞穂は相手を見つめて、息を呑んだ。

鉄製の双輪車に跨った男が数人、急停車し、嘲るように瑞穂を睨んでいる。

「なんだ？ お前は……？ こんな所で何をしている？」

顎を突き立てて、リーダー格の男は瑞穂に訊いた。手下と思しき数人の男が、双輪車のハンドルを握って、身構えている。

「あの……、そんなことより、今の音……聞こえました？ 何があつたんです？ と……というより、あなた達は、誰なんですか？ さんのためにこの森に……。」

男達は一斉に笑い出した。リーダー格の男も、長い顎を突き出して、いやらしい笑みを浮かべている。瑞穂は、男の顎の先に黒いタトウがあるのを見つけて、狼狽した。

「その……タトウ……。」

リーダー格の男が、瑞穂の呟きを聞いて、顎の先端を手で撫でた。

「このタトウ……。知ってんのか……このタトウの秘密を。俺達……いや、我々の正当なる裁きを」

「なんの……ことですか？」

小首を傾げ、瑞穂は訊いた。男は答えない。ただ、訝しげに瑞穂を見つめている。二ヤリと笑い、男は双輪車のボタンを押した。双輪車の前面から、施条銃の先端が覗いた。

驚いて、瑞穂は数歩、後ずさった。男は、しゃくれた顔をくしゃくしゃにして笑いだ

す。

「死ねよ……。お前は、俺達を見ちゃいけなかったんだ」

男は、双輪車に内蔵されている施条銃のトリガーを引いた。凶弾が白煙と共に、瑞穂へと放たれる。瑞穂は、悲鳴をあげる暇も与えられなかった。

銃声が瑞穂の耳に届いた。だが痛みはなかった。おそろおそろ閉じていた目を開く。弾丸が体に達していないことを確かめ、瑞穂は安堵の息をもらした。

背後から蹄の音が聞こえてくる。瑞穂は大声で二匹を呼んだ。

「ナゾちゃん！ それにポニーちゃんも……！」

弾丸はナゾノクサの葉っぱカッターによつて、くい止められていた。ポニータに乗つたナゾノクサが、草木をかき分け、瑞穂の元へと駆けつけてきたのだ。

ナゾノクサはポニータから飛び降りると、休む暇もなく葉っぱカッターを連射した。

男は巧みに双輪車を操り、葉っぱカッターを避けていく。チツと舌打ちし、呟いた。

「くそっ……。のろまなリングマが、ここまで追ってくることはないと思つたが……」

手下の男の一人が、声を張り上げた。

「ハルパス様……！ どうしましょう……？」

「撤退だ！ いちいちこんな奴等の相手をしていられるかっ！」

リーダー格の男、ハルパスは大声で怒鳴つた。その瞬間の隙をついて、ナゾノクサは

葉っぱカッターを打ち出す。葉っぱカッターは、高速で回転しながら、ハルパスの脇腹を切り裂いた。

ハルパスは怯んだ。上空へジャンプしたナゾノクサを睨み付けると、地面へ唾を吐き捨てた。双輪車を翻し、降り注ぐ葉っぱカッターを避けながら、ハルパスは森の出口へと消えていく。撤退したのだ。

男達が去ってから、瑞穂はナゾノクサ達に言った。

「ありがとう……ナゾちゃん。ポニちゃん」

ナゾノクサは小さく頷き、ポニータの頭に飛び乗った。小さな瞳で瑞穂を見つめ、彼女は早口で語りはじめる。

「ナゾー！ ナゾナゾナゾナゾナゾナー！」

……急いで！……大変なことになっているから……。

なんとなく、ナゾノクサの言おうとしている意味を感じ取り、瑞穂は頷いた。ポニータに飛び乗り、瑞穂は一目散に野生のリングマ達の元へと駆け始めた。



鮮血が、森の木々を真っ赤に染めていた。辺りを見回し、瑞穂は、血生臭い地面を踏

み越え、横たわっている野生のリングマ達に近づいた。

「そんな……」

先程見た悪夢よりも非道い光景が、瑞穂の視界いっぱいには広がっている。眼を背けることは許されなかった。これは、現実なのだ。死んでいる者。傷を負っている者。血を流していない者はいなかった。

ナゾノクサが呼んでいる。瑞穂はポニータの後を追いかけた。追いかけているが、瑞穂の顔が強張った。ナゾノクサは背中に、ポニータは脇腹に、小さいながらも傷を負っていたのだ。

野生のリングマ達の奥に、瑞穂のリングマと、ゆかりが横たわっている。リングマは腰から血を流しており、ゆかりは左の足の足の太股が激しく裂けていた。

泣きながら飛びついてきたグライガーを抱きかかえ、瑞穂は、ゆかりに話しかけた。

「ユユちゃん。どうしたの？ 一体、何があったの？」

ゆかりは青ざめ硬直した顔を横に振り、左足の傷を庇うように身を起こした。

「こわい。こわいよう……」

「うん。うん……そりゃ、そうだよ。その気持ち、わかる」

「襲ってきたんや。変な男が……。バイクに乗ってきて……。バイクの先っぽが銃に

なつとつて、それでリンググマ達を襲ったんや……」

瑞穂の足下から血の気が引いてきた。さっきの男だ。突然、双輪車で襲いかかつてきた、あの男。瑞穂は男の特徴を思い浮かべた。嫌らしい笑み。突き出した顎。顎の先の黒いタトウ……。

「ねえ、ユユちゃん。その男の人達の中に、顎が長くて、黒いタトウをした人がいなかった？」

血に濡れた左足を見つめながら、ゆかりは驚いたように目を剥いた。出血しているからか、意識が遠のいていくようで、言葉尻がぼやけてきている。

腰のウエストポーチから包帯を取りだして、瑞穂は、ゆかりの左足の傷を縛って、止血した。虚ろだが、恐怖に染まった眼を瑞穂の胸元に押しつけながら、ゆかりは呻いた。

「いた……。顎に、たとうした男……。いたで……。こわいよう……。こわい……」

ゆかりは震えている。瑞穂は、ゆかりを抱き寄せて、訊いた。

「ねえ、ユユちゃん。ヒメグちゃんは、ここに来た？」

「来たで……。そのあとな……。怒ったように、あの男達を追いかけて行ったんや」

瑞穂は、ゆかりの指さした方向を、眺めた。

ヒメグマの足では、双輪車に乗った男達に追いつけるはずがない。だけど……。想像

して、瑞穂の背筋が凍った。

ヒメグマやリングマは、嗅覚が非常に発達している。双輪車の男達が、森の途中で休憩でもしていれば、ヒメグマの足でも追いつけるかもしれない。なんといつても、男達のリーダー格であるハルパスという男は、脇腹に傷を負っていたのだし。

だが、追いつけるだけだ。双輪車で武装した男達に、子供のヒメグマが勝てるはずがない。

「ナゾちゃん。ユウちゃんと、グラちゃんをお願い」

ゆかりと、グライガーの体をナゾノクサに預け、瑞穂は立ち上がった。瑞穂の考えを察知したのか、リングマも自分の身を省みずに、立ち上がる。

リングマの腰の辺りの傷を見つめながら、瑞穂は訊いた。

「リンちゃん……大丈夫？」

頷き、リングマは咆哮した。出血は酷いが、それほど深い傷ではないようだ。

辺りは夕闇に包まれ始めている。瑞穂はリングマと共に、ヒメグマの駆け去った方向に走りだした。

「お願い。リンちゃん……。ヒメグマちゃんの匂いを辿って。早く行かないと……」

闇が、再び自分達を標的にしたのか。6年前の悲劇が、まざまざと脳裏をかすめている。銃声。悲鳴。忘れない、忘れられない過去が、また増えるのか。そんなのは嫌だ。

(やくそくだよ……、ひめちゃん。もう、泣かないで……)

歯を食いしばり、走りながら瑞穂は、冬我の形見である光の粉の詰まった瓶を取りだして、見つめた。

冬我くん……私、誰も守れない。

冬我くんみたいな、勇気や、力は……私には無いもの。

(いっしょに、ねよう……。だから、もう、泣いちゃだめだよ……)

非力だ。……私は、誰も守れない……役立たずだよ……。

……そんなことはないよ、瑞穂ちゃん。キミは、みんなを包み込む“優しさ”がある

……。

優しさは、力にはならないよ。

……力なんていらないよ。優しさがあれば、誰だつて救うことができる……。

私は、冬我くんを救えなかった。冬我くんだけじゃない、誰も救えない。守れない。

……キミのリングマは、瑞穂ちゃんに……キミに救われたんじゃないのかい……？

それは……。

「ガウッ！」

リングマの叫び声を聞いて、瑞穂は正気に戻り、前方を見つめた。泣き声が聞こえる。夕闇の奥で、消え入りそうな程の泣き声が聞こえる。

「ヒメグちゃん！」

瑞穂は呼んだ。闇は、幼いヒメグマの体を食い尽くしていた。

夕闇に照らされ、鮮血にまみれたヒメグマが、木に張り付けにされていた。小さな悲鳴をあげ、瑞穂はヒメグマを木から降ろした。ヒメグマは、既に虫の息である。赤い血がヒメグマの体から滴り落ち、瑞穂の白い腕を真紅に染めていく。

瞳が光を失いかけていた。左腕が、無惨にも切り落とされている。斬り落とされている。傷口から骨が覗いた。深い切り傷や、銃で撃たれた痕、殴られた痣が体中にある。

瑞穂は、臍気な瞳を地面へと向け、血塗れになって放置されているヒメグマの左腕を拾い上げた。地面は辺り一帯、血に濡れている。ヒメグマの血だけではないようだ。人間の血も、含まれているだろう。すこし見ただけで、瑞穂には、それがわかった。

数メートル先には、もみ合ったような争いの跡が残っており、切り裂かれた人間の爪先が転がっている。

ヒメグマを、瑞穂は抱きかかえた。だがヒメグマは、瑞穂に、人間に触れられるのを

拒否するかのようには暴れた。恨みと、怒りと、悲しみに満ちたヒメグマの瞳から目をそらして、瑞穂はリングマに、ヒメグマを預けた。

「いっこう。戻らなきや」

野生のリングマ達の元へ向かって、瑞穂は駆け出した。リングマも、ヒメグマを抱きかかえながら後を追いかける。背中の方から、ヒメグマの狂ったような叫び声が聞こえてきた。

闇だ。再び、襲ってきたんだ。あの時と同じだ。逃げられないんだ……。

狂気と殺気に満ちた、ヒメグマの叫び泣きから逃げるように、瑞穂は足を早めた。

……殺してやる。殺してやる……。

泣きわめくヒメグマの叫びが大きくなっていく。瑞穂はただ、俯き、走ることにしかできなかつた。唇を噛みしめ、鮮血のように赤い夕焼けへと、瑞穂は駆け続ける。

解放されていく。瑞穂の心の中にある、何か、解き放たれていく……。

だが、今は、どうすることもできない。

哀しき強襲

天井の窓から、夕焼けの赤い光が注ぎ込んできた。

大広間の中央に位置する食卓の上に、色取り取りの食事が並べられている。

暗い面持ちで席に着き、サリエルは溜息をついた。3日前の、あの喧嘩騒動から、妹とは口を利いていない。妹と話せないことが、こうも辛いことなのか。

サリエルは憔悴しきった心を抱きながら、天井を見上げ、もう一度、溜息を吐いた。

ラツイエルが——妹が無表情のまま、サリエルの真正面の席から、兄の姿をじつと見つめてくる。思わず、サリエルは俯き、目の前に置かれている前菜を口に含んだ。いつもとは違う味がした。決して美味ではない。だが、味の付け方が、とても繊細だった。

知らぬ間に、ラツイエルと目が合っていた。不安げに兄の顔色を伺い、妹は訊いた。

「あの、兄上様……」

3日ぶりに聞く、妹の声である。不意に胸が熱くなった。

「今日の夕食は、私がつくったのですよ」

やはり、そうか。喉元まで出かかった言葉を、サリエルは飲み下した。

「ほう……。どういふ風の吹きまわしだ？」

訊いてから、サリエルは己の愚問を恥じた。

理由など、解りきつていないか！ ラツイエルの表情が一瞬だけ不満そうに歪み、兄を睨んだ。サリエルは逃げるように視線をそらす。妹は悲しげに呟いた。

「私は、いにしへの慣習に従い、兄上様と、明日、殺し合いをしなければならぬのですから」

そんなことは、いまさら言われるまでもない。だが、こちらから訊いてしまった以上、仕方がない。

王家の子は、10歳になると——即ち大人となると、他の兄弟と殺し合いしなければならぬのだ。そうすることで、“あの力”を最も多く受け継いでいる人間が、生き残ることになる。数百年もの昔からある、しきたり……。決まり事なのだ。例外は許されないのだ。

「もう、その話はよそう……。そうか、ラツイエルがつくつたのか……。おいしい。おいしいぞ」

前菜を食りながら、サリエルは言った。ラツイエルが、はにかむように微笑んでいる。妹の笑顔を見るのは、久しぶりのような気がした。

和やかな雰囲気の中、レミエルが大広間に入ってきた。

「どうした？ レミエル」

「はい。派遣したハルパスからの連絡が途絶えています」

「どういうことだ？」

「何かアクシデントにあったものと思われます。それと……」

レミエルの浅黒い顔が、醜く歪んだ。

「渦巻島のファルズフが消息を絶ちました」

「裏切ったな……」

「おそらく」

拝跪して、レミエルは立ち去っていった。

それまで黙っていたラツイエルが口を開いた。

「兄上様。明日の朝食も、私がつくろうと思います」

頷き、サリエルは妹の顔を直視した。微笑んでいる。最後の笑顔かもしれない。

明日は、妹の10歳の誕生日なのだから。



いつもと変わりのない夜がやってきた。まんまるとした月が星空に浮いている。白銀の月の光が、血塗れの森の惨状を、余すところなく照らしていた。

死んでいる。死んでいた。光があっても、死に顔すら見ることができない。隻腕となったヒメグマを抱きながら、瑞穂は、母親であるメスのリングマの屍体を見つめた。

破裂している。辺りに鮮血と肉片を撒き散らし、屍体は殆ど原型をとどめてはいない。微かに火薬の匂いがしている。“炸裂弾”か……。瑞穂は直感で、リングマ達に使われた兵器を思い浮かべた。

炸裂弾とは、体内で弾頭が爆発を起こすという、残虐な殺戮兵器のことである。旧世紀の世界大戦時に開発されたらしいが、詳しいことはわかっていない。チョウジタウンの平和資料館に幾つかが展示されていたので覚えていたのだ。

辺りの木には、血糊がこびりつき、吐き気のするような死臭が蔓延している。

似ていた。瑞穂は思いだしていた。かつての自分の体験を。6年前の惨劇を。あの時も、リングマの屍体は破裂していた。普通では考えられないほど、四散していたのだ。あの時のリングマにも炸裂弾が使われていたのだろうか。

共通点は他にもある。どちらの事件も、犯人は体にタトウをしていた。そして、事件が起こることを、あらかじめヒメグマが予知していた……。

辛い沈黙の時間が過ぎた。言葉も出さずに、瑞穂の腕に抱かれたヒメグマは目を見開き、現実を直視している。耳をつんざくような叫び声の後、瑞穂は凄まじい衝撃に弾き飛ばされ、その場に倒れた。母親の無残な屍を目の当たりにしたヒメグマは、狂ったように瑞穂の腕を振り払っていたのだ。

片腕を失っているからか不器用に近づき、辺りの地面に散乱した母の屍体、肉片を掻き集めた。ぐしゃぐしゃのミンチの化け物のような肉片を抱き潰し、ヒメグマは泣き、叫き続ける。

生臭い血にまみれたヒメグマを見ていられなくなり、瑞穂はその場を立ち去った。

野生のリングマ達を見渡す。

……既に死んでいたリングマが12匹。瑞穂の治療中に死んでしまったリングマが2匹。瑞穂の治療によって一命を取り留めたリングマが13匹。深い傷を負っていないリングマは皆無だった。

ゆかりの近くに座り込み、瑞穂は訊いた。

「どう？ ユユちゃん。落ち着いた……？」

何度訊いても、ゆかりは何も答えてくれない。寝袋に身を包み、怯えたように震え続けているだけだ。謔言のように、何かを呟いているが、声が小さくて聞き取れない。

ゆかりの傷も酷いものであった。左太股に、刃物ですつぱりと斬ったかのような深い

傷がある。

無言のまま立ち上がり、瑞穂は周りの様子を見つめた。野生のリングマたちが騒がしい。無理もない。首領格のリングマが殺されてしまったのだから。いや、本当に殺されたのかどうかもわからない。それくらいに、屍体が散乱していたのだ。

「あの、ナゾちゃん……」

瑞穂は、木の枝の上に立って月の光を浴びているナゾノクサに話しかけた。振り向いて、ナゾノクサは枝から飛び降り、瑞穂の正面に座った。月の光を全身に浴びたおかげで、背中への傷は完全に癒えている。

「どう……しよう。こんなことになるなんて……。非道いよ。酷すぎるよ……」

ナゾノクサは、無表情のまま小さく頷いた。どこか遠くを見つめているような目つきだった。

その時、背後から、リングマとグライガーが近づいてきた。グライガーは俯き、瑞穂の胸の中へと飛び込んできた。泣いている。よほど恐い思いをしたのだろう。リングマは悔しそうに唇を噛みしめ、月を仰ぎ見ているだけだった。

近くから、感覚的には遠くから、母を理不尽に惨殺されたヒメグマの、狂った叫び声が聞こえてくる。噛み砕く音。吐き戻す音。何かを飲み込んでいるような不気味な音

「なに？ 今の音……」

瑞穂は不安を感じて、立ち上がった。音のする方へと駆ける。

立ち止まり、息を呑んだ。胸に抱いていたグライガーが、驚いて首をすくめた。小さな悲鳴をあげると、瑞穂は足下が震えだすのを抑えきれなくなった。

「ヒメグちゃん……なにを……なにしているの……う？」

腐敗臭を発している、ぐしゃぐしゃな屍肉を、ヒメグマは貪り喰らっていた。眼に狂気の色が見てとれる。狂っていた。母親を惨殺された衝撃で、狂っているのだ。

怯え、グライガーが瑞穂の腕の中で震えている。ナゾノクサは不快な表情で、眼を背けていた。

呻き、のたうち、火がついたようにヒメグマは母の屍肉を吐き戻す。口元が真紅に染まっている。再び、片腕だけで屍肉を驚掴みにし、喉の中へ押し込む。吐き出す。屍肉を貪る。涙を流し続けながら、ヒメグマはその行為を繰り返した。

瑞穂は、そのまま力なく座り込んだ。足の震えが治まる気配はない。

「お……お姉ちゃん……」

振り返ると、ゆかりが呆けたように立ちつくしていた。ふらつく足取りで、瑞穂の隣に崩れるように座りこみ、呟いた。

「ウチ……なんや、コワれてもうた……みたいや」

聞きながら、瑞穂は何も言えないでいた。黙って、俯き、体中の震えに耐えるしかなかった。リングマは、母の屍肉を喰らい続けるヒメグマを羽交い締めにして、取り押さええている。

「もう眠られへん……。夢、見そうや……。笑顔」

腹の中の、胃液にまみれた屍肉が、ヒメグマの口から溢れ、吹き出している。

小首を傾げて瑞穂は、ゆかりの顔を見つめた。ゆかりの口から、不気味な抑揚を持つて発せられた“笑顔”という言葉の意味が分からなかったのだ。

酸っぱい臭いが辺りに広がってくる。顔を両腕に押しつけ、ゆかりは、むせび泣き始めた。

「笑ってたんやで……。アイツら。あんな、非道いことして、笑ってたんやで……」

腹から吐き戻された汚物の中でヒメグマは、リングマに抵抗し、暴れている。

現実から逃げるように血糊に満ちた地面を見つめ、ゆかりは語った。“炸裂弾”が命中して、リングマ達が次々と破裂し絶命していく中で、男達は笑っていたのだという。

笑っていた。その事実だけが、瑞穂の頭の中に響いた。動悸がしてきた。胸の奥で、ばくばくと音がする。

「いやや……。こんな、もう嫌や……。う……。う……。うちもオカシクなる。この

ヒメグちゃんみたいに、狂って、狂って、オカシクなつて死んでしまふんや——」

ヒメグマは動かなくなつていた。失禁し、眼を剥いたまま悶絶していた。汚物が口に溢れている。ゆかりはヒメグマを見つめ、小さく呻き、身を振ると、ヒメグマと同じように嘔吐した。

瑞穂の瞳が、どこか遠くを見つめているようだった。普段、絶対に見せることのない、怒りに満ちた表情をしていた。

非道い。非道いではないか。瑞穂は思った。許せない。絶対に許せない。どんな理由があつても、こんな非道いことをする人は許せない。——殺してやる。殺してやる。

布中でゆかりの口元の嘔吐物を拭い取つてあげながら、瑞穂は心のどこかが音をたてているのを感じていた。殺してやる——そう、太いゴム紐が、引っ張られて勢いよく切れるときのような音が。

ブチッ、つと。



「ハルパス様……御加減はいかがでございましたか」

手下の男が聞いてきた。ハルパスは、ヒメグマによつて切り裂かれた足先を見つめたまま、叫んだ。

「大丈夫だ。明日の朝、森を出発する。あいつらにも伝えておけ」

敬礼し、手下の男は、すぐ側の手下達の集まりへと走つていった。

悔しさにハルパスは身を奮わせていた。油断した。子供だと思つて、甘く見ていた。それがこのザマだ。見事に爪先を切り裂かれ、そのせいで帰投の予定が大幅に遅れてしまった。救援を呼ぼうにも、通信機もヒメグマによつて破壊されてしまい、どうしようもできないでいるのだ。悔やもうにも、悔やみきれない——

殺気だった。あのヒメグマの眼に宿つていたのは、殺気以外の何ものでもなかった。

もう、そのことは忘れよう。溜息をつき、ハルパスは自分に言い聞かせた。どちらにしろ、あのヒメグマは叩き伏せ、片腕を少しずつ切り落とた後、木に張り付けにした。今頃は、腐れ死んでゐるはずだ。惨めに野垂れ死んでゐるはずだ。

顔を醜く歪めて、ハルパスは豪快に笑つた。——ざまをみる。吹き出すように笑い続けた。焼いた肉を手にとって、歯で食いちぎり、飲み込む。あんな事は、忘れてしまえばいい——

その時、地面が揺れた。爆音が響く。閃光が辺りを眩しいほどに照らした。

「なんだ！ 何が起こった！」

ハルパスは近くに置いてあった、炸裂弾をこめた施条銃を手に取り、叫んだ。爆発の起こった方を見やる。ハルパスは、驚きで目を見開いていた。

少女だ。水色の髪を左右で束ねている、幼い少女が、爆発の光に照らされている。逆光で表情までは、よく見えない。肩を奮わせ、佇んでいた。

「子供……だど？」

首を傾げながらハルパスは少女を見つめた。背後の闇にはリングマが見える。破壊光線をいつでも撃てる体勢をとっていた。

少女が軽やかに手を振り上げる。闇の奥から破壊光線が飛んできた。

ハルパスはとっさに破壊光線を避けた。背後で森の木々が爆音を響かせて吹き飛ばす。爆発の閃光が少女の表情を一瞬だけ照らした。少女の顔を見て、身が震えるのをハルパスは感じた。

少女は幼いながらも、可愛らしく端正な顔立ちをしていた。ただ、その中で、眼だけが異様だった。怒りに満ちている。単なる怒りではなく、狂気を帯びているのだ。

言葉も忘れ、ハルパスは少女の瞳に釘付けになっていた。まるで、金縛りにあつているかのようなだ。少女が息を弾ませているのが、遠くからでも空気のざわめきで感じ取れる。

「殺してやる。殺してやる。殺してやる……」

眩いている。いつしか、頬に汗が浮いている。瞳には涙が浮いている。歯を食いしばりながら、少女はハルパスを睨み付けている。

ハルパスの部下達が、戦闘の構えをとっていた。おぼつかない足取りで、ハルパスは部下達の集まりに身を寄せた。

「ハルパス様。ご無事で……？」

「ああ。はやく……あの子供を追い払え」

思い出した。リングマを殺し、逃げる途中で出会った少女だ。ハルパスの背中を、冷たい汗がつついた。

少女の周りを炎が囲った。もの凄い速さで、こちらへと突っ込んでくる。いつのまにか少女がポニータに乗っていることに気付いた。ポニータは火炎を放射してくる。

部下が施条銃を持ち上げ、一斉に炸裂弾を撃ちだした。ポニータは跳び上がり炸裂弾を避ける。少女はモンスターボールをとりだして、投げつけた。ボールが開く。ナゾノクサが飛び出して、はっぱカッターを連射した。施条銃が切り刻まれた。部下達が恐れからか、ハルパスの背後で固まっている。

少女が地面に降り立った。上空からグライガーが飛んできて、少女に木刀を手渡した。

燃えさかる森の光を背に受けて、少女はハルパス達を見つめている。

空を見上げ、少女はモンスターボールへと、ポケモン達を戻した。

「なんのつもりだ……?」

ハルパスは少女を睨んだ。少女の周りには敵しかいない。味方はすべてモンスターボールの中だ。

「殺してやる」

異様な殺気を放つ瞳をハルパスへ向け、少女は木刀を手に、身構えた。

「ポケモンをつかわずに、俺を殺せるとでも、思っているのか?」

呆れたように、ハルパスは訊いた。相手が独りになったことへの安堵からか、少しばかり高圧的な態度をとっているようだ。なんとといっても、相手は、幼い少女が独りだけなのだ。

「……守る」

少女は呟いた。ハルパスは、なんといいかわからずに黙っている。

「傷つくのは、私だけでいい。私以外は、誰も傷つかなくていい。もう、嫌なんです。だから……誰も殺させない。誰も、傷つかせない。誰も犠牲にしたくない。痛みを受けるのは、私だけで、もう、十分。だから、はやく、私を殺してください。はやく、殺してやる……」

狂っているのか……？ ハルパスは暗闇に染まった少女の全身を見つめた。

少女は木刀を振り上げ、斬りかかってきた。ハルパスは避け、少女の腹に蹴りを打ち込んだ。だが、彼は目を疑った。目の前に少女の姿は既になかったのだ。確かに、少女の小さな腹を思い切り蹴りつけた筈だった。

首を傾げていると、背後に、おぞましい気配を感じた。ハルパスは急いで振り向き、眼を剝いた。少女は、月の放つ冷たい光を浴びて、何事もなかったかのように立っている。足下では、数人の部下がのたうちまわり、次々と倒れていた。死んではいけない。急所がギリギリのところですでれているのだろう。それが、少女に残された最後の正気であるかのように。

無事だった部下は、すぐさま短銃を構えたが、撃つ暇もなく、少女の木刀で打ち倒された。あとにはハルパスと、少女だけが残された。

ハルパスは後ずさった。少女の、小さな体のどこに、大の男を何人も打ちのめす力が隠されているのだろうか。

少女はハルパスへと歩み寄り、手に持った木刀を握りなおした。とつさに短銃をとりだし、ハルパスは少女へ発砲した。銃声が響く。少女は目にも止まらぬ速さで弾を避け、木刀でハルパスの小手を打ちつけた。短銃が地面へと落ちた。少女はなおも、ハルパスの体を、木刀で打ちつけていく。

骨の折れる音が聞こえた。体勢を崩して、思わずハルパスはその場に倒れた。木刀の叩きつける音は止まない。森の静寂は、男の悲鳴に掻き消されていた。再び、骨が折れると音が聞こえた。悲鳴も聞こえる。命乞いをしているのか。許すものか。悲鳴は泣き声に変わった。許すものか。

浅黒い皮膚から血が滲み、鮮血が吹き出した。少女の白い肌が、男の血の色に染まっていた。木刀が空を裂き、男の体を容赦なく打ち続ける。

泣き声すら聞こえなくなった。木刀が、断末魔の悲鳴をあげ、根本から折れた。少女は折れた木刀の先端を拾い上げ、ハルパスの脇腹に突き刺した。火をつけたように、ハルパスは泣きわめいた。よろよろと立ち上がり、拳で殴りつける。ハルパスの拳を軽くあしらひ、少女は膝を、男の股間へと突き上げた。

最後の悲鳴だった。ハルパスは口から茶色い泡を吹きながら、倒れた。悶絶した男の身体を、少女は忌々しげに、踏みにじった。

殺してやる。殺してやる。頭の奥で、自分の中の怒りが、囁いてくる。

これでいいのか？　これが、自分の望んだことなのか……。少女は思った。体中から、生温い汗が浮かんでくる。

これが、自分なのか。私のなのか。私の本当の姿なのか。違う。こんな私じゃない。

男を踏み続けていた足を止め、少女は震えたように身を振り、後ずさった。こんな、私じゃない。こんなことをしては、いけない。冬我くんは、私が私のままでいることを望んだのに……。

怯え、肩を奮わせながら、少女は男達の元から逃げるように去っていった。



棄てられの自我に

「サリエル様」

レミエルが背後から、妹の鮮血に染まったサリエルを呼んだ。全身を鮮血に染め、白目を剥いて死んでいるラツイエルの亡骸を、サリエルはそつと床に寝かせた。

「どうした、レミエル」

太い眉を動かして、サリエルの様子を伺いながら、レミエルは言った。

「連絡が途絶えていたハルパスが、昨夜に見つかりました。任務には成功したようですが、何者かに襲われたようで、ひどく怯えていて、もう使いものにはなりません」

侍女に体中の鮮血を拭かせながら、サリエルは冷たい瞳を宙へ向けた。

レミエルは拝跪して、ラツイエルの小さな屍体を抱き上げた。見開いている白目を隠すため、彼は指で、ラツイエルのまぶたをおろした。赤い血が数滴滴り落ちる。

ラツイエルの銀色の艶やかな髪が、真っ赤に染まっていた。

表情を歪め、レミエルは屍体から眼を背けていたが、思い出したように呟いた。

「それと、サリエル様。射水 氷という名の女について調べたのですが……」

一瞬にしてサリエルの顔色が変わった。レミエルの方に向き直り、唇を小さく噛んで

いる。

「何か、わかったのか？」

「いえ……。シマナミタウンという街の出身であるということ以外は、あまり……」

眼を細め、考える風な素振りしながら、サリエルは呟いた。

「シマナミタウン……？ 聞いたことのない名前だな」

「そうです。この、シマナミという街は、5年前に消滅しているのですから」

不思議そうに小首を傾げ、サリエルは訊いた。

「消滅した……？」

「正確には、地図上から姿を消したと言うことです」

「何故？」

申し訳なさそうに、レミエルは首を横に振った。

「どういう経緯だったかまではわかりませんが、その女は数ヶ月前まで、ロケット団に所属していたようです」

「それは、知っている。……そして、あの女は、人間ではない……」

それきり、何も言わずに、サリエルは血生臭い部屋を後にした。レミエルが小さく頭を下げている。鮮血を洗い流すためにシャワーを浴び、タオルで身体を拭きながら、妹のことを思い浮かべた。自分が王となるために殺してしまった、妹のことを。

兄妹はもういない。皆、死んだ。6人いた兄妹のうち、2人は自分が殺した。それが決まりなのだ。数百年も続いた、しきたりなのだ。

頬の黒いタトウを、指で撫でた。痛いほどに、熱いものが心の奥に入り込んでいた。

テーブルの上を見つめる。手つかずのまま、朝食が放置されている。妹のつくった最後の食事――

手を付ける気にはなれなかった。タオルを羽織ったまま、サリエルはゆつくりとテーブルに近づいた。トーストとコーンスープ。既に、冷めている。

拳を握りしめ、歯を食いしばり、サリエルは吠えた。震え、小さく蹲った。侍女が、驚いて近づいてくる。手で侍女を追い払うと、サリエルは床を激しく叩きつけた。

死の間際に、妹は、ラツイエルは、サリエルの耳元で小さく囁いていた。妹の最後の言葉が、サリエルの脳裏をよぎり、染みついていく。ラツイエルの最期の言葉が。

……兄さんは、滅びの救世主です……。

「ボクが……滅びのメシアだって……？ 滅びの救世主だって……？」

……だから、兄さんは死んではいけないんです……。

「死ねるものか……。お前を殺してまで挿んだ生存だから……。死ねるものかよ……。」

……兄さんは、不幸です。最後の最後まで、背負わなければならぬものがあるから……。

「不幸だよ。お前を失ったボクは、今、一番不幸だよ……」

……兄さんは、私を殺せませんでしたね……。兄さんは、結局、私を超えられなかった……。

時がとまった。衝撃に打ちのめされたように、呆然とサリエルは呟いた。

「ラツイエル……どういう意味だ？　ボクは、お前を殺した。ボクは最初から、お前を超えていた。なのに、ボクがお前を殺せなかったとは、どういう意味だ？　ボクが、お前を超えられなかったとは、どういう意味だ？」

不意に、妹に、空の彼方から笑われたような気がした。サリエルは立ち上がり、妹の亡骸が安置されている場所へ走った。

妹は死んだように眠っている。いや、眠っているかのように死んでいた。

自分が殺したのだ。だが、自分は妹を殺せなかった……。？　どういう意味だ。ラツイエルの屍体を舐めるように見回して、サリエルは戦慄した。

「今すぐ……この屍体を捨てろ！　今すぐだ！」

叫きながら、サリエルは逃げるように駆けていた。妹の亡骸が、死んだ直後とは違い、かつてないほどの微笑みを湛えていたのだから。



目が覚めたときには、もう昼間になっていた。

悪い夢を見ていたような気がした。瑞穂は背伸びして、隣で眠るゆかりを見つめた。

夢ではなかった。鮮明に覚えている。思い出すと同時に、背筋が凍った。あの時の、暴走したときの自分が、自分でない別の者のような気がしてならない。確かに、あの時、自分は、自分であることを捨てていた。冬私の望みを、あつさりと裏切ってしまった自分が情けなかった。

無力なのだ。結局、人を傷つけただけで、誰を守れることも、救うこともできなかった。自分は、自惚れていたのか。お互いを傷つけ合うことしかできないのか……。

ゆかりが目を覚ました。辺りを見回しながら立ち上がり、瑞穂の顔を眺める。瑞穂は無理に微笑んで見せた。途端に、ゆかりの頬が引きつった。

「ユユちゃん……？」

何も言わずに、ゆかりは瑞穂から目をそらした。膝が小刻みに震えていた。怯えている——瑞穂は肌で感じた。もしかしたら……ゆかりは見ていたのかもしれない。自分

でなくなった、自分の姿を。瑞穂であることを捨てた、瑞穂の姿を――

ゆつくりと、瑞穂はゆかりの肩に手をかけた。ゆかりはビクリと身体を震わせ、恐怖に満ちた瞳を瑞穂に向けた。

「瑞穂お姉ちゃん……どないしたん……？」

瑞穂お姉ちゃん。ゆかりは、たしかに瑞穂のことを、そう呼んだ。

そんな呼ばれ方をされたのは初めてだった。それまでは、普通に、お姉ちゃん、と呼ばれていたのに。

思い過ぎかもしれない。自分に言い聞かせ、瑞穂は訊いた。

「もう、大丈夫……？」

引きつった笑顔をつくって、ゆかりは頷いた。

「だ、大丈夫やで……。瑞穂お姉ちゃん。だいぶ、落ち着いたわ……」

瑞穂の手を振り払うかのように、後ずさり、ゆかりは荷物を整理し始めた。

やはり、見たのか？ 暴走した自分の姿を、ゆかりは見てしまったのか？

俯き、瑞穂はリングマをモンスターボールから出した。驚いた様子で、ゆかりが振り向いてきた。思わず目が合った。

やはり怯えている。何事もなかったかのように、視線をそらして、ゆかりは荷物の整理を再開した。

瑞穂は暗い面持ちで、リングマに囁いた。

「リンちゃん……。やっぱり昨日の夜に、私、おかしくなっちゃったのかなあ……。ユウちゃんが見てたみたいなの。昨日の夜の私を……。みんなは恐がってなかった？」

リングマは曖昧に頷き、呟いた。

……姉さんが怒ると、物凄く恐くなるのは、この間までボクしか知らなかったからね……。

「それじゃ、やっぱりみんな私のこと、避けてる……？」

……それはないよ。あらかじめボクが、そのことは、みんなに説明しておいたから。姉さんは滅多に怒らないけど、いったん怒りだすと死人がでるぞ、ってね……。

「リンちゃん。それは、言い過ぎだよ……」

……そうかなあ？ 昨日、モンスターボールの中から見てたけど、凄かったよ、姉さん……。

溜息をついて、瑞穂は肩を落とした。

「やっぱり、もう……。その話はやめて……。おねがい」

森の奥から、ガサリと音がした。すぐさまリングマは身構える。瑞穂は、茂みの中を凝視した。

「ヒメグちゃん……！」

森の茂みの中からあらわれたのは、ヒメグマだった。狂い、悶絶したあと、ヒメグマは死んだように眠り続けていたのだ。

だが、なんのために？ 片腕だけで茂みをかき分け、わざわざここまで来たのだろうか。

「どうしたの……？」

切り落とされていない方のヒメグマの腕に、瑞穂は手を差し伸べながら訊いた。瞬間、手に激痛が走った。瑞穂は自分の手を庇うように押さえた。手の甲から血が滲み出ている。爪で引っ掻いた痕が、しっかりと残っていた。ヒメグマが、瑞穂の手の甲を切り裂こうとしたのだ。

血が滴る手の甲を押さえながら、瑞穂は慌てたように呟いた。

「痛い……どうしたの？ どうして……こんなことするの？」

ヒメグマの表情が歪み、一瞬にして変貌した。

瑞穂は息を呑んだ。隣のリングマが、固唾を呑んでヒメグマを見つめている。牙を剥きだし、目をつり上げ、瞳の奥に凶暴な色を帯びたヒメグマの顔があった。それまでの、可愛らしく、優しげなヒメグマの顔が、醜く、おぞましい狂気に満ちた顔に変貌したのだ。

「ひ……ヒメグちゃん……」

ヒメグマは叫んだ。牙を突き立て、猛り立った。

……人間、ミンナ殺した！ 人間、嫌い！ お前、人間、デテイケ……！ 人間はみんなを殺した！ 人間なんて嫌いだ！ お前、人間だろ？ はやく出ていけ！ 出ていけ。人間なんて、はやく、この森から出ていけ！

「……………うん……………」

両手で顔を覆い、瑞穂は小さく、何度も頷いた。反論など、できなかつた。ヒメグマへの怒りで唸っているリンググマも、すぐにモンスターボールに戻した。

「行こう……………ユユちゃん……………」

背を向け逃げるように立ち去ろうとする瑞穂達に、ヒメグマはなおも罵声を浴びせ続けた。

……出ていけ！ 人間出ていけ！ 死ぬ！ 消えろ！ 生き物のクズ……！

ゆかりの手を引いて、瑞穂はいつしか駆けていた。ヒメグマの罵倒が、背後から迫ってくる。一刻も早く森を抜けよう。その一心だった。ゆかりは、怪訝そうな目つきで瑞穂を見つめている。

自分は無力だ。

誰も守れない。誰も救えない。

挙げ句の果てに、一瞬だけといえども、自分すら捨ててしまった。そして、自分を捨

てて、何があつた？ 結局、何もできなかつたではないか。

……クス！ 生き物のカス！ 生きる価値もない、ゴミ！ 人間め……！

ヒメグマの言葉が痛い。それでも、やがて、聞こえなくなつた。森を抜けたのだ。前方にはコガネシテイへの細い一本道が続いている。

目を閉じ、胸に手を当てて、瑞穂は誓つた。もう、二度と、絶対に自分を見失わない。もう、二度と、絶対に自分であることを捨てない……。

……自分は無力なのだ。だから、自分を見失つた。自分の力の及ぶ範囲で、藻掻くしかないのか……。

今は、ただただ、力のない自分を悔いるしかなかつた。

ヒメグマの叫びが、ここまで響いてきた。間違ひなく、その声は狂っている。

「もう、私は、絶対に自分を見失わない……」

そう、絶対に自分を見失わない。冬我は、それを望んだのだ……。もちろん、自分も。



#9 侵蝕。

偽りの私が見た黒

遠い空の海で、笑みもなく佇む君。

波に揺られて、風と戯れて、時は漂う。

私が、舞い降り、話しかけても。

壊れた、眼差しのまま、何も言わないのは、どうして？

割れた硝子を見つめ、自分を眺める君。

嘘でかためて、幻想に泳いで、我を偽る。

誰かが、恐れて、語りかけても。

怯えた、微笑みを浮かべ、逃げてしまうのは、どうして？

蝕まれた記憶に、自分を閉じこめて、君はどこまで、駆けるのか
枯れ果てた思い出に浸るだけじゃ、駄目だと気付いて――



「……と、言うわけで、超人気アイドル、此花みなとちゃんの新曲、『霞んだ記憶』でした。ところで、この曲は、みなとちゃんが自分で作詞したんだってね？」

「はい。そうなんです。……実は、数年前の自分にあてたメッセージでもあるんです」「数年前の自分って？」

「今でこそ、楽しく仕事をさせてもらっていますけど、昔はいろいろあつて……」

「へえ……。今をときめく、みなとちゃんにも、そういう辛い時期があつたんだね」

「誰にでもあると思います。でも、そういう時だからこそ、逃げずに立ち向かうことが必要だと思うんです」

「すごいね。まだ10歳なのに、とてもしっかりしているよ。……おっと、今日はここでお別れ。司会は、塩谷ポン太。ゲストは、此花みなとちゃんでした。それでは、また来週！ ばよならさーん！」

此花みなとは、ラジオ番組の収録を終え、ラジオ塔の外へと出た。

疲れた様子で、額に冷たい汗を浮かべ、誰でも簡単にできるような、軽い溜息をついた。救いを求めるかのように、みなとは夜空を見上げる。厚い黒雲に阻まれて、星はお

ろか、月すらも見えない。墨を流したような、黒々とした闇が延々と広がっているだけだ。

小さく息をはき、みなとは俯き、胸元の辺りをゆっくりと撫でた。

そう、霞んだ記憶。この歌を聴く度に心が重くなり、気分が憂鬱になる。辛いときこそ逃げてはいけない。確かに自分はそう言った。だが、あの時、自分は惨めに逃げたのだ。

なんでこんな詞を書いちゃったんだろう……。みなとは悔いていた。唇を噛み、闇を見渡す。

結局は嘘なのだ。この詞は。そして、もしかしたら、今の自分の存在すらも、偽りかもしれない。不安定な自分に怯えながら、それでも私は、現実に流されて生きていくしかないのだろうか……？

そんな筈はない。私は私だ。自分の意志で生きているんだ。誰かの思惑に乗せられていたわけではない。

頭の中の不安要素を必死に否定するため、みなとは首を激しく横に振った。

「いよいよ明日か……」

突然、背後から聞こえた声に、みなとは驚いて振り向いた。ラジオ塔を前に、暗がりの中で黒尽くめの男が2人、眩き合っているのが見える。みなとは思わず後ずさった。

怪しむように2人の男に目を凝らす。相手は、みなとの姿には気付いてはいないよう
で、喋るのをやめようとはしなかった。

「そうだな。明日ですべてが決まる。すべてが……」

「楽しみだな」

「ああ……」

語り合いながら黒尽くめの男達は、ネオンの灯りが眩しいほどに輝く街道へと歩き出
した。みなとは、じつと男達の背中を見つめている。

視線を感じたのか、黒尽くめの男の1人が、みなとの方へ振り向いた。みなとの肩が
強張った、全身が凍ったように動かなくなつた。瞳だけが、男を凝視している。

若い男だつた。サングラスをかけているので、表情までは読みとれなかつたが、白い
首筋などを見れば、端整な顔立ちをしていることがよくわかつた。

みなとは、ごくりと唾を飲み込んだ。足下が、寒々と震えている。この街、コガネシ
テイでは、真夜中に街をふらついているような男と目が合うことは、そのまま死を意味
すると言つても過言ではないのだ。ましてや、みなとは、巷で人気のアイドルである。

だが意外なことに、サングラスの男は、すこし微笑んだだけで、みなとから視線をそ
らした。歩いていく。男達は、ネオンの眩い灯りの奥へと消えていった。

男達の姿が見えなくなると、みなとはホツと胸をなで下ろした。ヘッドライトの光が瞬く。みなとは眩しそうに目を細め、こちらへと走ってくる白い車に目をやった。白い乗用車は、みなとの前で停車した。窓が開き、ドライバーは、みなとの方へ顔を出した。

「ごめんね、みなとちゃん。遅れちゃって」

ドアから身を乗り出して、マネージャーが言い訳がましく、遅れてしまったことを謝った。

「大丈夫です。それに私、そんなに待つてませんよ」

みなとは作り笑いをして、車の後部座席に座った。

エンジン音が響き、車は、騒がしいコガネシティの街を静かに駆けていく。街の騒音は、分厚いガラスに遮られて車内には聞こえない。窓の外を眺めながら、みなとは思いついて出していた。そして、考えた。

彼の——サングラスの男の微笑みの意味を。



同じ頃。

此花みなどが、明日開催されるコンサートライブの打ち合わせの為に、コガネ中央ホールへ向かう車中で、溺れるような苦しい仮眠をとっている頃。

コガネシティ郊外の自然公園。暗く静まり返った園内で、ゆかりは見つめていた。ベンチの上でタオルにくるまりながら、寝息をたてている瑞穂の、可愛らしい寝顔を。

公園には、瑞穂とゆかりの姿しか見当たらなかった。小さな虫の集っている頼りなげな灯火の光を浴びて、瑞穂の顔は、いつもよりも更にも白く見えた。

細く小さな指で、ゆかりは瑞穂の柔らかそうな頬に触れた。瑞穂は声にならぬ寝言を呟いて、寝返りをうっている。

ゆかりは思い詰めたような表情で、瑞穂を起こさぬように、静かに立ち上がった。草原の辺りを、遠い眼で見つめている。ゆかりは、数日前の事件を思い起こしていた。

地獄を見た。確かに、自分はその時、地獄を見たのだ。森の奥、瑞穂が木刀で、自分を襲った男達を殴り倒していくのを。吠え、狂ったように、意味不明なことを言い、木刀が折れるまで男達を叩きつけていた。

確かめるかのように、ゆかりは俯いて、瑞穂の小さくて愛らしい寝顔を見据えた。信じられない気持ちの方が強かった。自分より年上とは言っても、瑞穂は所詮子供なのである。

だが、現実に瑞穂の小さな掌には、木刀で男達を殴り倒したときの痣が薄く残っている。

る。間違いない。綺麗な水色の髪を振り乱しながら、男達を殴り倒した少女は、穂——
瑞穂なのだ。

そう思う度に身体が震え、声が出なくなる。

あの事件以来、ゆかりは、瑞穂に話しかけられる度に身を強張らせ、引きつった笑みを見せるしかなかった。瑞穂は、ゆかりの態度の変化に気付いているはずだ。誰も何も言わないが、重苦しい雰囲気は確かにある。

そんなのはもう嫌だ。今までと同じように、瑞穂と接したい。心の中で、ゆかりは叫んだ。だが、心が瑞穂と接することを拒んでいるのも、また事実なのだ。

二の腕で、涙の浮いた眼を擦り、ゆかりは呆然と辺りを見渡した。息を呑む。言葉では説明できないような、懐かしい衝動が、ゆかりの身体を突き抜けていた。

「……お姉ちゃん、出会った場所や……」

ゆかりは、誰にも聞き取れないような小さな声で呟いた。

瑞穂と初めて出会った場所が、今、自分達が夜を過ごしている自然公園だったのだ。あの時、この……ゆかりの目の前にあるベンチで、寂しそうに、疲れたように瑞穂は眠っていた。まだ寒い時期だった。ゆかりは声をかけて、瑞穂を起こし、ビスケットを一枚、分け与えてあげた。余程お腹が空いていたのだろう。ポケモン用のビスケットを、なんの抵抗もなく食べてしまったのだから。

ありがとう。瑞穂はそう言った。頬が熱い程に火照ったのを、ゆかりは今でも覚えて
いる。嬉しかったのだ。どうして、その一言だけで嬉しく思ったのかはわからない。赤
い夕焼けを背景に、微笑んだ瑞穂の優しい顔は、ゆかりの記憶に今もお焼きついて
消えることはない。闇の中、病院の屋上で飛び降りようとした、ゆかりを救ったのは、瑞
穂の優しい笑顔だったのだから。

「お姉ちゃん……、優しすぎるんや。お人好しすぎるんや……」

その分、恐ろしかった。優しすぎるが故に、誰かを傷つけようとする者への怒りも激
しかった。ゆかりは、瑞穂の暴走を目の当たりにしていたのだ。

普段の、穏和で優しい瑞穂の面影など微塵も感じられなかった。鬼と言ってもいい。
鬼と言うに相応しかった。優しいが故に、感情を抑えきれなかった、哀しい鬼……。

瑞穂は滅多なことで怒るような少女ではない。少なくとも、自分自身のことでは怒つ
たりはしないだろう。強い子なのか……。ゆかりは思った。瑞穂は優しいながらも、強
い意志を瞳に宿らせているのだ。だからこそ、強いからこそ、すべてを独りで背負い込
んでしまうのかもしれない。当然、怒りも。

不意に、ゆかりは自分を情けなく感じた。瑞穂の優しさに守られているだけの自分が
悲しかった。甘えていて、いいのだろうか？ 本当は独りで生きて行かなくてはいけな
いのではないのだろうか？

胸の辺りが痛くなってきた。ゆかりは苦々しい表情で、駆け出していた。

今までずっと、瑞穂のことを、自分の姉だと思いこませてきた。甘えていたのだ。瑞穂にとつては、いい迷惑だったのではないか？ 優しすぎる瑞穂だからこそ、何も言わずに、姉の役を演じてくれているだけではないのか？

余計な考えが、次から次へと頭の中に浮かんでくる。心細さが、胸に湧いてくる。頭の中の考えを振り払うかのように、ゆかりは自然公園を抜け、コガネステイをひたすら走った。

いかかわしい男達が生ろじろと、走り続けるゆかりの姿を見つめている。数人の不良がゆかりへと近づいてきた。彼らの目には、不気味な色が浮かんでいる。ゆかりは立ち止まりもせず、チツと舌打ちすると、目にも止まらぬ速さで、大きく手を広げた男達の脇をすり抜けた。男達は驚いたように、ゆかりを振り向く。

「あんたらみたいなの、アホに捕まるウチやないで！」

挑発するかのよう舌を出し、ゆかりは男達を嘲笑い、叫んだ。いきり立ったように、数人の男達は大声で怒鳴りながら、ゆかりの後を追いかけていく。

ゆかりは、ニツと笑い、路地裏の闇に身を潜めた。男達が路地裏へと押し込んでくる。だが、そこに、ゆかりの姿は既になかった。

「ちよろいもんやな……」

あつさりと不良達から逃れたゆかりは、肩をまわしながら得意げに呟いた。夜のコガネシティなんて恐くない。なんといいっても、ゆかりにとつては住み慣れた街なのである。昔は、何回か危ない目にもあつていたが、それは、もう慣れっこになつていた。

暗い路地裏を、しばらく歩いて、ゆかりは急に立ち止まった。目の前には、濁つた灰色のビルがそびえ、黒雲に覆われた空へのびている。

ゆつくりと、ビルを見上げた。玄関の上に小さく「パレス・コガネ」の文字が読みとれる。マンションの名前だ。マンションは名前に似合わず、今にも崩れ落ちそうなほど、老朽化が激しい。

小さく、ゆかりは顔をしかめ、落ち着きなさに掌を動かしている。

真夜中なので、静かに、音をたてないように、玄関からビルの中へと入っていく。どういうわけか、エレベーターの電源が落ちていた。しかたなく、ゆかりは階段を駆け上る。足音が響いた。一段、一段と足をかけるごとに、心臓の鼓動が激しく高鳴る。

古い建物だった。気休めのような、細々とした灯りに照らされた周りの壁には、細かいひび割れが見える。

402号室に着いた。茶色のドアの前で、息を切らして、ゆかりは立ちつくしていた。ドアのノブに手をかける。動かない。鍵がかかっているのだ。ゆかりはしやがみ込み、

足下に置いてある萎びたチューリップの植えてある植木鉢の下に指を入れた。何か指に引っかかる。ゆかりは指を引いた。マリルのマスコット人形と一緒に、鍵が出てきた。

鍵を開け、402号室の中に足を踏み入れた。薄暗い部屋の中で、ゆかりは座り込み、辺りを見回した。自然に、深い溜息が出てくる。

「ウチ……帰ってきたんや……」

呟いて、ゆかりはドアの方を振り向いた。黄色い傘が置いてある。自分の傘が。座り馴れたソファ。ほとんど座ったことのない学習机。8の部分が欠けてしまっている、テレビのリモコン。桃色の絨毯。煙草の煙で汚れた壁に刻まれた、微笑ましい落書き――。見るもの、視界に入ってくるもの、すべてが懐かしかった。

帰ってきたのだ。自分の家に。かつて家族と共に過ごした、我が家に。

楽しい思いでは皆無に等しかった。どちらかといえば、辛い思い出の方が多い。それでも、懐かしかった。故郷に帰ってきたような感じがした。瑞穂と一緒に旅をしていたときにはなかった、別の心地よさがあった。

深く息を吸い込んで、ゆかりは床に寝転がった。天井を見上げ、手を広げた。

長い時間が流れた。目を見開いたまま、暗い窓の外を見つめている。

「何や……変やな……」

ゆかりは怪しむように呟いた。天井が……つまり五階が、やけに騒がしいのだ。忙しくなく足音が響き、カセットテープを回すような音や、話し声のような音も聞こえる。

耳を澄まして、ゆかりは立ち上がり、ふらつく足取りで、部屋の外へ出た。上の階が騒がしいのとは対照的に、下からは何の音も聞こえてはこない。ゆかりは階段を駆け降りた。

三階には、人の気配がなかった。チャイムを押しても、ドアを叩いても、何の反応もなかった。

誰もいない……？ あるのは、ただ、静寂だけだ。そう言えば、外からビルを見上げたときには、窓に明かりは見えなかった。いくら真夜中とは言っても、まだ12時だ。一部屋ぐらい明かりがついていても、よさそうなものだ。

このビルには、誰も住んでいない？ そうとしか考えられない。

更に不思議なのは、五階だ。足音がしていたのに、明かりがついていなかった。五階だ。五階には、誰かがいる。ゆかりは五階へ上がろうと、階段に足をかけた。

なにがあるんだ、五階には。不気味な足音、機械音、囁き声……。廃墟と言ってもいい古びたマンションの秘密が、五階に集約されているような気がした。

「こんな所で……こんな時間に……悪い子だ。悪い子供だ」

声が聞こえた。若い……青年といってもいい男の声が、階段に響いた。ゆかりは声の

する方を見つめた。白衣姿の若い男がいた。上方の階段に腰掛けて、笑っている。

驚き、身構えるゆかりを嘲笑うかのように、白衣の青年は立ち上がり、語りかけた。

「おっと……。驚かせてしまったようだ……。すまないね」

ゆかりは、いつでも逃げ出せる体勢をとって、青年に訊いた。

「あんた……。誰なん？　ここで、何してるん？　ここに住んどった人達は……」

「上で……。ゆつくり話そう」

大きくかぶりを振り、ゆかりは怯えたような目つきで、後ずさった。

「い……。いやや！」

青年は失笑した。腕を組み、勝ち誇ったように、ゆかりを見下ろしている。

「逃げられないよ。キミは」

青年の言葉に意味に気付いて、ゆかりはすぐに背後を振り向いた。黒服の男が3人、

ゆかりを取り囲むようにして立っている。

悲鳴をあげる暇もなかった。取り押さえられ、口をふさがれた。青年が、抵抗し暴れ

るゆかりに近づいてきた。懐から注射針をとりだし、ゆかりの腕に差した。薬を注入す

る。ゆかりは虚ろな瞳で、黒服の男を見て、続いて青年を凝視し、やがてぐつたりと倒

れた。

「連れて行け。上に」

青年は、黒服の男達に命じた。冷たく、残忍さを帯びた口調だった。



消えた妹

『計画は、順調。決行は、明日の正午。午前11時以降に「コガネ・パレス」の五階へ行け。詳しい資料を残しておく』

射水 氷は、その二行の文だけを確認し、ベッドの上に横になった。コガネホテルの、薄暗い部屋の中で、パソコンのディスプレイだけが、妖しく光っている。

来るべき時が、来たのだ。奴等にとって、最大の好機が。

半身を起こして、氷は部屋の周りを見つめた。真つ暗な窓の外には、星の輝きすらない。輝いているのは、獲物を狙う猛獣のような、自分の瞳だけ。

ギラギラと血を求めるように輝く瞳を眺め、氷は頭の中で、先程の考えを静かに修正した。

来るべき時が、来たのだ。奴等にとって……そして『私にとって』、最大の好機が。

パソコンの電源を消した。部屋の中は、完全な闇に包まれ、閉ざされた。闇の中で、氷は思い起こしていた。戻ってきたのだ。この部屋に。姉と最後に話した、この部屋に。

コガネホテルの303号室に……。

なぜ自分が、忌まわしい思い出のある、この部屋を指名したのかはわからない。いや、今までだって、自分は、あえて辛い思い出のある方へ向かっていた。復讐と称しながら、かつて自分を虐め抜いた、あの女に会おうとしたではないか。

なぜ、自分は、辛い道を選ぶのか。答えは見つからない。だが、その答えを見つけたとき、自分は幸せになれるのか？

……そもそも……私に幸せになる権利など、あるのか……？

固いベッドに身を沈め、氷は目を閉じた。眠気が、頭をぼやかせていく。頭の中に、あの男の……頬にタトウをした少年の言葉が響いた。

(……人間は、存在自体が罪なんだ)

では、自分はどうなる？ 朦朧とする意識の中、氷は考えた。償うことのできない罪を着せられ、挙げ句、人間でないモノにされた、自分はどうなる？

彼は……、あの男は間違っている。人間は、存在自体が罪なのではない。人間は、人間であることを意識したときから、延々と罪を背負ってきたのだ。一番最初に、人間が人間であることを発見した人間が犯した大罪を、今も人は知らない内に背負っているのだ。

そして、自分がいる。償われることのない罪のしわ寄せが、自分に降りかかってきた

のだ。

緩やかに意識が途絶えていく。しばらくし、氷の寝言だけが聞こえはじめた。

「私は……なんなの……？」

誰なのだろう。自分は。自分とは何なのだ――

答えは、誰も知らない。知るはずがないのだ。その答えは自分の手で見つけだすべきものだから。



目覚めたとき。ゆかりは消えていた。寝ぼけ気味の目を擦り、瑞穂は自然公園を見渡した。だが、朝日に満ちた広場には人の姿は見えない。

「ユウちゃん……？ どこにいったの……？」

瑞穂は、公園のベンチから跳び上がった。もう一度、念を押すように辺りを見回し、慌てたように時計を見た。9時24分だった。

腕を組み、瑞穂は考えていた。……どういうこと？ ユウちゃんは、どこにいったの

？

何者かに襲われたり、さらわれたとは考えにくい。いくら熟睡していたといつても、

ゆかりの助けを求めて大声を出せば、起きて気がつくはずだ。

「まさか……」

自らの……ゆかり自身の意思で、立ち去った？ 考えられるのは、それしかない。

……でも、何のために？

そこまで考えて、瑞穂は思いだした。自然公園の近くには、コガネシテイがある。コガネシテイは、ゆかりの故郷。ゆかりが、かつて家族と住んでいた場所だったはずだ。

「間違いない……」

瑞穂は呟き、コガネシテイを指して走り出した。

ゆかりは、自分の家に行ったのだ。瑞穂と出会うより以前に、家族と共に住んでいた、自分の家に。

何でもっと早く気付かなかったんだろう。瑞穂は、自分の頭を蹴飛ばしてやりたくなった。……でも……どうして私に黙って、自分が住んでいた家に行っちゃたんだろう……。答えは、すぐに見つかった。簡単なことだ。ゆかりは、見ていたのだ。今まで漠然と考えていたことが、一気に現実味を帯びて、瑞穂の背中へのし掛かってきた。

あの時……、暴走した私が、男達を木刀で殴り倒したところを見ていたんだ……。

事件以来、ゆかりの、瑞穂に対する態度が微妙に変わったのも、そのことが原因に違

いない。

推測が、確信へと変化した。そう、ゆかりは、心細かったのだ。信じていた瑞穂に、信じられない形で裏切られ、ゆかりは救われたかったのだろう。

ふと、不安が瑞穂を襲った。……それは奇怪だ。ゆかりは、瑞穂に何も告げずに自分の家へと向かったのだ。つまり、瑞穂が目覚めるまでには戻ってくるつもりだったのではないか？ もしかして、ゆかりは、何かトラブルに巻き込まれたのではないか……？
瑞穂の中で、不安が大きくなった。早く……一刻も早く、ゆかりを見つけなければ。

考えが纏まったと同時に、瑞穂はコガネシティに足を踏み入れていた。

さて、これからどうしよう。瑞穂は、新たな問題に、頭を悩ませた。……どうやって、ユウちゃんの住んでいた家を探す……？

あらかじめ住所を聞いておけばよかった、と瑞穂は後悔したが、今更そんなことを悔やんでも、遅い。

「どこにいるの……ユウちゃん」

呟いて、瑞穂はコガネシティの人混みの中へと、進んでいった。



ころさないでください。

……殺さないでください。なんて言った？ 恥さらしで惨めな言葉を、もう一度……。

殺さないでください。

痣だらけの身体で身を振り、涙か涎だか、よくわからない液体を床へと滴らせ、幼き少女は、許しを……いや、救いを乞うている。

少女は全裸だった。身ぐるみは数時間前に剥ぎ取られ、ゴミのように打ち捨てられた。

「お前なんかには、服を着る権利なんて無いよ」

ご主人様に、上司に、あの女に、そう言われれば、少女は納得するしかなかった。納得しなければ、叩かれ、蹴られ、頬を容赦なく張り飛ばされるのだから。

「お前は、何も人間語は喋らなくてもいいの。ただ、呻きをあげて、私を楽しませてくれればそれでいいの」

ご主人であり、上司でもある、あの女は言った。逆らうな。喋るな。なぜなら、おまえは人間ではないから。

身体が、どうのこうのと言う問題ではない。心すらも、人間であってはならないのだ。

あの女……。少女は、主人であり、上司でもある女を『あの女』と、心の中では蔑し
ていた。

あの女。あの女……。何の権利があつて、私を、壊すの？ 私を壊そうとす
るの？

その女は、一位カヤという名だった。もつとも少女は一度たりとも、その名を口に出
して言ったことはない。言ったら、殺される。何かを話したら、私は壊される。

恐怖が染みつき、いつしか少女は何も話せなくなった。言葉を失つたのだ。だが、完
全に言葉を失つたわけではなかった。

「許してください……」

惨めに白い裸体を晒しだして、少女は消え入りそうな、細い声で言うしかなかった。
言つたとしても、許してもらえないわけがないのに……。

第一「許して」と言わなければならないようなことなど、何もしていないのだ。まる
で自分の存在自体が罪であるかのように、あの女と目が合う度に、誰も知らない部屋に
連れてこられ……。

「殺さないでください……」

許しを乞うのだ。救いを乞うのだ。私を殺さないで。やめてやめてやめて。手首と、

手足を縛られ、少女は壁に張り付けにされ、電気ポケモンの電撃を浴びせかけられたり、踏まれたり、刺されたり。時には、性を弄ばれることもある。

やがて、床には鮮血が満ちる。赤い血ではない。黒々とした、ケガレた血が。

死ぬ。私は、死ぬ。違う。死ぬんじゃない……捨てられるのだ。冷たくなって、動かなくなつて、ゴミのように捨てられるのだ。あの女にとっての私は、死ぬ者ではない。壊れる物……なのだから。

「このままじゃ……私、死んじゃいます……」

『死ぬ』んじゃない。『壊れる』のよ。女は笑いながら言っていた。

「壊れる……私、壊れちゃいます……」

口から、苦しそうに涎を流しながら、鮮血の泉で少女はのたうった。誰かが、少女の耳元で囁いてきた。優しい声だった。優しい声……。

「大丈夫。あなたは、死なない……。絶対に死ぬことはない」

どうして？ 訊きたかったが、少女の口から言葉が発せられることはなかった。どういう意味なの……？ 姉さん……。

確かに姉の声だった。耳元の優しい囁きは、間違はなく姉の声だった。

「あなたは絶対に死ぬことはないのよ……なぜなら……」

少女は、姉の答えを待った。頭の中を衝撃が走るまでは。

手首の縄が擦り切れた。少女の身体は、はり倒されて、吹っ飛んでしまったのだ。

「お前は、もうとつくの昔に死んでいるんだ。だから、これ以上、死にようがないんだよ」

あの女の、けたたましい叫び声が響いた。姉の優しい声は、どこかへ消えていた。空耳だったのだ。もう、自分は狂っているのかもしれない、とさえ少女は思った。

「これが、証拠だよ」

苦しそうに横たわる少女を羽交い締めにし、あの女はポケットから紐をとりだした。少女の首に巻き付け、紐をぐいと絞める。少女は顔を歪ませ、暴れた。涎が口から溢れる。溢れて、首もとの、あの女の手を濡らした。

白目を剥いていた。少女は、真っ赤に染まつていながらも蒼白な裸体のままで、死んでいたのだ。

女は、動かない少女を蹴り飛ばした。死んでいた筈の少女の指が、ピクリと動いた。ニヤリと、いやらしい笑みを浮かべ、女は腰につけていた、ポケモン用の電磁ネットを手を取った。

少女の屍体の背中を突き破り、無数のアーボが顔を出した。憎悪を剥き出しにして、アーボ達は女へと向かっていく。

女は電磁ネットを放った。電磁ネットは展開し、少女の屍体を取り囲んだ。アーボが

苦しそうに身を振り、倒れていく。少女の屍体が立ち上がり、膨らんだ。

全身の皮を突き破り、アーボ達飛び出してきた。少女は異形の化け物へと姿を変えていた。だが、姿を変えたところで、電磁ネットを破ることはできなかった。

萎んでいく。少女の異形の身体は、元の小さな可愛らしい子供の姿へと戻っていた。死んでいた筈の少女は、目を見開いた。立ち上がり、怯えたように女の方を見た。

「勝手に逃げることも、死ぬことも、私は許さないよ……。だって、お前は、私の……。最高のペットなんだから」

またか。また、発作が起きたか。過去のこと、過去の恐ろしい思い出が、急に幻のように目の前で再生される、発作が。

雪のように白い肌を、寒々と撫でながら、氷は首を小さく横に振った。否定しているのだ。……私は、あんなに惨めだったか……？

理性は答える。そうだよ、さっきのように、私は惨めに怯えていたのだ。だが、感情は頑なに反論する。違う！ 私は惨めじゃない。惨めじゃない。惨めじゃない。

「どつちでもいい……。私は、今、私のやらなければならぬことをするだけ……」
理性は自分に、そう言わせる。だが、感情は納得しない。

否定しろ！ 私は虐められてなんかいない。惨めなんかじゃない。どつても、よくな

い!

氷は、キツと窓の外を睨みつけた。理性が、感情を抑えていくのが、自分でもわかる。

ベッドから立ち上がり、鏡の正面にある時計をチラリと覗いた。9時48分か。問題の時間までには、まだ多少の余裕がある。

氷は鏡を見つめながら、首筋を撫でた。細く、白い首筋には『s1/Hsf23|0s(y)』と刻印がなされている。

時が来たのだ……。鏡に映った、美しい自分の姿を見つめながら、氷は思った。あの女を……カヤを、今度こそ殺してやる。

氷の黒いワンピースを、窓から入り込んだ日の光が、妖しく照らし出していた。



或る計画

暗い部屋。もう、朝になつてゐる筈なのに、薄暗い部屋。

妹は、そこにいた。瑞穂の妹……そう、百合ゆかりが。

うつすらと目を開けて、ゆかりは、すぐに辺りの様子をうかがつた。薄暗いのと、頭がぼんやりしているのとで、よく見えなかつたが、数人の人影、何か不思議な音をたてている機械などは、確認できる。

「う……う……う……。ここは……ここは……？」

ゆかりは小さく呻いた。身体に妙な痺れがあるのだ。そして、身動きがとれない。どうして、動かへんの……？ 疑問に思つて、自分の身体を見つめ、ゆかりは言葉を失つた。縛られていたのだ。緑色の、粘着性のゴムテープで、ゆかりは、白いベッドに縛り付けられている。身体が妙に痺れているので、実際に見てみるまで、縛られていることに気付かなかつたのだ。

そうだ……！ まるで火をつけたように、ゆかりの頭に鮮烈な記憶が甦つた。捕らえられたのだ。このビル……このコガネ・パレスの五階に行こうとしたとき、白衣の男によつて。

ここは、どこだろう？ ゆかりは思った。部屋の広さ、形からして、おそらく、まだコガネ・パレスの一室にいるのだろう。そして、間違いなく、ここは五階だ。四階から微かに聞こえたテープ音が、ここで、はつきり聞こえるからだ。

ゆかりは藻掻いた。だが、どんなに藻掻いても、ゴムテープを断ち切ることはできない。叫び声はあげなかった。自分でも不思議だったが、叫び声をあげる気にはなれなかった。ここは五階なのだ。周りのビルは、廃墟と言ってもよく、誰も住んでいない。だから叫んでも無駄だ。と、ゆかりは、考えていたのだ。以前の自分では、考えられない冷静さだった。

今の自分の冷静さは、瑞穂の冷静さと、とても似ていることに、ゆかりは気付いた。いつの間にか自分は、姉の……瑞穂の影響を受けていたのだ。姉の、瑞穂の穏やかそうな顔が、笑顔が、一瞬だけ脳裏をよぎっていく。

叫び声はあげなくとも、ゆかりは激しく暴れた。汗が全身に滲んでくる。闇に隠れた人影は、ゆかりの方を見ようともしない。何かしきりに囁きあっているだけだ。

そんな時だ。あの男が……白衣の青年が話しかけてきたのは。

「あんまり暴れると、体によくないよ……」

冷ややかに、白衣の青年は言い放った。ゆかりは、青年を睨み付ける。青年は、フツと鼻で軽く笑うと、縛られた、ゆかりの哀れな姿を眺めた。

「そう言えば……私は、名前を名乗っていなかったね……ゆかりちゃん？」
ゆかりは目を剥いて驚いた。どうして知っている？ どうして、私の名前を知っているんだ？

「あんた……なんでウチの名前を……」

「調べたんだよ」と、髪を掻き上げ、白衣の青年は呟いた。

「私の名前は、シグレだ。これでもロケット団最高幹部の1人なんだよ」

ロケット団の最高幹部、シグレ……。心の中で、ゆかりは呟いた。

ロケット団……！ そうだ、ロケット団なのだ。暗闇に潜んでいる、怪しい人影は、皆ロケット団なのだ。

「あんたら……ここで、何しようとしてるんや？」

できる限りの冷静を装って、ゆかりは、シグレに、溜まっていた疑問を訊いた。シグレはわざとらしく、ゆかりを嘲笑うかのように苦笑した。何故か、その影には疲労の色が濃かった。

「或る計画のため、としか言えないな。まあ、すぐにわかるさ……」

苦笑しながら、シグレは先程とは反対の腕で、髪を掻き上げた。

あれ……？ 相手を睨み付けていたゆかりは、目を見張った。シグレの左腕の手の甲が、爛れていたのだ。酷い火傷の痕のように見える。事故にでも遭ったんだろうか？

どんな？ どんな事故に？ 手の甲が爛れてしまうような、酷い事故に？

じつと、シグレは、自分を睨み付けているゆかりの表情を見つめている。逆に、ゆかりは見ていた。シグレの、こめかみに浮いた汗を。シグレの様子の変化を、ゆかりは見逃すことはなかった。……この人、なんや様子が変やな……。

慌てているように見える。悪戯が見つかったときに、必死で言い繕いをする子供のような——

たわいの無い質問を、シグレは次から次へと、ゆかりに差し向けてきた。好きな食べ物は何か？ 家を出て、何をしていたか？ 両親はどんな人間だったのか……？

30程度の質疑応答を終え、ゆかりが疲れ果てた頃、シグレは躊躇いがちに、組んでいた腕を解いた。そして訊いた。言葉に、異様な重みを感じて、ゆかりは身構えた。

「君の姉さんは……本当の姉ではないようだが……、名前は、洲先瑞穂と言うんだね？」

「そうやけど……」

あつさりと、ゆかりは答えた。どうして姉の名前を知っているの？ などとは思っていなかった。どうせ調べたのだろう。それよりも、シグレの表情が、どうも不自然に見えるてならない。

「どんな……洲先瑞穂の、身体的特徴……とかを、言えるかい？」

「うーん……。髪は水色で、色白で、ちっちゃくて……」

ゆかりは、今までと同じように、怖ず怖ずと質問に答える。

シグレの表情は、青ざめていた。怒っているのではない。恐怖に打ちひしがれているように見えた。

「眼が、めつちや綺麗で、澄んどって……。そう言えば……。心臓が弱いみたいやった……」

怪しみながら、ゆかりは、真つ青になっているシグレの表情を、つぶさに観察した。

首を振り、空咳をしながら、シグレは平静を装い、さらにゆかりに訊ねた。

「もういい。それより君は、妙に落ち着いているが……。恐くはないのか?」

意外な質問だった。恐くないと言えば、嘘になる。恐いに決まっているではないか。

ゆかりは、恐怖に負けないように、わざと元気を出しているのだ。それに……。

「お姉ちゃんが、助けに来てくれる……。ウチは、そう信じてるんや。あんたなんか、すぐにお姉ちゃんに、ボコボコにされるんや!」

瑞穂が来てくれる。助けに来てくれる。ゆかりは自分に、そう言い聞かせながら、一気に息巻いた。自分に、そう言い聞かせなければ、恐怖で気が狂いそうになるから。結局は、所詮は、気休めに過ぎないのだ。

震えが襲ってきた。瑞穂のことを思い浮かべた途端、急に今、自分が置かれている状

況を意識し始めたせいだ。

唇が、思うように動かなくなってきた。息苦しくもなってきた。

……本当に、お姉ちゃんが助けに来るとでも思っているんか？ ゆかりは考えていた。違う。来るはずがない。自分のことを、助けにこれる筈などないのだ。そもそも、どうやって、ここまで辿り着くんのだ？

いつのまにか、ゆかりは、シグレを直視することすらできなくなっていた。

出し抜けに、彼は……シグレは、ゆかりにわざと聞かせているかのように、呟いた。

「偶然だな……。これは」

「な……。なにが、偶然やの……？」

ゆかりは訊いた。シグレの頬が、少しだけひきつった。企みが成功したときのような、笑みに似ていた。数歩、ゆかりの方へと踏み込み、じっと、少女の怯えたような表情を見据えた。

「君のことを調べているうちに、面白い偶然を見つけたからさ」

微笑を浮かべながらも、シグレはどこか落ち着きがなかった。目が据わっている。

「君の『本当の』姉さんのこと……百合ほたる、という名前のようだが……覚えているかい？」

きよとんとした様子で、ゆかりは思い起こした。自分の『本当の』姉のことを。

「覚えとるで。ほたる姉ちゃん……。医療ミスで死んだ……。ほたる姉ちゃん……」

「医療ミス……？」 シグレは、首を傾げた。「誰が、そんなことを……？」

「母さんが」

なるほど、とシグレは苦笑した。人差し指を一本たてて、諭すように、ゆかりに語りかけた。

「君の姉さんは、馬鹿で責任能力なんて、これっぽっちも感じちゃいない病院の凡ミスで死んだわけじゃない。どういうことだと思う？ 真実は違っていたんだ。少なくとも、君にとつての真実は間違っていたんだ」

言い切つて、シグレは得意そうに、ちらりとゆかりの方を見やった。当惑しきつた表情で、ゆかりは返事もできずにいた。頬に冷たい汗を滲ませながら、シグレは続ける。

「君の姉さんは……殺されたんだよ」

目を見開き、ゆかりは跳び上がった。もつとも、ゴムテープで体を縛られていたため、ガタリと白いベッドが大きな音をたてて、微かに動いただけなのだが。

「どういふことなん？ 姉ちゃんが『殺された』つて、どういうことなんや？ なあ……」

片手でゆかりを制し、シグレは囁くように、言った。

「3年前の『トキワ総合病院薬物混入事件』を知っているかい？」

当時4歳だった、ゆかりが知っているはずもない。当然、首を振った。

「そうだろうね。君のお母様は、あえて本当のことを言わなかったようだし……。3年前、トキワシテイの、とある総合病院で、何者によって点滴に多量の不整脈用剤を混入されるといふ事件があったんだよ。13人の死者まで出た。結局、犯人は未だに見つかっていないし、その総合病院は、安全管理……特に薬品管理のズサンさを暴露され、評判が下がり、潰れた。君の姉さんはね、その薬物混入事件による、34人の被害者の内の……13人の死者の内の、1人なんだよ」

ゆかりは俯き、驚いていたが、それほどの衝撃は受けていないようだった。事故であろうと、殺されていようと、今、姉が存在しないことに、変わりはないのだから。そんなことを今さら知ったところで、どうしようもないと、ゆかりは思っているのだろう。

だが、シグレが次に発した言葉は、ゆかりに強い衝撃を与えた。

「事件の舞台となった、総合病院の名前は、トキワ・洲先クリニックというんだ」

ゆかりの眉が歪んだ。自ずと導き出されてくる答えに、動じていた。

「それって、まさか……」

「そう、洲先クリニツクの院長の名前は、洲先祐司。そして、彼の一人娘の名は、洲先瑞穂——」

沈黙が落ちた。ゆかりは何の言葉も発さずに、宙を見つめている。

「そうさ。洲先瑞穂は、君の姉さんを殺す原因となった病院の院長の娘は、君の『今の』姉さんなんだよ」

ゆかりは何も言わない。いや、何も言えない。

シグレが畳みかけるように呟いていた。興奮からか、恐れからか、声が震えていた。

「すごい偶然じゃないか、これは。……いや、もしかしたら、君の『今の』姉さんは知っているんじゃないのか……?」

ゆかりは、ハツとした様子で、シグレを見上げた。

「それって……どういう……」

「洲先瑞穂は偶然、君と出会った。そして、君の本当の姉さんが、あの事件の被害者であることを知ったんだ。瑞穂は思ったんだらうよ。両親も姉も失った、ゆかりちゃんは可哀相な女の子……それも自分の父親の病院の、安全管理が滅茶苦茶だったのが原因なんだ。可哀相。かわいそう……。私のパパが悪いの……ってね。だから瑞穂は、この哀れで惨めで、とつてもとつても可哀相なゆかりちゃんの、お姉さんを演じてあげよう

と決めたんじゃないのか？ 写真を見たよ。優しそうで、お人好しそうな『お姉さん』じゃないか……」

ゆかりの足先が震えていた。顔面は蒼白で、血の気が引いている。

……ウチがカワイソウやから……姉の役を演じてた……。

してやったり。シグレのニヤつきが、彼の心情を物語っている。

泣いていた。ゆかりは、震えながら、悔しさに身を奮わせながら、泣いていたのだ。そんな。そんな。そんな。瑞穂に限って、そんなことはありえない。だが、見ず知らずの子供の姉を、何の理由もなく演じるなんて、どう考えてもおかしい……。ウチのことが、カワイソウやったから、惨めやったから、哀れやったから……。

頭の中が、白い何かに侵蝕されていくような気がした。頬を涙がつつたっていく感覚が、遠く、白い闇の奥へと消えていった。

シグレはニンマリとした。ゆかりに投与した睡眠薬が、いいタイミングで効力を発揮したからだ。手袋をはめ、シグレは薄笑いを浮かべながら、意識を失っているゆかりの首筋に手を回した。手にした小さな四角い機械を、ゆかりの首筋に押しつける。ガチャリ、と音がした。

ふう、と息をはき、シグレは舐めるように、ゆかりの全身を見つめる。

ちゃんと喋った。記憶もある。暴走もしない。本人は気付いていない。誘導も上手

くいった。

「処置は完了。久々の成功だ……。やっと工面できた」



「はい、これが、ゆかりちゃんの家住所を書いたメモ」

コガネ中央病院のロビーで桃谷望は、瑞穂に、ゆかりの家住所を書いたメモを手渡した。

桃谷望は、大学入学以来の瑞穂の親友であり、コガネ中央病院で内科医助手の仕事をしている。

瑞穂は以前、ゆかりの母が、この病院に入院していたことを思い出したのだ。

望からメモを受け取り、瑞穂は、はあはあと息を吐きながら、礼を言った。

「ありがとう、望ちゃん。さっそく、行ってみるね」

瑞穂は一礼し、出口に向かって駆けていく。望は声をあげ、少女を遮った。

「ちよつと待って！ 瑞穂ちゃん」

どうしたの？ 感情を表情に無防備に晒し、瑞穂は振り向いた。小さく小首を傾げている。

「瑞穂ちゃん……疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「そうかなあ。私は、別に大丈夫だけど……」

不安そうに瑞穂の顔を覗き込みながら、望は呟いた。

「でも、あんまり顔色がよくないわ。だいぶ、無理をしているんじゃないの？ 無理は禁物だよ。瑞穂ちゃんは、心臓が弱いんだから。瑞穂ちゃんのお母さんだって……」

軽く唇を噛み、瑞穂は、呟くように望に言った。

「わかつてる。私のママは、二十歳で死んじゃったんだっけ……」

瑞穂の母。洲先雪菜は、10年前、瑞穂を産む際に、遺伝性の心疾患で亡くなっている。結婚するまで雪菜は、小学校の教師をしており、当時7歳だった望と一緒に遊んでもらったことがあったので、よく知っているのだ。産まれてきた瑞穂に、雪菜と同じ心疾患があることも知っている。

俯いた瑞穂の肩を、望は優しく掴んだ。小さく、何度も頷いている。

「あのね……。この間、精密検査したでしょ？」

「結果、出たんだ」

「うん。出たよ」

「さっきまでの望ちゃんの話の話を聞いてると、あんまり良い結果は出なかったんだね？」

首を縦に振り、望は立ち上がった。瑞穂が、望の顔を見つめるためには、見上げなけ

ればならなくなった。

「とにかく、無理しちや駄目よ」

「無理なんて……してないよ」

「うそ。さつきだつて、走つてきたみたいじゃない。顔色は悪いのに、息切れしているし……」

瑞穂は、じつと望の顔を見つめている。つぶらで澄んだ瑞穂の綺麗な瞳に、望は魅入っていた。年齢こそ違っているものの、瑞穂は、母親である雪菜と瓜二つなのだ。

かわいいな……。柔らかそうな白い頬。水色に輝く左右のポニーテール。頼りなさがで華奢な体躯……。

「大丈夫だよ。約束する、無理はしないから」

瑞穂は言った。望は、瑞穂の頭を撫でて、微笑んだ。

「ところで瑞穂ちゃん。大樹くんには会った？」

「え？ ううん。明日くらいに会おうと思っただけ……。この街にいるんだつたよね？」

塚本大樹とは、望と同じく、瑞穂の大学時代の男友達である。6歳も年齢が離れているが、瑞穂との2人の関係は、まるで恋人同士のようにだと、昔、望にからかわれたことがある程、仲がよかったのだ。

「でも、今、それどころじゃないの。早くユウちゃんを探さなきゃ……」

もう一度礼を言い、瑞穂は、病院の出口へと駆けていく。望は、手を振りながら、瑞穂を眺め、呟いた。

「頑張るのはいいけど、無理はしないでね……」

悲劇の演出家

望から受け取ったメモには「コガネシティ2—52区、コガネ・パレス402号室」と書かれていた。そして今、11時12分、瑞穂はコガネ・パレスの402号室の中にいる。

見れば見るほど、ゆかりには悪いが、コガネ・パレスはボロボロのビルだった。灰色に濁った壁にはひび割れがあり、歩けば、今にも崩れ落ちそうな程、床が揺れ、埃が舞う。「パレス」とは名ばかりではないか。「宮殿」の名が、聞いて呆れる。

望によれば、コガネ・パレスは数週間前に、とある業者がビルごと買い取り、それ以来、誰も住んでいないそうだ。それだけに、勝手に忍び込むのは、どうかと瑞穂は迷ったが、人の気配がないので、怒られるのを覚悟で入り込んだというわけだ。

忍び込んでみて、不思議に思ったのは、業者が買い取ったというわりに、ほとんど業者の手が加わっていないようなのだ。……何のために、買い取ったんだろう？ そもそも、どうして、こんな今にも崩れそうなビルを買い取ったんだか……。首を傾げるしかない。

瑞穂は辺りを見回した。402号室、かつて、ゆかりが家族と一緒に住んでいた部屋。

ふと、学習机に目が止まった。ゆかりの机だろう。薄汚れた茶色い学習机は、散らかっていたが、ゆかりなりに整頓されているのかもしれない。「かつてにさわるな！」と子供の手で、紙が張ってあるのだ。

思わず、瑞穂は微笑んだ。「かつてにさわるな！」とは、いかにもゆかりらしい。紙を手にとつて眺めていると、分厚い本が、パサリと落ちてきた。落ちた本を見つめ、瑞穂はかがみ込み、手に取つてみた。赤い表紙に、手書きで「あるばむ」と書かれている。なるほど、アルバムか……。躊躇いがちにページを捲つてみた。ゆかりが知つたら「触るなつて、書いとつたやろ！」と怒られそうだ。

写真の中で、ゆかりは笑っている。今よりも幼い。幼稚園児くらいの年頃だ。隣に居るのは、母親だろう。葬儀の時に遺影を見たので、覚えていたのだ。子宮破裂の手術中に、ゆかりの母親は、原因不明の停電によつて、胎児ともども死んだのだ。

母親の肩に手をかけているのは、おそらく、ゆかりの父親だろう。ゆかりの姉が、つまり彼女にとつての娘が、病院の医療ミスで亡くなつて以来、酒浸りになり、アル中で精神科の病院に入院させられ、行き過ぎた懲罰によつて、命を落とした。殺されたのだ。

そして、ゆかりと仲良く手をつないで微笑んでいる女の子が、姉なのだろう。

「あれ……。この子……」

瑞穂はアルバムの写真の中の女の子に、視線が釘付けになった。どこかで逢ったことがある……？

だいぶ昔だ。トキワシテイで……そうだ、あの日だ。手術が成功した日だ。一緒に喜んでくれた。

(よかったね。退院したら、一緒に遊ぼうよ。私、妹がいるんだ……)

名前はなんて言っただろう。思い出した。ほたる……『ほたるちゃん』だ。名字はなんと言っていたっけ……。ゆり。そうだ、百合ほたるちゃんだった。

恐ろしいほどの偶然に気付き、瑞穂は思わず手に持っていたアルバムを落としてしまった。アルバムを拾い上げ、元の場所に戻したとき、体に震えが起こった。

……ユウちゃんは、このことを知っているのだろうか……？

ゆかりは、姉の、百合ほたるの死んだ経緯を、医療ミスと言っていた。恐らく両親が、そう教えたのだろう。感情の高ぶったまま、ゆかりの住んでいた部屋を、一通り見渡し、外に出た。

風が生温い。額に浮いた汗を気にもとめずに、手すりに掴まり、空を見上げる。息を吹き、瑞穂は首を振った。それよりも、今は、消えたゆかりを探し出すことの方が先決なのだ。この残酷と言ってもいい偶然については、ゆかりを探し出した後で話せばいい。

ゆつくりと玄関を振り向いて、瑞穂は考えた。私が来たとき、鍵はかかっていなかった……。

ふと、足もとの植木鉢に目がいった。萎れた草が、惨めに生えている。

「この植木鉢……動かした跡がある……」

植木鉢を動かした部分には、埃が積もっていないのだ。恐らく、つい最近に、何者かが植木鉢を動かしたのだ。誰が？ 何のために……？

瑞穂は、すぐに答えを見つけた。……鍵を見つけるために、植木鉢を動かしたんだ……。

子供のために、親が鍵を植木鉢の下に隠しておくことは、よくあることだ。そして、植木鉢の下に鍵が隠してあるのを知っている人物は、もう一人だけ。ゆかり以外にいない。

「やつぱり、ユユちゃんは、ここに来たんだ……」

その時、足音が、瑞穂の耳に届いてきた。階段の方から響いてくる。ゆつくり、ゆつくりと、こちらに、瑞穂のいる方に近づいてくるのだ。瑞穂は振り向き、身構えた。誰かが来る。こつちに向かってやってくる。

間違つてもユユちゃんじゃない、と瑞穂は確信していた。ゆかりは、こんなにゆつくりと階段を上つたりしないからだ。いつも、いつでも、全速力なのだから。

足もとを踏みしめ、息を殺して、足音の主を、瑞穂は待ち構えた。だが、足音は4階を通り過ぎ、上へと移動していく。瑞穂は休む暇もなく、足音を追いかけた。

「待つて。待つてく、ださい！」

思わず瑞穂は声に出して、相手呼び止めた。相手の足が止まる。足音が止んだ。上方にいる、足音の主である相手の背中に、瑞穂は見覚えがあった。

「あ……あなたは……」

相手は振り向いた。射水 氷だ。以前、瑞穂が洞窟で出会った、不思議な少女だ。

長い紫色の髪を振り乱して、射水 氷は冷たい虚ろな瞳で、瑞穂を見つめながら訊いた。

「なに……？」

細く、弱々しい声だった。普段、あまり喋ることに馴れていないのだろう。氷も、瑞穂に見覚えがあるようで、驚きながら、しかしそれを表情に出さずに呟いた。

「あなた……、たしか瑞穂……ちゃん……」

「うん、瑞穂。あの、氷ちゃん……だったよね、ここで、何をしてるの？」

瑞穂の問いかけを無視し、氷は五階へ向かうため、階段を上った。無視されたためか、すこしだけ肩を落として、瑞穂は氷の後を追いかけていく。

五階についた。四階と同じように、4つの扉が規則正しく並んでいる。無表情のまま

ま、4つの扉を眺め、氷は苛立ったように呟いた。

「何号室なのよ……」

「へ？ 今、なんて……」

言ったの？ と氷の隣に立っていた瑞穂が訊く間もなく、爆音が響いた。瑞穂は、口をあんぐりと開けたまま氷を見た。氷は、501号室の扉を、ぶち破っていたのだ。

「あの……氷ちゃん……」

何がしたいの？ だが、また訊けなかった。今度は、502号室の扉が、吹き飛んだ。結局、もう一度、別の扉を破壊し、氷と瑞穂は503号室の中へと入った。

「壊して、怒られない？」 瑞穂が訊く。

「怒りたければ、怒ればいいわ」

薄暗い部屋の中を、手当たり次第に物色しながら、氷は適当に答えた。一冊の白い冊子に目をやり、手に取り、目を通していく。目を細めて氷は、隣でどぎまぎしている瑞穂を、睨み付けて、訊いた。

「今、何時か、わかる？」

「え？」

一瞬だけ当惑したが、瑞穂は、すぐに腕のポケギアに表示された時刻を読みとった。

「11時……25分だけど」

氷は舌打ちした。思わず、瑞穂は後ずさった。手に持った冊子を懐にしまい込むと、氷はさっさと部屋を出ていく。瑞穂は、慌てて後を追いながら、叫んでいた。

「待って……。ごめん。ちよつと、私の話を聞いて」

足をとめ、氷は瑞穂の方を振り向く。溜息をついたようだが、不気味なほど表情に変化はない。

「時間がないの……」

言われたが、瑞穂は負けじと食いつく。

「歩きながらでも、いいから」

「走りながらよ。それと、五分以内に済ませてね……」

瑞穂は大きく頷いたが、氷が身を翻し、突然駆け出したのを見るや、すぐさま後を追いかけた。ビルを出た。街道を、瑞穂は息を切らせながら走り、氷に、消えたゆかりのことを話し始めた。



ラジオ塔は、嵐の前の静けさに包まれている。だが、彼は……シグレは、そんな安易

で低次元な比喩を嫌っていた。

局長室で、時がくるのを待っている間、彼はじつと考えていた。……これから、どうするべきか……。

この計画のために潜り込ませた、偽の局長が心配して話しかけてきた。

「どうしたのです？ 何か、考え事をしているようですが？」

シグレは不機嫌そうに振り向くと、黙っている！ と叱咤した。偽の局長は竦んで、黙り込んでしまう。

ちようど同時に、計画の実行主任である、一位カヤが局長室に入ってきた。カヤを見て、シグレは、さらに機嫌を悪くした。こんなときに、こんな女の顔など見たくもない。

彼女は実力はあるし、決して不美人なわけでもない。だが、性格が劣悪なのだ。以前、カヤの上にいる幹部など、ノイローゼになり、しまいには胃潰瘍で入院したくらいである。そもそも、シグレの『最高傑作』である、『あの少女』が組織を脱走したのも、カヤが、少女を徹底的に虐め抜いたからなのだ。あの時、少女が自殺しなかったのが、不思議なくらいである。

「あと、15分ね。準備は万端よ」

カヤはそれだけ言い放つと、慇懃に頭を下げ、局長室を後にした。偽の局長は、カヤ

に怯えていたようで、座り込んだまま震えている。

シグレは、この男が、偽の局長が急に目障りになつてきた。重要なことを考えているときに、邪魔な男だ。

カヤを呼びつけ、シグレは不機嫌そうな眉を男へ向けた。偽の局長は、再び震え上がる。以前、上官を殺した疑いをかけられたこともあるカヤは、組織の中で、相当恐れられているのだ。小心者の、偽局長が、怯え震えるのも無理はない。

「目障りになつた。消せ」

それだけ命ずると、シグレはカヤから目を背け、窓からコガネシテイの街並みを見下ろした。カヤは笑みを浮かべながら、恐れおののく偽の局長に、手を振り上げる。

絶叫が響いた。助けてください。死にたくないです。死にたくないです。……閃光が、彼の言葉を掻き消した。

気がついたときには、カヤの姿は消えていた。偽の局長が、頭から煙をだしている。醜く焦げた顔の穴という穴から、沸騰した血が吹き出した。男は、絶命していたのだ。

ここまでくれば、この男は用済みだつたのだ。そう思いながら、シグレは腕を組んだ。左手の甲の、ケロイド状の火傷の痕が目についた。窓の外へと視線をそらす。

そう、シグレは考えていたのだ。恐ろしいほどの偶然の奥に潜んだ、危険性を。

生きていた。と、シグレは頭の中で呟いた。生きていたんだ、あの女は……。自殺した筈だった。だが、生きていた。しぶとく、生き残った。34人の中で、唯一、正常なまま生き残ったのに、さらに、まだ生きていたとは……。

まるでゴキブリポケモンのような生命力ではないか。いや、死んだ筈だ。あの女は、確かに死んだ筈なのだ。自宅の庭で、首を吊って、惨めに、哀れに、自殺した筈なのだ。洲先瑞穂は……！

完全に計算が狂った。それもこれも、洲先瑞穂が生きているからだ。死んでいなければならなかったのだ……。

シグレの額に、脂汗が滲んできた。最悪の予測をしてしまったからだ。知っているかもしれない。洲先瑞穂は、『あの秘密』を知っているかもしれない……。いや、それはない。と頭の中で否定した。知っているなら、とっくの昔に行動を起こしているはずだ。洲先瑞穂は『あの秘密』を知らない。だが、危険だ。このまま生かしておくのは危険すぎる。もしも彼女が父の失踪の謎を調べ始めたら、もしも彼女が、あの事件について調べ始めたら……。

やはり、危険だ。洲先瑞穂は。……殺すしかない。

どうやって殺す？ 『影の妖星』に殺らせるか？ 駄目だ。目立ちすぎる。もつと地味に、怪しまれないように、不可抗力だと思わせるためには……。

窓の外の人影を見つめながら、2人の少女が、ラジオ塔に近づいてくるのが見えた。

「あの子供は……」

洲先瑞穂だ。間違いない。3年前の写真とあまり変わっていない。

シグレは、笑みを堪えることができなかつた。隣のソファで眠っている、百合ゆかりの寝顔を見つめ、歯を剥き出しにして笑つた。

こいつを使おう。そして、洲先瑞穂を殺す。なんて私は運がいいんだ……！

『悲劇』の演出家は顔を擡げ、或る計画へのゴーサインを出した。演劇のタイトルは、そう、『妖獣の叫び』と名付けよう。



少女の自我

「あなたの妹は……巻き込まれたのよ」

ラジオ塔、一階の中央フロアのソファに腰掛け、射水 氷は断言した。

壁に掛けられた時計が、11時47分と、時刻を示している。近くでは、社会見学であると思しき子供達が大勢来ており、耳を塞ぎたくなるほどに騒がしい。

瑞穂は、不安げな顔を強張らせて俯いていた。少女の白い頬には、血の気がほとんどない。

「巻き込まれた……。何に？」

訊かれて、氷は面倒くさそうに、しかし表情には、その感情を出さずに呟いた。

「奴等の、計画に——」

普段は、あまり喋ることに馴れていないのだろう。細々として、頼りなさそうな声だった。でも、それが、どこか大人びた印象を与えるのかもしれない……と、瑞穂は思った。

子供は可愛い。それでも必ず、その可愛さ……子供としての可愛らしさには、どこかしら粗があるものだ。しかし、瑞穂の子供としての可愛さには、不思議なことに粗はな

かった。それとは逆に、氷は大人びた雰囲気の端々に、よい意味での子供としての粗が浮き出ている。つまり、瑞穂と氷は、持っている雰囲気、まったくの正反対なのだ。そんな、自分とはまったく異なる魅力を持った射水 氷という少女は、瑞穂の目には新鮮に映った。

少しの間をおき、氷は続けた。

「そして、私の復讐に。巻き込まれたのよ、あなたの妹は」

息をはく、そして氷は語った。あなたにだけよ、と念を押しながらも、はつきりと語った。奴等の……すなわち、ロケット団の計画を。

「その計画は、『リリイ』と呼ばれるシステムが完成したときに、発案されたの……」

リリイ・システム (lily system)。ロケット団の柊博士よって開発された、特殊電波発信装置。特殊な波長をもった電波によつて、ポケモンの意識や感情を失わせ、思うがままに操ることができ、場合によつては、強引にポケモンを進化させたり、通常よりも高い戦闘能力を発揮させることもできる。

至極簡単に、氷は『リリイ』について説明し、瑞穂の様子を伺った。

「それって……」

瑞穂は何か言いかけ、慌てて口を閉ざした。幸いなことに、近くにいた子供達の騒音が、瑞穂の言葉を掻き消してくれた。

……それって、ナゾちゃん頭部に埋め込まれている装置と同じ原理かも……。自分だけが知っている事実の重みに、瑞穂は思わず堅くなつた。

考え込んでいる瑞穂を余所に、氷は微かに肩をすくめ、呟いた。

「それと、この『リリイ』を開発した、柊博士は、システム開発後に消息を絶っているわ……」

暗黙に、博士は既に殺されているのだろう、という推測が示唆されていることに気がつき、瑞穂は身震いした。今にも泣き出しそうな瞳で、氷を見つめている。……ユウちゃん、大丈夫だよ……。？

氷は何も答えない。ただ淡々と、ロケット団の『或る計画』についての説明を続けるだけだ。

リリイ・システムを使って、大規模な混乱を引き起こそう、と提案したのは、ロケット団の最高幹部で、シグレという男だったそうだ。

「ある意味で……私の命の恩人よ……」

氷は小声で呟いていた。淡々とした口調で、一片の愁いも感じられない。どういう意味なのか瑞穂にはわからなかった。ただ、なにか背筋に冷たいものを感じた。

シグレは、青年と聞いていいほど若いらしく、ロケット団に入る前は大学の助教授だったそうだ。彼の発案した計画は許可され、さっそく実行に移された。

コガネシティのラジオ塔を占拠し、特殊電波をジョウト地区全域に発信する。

計画の内容を理解するのは容易だった。その分、瑞穂を襲った戦慄は、並大抵のものではなかった。白く細い腕で、寒々しく自分の体を抱きかかえる。瑞穂の身は震えだし、暫くの間、治まることはなかった。

「そんな……そんなことしたら……！」

取り乱す瑞穂を、冷静に氷は制した。

「静かにして。黙って、私の話を聞いて……」

ラジオ塔の占拠計画自体は、順調だったらしい。数週間前に、偽の局長を忍び込ませ、ラジオ塔のセキュリティシステムを、無効とすることに成功したのだ。

「ちよつと待つて。ど、どうやって、偽の局長を忍び込ませたの……う？」

疑問に思い、瑞穂は訊いた。身体全体の震えは止まっていたが、膝の震えは、当分治まりそうにない。

「停電を利用したの。いえ。停電を起こして、その隙に偽物と本物を入れ替えたのよ。もちろん、自家発電の備わった施設も、抜かりなくね……」

本物の局長は、停電中に殺された。停電は10分程度だったのだから、手早く行えば簡単に済む。遺体は暫く局長室に放置された後、バラバラにされロケット団のアジトの地下に埋められたという。

「非道い……」

怯えたように瑞穂は呟いた。もう、震えてはいなかったが、寒々しく組んだ腕が強く張っている。

氷は、瑞穂の呟きを無視して、少女から視線を外した。——知らない。氷は知らない。瑞穂の呟き、『非道い』の一番深い部分の意味を。

……ユウちゃんのお母さんは、その停電が原因で亡くなったのに……。

どこまで非道なのだ。どこまで汚いのか。どこまで邪悪なのか。ロケット団は。もちろんロケット団が、自分達の引き起こした停電によって、1人の子供の母が死んだことなど、知る由もないことであろう。だが、瑞穂にとって、そんなことはどうでもよかった。非道い。瑞穂の心にあるのは、それだけだ。非道いじゃないか……こんなことをするなんて……。

瑞穂から視線をそらしたまま、氷は小さく息をはいている。

「そしてコガネ・パレスを買い取り、そこを準備のためのアジトとした……」

ゆかりは、そんな危険な場所に迷い込んでいたのだ。他言され、計画が漏れるのを恐れたために、シグレは、ゆかりを捕らえたのだろう。

瑞穂は、今にも倒れてしまいそうなほど憔悴していた。

心配しないで。氷は、思わず言っていた。

「大丈夫。あなたの妹は、殺されてはいないはずよ」

今、殺してしまうと後が面倒だから。喉まで出かかった言葉を飲み込み、氷は話を戻した。これ以上、瑞穂を心配させても、やっかいなことになるだけだ。そんな心理が働いたのだ。——心配なのは、あなたの方よ。大丈夫？ 死にそんな顔してるわ……。

氷は話を続けながら、不思議な気持ちになっていた。どうして私は、この瑞穂って名前の女の子に、気を使っているのだろうか……？

「ただ二つだけ、計画の実行に支障があった。一つは些細なこと。もう一つは、計画の存続に関わること」

「計画の存続に、関わること？」

いくらか顔色を回復させ、瑞穂は聞き返した。ゆかりが無事だろうと聞かされて、少しは安心したらしい。

「そう。肝心の『リリイ』が、あまりにシステムとして不安定だった……」

突然、操作を受け付けなくなり、暴走したりすることは日常茶飯事だったようだ。それだけでなく、システムによって操作中のポケモンの身体機能が、突然、低下したり、ひどい場合には、そのまま死んでしまうこともあったという。

それを聞いた瞬間、瑞穂の肩がビクリと動いたようだったが、氷は気にしなかった。

「なにしろ、システムを開発した柊博士は行方不明だから、どうしようもなかった。この問題で重要なのは、機械（ハード）が悪いのではなくて、中身（ソフト）が悪かった、ということよ」

シグレは、さつそく問題点を見つげるため、特殊電波の内容を解析し始めた。だが、特殊電波の内容は異様に複雑で、シグレだけでなく、専門家にも解析はできなかつたという。困り果てたシグレは無人になっていた柊博士の研究所を探り、一つだけ『リリース』に関する資料を見つけた。

「でも、その資料には、肝心なことは何も書かれていなかった。ほとんど、白紙に近かった。」

そして、最後の頁に、シグレを嘲笑うかのように一節の文章が印刷されていた。

『人間に従うよりは、神に従うべきである。わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、そして、イスラエルを悔い改めさせてこれに罪の許しを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである。わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜った精霊もまた、その証人である』

「それ、どういう意味なんだろう……」

小首を傾げる瑞穂に、氷は微かに首を振って見せた。

「新約聖書の一節よ……深い意味などないと思うわ」

シグレは散々迷った挙げ句、実験を行うことにした。野生のポケモンに小型の電波発生装置を取り付け、自由に操れるときの電波の波長を抽出したのだ。

「野生のポケモンをつかった……実験？」

瑞穂はごくりと唾を飲み込んだ。それってもしかして。それってもしかして――

「そのことについては、私も詳しいことは知らない。この計画書に、そう書いてあるだけ」

言いながら、氷は懐から白い冊子を取りだして、目立たないように開いた。

「覚えている？ 数日前、キキョウシテイを襲った、蒼い鳥ポケモンの話……」

心臓が止まりそうな程、瑞穂は驚き、可愛らしいつぶらな瞳を、天井へと向けた。

……あの時の、フリーザーが……。また、ロケット団だ。本当に、非道い……。

「う……うん。覚えてる。非道い事件だったみたいだから……」

自分に言い聞かせるように呟いた、瑞穂の表情は翳りを帯びている。できる限り、瑞穂は、自分がキキョウシテイでの事件に関わっていたことを、言いたくなかった。喋ると、思い出すと、いつまでも冬我の影がちらついて、辛いから。

「そのポケモンが、恐らく計画のための実験台だったのよ……」

氷は、瑞穂の表情の変化に気付かないまま、言い放った。

実験によって『リリイ』は、完璧なものとなった。そして、今日の正午12時00分。計画は、万全を期して実行されるのだ。

一通り計画について説明し終わると、氷はソファから立ち上がった。

「わかった？」

「あの……」

「なに……？」

躊躇いがちに、瑞穂は訊いた。

「あなたは、これから、何をしようとしているの？」

2人の間に、沈黙が落ちた。

氷は、微動だにせず、瑞穂の表情を見つめていたが、やがて囁いた。

「私は、奴等の計画を阻止する。そして、あの女を、一位カヤを殺す。」

『あの女』って、前に洞窟で逢った……」

ご名答。氷は頷いてみせ、ラジオ塔の一階を見渡した。

「どこかにいる。あの女は、このラジオ塔のどこかにいる。だから私は、奴等の計画を途中で阻止するの」

拳を握りしめ、氷は天井の一点を見つめている。

ソファから立ち上がり、瑞穂は、氷の前に立った。瞳には、決意の色が見てとれる。

「私にも、協力させて……」

「いや」

「どうして?」

睨むように瑞穂を眺め、静かな口調で、氷は言った。

「あなたは、自分の妹を助ける方が先……。あなたの妹は、恐らくシグレと一緒にいる。そしてシグレは、5階の局長室で、状況を静観しているはずよ……」

呆然と瑞穂は立ちつくしていたが、やがて口元を引き締め、頷いた。

「うん。わかった」

「12時になったと同時に、1階のゲートが爆破される。隠れている奴等は、それと同時に飛び出して、爆発に動揺している人々を、人質にするはずよ」

横目でチラリと氷は時計を確認した。11時58分。もう、時間がない。

「私は一階から上へ行きながら、奴等を追いつめる。あなたは、その内に五階へ行つて、妹を助け、特殊電波を止めるだけでいいわ」

「うん……」

時計の針が59分を指した。

小さく頷き、瑞穂は階段へ向かって歩き出した。

「あの……」足を止め、瑞穂は振り向いていた。「最後に、気になったんだけど……」
「なに？」

「計画に支障がでた……って、さっき言ってたよね？ 一つは重要なこと。それじゃ、もう一つの些細な支障って、なんなの……？」

氷は微かに唇を舐めた。口を開いて、瑞穂の質問に、できるだけ簡潔に答えた。

「ラジオ塔占拠の際に、使用するはずだった一匹のポケモンが、逃げてしまったのよ」
沈黙。

悲しげに、氷から視線を外して、瑞穂は階段を上っていく。氷は、何も言わずに見送った。瑞穂は気付いたのだろう。私を。私の……射水 氷の悲しみを。

数歩、歩いて、氷は一階の中央で時がくるのを待った。もうすぐだ。もうすぐ——
そして、爆音が響いた。悲鳴が、それに続いた。



悲しみと怒りと獣と

暗闇で蠢く、不気味な獣の影を、シグレは眺めていた。

鎖につながれながら、天井を見上げ咆哮する獣の様は、『妖獣』と形容するに相応しい。ギラギラと永遠に得ることのできない獲物を求め、妖獣は泣いていた。自分を返せ！

私を返せ！ 僕を返せ！ 過去を、時間を、自由を返してくれ！

醜い獣から視線をそらし、シグレは手元の四角い箱に手を伸ばした。透明なプラスチック製のカバーを開け、彼は、箱の中の赤いボタンを、指で押した。

下の方から爆音が響いた。ラジオ塔の一階ゲートを爆破したのだ。

洲先瑞穂は死んだろうか？ いや、この程度で死ぬような女ではないな、洲先瑞穂は。

シグレは部下に命じた。例のシステムでつくった特殊電波を、ラジオ塔から発信するのだ、と。ふと、あの老人……名前は何と言っていたっけ……の言葉が脳裏に湧いた。

（そうだな。名前を付けるとしたら、『リリイ』かのう……）

どうして『リリイ』なのだ？ シグレは訊いたが、老人は答えなかった。

『ライム』でもいいのだが、それでは危険すぎるからのう……」

それだけ言い残して、老人は何処へと去っていった。システム自体は完成したのだ。だから、計画を他言しない限り、老人は何処へ行ってもよかった。だが、シグレは気になっていて。老人は何処へ行ったのか、なぜこのシステムに『リリイ』と名付けたのか。

妖獣は、シグレを睨み付けていた。鎖さえなければ、今にも襲いかかってきそうだった。シグレは妖獣の鎖を解いた。妖獣は吠え、シグレに牙を向けた。それでもシグレはたじろがない。笑みを浮かべ、妖獣を見やっている。やがて、妖獣の瞳の焦点があわなくなってきた。ぼんやりと辺りを見回している。

……ワタシハ、リリイ？ ニクイ、ワタシタチ、ポケモン、ニクイ……。

頭の中響いた言葉を最後に、妖獣は自我を失った。フリーザーをつかった実験の時と同じだ。シグレは、瞳が真紅に染まっていく妖獣を見て、思った。獣の心はリリイによつて侵蝕され、獣はリリイの1人となったのだ。



爆発音が轟く。瑞穂は、3階から4階へ続く階段を駆け上りながら、爆発の音を聞き

ていた。腕のポケギアを見つめる。12時ちようどだ。……急がなくちゃ！

4階について、瑞穂は気付かれないように屈みながら、こっそりと辺りを見回した。おそらく局員であろう数人の大人達が、黒服の男達によつて縛られている。大人達だけではなかった。社会見学に来ていた子供達も、容赦なく縄で縛られている。

「非道い……」

誰にも聞こえないほどの小さな声で、瑞穂は呟いた。黒服の男達は、笑みを浮かべながら、人質となった人々に嫌がらせをしている。

ゆかりの救出を優先すべきか……この人質を助けるのが先か……。

「悩んでいる暇なんか、ないよね……」

微かに拳を握りしめ、瑞穂は立ち上がる。心の中で叫んだ。……ここにも、いますよ！

黒服の男達が一斉に、瑞穂の方向を振り向いた。

「まだいたぞ！」

「また、ガキか」

「楽なもんだな……」

口々に呟きながら、黒服の男達は瑞穂へと迫ってくる。その瞳には、邪悪な炎がメラメラと燃え上がっていた。

黒服の男達は両手を広げ、覆い被さるるように、瑞穂へ襲いかかった。息を落ち着かせ、瑞穂は男を直視した。睨んでいるだ。この……悪い人め！

瑞穂は跳び上がった。頭が天井を掠めた。華奢で細い体躯のどこにそんな跳躍力が秘められているのか、男達は目を剥いて少女を見つめた。だが、奴等に考える暇を与えるほど、瑞穂は悪人に優しくはない。瑞穂は男達の背後に着地し、モンスターボールを彼らに向けて放った。

「やつぱりな……ポケモンを使うと思つたよ！」

空中でまわっている瑞穂のモンスターボールを見つめ、黒服の男の1人が得意そうに叫んだ。瑞穂には、彼らの言いたいことの意味がわかつていたが、あえて無視した。

「今はな、ポケモンをつかっちゃいけない時間なんだよ。お嬢ちゃん」

「そういうこと。そのポケモンちゃんは、お嬢ちゃんの命令を、いつものように聞いてくれたりはしないよ」

黒服の男達は、口々にいいながら、笑っている。無理もない。今、おそらく既に特殊電波は発信されているのだろう。氷が言うには、電波の出力をジョウト地区全域にまで上げるのに、3時間程度はかかるらしいので、他の地域での被害は当分心配することはない。

だが、ここは爆心地。特殊電波の発信源なのだ。そんな状況下で、ポケモンをモンス

ターボールから繰り出すのは、自殺行為であるに違いない。

黙ったまま、瑞穂は、男達の言葉に耳を傾けている。微笑みを浮かべ、強い決意の眼差しで彼らを見つめながら、宣告するように一言だけ言った。

「私は『命令』なんて、しませんよ」

モンスターボールから閃光が迸った。鮮血が舞う。男達の悲鳴が聞こえた。瑞穂は唇を噛みしめ、叫んだ。

「ナゾちゃん！ 剣の舞い！」

閃光の中からあらわれたのは、ナゾノクサだった。ナゾノクサは頭部の葉っぱを、刃のように振り回し、男達を翻弄する。少しでも動こうとすれば、音速の刃によって切り刻まれてしまうのだから、迂闊に動くこともできない。

いっしょか男達は、一カ所に集まっていた。

「今だよ、眠り粉！」

瑞穂が言うが早いのか、ナゾノクサは眠り粉を噴射し、一瞬のうちに男達を眠らせた。眠りこけた男達を確認すると、瑞穂は緊張を解いて、その場に座り込んでしまった。

「ふう………恐かったあ………」

肩の辺りから、生温い汗が滲んできていた。安堵の溜息をもらすと瑞穂は、飛び込んできたナゾノクサを抱きかかえた。

「予想通りで、よかった。ナゾちゃんがいなかったら、危ないところだったよ」

瑞穂は階段を駆け上っている最中に、ずっと考えていたのだ。……ナゾちゃんは、慢性的に特殊電波の影響を受けていた。もしかしたら、多少の電波になら、耐性ができているかもしれない……。

その予想は的中していた。実際に、ナゾノクサは自分の意識を保っていられた。

「ありがとう。ナゾちゃん」

ナゾノクサの頭を撫でながら、瑞穂は立ち上がった。縛られている人質を解放しなければいけない。局員の大人達はまだしも、子供達は恐怖から、精神力は限界の筈だ。事実、子供達は、悲鳴も叫び声も上げることなく、眠っているかのように、ぐったりとしている。

「大丈夫だった？ ……というか、もう大丈夫だからね」

自分よりも年下の子供達に、声をかけながら、瑞穂は縄に手をかけようとした。

その瞬間、電撃が閃いた。瑞穂は弾き飛ばされた。机に、腹を思い切りぶつけて、床に倒れ込んだ。身体に激痛が走った。呻き声を上げ、思わず腹を押さえる。さすりながら、瑞穂は起き上がり、電撃の発射された方向を見やった。

「そうは、いかないわ。大切な、人質さんを逃がすわけにはいかないものね」

女性だった。黒い衣装に身を包み、金色の長髪を靡かせて、女は瑞穂を蔑したような瞳で眺めていた。

瑞穂は女の顔を見た。何処かで見たとのある顔だった。そうだ……。思い出した。あの人だ。洞窟で、ガンテツさんを浚つて非道いことをした人だ！

「あなたが……。一位カヤさん……。ですね？」

女は微笑した。腕を組み、一歩ずつ、瑞穂へと近寄る。

「そうよ……。私が、一位カヤ……。どうして、知っているわけ？」

もう一発、電撃が飛んだ。瑞穂は身を翻して、電撃を避ける。視線を巡らせて、カヤの足下に一匹のライチュウがいることに気付いた。瞳が真紅だ。あの時のナゾノクサと同じだ。特殊電波の影響を受けているのか……。

「あら、ごめんね。今、この子は見境がないのよ。……で、どうして私の名前を知っているの？」

カヤは瑞穂は睨んだ。だが、瑞穂は怯むことなく、言い放った。

「氷ちゃんから聞いたんです。あなたのことを殺す、と言っていました」

唇を噛みしめる。瑞穂の拳が、わなわなと震えていた。

「一体あなたは、氷ちゃんに何をしましたんですか……。？」

窓から注ぐ日の光が、カヤの影を妖しく彩っている。飲み込まれそうなほど黒々とした小さな影に、瑞穂は言いようもない恐怖を感じた。

真つ青なりノリウムの床に映りこんだカヤの顔が、ひきつったような笑みを浮かべている。

「2回。殺してやったのよ」

時がとまった。沈黙よりも、もっと重たい空気が、辺りに漂った。瑞穂は、心臓の鼓動が止まったかのような衝撃に、身じろぐことができないでいる。震え、掠れた声で、聞き返すことしかできなかった。

「殺した……?」

「そうよ。もつとも、氷は、殺されたことよりも、遊んであげたことを怨んでいるみたいだけど、逆恨みもいいところね……」

「殺すよりも……非道いことをしたってことですね?」

カヤは、答えない。笑っているだけだが、それがすべてを物語っていた。

「どうして……そんなことをしたんですか?」

「氷をどうしようよと、私の自由よ!」

叫んでいた。カヤは、瑞穂を睨み付け、そして白い歯を剥き出しにした。狂気だ。狂っている……。瑞穂はとっさに感じた。……この人も、電波にあてられているの……

「だって、氷は、私のペットなんだから！」



「死ね」

冷ややかに、氷は呟いた。それが、死の宣告であるのだ。氷の、この言葉を聞いた人間は、皆殺されるのだから。

氷の両腕が紫色に変色し、掌はアーボの頭部となって、黒服の男の胸元に噛みついた。鮮血が、氷の頬を赤く染めた。黒服の男の断末魔の叫び声がラジオ塔の3階に響いた。窓ガラスや、机が震えている。恐怖の波に、皆が震えているのだ。

3階最後の男の、最期の悲鳴は、途切れた。

えぐりとられた男の心臓を地面へと叩きつけ、氷は辺りを見回した。あの女はいない……。どこにいる。どこにいる。早く出てこい。殺してやる。コロシテヤル。

「あ……ああ……う……」

震えた喘ぎ声が、氷の耳に届いた。氷は振り向き、人質となっている中年の男を見やった。他の人質は、気を失っている。子供も、大人も。この中年の男だけが、氷の異

形の姿を見てしまったのだろう。

中年の男へと、氷は近づいた。

「来るな、来るなあ……化け物……バケモノ……!」

独特の臭いが、氷の鼻をひくつかせた。男の股間を見やる。失禁していた。氷は、手を振り上げた。男は絶叫した。

「静かにして……」

氷は、男の後頭部を殴り、倒した。中年の男の頭が血の色に染まり、そのまま倒れた。殺したわけではない。気絶させたただけだ。男の股間から流れ出た尿が、彼の足下で水たまりとなつてしまっている。

見つめた。目を細め、思わず、氷は呟いた。

「ついでないわね……」

その時だ。天井から、ドスンという、音が聞こえてきた。天井を見上げ、氷は手をかざした。上で……何が起こっている……?

氷は階段を上り、5階の様子を眺め、息を呑んだ。ボロボロになったナゾノクサを抱きかかえ、瑞穂が必死にライチュウの電撃を避けていたのだ。電撃が瑞穂の足もとを、襲う。瑞穂は跳び上がり、電撃をなんとか避けた。

……何を、やっているの……? 氷は呆れた。

手を伸ばし、氷はライチユウを殴り飛ばした。ライチユウは吹き飛び、壁に頭をぶつけ、目を回したまま動かなくなった。

氷は瑞穂の前に立ちふさがる。そして、疲れ果て座り込んでしまった瑞穂を、見下ろした。

「あ……氷ちゃん……」

「何を——しているの？」

ぼかんとした表情で瑞穂は、氷の冷たい横顔を見つめた。氷は表情こそ変わらないが、怒っているような感じがした。

「私は、『自分の妹を助ける』と言った筈よ。そして、『あなたの妹は五階にいる』と教えてあげた筈よ……」

「あの……それは……」

「ここは、いつから五階になったの？　ここは四階よ？　今まで、こんな所で何をしているの？」

厳しい詰問に、瑞穂は反論する言葉を失ってしまった。

瑞穂は知る由もないだろう。氷が、『姉』を飛び降り自殺で失っていることを。自分だけをおいて、先に死んでしまった、無責任な姉にどうしようもない怒りを感じていることを。そして、その怒りが、自分の『哀しみ』と、『復讐』の原動力であることを……。

今、氷は瑞穂に、かつての自分の姉の姿を投影していたのだ。

「無責任よ……」

唇を噛みしめ、瑞穂は申し訳なさそうに立ち上がった。

「ご、ごめん……」

「私に謝る暇があつたら……」

ビクリ、と瑞穂の肩が怯えたように跳ね上がった。モンスターボールにナゾノクサを戻す。

「そ、それじゃ、お願い……。この人質の人達を……」

「早く行け……」

氷は怒鳴っていた。瑞穂が、驚いたように目を剥いた。自分でも、氷は驚いていた。……私が、怒鳴るなんて……そんなこと……。

「い、行くから……」

落ち着きを取り戻し、小さく氷へと頷くと、瑞穂は、おぼつかない足取りで五階への階段を駆け上っていった。

氷は、呆然と少女を見つめる。そして、舌打ちした。チツ、と。瑞穂の後ろ姿が見えなくなると同時に、背後に凶悪な気配を感じたからだ。振り向いて、氷は鋭い形相で、女

の姿を睨み付けた。カヤだった。

黒服に身を包み、美しい金髪を撫でつけながら、カヤは嫌らしい笑みを浮かべている。

「見つけたわ——」

氷は、一言だけ呟き、鮮血に染まった頬を掌で擦った。雪のように白い肌が鮮血の下から覗いている。

カヤは、微笑を浮かべながら、目を回していたライチユウを蹴り飛ばした。ライチユウは目を覚まし、カヤの足下へ寄り添った。

「殺す……殺してやる……」 氷は呟く。

「私を殺せるだけでも……思っているわけ？」

カヤの口振りは、心底楽しそうだった。意地悪そうに唇を歪めると、黒い手袋に包まれた手で、氷を指さした。

「あんた……さつきやけに喋ってたわね」

無表情を貫いていた氷の顔が、少しだけ驚いたような色を帯びてきた。氷の心情を、まるで見透かしているかのように、カヤは言った。

「あんた、さつき怒鳴ってたわね……。面白いものを、見させてもらったわ」
堪えきれなくなったのか、カヤは吹き出した。

笑い転げる女を前に、氷は拳が震えるのを感じていた。だからなんなのよ。私が喋るのが、そんなにおかしい？ 私が怒鳴るのが、そんなに笑える？

「動かないでね！」

手を振り上げようとした氷を、カヤは叫び声で制した。ライチユウの尻尾を、人質の子供達へと向けながら、微笑みを絶やさないでいる。

……動く、人質を殺しちゃうわよ……！

あの女は、そう言おうとしているに違いなかった。



五階、局長室の重厚な扉が、瑞穂の目の前に立ちはだかっていた。

「この中に……ユウちゃんが……」

瑞穂は一人で呟き、黒々とした重い扉に手をかけた。扉を開く。局長室の中は息苦しい雰囲気包まれていた。白衣の青年が、窓の外を見つめながら立っている。瑞穂は、黙り込んだまま部屋の様子を伺った。

赤い絨毯が敷き詰められ、その上には高級そうなソファと机が置かれている。華美な装飾を施された本棚には、無数の本が敷き詰められていた。そして本棚に横たわるよう

にして、小柄な男の体軀が放置されている。男は、死んでいた。焼け焦げた身体からは煙が出ており、焦げくさい臭いが部屋に充満している。

瑞穂は怖ず怖ずと、一步部屋へと踏み込み、白衣の青年の後ろ姿を眺めた。

「あなたが、シグレさん……ですな？」

青年は、瑞穂を振り向いた。微かに笑みを浮かべているように見える。腕を組み、嘲るような目つきで、じろじろと少女——瑞穂の身体を観察した。

「そうだ」

青年は口を開いた。想像していたよりも、見た目よりも、ずっと落ち着きのある声だった。

「氷から、私の名前を聞いていたようだね。歓迎するよ、洲先瑞穂ちゃん」

彼の口振りに、瑞穂は一瞬、不気味なものを感じた。とびきり強烈な不安を。……まるで、私が、ここに来ることを本当に喜んでいるみたい……。

謀っているのか？ あらかじめ決められたシナリオ通りに進まされているのか……？

「どうして、私の名前を知っているんですか？」

「調べたんだよ」

組んでいた腕を解き、シグレという名の青年は、左手で前髪を掻き上げた。その時、青

年の左手の甲に、瑞穂は火傷痕のようなケロイドを見つけた。

シグレは笑っている。当然だ。もうすぐ、洲先瑞穂を殺せるのだから……。

「君の妹が、私の計画の邪魔をしようとしたのですね。ゆかりちゃん……という名前だったかな」

やっぱり、この人は、ユウちゃんを知っている。瑞穂は、激しく鼓動する胸元を押しさえつけ、シグレに訊いた。

「ユウちゃんを……ゆかりちゃんを返してください」

「嫌だ……と言ったら？」

「そんなことを、あなたが言う権利はありません」

言ってくれるな。さすがは、洲先祐司の娘といったところか。口の端を引きつらせるようにして微笑み、シグレは心の中で呟いた。

真摯な眼差しのまま、瑞穂は青年を睨んでいた。掌を握り、一筋の汗が滴る。赤い絨毯に、少女の影が、暗い穴へ落ち込むように伸びていた。



妖獣の叫び

「そうかい……。君は、そんなに私の邪魔をしたいようだね」

シグレは、それだけ言うと、黙ったまま、白い歯を覗かせた。

瑞穂は段々と焦れてきた。胸の辺りが灼けるように熱い。息をするのが苦しくなってきた。焦らない方がいい……。瑞穂は自分に、言い聞かせた。だが、胸の灼けるような苦しみは、ゆかりへの心労が原因ではないことに、瑞穂は気付いていなかった。

処女雪のように白い瑞穂の肌が、みるみる紅潮していく。胸の中にできている、血液の溜まった袋が、今にも破裂しそうな感じがした。なぜだろう……。焦ってはいけない。それは、わかっている。なのに、どうして、胸が苦しいの？

「この人は……。死んでいるんですよね？」

瑞穂は、黒こげになって死んでいる男に目をやった。再び髪を掻き上げて、シグレは答える。

「邪魔だったから、殺した。それだけだよ。そして……」

シグレは瑞穂を覗んだ。瑞穂は、思わず後ずさった。それまでひたすら隠し通していた、凶悪で残忍な牙が、シグレの瞳に宿っていたからだ。彼の心の牙は、鋭利で長く、多

くの人間を嘔み殺したことの証である黒血が、こびりついていた。

恐い。正直に瑞穂は感じた。

……こんな邪悪な雰囲気をもつ人間がいるなんて……。

青年の、シグレの眼が、妖しい、紫のような色を帯びていた。殺してやる。殺してやる。

「そして……」彼は、本当に牙を剥いた。「君も、邪魔だよ。だから、殺す」

どうして？ 恐怖に押しつぶされそうになりながらも、とつさに瑞穂は思った。たしかに私は、この人の計画を邪魔しようとしている。でも、それだったら、もつと他に対処する手だてがあつたはずだ。なぜ私を、この部屋に誘き寄せるようなことをしたんだろう……。

「目覚めろ……。目覚めるんだ。お前の出番だ……」

ぼそぼそと呟いた後、白衣の胸ポケットから、シグレは小さな四角い箱を取り出した。おそらく特殊電波発生装置を遠隔操作する機械なのだろう。シグレは指で箱の機器類を手早く操作した。窓際により、微笑みを強くする。

地響きがした。壁は激しく揺れ、破片が飛び散った。

「一体……何をしたんです？」

飛んでくる破片を避けながら、瑞穂は訊いた。シグレは答えない。揺れ動く壁の一点

を、じっと見つめるだけだ。

「お前を殺す妖獣を呼んでいるんだよ」

興奮からか、シグレの声色は上擦っていた。拳を奮い立たせ、激しく揺れる壁を指さし、彼は叫んだ。

「リリイよ。あの女を……洲先瑞穂を殺せ！」

茶色い壁が、華美な装飾を施された本棚ごと弾け飛んだ。その奥に、暗闇が覗いている。

瑞穂は身構え、弾け飛んだ壁の奥に存在する闇に、視線をやった。唸り声が響いてくる。赤い瞳を輝かしている。こちらを、瑞穂の方向を、じっと睨み付けている。

真紅の瞳が眩いばかりの光を放った。光に照らされ、獣の全身が映しだされた。獣だ。野獣だ……。瑞穂は見た。言葉にすることができないほど、おぞましい容貌をした獣を。

獣は咆哮した。窓ガラスが、振動している。妖獣の叫びは、コガネシティ全域に響きわたった。——それが、彼女の心の叫びであることに、瑞穂が気付くはずもなかった。



殺してやる。殺してやる。射水 氷は蒼白な顔で、一位カヤの微笑みを見つめていた。

余裕の現れか。それとも、単なる虚仮威しなのか。カヤは無防備のまま、氷の前の立ちふさがっている。

沈黙を決め込んだまま、特殊電波を発信し続けるラジオ塔は、異様な狂気を漂わせていた。まだ、特殊電波の出力は、コガネシティ全域のポケモンを操れるほどには達していないだろう。だが、長期戦は危険だ。いつ、出力が上がるかわかったものではないからだ。

——殺してやる。

氷は頑なに握りしめた拳を解いて、電灯の光に照らされているカヤの全身を睨みながら、心の奥底で呟き続けた。お前の、その微笑みは、もう見飽きたのよ。そして……いつも、この微笑みに、私は怯えていた。いつも。いつも。私が始めて、この女と出会ったときから、私は恐れて、怯えていたのよ。でも、もう、終わりにする。絶対に、これが最後よ……これで最後にするのよ……

「また、怯えているわね?」

カヤは、言い放った。自分の心情を言い当てられ、氷の頬が引きつった。これ以上、なにも悟られまいと、ぐっとカヤの全身を睨み付けた。足もとのライチュウが、電撃を帯

びた尻尾を人質の子供達へと向けているのが見える。

「怯えてる。恐がってるわね」

笑った。嘲笑った。純粹に、笑った。それで、氷の怒りが増大することを、カヤは知っているようだった。だから、笑うのだ。

「やっぱり、私が恐いのね？ 恐いんでしょ？」

氷は答えない。睨み付けていた瞳に、力を込める。

「私を睨み付けるのは、あんたが恐がっている、なよりの証拠なのよ。恐がっているのがバレないように、そうやって私のことを睨み付けてるんでしょ？」

氷は答えない。蒼白だった頬に、にわかには赤みがさしている。恐くない。恐くない。恐くなんかない！ 怯えてなんかない！ 否定すればするほど、深みに墮ちていくことに気づけるほど、氷は落ち着いてはいなかった。カヤを殺す。目的が直前まで迫った氷の精神は、かつてないほど高ぶっていたのだ。

「そんなに怯えなくても、私は、あんたを殺したりはしないわ」
わざとらしく、優しさを帯びた口調で、カヤは語りかけた。

「怯えないで……氷。私が今、一番恐れているのは、あんたを失うことなのよ……」

カヤの言葉に嘘はない。彼女は、氷を、自分の最良のペットを失うことを、真に恐れ
ていたのだ。

「黙れ。……死ぬ。お前なんか、しね。」

震える声で、氷は言った。乾ききった唇が、紫色に変色している。瞳は焦点を失い、細い指が壊れた玩具のように、不規則に揺れ動いていた。

「黙れ。喋るな。口を動かすな。余計なことを。さつきから。なんなのよ。うるさいのよ……」

自分でも驚くほどの早口だった。そして、氷は、自分がとても動揺していることに、今更ながら気付いた。

氷の言葉に、カヤは耳を傾けてはいないようだった。腰に手を当て、見つめるだけ。哀れな少女の、小さな身体を見つめるだけだ。

「恐がることはないのよ。怯えることはないのよ、氷……。私は、許してあげるわ。だから、戻ってきて。戻ってくるのよ……」

「黙れ」

先程よりも、強い口調で、氷はカヤの言葉を遮った。

「私は、騙されない。お前を殺すという決心に、迷いなどない」

「私は騙されない」か……。面白いことを言うわね」

不気味なほどに、カヤの表情が、笑みを帯びている。

「それじゃ、はやく殺してよ。私を。……でも、死ぬのは私だけじゃないけどね」

カヤは、チラリと横目で人質となつてゐる子供達を見やった。子供達は各々、縛られて氣を失つており、ライチユウの電撃が鼻先まで迫つてゐた。

卑怯な。氷は、わなわなと震える拳を抑えながら、思つた。

平然とした表情で、カヤは手を振り上げ、服の袖から鋭利な刃物を取り出した。刃渡り30センチ。よく研ぎ澄まされておゐり、銀色に眩しく光つてゐる。柄は真紅に染まつてゐた。

「覚えてる？ この刃……」

——あれは……。

覚えてゐないはずがない。かつて私を、怯えさせた刃。恐れさせた刃だ。私の胸を裂き、私の腕を斬り、私の瞳を剝り貫いた、あの刃だ。

「悔しいでしょ？ 私はあるを愛してゐたのに、あなたはそれに応えてくれなかつた。仕方なかつたのよ。お仕置きしてでも、苛めてでも、殴つてでも、蹴つてでも、殺してでも、あなたに、私の愛を理解して欲しかつたのよ……。わかる？ だから、殺して。私を殺してよ……ね。そして、私の愛を理解してよ」

氷は、妖艶なカヤの瞳から視線をそらさずに、口元を苦々しく歪めた。この女は、いつも口先だけだ。いつもだ。いつも、口先だけで、喋りまくる……。どんな理由を付けても、この女は、私を傷つけた。私を殺そうとした。『愛』なんてデタラメだ。昔から、

この女は、私を虐めることの原因をこじつけてきたのだから……。今も、そう言うことで、私の動揺を誘おうとしているに違いないのだ。

「黙れ」

既に氷は、元の冷静さを取り戻していた。焦ってはいけない。私は、もう子供ではないのだ。子供であってはいけないのだ。

カヤは、手に持った刃を、舌で舐めながら、細目で氷の姿を見た。

「どうして、私を殺そうとしないの？　なんで動かないの？」

氷とは逆に、カヤの方が戸惑っているようだった。

カヤを睨み付けながらも、氷は一步も動こうとはしなかった。怯えているわけではない。恐がって、足が竦んでいるわけでもなかった。

右手で刃を構え、左薬指の爪を噛みながら、カヤは思いついたように目を見張った。

「あんた……変わったわね」

カヤは、刃を握りしめている。小刻みに柄の部分が震えていた。

氷は動かない。呆然と立っている。まるで、凍り付いたかのように。

「あんた、人質を殺したくないのね。そうでしょ？　変わったわね……昔のあんただったら、人質のことなんか、考えもしなかったのに……」

微かに、氷は頷いたようだった。そして、言った。掠れた声だったが、確実にカヤに届くように、区切りをつけながら、言い放った。

「約束……したから……」



暗闇から姿をあらわした獣は、見れば見るほど、おぞましい容貌をしていた。鋭い瞳は、血を求めているかのように真紅に光り輝いており、狼のような、ヘルガーのような身体の全身が、こげ茶色の毛に覆われている。表皮は柔らかかそうなゼリー状で、桃色の光沢をしていた。牙は鋭い。腕ほどに長い爪は、一瞬で瑞穂の胴体を切り裂くこともできるだろう。

床の赤い絨毯が、妖獣の気迫で震えている。

咆哮した。振動で、窓ガラスが一斉に粉碎され、外へと弾き飛ばされていった。「これが……ケモノ……妖獣なの……」

瑞穂は視線を巡らせた。妖獣の全身を見つめれば見つめるほど、身体の気力が萎えていくような感じがする。呆然と立ちつくしながら、瑞穂は微動だにできないでいた。

シグレは、ガラスの破片で切った足から鮮血を吹き出しながら、叫んだ。

「どうだ。これだ！ 妖獣だ！ お前を殺すために、造ったのだ。私が造ったのだ……！」

瑞穂は束の間、思った。このヒト、狂っている……。狂ってるよ。私の目の前のケモノよりも、狂っている。おかしいよ。このヒト……。

整った瑞穂の雪肌の頬を、雹よりも冷たい汗が伝った。恐怖からではない。純粋に、ヒトをヒトでなくならせる狂気に、本能が危険信号を発しているのだ。

「私が……私が造ったのだ。もう、いいだろう？ 洲先瑞穂。すべてを吐き出せ。お前が知っている、我々の秘密の全てを、吐き出せ！ お前は危険すぎる。だから、ここで死ぬんだ。それが、幸せなんだよ。お前の、義理の妹も、お前がここで死ぬことを、望んでいるんだからな」

私が造った……？ このケモノを造り出したのは、人間……このヒトだというの？

瑞穂は思わず後ずさっていた。あまりに多くの事柄で混乱しているのではなかった。一つだけ、解ったのだ。そして、その事実には戦慄していたのだ。

「氷ちゃんは……射水 氷ちゃんは……あなたによつて、造られたんですね……？」

単なる思いつきだったが、瑞穂は確信していた。

氷が、シグレのことを語るときに呟いた一言。

(ある意味で……私の命の恩人よ……。)

命の恩人……。彼女は、射水 氷は、あの時、洞窟で獣へと変貌していた。そして、その時の射水 氷と、今日の前にいる獣は、とても雰囲気似ているのだ。

「そうだ。彼女は、私の最高傑作だった。おとなしく、攻撃的ではない。被験者とするには、もってこいのタイプだったよ……。そうか、お前は、氷とつるんでいるんだったな」

やっぱり予想通りだった……。瑞穂は足下が、震えてくるのを堪えた。シグレの言葉から推測すると、射水 氷は、もともとは『普通の人間』だったことになる。被験者？

このヒトが、氷ちゃんに、何かの実験をしたというわけ？

思考の錯綜する中、飛んできた鋭い獣の爪を、瑞穂は横飛びで避けた。

「つるんでいるわけじゃないです。友達です」

「彼女に、友達などいない!」

声を張り上げ、シグレは言い返した。興奮で、顔が紅潮している。

部屋の、局長室の空気が、一瞬にして止まった。瑞穂も、獣すらも、動きを止めた。

「彼女は、射水 氷は、ずっと独りぼっちだった。姉とも満足に会うこともできず、あの女に五年も虐められ続けたんだからな。普通の人間だったなら、もうとつくの昔に死んでいたはずだ」

瑞穂は、息を呑んだ。獣も、爪を振り回しながらも、何故か動揺しているようだ。

「そんなことはどうでもいい。妖獣よ、早く洲先瑞穂を殺せ」

赤みを束の間失っていた獣の瞳が、シグレの言葉に反応し、鮮血を浴びたように真っ赤に染まった。醜く歪曲した牙を獣は剥きだしにし、瑞穂の身体を裂き喰らおうと、飛びかかってくる。瑞穂は身を翻し、獣の攻撃を避ける。だが、いつまでも避けていることなどできるはずもない。

だが、急がなければ、特殊電波の出力が上がり、ジョウト地区全域にまで広がってしまふ。

モンスターボールを腰のポーチから取りだし、瑞穂は見つめた。ポケモンでなければ、獣の脅威を退けることは、不可能に近い。だが、特殊電波の影響下で、ポケモンをだすことは、自殺行為だ。特殊電波に、唯一耐性のあるナゾノクサも、先程の戦いで傷を負ってしまったている。

「リンちゃんに……賭けてみるしかない……」

小声で瑞穂は呟き、モンスターボールを天井へと放った。

シグレは怒鳴っている。予期してもいない瑞穂の行為に、驚いているようだった。

「馬鹿な。ここで、ポケモンをだすのが危険だということが、解らないのか?」

床へと落下していくモンスターボールを見つめ、瑞穂は答えた。

「解りません」

「自棄になったのか……。愚かな」

「違います」と、瑞穂は首を横に振った。「ただ単に、今の状況が解らないだけです」

もちろん嘘だ。これは賭なのだから。自棄になったというのも、あながち間違いではない。

リングマの入っているモンスターボールが、真つ赤な絨毯の上に落下して、閃いた。

獣は、口から溶解液を吹きだしてくる。瑞穂は、溶解液を器用に避けながら、リングマの巨体にしがみついた。リングマの瞳は、真紅に染まっている。わなわなと震えながら、苦しそうにその場にしゃがみ込んでいる。瑞穂は耳元で囁いた。

「苦しいんだね……。リンちゃん、心で戦っているんだね。……。ごめん。一瞬だけはいから、私に力を貸して……。おねがい」

瑞穂を振りほどき、リングマは咆哮した。獣が、一瞬だけ怯んだ。

やはりリングマも操られているのだ。特殊電波の束縛からは、逃れることはできないのだ。頭の中で響く。私は『リレイ』と。ポケモン殺せ、いや違ウ、子供を殺せ、と。しきりに響いてくる。耳元から、可憐な声が響く。おねがい……。私に力を貸して、と。

「リンちゃんは、操られたりなんかしないよね？　大丈夫だよね？」

こんなことで……。こんな電波なんかで、リンちゃんが、リンちゃんじゃなくなってしまう

うはずがないもの。信じてる。

信じていたから、モンスターボールを放ったのだ。

蹲り、呻くリングマの口元から、涎が溢れ出た。堪えている。目の前の瑞穂を、切り裂いたりしないように堪えているのだ。過ちは、二度と繰り返さない。二回も同じ間違いをしたら、いけないって、姉さんが……。

(それで、ぱばにおしりをたたかれちゃったの……竹刀で。すごく、いたかった……) 痛いんだ……。ボクは、何も感じないけど。切り裂かれた姉さんは、すごく痛いんだ。

(ぱば、わたしのことがキライなんだ。だから、あんなこと、へいきでできるんだよ……。) いたいの。すごくいたいの……。いすにすわれないくらい……。いたいよう)

ボクは、姉さんのことがキライじゃない。泣き虫でも、弱虫でも、姉さんが、姉さんであり続けるなら、ボクは姉さんのことが好きだ。だから、傷つけたくない。傷つけたくない。だれだよ『リリイ』って。ボクの名前は『リン』だ。

——私は、リリイ。……違う。私は、リリイなのよ。違うんだ。

リングマは狂ったように、赤い瞳で瑞穂を直視した。綺麗な瞳、小さく細い体躯。雪のように白い肌。幼い頃から、ずっと見続けてきた自分の姉であり、友達である瑞穂と、なんら変わっているとこはなかった。

——私は、リリイ。それは違う。リリイよ。違う、違うんだ。

瑞穂は無防備のまま、苦しんでいるリングマの姿を、切なそうに見つめている。

一閃。

破壊光線の光が、部屋を黄金色に染めた。轟音を響かせ、衝撃波が辺りに広がっている。リングマの口から放たれた破壊光線が、瑞穂の白く小さな身体の、影を掻き消した。



小さき身体は真紅に染まり

「約束？ つまんない……。全然、つままない理由よね」

カヤは、ふてくされたように呟いた。先程とは、態度がまるで違う。いや、もはや性格が入れ替わったかのようだ。

氷は思った。この女は、一体いくつ、心に仮面を隠し持っているんだ……。

「あんた、あの娘に相当、影響を受けているようね。たしか名前は、瑞穂っていったわよね」

「調べたのね」

手に持った刃を振りかざし、カヤは微笑を浮かべた。

「そうよ……。ついでに、いいことも教えてあげようか？」

いいこと？ この女の言う“いいこと”など、悪いことに決まっている。氷は心の奥で身構えた。この女、何を言おうとしている？

「あんた知らないみたいね。あの娘。名字が“洲先”っていうのよ。つまりフルネームは洲先瑞穂よね」

動揺から、氷の顔が強張った。白い床に映りこんだ自分の顔の口元が、軽くひきつつ

ている。

「嘘よ」氷は、小さな声で言った。

「本当よ。なんなら、本人に訊いてみたらどう？ まだ生きていれば、の話だけど」

「偶然、名前が同じだっただけよ」

肩をすくめ、ナイフの刃を光に照らして、カヤは言った。

「でも、“洲先”って、かなり珍しい名字よ。そんなに、いるかしら？ それに、あの娘は、間違いなく、“あの洲先瑞穂”よ……。信じるか信じないかは自由よ。」

「そんな……」

呆然と氷は宙を見つめた。

カヤは、焦れたように刃を振り回している。

「そんなことは、もういいわ。はやく、私を殺してよ」

氷は動かない。いや、動けないのだ。カヤは、子供達や局員を人質に取っている。迂闊に動くことは出来ない。

相手に悟られぬよう、氷は横目で、縛られている子供達に目をやった。先程と同じく気絶している。はやく、助けださなければ……。しかし、動くことはできない。

「それじゃ、こうすればいいのね？」

カヤが、突然に言った。氷にはなんのことだか、理解できなかった。

刃をカヤは横一線に、素速く振った。人質の幼い女の子の頬を、刃が掠める。

氷は、突然の出来事に固まっていた。思考だけが、なんとか現状を理解しようと働いている。

幼い女の子が目を覚ました。いつの間にか、頬から、血が噴き出している。目を見開き、驚いた表情のまま、女の子は自分の血を見た。痛みを遅れながらに感じた。泣き出す。痛々しく頬を押さえて、女の子は泣き叫んだ。イタイよう。イタイよう。ママ……イタイよう。

小さな声で、しゃくりあげながら、幼い女の子は泣き続けている。頬からの出血が、女の子の顔全体に広がっていた。

「なにをするの……!」

氷は、女の子の元へと駆けていた。知らぬ間に、駆けていた。待つてましたとばかりに、ライチュウの電撃が氷を阻む。氷は弾き飛ばされた。

再び、カヤの手の刃が空を斬った。鮮血が飛んだ。氷は見た。カヤは笑っていた。

首が飛んでいた。女の子の、涙と血の混じった瞳が、みるみる濁っていく。ドスン。音をたてた。湿った音だった。女の子の首は、リノリウム製の床に叩きつけられていた。女の子の血が、白い床を深紅に染めていく。か細い泣き声は、気付いたときには消えていた。

カヤは、女の子の頭だけを、氷の元へと蹴り飛ばした。「これ、あげる。」

壁にもたれて倒れている氷の視界に、女の子の首が入り込んできた。見つめている。血の色に染まり、真っ青になった女の子の顔は、氷の顔を見つめている。

痛いよう。痛いよう。お姉ちゃん。痛いよう。首と、ほつぺたが、痛いよう。

感情の失せた表情で、女の子の首は訴えかけてくる。氷は、女の子の首から視線をそらした。女の子の首のない死骸の股座から、屎尿が滲み出していた。

異変に気付き、他の子供達も目を覚ました。口々に悲鳴をあげる。目の前に、異臭を放つ、首のない屍体があるのだから、無理もなかった。

カヤは、笑みを浮かべたまま、刃を振り上げた。

「やめて……やめて！ やめて！」

氷が叫んだ。自分でも、信じられないほどの大声で、叫んだ。だが、鮮血と、首が飛ぶ度に、氷の声は掠れ、小さくなり、最後は呟きへと変わった。精気の失せた、冷たい瞳を天井へと向ける。呆けたように氷は呟き続けることしかできなかった。

「やめて……やめて……。やめてください。やめてください……」

最後に残ったのは2人の女の子だった。他の子供達には首がなかった。死臭を放つ、ただの屍体になっていた。

氷は立ち上がった。これ以上、誰も殺させない。そして、駆けた、氷は。女の子の悲

鳴が聞こえる。

「いやー！ 助けてえ……。ママあ。やだあ……。イタイよ。イタイよう！ ママあ！」

耐えきれなくなって、氷は目を閉じた。悲鳴が途切れた。

肩に丸いものが当たった。カヤが投げつけたのだろう。さっきの女の子の首に、違いなかった。首は落ちた。湿った音が、また響いた。間に合わなかった。氷の目に、涙が滲んだ。

泣くことなど、忘れていた。忘れていた筈だった。胸元に、生暖かい液体がこびりついている。酷い異臭が、氷の鼻をついた。屍体が、腐敗するにはまだ早い。これは、尿の臭いなのだろう。

眼を見開いた。怨嗟に充ちた瞳だった。

これで私は、私の心は、また死んだ。殺された。許さない。お前など、絶対に許すものか！

最後の女の子が叫び声をあげている。カヤは刃を振りかざした。

「あんたのためなのよ！ あんたのためを思つてやつたのよ！ それなのにその態度は、なによ！ あんたは私を殺したいんでしょう？ そのためには、人質は邪魔だったでしょう？ だから、殺してあげたのよ。優しいでしょ？ 私は、優しい人間だ

からね……」

ほぎけ、カス。氷は心の奥底で叫んだ。腕を前へだし、アーボへと変貌させ、カヤへ向けて伸ばした。だが、間に合わない。カヤの刃が、最後の女の子の首へと迫っていた。このままじゃ、間に合わない。

その時だ。その瞬間に、銃声が鳴り響いた。

カヤの肩から、血が吹き出て、刃がぼろりと床へ落ちた。冷たい音をたてる。

氷は、銃声の響いた方を見つめた。カヤも見た。

青年だった。サングラスをかけ、黒服を身に纏った青年だった。手に持った銃の銃口から煙が出ている。

「法柿！ あんた、なに馬鹿なことしてんのよ」

法柿と呼ばれた青年は、銃を構えたまま、カヤの言葉に言い返した。

「馬鹿はお前だ。死にたくなかったら、消えろ！」

「あんた、裏切ったわね。……氷とデキてたとか？」

「似たようなもんだ。それよりも、早く失せろ！」

「あんたも殺してやる。私は、みんなを愛しているのに、馬鹿だから、みんな気付かないんだ！ こんなに私は優しいのに、だれも誉めてくれない。みんな、殺してやる！」

カヤは、忌々しげに吐き捨てて、窓をぶち破つて、飛び降りた。背中から、機械仕掛

けの翼が飛び出す。グライダーの要領で、空を飛び、カヤの姿は雲の奥へと消えた。

氷は、気が抜けたように、その場に座り込んだ。そして隣で蒼白の表情のまま竦んでいる、人質の子供の中で唯一生き残った女の子に、話しかけた。

「大丈夫……だった？」

首を振った。少女の瞳は、正常ではなかった。

「こないで……。こっちにこないで……」

謔言のように呟くと、女の子は立ち上がった。氷は驚いて、顔を上げた。

「あなた……何を言ってる……」

「こないで！ 嫌！ いやあ！」

女の子は、怯えを通り越して、狂っていた。駆けていく。割れた窓へと駆けていく。泣きながら。出口を目指して。安全な場所を目指して。狂気に取りつかれた、この少女は、自らの創り出した幻に惑わされていた。安全な場所はどこ？ あそこだ！

「その子を止めて！」

最後の力を振り絞って、氷は法柿に叫んだ。もう、二度と喋れなくなるのではないかと思った。法柿は女の子を止めようと走った。だが、狂気に走った女の子には、間に合わなかった。

「助けて！ 助けてよお！ みんな、どこにいるの！ どこに隠れてるの……！」

ドスン。

落ちた。4階の割れた窓から、地上へ、一瞬のうちに。

法柿は、窓から下を覗き込んだ。そして、氷の顔を見据え、首を横に振った。

氷に、法柿の姿は見えていなかった。何も、見えていなかった。頭で何かが響いている。ドーン。ドスン。女の子が落ちたときの音が。

自分の姉も、死の間際に、この音を聴いたのだろうか。



部屋にたちこめていた煙がはれた。

瑞穂は立ち上がり、口から煙りを吐いているリングマの姿を見つめた。

「ありがとう。リンちゃん」

それだけを言った。リングマは小さく頷いた。瑞穂は、呆然と立ちつくしているシグレの方を向いた。

シグレは苦々しい表情で瑞穂を睨んだ。瑞穂が臆することはなかった。整然とした表情をしている。今すぐにも駆け寄って、瑞穂の小さな身体をねじ切って、殺してやろうとも思った。だが、それすらもできない。背後から、瑞穂を庇うように、特殊電波

から解放されたリングマが立っているのだ。

舌打ちし、シグレは後ずさる。まさか、こんな事になるとは思ってもいなかったのだろう。

そう、『リリイ』は、リングマの破壊光線によって破壊された。あの時、瑞穂へと放たれた筈の、リングマの破壊光線の軌道が、途中でズレたのだ。破壊光線は瑞穂の肩を掠め、ラジオ塔に設置しておいた、特殊電波発生装置を貫いたのだ。

獣は我に返ったように辺りを見回し、己の醜い姿を恥じるかのように吠え、忽然と煙の奥に姿を消した。

そして、破壊光線の煙は消えた。後には、沈黙だけが残っていたというわけだ。

「お前……ワザとやったな？ 初めから、電波の発生装置を破壊するつもりだったんだな……？」

シグレは瑞穂に訊いた。窓際により、拳を握りしめている。

「はい。でも、リンちゃんから、局長室に特殊電波の発生装置がある、と聞いたときから、まず氷ちゃんから、局長室に特殊電波の発生装置がある、と聞いたときから、まず真つ先に装置を壊そう、と考えていました。ユウちゃんを助けるのは、その後でもできますから」

冷静に話す瑞穂を、シグレは片腕を振り上げて、制した。

「まだ、終わらないよ……。確かに、この計画は決して成功したとは言えない……。だが、まだ私には次がある。このまま終わるような小者ではないよ、私は」

「あなたは逃げられません。この塔は包囲されています。もうすぐ、警察の人達も来ますよ」

微かに指を動かし、シグレは微笑んだ。瑞穂は幼い顔で、怪訝そうに白衣の彼を見つめた。

「君は、甘いよ」

風が吹いた。どうして？ 瑞穂は考えた。ここは、建物の中の筈なのに、どうして風が……？

シグレの白衣の中から、白い霧が吹き出した。

瑞穂はリングマに抱きかかえられた。風は、少女が立っていられないほどの強風になつていたので。白い霧が吹き荒れる。嵐のように、吹雪のように渦巻いたそれは、赤い絨毯に吸い込まれるように姿を消した。

シグレは消えていた。

リングマの腕から離れ、瑞穂は辺りを見回した。本当に、シグレは消えていた。逃げたのだ。どうやって、逃げたのだろう。どんな仕掛けで？ でも……それよりも、先にユウちゃんを助けなきや。

氷は、局長室に妹が、つまり、ゆかりがいるだろう、と言っていたのを思い出した。

瑞穂は、獣が出てきた壁の穴から、隣の部屋を覗き込んだ。闇の奥に、横たわる女の子の姿が見える。

「ユユちゃん！」

戦慄しながら瑞穂は、声をかけた。女の子は、声に反応して起きあがる。間違いなく、ゆかりだった。

——ユユちゃんは、あの獣がいた部屋に閉じこめられていたんだ……恐かっただろうな……。

それでも無事でよかった、という安堵の気持ちだが、瑞穂の心の中に湧き上がってきた。

ゆかりは、ぼんやりと瑞穂を見つめていた。……お姉ちゃん？ お姉ちゃんやの？

跳び上がった。火がついたように泣きだし、瑞穂の、細く柔らかい身体に抱きついた。

「お姉ちゃん……。恐かった……。怖かったよう……」

しやくりあげ、泣きじやくる、ゆかりの頭を撫でながら、瑞穂は座り込んだ。よかった。本当に、ユユちゃんが無事でよかった……。

瑞穂は白い腕で、ゆかりの身体を思い切り抱きしめた。よかった。本当によかった

……。

そこで、止まった。瑞穂は、身体の動きを止めた。腹の奥で、何かが破裂した。先程から感じていた、胸の焦げるような痛みが、喉元まで広がってきた。

思わず瑞穂は、自分の口を押さえつけた。何かを吐き戻したようだった。掌が、赤く染まっていた。血に溢れていた。ゆかりが、瑞穂の様子に気付いて、悲鳴をあげた。

リングマが駆けつけてきた。瑞穂を抱き起こす。少女の口の周りが、血にまみれていた。

瑞穂は喘ぐ。上体を起こして、苦しげに血を吐いた。吐血した。

「お姉ちゃん！ どないしたん？ どないしたん……う？」

ゆかりは、目の前が真っ白になっていた。混乱していた。悲鳴をあげ、叫ぶ。

「よかった……ユウちゃんが無事で……よかった……」

それだけを瑞穂は呟いた。口から吐き出される血が、少女の言葉を遮った。そして倒れた。リングマの腕から、こぼれ落ちるように、瑞穂の身体が床に落ちた。

鮮血が波打った。柔らかい音がした。瑞穂の瞳が焦点を失っていた。

血の色をした絨毯よりも残酷に、瑞穂の身体は真紅に染まっていた。



#10 過去。

霞んだ記憶

遠い、深い夢を見ていたような気がする。

現実——血生臭い惨劇——に疲れ果てたのだろうか。

『死』というものを意識したのは、もう何回目なのだろう。考える度に、足下から善もなく悪もない影が忍び寄ってくる——

それは恐怖。こわいよ。私は死にたくないよ、という危険信号。

心の奥底で、浅はかな本能が叫んだ。——私は、死にたくない。

これは『隔離』なのだ。

死——自分の終わり——を、はつきりと意識したとき、人間は現実が見えなくなる。そして狂うのだ。叫ぶのだ。理性を失った獣となるのだ。誰でも、死ぬのは怖いから——

『死』という『現実』から、自分の意識を隔離するのだ。

そして今、洲先瑞穂の意識は夢の中にあった。いや、そう感じるだけだ。これは夢なんだ。そう自分に言い聞かせているだけだ。

腹部に信じられないほどの激痛が走っていた。口から滴る液体は唾液ではなかった。血だった。瑞穂の掌を、口から吐いた血が鮮やかに彩っていた。

——綺麗だなあ——

意識の消えゆく刹那、瑞穂は思った。

これは夢だ。夢に違いない。だから言えた。これは夢だから。痛くても、本当——つまり現実で——は痛くないから。

「よかった……ユウちゃんが無事で……よかった……」

泣き叫ぶ、ゆかりの頬を見つめた。触れる。冷たかった。涙で濡れていた。その、ゆかりの首筋に……何か見える。小さな文字が刻まれている。

『s1/Hsf132-0s(y)』

なんだろう、これは——



白いベッド上で瑞穂は眠っていた。

純白な肌が時折、微かに動くことで、辛うじて生きているように見える。そうでなければ精巧にできた人形と見紛ってしまいそうだ。

ゆかりは沈鬱な面持ちで、瑞穂の寝顔を眺めていた。顔色が悪い。思い詰めているのだろうか。こうなったのは自分のせいだ、と。

開けっ放しの窓に据え付けられたカーテンが風に揺られて、静止したかのように静かな、部屋の空気を押し揺るがしている。稀に窓から覗く夜景は、今のゆかりの心を映しだしているかのようなのだ。

純黒の空。星も月も輝かず、コガネシテイは闇に堕ちている――

その時、音がした。ゆかりは眼を見張った。カサリ、と硬そうな布団が波打った。

細々とした寝言が途切れる。呆然とゆかりが見つめる目の前で、瑞穂は半身を起こしていた。可愛げな欠伸をして、まぶたに溜まった涙を拭う。

「お姉ちゃん」

ゆかりは上の空の意識で呟いた。瑞穂は、ゆかりを見た。

沈黙が来た。だが、重苦しいものではない。お互いの『生』を確かめあうための沈黙なのだ。

「お姉ちゃん……!」

俯いて、ゆかりは、ベそをかきはじめた。泣きはらして赤くなつた頬を涙が伝う。小さな部屋の灯りに照らされて、涙は輝いていた。

星のようだ。夜空を流れる流星よりも綺麗だな――

そんなことを思いながら、瑞穂はゆかりの手をとった。瑞穂の掌は雪のように白い。

「ユユちゃん。無事でよかった。ほんとに、よかった」

ゆかりは、瑞穂の手を握りしめた。数滴、涙が落ちた。

「お姉ちゃん、アホや。ウチのことなんかより、自分の身体を心配してや……。ごめんやけど。ちゆうか、ごめんなさい……。ウチが勝手なことしたから、お姉ちゃんが、こんなことに……」

「無理しなかったつもりだったんだけどね……。昔から私、よく言われてたの。あんたは気付かない内に無理をしてるから気をつける、って。その通りになっちゃった」

穏やかに瑞穂は微笑んだ。その微笑みの先に『死』があると思うと、ゆかりはやるせない気持ちに包まれた。

「ところで、ハハ、どハハ」

瑞穂は辺りを見回しながら訊いた。白い壁、白いベッド、白いカーテン。視界に入ってくるもの、すべてが白い。まるで、部屋全体が外の闇を恐れてでもいるかのような感じがした。

ゆかりは溜息をついた。安堵と、不安が入り混じっている。

「病院や。コガネ中央病院の308番室やで。お姉ちゃん、血を吐いて運ばれてきたん

や。ホンマにビックリしたで、いきなりぎょうさん、血を吐くんやもん」

「病院、か……。そうだよ。そうだよ、夢なわけないもんね……」

「ノゾミお姉ちゃんは、『ないぞうが傷ついただけで、たいしたことない』って言うってた。そんでな『ないぞうよりも、心ぞうのほうがしんぱい』なんや、つて」

「うん。明日、望ちゃんに詳しいことを訊いてみる」

瑞穂はベッドの上に横になった。ゆかりは、瑞穂の体を見つめた。こうしてみると、瑞穂がひどく弱々しく見える。微動だにしない。これでは、本当に人形と間違えてもしかたがない。

作り物のように可愛らしい瑞穂の顔が、天井を向いていた。遠い、何かを見ているような目つきだった。思い出か、思い出したくない過去か。

「お姉ちゃん」

「ユユちゃん」

2人の言葉は、タイミングを合わせたように同時に発せられた。

「あ、あの、お姉ちゃん。訊きたいことがあるんやけど」

「私は、ユユちゃんに言いたかったことがあるの……」

躊躇いがちに、ゆかりは布団に手をかけた。硬かったが、瑞穂の暖かみを感じられた。

「一緒に、ここで寝てもええかな……？」

「うん。いいよ」

並ぶようにして、同じベッドに2人は横になった。

瑞穂が目を閉じる。ゆかりも、それに倣った。眠ったわけではない。視界を閉ざしただけだ。2人だけで語り合うのに、部屋の灯りも、簡素な白い天井も不要だからだ。

「お姉ちゃん……病院の院長さんの、娘なんやつてね……」

目を閉じたまま、ゆかりは訊いた。

瑞穂は驚いたようだった。慌てているようでもあった。声を聞けば、それがわかる。

「知ってたんだ……。あの事件のこと、お姉さんのこと、私のことも」

「詳しくは知らへん。だから、訊いてるんや」

軽く、瑞穂は息を吐いているようだ。息づかいが聞こえてくる。

「そうだよ。私は、トキワ・洲先クリニツクの院長だった、洲先祐司の娘。洲先クリニツクは、3年前の不整脈用剤点滴混入事件のあった病院なのは知ってるみたいだね。その事件で、ユウちゃんのお姉さんが、亡くなったことも——」

「お姉ちゃん。そのこと、最初から——ウチと始めて逢ったときから——知ってたんやな？」

ゆかりの問いに、瑞穂は目を閉じながら首を横に振った。

「え……知らなかったよ」

「嘘や。お姉ちゃん、事件で死んだんがウチの姉ちゃんや、つて知つとつたから、ウチのお姉ちゃんになってくれたんやろ？ 罪ほろぼしのために……」

「それは誤解だよ。昨日、始めて知つたんだから。ユウちゃんのお姉さんが、ほたるちゃんだったつてことに——」

「え？」ゆかりの声は、驚きを帯びていた。「なんや。姉ちゃんの名前まで知つてるん？」

目を閉じたまま、瑞穂は手を伸ばした。灯りの紐を引く。電灯が消えた。白一色だった部屋も、光がなければ、ただ闇に沈むだけ——

闇を祓うように、瑞穂の白い掌が、ゆかりの頬を優しく撫でた。温かい。

ゆかりは、瑞穂の細く華奢な体躯を抱きしめた。細々とした胸の鼓動が聞こえる。

「知ってるよ。ほたるちゃん——つまりユウちゃんのお姉さんのこと、よく知ってる」

「なんでなん？ なんぼなんでも、あの事件で死んだ人、全員の名前を覚えてるわけないやろ？」

無言のまま時が過ぎた。カーテンのはためく音だけが、辺りに溶けこんでいく。

「覚えてるよ。だって私は、あの事件の唯一の生き残りだもの」

瑞穂は切なげに、胸の奥に隠したはずの苦しみを再び直視しているかのような、悲しそうな声で呟いた。

「もう、あの事件から3年も経つんだね——」



冬は終わろうとしていた。春は目前まで迫ってきている。

トキワシテイ、洲先クリニツクの病室の窓から、瑞穂は見上げた。透けるような晩冬の空を。空を覆っていた雪は溶け、風は厳しさを緩め、葉を失った木々には、小さな新しい緑が見える。

思わず、瑞穂は溜息をついた。

——もう、入院してから、何日経ったのだろうか。恐ろしく長い時間のような感覚だったが、まだ3日しか経っていない。乾いた空気の病室で、寂しさが、心の奥から膨らんでくるのがよくわかった。

胸は、まだ痛む。締めつけるような苦しさが、不安と寂しさを、なおさら大きくするのだ。

——このまま、私は死ぬのかな。

父は言っていた。お前が助かるためには、心臓を移植するしかないんだよ、と。

生まれつき、心臓は悪かった。それはお母さんからの遺伝だ、と父からも聞かされた。助かるためには、心臓を移植するしかないんだ——助からなかったら、私は死ぬんだ。

瑞穂は、窓から視線をそらした。寒々とした空が、心にまで凍みてきたのだ。

ふと、枕元に目をやった。指輪が一つ置いてある。拾い上げ、瑞穂は見つめる。透けるように蒼く輝く寶石の埋め込まれた指輪だ。ヒメグマとフシギダネがくれたものだった。入院のため、家を出ようとしたときに、お守りとして手渡してくれたのだ。家を離れる、不安と心細さから、啜り泣く瑞穂の掌に、こっそりと——内緒だよ——って。

どこかから拾ってきたのだろうか。落とす物かもしれない。じつくりと、瑞穂は見つめた。裏側には、空翠と書かれていた。空翠——人の名前だろうか——

指輪を眺めているうちに、どういうわけか悲しくなってきた。心が、沈み込んでいく。ヒメちゃんに、ダネちゃん。大樹くん、望ちゃんに——逢いたいよ。寂しいよ。寂しいよ。独りぼつちは嫌だよ——おうちに帰りたいよ。

その想いは、涙となって、澄んだ瞳からこぼれた。一筋、二筋——とどめなく流れ落ちた。

「悲しいの?」

声は訊いた。瑞穂は、涙を慌てて拭い、声の方を向いた。

隣のベッドで横になっている、女の子だった。肩まで伸びた黒髪に、小麦色の肌をしている。足にはギブスがしてある。ケガをして、ここに入院している患者なのだろう。活発そうな印象を受けたが、どこかおっとりとした話し方をする女の子だった。

「悲しくなかつたら、泣かないよ。寂しいから、泣くんだもん——」

嗚咽しながら、瑞穂は呟いた。どこか悲しげに瑞穂を見つめながら、女の子は呟いた。

「寂しいよね……私も、寂しい。家族と離れていなくちゃいけないなんて。でもさ、そんな風に、いぢいぢ泣くのはよくないよ。泣くんだったら、泣いた後に、笑えるようじゃなきゃ」

「泣いた後、笑う?」不思議そうに、瑞穂は小首を傾げた。

「だって悲しみや、寂しさを振り払うために、人は泣くんだもの。泣いた後、笑えなきゃ、泣く意味なんてないよ?」

微かに、瑞穂は微笑みを浮かべた。ほんの微かな——「変なの。でも、そうだよね」
「わかつてくれた? ……とところで、あなた名前は何?」

「瑞穂——洲先瑞穂っていうの。瑞々しいの『みず』に、稻穂の『ほ』って書いて」

女の子は、小さく欠伸をした。目を擦りながら、瑞穂に笑いかける。

「私は、ほたる。百合ほたる。漢字の『蛩』じゃなくて、ひらがなで『ほたる』。それにしても、洲先だなんて妙な名字だね——って、あれ？ たしかこの病院も……」

頭に手を当て、ほたるは考えるような素振りを見せる。すかさず、瑞穂は付け加えた。

「あ、この病院の院長が、私のパパなの」

ほたるは驚いたように、眼を見開いた。

「へえ、そうなんだ。でもさ、それだったら、こんな——って言ったらなんだけど、大部屋じゃなくて、もつと高級な個室にしたらよかったのに。瑞穂ちゃんのお父さん、融通がきかないタイプ？」

「そうじゃなくて、私が『特別扱いはしないで』って頼んだの。パパは、かなり厳しい人だけど、こういうときだけは優しくして『いいのか？ うちの病院の飯はまずいぞ』って、自分の病院なのに——」

「厳しい、ってどのくらい？」

「3年前、学校で苛められるのが嫌で家出したら、竹刀でお尻、1000回くらい叩かれた。顔を真っ赤にして『男なら逃げるな』だって。私、女なのに——」

「そりゃ、ひどい」と、ほたるは痛そうに顔を歪めた。

「キレちゃったら、見境がなくなっちゃうの。まあ、私もそうなんだけど……。その後、パ、学校に殴り込みに行って、いろいろあって、結局、私は退学処分」

「あらら……」

瑞穂は、にこやかに笑ってみせた。ほたるも、つられて笑い出した。

この病院で、一緒に笑うことのできる友達ができた——それは嬉しいことであり、思わぬ転機でもあった。だが、それは予測もできない終わり方を迎えることになるのだが

永久に続く、終わりなき闇

「心疾患？」

ほたると親しくなつてから数日後、瑞穂は自分を蝕んでいた病の名を打ち明けた。明日に控えた手術が、不安でたまらなかつた。だから、誰かに聞いて欲しかったのだ。

慰めなんていらぬ。ただ、聞いて欲しかっただけ——

「うん。心臓がね、突然止まっちゃう病気なの。遺伝性らしいんだけど……」
「遺伝性……」

「そうなの。だから、私のママも、私を生んだ直後に心臓が止まって死んじゃつた——」

風が吹いた。思いのほか、冷たい風だった。冬が戻ってきたかのようだった。北風は、瑞穂に囁いていた。

——忘れ物をした。お前の命を、お前の魂を——

北風が窓から吹く度に、瑞穂は怯えた。——忘れ物をした。お前の魂を奪うのを忘れていた——

追いかけてくる。死の影は、確実に、瑞穂の足下に忍び寄ってきていた。

あの日も、風は冷たかった。瑞穂が、倒れた日だ。大学の道場で剣道の稽古をしていたときだった。風が振り下ろした竹刀に触れた。そして突然、胸元を締めつけられたような痛みが走った。胸を押さえた。地面が音をたてた。倒れたのだ。叫びた。誰かが近寄ってきた。盛んに話しかけてくる。瑞穂は呻くだけだ。意識が遠いものになった。いった。だが、痛みだけは、いつまでも瑞穂の胸に居座り、消えることはなかった――

今でも、あの時のことを思い出すたびに、瑞穂は額に冷たい汗を浮かべる。

「どうしたの瑞穂ちゃん。顔色、悪いよ?」

ほたるは心配そうに語りかけた。我に返り、瑞穂は蒼白のまま、首を横に振った。その動きに呼応するかのように、北風は病室に渦巻く。瑞穂のツインテールの髪が、風に吹かれて揺れた。

「大丈夫。でも、やつぱり怖い。だめ、怖いよ。私、もう――」

「元氣だしなよ。そんな気持ちじゃダメだよ。……ところで、手術って、どんな手術なの?」

いくらか顔色を元に戻して、瑞穂は答えた。

「心臓移植」

「移植?」

ほたるは青ざめた。小麦色に焼けた頬が、瞬時に蒼白に変わった。瑞穂の手術の病状の重大さに、いまさらながらに気付いたからだろうか。

ほたるの様子には気付かずに、瑞穂は俯いた。もうだめだよ、私——死んじゃうよ。死にたくないよ——

じつと、ほたるは瑞穂を見つめている。真摯な眼差しだった。瑞穂は目をそらしたかった。だが、動くことが出来ない。目をそらしたら、逃げたことになるから。

風は凪いでいた。瑞穂は窓の外を横目で見やった。薄暗く悲しげな空が、瞳に映る。

ほたるは、できる限り元気な声を出した。

「そう……なんだ……。大丈夫だよ。きつと手術は成功するよ」

「ありがとう、ほたるちゃん。ほんとに、ありがとう——」

そして、瑞穂の手術の日がやってきた。手術の直前。冷たく白い瑞穂の拳を握りしめ、ほたるは言った。

「帰ってきてね。約束だよ」——掌は離れた。だが、ほたるの柔らかい感触は残っていた。やがて、麻酔によって薄れる意識の中で、瑞穂は呟いた。誰にも聞き取れないような小さな声で、「負けない……絶対に私は——」

6時間にも及ぶ、大手術だった。いつしか、ほたるは眠っていた。

そして、時は流れた――

長い時だった。まるで数ヶ月も経ってしまったような感覚がした。冬が終わり、春がやってきた。桜の花はつぼみを付け、風も温かくなった。

ほたるは待ち続けた。毎朝起きると、すぐに隣のベッドを確認した。誰もいない、白いベッドがあるだけだったが、それでも、ほたるは待ち続けた。瑞穂の帰ってくる日を。

そして、瑞穂が手術をうけた日から、一週間が経った。

温かい春風の感触が、ほたるの体を撫でるように吹いていた。ほたるは目覚めた。上体を起こし、いつものように、窓を見つめた。目を擦り、呟く。

「瑞穂ちゃん――」

横のベッドには、静かな寝息をたてる、瑞穂の姿があった。瑞穂は、帰ってきたのだ。死の影を、振り払ったのだ。

ほたるの声に気付いて、瑞穂は目を見開いた。そして横になったまま、ほたるを見つめ、微笑んだ。

「瑞穂ちゃん。成功……したんだね？　心臓移植の手術」ほたるは訊いた。

「うん」

明るく瑞穂は頷いた。ほたるは瑞穂の手を握りしめながら、喜んでいる。

「よかったね瑞穂ちゃん。退院したら、一緒に遊ぼうよ。私、妹がいるんだ……」

「ほたるちゃん、妹がいたんだ。羨ましいな……私、一人っ子だから。腹違いのお姉さんはいるけど、ほとんど会ったことないし……」

「だから、一緒に遊ぼうよ。私の妹、ちよつと生意気だけだね」

そう言つて、ほたるは笑つた。瑞穂も微笑む。瑞穂とほたるの笑いに誘われたかのよう、温かい風が部屋を包んだ。

だが、その時だった。

せつかくの暖かい風と、和やかな雰囲気吹き飛ばすような不気味な視線に、瑞穂は気付いた。病室の入り口に隠れながら、何者かが、じつと瑞穂とほたるを見つめているのだ。

思わず瑞穂は振り向いた。そして、思いがけない相手の姿に、息を呑んだ。

ショートカットの髪をした女の子だった。女の子は病室のドアの影から、瑞穂達の様子を伺っていたのだ。

瑞穂に見つめられ、怯えたようにショートカットヘアの女の子は、首をすくめた。紫色のショートカットの髪が、はらりと揺れている。

そして、目があった。女の子の不思議な瞳に、瑞穂は見入っていた。水晶のように澄んだ瞳をしている。だが、その奥に怯えがあった。少なくとも瑞穂には、それがわかつ

た。

怯えている。何に怯えているの？ 私にはわかる。この子は怯えている。私も、昔は怯えていたから。苛められて、怯えながら暮らしていたから——

女の子は後ずさっていた。怯えに負けないようにするためか、拳を強く握りしめている。

いつしか瑞穂は、自分が睨まれていることに気付いた。女の子は、瑞穂を睨み付けていたのだ。

（どうして、私のこと睨むの？）

眩きながら、瑞穂には、なんとなく女の子の気持ちがわかっていった。——怖いんだ、あの子、私のことが。怖いから、睨み付けなきや、怖さに負けてしまいそうになるんだ——

「どうしたの？ 瑞穂ちゃん」

ほたるが瑞穂の顔を覗き込みながら、訊いてきた。小さく首を横に振り、瑞穂は「なんでもないよ」と答えた。再び、病室の入り口の方を見つめたが、女の子の姿は、もうなかった。

瑞穂は小首を傾げながら横になると、ほたると一緒におしゃべりを続けた。

しばらくして、看護婦が点滴のために、病室に入ってきた。栄養補給のための点滴の

針を腕に刺してもらうと、瑞穂は目を閉じる。

頭の中がぼんやりとしてきた。朦朧とした意識の中で、呻き声のような音が聞こえてきた。なんだろう。瑞穂は身を起こそうとしたが、その身体は動かなかった。まるで全ての感覚が停止したような感じが襲ってくる。胸の奥で、新しい心臓が激しく鼓動した。

耐えかねて目を見開く。体中に汗が浮いているのに気付いた。白い筈の天井が、真つ赤に染まっている。水槽の中の金魚のようにパクパクと口を開閉させ、喘ぎ続ける瑞穂の耳には、自分の名を呼び続ける医師の声が反響していた。

苦しい――

思わず瑞穂は呟いていた。だが、その声は風に浚われ、虚しく消えた。

悪夢のような『トキワ総合病院・薬物混入事件』から、3週間が経過した。

熱狂したマスコミの過剰報道は終息するどころか、さらに加熱する様相を呈していた。10人以上もの死者をだし、20人以上の人間が脳や心臓に後遺症を被ったという事件の重大さを考えれば当然のだが、その報道の方向性は、いささか常軌を逸するものになりつつあった。犯行に使用された薬物が、病院から盗まれたものであると発覚したからだ。

事件の舞台となったトキワ洲先クリニツクは、世間から非難の目で見られながらも、未だに存在していた。もつとも、それは事件の後処理が残っていたからであり、もはや閉院は免れない状態にあつた。

暖かい春風とは対照的な薄暗い病室で、瑞穂は赤く泣きはらした眼をベッドへと向けている。口に手を当て、怯えたように震えながら、ベッドの上の少女を見つめていた。

「ほたるちゃん——」

少女、ほたるは瑞穂の蒼白な顔を見つめて、笑つた。微笑み返す気持ちだが、瑞穂にあるはずがなかった。ただ、黙つて沈黙していた。

虚ろな瞳で、ほたるは辺りを見回していた。ひきつった口許から、涎が滴っている。糸を引いて、ぎらぎらと不気味に涎は光っていた。

瑞穂は後ずさつた。俯いて肩を小刻みに震わせている。涙が頬を伝つて、床へと落ちていく。押し殺したような嗚咽が漏れた。

ほたるは窓の外を見つめていたが、突然、奇声を発し始めた。猿のように叫き散らしながら、瑞穂を睨み付けていた。不意に、罪の意識を瑞穂は感じた。それほどに、ほたるの瞳には恨みがこもっていた。

周りにいた大人達は項垂れながら、口々に呟いている。

「もう、だめだな」

そんな嘯きが聞こえる度に、瑞穂は萎縮したように肩を落とし、震える拳を握りなおした。

泣き続ける瑞穂の肩に、父親は手をかけた。促されて、瑞穂は病室を後にした。だが、瞼の裏には、狂ったほたるの形相が焼きついており、消えることはなかった。

百合ほたるは、既に自我を失っていた。記憶も、意識も薬物によつて掻き消されていった。獸同然となった、ほたるの脳には、『自分』を破壊した者に対する憎悪と、同じ事故に遭いながらも『自分』を失わなかった瑞穂に対する嫉妬が、怨念となつて残されているだけだった。

瑞穂は苦しんだ。夜になりベッドに潜り込むたび、ほたるの奇声が、曳光驕のように尾を引いて戻ってくるのだ。瞼を閉じれば、ほたるの恨みの瞳が、じつと見つめているのだ。自分も気が狂ってしまうのではないか。それほどまでに、瑞穂は恐怖した。

涙目で飛び起きても、助けしてくれる人は誰もいなかった。足下に、投石によつて砕け散った窓ガラスの破片が散乱しているだけだった。鮮血に染まった素足を眺めながら、瑞穂は謔言のように呟いていた。

「死にたい。もう死んだ方が、いい——」

外から男の声で罵声が響いた。続いて、割れた窓から石が飛び込んできた。瑞穂に避

ける暇はなかった。石は瑞穂の脇腹に直撃した。苦痛に顔を歪め、ベッドの上に蹲る。他にも2、3個、石が投げられてきた。

脇腹を押さえながら、瑞穂は窓を見つめた。窓の奥に終わりのない闇が映った。永久に続く、心の闇が。



「それから一年後、ほたるちゃんは亡くなったの」

目を閉じたまま、瑞穂は言った。その口調は、どこか切なげだった。ゆかりはゆっくりと目を開き、暗がりに沈む瑞穂の横顔を、沈鬱な面持ちで見つめた。

二人とも、泣いてはいなかった。泣くには、時が経ちすぎたのか。それとも、あまりに急いで話したので、実感が湧いてこないだけなのか。それはわからない。ただ、ひどく寒々とした気持ちだが、お互いの胸の奥でうずいていた。

自分の内にある傷をえぐりだすかのような痛々しさを感じさせる口調で、瑞穂は続ける。

「ほたるちゃんのお父さんが——つまりユユちゃんのお父さんんだけど——アルコール中毒で錯乱状態になって、その勢いで、ほたるちゃんの首を絞めて殺したの——」

「そやったんか……」

ゆかりは目を閉じた。瑞穂の暖かい手を握り、寄り添う。自分でも驚くほどに冷静だった。涙がこみ上げてこないのが不思議だった。

震える声で、瑞穂は言った。

「ユウちゃん」

「ん？」

「ごめん」

「なんで、お姉ちゃんが謝るん？ そんな必要ないやん。お姉ちゃんは、なんも悪くないやん。お姉ちゃんかて、辛い思いしたんやろ？ なんでウチなんかに謝らなあかんの――」

不意に泣きたくなって、ゆかりは黙り込んだ。涙を流さないように、口もとに力を込める。胸の辺りが、痺れるような痛みに含まれていた。

瑞穂は何も言わなかった。抱きかかえるように、ゆかりの背中に手を回した。胸の辺りに、ゆかりのすすり泣く音が響いている。

「知らない方が良かった。何も知らん方が良かったわ。何も聞かんで、今まで通り、お姉ちゃんと一緒にいれば良かったんや。そやったら、こんな悲しい気持ちにならんで済んだのに、こんな泣かんでもよかったのに――」

「そうだね——私も、ここまで言うべきじゃなかった。言いたくなかった。ユウちゃんには、何も知らずに、これからのことだけを見ていて欲しかった。このことで、ユウちゃんの悲しみを繰り返させるようなことはしたくなかった。でもね——」

「でも……なんやの？」

「傷つくことを恐れたら、何もできないし、何もかも知らないままで終わっちゃう。そんなの、私は嫌だな。だって人間は、傷ついて、その傷を自分の力で克服するたびに成長するんだと思うの。生まれてから、一度も傷ついたことのない人なんて、本当にいたら気持ち悪いよ。」

胸の中で、ゆかりが小さく頷いた。何度も何度も、自分に言い聞かせるように。

「今日はありがとうな。助けてくれて……。お姉ちゃんのこと……父さんのこと、ようわかる。ウチ……絶対、乗り切ってみせるで。姉ちゃんのこと……父さんのこと、母さんのこと、冬我兄ちゃんのこと……乗り切ってみせる……」

ゆかりの涙声は、やがて細々とした寝息となった。水たまりを行き交う波紋のように、静かな部屋に広がっていく。瑞穂は、ゆかりからゆつくりと手を離し、カーテンの隙間から覗く夜の闇を眺めた。

傷つくことを恐れたら何もできない——私は、『知ろう』としているんだらう。

眠気で、ぼんやりとした意識の中で、瑞穂は考えていた。自分の知るべきことを。未

だに自分の中に残る『傷』の真実を。『傷つく』という代償を払い、『知る』ことの果てに何も残らないかもしれないのに、どうしてこうも惹かれるのだろうか。

パパ——父さん——お父さんは、どうして私の前から消えたの？ どうして逃げる必要があったの？ そもそも、『どうして、あんな事件が起こったの？』

それだけではない。紫色の髪をした、射水 氷という少女。特殊な装置を埋め込まれたナゾノクサ。謎の力をもったグライガー。

今、どこにいるの？ 私は知りたい。知らなければならぬ。どんなに傷つくことも、あの事件の真実を知りたい——

白いベッドの上で、二人の少女が眠っている。一人は辛い過去を乗り越えるための、もう一人は辛い過去の真実を知るための決意に満ちていた。

たとえ、どんなに傷つくことも、自分が自分であるかぎり、その傷を乗り越えることができる。乗り越えなければならぬと、自分に誓いながら。



紅翼の霊

暗闇に沈む部屋に、ぼんやりと白い裸体が浮き出ていた。

射水 氷は、コガネホテルの一室から夜景を眺めていた。壁により掛かるようにして、物憂げな瞳を宙へと泳がせている。その表情は、あくまで無表情で、まるで白い仮面を被っているようだった。

「眠れないのか？」

ベッドに横になりながら、心配そうに法柿祐介は訊いた。だが、氷は答えなかった。魂の抜けたような、青白い指先が、微かに振れただけだった。指先の動きに呼応するかのように、唇が震え始める。彼女の口許から、冷たい吐息が漏れていることに気付き、法柿は痛々しげに少女から目を背けた。

「私……何をしてるのかしら……」

氷は呟いた。今にも消え入りそうな小さな声だった。窓ガラスに額をつけ、空の闇を見据えながら、寒々と両腕を抱えている。街の騒音は厚いガラスに阻まれて聞こえない。何も聞こえはしない。

今の法柿にとっては、沈黙こそがもつとも苦痛だった。氷の言葉、一言一句全てが直

接、彼の胸に響くから。いつしかその言葉が、少女の救いを求める悲鳴に聞こえるから。所詮は幻聴に過ぎない。だが彼は、そこに紛れもない過去を見るのだ。何をするともできなかった自分。目の前の少女一人すら、助けることのできなかった記憶。

「みんな、死んだ……」

氷の透き通った瞳が潤んでいた。法柿は俯き、唇を噛んだ。血が滲む。口の中に鉄の味が広がった。

「死んだ。姉さんも、父も母も……私の大切な人は、みんな死んでいく。私に関わった人は、みんな死んでいく……」

心の奥底にしまい込んだはずの記憶が、鮮烈に脳裏をよぎる。背中が碎け、裂け、真つ赤に染まっていた姉の姿。黒く焦げ、顔すらも見分けられないほどに灼けた、父と母の焼屍体。斬殺された幼い子供達の首。助けを求め、狂い、5階から死へと落下した少女の、四散した肉片。

皆、助けを求めるように、あんぐりと口をあけ、声にならぬ叫びをあげている。こちらを驚いたような形相で、睨んでいる。睨み付けている。——おまえのせいだ。おまえのせいで、死んだんだ。おまえのせいなんだ。

法柿は何も言えなかった。彼には、ただ彼女の言葉に耳を傾けることしかできない。

細々とした声を、搾りきるように話す、氷の横顔は切なげだった。

「もうよせよ、氷。こんなこと言って、なんになるんだ」

思わず、法柿は言った。氷は彼の顔を見つめ、哀しげに目を細めた。

物音一つたてず、氷は立ち上がり、法柿のすぐ側に横になった。無表情なままの顔を枕に押しつけ、くぐもった声で呟いた。声がしだいに震えを帯びてくるのが、法柿にはわかった。氷は震えている。呪われた自分の運命を恐れているのだ。

「教えて法柿。どうして私の周りの人は、みんな死んでしまうの？ それなのに、どうして私だけは、死んでも死ねないの？」

「そんなこと訊かれても……」

「あのまま死んでいればよかった。その方が楽だった。あの冷たい河の底で、死ぬのも悪くない」

「どうしたんだよ。おまえらしくないな」

氷の震えが、ピタリと止まった。部屋の空気が動きを止めた。氷はゆつくりと横目で法柿を見つめた。彼は氷の瞳に、圧迫感のようなものを感じた。

「あの子たち……私がいなければ、あの女にあんな事を言わなければ、死なずにすんだかもしれない。あんなに恐がっていた。最後に何も見えなくなつて、あの子は落ちて、死んだ」

「それか……そのことか……だけだな、いちいちそんなことを気にしていられる立場か

？ 変だよ。昔のおまえだったら、そんなことは気にもしなかった」

すがるように、氷は法柿の掌を握りしめた。法柿は驚き、額の汗を拭いた。彼の指先がじわじわと濡れていく。氷は法柿の指をしゃぶるように舐めていた。

「あの女の子に逢ってから……私は変わったのかも知れない」

「女の子？」

「法柿も知っているはず……そう、洲先祐司の“戸籍上の”一人娘、洲先瑞穂」

先程までとは違う汗が、法柿の全身に浮き出た。指先を舐め続ける氷の手を払い除け、しばし呆然と考えるような素振りを見せた。

「その子は、死んだはずじゃなかったのか？」

「だから明日、それを確かめる……あんなことは一度だけで、もうたくさんだから……」
氷は上目遣いで法柿をじっと見据え、這うように近づくと、彼の胸に火照った頬を擦り寄せた。目を閉じる。抱きしめる。男の胸を、透き通った雫が伝っていく。

法柿は静かに氷を抱き寄せ、ベッドの底に沈んだ。



差出人：洲先瑞穂 宛先： a s u k i 8 1 6 2 @ r a u . p o k e n e t . **

**

件名：こんにちは

大樹くん、こんにちは。瑞穂です。久しぶりですね。

元気ですか？ 私は、とても元気です。

私は今、コガネシティに来ています。

たまには一緒に、食事でもしませんか？

宜しければ、メールください。

明日の午後3時、コガネラジオ塔の前で待っています。

みずほ：y o t 2 3 5 @ p o i . f r e e w a y s . **



塚本大樹は、コガネシティの中央通りをひた走っていた。

彼は、約束の時間に遅れそうになっていた。上司である京橋教授が、急に資料整理の仕事を押しつけ、そのせいで遅れてしまったのだ。携帯獣研究所の新米研究員である大樹が、上司の命令に逆らえるはずがなかった。

「瑞穂ちゃんと会う約束がある」なんてことを、教授なんかには言わなければよかったと、彼は心の底から後悔していた。悔しきで思わず歯を噛みしめるほどに。

元トキワ大学教授である京橋元一郎は、陰湿な男だった。ことあるごとに、大樹に嫌がらせをするのだ。もう、70も近い年齢だというのに、その陰湿さは衰えるどころか、年を追うごとに増している。

白い雲が矢のように頭上を通り過ぎ、ループする。周りの人々をかき分け、前へと進む。腕時計が2時56分を指したとき、大樹は立ち止まり、息を弾ませながら、先の見えない中央通りの向こう側を見つめた。

このままでは間に合わない。約束の時刻に遅れてしまう。すぐ側のベンチに腰掛け、大樹は激しく鼓動する胸を押さえつけた。背中の方では風を切って、車が走っている。遠い音が近くなり、彼の身体を突き抜けて、また遠くへと去っていく。

「どうしよう。このままじゃ、瑞穂ちゃんとの約束に遅れちゃうよ」

疲れ果て、大樹は項垂れた。その時、ふと眼前の薄暗い路地裏に目がいった。普段は、絶対に足を踏み入れることのない、光の届かない空間。

ベンチから立ち上がり、大樹は路地裏に足を踏み入れた。躊躇している暇など無かった。約束の時間に間に合うためには、この路地裏を通るしか方法が無かったのだから。頭上から光が漏れる。スープをこぼした後のように転々と続く光の筋を追いかけるように、大樹は走った。左に曲がり、右に曲がり、直線を駆け抜けて、また右に曲がる。すると、その途端――

倒れた。突然、誰かにぶつかってしまったのだ。こんな怪しげな路地裏になど、誰もいないだろうと思って油断していたのだ。

「いたた……すみません。急いでたので」

大樹は立ち上がり、相手に頭を下げた。薄暗いせいで、相手の姿はよく見えなかった。相手は、じつと大樹の足もとを見つめている。大樹は気になって、自分の足もとの方を見た。

透明な、水晶のような丸い珠が転がっていた。握り拳くらいの大きさで、中央から不思議な光を放っている。大樹は、その水晶玉のような物に、言いしれぬ不安のようなものを感じた。

かがみ込み、両手で持ち上げて、大樹はまじまじと光と陰を発する珠を観察した。見れば見るほど、冷たく不可思議な光だった。

「触れるな。返せ」

男の声だった。相手は、音も立てずに立ち上がり、大樹の手から水晶玉を取り上げた。何故か、慌てている様子だった。

「あ。あなたのだったんですか。どうも、すみませ……」

そこで大樹の言葉は止まった。驚きと恐れの表情を浮かべている。目を見開き、口が大きく開いている。相手の顔を見つめ、相手の全身を眺め、相手の瞳から逃げるように視線をそらした。

相手の格好が普通ではなかったのだ。黒尽くめのローブに、黒いマフラーを、顔を隠すように頭から被っている。瞳だけが、ぎらぎらと不気味に輝いていた。

大樹は身じろぐこともできなかった。目を剥いたまま、立ちすくんでいる。

男は何も言わずに、水晶玉を懐にしまいこむと、そそくさと立ち去った。相手の姿が見えなくなるのを確認し、大樹は気が抜けたように溜息をついた。

「なんだったんだろ、今の人……」

腕時計が鳴った。3時になったことを告げるアラームだった。結局、約束の時間には間に合わなかった。大樹は項垂れ、なかば自棄になって、再び駆け出した。

路地裏を抜け、大通りに出た。明るい光に、大樹は眩しさを覚えた。思わず目を細め、空を見上げる。コガネ百貨店が視界に入ってきた。ラジオ塔は、ここから歩いてても2分といったところだろう。

いつ見ても高い建物だな。百貨店を眺めながら大樹は思った。そう言えば、数週間前に、飛びおり自殺が起こったのも、この建物だっけ。

大樹は、視線を数100メートル先のラジオ塔へと戻した。すると、目の前に立ちふさがるようにして、少女が1人立っているのが見えた。紫色の美しいロングヘアをしている。少女は、じつと大樹の方を見つめていた。

「あの……何かあるんですか？」

思い切って、大樹は訊いてみた。少女はビクリとした様子で後ずさり、震える声で聞き返した。

「私の姿が、見えるんですか……？」

少女は俯き、強張ったような肩を震わせている。

その瞬間、大樹は息を呑んだ。

突如として、彼女の背中から眩い光とともに、真紅の翼があらわれた。大きく、鮮やかに溢れた天使のように映った。

だが、それは翼ではなかった。背中の傷から夥しく吹き出す、鮮血だった。あまりに激しく吹き出すので、翼と見紛ってしまったのだ。

突然の事に、慌てている大樹を落ち着かせるように、少女は小さく呟いた。

「心配しないでください。大丈夫ですから」

「でも、血が……痛くないの？」

「痛いですが……でも、しかたないんです」

大樹は微動だにせず、少女の姿を見つめた。背中からの出血は止まる気配すらない。そのかわりに鮮血は、透明となり消えていく。そのため地面に血の跡は残らなかった。

救いを求めるように辺りを見回してみた。人々は誰も少女を気にしている様子はない。皆、知らぬ顔をして過ぎ去っていく。おかしい。大樹は思った。これは、幻なのではないのか？

「他の人——つまりボク以外の人には、きみの姿は見えないの？」

「はい。私に気付いてくれたのは、あなたが初めてです」

心の中で、大樹の思考の奥底で、囁く声。これは幻だ。夢だ。とびきりの妄想だ。

だが、現実にも目の前に少女は立っている。白い肌。氷のように澄んだ瞳。紫色の長髪。純白のワンピース。そして、真紅の翼のように見える、激しい鮮血。眼前の、どれもこれもが現実だった。幻などではなかった。

「きみは、何者なの？ どうして、ここに——僕の目の前にいるの？」

ほとんど錯乱した状態で、大樹は訊いた。語尾が裏返っている。

俯いたまま、少女は冷たい瞳を地面へと向けていたが、やがて落ち着き払った様子で答えた。

「私は、射水 冷といいます。以前、この建物から飛び降りて死んだ——」



「何も……知らない？」

射水 氷は、無表情なままで呟いた。

もう、空は夕闇に染まっていた。オレンジ色の日の光が、ラジオ塔の窓ガラスに反射して、大地を赤く染めている。紅葉色に灼けた地面の上、ラジオ塔の正面で瑞穂と氷は二人きりで鼻を突き合わせていた。後ろの方では、緊張した面持ちのゆかりが、瑞穂の背中越しに氷を見つめている。

「うん……でも、何で私が自殺したことになってるんだろう。たしかに、死にたいと思っただことはあるし、そういうデマも流れたけど……」

「デマ……ね。そう……ありがとう」

一通り『3年前の事件』のことを瑞穂から訊きだした氷は、それだけ言うと、その場を立ち去ろうと背を向けた。

「ちよつと待つて」

瑞穂の声が追いかける。氷は立ち止まり、静かに振り向いた。光が射し込む。眩しさに思わず目を細めた。瑞穂の顔が見える。その整った顔の、瞳の奥に不透明な哀しみが映っていた。

「どうして……あの事件に私が関わっていることを知ってるの？」

「さあ……」

「答えて。確かに『3年前の事件』は、たくさん報道されたよ。だけど、私の実名までは公表されなかったはず。それなのに、どうして私のことを——」

「言いたくない」

知らぬ間に瑞穂は前へ一歩踏み込んでいた。表情を変えずに、氷は小さく息をはいた。

「言いたくない……つて、それじゃ分からないことだらけだよ。そもそも、氷ちゃん……あなたは何者なの？ あのシグレつて人は“最高傑作”つて言っていたけど、それつて——」

氷は微かに首を横に振り、瑞穂の言葉を制した。何かを諦めたように肩をすくめ、手

早く髪を撫でると、瑞穂の瞳を直視した。

背中小さくなっていくゆかりを後ろ手で宥めながら、瑞穂はごくりと唾を飲み込んだ。氷は語ろうとしている。自分のことを、自分に話そうとしている。水色の髪の間が、はらはらと揺れた。

「私は、射水 氷——出身地はシマナミタウン。だけどその町は、もうデータ上には存在しない。私も、5年前にデータから姿を消した——そう、5年前に私は死んだ」



忘れもしない、五年前の12月29日。町の人達は、新年を迎える準備を急いでいる頃だった。

あの時、午後7時47分、私と姉さんは、家で両親と一緒にいた。ケーキが私の前に出てきた、蝋燭に火が灯った。私は息を吸い込んだ。一足早い、私の誕生日パーティーを締めくくるために。

「母さん、見て。外……窓の外を見て」

姉さんが、突然騒ぎ出した。窓の外を指さして、大声で。父も、母も、窓の外を見つめて、驚いていた、吸い込んでいた息を吹きながら、私も窓の外を見つめた。

オレンジ色に照り光る夜景が見えた。私は立ち上がった。母と父も立ち上がった。姉さんは座り込んだまま、怯えていた。

「姉さん。燃えてるよ。ねえ、真つ赤に燃えてるよ。火事かな？ 本当に凄く燃えてる。なんか、綺麗だよ。すごいよ」

「氷、騒がないの。静かにして」

母は、そう言いながらも落ち着かない様子だった。私は、座り込んだままの姉さんに寄り添った。

天井が崩れてきた。あつと言う間の出来事だった。まばたきする暇もなかった。気付いたときには、母の足は破片の下敷きになっていて、父は腹から血を吹き出しながら、その場に突つ伏していた。

私と姉さんは空を見上げた。崩れた天井の隙間から覗くのは、淡いオレンジ色の炎と、血の色よりも鮮やかな炎が渦巻く様子。炎の奥に、今まで一度も見たことのない奇妙な形の機械が朧気に映っていた。後になって知ったことだけど、それはロケット団の試作型人造巨兵、ウルフェスだった。

機械頭部のアイセンサーが、私と姉さんの姿を捉えた。姉さんは立ち上がり、私を引きずるようにして外へ出た。私は恐怖した。悪夢の中でさえ見たこともないような現実実に恐怖していた。

燃えている。すべてが燃えていた。辺りの家も、道路も、人々も。倒れた。すべてが崩れた。焼け落ちた。力つきて、炎に灼かれ、事切れていく命。そして悲鳴。

機械は腕部からレーザー光線を地面へ向けて照射した。光線の照射された跡には、何も残らなかつた。続いて、その周りから炎があがった。私は確信した。この機械が、町を燃やしたんだ……と。

「逃げなきゃ……氷、早く逃げなきゃ」

「姉さん。でも、母さんと父さんが……」

私は、焦る姉さんを余所に、燃えさかる家を見つめた。このまま両親を見捨てたくはなかつた。でも、私には何もすることはできなかつた——

機械のレーザー光線が、家を切り裂いた。二つの断末魔の悲鳴が、私の耳に届いた。家は先程よりもさらに激しく燃えていた。やがて、爆発した。

私は泣き叫んだ。そして、両親の名を叫び続けた。誰も、私の言葉に答えてはくれなかつた。

両親が死んだ時のことは、もう私の記憶にはない。時折、夢の中で思い出すことはあるのに、思いだそうとすると思い出せない。

ただ、泣きながら走っていたことしか覚えてない。姉さんに叱咤されながら、ぼろぼろになりながら走った。いつしか、炎は見えなくなつた。

命を繋ぎ止め、町から逃げてきた人は、私たちだけではなかった。気がついたときには、数十人が集まっていた。みんな、あの機械に追われていた。緑色をした、奇妙な形の悪魔に。

そして遂に、私たちは逃げ場を失った。小さな、流れの強い川が、目の前を流れていた。機械はすぐ背後まで迫ってきている。皆、怯えていた。川の中に飛び込む人もいたけど、流されて、消えた。無理もなかった。12月に——冬に川に飛びこんだんだもの。機械は私たちの目の前で止まった。人々は息を呑んだ。男の悲鳴が聞こえた。私は声のした方を見つめた。若い女の人の、身体が左右に裂かれている屍体が横たわっていた。血は流れていなかった。焦げ臭いにおいが辺りに漂っていた。機械のレーザー光線で真っ二つにされたのだと、すぐに分かった。

私は屍体の側に近寄った。屍体は、頭蓋から足まで両断されていた。私のよく知っている人だった。パン屋のお姉さんだった。私は睨み付けた、機械のアイセンサーの部分

を。
高笑いがか聞こえた。女の声だった。子供の——女の子の声だった。私は立ち上がった。腕を振り上げて、叫ぼうとした。だけど、その時には、左腕の感覚はもう無かった。灼けるような臭いが鼻をついた。私の腕だけが、女の人の屍体の上に転がっていた。

痛みは感じなかった。熱いとだけ感じた。誰かが、私の身体を強く抱きしめた。姉さ

んだった。痛みは感じなかった。立っているのかどうかすら分からなかった。宙に浮いているような感じがした。

突然の悪寒で目覚めたときには、私は川の中にいた。必死に藻掻いたけれど、片腕だけではどうしようもなかった。水の冷たさが、身体の芯まで浸みてきた。叫いた。意識を保つために、私は必死で叫んだ。

「寒いよ。寒いよ……」

叫ぶたびに、口の中へ水が入り込んでくる。薄れゆく意識の中で、私は何もできなかった自分を怨んだ。

くく

月照らす、少女の過去

あれから、どれほどの時が経ったのかはわからない。

私は意識を取り戻した。暗い部屋だった。ロケット団の地下秘密基地の一室である
と、あとから教えてもらった。

目の前には、白衣の男が立っていた。あなたも知っている男、シグレ。私はとっさに
逃げようとした。でも、身体は動かなかった。シグレは笑いながら言い放った。

「無理だよ。きみの身体は動かない」

「卑怯よ。こんなことするなんて、卑怯よ」

「私は何もしていない。きみの身体が、使い物にならなくなっているだけだ」

シグレの言葉を聞いて、私は首を回すと、ベッドに横たわる自分の身体を見つめた。
左腕は焼き切られていた。残りの四肢は、腐ってもいるかのようにはぐずんでいた。腐
臭が鼻に漂った。私は思わず、顔を背けた。その反動で雫が滴った。知らぬ間に、私は
泣いていた。喉をひきつらせながら、むせび泣いていた。

「私の身体……どうしちゃったの？ 変だよ。ぜんぜん動かないし、変な臭いがする
よお。でも、痛くないの……どうしちゃったの？ 私の身体、おかしくなっちゃったの

「？」

無言のまま、シグレは頷いた。男の口の端に、うつすらと笑みが浮かんでいたことを、私は今でも覚えている。

「どうして？ それに姉さんは？ 姉さんも死んじゃったの？」

「きみの姉さんは無事だ。いま、別の場所での治療を受けている」

「それじゃ私は？ 私はどうなるの？ この身体はどうなるの？」

「長期にわたって冷たい水に晒されていたキミの身体は、重度の凍傷によって、皮下の筋肉組織や骨組織が完全に壊死し、腐敗した状態になっている。奇跡的にも無事だったのは、内蔵の一部と脳だけだ。キミ、自分の身体を鏡でみてみるかい？」

私は激しく首を振った。体中が腐敗している——そんな自分の姿など見たくもなかった。

「私……死ぬの？」

「嫌かい？」

「嫌だ。死にたくないよお。私、死にたくないよ。なんで……なんで、こんなことになるの——」

「元に戻る方法が——助かる方法が、一つだけある……」

シグレは言った。私は、泣きはらした醜い顔を、彼へと向けた。

「ただ……そのためには、自分を捨てなければならぬ。そして、過去を背負わなければならぬ。それが、生き延びることと引き替えの代償だ。無理強いはいらない。別に私は、キミが死ぬことを選んでも、困りはしないから。どちらにしろ、キミは私の実験材料になるのだから——」

「生きたい……死にたくない……こんな、こんな死に方したくないよ……」

私の目から、大粒の涙が溢れ出た。死にたくない。こんな——こんなに惨めな死に様は晒したくない。ここで死んだら、何のために母と父を見捨てたのか——いろいろな思いが、私の頭の中で交錯していた。そこで導き出された答えは、ひとつだけ。

「死にたくないよお。助けて——私を助けて——」



ラジオ塔前のベンチに座りながら、氷は自分の小さな掌を見つめていた。

辺りは、もう暗くなっていた。街灯の光が、瑞穂の悲しげな表情を照らし出している。ゆかりは、瑞穂の右手を握りしめ、黙り込んだまま俯いていた。

腕の時計は6時を示していた。瑞穂はゆっくりりと、掌を見続けている氷の横顔を伺った。お互いに、一言も発しなかった。なんと言ったらいいのか、分からなかったのだ。

淡い色をした三日月が、雲の隙間から顔を出している。氷は顔を上げ、月を眺めた。月の光が、シャワーのように氷の身体を流れていく。眩しそうに目を細め、氷は微かに息をはいた。

静かだった。少なくとも、3人のいる空間は。そこだけが、別世界のように沈黙に包まれていた。街に溢れるネオンの光も、道路をひっきりなしに駆け抜ける騒音も、瑞穂は感じ取ることができなかった。それほど衝撃が、彼女の神経を麻痺させていたのだ。

氷は、瑞穂の顔を見やった。思わず目があった。瑞穂は、今にも泣き出しそうな表情をしている。氷は少しだけ戸惑いを感じ、それを悟られないように、小さな声で呟いた。

「アーボ……」

「え？」

「死滅寸前だった私の身体は、アーボの細胞と融合させることで、再生していった」
「どういうことなん？」

怯えてでもいるような掠れた声で、ゆかりは訊いた。

「蛇ポケモン・アーボは強力な自己再生能力をもつポケモン。アーボの細胞と融合すること、氷ちゃんの身体に自己再生の能力が備わり、重度の凍傷から回復した——つてことだよ。たぶん。それにしても……人とポケモンの細胞を融合させるなんて——」

「倫理的に許されることではない……と言いたいよね」

瑞穂は、ハツとしたように氷から目を背け、黙り込んだ。頷くことはできなかつた。それは、『今、ここにいる』射水 氷の存在を否定することになるから。

細い目を瑞穂へと向けながら、氷は掌を前へと突きだした。恐る恐る、瑞穂は彼女の掌を見つめた。

掌は変色していく。紫色へと。指先が次第に短くなり、パツクリと腕が裂けたかと思うと、その先から剥き出された牙があらわれた。氷の腕は、一匹のアーボの頭へと変貌していた。

ゆかりが小さく悲鳴をあげて、瑞穂の腰に飛びついた。瑞穂はゆかりを抱きしめ、獣の凜猛な顔を直視した。怯え続けるゆかりの横顔をチラリと眺め、氷は瑞穂に向き直った。

「これが……新しい身体を得た代償。私は人間でも、ポケモンでもない存在。人間として普通の生活を送ることも、野生のポケモンとして調和のとれた自然の中で暮らすことも許されない存在」

哀しげに目線を落として、氷は続けた。

「細胞融合の処置を受け、回復した私は、ロケット団の——組織の中で暮らさなければならなかつた。上から作戦の指示があれば、命令されるままに動くしかなかつた——そし

て、あの女が副長をしていた部隊、『影の妖星』に配属された」

「あの女って……一位力やって人のことだよな」

「そう。私は、あの女の……玩具同然だった。ペットと同じだった。でも、そうなるのは当然だったのかもしれない——」

脳裏に鮮やかに甦る記憶。体中から滴る鮮血、立ち上がる自分。鞭で打ちつけられ、蹴られ、殴られ——それでも死ぬことのできない苦痛。全身を駆ける電撃。それでもなお続く悪夢、終わることのない苦痛——何度も何度も、嘲罵されながら言い聞かされていた言葉——

「私は、人間ではないのだから——」

「そんなことないよ！」

瑞穂は首を激しく横に振り、氷のアーボ頭の手を握りしめた。氷は少しばかり驚いた様子をし、身を強張らせている。

射水 氷が数年ぶりに見せた驚きの表情を、じっと見つめながら瑞穂は何度も首を振った。指先には、強い力がこもっていた。

「氷ちゃんは人間だよ。どんなに他の人と違う身体でも、人間だよ。それに——誰だつて普通に暮らす権利がある。誰だつて、自分のいるべき場所がある。まだ氷ちゃんは、自分の生き方を、自分のいるべき場所を見つけていないだけだよ。普通に生きることが

『許されない』なんて、おかしいよ」

「ウチも……そうやと思う」

ゆかりが、瑞穂の肩越しに氷を見つめながら、細々と呟いている。

「それに、誰かて、自分がどう生きるべきかを、探しているんやと思う。それは、今から始めても遅くはないで」

「どう、生きるべきか——を探す。姉さんは、それを望んでいたのかもしれない——」

「姉さん——？」 瑞穂は訊いた。

「ええ。姉さんも、私と同じように組織の中で育てられた。もつとも、私とは別々の場所だったけど。私が死にそうなほど辛いとき、一人で泣いていると、いつも来て慰めてくれたの。私がこの世で唯一、信頼していた人よ——」

彼女の言葉を聞き、ゆかりは思わず、瑞穂の横顔を眺めた。瑞穂の肩を握りしめ、背中に顔を押しつける。暖かい。目を閉じ、深く息を吸った。

「その、お姉さんも、細胞融合を——？」

「いいえ。姉さんは、私ほど重傷ではなかったから、細胞融合の処置を受ける必要はなかった。ただ、命令でラッタの細胞を融合されたことはあるけど、失敗した。細胞が融合したにもかかわらず、ラッタの形質が発現しなかったの。でも、そんなことは、もう関係ない。姉さんは——」

氷の瞳は、明らかに愁いに満ちていた。声を落とす、力なく項垂れているようにも見える。そんな氷の様子に、瑞穂は少しだけ驚いていた。いままで終始、冷静な態度を貫いていた氷が落ち込む様など、想像できなかった。それほどに、辛い過去だったということか——瑞穂の心は沈んだ。

「姉さんと私は、法柿の協力によつて、組織からの脱出に成功した——」

「法柿？」

「ロケット団員——私たちと同じように、ロケット団によつて家族を失つた孤児よ。彼は、ロケット団に所属しながら、ずっと私たちを脱出させようと考えていた。ロケット団への復讐のときに、利用するためにね」

本当にそうなのだろうか？ 話しながら氷は考えていた。法柿は、本当に自分達を利用するために、脱出計画を実行したのだろうか？

「脱出のあと、私と姉さんはコガネシティに潜伏していた。でも姉さんは——死んだ。コガネ百貨店の屋上から飛び降りて、死んだ」

瑞穂は可愛らしい顔を、痛々しげに歪めた。氷は細い目の奥に、光るものが映った。いつしか氷の腕は、元の細々とした少女のものに戻っていた。言葉遣いすら、幼子のものに変わっていた。

「——姉さん、酷いよ。私だけ、置いてきぼりにするなんて……私だけ、苦しめるなんて

……信じてたのに、ずるいよ。卑怯だよ……姉さんのバカ——」

氷は倒れるようにして、瑞穂の胸に頭を押しつけた。涙声だった。震える声で呟き続けていた。瑞穂は、嗚咽する氷の身体を抱きしめるだけで、何も言えなかった。

月の光が冷たく照らす。哀しみに満ちた、少女の姿を——



「遅れて、ごめん！ ちょっと、事故に巻き込まれちゃったんだ……」

大樹は頭をかきながら、瑞穂に向かって頭を下げた。瑞穂は何も言わなかった。大樹は背中に脂汗が浮いてくるのを感じた。……もしかして、瑞穂ちゃん、怒ってる？

チラと横を向き、瑞穂は驚いたように目を見開いた。

「あ、大樹……くん？」

「え？ あ、うん。久しぶり。大樹——塚本大樹だよ」

怒ってはいないようだった。それどころか、魂が抜けたかのような、気落ちした表情をしている。大樹は心配になって、訊いてみた。

「どうしたの？ 元氣、ないみたいだけど」

「そう……かな。でも、大樹くんも、なんだか青ざめた顔してるよ？」

大樹はドキリとした。動揺を隠すようにして、あたふたと辺りを見回すと、少女の姿が見えた。紫色の髪をしている。泣きはらしたような赤い目を擦りながら、上目づかいに大樹の方を睨んでいる。静止し、少女の姿を見据えた。声が出なかつた。突然、逃げ出したい衝動に駆られた。

立ちすくむ大樹を尻目に、氷は静かに立ち上がった。

「私、帰る。なんだか、今日は調子が悪い——普段は、こんなことしないのに——」
「うん」

氷は背を向け、コガネシテイの闇の中へと消えていく。

しだいにぼやけていく少女の後ろ姿を眺めながら、複雑な思いで大樹は考えを巡らせた。——もしかして、あの子が射水 氷——？

「今の女の子は？」

「射水 氷ちゃん。いろいろ——大変みたいなの」

「そうだろうね……」

「え？　なんで、大樹くんが——」

大樹は慌てたように手を振った。

「いや、なんでもないよ」

大きく息をはいて、瑞穂は、完全に寝入っているゆかりを抱き起こした。つとめて明

るい声を出し、大樹の顔を見上げた。
「それじゃ、行こうよ」



忘却と束の間と

「どうして……どうして、あんなことしたの！」

塚本大樹は、震える声で訊ねた。彼の顔は蒼白だった。せわしなく手元にある布団を握り、ひどく興奮した様子で目の前にいる瑞穂に詰め寄っていた。

何も言わずに、瑞穂は俯いている。目に涙を浮かべ、まるで怯えてでもいるかのよう
にベッドに座り込んでいた。ヒメグマが心配そうに瑞穂の素足を見つめている。彼女の足の裏には、ガラスの破片で切ったとおぼしき傷があった。

「瑞穂ちゃん——大丈夫？」

少女の足の傷に消毒液をつけながら、桃谷望は瑞穂の顔を覗き込んだ。瑞穂は何も答えない。掌で顔を覆い、肩を小刻みに震わせているだけだった。

「黙ってちゃ、わからないだろう？」

いくらか声を落として、大樹は大きく息をついた。思わず望と目があつた。彼女の右目は、大樹を鋭く睨み付けていた。

「そこまで責め立てなくてもいいでしょ、塚本君」

望の口調は大樹を責めているようだった。

「どうして、そんな瑞穂ちゃんに、きつく当たるの？　瑞穂ちゃんは何も悪いことはしてないのに——」

「そう——瑞穂ちゃんは、何も悪い事なんてしてないよ。なのに、どうしてこんな事をする必要があるの？　こんなに瑞穂ちゃんが苦しまなきやならない理由がどこにあるの？」

「瑞穂ちゃんを苦しめてるのは、塚本君じゃない！」

「ぼくのせいにするの？　あのね桃谷さん。このままにしておいたら、瑞穂ちゃんはまた同じ事を繰り返すよ？　それでもいいんだね？」

「だれも、そんなこと言っていないでしょ。私はただ——」

瑞穂は呻くような声を出した。

「やめて……やめてよー」

顔を上げ、愁いに満ちた瞳で望と大樹を見つめていた。目から涙が溢れ出ている。大樹は無言のまま瑞穂の方へと向き直っていた。先程よりは、いくらか落ち着きを取り戻したようだ。

「あ……ごめん。瑞穂ちゃんを責めるつもりはなかったんだ。ただ——メチャクチャだよ。いくらなんでも、やりすぎだよ。わかってるの？　自分が何をしたか……」

項垂れ、瑞穂は小さく頷いた。唇が震えている。青ざめた指先で首筋を撫でながら、

焦点のあつていない瞳を泳がせていた。指の隙間から、赤く腫れた首筋が覗いている。

「自分の部屋で首を吊るなんて——ぼくと桃谷さんが来なかつたら、今頃は——」

「塚本君！」

望の怒声で、大樹は押し黙った。思わず、天井を見上げていた。白い天井から突き出た、銀色のホック。真つ赤なビニールテープの輪をくくりつけられていたそれは、まるで断頭台の刃のように、不気味な光を帯びていた。銀色のホックも、ビニールテープの輪も、瑞穂の軽い体重を支えるのには十分すぎる。

もし——もしも自分達が、洲先邸を訪ねるのが少しでも遅れていたら——瑞穂は、確実に死んでいた。それを想像した瞬間、大樹の背筋が凍った。

「嫌だよ……」

ポツリと瑞穂は呟いていた。ゆっくりと首筋から手を離し、頬を流れる涙を拭つていく。

「もう嫌だよ。なんでこんなことになるの——？ どうして、こんな目にあわなきやいけないの？」

「瑞穂ちゃん——」

「私……何も悪いことしてないのに……こんな非道いことされる理由なんてあるの？」

もう、死にたいよ。このまま生きてたって、なにもいいことなんか無いもの——」

瑞穂は布団に顔を押しつけ、嗚咽しはじめた。

無言のまま大樹は腰を上げ、窓際に立ち、カーテンの隙間から外の様子を覗いた。無数のテレビカメラが見える。そのすべてが『事件』に対してではなく、洲先邸へと向けられている。数え切れないほどの、憎悪の視線がカメラレンズの奥に潜んでいるような気がした。

記者がマイクを片手に何かを話している。糾弾の言葉か、それとも悪意に満ちた煽動かもしれない。彼らの中で、少女——瑞穂のの心配をする人間など、いない。誰も、いない。

何故なら彼らは、『正義』を武器にしているから。『反権力』を掲げているから。『自由』を盾にしているから——彼らの世界では、『悪』は『絶対悪』であり、『自分達』こそが『絶対正義』であるから。そう信じ込んでいるから。歪められ、原型を失った『正義』が、誰かを傷つけることになるとは、夢にも思っていないから。そもそも、自分達が歪められていることに気付いていないから。

瑞穂の父であり、洲先クリニック院長でもある洲先祐司が失踪したことによって、各マスコミの報道合戦の矛先は、院長の戸籍上の一人娘、洲先瑞穂へと向けられることになった。

発端は『フォックス』という週刊誌だった。瑞穂の通うトキワ大学が、洲先クリニッ

クの付属学校である事実を取り上げ、洲先瑞穂の裏口入学だったという記事を書いたのだ。もちろん事実ではないし、瑞穂自身もそのことを否定した。だが、そんな瑞穂の訴えは、世間に届く前にマスコミによって掻き消されてしまっていた。

陰湿な落書きで汚れたブロック塀や、テレビカメラから視線を外し、大樹はカーテンをぴたりと閉じた。泣きじやくる瑞穂の隣に座り、際限なく震え続ける背中をさすってあげた。

悔しい。大樹は唇を噛みしめた。何もできない自分が悔しかった。慰めてあげることもできない自分を呪いたかった。

「もう……いいよ……」

ふいに瑞穂の震えが治まった。顔を上げ、口の端をひきつらせながら、自嘲的な口調で彼女は呟いていた。その瞳から、既に光は失われていた。

「大樹くんも……望ちゃんも……無理しなくてもいいよ。みんな……みんな私がキライなんだから。私は、いつだって嫌われるんだから……もう馴れちゃってるから、無理しなくてもいいよ」

笑っていた。卑屈な笑いだった。思わず、大樹は瑞穂の表情を覗き込んだ。彼女が、こんな気味の悪い笑顔をしたのを、彼は初めて見た。

「大樹くんもさ、望ちゃんもさ——私が、大きな病院の院長の娘だから優しくしてくれた

んでしょ？ 私に媚びてたら、この先、いいことでもあると思つてたんでしょ？ 無理しなくてもいいって——もうパパは……お父さんは、どこかに逃げちやつたから、いくら私に優しくしても無駄でしょう？」

次の瞬間、大樹の掌が火を噴いた。息つく暇もなく、瑞穂を張り飛ばしていた。

瑞穂はベッドから落ちていた。紅く腫れた頬に手をあてながら。大樹を睨みながら。彼は、視線の先に呆然と立ちつくしながら、怒気をあらわにしていた。

「なんだよ、それは。おまえ……いや、瑞穂ちゃんは、いままで本気でそう思つてたの？ ぼくや桃谷さんが、瑞穂ちゃんと仲良くしていたのを、そんな風に考えてたの？ ふざけないでよ——ぼくは、瑞穂ちゃんのことが好きだから——」

瑞穂は、カツと目を見開いて、叫んだ。瞳から、また涙がぼろぼろとこぼれている。「嘘つき！ みんな嘘つきだもの——だから、誰もいらぬ。友達なんていらぬ。一人でいたほうが楽だもん。裏切られるくらいなら——もう誰もいらぬ。みんな、いらぬいもん！」

興奮している大樹を壁際に追いやり、望は瑞穂の近くに寄つた。少女の頬をさすつてやりながら、落ち着き払つた様子で訊ねる。

「何かあつたの？ もしかして大学で、誰かに何か言われたんじゃないの？」

瑞穂は急に黙り込んだ。それが答えのようなものだ。

「言われたのね？」

ゆつくりと立ち上がり、瑞穂はベッドに座った。

「いけない、って。もう、おまえなんか知らない、って。——最初、何がなんだか分からなかった。でも、だんだん、その言葉の意味が分かってきた。気付いたときには、私、昔に戻ってた——昔と同じような、嫌われ者になってた——」

望は目を閉じた。大樹は困惑していた。すすり泣く瑞穂を見つめ、続いて自分の掌を凝視する。声が聞こえた。大樹は恐る恐る瑞穂の顔を見つめる。涙を二の腕で拭い取ると、少女は切なげに話しはじめた。

「大樹くん……どうして私が——こんな子供が——大学にいるのか、理由を知ってる？」
「え——？」

大樹は戸惑いを隠しきれずに後ずさった。

「それは、瑞穂ちゃんの努力で——トキワシティで有名な天才少女だからだろうか？」

「違う」低い声だった「それもあるかもしれないけど……違うよ」
「どういふこと？」

「私、嫌われてたから——みんなから。小学校に入学したとき、からかわれた——かわつた名字だから——おかしな名字だったから。誰かが私を悪く言うたびに——私が、それで何か言い返すたびに——みんな笑って、私のこと馬鹿にして——いつのまにか——最

初からかもしれないけど——私はひとりぼっちになってた」

冷たい口調だった。おとなしい瑞穂には似つかわしくない口調だった。誰にも触れられたくない過去——瑞穂は、心の奥にしまいこんだそれを、痛みに耐えながら必死で吐き出そうとしている。元に戻るために——自分らしさを取り戻すために。

「みんなが私を苛めた。周りの人は、みんな気付いていたのに、誰も手を差し伸べてはくれなかった。私は逃げた。適当に理由を付けて、編入試験を受けて、大学に入った。でも、そこでも何も変わらなかった。私はコードモだから——いろんな人からかわれて——でも、それでも私を認めてくれる人が、私と友達になってくれる人がいた——」

瑞穂は肩を落とし、小さな溜息をついた。ひどく悲しげな、寂しそうな面持ちで。

「でも——それは偽りだった。私は、まやかしの愛情に弄ばれただけだった——」

望も大樹も、言うべき言葉を失っていた。項垂れ、ただ瑞穂の嘆きを聞き入れることしかできなかった。いつしか、黒く染まった空。沈黙は時の流れの感覚を、恐ろしいほどに麻痺させていた。

重い空気を振り払うように、大樹は立ち上がり、窓を開いた。外に陣取っていたマスコミの数は減り、静かになっていた。冷たい風が吹く。瑞穂は身を縮め、布団の中に入り込んだ。

「ぼくを——ぼくたちを信じてはくれないの?」

「みんな、嘘つきだから——誰も、信じていけないよ。みんな、嘘つきだから。私のこと騙して、平気な顔してるから。大樹くんが、本当に私のことを好きでも、私は——」
「さつきは叩いて、ごめん。——それだけ伝えれば、もう、ぼくは何も言うことはないよ」

「わからなくなったの——誰を信じればいいのか。自分しか信用できないような、悲しい大人にはなりたくないのに——」

瑞穂は、大樹の胸に顔を埋めていた。隣では望が、微かな寝息をたてて眠っている。大樹の鼓動が聞こえた。息を潜め、静かな夜に身を任せながら、瑞穂は呟いた。

「私、嫌な子だよな? 性格、悪いよね……。だから、いつも嫌われる。いつも、苛められる。ずっとそうだった——なのに、どうして、大樹くんと望ちゃんは、そんな私に優しくしてくれるの? わからないよ——わからないから、本当に信じていいのかも、わからないよ——」



「——でも、なんとなく解るようになった気がする」

棒棒鶏を口に運びながら、瑞穂は物思いに耽っているような眼差しで語った。大樹

は、彼女を正面から見据えている。ゆかりは、包子を握ったまま眠っていた。

中国料理専門店『大梁狛』は大勢の客で賑わっていた。だが、どこかもの静かで、語らうにはもってこいの場所だった。

空になった棒棒鶏の皿が運ばれていく。瑞穂は紙ナプキンで口許を拭い、烏竜茶の入った湯飲みに手を伸ばした。少女の瞳は、大樹を捉えて離さない。

「ユユちゃんと出会ってから、私はユユちゃんを守りたいと思うようになった。私は無力だから、誰も守れなかったけど、それでもユユちゃんのためなら、自分の命を捨ててもいいと思えるようになってた。大樹くんも——今の私と同じ気持ちだったんだね——」

大樹の表情が緩んだ。瑞穂も微かに微笑み返し、続けた。

「大切な人を守りたいと思って、初めて解るのかもしれない——誰かを愛することで、初めて理解できるものかもしれない——人を信じること。それって、人を愛することと同じことなんだよね」

「うん——そうだね」

烏竜茶を飲み干し、瑞穂は言った。

「だから、一番大切なことは、誰にも裏切られないような人間になること——誰からも愛されるような人間になることだよ。私もいつかは、そういう人になりたい——」

瑞穂は、楽しそうな微笑みを浮かべた。嬉しい、楽しい——大樹の側にいると、辛いこと、悲しいこと、悪いことを、一瞬だけでも忘れることができる。瑞穂は、そう思っていた。暗く、沈んだ気持ちをも明るくしてくれる。なぜだろうと、大樹と会う度に考える。だが、その考えは長くは続かない。大樹への胸の高鳴りが、瑞穂の思考を暫し止めるからだ。

「ぼくのこと、信じて——愛してくれる？」

大樹は訊いた。瑞穂は勢い良く頷いた。

「私——人を信じてる。もう一度、信じてみようと思う。もちろん大樹くんも、望ちゃんも。——それに誰も信じないような人は、誰からも信じてもらえないしね」

天使のような瑞穂の微笑みに、大樹は酔いしれていた。数時間前の悪夢を、ほんの少しの間だけでも忘れられるだけ、彼は幸せだった。



死劇の発端

射水 氷は、虚ろな瞳で街の灯りを眺めていた。

月の光を眺めることを好む彼女に、この光は強烈すぎた。目を閉じ、瞼の裏でなお光り輝くネオンの灯りから目を背け、小さな溜息をついた。白い肌が看板のネオンに照らされ赤や青へと二転三転し、光の途切れる一瞬だけ黒く染まる。

側を歩き交う人々は、怪訝そうに氷の顔をチラリと見つめただけで、気にすることもなく去っていく。だれも「お嬢ちゃん、どうしたの?」「迷子なのかい?」お母さんとはぐれたの?」などと訊いてはこない。それがこの街、コガネシティを象徴しているな、と氷は思った。自分は自分、他人は他人。面倒なことに関わるのは、誰だつて嫌なのだから。

また光が途切れた。目の前が一瞬の間、闇に満ちた。空を見上げ、月を見上げ、氷は寂しげに肩を落としていた。

過去とはなんなのか。自分とは何なのか。氷は少しだけでも、それらの持つ意味を考えたかった。なぜ、姉は死んだのか。なぜ、死ななければならなかったのか。なぜ、皆

が殺されなければならなかったのか。なぜ自分は、こんな身体にされなければならなかったのか。

すべては理不尽なこと。今まで「運が悪かった」の一言で済ませてきた過去の記憶の裏で、なにかがあつたのかを知りたくなつた。

なぜだろう。昔はこんなことはなかつた。ただ、命令されるままに生きていた。それだけで精一杯だつた。法柿に指摘されるまでもなく、自分が以前と変わつてゐることを、氷は身をもつて感じていた。

洲先瑞穂——あの少女が、自分を変えたのかもしれない。自分と同じように辛い過去を持ちながら、洲先瑞穂は過去にほとんど捕らわれていない。過去をあくまでも過去として考え、今を生きている。過去を、いつまでも今にオーバーラップさせている自分とは、生き方が根本的に異なるのだ。過去の中に生きてゐる自分にとっての救いが、洲先瑞穂の生き方の中にあるのかもしれない。

氷は視線をビルのガラスへと移して、ガラスに反射した自分の姿を見た。泣きはらし、赤く腫れていた瞳は、もう元の冷たい色を取り戻している。微かに頷き、やつとこれで帰れるとばかりに足を一歩前へ踏み込んだ瞬間、少女は背後から呼び止められた。

「久しぶりだね——ぼくのこと、覚えてゐるかい？」

氷は声のする方へ振り返つた。銀色の長髪、頬に刻まれた黒いタトゥ、鍵の形をした、

小さなピアスをした少年が立っている。アルフの遺跡で出会った、不思議な少年だった。

「名前、言つてなかったよね。ぼくの名前は、サリエル」

「変わった名前ね——」

表情も変えずに、氷は言い放った。彼女にとって、この広い街の中で再び出会うという偶然程度では、さして驚くことに値しないのだろう。それに、もはや氷は少年に興味などなかった。洲先瑞穂のことだけで、頭が一杯だった。

サリエルは形だけの微笑みを浮かべながら、氷に寄り添った。

「淋しいの?」

「そうね——寂しいのかもしれない。悲しいのかもしれない。今まで、ずっと忘れていた、人の心が感じるのよ」

横目でサリエルを牽制しつつ、氷は呟いている。白い仮面を被ったような表情の奥に、普通の女の子の、涙にまみれた泣き顔が見えた。

彼女の手をとり、サリエルは軽く口づけをした。冷たい、夜の外気に晒されていた氷の掌に暖かみは感じられなかった。彼女は人間ではないため、普通の人のように体温を一定に保つことができないのだ。

「所詮——人間でない者は、人間にはなれない。人の愚かで醜い心を思い出したところ

で、キミは嬉しいかい？」

「人は——人の心は醜いだけじゃない。人は優しくもなれる。人は正しく生きることできる。あなたの中の『人の心』が、勝手に『人の心』を醜いと判断しているだけに過ぎない」

氷の言葉に、サリエルは気色ばんだ。怒ったような表情で、歯を剥き出しにしている。ゆっくりと顎に力を込めた。彼女の紙のように白い指先に、赤黒い血が滲んでいく。

「君は、ぼくにも——人の醜い心があると聞いたんだね？　ぼくが、勝手に人を憎んでいるだけだと思っているんだね？」

「それは怒りよ——人の心がなければ、怒ることはできない」

「怒りは、すべての自我を持つ生物に存在する本能だ。心とは違う——」

サリエルは、氷の人差し指を噛み切っていた。氷は、目を少し細めただけだった。赤黒い鮮血が、彼の口許を染めている

「たしかに、ぼくにも心はある。でもそれは、醜い人の心ではないよ。人にとって、もっとも理想的な心を、ぼくは持っているんだ」

氷はサリエルの瞳を見つめ、そして自分の指先に視線を移した。

「人の指を平気で噛み切るような人間の台詞ではないわね——たしかに普通の人の心をもっているわけではなさそう」

「やつとわかったかい？」

「ええ——あなたが、ただのガキだということがね——あなたがもっているのは、『ただのガキ』の心よ。すべてが自分の思い通りになると思っている。思い通りにならなければ、今のように力で思い通りにさせようとする。好きな女の子に、素直に自分の気持ちを伝えられずに、ちよつかいをだす——ただのガキよ」

サリエルは唇の端を歪めていた。今にも、殴りかかりそうな形相だった。

「それは——そうかもしれない。だけど、人間は大多数が醜い心を持っているのは事実だよ。キミの言うような、綺麗な心をもつ人間は殆どいない。だから、ぼくは人間を裁くよ。たとえキミの言うように、ぼくがただのガキでもね。ぼくには、その権利がある——」

「どうして?」

「ぼくが、『あの力』を受け継いでいるから——ぼくは、選ばれた神子だから——人間の醜さがわかるんだ。だから一度、滅ぼさなくちゃいけないんだ」

氷は眉を潜めた。「あの力——?」

「おつと……喋りすぎたよ。でも、君もいつかは理解できるはずだ。ケガレタ人間——お互いを理解することもできない、自分勝手な人間の姿に。君から、大事なものを奪っていったのは、すべて人間のはずだ。醜い、愚かな人間のせいで、君はすべてを失った

んだから。君の姉さん。君のお父さん、お母さん。みんな——みんな、醜い心をもった人間がいるから——」

「たしかに人間は、卑怯で醜いと思う。私が言いたいのは、すべての人間が汚れているわけではない、ということよ」

サリエルは上目遣いで氷を見つめた。彼の顔は、夜の闇のせいもあつてか、不気味なほど蒼白に映っていた。口許から滴る鮮血だけが、色を帯びている。まるで、その部分だけに生命があるよかのようなだった。

「キミが何を知っているんだ。キミも歴史を良く知るべきだ。そしてちゃんと考えるべきだ。人間の争いの歴史を——人間の争う理由を。争いを捨てることのできない人間など、滅ぼされるべき——浄化されるべきなんだ」

氷は何も答えなかった。無表情のまま彼に背を向け、何事もなかったかのように歩き出した。

サリエルは後を追いかけるようなことはしなかった。寂しげな影を帯びた表情で、氷の背中を見つめることしかできなかった。どうしてなの？ と問いかけているような——理由もなく、理不尽に怒られたあとの子供のような瞳で。

「ひとつ教えて——」

出し抜けに氷は眩いた。サリエルは小さく首を傾げる。

「何が——あなたを、そこまで歪ませたの？ どうして、あなたはそこまで人間を憎むの？」

彼は目を閉じた。氷は、背を向けたままでサリエルの言葉を待つている。ゆつくりと首を横に振り、静かな口調で彼は答えた。

「この世界は汚れている。そう——人間が汚したんだ。だから、ぼくは人間を憎む。どうだい？ 簡単な理由だろうか？」

「そう——たしかに、わかりやすい理由ね」

サリエルが、感情のない微笑みを浮かべている。それが一時の別れに対する、彼なりの挨拶なのだろうか。振り向くこともなく、氷はサリエルの微笑みから遠ざかっていった。

嫌な寒気が体中を包んでいるような感覚に襲われ、彼女は身震いした。苛立ちが、心の中で疼いている。辺りは眩しいほどに明るいのには、氷の視界は黒く塗りつぶされたように暗かった。ついに耐えきれなくなり、少女は寂しげに呟いた。

「嘘つき——」



ホテルに戻ると、氷はすぐに冷たいシャワーを浴び、ぐったりとした様子でベッドに横になった。

法柿はパソコンのディスプレイから視線をそらし、氷と顔を見合わせる。小さな裸体を毛布に沈め、彼女は呟いた。

「疲れた……」

「おまえは、いつも疲れてるじゃないか——で、何かわかったのか？ 洲先瑞穂のこと」
頷く。仰向けになり、天井を眺めながら。そこに、瑞穂の可愛い顔を投影させながら。

「変わった娘よ。普通じゃないわ。とんでもない、お人好し」

「いや……そうじゃなくて、『あの事件』についてのことを訊いたんだが」

きよとんとしながら、氷は横目で法柿を見やった。口許だけで笑う。

「何も知らないらしいわ。ただ、洲先祐司の失踪に疑問を抱いてはいるようだけど」
「で——その後、俺達のことも話して、ピーピー泣いたと……」

血相を変えて、氷は飛び起きた。

「どうして、それを——まさか」

「盗聴させてもらった。余計なことまで喋られると厄介だからな」

氷は、法柿を睨み付けた。彼は肩をすくめ、立ち上がると、氷の隣に横になる。

「悪かったよ。そんなに怒るな。おまえのためを思ったやっただから——それよりも、あの男はなんなんだ？ やけに、おまえに馴れ馴れしかったが」

「彼、頭がおかしいのよ。きつと」

怪しむような目つきで、法柿は溜息をついた。

「なんか、おかしいこと言ってたしな……それに、あの男、おまえのことが好きみたいだぜ？ 変な奴だよな」

「殺すぞ」

無表情のまま、氷は言い放った。彼は大仰に手を振り、弁解した。

「冗談の通じない女だな……おまえ。まあ、俺も人のことを変人呼ばわりはできないが」

「法柿も、私のことが好きだったりする？」

冗談混じりに、挑発するような口調で氷は訊いてみた。法柿は鼻で笑うと、すぐさま翻り、相手の裸体を抱きしめた。息が詰まった。怯えるようにして氷は身をすくめ、虚ろな瞳を彼へと向けた。法柿は視線を少女へと向けたまま、怒ったように吐き捨てた。

「もつと早く気づけよ——氷」

氷は言葉を発することができなかつた。硬直したように強張った身体が、熱い。それでもなんとか腕を振り回し、法柿をベッドから払い落とした。

少女の裸体から無数の触手が、溢れるように伸びる。幼さを色濃く残す氷の顔が、醜

い獣のものへと変貌していく。咆哮。一瞬だけ、空が揺らめくような感じに襲われた。白かった触手が、不気味な紫へと色を変える。やがて、氷の身体は完全に、バケモノへと姿を変えた。

獣の鋭い眼光が、法柿を捉えている。

「これが——私の本当の姿。それでも法柿は、私を愛してくれる？ 無理よ——所詮、私は人間ではない——人間の姿を偽る、醜い獣——」

法柿は長い間、獣の姿を見つめていた。やがて立ち上がり、無言のまま、蠢く触手の中に手をつっ込んだ。獣の触手は驚いたように激しく動く。法柿は獣を引き寄せ、抱いた。無数の触手が、法柿を取り囲む。

「恐がるなよ——怖れるなよ——」

宥めるように法柿は囁いた。彼を締めつけていた触手が、段々と縮んでいく。鱗で覆われていた獣の皮膚が、柔らかくなっていく。

「愛されることを、恐がるなよ——」

「でも、私は……あの女に……」

「あの女のことなんか考えるな。忘れなくてもいい……でも、おまえはもう、昔のおまえじゃない。もう、怯えなくても、恐がらなくてもいいんだよ」

いつしか氷は、もとの少女の姿に戻っていた。法柿に抱きしめられながら、彼女はか

細い声で訊いた。

「私も、人でいたい……私だって、誰かを愛したいし、愛して欲しい……」
「だろ？」

法柿の荒い息が聞こえる。氷は彼の温もりを、身体の内まで感じていた。だがそれは、ほんの一時の安らぎに過ぎなかった。

今という時が、永遠に続けばいい……射水 氷は、切実にそう願っていた。嫌な過去も、重苦しい未来も、何も考えずに済む、今という時間が、永遠に続いて欲しい——



彼は、死劇の発端となる男だった。

だが、所詮は発端ではない。すべては『あの御方』のために——すべては『あの御方』の言葉のままに——すべては『あの御方』の予言のままに——すべてを『あの御方』の望みのままに——

漆黒のローブをはためかせ、男はエンジュシティへと続く道の、小高い丘に立ち、コガネシティの夜景を展望していた。涙の雫のように透き通った水晶玉を手を、その手に握りながら。

すべてが始まろうとしている。不思議な光を放つ、水晶玉の奥底を見つめ、男は考えていた。奴等の思い通りになどさせてなるものか……と。

荒れた荒野に、花は咲かない。一度滅びた世界は、元には戻らない。それでも、滅ぼさなければならぬほど、この世界は汚れ、力の均衡を保てなくなつたのだろうか。それは違う。奴等の——奴の考えは間違っている。世界など、汚れたままでいいのだ。その中で“この力”を使い、すべての者の頂点に立てばいいのだ——この、私が。

あの御方は、それを許してください。それだけでなく、私にチャンスまで与えてください。驚くほど鮮やかな手際で。

「恐ろしい御方だ——」

戦慄したような声で、男は小さく呟いた。ふいに吹いた突風を、彼は普段よりも冷たいと感じていた。水晶玉を懐にしまい込み、コガネシテイのきらびやかな夜景に背を向け、足早に歩き出す。

あの御方には感情というものが無いのか。奴を裏切ることを、なんとも思っていないのか。そもそも何を企んで、こんな事をしたのだろうか。私はいいように、あの御方に利用されているだけなのかもしれない。だが、それでもいい。あの御方は、約束してくださった。私が“この力”をつかい、世界を治めることを許してください。

「それなら、あの御方は、何をしようとしている——？」

復讐なのか、野望なのか——ありとあらゆる可能性を思い浮かべる。思考の堂々巡りだった。一向に考えは、前へ進むことはない。彼の頭では、『あの御方』の考えは絶対理解できないものなのだから、無理もない。自分が使い捨ての人形にされていることすら気付かないのだから。

夜の闇に溶けこんで、男は消えた。多くの死を、引きずりながら——



#11 幻牙。

黒い霧雨

黒い手が、そこまで迫っていた。

霧状の闇が、背後で、邪悪な笑みを浮かべながら集まっている。光を閉ざす狭く高い森の奥に、普通ではあり得ない特殊な力が満ちている。

細々と輝く月の光をもものともせず、影は身体を取り戻した。集結していく霧の中で、新しい身体は膨らんでいく。時間と共に失ったはずの、闇を纏った実体が。

目を見開く。瞬時のうちに。血のように赤い、海の底のように妖しい色をした瞳。狡猾さを隠すことのないそれは、独りの女性を見つめていた。

どこにでもいそうな普通の女性だった。おそらくポケモントレーナーなのだろう。肩には進化ポケモンのイーブイが、ちよこんと乗っている。

影は身を起こした。口を開く。鋭い牙が黒く光っている。身の回りに漂っている黒い霧を吸い込む。影が、大きく膨らんでいく。やがて影は空を覆い、月の光を掻き消した。

異変に気付いて、女性は振り向いた。目の前では、不気味に蠢く黒い影が、その瞳が、

女性の姿を捉えている。

自分を狙っているんだ。女性はすぐに身の危険を感じた。首筋に、生温い汗が滲む。イーブイは女性の肩から飛び降り、影を睨みながら、牽制でもするかのように唸っている。

「なに……これ……う！」

一歩後ずさる。湿った地面の柔らかい感触が、恐怖をさらに身近に感じさせる。これは現実だと。決して幻などではない、本当の闇であると。

影は口を大きく開いている。今にも、女性を飲み込んでしまうほどに。その奥にはピンク色の舌が、うねうねと気味悪く動いている。

「ブイちゃん。逃げよ」

唸り続けるイーブイを抱きかかえ、彼女は影に背を向け全力で走り出した。辺りに生い茂る草を必死でかき分ける。足音は止まらない。息が弾む。それでも彼女は止まらない。

不意に彼女は倒れた。何かが足に引っかかったのだ。しかも転んだ拍子に膝を擦り剥いたらしく、血が滲んでいる。ゆっくりと起きあがり額の汗を拭うと、彼女は足もとを見やった。

腕だった。黒い腕。地面に広がる影から、伸びるようにして彼女の足を掴んでいる。

女性は目を剥いた。そして悟った。逃げられないと。

この森の影すべてが、あの化け物の一部分なのだから。どこまで逃げても、逃げられるはずがないのだ。自分の足下から黒い影が伸びている限り——夜が続く限り。

腕が伸びた。黒い地面に真っ赤な瞳が開いた。見つめる。獲物の姿をじつと見つめる。口を開く。鋭い牙が見える。

女性は胸に抱いたイーブイを庇うようにして影と向かい合った。もう、逃げることはできない。逃げる気力すらなかった。呆けたように、空の月を見上げ、涙を流しながら笑うしかなかった。なぜ笑うのか。恐怖に苛まれていたはずなのに、どうして笑うことができるのか。そこまで彼女は考えることができなくなっていた。

黒い影の罫——催眠術にすでに彼女はかかっていたのだから。恐怖で我を失った人間の心を弄ることなど、影にとつては造作もないことなのだから。

夜明けまで、彼女の笑い——悲鳴は途切れることはなかった。



「目が覚めたか？」

声が聞こえる。目を開く。朧気な景色が、時間と共にはつきりと見えてくる。声の主

——老人は『彼』の方を見据えながら、話していた。

「不思議なものだ……おまえはあれから、ずっと眠っていたんだぞ。そして、ずっと夢を見ていた。勝手に覗かせてもらったよ。あの事件の夢を見ていたのはわかってるんだ。それにしても非道い……あれは本当に非道い事件だったな」

手に持ったライターをつける。赤々と燃えさかる小さな炎。彼の瞳が、大きく見開かれた。

「忘れるな……あの時の理不尽さを忘れるな。悔しさを、憎しみを、恨みを——忘れるな。それが、おまえの力となるのだから……」

老人が話し終えないうちに、彼は立ち上がった。何故かはわからない。ただ、なんとなく聞こえるのだ。立ち上がれ、と……自分の声が。

「どこに行くんだ？」

年齢のせいで掠れてしまった老人の声は、既に彼には聞こえていなかった。歩き出す。声の示す先へ。そこで、自分の探していたものが見つけられるような気がしたから。

老人は、彼の後ろ姿を眺めていた。止めても無駄なことを承知しているかのように。

「おまえも……彼女も……もう死んだんだ。どこを探しても、見つかる筈がないのに——」

咳き込む。老人は諦めたように首を振り、しわがれた声で、いつまでも嘆いていた。



カーテンが風に吹かれてはためいている。塚本大樹は立ち上がり、音をたてないようにゆっくりと窓を閉めた。偶然にも見上げた先に月が見える。細々として、弱々しい光を放つ月。それと共に浮かび上がる、鮮烈なイメージ。

（妹は、いつも月を眺めていました。哀しいときも、哀しいときも、哀しいときも……）
「おいおい、なにボーツとしてんだよ？」

職場、コガネポケモン研究所の同僚が、大樹の肩を叩いた。心配そうに眉をひそめている。
「いや、なんでもないよ」

大樹は軽く首を振ると、自分の席に座った。大きく息を吐く。もうすぐ就業時間も終わるのだから、せめてそれまではしっかりしていなくてはいけない。そう、心の中で自分に言い聞かせた。

瑞穂がコガネシテイを発つてからというもの、大樹はぼんやりとすることが多くなつた。当然、仕事上のミスも目に見えて増えていた。先程も、研究用のアンブルを取り違

え、大目玉を食らったばかりだった。

何をするとともに、常に大樹は考え事をしていた。大事な実験の際も、食事中も、夢の中でさえ考え続けた。「ノイローゼじゃないのか？」と職場の友人が心配して言うほどに。大樹は、自分の悩みを誰にも——瑞穂にさえも、打ち明けていなかったのだ。

射水 冷と名乗った少女の言葉の一言一言が、胸の中でしこりとなって残っている。彼女は何だったのか。自分で、自分のことを「以前に死んだ」と言っていた。霊——いままでもそんな非科学的なものを信じたことなどなかった。信じていなかったからこそ、余計に衝撃が大きかったのかもしれない。

わからないのは、なぜ急に霊の姿を見ることができるようになったのか、ということだった。考えられる可能性は一つだけ——あの時ぶつかった、黒いローブの男。その男の持つていた、奇妙な水晶玉。その出来事の直後に、射水 冷と出会ったのだ。

（だから私は死ぬしかなかった。これ以上——妹を悲しませたくなかったから。妹を悩ませたくなかったから。妹には普通の女の子として生きてて欲しかった——）

背中から絶え間なく鮮血を吹き出しながらも話し続ける、冷の悲しげな面持ちが、大樹の脳裏に焼きついていた。まるで、真紅の翼をはやした天使のような、幻想的な、現実離れした美しさ。だが、可憐な姿とは裏腹に、彼女は永遠の苦痛に耐えなければならぬのだ。

それほどの代償を払ったのに、現実には彼女の望みとは正反対の方に進んでいる。そのことを大樹は、射水 氷と出会うことで、瑞穂から事情を説明されたことによつて知つた。

事実を、まだ冷は知らない。

教えてあげなければならぬ。余計なお節介かもしれない。事実を聞いてとても悲しみ、嘆くかもしれない。だが、何も知らずに、ただ妹の幸せだけを願つて死んだ冷があまりにも哀れだった。

仕事が終わると、大樹はすぐさま路地裏へと走つた。冷に事実を——射水 氷のしやうとしてゐることを教えるために。

路地裏は静かだった。ひんやりとした空気が、頬を撫でる。迷路のようにならぬついでに金属製のパイプの先端から、蒼い雫がしたたり落ちた。思わず身震いしてしまうような気味の悪い音が響く。

ゆつくりと大樹は辺りを見回した。星一つ輝かぬ夜空に、コガネ百貨店の電飾が映える。あの建物——コガネ百貨店の屋上から、冷は飛び降りたのだ。

彼の心の中は、その中心は寒々としていた。なによりも悲しかった。両親も、故郷も、命すら失つてしまった少女が。その境遇が。彼女の選ばざるを得なかった、最後の選択肢が。

射水 冷のいる場所が近づいてくる。大樹は小さく俯いた。彼は、射水 冷からこのすべてを聞かされて以来、心の動揺をひどく恐れていたのだ。ただでさえ大きく振れる、心の振り子。これ以上振りが大きくなれば、自分から離れて、どこかへ飛んでいってしまうかもしれないから。

「探して……みんな探してよう……」

女の子の声だった。水たまりを新聞で叩くような音と共に、小さな女の子の声が、大樹の頭に響いた。彼は思わず振り向いた。こんな時間に、こんな場所に、女の子が独りでいては危険だからだ。

壁に寄り添うようにして、女の子は立っている。ポロポロに引きちぎられた洋服を羽織っているだけで、ほとんど全裸に近かった。そして、表情がなかった。首から上の部位が存在していなかったのだ。

「だれか探して……私のからだ……痛いよ……体中が痛いよう……」

大樹の顔が、色を失った。驚愕で、叫び声をあげることでもできなかった。

一見して、彼女が霊であることはわかった。わかつてはいても、衝撃は相当なものだった。よく見ると、瑞穂ときほど変わらない年齢の子のようだ。細々とした体つきもよく似ている。首がないことを除けば。

「だれか……そこにいるの？」

首のない少女の霊は、大樹にまわりついてきた。ひんやりと冷たい肌触りが襲う。彼は後ずさった。怯えに顔をひきつらせながら。

「お兄ちゃん……探してよ……私ね……鋭田美子っていう名前なの……探してよ、私のからだ……」

鋭田美子という名前には、聞き覚えがあつた。つい最近、この街でバラバラにされて殺された、9歳の女の子の名前だ。彼女の屍体を調べた結果、二人の犯人が上がつたものの、その内の一人は行方不明となり、もう一人は自宅で惨殺死体となつて発見されたという奇怪な事件だったため、よく覚えていたのだ。

大樹は怯えた表情のまま、美子の霊を振りほどいた。何か言葉にならぬ声で叫いたあと、一心不乱に逃げた。彼女の声は追いかける。

「探してよ……逃げないで……あと、頭だけなの……そしたらママに会えるの……」

美子の声は聞かないようにした。頭を振りながら、彼は逃げ続けた。何も考えず、ただ走り続けた。気がついたとき、大樹はコガネ百貨店の誰もいない屋上で立ちつくしていた。

街が見える。多くの霊が見える。みな探している。失つた筈の自分自身を。永遠の苦痛に耐えながら。だがそれが報われることはありえない。彼らは、彼女らは、永遠に苦しむだけの存在。

気が狂いそうだった。辺りを見回し、ラジオ塔が視界に入った瞬間、大樹は吐いた。惨たらしい数日前のラジオ塔占拠事件。その被害者たちの姿に、耐えきれなかったのだ。

「塚本さん……どうしたんですか？」

冷の姿がぼんやりと浮かび上がる。彼女は大樹に話しかけた。屋上のベンチに力なく座り込んだ彼の横から、覗き込むように。怯えきった表情を心配そうに見つめながら。

大樹は、その声が救いであるかのように頷いた。大きな安堵が、心の中でじわじわと広がっていくのが自分でもわかった。

「どうして……こんなことに……」

「え？」冷は、射水 氷とそっくりな、その顔を傾げている。

「なんで僕は、人の魂を見ることができるようになったんだろう。こんな“力”なんて、僕はいらぬのに……」

頭を抱え、現実から逃避するかのよう到大樹は苦しげに呻いた。無数の記憶の欠片が見える。一つ一つに、無残に死んだ人々の苦痛に歪む様が映る。舞う鮮血。四散した屍体。血腥い腐臭――

「どうして……急にこんな“力”が……」

冷は目を細めたまま、大樹の姿を見つめている。何も言わずに、ただ立ちつくしていた。

「あ——」

突然、大樹は顔を上げ、声を出した。それまでと違う、驚きに満ちた声だった。冷は不思議そうな表情で小首を傾げたまま、彼の眩きを聞いた。

「感じる……北に……エンジュシテイに、大きな霊を感じる……それも、二つ」

「二つの巨大な霊……エンジュシテイにですか？」

大樹の顔は青ざめていた。言葉では形容しようのない恐怖を、冷は大樹の表情を見ただけで感じ取った。

「二つは、限りなく黒くて……もう一つは、限りなく白い」



頭上を覆い尽くしている枝葉の間から、朝焼けの空が見えた。朝の日の光とは思えないほどの眩しさを湛えて。まるで、これから起こる惨劇を予知しているかのような、鮮烈な血の色をもって。

瑞穂は眠たげな目を擦りながら、不吉な空を眺めていた。その表情は暗く、悲しい思

い出の甦るたびに影を帯びた。

誰も救えなかった——無力な自分。泣き叫ぶヒメグマと、彼の目に浮かんだ狂気の欠片。そして自分を自分でないものにした、救いようの無い殺意。すべてが——すべてが悲しく、何もすることのできなかった、一つの記憶。

だが、自分は帰ってきてしまった。エンジュステイへ行くには、この森を通るしかないのだから、仕方がなかった。もう、二度と来るつもりはなかったのに。

先の見えない森の木々の間を歩きながら、ゆかりはしきりに辺りを見回していた。

「ヒメグマちゃん。今頃、どないしてるんやろ……」

「どうだろう。やっぱり、まだ私たち——人間のことを怨んでいるかもしれない。無理もないよね。あんなことされたら、誰だって怒るよね」

ゆかりは目に一杯の涙を浮かべて、反論した。

「そんなん……悲しすぎるやん」

瑞穂は、ゆかりから目を背けただけで何も言わなかった。沈黙が落ちる。ふと、森には似つかわしくない異様な静けさが辺りに満ちていることに気付いた。動物の気配が無い。まるで森全体が精気を失っているようだった。

「ねえ、ユウちゃん——」

「なに？」

「なんだか——変じゃない？ この森。前に来たときよりも——」

二人は不安感を抱きつつ歩き、森の中央にある草原にでた。そして見つけた、懐かしさよりも先に。それまで感じていた違和感の一端を。湖の水が赤く、血の色に染まっていることに。

自分の目を疑いつつも、瑞穂とゆかりは湖に駆け寄った。湖の底を覗き込む。二人は、息を呑んだ。何を言うこともできなかった。ただただ眼前の事実には打ちのめされるだけだった。

湖の底には、あの時に会ったリンググマ達の屍体が沈んでいた。彼らの屍体から滲み出るエキスが、湖を真紅に染めていたのだ。もはや、彼らは原形を留めていない。黒ずんだ屍体から、淀んだ死臭が放たれている。

「これは……一体……」

ゆかりを胸に抱き、瑞穂は呆然と呟いた。その時、背後に弱々しい気配を感じた。

瑞穂は振り向いた。目の前に倒れていたのは、左腕の無いヒメグマ——あの時に逢った、悲しい思い出の中にある、彼だった。

ヒメグマは呆然と瑞穂を見ていた。感情を感じさせないその瞳が、彼が受けた心の傷の深さを物語っている。何も言わず、何に対しても反応を示さずに、ただ見つめているだけ——

「ヒメグちゃん。ここで、なにがあつたの？」

瑞穂の問いにも、彼は答えなかつた。震えるように首を振ると、背を向けて走り出した。

「待つて！ ヒメグちゃん」

逃げるヒメグマを瑞穂は追いかけた。時折ヒメグマは立ち止まり、怯えた表情で振り返る。まるで、どこかへ案内しているようだ、瑞穂は思った。

辿り着いたのは、森の深部だつた。鬱蒼と生い茂る木々が朝日を遮蔽している。辺りは薄暗く、じめじめと湿つた空気が身体を包むように蔓延している。

激しい悪寒を感じたのは、その時だつた。ゆかりをその場に座らせると瑞穂は、立ちすくむヒメグマに声をかけた。

「ヒメグちゃん——？」

ヒメグマは無言のまま、右手で前方を指し示した。瑞穂は視線を移し、何かを抱きかかえるようにして横たわっている女性の姿を見た。息を呑み、すぐさま女性の側に駆け寄る。意識を失っているようだつた。顔色は青白く、細々とした呼吸が彼女の様態の悪さを表している。腕に抱かれていたのは、怯えきつたイーブイだつた。

当惑している瑞穂の傍らで、ヒメグマは牙を剥いている。何かを警戒しているようだつた。

タイミングを合わせたように悲鳴が聞こえた。ゆかりの声で。瑞穂は悲鳴の発せられた方向へ振り向いた。突如として視界が影に落ちた。先程から感じていた悪寒が急に頂点に達し、体中を冷たい液体が流れるような感覚に身悶えた。身体が思うとおりに動かない。視線の先では、ゆかりが黒い霧に包まれている。泣き叫んでいる。何が起こったのか。自分でも解らないまま、瑞穂は力なく倒れた。

朦朧とした意識の中で、瑞穂はなんとか顔を上げた。見えるのは暗闇と、邪悪な意志を秘めた、二つの妖しい瞳。その奥で、ゆかりが笑っている。焦点の合っていない歪んだ目で。

反射的に、瑞穂は腰につけているモンスターボールを取ろうとした。だが、震える指先では掴むことすらままならない。苦痛に顔をしかめながら、瑞穂は隣で同じように倒れているヒメグマに、小さな声で話しかけた。

「ヒメグちゃん……お願い……このモンスターボールのボタンを……取って……」

ヒメグマは返事をしなかった。人間の言うことに、耳を傾けるつもりなどないのだろう。

「ひ……ヒメグちゃん……お願い……このままじゃ、みんな殺されちゃう……ヒメグちゃんは、このままでいいの？」

瑞穂は諦めなかった。ヒメグマは目を閉じ、しばらく思索していた。そして、首を横

に激しく振りながらも、震える手を伸ばし、モンスターボールを掴んだ。ほとんど自棄に近かった。

妖しい瞳が、ギラリとこちらを睨む。ヒメグマはそれよりも一瞬早く、瑞穂にボールを手渡していた。瑞穂の掌から光が洩れる。影は目を細め、驚きを露わにした。雄叫びと共に、閃光の中からリングマの巨体が飛び出したのだ。

「リンちゃん！ 破壊光線を！」

リングマは口から破壊光線を発射した。鋭い衝撃波が地面を抉る。熱線は影へと突き刺さり、轟音を響かせながら相手を崩壊させていく。白煙がもうもうと上がる。吹き飛ばされた木々と同様、影は跡形もなく姿を消していた。

影が消えたことよって身体の呪縛が解かれたらしい。瑞穂は立ち上がると、ヒメグマを抱きかかえ、ゆかりのもとへと駆け寄った。ゆかりは気を失っている。これといった異常は無いようだった。胸元に黒い痣のようなものができていること以外は。

「ガウツ！」

突如、リングマが吠えた。瑞穂は振り返る。小さな黒い霧の塊が彼女の背後に迫っていたのだ。

瑞穂は思わず飛び退いた。リングマが素速く歩み寄り、鋭い爪を振り下ろす。だが黒い霧は傷つくこともなく、二つに分裂し、リングマとヒメグマの首もとに飛びかかった。

リングマは藻掻いた。ヒメグマは苦しそうに身を振っている。

「り……リンちゃん……ヒメグちゃん……大丈夫？」

リングマの顔を下から覗き込むようにして瑞穂は訊いた。リングマとヒメグマは答えることなく地面に倒れた。その身体に——リングマとヒメグマの首もとに、ゆかりと同じような黒い痣が浮かび上がっている。まるで衣服についた、しつこい染みのように。

瑞穂は立ちつくしていた。朝の日差しが、容赦なく彼女らの胸に刻まれた黒い痣を照らし出している。そしてそれは、じわじわと魂を蝕んでいた。食い物にしていた。

白い瑞穂の頬を、黒い液体が伝っていく。ゆつくりと見上げた空は霧雨に覆われていた。夜のように不安げな、黒い色をした。



無色の残留思念

「塚本さんには、死んだ人間の心が見えるんです……。だから、たぶん塚本さんが見たのは、この街で死んだ——殺された女の子の残留思念なんですよ——」

大樹は力なく頷いた。ベンチに支えられるようにして座っている彼の表情には、疲労が色濃くでている。

「あの子……顔がなかったんだ……首から上が。そのせいで泣くことも、何か見ること、何かを聴くこともできないんだ——」

項垂れた。細々とした息づかいが、彼の動揺を物語っている。朝焼けの空に視線を送りながら、大樹は語った。

「あの子は、ずっと迷子なんだ——心細くて……寂しくて……必死で親を探してるうちに、夜になって——悪い男たちに殺された。両足を斬られて、両手を斬られて……それでもなんとか逃げ出したくて、抵抗して……最後に首を斬られた」

「非道い……事件ですね」

冷が憤ったように呟いた。彼女にとっては、他人事でない事件だった。

彼は再び頷く。そして続けた。

「まだ……あの子は迷子のつもりなんだ。顔がないから、何も見ることができないし、何も聴くことができない——泣くことさえも。だから首さえ見つければ、親を探すことができると思っているんだ——」

大樹は、それだけ言うのと黙り込んだ。細めていた冷の瞳が、先程よりもさらに細くなった。その視線の先には、彼の苦悩がある。見えないものが見えてしまうことの痛み。知らなければよかったと悔やむ心の、傷。

「辛いと思います——私の苦しみを知って、私よりも苦しんでしまう塚本さんですからね——こんな時に不謹慎ですけど、私は、そんな塚本さんが好きです」

目を閉じたまま、大樹は立ち上がった。冷の方を見やり、大きく息を吸い込んだ。深呼吸でもするかのように。

「そうだったよ——君に伝えなきゃいけないことがあったんだ」

「なんです？」

正面から冷を見据え、大樹は言い切った。

「君の妹は、もう過去から逃げないよ。彼女は未来のために、自分の生きる道を見つけたから——」



彼は目を閉じていた。

暗闇に沈む視界の中を、無数の光が交差していく。やがて光は一つに集まった。彼は小さく息を吐き、光の方へと手を差し伸べる。力が、光から逆流してきた。体中に力が漲る――

そこで目を開く。手と足を組み、彼は冷たい床の上に座っていた。限りなくゆつくりと顔を上げる。音をたてることもなく立ち上がった。足の裏に、ひんやりとした感触を噛みしめながら。

窓の外を覗き込んだ。霧雨がふわり、街や人々に溶けこむようにして漂っている。ただの霧雨ではなかった。黒い色に染まった霧雨だった。邪悪な色の塊だったのだ。

彼は表情を変えなかった。睨むように目を凝らし、黒い霧を見続けているだけだった。

「奴が――奴が帰ってきたのか――？」

右手を振り上げ、彼は指を鳴らした。それに応えるようにして、影の中から黒いポケモンが姿をあらわした。両目は充血したように赤く、白い歯を剥き出しにして、ニヤついたような顔をしている。シャドーポケモンのゲンガーだった。

背を向けたまま、彼はゲンガーに命じた。

「ゲンガー、外の様子を見てきてくれ。ただし無理せず、何かあればすぐに僕に知らせること。いいな？」

軽く頷き、ゲンガーは再び影の中へ、吸い込まれるようにして消えた。あとには、彼の足音だけが残っていた。場は薄暗く、なにものの気配もない。彼の姿は、もうそこにはなかったのだから。

彼は建物の外に出ていた。霧雨で濡れることも厭わずに、遠くに見える高い塔——スズの塔を眺めている。その眼差しは鋭利で、彼の気持ちの高ぶりがあらわれていた。

「どうして——どうして、こんな——」

歯を食いしばる。

「不幸が戻ってくる。多くの死が、復讐を思い出す——誰が、どうやって奴を甦らせたんだ……何のために——？」

無数の霧雨が、彼の身体につき、伝っていく。髪の毛から水滴が滴り落ち、水たまりに流れ込む。ただ時だけが無情に過ぎていく。

「今日の天気は……荒れそうですね」

容赦なく降り注ぐ雨よりも冷たげな声が、背後から響いた。少年の声だった。彼は振り向き、怪しむような目つきで相手を見つめた。

立っていたのは、銀髪の少年だった。耳に鍵状のピアスをつけ、透けるような白い頬

に、黒々としたタトウが刻まれている。彼は身構えた。普通とは違う、異質なものを少年に感じたのだ。微笑んでもいるかのような表情で、少年は続ける。

「もうすぐ来ますよ——奴が」

「どうして、それがわかるんだい？」

できる限り感情を隠して、彼は訊いた。白い歯を出して、少年は苦笑している。

「僕も、感じる事ができるんですよ。あなたの恐れている“奴”がすぐ近くまできていることに。あなたも、感じているでしょう？」

曖昧に彼は頷いた。

「僕は忠告しにきたんです。あなたは、奴と戦ってはいけない……と」

「それは、なぜだい？」

「あなたが死ぬからです。あなたは僕にとって、死んではいけない人間なのです——奴は多くの人を殺すでしょう、その死人の中に、あなたが仲間入りしてしまうのは、僕にとって不都合だからです」

彼は一步、少年に詰め寄った。唇を軽く噛みながら、聞き返す。

「君にとって、不都合？ それは、どういうことだい？」

少年は空を見上げた。幾重もの水滴が、流れていく。黒く染まっていく。

「あなたは鳳凰と接触する資格のある、唯一の人間だからです。あなたがいなければ、滅

んだあとの世界を再生できませんからね」

霧雨は、いつのまにか大粒の滝となって空から降り注いでいた。雨のざわめきが、二人の男の沈黙を、さらに重苦しいものにしていく。

かなりの時間が経つてから、彼は少年に訊いた。

「君は、何者だ？　奴を、ここに誘き寄せたのも君なのか？」

少年は、ゆっくりと首を横に振り、否定した。

「違いますよ——今日は、見物させてもらうだけです。これから起こる、死の活劇をね——

僕は、もうすこし時を待ちます。すべての人間を裁く時を」

「すべての人間を……裁く？　何のために……どうやってだい？」

「あなたも知っているはずだ。過去から今にわたるまで、人間が罪を犯し続けたことを

……人が、世界のバランスを破綻させ続けていることを」

彼は黙り込んだ。遠くにそびえ立つスズの塔に威圧されているような気がした。過ちを犯し続ける人間——それを象徴するかのようには、天高く伸びる塔。それが、スズの塔の本来の存在意義だった。人間が過去に犯した罪の戒めという、消えることのない、哀しい存在意義。

思わず、彼は視線をそらした。雨に打たれ続ける。体中が、黒く染まる。どうにも、自分が小さく感じられた。唇を噛みしめる。身体を流れる雨の勢いは、衰えるどころか、

さらに激しく彼の身体を伝っていく。

「君は知るべきだよ」彼は呟いた。雨音に掻き消されるくらいの、小さな声で。

視線を元に戻したとき、少年の姿はそこにはなかった。少年は立ち去っていた。先程まで少年の立っていた地面に、足跡が残っている。そこに水が溜まり、雨の滴によつて広がっていく。震えるように小刻みな、暗い憎悪を感じさせる、静かな波紋が。

彼の目は、物憂げに虚空を見つめていた。銀髪の少年の姿を、その場に思い浮かべ、眩き続けている。

「君は、何も知らない——すべてを知っているつもりで、実は何も知らない。だから、君の言葉は空虚なんだ。たしかに君の言葉は間違っていないかもしれない……人が、愚かな過ちを犯し続けているのは事実だ……だけど、そのことで『すべての人間』を裁こうとするのが、もつとも愚かなことだと……君は知るべきなんだ」

雷鳴が轟く。黄色い閃光が、黒雲を突き抜けていく。彼の言葉が、それらの音に掻き消されていく。

「人間という存在は悪ではない、もちろん善でもない……人は皆、それぞれ違うのだから」

その時、彼の携帯電話が鳴った。濡れた手を気にすることもなく、彼は電話をとった。相手は、初めて聞く声の持ち主だった。幼い少女の声だ、と彼は直感した。

「もしもしっ？」

声の調子で、相手がひどく慌てていることがわかった。ただごとではない、と彼は思った。片耳を塞ぎ、電話からの声に集中する。少女の声は、洲先瑞穂と名乗り、早口で訊いてきた。

「ゴーストタイプポケモンの専門家……マツバさんでしょうか？」

彼は答えた。「そうだが、何か？」



大樹は自宅のマンションに戻り、ソファにぐったりと横になっていた。コガネ百貨店の屋上で、一晩中、恐怖を堪え続けていたのだから無理もなかった。

隣では、冷が物珍しそうに大樹の部屋の中を見回していた。いつまでも、屋上で話すわけにはいかないから、と大樹がついてくるように言ったのだ。自由に移動できるところを見ると、自縛霊ではないらしい。

「どうしたの？ 辺りをそんなに見回して……」

うつすらと瞼をあけて、大樹は訊いた。冷は恥ずかしそうに俯いて答えた。

「忘れていたんです、私は。普通の人の部屋というのを。組織で働かされていた頃は、私

のすること、すべてが監視されていました。収容所の部屋は、天井も壁も濁った灰色をしていて、粗末なベッドが一つ置いてあるだけで。生きた心地がしませんでしたよ……気が狂いそうで……」

大樹は目を開いた。細々と話し続ける冷に、哀しげな視線を送る。

「でも、私はまだマシだったんです。妹は、氷はもつと非道い環境のもとで過ごしていた。私たち姉妹は、組織内では一度も顔を合わせたことがないんです。だから組織から逃げるとき、妹の部屋の前に来て、私は愕然としました……鉄格子で囲まれていたんです。そして、その鉄格子は、あの子の血で真っ黒に染まっていた——そして、なによりも、あんなに明るかった妹が、別人みたい……」

冷は唇を震わせている。怒り。それは組織全体に向けられているものではなく、一人の女に集中していた。

「法柿君が、私と妹の脱出に協力してくれたのも、あの女のすることに耐えられなかったからなんです。前にも、お話ししたと思いますけど、あの女……一位カヤは……」

視線を落として大樹は、瑞穂の言っていたことを思い起こした。そうなの……名前、たしかカヤ……いちいカヤだったと思う。言葉にはできないくらい、恐ろしい人だった。だって、ラジオ塔に見学に来ていた子供を……。

涙ぐんでいた。肩が震えていた。瑞穂は枕に顔を押しつけ、嗚咽しながら言い放つて

いた。「それぐらいの哀しみを背負ってるの……私なんかよりも、ずっとずっと深くて重たい哀しみを。私は、それが怖い」

瑞穂は恐れていた。一位カヤ自身よりも、彼女の心を救いようがないほど歪めた、その環境を。虐待を『愛』であると言い切る、その価値観を。

浮かび上がる、大樹の記憶が。暗い視界の先に、頬を涙で濡らした射水。氷の顔が見える。だが、その表情は、冷の言うような孤独な仮面ではなかった。もう、少女は独りではなかった。瑞穂に抱きかかえられるようにして嗚咽する氷の泣き顔は、哀しみに満ちていたが、安堵に——微かな暖かみも帯びていたのだから。

「でも……君の妹は、もう独りじゃないよ」

大樹は再び、冷の表情を見つめた。彼女の顔からは、先程までの険しきは消えていた。「そうですね……塚本さんの言う、その子なら……妹を救ってくれるかもしれません。いずれ妹が真実を知って、傷ついたとしても……支えになってくれるかもしれない」

苦笑した。惨めさを噛みしめるように。冷の瞳から涙がこぼれ落ちる。

「駄目ですね、私……人に頼ってばかりで……氷の姉である資格なんて無いですね」

「そんなことはないよ。君は誰よりも、妹のことを心配しているんだから……」

瞼が重い。大樹は目を閉じ、横になった。

何気なしにつけたテレビからは、天気予報が流れている。大樹は目を閉じたまま聞き

流していた。だが、やがてそのことの重要性に気付くと飛び起き、テレビの画面を食い入るようになって見つめ始めた。記者とキャスターとの会話に聞きいる。

「ええ……今は、やんでいるようですが、いつまた『黒い雨』が降り始めるかわかりません……」

『『黒い雨』が人体へ与える影響はあるのでしょうか？』

「わかりません。エンジュシティは、現在、市民に外出を控えるよう緊急警報をだしておりますが……」

大樹は立ち上がった。小綺麗に整理されたデスクの上に放置されているノートパソコンを開く。メールソフトを起動させ、彼は一通のメールを開いた。差出人の名は、洲先瑞穂。

『大樹くん、お元気ですか？ こっちは、私もゆかりちゃんも元気です。私はいま、エンジュシティ近くの森にいます。明日にはエンジュシティに着けると思います。それで、また連絡しますね』

彼はノートパソコンを閉じた。力なくソファに座り込むと、頭を抱えて蹲る。大樹の異常に気付いて、冷が話しかけてきた。

「塚本さん、どうしたんですか？ まさか……」

「思い出した……瑞穂ちゃんは今、エンジュシティにいるんだった。あの邪悪で、黒く塗

りつぶされた街に——」

テレビのブラウン管は映しだす。黒い雨が降り注いだあとのエンジュシテイを。何もかもが黒く染まった、邪悪な妖気漂う街を。大樹は思わず息を呑んだ。

傘をさした記者が、マイクを片手にカメラに向かって何かを話している。ひどく焦った様子だった。黒い水たまりを指さし、ことの異常さを強調している。

「今、入りました気象庁の発表によりますと、黒い雨が人体に及ぼす影響は無いようです。ただ、なぜ黒い雨が降ったのか、などの原因については、いまだハッキリとは……」

紅い風が吹いた。束の間の異様な静寂がブラウン管を通じて感じ取れた。記者は口を開けたまま、目を見開いたまま血を吐いているのが見える。カメラが、レンズが血の色に染まった。遅れて、誰かの悲鳴が空を切った。

記者は絶命していた。表情は変わらず、血の気だけが引いていく。彼の身体は腰の辺りで両断されていた。上半身が傾き、倒れた。その弾みで眼鏡が落ちて、赤と黒に淀んだ水たまりへと沈んでいく。残された下半身は立ちつくしたまま、黒い地面を赤へと染め直していた。

冷は即座にブラウン管から目をそらした。怯えを隠しきれずに、大樹の肩へとしがみつく。

「何が……今、何が起こったんですか？」

大樹は呆けたように画面を見つめていた。ブラウン管には、もう記者の屍体は映っていないかった。『しばらく おまちください』の画面に切り替わっている。

「見えた……ほんの一瞬だけど、確かに見えた……」

「塚本さん？ 何を……何を見たんですか？」

大樹は見ていた。偶然ではあったが、目に焼き付いていた。真紅の刃が、疾風の如き速さで記者の胴体を切り裂く、その瞬間を。



濁りし呪屍

黒い雨はやんだ。だが依然、空は黒雲に覆われている。その黒雲の中核といつてもいい、真黒の色をしている部分から、漆黒の霧が吹き出していた。

エンジユ総合病院の一室。消毒液の臭いが立ちこめ、白い壁で囲われた空間で、瑞穂はなすすべなく立ちつくしていた。少女の前には、ベッドが4つ置かれている。その上に横たわっているのは、ゆかりとリングマ、ヒメグマ、そして森で倒れていたイーブイのトレーナーだった。4人とも、胸に黒い染みのような模様が浮かんでいる。その黒い染みを、じつと観察している若い男は、ゴーストタイプポケモンの専門家、マツバだった。

イーブイは心配そうに、自分のトレーナーに寄り添っていた。彼女は時折、苦しそうに身を振り、譫言のように同じことを呟いている。

「逃げられない……逃げられないよう……」

ゆかりもリングマも、彼女と同じように苦しそうな表情をしたまま眠っている。ヒメグマは、警戒するような目つきで、ただ窓の方を眺めているだけだった。

両手を頻りに握りしめながら、瑞穂はマツバに訊いた。

「どうですか？ やつぱり、この症状は……」

「間違いない。『呪い』だよ。それも、かなり強力な。胸の黒い染みは、呪われていることとの証だからね」

瑞穂の方を振り返り、マツバは眉をひそめた。腕を組んでいる。何か、考え事をしてるようだった。

「特に、彼女が——」イーブイのトレーナーを見やり「一番、深刻な状態だ」

「それで……どうなるんですか？」

唾を飲み込み、瑞穂は訊いた。青ざめた表情をしている。目にはうつつすらと涙すら浮かんでいる。マツバは、言いにくそうに少女から視線を外した。

「普通の呪いなら、心身が衰える程度ですむだろうけど、この呪いは、信じられないほど強力なものだ……だから、このままにしておけば、みんな数時間以内に死ぬ」

瑞穂に衝撃が走った。指先が震え始める。倒れ込むようにして、その場に座り込んだ。

「ブ……ブイツー！」

突然、イーブイが鳴いた。驚いているような声だった。マツバは、即座に振り向いた。瑞穂も立ち上がる。

イーブイのトレーナーは、カッと目を見開いていた。体中が痙攣している。血走った、真つ赤が瞳が瑞穂を睨んでいた。瑞穂は思わず後ずさる。背筋が凍ったような感じがした。

「助けて……逃げられない……逃げられない……死にたくないよお……助けてー！」

彼女は叫んだ。辺りに響くほどの大きな声だった。それと共に、血を吹いた。病院の飾り気のない照明に照らされ、血の噴水はキラキラと光っている。

瑞穂は棒立ちで、彼女を見つめているだけだった。何もできなかつた。時だけが虚しく過ぎていく。

彼女は叫び続けている。布団がベッドから落ちた。白いパジャマ姿のまま、痙攣をしている様が見える。所々、パジャマが赤く染まつていた。痙攣するたびに、それは大きく広がっていく。やがて、血飛沫があがった。どこからか出血しているのだ。

ハッと我に返り、瑞穂は急いでナースコール用のブザーを押した。何度も何度も、しつこいほどに。出血しているのならば、止血や輸血が必要だと考えたのだ。

瑞穂はドアの方を見やった。マツバと目があった。彼は、微かに首を横に振った。否定していた。もう、無理だと。手遅れであると。だが、瑞穂は諦めなかつた。半分、怒つたような、泣きそうな声で聞き返す。

「どうしてですか？」

「見てみるといい……」と、彼は静かに促した。瑞穂は彼女に視線を移す。

彼女の着ていた白いパジャマは、もう本来の色を失っていた。瑞穂は、とっさに彼女のパジャマを剥ぎ取る。再び血飛沫があがった。瑞穂は血の雨を頭から浴びることになった。だが、瑞穂は動かなかった。あまりの衝撃で動くことすらできなかった。

血にまみれ、痙攣を続ける彼女の身体は黒ずんでいた。腐っているのだ、と瑞穂は即座に思った。そこから血が滲み出ているのだ。こうして近くで見ていると、腐臭が鼻をつく。

血走っていた眼球は、もう見えなかった。目からは血が流れ出ていたのだから。いや、目だけではなかった。口からも、耳からも、鼻からも、体中の穴という穴から、淀んだ死臭を放つ血液が、滝のように吹き出ている。痙攣のたびに、その勢いは増していく。

「死にたくない、死にたくないよお！ いや……嫌あ……助けて……」

彼女は暴れ出した。瑞穂は腰を抜かして、その場に座り込んだ。涙のように血を流し続けながらも、彼女は両手を振り回している。まるで、迫ってくる恐怖から身を守るかのように。

次の瞬間、黒く濁った液が肩の辺りから迸った。腐った左手が、ちぎれて窓へと飛んでいくのが見える。そして、その拍子に彼女はベッドから転げ落ちた。

音が聞こえた。グシャという、トマトか何かの潰れる音が。辺りは急に静けさを取り戻した。彼女はもう、動いてはいなかった。

瑞穂はゆつくりと立ち上がり、原型を留めないほどに崩れてしまった彼女の屍体を見下ろした。その隣では、イーブイが盛んに鳴いている。まるで、屍体に語りかけているようだった。だが、彼女はもう死んでいる。その声に彼女が応えることはありえなかった。

視線を移す。ゆかりやリングマの寝顔が見える。みんないずれ、彼女のように惨めに死んでしまうのだろうか。そう思った瞬間、瑞穂の胸が酷く痛んだ。そんなの……そんなの嫌だ。瑞穂は、まわりつく靄を払うかのように激しく首を振った。

白いドアが開いた。医師と看護婦がやってきたのだ。そして二人は、床に飛び散った彼女の屍体を見た。看護婦は、そのまま気を失って倒れた。医師の男は立ちつくし、絶句している。その二人の隙間を縫うようにして、一つの影が外へと、廊下へと飛び出した。

「ヒメグちゃん！」 すぐさま瑞穂が後を追いかける。

突然、逃げ出したのはヒメグマだった。見ていた、そして知っていたのだ。彼女が、呪いによつて死んでしまうところを。やがて自分にも、同じ死に様が続いていることを。

痛む胸をものともせず、瑞穂はヒメグマを捕まえ、抑えつけた。ヒメグマは小さな身

体からは想像もできないほどの怪力で暴れている。彼は追いつめられているのだ。底の見えない、死への恐怖に。

瑞穂は、このままヒメグマが死んでしまうのではないかと、危ぶんだ。

「ここにいなきや駄目だよ……外に逃げたつて何も変わらない。逃げるだけじゃ、何にもならないよ！ ヒメグちゃんは、ここで待ってて。無理に動くと、無駄に体力を消耗するだけだよ。暴れないで……お願いだから」

ヒメグマは瑞穂を睨み付けている。鋭い形相だった。そして牙を剥き出しにして、少女の白い二の腕に噛みついた。ゆつくりと鮮血が滴り落ちていく。だが、瑞穂は視線をそらさなかった。表情を曇らせることもなかった。じつと、真摯な瞳で見つめる——澄んだ綺麗な色をした瞳で。

「心細いのはわかる……恐いのもわかる……だけど、それに負けちゃ駄目だよ……」

瑞穂の声は震えていた。涙声だった。——恐いのだ。自分だって心細いのだ。自分の大切な家族を、仲間を失うことが、それを必死に堪えているのだ。そうでもしないと、現実から逃げ出してしまいたいそうになるから。

「私も、どうしたらいいのか、わからない。だから怖い……怖いよ……でも、こんな時だからこそ、私は私でいなきやいけない……ヒメグちゃんはヒメグちゃんでなきやいけない……自分を見失っちゃいけないの」

いつしか、二の腕の痛みは消えていた。瑞穂はヒメグマを抱きしめる。ヒメグマの瞳からは、涙が溢れていた。瑞穂のか細い胸に顔を押しつけて、子供のように泣きじやくっている。

瑞穂はヒメグマを抱きかかえたまま、立ち上がった。気の遠くなるような、一瞬が過ぎ去っていくのが感じ取れる。やがて、腕の中から、微かな寝息が聞こえてきた。

足音が聞こえた。背後で、マツバが静かに立っている。彼は腕を組み、微かに青ざめた顔で告げた。

「これが……呪いだよ」

唇を噛みしめ、取り乱すことのないように必死で堪えながら、瑞穂は訊いた。

「呪いを、解くことはできないんですか？」

「普通に考えれば、それは無理だ……たとえ、呪いの根源を何とかしたとしても、呪いだけは消えることはない。だからこそ『呪い』は、昔から恐れられてきたんだ」

今にも泣き出しそうな表情で、瑞穂は俯いた。ぐい、と頬についた血を拭い取る。

「あの、呪いの根源というのは、なんなんですか？」

彼の表情は変わらなかった。微かに眉が動いただけだった。

その時、マツバの足下から伸びる影が、大きく歪んだ。瑞穂は驚いたように目を見張った。彼の影から、シャドーポケモンのゲンガーが顔を出していたのだ。

マツバは、ゲンガーに訊ねた「ゲンガー、どうだった?」

ゲンガーは頷き、何かを話している。そして役目を終えると、再び影の中へと溶けこむようにして消えた。

「そうか……」マツバは呟いた「やはり、奴か……」

「あの、なんのことです?」

「奴が甦るんだ。かつて、55年前に、この街を恐怖という色に染めた……奴が……」

マツバの冷え切った口ぶりに、瑞穂は胸の詰まるような不安を感じた。辺りの硬質な壁や床が、酷く不気味なものに見える。腕に抱いている、ヒメグマの温もりだけが、唯一の救いだった。

「200年前——」マツバは語りだした。独り言を呟くかのように。「人々は『力』……すなわち『権力』を手にしようと、醜い争いを繰り返して来た。そんな彼らにとって、ポケモンは戦いのための道具でしかなかった。多くのポケモンが血を流し、そして死んでいった——」

瑞穂は目を伏せた。哀しいだけの過去。争いをやめることのできない人間——重たい事実が、少女の心に爪痕を刻む。

「やがて戦いは終わった。争いを続ける人間が——すべて死に絶えるという、凄惨な結末をもってね。だが、忌まわしき争いの戦禍は、ハウオウを祀っていた、スズの塔をも

焼きつくした。再生を司る神の鳥、ホウオウは悲しみにくれないながら、人間との繋がりや絶った——僕の先祖は、ホウオウと接触する資格を持った、唯一の人間だったんだ。ホウオウがエンジュシティを去ったあと、僕の先祖はすぐにスズの塔を再建した。けど、ホウオウが戻ってくることはなかった……」

マツバは虚ろな目をしている。瑞穂は窓の外に見える、スズの塔へ視線を移した。ホウオウの再来を願うだけでなく、過去への戒めも兼ねた、立派な塔が見える。

「これで——終わらなかつた。争いに巻き込まれて命を失った、善良な人々やポケモン達の魂は、癒やされることなく、この街に残り、長き年月のうちに邪悪に染まった。その魂は、滅びることのない肉体を得るために、一匹のゲンガーに憑依した——」

「もしかして、それが……」

「そう。奴は55年前に突如としてあらわれ、エンジュシティに住む、多くの人々を呪い殺した。やがて奴は、霧のような外見から『黒い霧』と呼ばれた——キミが森で遭遇したのも、黒い霧だっただろう?」

瑞穂は、マツバの方へ向き直り、言った。

「つまり……その黒い霧という名のゲンガーが、さつきマツバさんが仰っていた、呪いの根源なんですわね?」

「そうだ。だが奴は、僕の祖父が、己の命と引き替えに滅ぼしたはず——おそらく、なに

か『特殊な力』が、エンジュシテイの近くにあり、奴の滅びたはずの肉体を甦らせたのだらう」

不思議そうに、瑞穂は眉を寄せた「特殊な力……?」

「いや、数日前から感じるんだ。何物とも違う、まったく異質で、眩しいほどに強烈な力を」

突如、甲高い悲鳴が轟いた。同時に、瑞穂達の背後から、何かの碎ける音が響いた。ドやしつけられたように、瑞穂はその音のする方向を見やる。病院の白い壁がぶち抜かれており、もうもうと噴煙があがっていた。土色の噴煙に、黒いシルエツトが浮かび上がっている。

マツバは振り向かなかつた。目を閉じて、静かな口調で呟いた。

「始まったか——」

瑞穂は口を手で覆い、目を剥いていた。噴煙が晴れていく。その中から、あらわれたシルエツトは、先程死んだはずのトレーナーの屍体だった。血で醜く汚れた口や鼻からは、盛んに黒い霧が吹き出ている。足下には、気絶し鮮血に染まったイーブイと、看護婦の首が転がっていた。

屍体は嗤っている。霧の途切れた合間から、不気味な牙が見える。ちぎれたはずの左腕が、鋭い爪のある、黒い腕に生えかわっていた。

「以前、先代……つまり僕の父から聞いたことがある。これが奴の本当の力——呪いで死んだ人間の屍体を、己の身体として操ることのできる能力こそが、奴の真の恐ろしさである」と

マツバは言った。目を開き、蜃気楼のように揺らいでいる屍体に向き直った。視線の先で、恐怖に駆られた医師の男が悲鳴をあげながら、こちらへと、瑞穂の方へと逃げてくる。

屍体は腕を振り上げた。医師がビクリと動きを止めた。金縛りだ、と瑞穂が気付いたときには、もう遅かった。右手も左手も、両足も凍りついたように動かない。屍体の術によつて、皆は動くこともままならない状態に追いやられていたのだ。

「く……動かない……」 瑞穂は呻いた。

握りしめた拳の中で、シャドーボールが膨らんでいく。屍体は嘲るように、身動きのとれない瑞穂達を眺めている。手を開く。視線を送る。医師が恐れに満ちた表情で、悲鳴をあげようと口を開けた瞬間に、シャドーボールは屍体の掌から放たれた。

まるで矢のようだった。シャドーボールは、医師の大きく開いた口に飲み込まれ、彼の喉を貫通し、瑞穂とマツバの頬を掠めて、背後に並ぶ病院の壁を粉碎した。

医師は喘いでいる。貫かれた喉から、涎とも血飛沫ともつかぬ液体を垂れ流しながら。衝撃で砕けた歯を、血液と共に吐き流し、涙と鼻水で汚れた惨めな顔で、瑞穂の幼

いながらも整った横顔を見つめながら。

屍体——いや、黒い霧の残虐さに、医師の視線に、瑞穂は戦慄を覚えた。医師の眼の焦点がぼやけていく。視線が消えていく。彼は無言のまま、地面に突つ伏していた。リノリウムの白い床が、爛れたような歪んだ色に染まっっていく。

屍体は近づいてきた。医師の身体を踏みつぶし、血の色をした水たまりの中央に立ち止まり、じつと瑞穂とマツバを睨んでいる。足もとの水たまりに、波紋が広がった。その波紋に併せるかのように、床が濁っていく。黒い色に。屍体の両手に握られている、二つのシャドーボールと同じ色に。

シャドーボールが屍体の両腕から放たれた。それは一直線に、マツバの頭部と瑞穂の胸元へと突き進んでいく。瑞穂は思わず目を閉じた。胸に抱いたヒメグマを庇いたかったが、動けないのではどうしようもなかった。

シャドーボールが瑞穂を貫く寸前だった。突然、マツバと瑞穂の周りを、眩い光が覆った。シャドーボールは光に照らされた途端、不自然に軌道をそらし、天井を突き破り、空へと消えた。

「今のは……一体？」

瑞穂は呆然と、立ちつくしたまま眩いた。それと同時に、自分自身の身体が自由に動

かせることを、金縛りが完全に解けていることを認識した。おそらく、突然の光によって、相手が怯んだのだろう。

「ゲンガー、来るんだ」マツバが叫んだ。「ナイトヘッド！」

マツバの足もとの影が揺らぐ。そして、その影の中からゲンガーが飛び出した。ゲンガーは、手を前方へ伸ばし、紫色をした精神波を発射した。ゴーストタイプの技、ナイトヘッドである。

精神波は屍体の肩を直撃した。どす黒い左腕が引きちぎれ、吹き飛んでいく。たまらず屍体は叫んだ。痛みからではなく、本性を現したようだった。もはや、人間ではない。救うことのできない憎悪という、危険な衝動の塊。

口をあんどりと開き、屍体は呻いた。身体全身が震えている。異様な殺気に満ちている。瑞穂は、屍体の喉の奥に、特大のシャドーボールを見た。吐き出そうとしている。二人まとめて、始末する気なのだ。

すぐさま瑞穂は、モンスターボールを放った。グライガーが飛び出した。その時、皆の眼前に、巨大なシャドーボールが突っ込んでくる。どう足掻いても、裂けることは不可能だ。瑞穂は拳を握りしめた。そして、叫んだ。

「グラちゃん！ メタルクロー！」

一瞬の斬伐だった。グライガーのメタルクローは、シャドーボールを掻き消し、その

勢いで屍体を左右に両断していた。瑞穂はおそろおそろ、両断された屍体を覗き込んだ。

屍体は倒れている。もう、動いてはいなかった。シャドーボールを発射しすぎて、力を使い果たしてしまったのだらう。血の腐ったような臭いが漂ってくる。嫌な臭いだった。思わず、吐き気がこみ上げてくるような。

グライガーが疲れた表情で、瑞穂の肩に降り立った。瑞穂はグライガーの額を優しく撫でながら、マツバに向き直り、肩をすくめた。

「やりすぎましたか？」

「彼女が、可哀想だ。きちんと供養してあげなければ……」

「そうですね……」哀しげに唇を噛む。「ところで、さっきの光は何だったんでしょう？」
「わからない。少なくとも僕やゲンガーは、何もしていない」

不思議そうな表情で俯く瑞穂を尻目に、マツバは吹き飛ばされた天井を仰ぎ、空を覆う黒い霧を見つめた。側にいたゲンガーは、何も言わずにマツバの影へと沈んでいく。黒い霧は、すぐ近くまで来ているのだ。

「これ以上、犠牲者を増やすわけにはいかない……奴を、こんどこそ完全に、滅ぼさなければ」

「あの……」出し抜けに、瑞穂は訊いた。「もうひとつ、訊いてもいいですか？」

「なんだい？」

「以前——55年前に『黒い霧』が、この街を襲ったときは、どうやったんですか？ どう考えても、普通の人間やポケモンで太刀打ちできる相手ではないと思うんですけど」
『浄めの札』をつかったんだ。エンジュに古くから伝わる札で、邪悪なものを消し去る力があるんだ。透明な鈴と同じく、スズの塔に祀られている……一説には、ホウオウの力を秘めているらしいが」

瑞穂は身を乗り出した。

「それじゃ、そのお札を使えば、なんとか、黒い霧を倒すことができるんですね？」

マツバは残念そうに、首を横に振った。どういふことか、と小首を傾げている瑞穂を横目で見つめながら、彼は語った。

「いや、以前……つまり55年前に使ったときでも、完全に奴を消し去ることはできなかったらしい。札の力によって弱った隙について、僕の祖父は奴を倒したらしい。もつとも、その時に受けた傷がもとで、祖父は命を落としてしまった。さらに、奴の力を弱めたことによって、浄めの札は秘めていた力の、ほとんどを使い果たしてしまったんだ」
「そう……ですか……」

暗い表情で、瑞穂は下を向いた。病室の扉を開いて中に入り、ベッドにヒメグマを横たえさせる。すぐ側で転がっている看護婦の首に手を合わせ、気絶しているイーブイを

ヒメグマの横に寝かせた。ベッドの上を見渡す。ゆかりは苦しそうに顔をしかめている。リングマは横になったまま、瑞穂を見つめていた。瑞穂は驚き、息を呑んだ。

お互い、何も言わなかった。リングマは小さく頷いた。頷き返すことは、瑞穂にはできなかつた。唇の端を噛みしめ、目に浮かんだ涙を拭うことしかできなかつた。そんな自分が、無力な自分が情けなかつた。誰を救うこともできない、助けることのできない自分が哀しかった。

マツバは、じつと瑞穂の水色をしたツインテールを見つめている。考え事をしているようだった。やがて、何かを思いついたように目を見開き、彼は言った。

「だけど、力を失っているとは言っても、完全に失ったわけじゃない。もしかしたら……奴の『呪い』を解くことくらいなら、できるかもしれない」

瑞穂は振り返り、すばやく顔を起こすと、マツバを見上げた。感情の高ぶりを抑えられないようで、白かつた頬が紅潮している。

「それは、本当ですか?」

「おそろくね」

マツバが言うよりも早く、瑞穂はモンスターボールを取り出した。階下へ走っていく。降りていく。階段を駆け降りる音が絶え間なく響いた。

軽く息を吐き、マツバは腕を組み直すと、窓を開いて下を覗き込んだ。瑞穂はポニー

夕に跨つて、病院の窓を、マツバを見上げている。大きく息を吸う。そして、大きな声で言った。

「ユユちゃんや、リンちゃんをお願いします。私は、スズの塔に行つて、『浄めの札』を持つてきますから」

マツバは深く頷いた。

「そうするといい。だけど、気をつけるんだよ。奴は、この街に近づいているからね」「わかりました。それじゃポニちゃん、お願い」

瑞穂はポニー夕に合図を送る。ポニー夕は嘶くと、鬣を赤々と燃やしながら駆けていった。水色のツインテールが、風に吹かれて、はらはらと靡いている。瑞穂は気にもとめずに、遠くにそびえ立つスズの塔だけを凝視していた。



真紅の刃

マツバは病院の外に出た。黒雲に満ちた空を見上げ、一言、呟くように言った。

「いつまで、そこにいるつもりだ。いずれは、この街の人々を皆殺しにするんだろう？
隠れても、僕にはわかる。時間の無駄だ」

黒雲は、マツバの問いに答えるかのように、ゆっくりと地面に降りてくる。マツバは眼を細めた。今までに、経験したことのない程の悪寒を感じていたのだ。

「まずは、邪魔な僕を殺そうというわけだな。でも、そうはいかない。これ以上、犠牲を増やすわけにはいかない——だから今、ここで、おまえを滅ぼす」

黒雲から発せられている霧が、凝縮していく。その黒い塊が目を開いた。血のように、真つ赤な瞳だった。ずるがしこさと、邪悪さを秘めた瞳が、マツバを睨み付けている。

「ホウオウを見る前に、死にたくはないからな……」

マツバは右手を振り上げた。足下から、ゲンガーが勢いよく飛び出してきた。シャドーボールを放つ。炸裂する。だが、黒い霧には効いていない。彼は拳を握りしめた。

黒い霧は口を開いた。鋭い牙が見える。その奥に、無数の霊の心を、マツバは感じ取っていた。

雨が——黒く、灰色に濁った水の雫が、静かなままに降りはじめている。



雨が、豪雨が降り注いでいた。先程までの黒々とした、墨汁のような霧雨とは違い、雨粒は灰色に濁ったような色をしている。

「ポニーちゃん。がんばって……」

ポニータの背中にしがみつきながら、瑞穂は呟いた。

黒の、灰色に濁った豪雨が、容赦なくポニータの身体を打ちつけ、弱らせていく。赤く輝いていた鬣の炎が、時間の経つごとに小さくなっていく。息づかいが荒くなる。身体から、温もりが失われていく。

躍動を続けるポニータの背中に触れ、瑞穂は胸が張り裂けそうになった。声を出すこともできなかつた。冷たかつた。ポニータの身体は冷え切っていた。雨が体温をすべて奪っていくのだ。それでも、ポニータは走り続ける。誰のためでもない、自分のために。自分を助けてくれた、瑞穂のために。

冷たさを堪えるように、瑞穂は齒を食いしばった。豪雨は、ポニータだけでなく瑞穂の身体にも降り注いでいるのだ。首をあげ、頭を左右に振る。左右のポニーテールから、水しぶきが飛んでいく。

「あそこだ……スズの塔」

眼前にスズの塔が見える。それも、ごく近くに。瑞穂は腕に力を込めた。ポニータが苦しげに、だが力を振り絞って嘶く。スピードが上がった。まるで風のように、ポニータは走っていく。

ポニータはスズの塔の門を突き破り、地面を蹄で削るようにして急ブレーキをかけた。もうもうと足下から土煙が巻き起こる。瑞穂はそれよりも早く、ポニータの背中から飛び降りていた。そのまま速度を落とさずに、近くにいた僧に詰め寄り、訊ねた。

「あの、『浄めの札』というのをお借りしたいのです」

僧は微笑んだ。茶色い傘を片手に持ったまま、細い瞳で、ずぶ濡れの瑞穂を眺めている。瑞穂の白い肌は、雨の冷たさに震えており、唇は青くなっていた。水色をしたツインテールの先端からは、雨の滴が滴っている。

意味ありげに頷くと、僧は懐から桐の箱を取りだして、中から浄めの札を取り出した。「わかっていますよ。すべてのことはマツバさんから伺っております。ただ、私はこの聖地から離れる事ができないので、あなたに来ていただきました」

「え？」瑞穂は不思議そうに眉をひそめた。「あの……」

「我々は、心を通わせることができます。距離は関係ありません。たとえば、彼が遠くにいたとしても、彼の想いは、はつきりと伝わります」

「そう……ですか」

戸惑いながらも、瑞穂は頷いた。浄めの札を受け取り、ポニータに跨ったとき、僧は優しい声で言った。

「マツバさんは言っていました。あなたは、水晶のように澄んだ心をもっている……と。その心を、曇らせるのも、さらに磨き上げるのも、決めるのは、あなた自身です……無
力な自分を憂うことはありません。あなたにしかできないことが、あるのだから」

瑞穂は小さく首を縦に振り、微笑みを返した。ポニータが走り出す。スズの塔は、雨の中で遠くなつていった。僧の声は、もう聞こえない。ポニータの蹄の音だけが、鳴り響いている。

「私だけにしか——できないこと——」

微かな声で呟いた。その時、腰につけたモンスターボールが激しく震えた。途端に、瑞穂は地面に放り出された。水たまりが弾ける。ポニータの苦痛に満ちた鳴き声が聞こえる。瑞穂は顔についた泥水を拭いながら、何事かと顔をあげた。

自分の腕が、赤く染まっていた。いや、水たまりが血の色を帯びていたのだ。流して

いく。灰色の雨が、身体にこびり着いた鮮血を洗っていく。そこでやっと、瑞穂は眼前に横たわるポニータに気がついた。

「ポニーちゃん！」

ポニータは首筋に酷い傷、鋭い鎌で斬られたような傷を負っていた。苦しそうに、喘いでいる。傷から流れる鮮血が、水たまりを赤い色に染めたのだ。瑞穂はポニータに寄り添った。すぐにモンスターボールを取りだし、戻そうとした。だが、ボールは動かない。地面に叩きつけられた衝撃で壊れてしまったのだろう。表面にはヒビがあり、火花が散っている。

ぐしゃ。柔らかい土を踏みつぶす音が聞こえた。足音だ。誰かが近くにいる。

水たまりに、オレンジ色の瞳のような模様が映りこんでいる。その周りは、鮮やかな紅色の一角だけ。

「リリイが、ここにいます。リリイを、消し去らなければ——」

声が聞こえた。若い男の声。少年の呟き——

震え続けるモンスターボールの中から、ナゾノクサが飛び出した。息を弾ませながら、瑞穂も立ち上がる。そして、見た。瑞穂とナゾノクサの目の前に立ちはだかるようにして、彼は、鮮血に覆われた刃を振りかざしていた。

真紅の身体。鋭く、赤い瞳。腕には、ポニータを傷つけたと思われる鋭利な刃——鎌

のようなものがついている。はきみポケモン、ハッサムだった。

拳をわなわなと震わせながら、瑞穂は唇を動かした。息を吐く。小さな呟きと共に。

「あの傷痕……それに、その鎌は……紅の刃……」



シャドーボールが空中で弾けた。幾つも、幾つも、数え切れないほどの黒い光球がぶつかり合い、紫色の火花を散らしながら、衝撃の波を辺り一面に広げていく。

瞬く間に噴煙があがり、幾重にも重なり合った塵が、マツバの視界を遮った。黒い光だけが、噴煙の隙間から射し込んでくる。マツバは眼を細めた。煙の中央が吹き飛んだ。黒い霧の腕が一直線に伸びてきたのだ。先端の鋭い爪が、マツバの喉元を掠めていく。マツバは思わず後ずさった。

負傷し、地面に倒れていたゲンガーが、身を起こした。マツバを庇うようにして、黒い霧の腕に飛びつく。叫び声が響いた。シャドーボールの光が腕の先端で瞬いている。その光と共に放たれた衝撃波が、辺りの噴煙を掻き消した。

水飛沫がマツバの頬に散った。足下には、全身に傷を負ったゲンガーが横たわっている。その身体の半分は抉り取られ、残りの半分は水たまりに沈んでいた。苦しげに、悔

しげに表情を歪め、黒い霧を睨んでいる。

黒い霧は——もはや原形など留めていない、邪悪な意志に憑かれたゲンガーは——不気味な、血のように真っ赤な両眼を見開いて、蔑むようにマツバ達を眺めていた。その眼差しは、余裕に満ちている。力に酔いしれているようにも見える。

「やはり、かなわないか……」

マツバは握りしめていた拳の力を緩めた。冷たい空気、吐息が首筋を流れていく。黒い霧の巨大な口が、その奥に広がる底のない無限の闇が、鋭い牙が目前まで迫ってきていたのだ。

彼は身を引いた。素速くゲンガーをモンスターボールに戻す。視線は、黒い霧に釘付けのまま。表情だけが、苦い色を帯びている。

黒い霧は、己が牙を振りかざした。マツバの頭部を、血に染まった牙が掠めていく。そして、彼の頭の頂点めがけ、牙が振り下ろされた。

「困った人だ」

突然、声があった。聞いたことのある声だった。次の瞬間、マツバの頭上まで迫っていた牙が、白い光と共に見る影もなく粉碎された。あまりに一瞬の出来事に、黒い霧の動きが止まった。

マツバは振り向いた。その視線の先に立っていたのは、頬に黒いタトウを刻んだ銀髪

の少年だった。手を振りかざしている。その指先が仄かに輝いていた。「警告したのに、どうして戦おうとする？　すぐに逃げていけば、助かったのに——」

少年は耳につけた鍵型のピアスをもぎ取り、黒い霧へと投げつけた。ピアスが黒い霧に命中した。激しい衝撃が、辺りに広がっていく。爆風に飛ばされそうになりながらも、マツバは眼を細めた。その視線の奥、衝撃の中心で、黒い霧が藻掻いているのが見える。苦しがつている。得体の知れない、おぞましき巨体が、四散していく。

消えていた。黒い霧の身体は消滅していた。マツバは辺りを見回し、霧の晴れた空を見上げた。黒雲に覆われてはいたが、先程までの邪気は失せている。

地面には、灰色に濁った水たまりだけが残っていた。鍵型のピアスが底に沈んでいく。不規則な波紋に揺られ、少年の色のない瞳が映りこんだ。手を伸ばす。小さな水飛沫がはねる。ピアスを拾い上げ、少年は鋭い目つきで、マツバに一瞥を送った。

「どうして逃げなかった？」　静かな口調で、少年は訊いた。

「死ぬことに恐怖を感じないからさ。ただ、ホウオウの姿を一度でいいから、この眼に焼き付けておきたかったが」

「なるほど……死ぬことに恐怖を感じない、か。面白い人だ」

少年の瞳は、マツバを捉えたまま動かない。その表情から感情を読みとることはできなかつた。無表情だった。哀しげな、寂しげな、憤つてもいるかのような。

ふと、マツバは少年の背後に、老獪な気配を感じた。同時に、狡猾そうに歪んだ顔と眼があった。少年の背後に、寄り添うようにして、初老の男が立っていたのだ。

「サリエル様」

皺だらけの顔を引き延ばすようにして、男は少年に話しかけた。

「あまり目立つようなことはお避けください。我々には、まだやらなければならぬことがあるのですから」

「いや、僕の手を離すべきことはもうない。あとは、機が熟すのを待つだけ——」

閃光が走った。少年の真横を、眩い光を帯びた熱線が通過した。大地がはぜる。衝撃波が、噴煙を押し流していく。爆音が響く。そしてそれは一瞬のうちに静まり返り、風いでいる風と、静寂だけが残った。

少年は指先で頬に触れた。黒いタトウの部分から鮮血が滴り、指先を伝って、地面に一滴、二滴、こぼれ落ちていく。微動だにせず、少年は瞳だけを、熱線の放たれた方向へ向けた。

老人が眼を細める。マツバはとっさに振り返った。

茶色の巨体が、リングマが立ちつくしていた。口からは煙があがっている。破壊光線を発射した反動で、全身が震えていた。憎悪にも、殺気にも似た色を帯びた鋭い眼で、少年と老人を睨み付けている。

「驚いたな……こんなところにも『能力者』が残っているなんて」

嘲るような口調で呟いた少年の後ろから、老人が思案するよな表情で言った。

「申し訳ありません——私の責任です。この場で、始末してしまいますか？」

「いや、放っておいても、このポケモンは死ぬよ。呪いでね。あと10分もすれば、肉体は腐乱し、精神は崩壊する。ヘタに手を出す必要はないよ。ほら……」

リングマは倒れていた。苦しそうに身を振らせながら、喘いでいる。

「もう、時間は残されていないよ。奇跡でも起こらない限りね」

少年は頬から手を離し、流し目でリングマを見やり、そしてマツバに背を向けた。歩き出す。老人がそれに続く。遠くなる。彼らの足音が、リングマの呻き声が、喉まで出かかったマツバの声が。

「教えてくれないか？」

一步、少年の方に足を踏み出して、マツバは訊いていた。

「奴を甦らせたのは誰だ？ キミか？ それとも、他の誰が……」

「裏切り者だよ」

感情の入り込む余地のない平べったい声で、そう告げた。少年は立ち止まることなく歩いていく。マツバは聞き返すことすらできなかつた。

マツバは振り向き、倒れていたリングマを抱き起こした。腕の時計を見つめる。残さ

れた時間は少ない。今はただ、祈るだけしかなかった。奇跡が起こることを。



蒼き記憶の光粉

真紅の瞳、刃、鬨気——いや、血塗られた殺気。

瑞穂は、手に握っていたポニータのモンスタールボールを地面に置いた。ボールは壊れており、ひび割れの隙間から火花を散らしている。その小さな炎の欠片よりも鮮烈な赤を帯びた、屈強な体躯が眼前に立ちふさがっていた。見えるのは、赤という色だけ。真紅に秘められた、狂気という感情の一端のみ。

その身体は、黒雲の隙間から細々と差し込む太陽の光に照らされていた。朝焼けのような鈍い輝きが眩しい。驚きを隠しきれない目つきで、瑞穂は、ハツサムの全身を見つめている。そしてハツサムもまた、驚いたように目を剥いて、瑞穂と、彼女を庇うように構えているナゾノクサへ、交互に視線を通わせていた。

瑞穂は横目で、ポニータの傷口を眺めた。首筋からの夥しい出血が、瑞穂の掌を、足下に広がる水たまりを、血の色に染めている。唇の端を軽く噛みしめると、瑞穂は屈み込み、震える指先でポニータの背中を撫でた。

「ポニちゃん。大丈夫だから……すぐに、止血するからね」

微かにポニータが頷いた。だが、それとは裏腹に、みるみる鬢の炎は小さくなっている。

く。瑞穂はポーチから包帯と抗菌ガーゼを取りだして傷口を縛り、止血の処置を施した。

ナゾノクサは、ハッサムと対峙していた。お互いが、いつでも攻撃できるように刃を構えている。その構えのまま、一寸の隙も見せることなく、ハッサムは泥濘のようになつた地面を踏みしめた。盛り上がった泥から、鮮血の混じつた水が滲み出ている。

瑞穂は向かい合っているナゾノクサとハッサムに視線を向けた。ハッサムの両眼が、次第に赤い輝きに満ちていくのが見える。そして、彼と同じようにナゾノクサの瞳も、真紅の色に——狂気の欠片を秘めし色に変貌していた。両者の瞳は、黒雲に阻まれた薄い闇の中で、妖しく光っている。

背筋の凍るような驚きと確信とが、同時に瑞穂の胸に広がつた。かつてウバメの森で発見した、ナゾノクサ達の凄惨な死骸の山。彼らの屍に刻まれていた、鋭い刃で切り裂かれた傷痕。そして、ツクシの言っていた切り裂き魔。赤い瞳を持った『紅の刃と蒼い風』。ナゾノクサとハッサム。

この二人が、『紅の刃と蒼い風』ではないのか？ 少なくとも、ウバメの森で起こつたナゾノクサの大量虐殺事件に、何らかの形で関与していることは間違いない。瑞穂は息を呑んだ。血塗れの拳を握りしめ、眼前の静かな睨み合いを見守る。

ハッサムとナゾノクサは、爛々と輝く赤い瞳で、お互いを見つめていた。

「リリイ……やはり生きていたか。どうやって生き延びた？」

若い男——少年のような声で、ハッサムはナゾノクサに話しかけた。瑞穂は目を剥いたまま、小声で呟いた。

「人間の言葉を喋った……！」

ポニータから落馬した直後に聞いた『リリイを消し去らなければ』という声と、同じ声だった。だが、瑞穂はポケモンが人間の言葉を話したことよりも、『リリイ』という名が出てきたことに驚愕していた。

ロケット団がラジオ塔で使用した特殊電波発生装置『リリイ』が、瑞穂の脳裏に甦った。そして思い出した。『リリイ』に操られているポケモンは、瞳が赤い色に染まることを。

瑞穂の視線がナゾノクサへ向いた。ハッサムは紛れもなく、ナゾノクサのことをリリイと呼んでいる。それがナゾノクサの本当の名前なのか、それとも、ナゾノクサの頭部に埋め込まれている特殊電波発生装置『リリイ』のことを指しているのか。瑞穂には確認のしようがなかった。

ナゾノクサが口を開いた。若い女の声でした。悲しみに沈んだような口調だった。瑞穂は息をひそめ、彼らの会話に聞き入った。

「ライム……ライム・シャクジエル。おまえは、どうして無意味にポケモンを傷つける？」

「殺そうとする?。」

「忘れたのか? あの日のことを。俺はポケモンが憎い。それだけだ。だから殺す。傷つける。それが無意味なことだとは思わない。」

「自分もポケモンのくせに……」

ナゾノクサは、上目使いでハッサムを睨み付けた。

「おまえも、多くのポケモンを傷つけてきたではないのか? リリイ・エルリム」

「そんな名前は、もう捨てたわ。あの事件の記憶と一緒にね」

瞬息の間に、二人の姿が瑞穂の視界から消えた。何かの弾ける音が響く。紅い閃光が二つ、空を切り裂くように舞っている。ナゾノクサの葉っぱカッターと、ハッサムのメタルクローがぶつかり、小気味よい金属音を奏でている。

瑞穂の眼では、ハッサムとナゾノクサの姿を捉えることはできなかった。風いでいた風が、旋風となって、泥濘状の地面に幾重もの痕を残している。それほどまでに彼らの動きは素速かった。二人の争いを、瑞穂は、ただ見ていることしかできなかった。

殺し合い。理解し合えないもの同士争い。瑞穂は二人が争う理由など知らない。だが、そこになにか、二人の巻き起こす旋風の奥に、大きな悲しみが満ちていることに気がついた。誰かを憎まなければ、生きていくことすらできなくなるほどの悲しみが。悲しみは怒りへと姿を変えて、鋭い風として吹き荒れ、総てを切り刻む。

「あの事件を忘れただど？ どうしてだ？ おまえだって、あれほどポケモンを憎んでいたではないか！」

ハツサムの鋭い刃が、ナゾノクサの足もとを掠めた。ナゾノクサの左足首に傷口が開いた。体液が滴る。

「忘れたわ。悲しみも、怒りも——いつまでも、それを引きずる生き方なんてしたくないから。おまえは、自分の憎しみを逃げ道にしているだけだ。誰かを憎むことで、悲しみを必死に隠そうとしているだけなのよ。あの男に利用されていることがわからないの？」

「ご主人様は、俺達の憎しみをはらす機会を与えてくれたんだぞ？」

頭部から分泌された溶解液を、ナゾノクサはハツサムの左目へ忌々しげに吹き付けた。ハツサムは首を激しく横に振り、溶解液を振り払う。刃を突き出す。刃はナゾノクサの頬を掠めていく。

「可哀想なヒト……憎しみが、何もかも曇らせてしまったのね」

「おまえはどうしたんだ？ 何があつた？ なぜ簡単に憎しみを捨てられる？」

葉っぱカッターがハツサムの腹部に突き刺さった。紫色の体液が、ハツサムの動きに呼応するかのように溢れ出てくる。ここぞとばかりにナゾノクサは、ハツサムの懐に飛び込み、彼の胸元を切り裂いた。

「昔の私は、自分自身を制御できなかった。憎しみを、怒りを、背負ってしか生きるしかなかった。だから、いったん発作が起きてしまえば、人間であろうとポケモンであろうと、見境無く傷つけていた。あの男の——あの爺の目論見どおりにね」

発作——何のことだろうかと、瑞穂は思い起こした。見境無く、誰かを傷つけること、殺すこと。初めて出会ったときのナゾノクサがそうだった。まるで狂気に翻弄されているかのよう。

「だけど私はもう、昔の私じゃない。憎しみも、怒りも、捨てたわ。私自身のためにね——それ以来、発作は起こらなくなった」

ハッサムは己の傷を気にもとめず、ナゾノクサの小さな身体へ、刃を振り下ろした。ナゾノクサは跳び上がり、刃を避ける。刃は大地に突き刺さり、地面を深く抉った。

「誰が、おまえをそんな腑抜けにした？ おまえだけは——俺の憎しみを、悔しさを理解してくれると思ったのに——」

「人間も、ポケモンも変わる。憎しみに引きずられるままに時を忘れた、おまえとは違う。私は、身体と精神を、このナゾノクサと共有してきた。そして、あの女の子——瑞穂ちゃんの友達として、いろいろな人間や、ポケモンを見てきた」

連続で向かってくる高速の刃を、ナゾノクサは華麗なフットワークでかわしていく。ハッサムは、その鋭い眼光で彼女を睨んだ。怨嗟の瞳だった。

「精神を共有——いかにも、腑抜けらしい考えだ。俺は殺した。ハッサムの精神など、殺してやったよ」

「私も——殺してしまふところだった。でも、瑞穂ちゃんに助けられてから、私の中の憎しみは消えていった」

「なぜだ？」

「瑞穂ちゃんは教えてくれた。憎しみは、さらに大きな憎しみを呼ぶだけだと。だから、憎しみも、悲しみも、怒りも——余計な負の感情など背負わずに、自分は自分のままであればいい——と」

ハッサムの瞳が、一段と鮮やかな輝きを放ち始めた。

「俺は、そんな生き方はしたくない。俺の中の憎しみは、俺自身が決着をつける！」
「まだ解らないの？ おまえのしていることは、私たちのような……」

不意にナゾノクサの瞳から、赤い光が失せていった。力なく息を吐き、脱力たかのようになり、その場に倒れ込んだ。赤い瞳の状態を保つことは、ナゾノクサの心と体に大きな負担をかけているのかもしれない。彼女は気を失っていた。

ナゾノクサとは対照的に、眩しいほどの赤い光がハッサムの瞳に満ちていた。彼の瞳から、意識は消えていた。発作——瑞穂は、とっさに思い浮かべた。見境がなくなる、自分自身を制御できなくなる、とナゾノクサは言っていたことを。その根源は怒り、憎し

み——負の感情。その爆発。

奇声が聞こえた。ハッサムは刃を振り上げている。瞬く間にナゾノクサを掴みあげ、上空へと放りあげた。跳び上がる。刃を突き上げ、ナゾノクサの体軀を貫いた。ヌメヌメとした体液が迸る。瑞穂の頬を、飛び散った体液が濡らしていく。

「ナゾちゃん！」

ナゾノクサは水たまりの上に墜ちた。水飛沫があがり、泥水と共に、彼女の体液が地面に弾けた。ハッサムは刃を下に突きだした。もう一度ナゾノクサを貫こうと、急激な速さで落下してくる。

瑞穂はナゾノクサを庇うようにして、ハッサムの真下に飛び込んだ。ハッサムの刃が、容赦なく瑞穂の頭上に迫ってくる。足下に転がっていた拳大の石を拾い上げ、瑞穂は頭上を見上げた。真紅の色をした、鮮血と体液に染まった刃が見える。刃は白い光を帯びていた。迫ってくる。瑞穂の身体を両断してしまうほどの勢いで。

瑞穂は握りしめた石を振り上げた。刃が触れる。石から、刃から火花が散る。瑞穂は腕を押し上げた。ハッサムが体勢を崩す。その隙に、瑞穂は跳び上がった。白く細い足で、ハッサムの脇腹を蹴りつける。

ハッサムは泥水の中へ倒れた。瑞穂もナゾノクサに被さるようにして、水たまりに転げ落ちた。苦痛に口の端を歪めながら、上体を起こす。瑞穂の顔と髪——全身が泥水で

汚れていた。茶色く濁った雨水が、ツインテールの先端から滴っている。

「解らない……私には、あなた達が傷つけあわなきやいけない理由は解らない。だけど……」

ハッサムは立ち上がった。瞳の色は、先程よりも鮮やかさを欠いている。どうやら『発作』は、治まったらしい。

瑞穂は泥水にまみれた蒼白な顔を、微かに横に振っている。荒い息で、上体だけを起こしたままだった。握っていた石を投げ捨てる。石は真つ二つに切断されていた。掌は血で紫色に滲んでいる。不安げな、悲しげな想いが、澄んだ栗梅色の瞳に溢れていた。「これ以上、ナゾちゃんを傷つけないで！ 無意味に誰かを傷つけないで！」

「邪魔をするな……俺は、できれば人は殺したくはない。発作が起きてしまえば、話は別だがな」

渾身の力を込めて、瑞穂は立ち上がった。だが、蹠踉けている。立っているだけで精一杯だった。右の掌からは、鮮血が止めどなく流れている。

「死ぬわけにはいかないの。私は行かなきゃいけない……私にはやらなきやいけないことがあるの。邪魔はさせない。ナゾちゃんも、ポニちゃんも、みんな……もう、誰も殺させない」

ハッサムは刃を瑞穂の喉元に突きつけた。瑞穂は息を呑んだ。

「そこをどけ。死にたいのか?」

「死にたくないよ……」

瑞穂の胸元から、鮮血が吹き出した。シャワーのように大地に降り注ぐ。ハッサムの刃が、瑞穂の右胸を切り裂いたのだ。辺り一面が、みるみるうちに血の色で満たされていく。苦痛に喘ぐ、瑞穂の悲鳴が空を切った。だが、瑞穂は動かない。瞳を見開き、痛みと恐怖に震える足を、血の滲む両手で支えながら立っている。

「そんなことじゃ……その程度じゃ、私は殺せない。死ぬわけにはいかない」

切り裂かれ、血に染まった服の隙間から、純白の肌が覗いた。傷からは止めどなく鮮血が溢れている。

ハッサムは蔑むように一度、眼を細めた。刃を振り上げる。瑞穂は刃の先端を見つめた。血が滴っている。多くの生き物達を傷つけた証だった。消えることのない、染みついている血の臭いが漂ってくる。

目に見えぬ程の速さで、刃は振り下ろされた。瑞穂の頭蓋を容赦なく両断するため。

ガラスの割れるような、弾けるような音がした。

同時に、眩い光が瑞穂の身体から溢れ出た。ハッサムの刃は軌道をそれ、そのしなやかな巨体ごと、弾き飛ばした。ハッサムは地面に倒れた。顔をもたげ、驚きで見開かれ

た眼を、瑞穂へと向ける。瑞穂は呆然としており、戸惑いの表情を浮かべていた。

「これは……」

瑞穂の周りには、光の粉が無数に漂っていた。キキヨウシテイを——瑞穂を護るために死んだ少年、冬我の形見。凍らされ、焼かれ、黒々とした骨だけになった彼の身体にこびり着いていたものだった。瑞穂は光の粉を、小さなビンに詰め、常に携帯していたのだ。

白く、眩い光の中で、身体が震えるのを瑞穂は感じた。恐怖ではない。痛みでも、悲しみでもない。どんな感情も、感覚も入り込む余地を感じさせない光だった。

「また、言わなきや……」

ハッサムは後ずさった。光の中で泳いでいるかのような瑞穂を睨み付け、彼は土煙と共に姿を消した。去った後には、残像だけが尾を引いているだけだった。彼の溢れんばかりの憎しみを纏った、真紅の閃光が。

「ありがとう」瑞穂は、その場に座り込み呟いた。「助けてくれて……」

風が、光の粉を押し流していく。瑞穂はゆっくりと立ち上がり、黒雲の漂う空を見上げた。光の粉は、黒雲を押しつけながら、太陽の光の中へと消えていった。青空が、雲の隙間から覗いている。瑞穂は足下に倒れていたナゾノクサを抱きかかえ、光に照らした。ナゾノクサが目を開く。無言のまま、瑞穂の澄んだ瞳を見入っている。

「ナゾちゃん、大丈夫？」

赤い瞳の状態でなければ、人間の言葉を話すことはできないのだろう。ナゾノクサは何も言わずに、小さく頷いた。涙に濡れた瞳は、憂いに満ちている。彼女は、内に秘めた悲しみを隠すかのように瞼を閉じて、再び眠りについた。

ナゾノクサをボールに戻し、瑞穂はポニータに視線を向けた。首筋からの出血は止まったが、傷自体が消えたわけではない。気を失っており、いつ呼吸困難に陥っても不思議ではなかった。間の悪いことに、モンスターボールも壊されてしまっている。

瑞穂はポニータを背負いあげた。鋭い痛みが、胸の辺りを貫く。胸元からの出血は止まっていなかったのだ。苦痛に顔をしかめながら、瑞穂は一步ずつ、泥濘の上を歩きだした。待っている人のもとへ、向かうために。

「わからない……わからないよ……どうして傷つけあわなきやいけないの？ どうして、みんな争いをするんだろう」

歩きながら、瑞穂は呟いていた。そうしなければ、今にでも力つきてしまいそうだから。何もかもが、悲しすぎるから。虚しさで、胸が張り裂けそうだから——こんな、こんな争い、こんな傷つけあい、無意味だから。

「痛いよね？ ポニちゃん……私だつて痛い。こんなに痛いの、どうして……」

出血は止まらない。一步、一步、足を踏み出すたびに傷から溢れ出てくる。鮮血は瑞

穂の全身を赤く染めていた。目の前が、視界がピンク色に滲んでゐる。体中から、釘を打たれたような鋭い痛みが走る。

「でも……何か、理由があるんだよね。悲しい理由が——」

額から汗が滲んだ。頬をつたい、首筋を流れ、鮮血と交わつて、地面へと垂れていく。一滴、二滴、やがて滝のように激しい勢いとなり、鮮やかな赤みを帯びていく。

遠くにマツバが見えた。駆け寄ってくる。瑞穂は荒い息をしたまま、彼を見つめた。視野が狭くなつていく。暗くなつていく。マツバは、遠くから何かを叫んでいる。聞こえない。瑞穂は彼の名を呼んだ。

声がでなかつた。代わりに、身体から抜けるようにして、意識が途絶えた。



白い微笑

瞳を開いた。誰かの顔が見える。女の子の、涙に濡れた幼い笑顔が。頬を濡らしながら、女の子は何かをしきりに呟いている。

「お姉ちゃん……」

ゆかりだった。彼女は、瑞穂の目覚めを認めると、すぐさま胸の中に飛びついてきた。全身の痛みは消えていた。いや、ただ感覚が麻痺しているだけなのかもしれない。その証拠に瑞穂は、ゆかりの暖かみも、腕の柔らかさも感じるできなかった。

焦点が合ってきた。辺りを見回す。どうやら、病室のようだった。白い壁、白い床、白い天井。消毒液の臭いも漂ってくる。瑞穂は半身を起こし、指先で、ゆかりの頬を流れる涙を拭った。

「ユユちゃん。無事だったんだね」

「うん——」

瑞穂は朦朧とした意識の中で、ゆかりの身体を抱きしめた。くぐもった嗚咽が聞こえてくる。ひんやりとした風が吹き、瑞穂の水色のツイントールを靡かせた。風は凧いでいる。

窓ぎわで、青い空を見上げるようにして、マツバは座っていた。横目で瑞穂を見つめ、ひとつ軽い息をつき、彼は微笑んだ。視線をもとに——窓の外に広がる青空へと戻すと、小さな声で言った。

「心配はいらない。黒い霧は滅びた。それに、みんな無事だ——僕も、君の友達もね」
「マツバさん——あの……」

「聞かなくてもわかる。厄介なことに巻き込まれたみたいだね」

瑞穂は驚いたように、表情を強張らせた。綺麗に澄んだ瞳が、まんまると見開かれている。

「どうしてそれを——」

『『千里眼をもつ修験者』の名は伊達じゃない。君に何があったのか——それぐらいはお見通しさ。そう言えば、君から電話をもらったとき、勝手ながら君の過去も覗かせてもらったよ』

「私の過去を……ですか？」

「悪人だと困るからね。幸い、君は清らかな心の持ち主だったけど。なんなら言い当ててみようか？ 君の好きな男性の名前とか……」

瑞穂は赤くなつた頬を隠すかのように掌で顔を覆うと、子供っぽく唇をとがらせた。

「それ、ぶらいばしーの侵害ですよ」

マツバは微笑を口許に浮かべた。瑞穂も彼につられるようにして微笑んでいたが、ふと真顔に戻った。そんな少女を、ゆかりは不思議そうに見上げている。火照った胸もとゆかりの背中を、白く柔らかい掌で撫でながら瑞穂は訊いた。

「マツバさんは、どう思いますか？ ナゾちゃん……あのハツサムのこと」

「さあ、どうだろう。肝心のナゾノクサが事情を説明できないのでは、どうしようもない——何かの拍子に、また人間の言葉を話せるようになればいいんだけど」

「そうですね……それと……」

瑞穂は一瞬、躊躇うように目線を落としたり。興味深げに、マツバは少女に視線を向ける。透けるように白く、整った少女の顔は、明るい幼さのなかに、どこか暗い大人びた雰囲気秘めていた。彼はそこに、言葉にできないような深い悲しみを見つけた。

「なんだい?」

「結局——黒い霧は、何がしたかったんですか? どうして、無意味に人を傷つけようとしたんですか?」

声のトーンが落ちた。瑞穂の声は、暗く沈んでいた。

「争うことに、何の意味があるんですか?」



2000年前——人々は争った。戦いをした。このエンジュの地で。

その戦いは、争いは——喧嘩でも、競技でも、試験でない。

——ただの殺し合いだった。

一部の無能な権力者の、『力』を求めるあまりの狂気から生まれた戦争。その戦禍は、善良で争いを好まない人々をも巻き込んだ。街全体を炎が包み、スズの塔を始めとした、多くの建物が灰となって、赤い空に消えていった。人間とポケモンの命と共に。

そして争いは終わった。死者・行方不明者、3万2千人という、最悪の結末をもって。生き残った人々は、束の間の平穏を喜び、争いの記憶を深い闇の中へと葬ってしまった。犠牲となった魂の嘆きも知らずに。

火矢に貫かれた少年。捕らえられ、斬首された少女。見せしめのために、全身の皮を引き剥がされた女。手首を締め上げられ、冷たい水の中へと投げ捨てられた赤ん坊。

彼らの悲しみに満ちた心だけが、現世に残った。孤独に殺されてしまうことの淋しさ。恨み。憎しみ。長い年月のもとで、それらは霧に染みつき、一匹のゲンガーに取り憑いた。霧は、暗く闇に沈み込んだ彼らの心を象徴するかのように黒い色をしていた。人々は忘れていた。過去の争いを。それによって無惨に殺された人々の憂いを。

忘れることは罪だから——何も知らないことより愚かだから。それは逃がっているこ

と同じ。過去の悲劇を繰り返してしまいかもしれないから。二度と——二度と忘れさせないために。永遠に争いが起こらないために。

彼らは手段を選ばなかった。失われた記憶を——それを忘れてしまった人々の心に、自分達と同じような淋しさを、憎しみを、恨みを、哀しみを思い出させるために、狂気を剥き出しにした。悪霊と呼ばれようが、亡霊だと蔑まれようが。

長い時が、悲しいだけの感情が、人の心から、人間らしさを抜き取ってしまった。争いなど無ければ。彼らは死なずにすんだ。苦しまずにすんだ。狂気以外の感情を失うこともなかった。

そして生き残った人々も忘れさえしななければ、過去から逃げたりしななければ、こんなことにはならなかった。彼らの淋しさを慰める人が、1人でもいれば——

忘れてはいけない。痛みから、現実から、過去の過ちから眼を背けてはいけない。マツバさんは、そう言いたかったんだと思います。死んでしまえば、誰だつて独りぼっちだから。それは寂しいことだから。このまま、忘れられるのは嫌だから。

そういうえば今日、危ないとところで友達が助けてくれたんです。数日前に、私のせいで亡くなった彼が。もちろん、死んでしまった人が甦るはずはないです。でも、私は信じたい。彼が会いに来てくれたんだと。

私が、死んでしまった彼にしてあげられることは、何もないから。せめてもの償いは、忘れないこと。そうすれば、いつでも会えるような気がするから。



「この女の子が瑞穂ちゃんですか？　子供っぽくて可愛いですね。それで、このメールが……」

瑞穂からのメールを読み返し、射水　冷は大樹の座っているソファを振り向いた。

「あ……」

大樹はいなかった。外へとつながっているドアが、半開きのまま放置されている。冷は辺りを見回した。間違いない。大樹は外に出かけたのだ。

「でも、どこに……まさか……」

冷は立ちつくしていた。そして気付いた。彼は、大樹は、現実から逃げるようなことはいない。その時、冷は背中への辺りに激痛を感じた。鮮血が背中から吹き出している。動揺したときは、いつもこうなるのだ。もう痛みには、馴れていた。

だが今度は違う。違う種類の痛みだった。射水　冷は唇を噛みしめ、外へと飛び出すと、一目散に大樹の後を追った。

塚本大樹は、薄暗い路地の奥にいた。ビルとビルの狭間から覗く夜空には、まばらなながらも星が瞬いている。ビルの谷間から吹き抜ける風は冷たい。

「たしか、この辺りだったはず……」

大樹は足を止め、闇の色に塗りつぶされている壁の周りを見回した。

「捜しているんですね？」

冷の声のする方へと、大樹は振り向いた。今にも風に浚われてしまいそうな、心細げな表情を浮かべた冷が立ちつくしていた。彼女は細めた瞳で、大樹の足もとを見つめている。

「うん……君も、手伝ってくれる？」

冷は微かな笑みを浮かべた。だがそれは闇に阻まれ、大樹には見えない。ここでは総てが、闇に飲み込まれていくのだ。

「こんなところで……寂しかっただろうね」

「そうですね……」

瞳を閉じ、冷は両手を広げた。背中から鮮やかな鮮血が吹き出した。光を纏っている。仄かな光を放ちつつ、鮮血は翼のような形になった。真紅の翼。暖かな光だった。だが彼女の顔は、その癒やしきの光とは対照的に苦痛に歪んでいる。

光は照らし出した。蹲っている少女の姿を。首から上を失った、幼女の無惨な裸体を。大樹は視線を下げる。少女の前へ屈み込むと、できる限りの優しい声で話しかけた。

「鋭田美子ちゃんだよね……?」

少女はビクリとした様子で、身体を強張らせた。顔がないので表情までは読みとれないが、きつと怯えたような顔をしているだろうと、大樹は思った。

「誰……? 私之首、捜してくれるの? それとも——」

また、私を虐めに来たの? もう一度、バラバラにするの? 嫌だ。やめてよ。だから夜は嫌いな。男の人が、意地悪するから——非道いことするから——

少女は呟いた。涙声だった。冷は唇の端を噛みしめ、眼を背けている。

「誰も……少なくとも僕は、君のことを虐めたりしない。約束する」

「ほんと?ほんとに……? それじゃ、捜してくれるの?」

「うん……一緒に捜そう。時間はかかるかもしれないけど、きつと見つけだそう」

おそるおそる大樹は、少女の小さな掌に触れた。冷たい。ひんやりとしている。やがて、その感触が全身に広がった。少女は、大樹にしがみついていた。泣きついていた。嗚咽に震む声が、救いのない夜空に虚しく木霊す。

「お兄ちゃん、ありがとう——恐かった……すごく怖い……だから、凄く嬉しい——」

大樹は、何も言わずに小さく頷いた。そうだ、誰だつて独りなのは嫌なのだ。寂しいおもいはしたくはないのだ。だから、忘れてはいけない。射水 氷のように、立ち向かわなくてははいけない。過去から、自分から、恐怖から、孤独から、痛みから——逃げてはいけない。

今、自分が抱きしめている現実から、眼を背けてはならないのだ。



「でも、それは口で言うほど簡単じゃないよね——」

瑞穂は沈んだ口調で呟き、そして繰り返した「簡単じゃないよ」

目の前には、彼女の墓がある。黒い霧に呪い殺された、イーブイのトレーナーだった女性の墓が。墓石に縫り付くようにして、イーブイがぐつすと眠っている。安心してきっている。なぜなら、この下には、主人が眠っているのだから。

イーブイには、まだ彼女の死が理解できていないのかもしれない。いや、それを認めたくないだけなのかもしれない。人間もポケモンも同じだ。残酷な現実からは、逃げること以外の防御法はないのだ。

瑞穂はイーブイを抱き上げた。イーブイの瞳が、うつすらと開かれた。つぶらな眼を

している。その奥に、暗い光が混じっている。哀しみの色が。「あのさ……これから、どうするの?」

瑞穂の問いかけに応えるかのように、イーブイは墓を見据えた。そして、もう一度、瑞穂の顔に視線を移す。見比べているようだった。やがて、イーブイの眼に涙が浮かんだ。こぼれ落ち、瑞穂の白い肌を滑るようにして流れていく。微かに呻くような声がする。嗚咽だった。哀しみを堪えれば堪えるほど、涙は溢れてくるのだろう。

「忘れたくても、忘れられない過去。忘れてはいけない、それなのに消えていく思い出——
——こんなの非道いよ。結局、悲しみだけが残っただけ。わからないよ……どうしてこうなるんだろう」

イーブイは答えなかった。心が枯れ果てるほどに、涙を流し続けた。そして、赤く腫れた眼を気にもとめずにイーブイは瑞穂の胸から飛び降りた。無言のまま、睨むような目つきで瑞穂の澄んだ瞳を眺めている。

「イーちゃん……その気持ちわかる。私も、好きな人を失ったことがあるから——もう、何回も。その度に思うの。どうして自分は何もできなかったのか——どうして、こんな悲しい思いをしなきゃいけないのか——」

イーブイは俯いていた。耳だけが震えている。

「だから忘れたかった。現実から逃げたかった。だから——」

瑞穂はポーチからモンスタールボールを取りだした。イーブイの前へ、そつと置く。屈み込み、イーブイの顔を正面から見据えながら、瑞穂は言った。

「逃げればいい——いつか立ち止まって、振り返って、現実を直視できるようにするまで、逃げていけばいいんだよ。だれもイーちゃんのことを縛り付けたりしないし、急かしたりもしない。逃げること自体は悪い事じゃないもの……逃げ続けて、いつまでも現実から眼を背け続けてちゃ駄目だけど——今すぐ総てを受け入れる事なんて、誰にもできないから……いつか、イーちゃんが現実には立ち向かえるほど強くなるまでは、この中に逃げていけばいい……」

瑞穂は立ち上がった。手にはモンスタールボールが握られている。大事そうにボールをポーチにしまうと、瑞穂は後ろに振り向いた。

「ヒメグちゃん。そこで、ずつと見てたの？」

片腕のないヒメグマが立っていた。彼は瑞穂の問いかけに頷いた。

「ヒメグちゃんも、私と一緒に——」

彼は首を横に振った。それは否定の印以外の何ものでもない。

鋭い目つきで、ヒメグマは瑞穂を睨んでいる。だが、彼の表情は悲しみに押し流されるかのように沈み込んだ。先程までの激しさは欠片もなかった。彼は瑞穂の足下に詰

め寄ると、片腕を差し伸べた。

「ヒメグちゃんは、これから独りで生きていくんだね——だから、最後のお別れを言いに来てくれたんだよね？」

ヒメグマは恥ずかしそうに俯くと、こつくりと頷いた。瑞穂は小さく朗らかな笑みを浮かべて、彼の手を握りしめた。

「まだ、人間のことを許せない気持ちはあるよね——だけど、いつかは解り合える日が戻ってくるかと信じてる。争いや憎しみが、いつか途絶える日が——」

憎しみは悲しみを生み、悲しみは憎しみを甦らせる。いつか、その連鎖を断ち切らなければならぬと、瑞穂は思っていた。そうできると信じていた。

やがて、自分自身が悲しみに囚われることになるかも知らずに。



黒い霧は、影へと堕ちていた。もはや、以前ほどの力はない。瞳を開いても、見えるのは殺伐とした森の風景だけだった。その時、影の視線は一人の男を捉えた。

「たしかに……この地に残っていた、恨みの霊の力は増しました。今、エンジュシテイは大変な騒ぎです」

男は黒い法衣を着ていた。その手には、透明な水晶玉が握つてある。大粒の涙のように透明な宝玉から、あの特殊な力が溢れてくることに、影は気付いた。手を伸ばす。今にも水晶に手が届きそうになった瞬間、男は水晶を懐にしまい込んだ。

黒い法衣で身を隠している男は、束の間、驚いたような表情をしている。だがその表情は、次第にひきつっていき、笑みへと変わった。突然、頭上から大金が降つてきたときのような顔。企みが成功したときのような、恐れに満ちた笑顔。

「これが……この水晶の力なのですね？」

誰も答えない。深夜の森の沈黙。

沈黙は、闇を意味した。この森全体が、いまだに影の支配下にあつたのだ。滅びかけている黒い霧の中心部から、鋭い爪が伸びた。爪は、男の頭部を狙っていた。それをよこせ。不思議な力を秘めた、その水晶玉をよこせ。黒い霧はそう言うよりも早く、行動に移していたのだ。

だが、鋭い爪が男の頭部を貫くことはなかった。その寸前に動きを止めていた。男は背を向け、焦つたような足取りで森を去っていく。力を秘めた水晶玉が、遠ざかつていく。それでも影は動くことが出来ないでいた。小さくなつていく。闇が薄くなつていく。何かを考える暇もなく、影は完全に消滅していた。

影の意識の消え去る刹那、男を庇うように立ちふさがる、白い微笑みが視界を掠めた。



#12 悲歌。

生存者

「あんたも、一人つきりになっちゃったんだよね」

波の音が聞こえる。誰の声も聞こえない。無数の悲しみが今にも浮かび上がってきて、そうなほどに水面は青く、それでいて不気味なほど白い。

少女は、海水に濡れ、額に張り付いた三つ編みの金髪を手で振り払うと、砂浜の上に仰向けに横になった。青空の彼方で輝く太陽が眩しい。小麦色の肌が、ジリジリと熱くなる。

「あたしも一人つきりなの。みんな死んじゃったからさ」

こうなってから何日が経過したのだろうか。少女は眩きながら考えた。いつまでも、ここにいるわけにはいかない。こうしている間にも、『アレ』が奴に悪用されてしまうかもしれないから。でも――

「だけど今は、一人つきりじゃない。あんたとあたし達、3人いれば、それはもう一人つきりじゃないもんね」

少女は立ち上がり、体に付いた砂を払うと、背伸びをした。

その時、遠くの海に人影が見えた。物凄いスピードで、幾重もの人影が近づいてくる。人間だった。小さなヨットに乗って、数人が近づいてくる。まだ顔までは見えない。だが、なにか不安のような、胸騒ぎのようなものを、少女は彼らに抱いていた。

少女は、まだ知らない。彼らが、途切れていた憎しみの連鎖を、再び繋ぎ合わせることになるなどとは。



穏やかな海が、どこまでも広がっている。柔らかな風が、心地よい水飛沫と潮の匂いを運んでくる。遠くに見える大きな島々が、うずまき諸島なのだろう。大きな島の周りに、小さな島が寄り添うようにして集まっていた。あの島々の中には、無人島も少なくないはずだ。

アサギシティとタンバシティを結ぶフェリーボート、フラウロスは、うずまき諸島の名物である巨大な渦巻の上を通過しようとしていた。白い泡の混じった波に揺られ、大きく頑丈な船体が大きくふらつついた。シンボルマークの青い旗が、メトロノームのように左右を行き来している。

——何処かで見たことのある光景だ。懐かしい。でも、思い出したくはない——

瑞穂は遊歩甲板から身を乗り出して、激しい渦巻を眺めていた。甲板から落ちないよ
うに、手すりをしっかりと握りしめている。激しく渦巻く波が、船側にぶつかり弾け、瑞
穂の顔と水色のツインテールを仄かに濡らしていた。物珍しそうに渦巻の奥底を覗き
込むその瞳は、好奇心の塊であるかのように見開かれている。

顔を綻ばせながらも、少し寂しげな表情を浮かべて、瑞穂は呟いた。

「ユユちゃんも、一緒にくればよかつたのに……でも、船酔いだからしかたないかな」
——私もそうだった。あの時も、船酔いして。その時、彼に——

瑞穂は、隣で同じように渦巻を覗き込んでいるリングマとナゾノクサを見やった。

「すごいね、リンちゃん。ナゾちゃん」

リングマの興奮した様子とは対照的に、ナゾノクサの瞳は冷え切っていた。瑞穂の声
が聞こえていないのだろうか。凍り付いてしまったかのように、その表情は動かない。
まるで、外界からの情報が、完全にシャットアウトされているのではないかと思えるほ
ど。

——知っている。私は、この光景を知っている——

不思議そうに小首を傾げ、瑞穂はナゾノクサの頬を指先で触れた。

「どうしたの？　なんだか変だよ？」

ビクリと震える。ナゾノクサは瞬時に、睨むような目つきを瑞穂に向けた。思わず瑞

穂は手を引いた。怯えているようにも、苛立っているようにも見えるナゾノクサの瞳は、異様な気迫を帯びていた。

おそるおそる覗き込むように、瑞穂はナゾノクサの表情を眺めた。仮面のような無表情の裏で、感情の渦が——それこそ今、目の前で暴れている渦巻よりも——激しくのたうっているかのように、少女には思えた。

揺れる地面から駆け上がってくる不安を胸に抱えながら、瑞穂はもう一度訊いた。

「ナゾちゃん？ どうかしたの？」

——同じことが起きる。見える。そこにいる。奴が近くにいます。あの時と同じように——

ナゾノクサは顔を上げ、焦りにも似た顔つきで、眼前に広がる海の、さらに先を見据えていた。霧の幕に包まれ霞んでいる水平線の中央に、朧気な影がひらひらと舞っている。瑞穂はナゾノクサにつられ、その影へと視線を移した。

「あの影、なんだらう——」

何かの鳴き声が響き、その男が瑞穂の言葉を途中で遮った。非常に澄んだ、それでいてどこか物悲しげな鳴き声だった。瑞穂は流れてくる旋律に耳を澄ましながら、ふと思つた。まるで歌のようだ。何かを嘆いているような感情の露呈——それが歌になつて、渦巻と一緒に海上を彩っている。

「あの時と同じ……同じことが起きる……」

「え？」

突如として聞こえた女の声に、瑞穂は振り向いた。誰もいない。がらりとした甲板が見えるだけだ。

振り返ると同時に、足下で何かが瞬いた。爆発する音が響き、激しい音をたてて船が傾いた。夥しい量の海水が、波に乗って甲板を押し流す。それまでの揺れとは比べものにならないほどの振動と、突然の鉄砲水に押され、瑞穂は海に投げ出された。海面では渦巻が、瑞穂の小さな身体を飲み込もうと、大きな口を開けている。

瑞穂は手すりをめがけて、手を伸ばした。だが、少女の小さく白い掌は、目標まであと数センチのところまで、空気を掴むだけだった。

「くっ……リンちゃんー」

リングマは屈強な太い腕を伸ばすと、瑞穂の左手首を掴み、引き上げた。瑞穂は脱力したようにその場に座り込むと、青ざめた表情で呟いた。

「ありがとう、リンちゃん。それにしても、何なんだろう？ 今の揺れ……」

「逃げて」

さつきと同じ、女の声があった。瑞穂はハツとした様子で声のする方を見やった。赤い光が、水飛沫で霞んだ視界の中でちらついている。瞳だ。爛々と赤く輝く瞳が、瑞穂の

目の前にあった。

「ナゾ……ちゃん？」

ナゾノクサは強張った表情で、瑞穂の顔を見つめていた。そして、はつきりと人間の言葉を話した。「逃げろ」と。「逃げなければ、死ぬ……」と。頭の奥がツンと痛くなるほど鋭い、真紅の閃光を放ちながら。

「それは、どういうことなの？　死ぬって……」

言いながら、瑞穂は驚きに震えた。少女の語尾が掠れるのと呼応するように、ナゾノクサの足下に涙が広がっていく。涙は床で水たまりのようになり、赤い光を反射して、生々しい血糊がこびり着いているかのように見えた。

「あの時と同じよ。すべてが沈む。そして、哀しみに膨らんだ屍だけが浮き上がる——」

その瞬間、爆炎が甲板を包み込んだ。リングマはとっさの判断で、庇うように瑞穂の身体に覆い被さった。オレンジ色の炎が、リングマと瑞穂を舐めるように襲いかかる。

瑞穂はリングマの分厚い体毛の下から、辺りの様子を伺った。何が起こったのか。あまりに突然の出来事に、瑞穂は動揺を隠せなかった。少しでも、何か情報を得たい。それが、この自体を切り抜けるための唯一の方法に違いないのだから。

炎が熱い。揺らめく業火の奥で、ナゾノクサは燃えていた。身体にまわりついてい
る炎など気にもとめずに、ナゾノクサは叫び続けていた。

「そして誰かを憎まなければ、そうやって逃げなければ、生きていけなくなる——だって『生存者』は罪人だから——浮き上がってきた死体の視線に耐えられるほど、人間は強くないもの！」

熱風によつて流された黒煙が、瑞穂の視界を遮った。だが、船体の中央から溢れ出る閃光は、黒煙に満ちた海原であるにも関わらず、燦然と輝いていた。殺意、憎しみ——すべてを焼きつくす光として。



「リリイ、ご挨拶なさい」

面白くなさそうに膨らませた白い頬を、リリイはプイと父親から背けた。誰にも聞かえないほど小さな溜息をつき、眩しく煌めくエメラルド色の長髪を掌で軽く整えると、視線だけを相手に向け、次に軽く微笑み、しなやかに、それでいて丁寧に頭を下げた。

「リリイ・エルリムです。父のお友達の方ですよね？」

顔を上げて、相手の顔を見つめる。髭を生やした中年の男が、にこやかな表情で頷いている。

だが、所詮それは仮面だ。リリイの心は憂鬱に曇っていた。自分もそうなのだと、

曇つた心に自分の声が響く。父も、父の友人というこの男も、そしてリリイ——自分自身も、仮面をしているのだ。偽物の微笑み、偽物の言葉、そして偽物の『友人』という関係。すべては『名家』という看板を維持するためだけ——言い切つてしまえばカモフラージュに過ぎないのだ。これから行われるパーティーの存在も。

三年に一度、エルリム家が主催するパーティーは今回で3回目を迎えた。表向きの開催理由は、他の名家との交流ということになつてはいるが、実際にはエルリム家の力の強さを他の名家へ見せつけるために過ぎない。その為か、開催する度に規模が大きくなり、とうとう今回は高速客船の一等キャビンを丸ごと貸し切るまでに至つた。

人間の見栄は、時に海よりも深く、底が見えないほど肥大化することもある。リリイはそんな人間の見栄が大嫌いだった。そして、それに踊らされている父と、それに踊り狂つて死んだ母を憎んでいた。もちろん、そこから抜け出せない自分自身も——

中年の男はリリイの挨拶に応じた。今まで相手をした、どのジェントルマンよりも丁寧な口調で、なおかつ紳士的な仕種をしていた。まるで、他人に見せつけているかのよう。

その時、リリイの退屈そうで虚ろな瞳が、中年の男の後ろに映つた影を捉えた。人の影だった。リリイと同じくらいの背丈をしている。

中年の男は、リリイの視線に気付いたのか、背中の方に隠れていた少年を、リリイの

前へと引き出した。少年は、おとなしそうな瞳をリリイからそらし、恥ずかしそうに俯いている。中年の男の息子なのだろう。男は少年の肩に掌を乗せると言った。

「おまえも挨拶なさい。この子は、エルリム家のお嬢様なんだからな」

一瞬、リリイはその言葉に悪意のようなものを感じ取った。エルリム家の人間でなければ、ただの小娘だろ、というニュアンスの侮蔑がこめられているような気がしたのだ。リリイは誰にも気付かれない程度に、相手の中年の男を睨み付けた。それに呼応するように、少年は口許を緩め、首をすくめた。だが、瞳の奥は暗く沈んでいた。口調も、明るさや抑揚を欠いていた。

「ライム……シャクジエルです——」

ライムと名乗った少年は、か細い腕を躊躇いがちにリリイの前へと差し伸べた。

「よろしくおねがいます」

リリイは牽制するかのような目つきでライムを眺めると、彼の白い掌に視線を落とし、指先に力がこもった。握り返されていた。リリイは慌てたように、握手していた腕を振りほどき、彼の顔へと視線を移した。彼女の掌は小刻みに震えており、汗ばんでいた。「どうしたんです?」

ライムは不思議そうに瞳を見開き、リリイの紅潮している顔を覗き込んだ。彼女はラ

イムから目を背けて、下唇を噛みしめている。額には汗が滲んでいた。
「どうしたのさ？」

「話しかけないで——」

軽く左右に頭を振り、リリイは上目遣いでライムを睨み付けた。そして彼の頬に息を吹きかけるようにして、小さく囁いた。

「私、嫌いよ。あんたたちみたいなの……周りに流されて、心に仮面をつけて、本当の自分を押し殺してやるような人間なんて。そんな虚しい自分を、周りからの嘘で納得させている弱虫なんて……嫌いよ」

ライムは、しばらく唾然とした表情で彼女のつり上がった目を見つめていた。そこに彼は、暗い憎悪のようなものを見いだしていた。なぜなら、まったく同じものを自分自身も心の奥底に秘めているから。

リリイの小刻みに震える指先に手を添えると、彼ははにかんだ微笑みを見せた。だが、それもまた、親や大人の前だけで見せる偽りの微笑み。名家に生まれた人間は、いつしか親と同じような仮面をつけさせられる。そして大人になる頃には、その仮面が自分の本当の顔だと勘違いしてしまう。だから許せないのだ。大人達は、自分の知らない顔を持つ子供が許せないのだ。

だから自分も、子供に仮面をつけることを強制する。それが繰り返される。

「そうですね、今の僕は……僕じゃない。どうしてわかったんです？」

「私も——あんたと同じだから——」

二人の声は小さく、大人達には聞こえていないようだった。大人達は、大人の会話をしている。仮面を隔てた、腹の探り合いを。

「だから、私は自分が嫌い。みんな嫌いよ——」

ライムは呆然としていた。哀れむように目を細め、静かに彼女を見つめている。

彼を睨み付けていた瞳を背け、リリイは無言のまま背後に佇む高速客船に目を向けた。鉄でできた巨大な船体は、二人の行く末を暗示しているかのように、蒼と赤の相反するペイントが施されていた。

鮮やかな船体の中央には、船の名前を示すプレートが見える。海に反射する光を浴びて、プレートは波打つような輝きを見せていた。

「あの船、グラシヤラボラスっていう名前なんだ——」

——その名は悪夢を呼び覚ます。燃え盛る炎、無数に広がる恐怖の光、そして閃光。眩いばかりの光景の果てに、悲鳴だけが焼きついて、荒れる大海原を紅へと、血の色へと染めていく。

やがて、浮かんでくる屍体。瞳を覆う、死の色。何も見ていないようできて、しつかりとこちらを睨み付けている形相。すべてが、その名から始まった。その悲劇から始まった。グラシヤラボラスという墓場から――

そして、また同じことが起こる。その繰り返しが続く。



繰り返しの死

何かの焦げる臭いがする。炎の踊る音がする。頬や背中を撫でていく風は熱く、思わぬ痛みで呻き声をあげそうになるほど、激しい勢いで吹いている。

瑞穂は目を開いた。ぼんやりと空が見える。そして、不安げに歪んだリングマの顔が覗いた。

頭の奥のぼんやりとした部分を、首を振って追いやると、瑞穂は上半身を起こした。リングマに、もう大丈夫と微笑みかける。不安げなリングマの表情が緩むのを確認すると、瑞穂は小さく背伸びをするようにして立ち上がった。辺りを覆っていた熱風が、すこしだけ軽くなる。

何があつたのだらうかと、瑞穂は辺りを見回した。燃える甲板——炎に包まれている船体。フラウロスの残骸が無数に浮かぶ、赤黒い海面。そして、空高く伸びていく黒煙。爆発。そんな言葉が、瑞穂の脳裏をよぎった。その言葉をきつかけにして、頭の奥で、先程までの悪夢のような光景が再生されていく。閃光に塗りつぶされる海、船体。激しい揺れと、足下から迫り上がってくる炎。だが、爆風に煽られ、翻弄される自分の姿は、すぐに途切れることになる。まさに一瞬のことだったのだ。

「また、同じことが起こる」

足下から響いた女の声が、瑞穂の時間を今に——現実を引き戻した。声のする方を見ると、ナゾノクサが仰向けになって転がっていた。赤い瞳をギラギラと輝かせながら、譫言のように同じことを繰り返して呟いている。今にも途切れそうな、力のない声だった。

ゆつくりと抱き上げる。そこで初めて、彼女の身体のいたるところに惨たらしい火傷があることに、瑞穂は気付いた。

「ナゾちゃん、火傷してる——」

瑞穂はナゾノクサを抱きかかえたまま、腰のポーチから「やけどなおし」を取りだすと、粘液の滲み出ている傷口に吹き付けた。ナゾノクサは苦痛に顔を歪める。呻き声が海上に響きわたった。だが、呻き声が大きくなるにつれて、彼女の瞳から鮮やかな赤色が失せていく。もとの澄んだ瞳へと戻っていく。鋭利な刃物のように研ぎ澄まされた、敵しい表情が、次第に和らいでいくのがよくわかった。変に強張っていた身体から力が抜け、ナゾノクサは瑞穂の腕の中で微かな寝息をたてはじめた。

ナゾノクサが気を失っているのを確認すると、瑞穂はポケモンをモンスターボールに戻した。燃え盛る船体中央部を眺めながら、意志を宿しているかのように蠢く黒煙を前にして、少女は不安を——先が見えないことへの恐怖を、隠しきれない様子だった。

何が起こったのか。

——また、同じことが起きる——

まだ始まってはいない。これから起こる厄災。かつて、何が起こった？　これから、何が起こるのか？

ゆらめく炎が、一段と大きくなる。青い海が、炎の色を照らし出している。妙に生暖かい潮風に吹かれて、黒煙が澄んだ青空に広がっていく。それと同じように、胸の奥底に横たわる華奢な核が——もやもやしていて、容易に触れることのできない、まるで破裂寸前のトマトのような黒い塊が——重圧に耐えきれずに潰れて、その破片を飛び散らしている。破片は心に突き刺さり、少女の指先を、そして胸元を痛みに震わせた。

「また……また、誰かが死ぬの？」

一斉に脳裏に広がる大勢の人々がいた。穏和なその表情、声、指先の暖かな感触。

火の粉が散る。不自然な軌道を描きつつ、オレンジ色に燃える塵は、まるで追いつめるかのように、瑞穂の身体を掠めていく。ひとつ、ふたつ、近づいてくる。よつつ、むつつ。そして、ななつめの火の粉が、瑞穂の柔らかくて細い臍に触れた。灼ける音がした。白かった臍が、みるみるうちに赤く腫れていく。熱い、痛い。だれもがそう感じるはずだった。

だが、瑞穂は微動だにしない。痛みを感じないわけではなかった。大勢の人々の逃げ

まどう様。恐怖で……錯乱で掠れた声。死の間際に見せる、惨めにひきつった表情。冷たくなった屍体の指先に触れたときの、背筋も凍るような悪寒。すべてが、痛みよりも激しい痛みとして甦ってきたのだ。

瑞穂は伏せていた顔を上げた。ひとつの笑みが、瑞穂の霞んでいた瞳に浮かび上がった。目の前で波打っている海面へと、焦点が合っていく。ほとんど無意識のまま、瑞穂は呟いていた。

「そうだ……ユウちゃんを助けなきゃ……」

ぼんやりと頭に浮かんでいた笑みが、ゆかりのものであるという、はつきりとした認識がこみ上げてきた。口許の小さな動き、そこから発せられる言葉。そう、最後にゆかりと交わした言葉。——ウチ、酔ってきたみたいや……せやから、ここで座って待つてるわ——

地面から湧き出る黒煙をもともせず、瑞穂は噛みつくようにして甲板のドアを開き、船室へと足を踏み込んだ。至る所から炎があがっている。炎の大きさに比例するよう、高温の黒煙が船室中に充満している。

瑞穂は海水に濡れたハンカチを口許へとあてた。熱せられた黒煙をそのまま吸い込むと、喉が焼け、肺が焼け、呼吸困難になって死に至ることがあり、非常に危険なのだ。階段を駆け降り、瑞穂は2階船室を覗き込んだ。黒煙が少ない代わりに、炎の勢いは

3階の船室の比ではなかった。視界を覆うようなオレンジ色の炎に、瑞穂は思わず後ずさる。

瑞穂の足が床を踏みしめると同時に、水飛沫があがった。それと呼応するように波紋が広がる。オレンジ色に照らされていた床がゆらゆらと不自然に揺れ始める。瑞穂はハツとして足もとを凝視した。濡れている。波紋の底に床が沈んでいる。いや、そうではなく、船室全体が浸水しているのだ。おそらく、爆発の衝撃で船底に穴が開いたのだろう。

「……お姉ちゃん」

声が聞こえた。ゆかりの涙声だ。瑞穂はすぐさま、声のする方へと目を向けた。座席の上でゆかりが蹲っているのが見える。周りを炎で囲まれて、うかつに身動きがとれないでいるようだった。赤く火照った頬に、涙の筋が浮いている。小刻みに震える膝が、彼女の怯えの度合を物語っている。

「待ってて、ユウちゃん！ いますぐそっちに行くから……」

瑞穂は足下に広がる海水を頭からかぶると、あちこちから立ち上る炎を避け、ゆかりのもとへと駆け寄った。なんとか落ち着かせようと肩を優しくさすり、穏やかな口調で話しかける。

「ユウちゃん、大丈夫だった？」

ゆかりは、涙と海水に濡れた顔を拭うこともなく頷く。怪我や火傷はしていないようだった。だが、少女の震える指先が指し示す先には、別の形で彼女を傷つけた『それ』が転がっていた。

唇の端を噛みしめ、瑞穂はおそろおそろ、ゆかりの視線の先を——指先の指し示す地点を目で追った。黒い塊が、オレンジに照り光る海水に浮かんでいる。そんな光景が瞳に入り込んできた。

人の形をした、黒い塊が。焼け焦げて、想像力すら及ばぬ程、原形を失った屍体が。ぶかぶかと、空気の抜けた浮き輪のように、浮き沈みを繰り返すだけ。その動きに意志はなかった、人としての、生物としての。だが、不自然に折れ曲がっている腕は、醜く歪んだ口許は、まるで溺れた猫のように助けを求めていた。そして、その想いは救われぬまま死んだ。悲痛な叫びの痕だけが、生々しく遺った。

屍体はひとつ……一体だけではなかった。さすがに最初に見たような、原形を留めていないものは少ない。ガラスの破片を全身に浴びて死んでいる男。首があり得ない方向に曲がったまま死んでいる女。いずれの屍体も、瞳は濁ったように充血している。ピンク色の涎にまみれた口からは、死人とは思えないような真っ赤な舌がだらりと垂れていた。

瑞穂はとっさに、ゆかりの顔を自分の胸元に押しつけた。微かな嗚咽が聞こえる。胸

元が濡れていく。それが広がっていく。

「もういやや……なんでウチの周りでは、ぎょうさん人が死ぬん……？」

ゆかりの呻きに近い呟きが聞こえる。瑞穂はゆかりを抱きかかえたまま立ち上がり、脱出口を探し始めた。辺りは炎に満ちている。

「せやから……いつも、いつもウチはひとりぼっちで……」

瑞穂はゆかりを引きずるようにして甲板に飛び出た。海は黒く濁っている。風は熱気を帯びていた。激しく踊り狂う波を見下ろしながら、瑞穂は息を呑んだ。荒い息を落ち着かせるかのように、ゆかりの涙に汚れた顔を見つめる。

「お姉ちゃん？」

涙できらきらと照っている、ゆかりの頬に自分の白い頬を押しあてながら、瑞穂は独り言のように、それでいてゆかりに言い聞かせるかのように囁いた。

「違うよ……ユウちゃんは独りぼっちじゃない……本当の独りぼっちってというのは、もつともつと悲しいことだから……」

「もつと、悲しいことって？」

「わからないけど……その悲しみが続く限り、また誰かが死ぬ」

本能のようなものだった。繊細で、感受性の強い子供だけがもつ防御機構の一部がはつきりと、そう伝えてくる。この船で起きた突然の爆発の原因が、哀しみの鎖のひと

つであることに。

「今回のことだけじゃない……今までに遭遇した悲しいことつて、ほとんどが哀しみから生まれたんだよね」

そして、繰り返される。途切れることなく、際限なく哀しみは悲しみを呼ぶ。

——また、同じことが起きる——

ナゾノクサは何を伝えたかったのだろうか。そして、この事件と何の関係があるのだろうか。瑞穂は考えた。だが、抽象的な言葉の欠片と欠片を繋ぎ合わせても、答えが見つかることはない。不可解な形をした文字だけが、脳裏に残るだけ。

——まだ解らないの？ おまえのしていることは、私たちのような——

「とにかく、ユウちゃんが独りぼちなわけじゃないよ。私もいるし、リンちゃん達もいる」
瑞穂の白い腕をしっかりと握りしめながら、ゆかりは、自分を見つめる澄んだ瞳から視線をそらして俯いた。瑞穂を拒絶しているかのようにだった。

「お姉ちゃんは知らないんや……ウチは、もう……」

その時だった。激しい音を辺りに響かせながら、船体の中央部が裂けていく。甲板が急激に傾いた。瑞穂はゆかりを抱きかかえる。そしてそのまま、渦巻の中へと飛び込んだ。

まさに一瞬の出来事だった。次の瞬間、甲板が粉々に砕け、海の底へと消えていく。

裂けた船体の間から、無数の屍体と炎が洩れている。炎が二つに別れた船体を覆い尽くしたと同時に、最後の爆発が起こった。その爆音が、フェリーボートの最期を告げた。



——また、同じことが起こる——

終わることのない悪夢のように、黒い煙が広がっていく。私の心を、汚していく——
落ちていく。落ちていく。生き続けることよりも、死ぬことよりも辛い、心だけの日々
のせいで、私はいつしか狂っていた。

「こんなところで、何をしてるの?」

ライムが訊いた。リリイは振り向かなかった。彼に背を向けたまま俯いて、風にあ
たっている。甲板には誰もいない。リリイとライムの二人を除いて。

高速客船、グラシヤラボラスがアサギシテイの港を出航してから2日が過ぎた。今日
中にはタンバシテイに到着し、一般客を乗せた後、同じ水路を通ってアサギシテイへと
戻るらしい。今はちようど、うずまき諸島のあたりを航行している。そのせいか、船体

の揺れはいつもよりも激しい。

「近寄らないで」

リリイは口許に掌をあてたまま、くぐもった声をライムにぶつけた。ライムは真顔で、細い瞳を彼女へと向けている。遠くを見据えるような眼差しで。

「船酔いかい？」

「だから、なんなの？ あんた、私をからかいにきたの？ 言ったはずよ、私はあんたが嫌いなもの。どっかへ行つてよ……」

彼は少女に寄り添った。リリイは振り向きざまに、ライムを睨み付ける。

「嫌がらせのつもり？」

「そうじゃない……ただ、リリイがどうしてもそこまで自分を嫌っているのかが知りたいだけさ」

リリイは微かにライムから目をそらし、小さな声で呟いた。

「私が私を嫌いな理由……理由なんてない……言い訳なんて、私には必要ない」
「本当に？ 普通じゃないと思うけどね、自分が嫌いな人間なんて。それで理由がないなんて、すごく不自然なんだけど」

ライムは小さな溜息をつき、眼下に広がる渦巻を眺めた。目まぐるしく模様を変えていく海は、まるでリリイの動揺をそのまま映しだしているかのように、彼には思えた。

「普通じゃないの？ あんたも、わたしも——人間って、自分のことが嫌いなんじゃないの？ 自分のことが好きな人間って、自分のことが嫌いなんじゃないの？」

沈黙。だがそれは長くは続かなかった。

「いるよ。だから知りたいんだ。君が自分を——すべてを嫌う理由を」
「どうして、そんなことを知れたがるの？」

彼女の問いに、ライムは軽く微笑んで見せた。そこでリリイは初めて、彼が自分と同じ、悲しみの影を帯びていることに気付いた。

「知りたいさ……君と僕は似てるから」

「そうね。自分で自分を偽ってる辺りは似てるわ」

「もちろんそれもあるけど、僕が言いたいのはそういうことじゃない。自分を偽っているのは、ただの結果に過ぎないよ。重要なのは理由さ。君は、過去に僕と同じことをしてる。そして、その罪の意識から逃れきれずにいるんだ」

怪訝そうに眉をひそめ、リリイは呟いた。その唇は、震えている。

「あんたが……私の何を知ってるのよ。」

「リリイは……大切な人を目の前で失ったことがあるだろう。そして、その時、自分は何もできなかつた」

一瞬のうちにリリイの顔が青ざめた。彼女は目眩を感じた。そのまま倒れて、海に落

ちてしまえばいいときえ、思った。全身から力が抜けていく。床に崩れ落ちるリリイを、ライムは抱きかかえるようにして支えた。

「どうして……それを……」

「すぐにわかるよ。初めて会ったときから、ずっと気になっていたんだ。眼を見ればわかる。昔の僕と同じだから……」

リリイは顔を上げ、ライムの瞳を見つめた。他の人間と、なんら変わるところはない。別に特別変わった目をしているわけではない。だが、リリイはすぐに気付いた。——私は、今まで、ちゃんと人と目を合わせたことなんて無い——だから、瞳というものがこれほどまでに澄んでいて、綺麗なものだということも知らなかった。そこまで赤裸々に自分の中身を晒すものだということも。

今まで仮面に囲まれて暮らしていたリリイにとって、瞳ほど不気味なものではなかったから。恐かったから。幼い頃のリリイにとって、まるで死んでいるかのような意志の見えない瞳は、恐怖以外の何者でもなかったから。

不意に胸が熱くなった。その奥で、閉じこめていた過去が、光に照らされていく。喉が小刻みに痙攣を始めた。激しい心の動きに、身体がついてこれなくなったのかもしれない。

「4年前に、君のお母さんが自殺している。そのことじゃないのかい？」

「調べたの?」

「いや、有名な話だよ。なんとと言っても、エルリム家のことだからね。新聞にも載ったし、テレビでも取り上げられたじゃないか」

リリイは力なく首を横に振った。

「知らない……あの時のことは、よくわからない……」

ライムはリリイを抱き起こすと、沈鬱な面持ちで語った。

「僕も、そうだった」唇の端を噛み「僕には弟がいたんだけど事故で死んだ。3階のバルコニーから落ちてね。僕は弟を助けられなかった。手すりに掴まって助けを求めている弟の声を聞いて駆けつけたとき、弟はもう落ちていたから」

ゆっくりを脛をおろし、ライムは訊いた。

「君も——リリイも、僕と同じように大切な人を目の前で失っているんだろう?」

リリイは俯いた。その反動で、涙がぼろぼろと床に散った。

「私は、あんたとは違う。私は、あんたみたいに、どうしようもないって割り切ることはできない」

我慢していたものが、一気に膨れ上がってきた。今にも破裂しそうな胸の奥の風船は、ギシギシと悲鳴をあげているようだった。音が聞こえる。自分の嗚咽が、耳に響いてくる。

「あなたの言うとおり、4年前にお母さんは死んだ。自殺した。原因は極度のノイローゼで、本当は……私も一緒に死ぬはずだった。でも、私は死ねなかった。崖から飛び降りて、血塗れのお母さんの中で、私だけは生きていた……」

誰だって、同じ経験をしているはずなのに、誰だって、大切な人を目の前で失っているはずなのに、どうして自分だけに罪の意識が芽生えなければならぬのか。不公平に思いつつも、そう思うこと自体が罪のように感じて、何もできなかった。できるはずがなかった。

壊れた心臓が、辺り一面を赤く染めていく光景が、目の前で甦ってくる。歯が折れ、鼻が潰れ、醜く汚れた母親の顔を胸に抱きながら、泣き叫ぶ自分。

「私、ずっとあの事件に囚われている自分が嫌だった。表向きだけ悲しんでる周りの人達も嫌だった……だから、いつそのこと、全部嫌いになってしまえば、楽になれると思っただけ……だけど、そうやってすべてを嫌いになっても、苦しいだけだった」

「僕も同じだった——」

「あなた……何がしたいの？　こんな話させて……私を、どうしたいわけ？」

涙を腕で拭うと、ひきつった悲痛な声でリイは叫んだ。ライムの胸ぐらを掴み、激しく揺さぶった。震える指先に冷たい涙の欠片が滴る。

「なにが……『僕も同じ』よ……不幸自慢でもしたいわけ？」

「違うよ。ただ……」

「何よ」

「僕は、君の近くに居たかっただけ……守ってあげたいと思ってるだけなんだ」

リリイは、すぐさまその手を伸ばし、ライムの頬を張り飛ばした。掌が赤く腫れていく。ジンジンとした痛みが沸き上がる。

それでも、涙は止まらなかつた。掌で顔を押さえ、リリイはその場に蹲つた。背中が震えている。

「あんたのせいで、私……なんだか変になつちやつた……どうして、こんなことするの？」

「初めて会ったときから、こうしようって決めてた。だって、このまま放っておいたら、君は間違いなく破滅すると思ったから——なんとかしてあげたかっただけから——」

ライムは立ち上がる。細い瞳をリリイへと向けた。

「助けてよ……誰でもいいから……もう、我慢できないよ」

リリイはライムを抱きついた。胸の中で嗚咽する彼女の姿は、とても弱々しく見えた。まるで、今まで彼女の中で膨れていた風船が、突然破裂したのではと彼は思った。それほどに、リリイの声は萎んでいた。

「あんたなら……私のこと、わかってくれるよね？ くだらないこと考えるなって、毎日

殴ったりしないよね……？」

初めてリリイと会ったときの、沈み込んだ悲しい瞳が思い出された。仮面の中に憂いを押し込めた、少女の痛々しい表情。握手を交わしたのち、睨むような目つきで自分を見つめた彼女の怯える様子。ひとつひとつの記憶が甦るたびに、悪寒が再び彼を包み込む。聞こえることのない、悲痛な叫びと一緒に。

——だから、私は自分が嫌い。みんな嫌いよ——

強がりの消える刹那に映った、もう耐えきれないと訴えている惨めな表情。

ライムは何も言わない。泣き続けるリリイを抱きしめ、彼はただ無言で頷くだけだった。何かを言うと、また彼女の何かが壊れてしまいそうな気がしたから。



沈んだ涙

子守歌のようだった。

眠りへと落ちていくこの身体、この心を癒やす音だった。瞳が閉じ、光から、熱から、時間からも隔離される。そして、二度とその瞳が開くことはない。時の流れを忘れた瞳は、生きる意味すらも、薄汚れた海の底に捨ててしまふのだから。

子守歌のようだった。一定の間隔で耳に響く、さざ波の声。その音に呼応して、海水が小さな身体を濡らしていく。それと同時に、今まで感じることもなかったものがこみ上げてくる。冷たい。どうしてこんなに冷たいんだろう——

「あんだ……生きてるの？ それとも、やっぱり死んでる？」

女の声だった。自分と同じ、子供の声。瑞穂はうつすらと目を開いた。ぼんやりとした視界の中で、金髪の少女が驚いたように口を開けている。

「生きてる……」

少女は、瑞穂の存在を拒絶するかのようには後ずさった。三つ編みにした金色の髪の毛が、わなわなと震えている。艶のある小麦色の肌には、脂汗が浮いている。

瑞穂は上半身を起こした。視界に飛び込んでくるものといえば、一面に広がる砂浜と、穏やかに波打つ海原があるだけ。他にあるものといえば、隣で寄り添うように横になつてゐるゆかりと、口を開けたまま突つ立つてゐる金髪の少女しかいない。

何も無い。それだけしかない、そのような表現しかできない孤独な島だった。海という迷路に置き去りにされた、巨大な列島の惨めな破片。そして今、自分は『ここ』に置き去りにされている。誰も自分の場所を知らず、自分ですら自分のいる場所を知り得ない。そのことを理解するのに、瑞穂は数分もかからなかつた。

置き去り。それは誰からも、すべての情報からも、これまで生きてきたことの意味からすらも断絶されること。まるで、この孤島と同じように。

「私は、トキワシテイの洲先瑞穂つていいいます。あなたは……う？」

ゆかりを胸に抱き起こし、瑞穂は細々とした声で訊いた。

「ミル……陽炎ミル。タンバシテイ北部の小さな村の出身よ」

ミルと名乗つた少女は立ち上がり、遠くを見つめるような目つきで呟いた。その視線の奥に、瑞穂は淀んだ湖のような色を見た。哀しみだけでも、憎しみだけでもでない。こみあげるような切なさの色を。かつての——3年前の自分と同じような。

「あんた……つていうか、瑞穂ちゃん、だっけ？」

「うん」

「もしかして瑞穂ちゃんも、あの船の生き残りなの？」

小さく頷く。濡れた水色のツインテールを手で撫でつけながら、瑞穂は思い起こしていた。何の前触れもなく起こった爆発。そして死臭の渦巻く、死にかけた——沈んでいく船の中からの脱出。流されていく。沈んでいく。この小さな身体が。

だが、不思議と苦痛は感じなかった。冷たい海を漂っていたはずなのに、誰かに抱きしめられているかのような暖かな心地よさがあった。

海水に濡れた服を乾かし、気を失ったままのゆかりを木陰に寝かせる。少しずつではあるが興奮が薄れ、それが次第に恐怖へとすり替わっていく中で、瑞穂は何かを話さずにはいられなくなっていた。

ポーチから非常用としてとっておいた木の実を取り出す。瑞穂はその木の実を一粒、口に含んだ。

「どうしてだろう。あんな渦巻ばつかりの海に飛び込んだのに、怪我ひとつせず助かるなんて」

瑞穂の口の中で、木の実の転がる音がする。ミルは瑞穂から木の実を受け取り、同じように口に含むと、うんうんと頷いた。同じような音がする。

「やっぱり、あの船に乗ってたのね——それにしても、なんでこんなことになるのよ」
種と一緒に、ミルは吐き捨てた。ミルにとつても、その記憶は決して快いものではな

いらしい。瑞穂は思い切つて訊ねてみた。

「それじゃ、ミルちゃんもあの船に乗っていたの？」

「そうよ」瑞穂の掌にあつた木の実を口に放り込む「それがどうかしたの？」

「あ、その……見かけなかつたから、えと、船の中で」

ミルは訝しげに瑞穂を見た。「そりや、そうでしょ。あんなに大きな船だよ？」

「お、大きかつたかな……普通のフェリーボートだよ？ フラウロスつて名前の」

瑞穂が船の名を告げた途端、ミルは瞳を見開き、呆然とした様子で口走つた。

「フラウ……ロス……？ それが、瑞穂ちゃんの乗つてた船の名前なの？」

唐突なミルの問いかけに、瑞穂は小首を傾げて相手の姿を見据えた。その視界を覆い尽くすようにしてミルは瑞穂に詰め寄り、肩を掴むと激しく揺さぶり始めた。

「な……なに？ 船の名前がどうかしたの？」

その時、瑞穂は見た。ミルの——彼女の瞳が絶望の色で凍りついていることを。そつと覗き込む。近づくだけで割れてしまふような、消えてしまふような——そこからでたのは、小さな小さな呟きの声だけだった。

「また……同じことが起つたの？」

——あの時と同じ——同じことが起こる——

ナゾノクサの痛烈な叫び。ミルの呟きは、まったく同じ震えを帯びていた。同じ意

味。同じ恐怖。そして、同じ虚しさを抱え込んだ言葉の切れ端。二人の胸に深く木霊したそれは、強烈な太陽の日差しを覆い隠すかのような、冷たい影に落ちていた。

「あの……さ」

額に浮いた汗を、瑞穂は海水で洗い流した。小さな声で、相手を刺激しないように、彼女は訊いた。首筋を伝っていく雫を気にもとめずに。照りつける日差しから眼も背けずに。

「何があつたの？ ミルちゃんの乗った船の上で。それに、私たちの乗った船が爆発したことと、何か関係あるの？ 『同じことが起こった』って言われても、わからないよ」

短い沈黙のあと、ミルは瑞穂と目を合わせた。大きな溜息をつき、表情を緩ませ、リラックスするように肩を回す。そして再び瑞穂の眼を直視した。さっきまでのような暗い表情でも、緩んだ表情でもなく、唇を引き締め、妙に真面目な顔で、彼女は答えた。「そうね……そうだよ。瑞穂ちゃんもあながち無関係じゃ無いみたいだし。いいわ、教えてあげる」

ミルは両手でパシパシと自分の頬を叩いた。もう一度、溜息をつき、ごろんとその場に寝転がる。笑ってでもいるかのような緩んだ表情が、青空の先を見据えている。だが、それは自分の内にある動揺と哀しみを隠すためのフェイクであることを、仮面であることを瑞穂は知っていた。おどけたように微笑んでみせても、ミルのその眼は、笑つ

ていない。透明な仮面は、なにも隠すことはできないのだから。

「私の住んでいた村には、二つの宝石が祀られてた。一つは、燃え上がるような七色の輝きをもつ『虹の瞳』。もう一つが、海のように暗く透き通った『深海の涙』。私の村のは、宝石を守る役目を負っていた。だから、都会から離れた田舎にあつたし、他の地域との交流もほとんどなかった——」



「この村に『虹の瞳』と『深海の涙』という宝石がある場所を知っているかい？」

この辺りでは見たことのない男だった。野太い声と鋭い視線。こわごと後ずさるミルの首筋を、硬くて長い指先が掠める。見上げた先にあるはずの顔は、逆光のせいで見えない。

「私は世界中の珍しい宝石を見て回っている者だ。決して怪しいものではない」

嘘だ。ミルはとつさに、自分の肩に触れている男の指を払いのけた。相手の瞳の部分が、一瞬だけ妖しく光る。鋭い眼光から顔を背けながら、ミルは声を張り上げた。

「いきなり何なの？ おじさん、怪しすぎだよ」

助けを呼ぼうか。ミルの脳裏に、そんな考えが浮かんでは消える。

村から少し離れたこの岩場は、足を踏み外すと危険なものと、凶暴な野生ポケモンが生息している為に、村の人々は近づきさえしないのだ。助けを呼ぼうにも、辺りには人の影すら見当たらない。荒涼とした岩肌の広がりの中に、ミルと怪しい男だけが、ぼつんと取り残されている。

「そんなことは、どうでもいい……知っていることを教えてくれればな」

言い返すのがやつとだった。男は、言葉にできないような危険なものを纏っているのがよくわかったから。近づくだけで、その『危険なもの』に絡め取られてしまいそうな気がしたから。

「それは……誰にも言っちゃいけないことになってるの。大体、おじさん、何者なのよ？」

男は、ミルの問いには答えなかった。無造作に手を突きだし、彼女の肩を強く掴む。ミルは驚いて、男を見上げた。鋭い目つき、ひきつっているかのように歪んだ口許、そして何より、身に纏った黒いローブの不気味な蠢きに、ミルは恐怖した。

「な、なにすんのよ！ 放して……放してよっ！ う……く、くるしい……くるしいよお」

気付かないうちに首を握り締められていた。か細い首筋が、その裏にある喉が、掠れた悲鳴を精一杯にあげている。

頭の芯の部分が、だんだんとぼやけてきた。白くなっていく。やがて、暗い穴に落ちていくように、意識は墜ちた。落下の最中に発した、叫び声の、金切り声の木霊する音を残して。

木霊は、誰にも聞こえなかった。本人すらも。うつすらと脳裏に浮かび上がる、白い微笑みを除いては。

「この娘の身体は、もう用済みです——」

黒いローブの男は、ぼつりと、誰かに話しかけるように呟いた。呟きの先には、目を見開いたままのミルが、人形のように突っ立っている。瞳は濁った色をしていた。そこに、意識は欠片もなかった。

倒れる。あやつり糸を切られたマリオネットのように。音も立てず。白い霧を、口や鼻……体中の穴という穴から吹き出しながら。

そして頷く。こくりと頷く。誰かが。男の背後で静かに佇んでいる何かが。顔を上げるだけで空気が震える。暗闇がざわめく。紙のような白い肌に似合わぬ、青白い唇は微笑み。そして酷薄な瞳は、微かな光を放つ。

目の前に差し出された二つの宝玉の光を反射しているのだ。一つは燃え上がる炎の色の奥に七色の煌めきを秘めている。もう一つは、海の底のように暗く、それでいて空

のように澄んだ輝きを満たしている。

「さっそく、この宝石の力をつかつて奴を殺し——」

次の瞬間、瞳から光が失せた。刃物のように鋭いそれは、男を睨み付けている。

「あ……いや、その……失礼いたしました。しかし、それでは、なんのためにこの宝石の力を必要とされるのです？ 奴を……いえ、あの御方を殺するためではないのですか？」

首を横に振る。冷たい唇が、小さく動く。

声が聞こえた。白い霧が、呟くようにして男に話しかけているのだ。

「その力……自由に使い。私はしばらく、私の描いた運命のままに生きる……」

「では、私がこの宝石の力を自由に使ってもよいのですか？ この世界を私のものとしてもよいと？」

男の唇の端は痙攣でひきつっている。醜く涎が滴る。

「本当によろしいのですか？」

「私は、いずれ滅ぶ私の身体を取り戻すために、それが必要なだけ……あとはファルズフが自由に使い」

それだけを言うと、白い霧は消えた。黒いローブの男——ファルズフは、一步も動くことなく、完全に白い霧が消えるまで、その様子を見つめるだけだった。

「力……これが、力というものか……」

掌に乗せた、二つの水晶を見つめながら、ファルズフは呟いた。

「それに触らないで！」

ミルの声が木霊した。ファルズフは、ふらつきながらも必死に立ち上がりとしているミルを見た。叫んでいる。相手を睨み付けながら。うつすらとぼやけた視界を、なんとか凝らして。

「その珠は、触っちゃ駄目なの！」

ファルズフはミルに向き直った。至福の時を邪魔された、暗く静かな怒りを放ちつつ。

「耐性があるようだな……あの御方の憑依から、こんな短時間で回復するとは」

「どうして、この祠の場所を知ってるの？ 私たちしか知らないはずなのに……」

不敵な笑みを浮かべ、ファルズフは答えた。

「キミの身体に訊いた。あの御方の『能力』をつかって」

「私の……身体に？」

戸惑いながら、呟く。そして思案する。その直後、瞬時として脳裏に滲み出てくるビジョン——朧気な視覚は、ミルの言葉を詰まらせ、彼女の冷静さを殺した。

「ハハ」……です。

そう語る自分。暗闇の先を指し示す自分の指先。何を考えていたのか、何を思っていたのか、わけが解らないまま、とどめを刺すように呟く。

ここに……隠してます……あなたたちの……望むもの……

「ありがとう」

皮肉でも、悪意もなく、純粋な感謝の気持ちから、ファルズフは礼を言った。だがそれは、ミルにとってこれ以上ないほどの屈辱に違いなかった。

「なにが……なにが『ありがとう』よッ！ ふざけないで！ この馬鹿ッ！」

激高したミルの顔は、表情は、瞬時に沸騰した。小麦色の額や頬が、みるみるうちに朱色に染まる。その目はファルズフだけを睨んでいた。目の前の男に突き進むことだけを考えていた。

ミルはファルズフに掴みかかった。彼の掌に乗った、二つの宝玉へと必死に手を伸ばす。しかし、男の巨軀がそれを阻んだ。

「返してよッ！ 誰も、それに触れちゃいけないの！」

二人はもつれ合ったまま祠の外へと出た。足下には、鋭い岩肌に覆われた険しい谷が、大きな口を広げている。谷の底は、滝のような勢いで風が吹き荒れている。その音が、二人の間を突き抜けた。

「チイツー！」

睨み付け、彼は舌打ちした。ファルズフは肘でミルの頬を殴りつけた。鋭く尖った風の音が、一瞬だけ鈍る。それはまるで、一本の長く伸びたパイプが、途中で圧迫され、ぐにやりと折れ曲がるかのようだった。

彼女の身体も、鈍った風の音のように曲がっていた。頬の辺りが飛んでいった。たまたまのような気がした。ただ、強い衝撃だけがミルの身体を駆けめぐるだけ。不思議なことに、痛みはなかった。まだ、このときは。

そんな状況でも、彼女は諦めなかった。手を伸ばし、鋭い爪をもつてして、男の眼球を突き刺した。

ぷちゅ、という音がした。まるで葡萄の実が弾けるように、男の目玉は萎んでいった。薄汚れた赤黒い血が、ミルの腕と額を濡らした。

ファルズフは雄叫びをあげた。ミルは上下に揺れる視界を駆使し、赤い方の宝玉に狙いを定めると、男の血に汚れた掌を伸ばし、掴んだ。

だが、その時、すでに彼女の視界は、暗く遠い谷の底を映しだしていた。

全身から、重さが抜けていくような感覚の中で、自分は落ちているんだという認識が、やっとな追いついてきた。

変な音がした。何かの潰れたような、気味の悪い音が。

背骨の砕ける音。内蔵の破裂する音。皮膚が張り裂ける音。どれも、自分の痛みに直結する音。

絶え間なく続く呼吸の響きだけが、生きていることを実感させる音だった。だが、その響きこそが、彼女の最期が近づいていることを指し示しているというのは、あまりにも残酷な皮肉だった。

ミルの視界は、もう谷底を映しだしてはいなかった。暗い闇が延々と広がっているだけだった。彼女には、今見えている暗闇が、夜空なのか、谷底の暗闇なのか、見当もつかなかった。

彼女の見える悪夢の中では、どんな闇だろうと、それはすべて同じものなのだから。だが、星は見えた。雲に隠れていた月も、しばらくして姿をあらわした。自分の見える闇が、決して恐ろしい闇でないことを知り、ミルは安堵の溜息をついた。

長い時間、ミルは闇の底に横たわっていた。そうすることしかできなかった。起きあがることも、何かを叫ぶこともできなかった。

星は流れた。流れきって、流されて、月だけがぼんやりと光って見える。じつと眺めていると、不意に胸の辺りが熱くなった。

「はやく……家に帰りたいよ……」

遠くに見える月が、涙で澱んだ。瞬きの度にこぼれ落ちる雫は、ミルの頬を伝って耳

から落ちていく。

「誰か、助けて……」

小さな眩き。それだけ言うのがやつとだった。痺れた舌は、彼女の言葉をしどろもどろにさせてしまうのだ。声の小ささ、不明瞭さに比例するかのようには、ミルの見開かれた眼は赤く腫れていく。

「死にたくない……死にたくない……こんなところで、1人で腐るのは嫌だよ……」

眩き続けながら、ミルは左腕で涙を拭いた。拭いきれなかった涙が、右肩にこぼれ落ちていく。

感覚は消えていた。右腕は、滴り落ちる涙の感触を身体に伝えてはくれなかった。麻痺したように動かない首に力を入れ、ミルは冷たく濡れているはずの右腕を見やった。

彼女は、即座に眼を背けた。そこに腕はなかったから。数メートル離れた赤い水たまりの上に、白い腕が浮かんでいたから。

ほんの少しの間をおいて、叫び声が木霊した。暗い谷に。何かを吐き戻す音と一緒に。

真つ赤に充血した瞳を閉じ、ミルは胸の上に吐き出した血の塊を払い落とした。ヌルヌルとした血の塊には、まるで死人のような惨めな表情が映っている。

「もう……嫌だよ……」

血糊に汚れたミルの口から流れ出るのは、悲しみに満ちた眩きと、茶色く濁った膿血だけだった。動くこともなく。焦点の合わない瞳は、月の光を捉えることもできなかつた。

やがて、月は朝日の底に沈んだ。暗い谷に、ようやく日の光が注ぎ込んできた。だが、ミルには見えていなかった。相変わらず、暗い闇だけが、彼女の視界を覆っていた。

「あたし……まだ、死にたくない……死にたくないのに……」

やがて途切れる声。朝の日差しは、今の彼女には眩しすぎたのだろうか。



深暗い海を見つめる瞳

水平線が、夕焼けの色を浴びて、紅く染まり始めていた。

波の音すら響かぬ静寂を飲み込むと、瑞穂は軽く胸を押さえ、砂浜の上に寝転がった。眠たそうな眼を、白い二の腕で覆う。

「お姉ちゃん、もう寝てまうん？」

そう言いながら、ゆかりは、瑞穂に寄り添うように横になった。

「まだ、眠らないよ……というより、今日は眠れそうにない」

「どうして？ 恐かったから？」

静かに揺れ動く波打ち際を眺めながら、ミルは訊いた。一瞬だけ、チラリと瑞穂の横顔を流し見る。思わず眼があつた。二人は固まったまま、視線をそらすことなく、お互いを見つめ続けた。

「たしかに恐かったけど、恐いのには馴れてるから、別にもうなんとも思わないよ」

「じゃ、寂しいとか？ 無理もないけど、こんな小さな島に流されちゃったわけだし」

瑞穂は目をそらした。水平線の奥に沈みかかった太陽を仰ぎ見ている。紅い夕日に照らされた瑞穂の顔からは、表情が消えていた。

「寂しいのにも馴れてるから」

「じゃ……じゃあ、なに？ あんまり焦らすと怒るよ」

「あの人達……」

抑揚を欠いた瑞穂の呟きに、ミルは小さく息を呑んだ。

「この海の底に、沈んでるんだよね……こんなに綺麗に見えるのに」

短い沈黙。ミルは何かを言いたげに首をもたげた。

細く小さな身体を軽く砂に埋めて、瑞穂は続けた。微睡むような表情の奥に隠れた冷たい声は、ミルの言葉を掻き消していた。

「恐いのも寂しいのも、屍体に触ることにだって馴れちゃったけど、目の前で人が死んでいくのを見るのだけは、耐えられない。その光景で頭が一杯になるから、頭の表面にびったり引つ付いちやうから。とてもじゃないけど、寝ることなんてできないよ」

「あたしは、どちらかといえば逆かな」

「逆？」

「そう。あたしだったら、こんな非道いことする奴への憎しみで頭がパンクしちゃう。それこそ夜も眠れない程ね」

「“こんな非道いことをする奴”……？ ちょっと、それって……」

瑞穂は即座に半身を起こした。細かい砂がはらはらと肩や腕からこぼれ落ちていく。

脇で一緒に横になっていたゆかりは、たまらずに飛び退いた。

「お姉ちゃん！ 砂が！」

「あ……（めん）」

ゆかりの全身に付いた砂を払いながら、瑞穂はミルに訊いた。

「あのさ、その言い方だと、グラシヤラボラス号の火災と沈没は、“誰かが意図的に行つた”ってことになるような気がするんだけど」

胸につけた虹色の水晶を手に取り、それを覗き込むように見つめながら、ミルは呟いた。指先は震えている。表情だけが平静を保っていた。

「その通りよ」

水晶を握る手に力がこもる。水晶は、神々しいようで不気味ともいえる異質な光に満ちていた。

ミルの指の隙間から、瑞穂の顔が覗いた。水晶玉を隔てた反対側の方向から、瑞穂はじつとミルを見つめている。

「これさ」虹の瞳を指さしながらミルは「きつと、呪われてるのよ」

「呪われてる？」

「言い伝えでは、虹の瞳は『復活』を、深海の涙は『祝福』を意味しているらしい。でも、それって絶対間違ってる。この二つのせいで、みんなが死んでるもん。それで、あたし

はそんな悲しみの種をあちこちに撒き散らしてる」

涙で滲んだ眼をこすり、ミルは続けた。喉まで出かかった疑問の言葉を、瑞穂は飲み込むしかなかった。

「あの二つの宝玉は、まったく正反対の力を——それこそ大地の破滅すら招く強大な力をもってるの。一つは死の淵に立つ人間の魂を甦らせ、もう一つは死んだ人間の魂を、さらに深いところまで沈める」

二度と浮かび上がることでできない場所まで。

「人の魂を——沈める？」

ふと、脳裏を掠めた。人の心の歪んだ姿である「黒い霧」の悪意に満ちた表情が。

頭の中に湧いた悪夢を振り払うように、瑞穂は首を横に振りながら、ミルの肩に手をかけた。

「泣いてても、しかたがないよ。ほら、そこに一緒に横になろう」

ミルは瑞穂の言葉どおりに、木陰に横たわった。力の抜けた彼女の身体からは一言、絞り出すような呟きが聞こえるだけだった。



足下が濡れていた。それが、失禁した自分の排泄物であることに気付いたのは、彼女が立ち上がり、辺りを見回し、そして今、自分自身が生きていることへの軽い錯乱から抜け出したあとのことだった。

深く考えてはいられなかった。無我夢中で崖をよじ登り、血塗れに汚れた服など気にもとめずに走った。

「何がなんだかわかんないけど……とにかく、誰かに知らせないと」

走るほどに、足が重たくなっていくのが、自分でもわかった。死の淵に立たされたときにすら感じるこの無かった、本当の意味での絶望が胸の底に重くのし掛かってくる。

青い空を紅く照らす風が吹いていた。酷く熱い、それでいて息の詰まるような熱風だった。肺が悲鳴をあげている。思わず息が詰まり、ミルは何度も咽せかえした。

青い空を紅く照らす炎が見えた。白いはずの雲が、その炎の上では溶岩のように見えるのは、混乱の造り出す錯覚のせいだけではないはずだ。分厚い空気の壁が、ミルの頬をジリジリと灼いていた。

ミルは叫んだ。両親への問いかけを。隣の家に住む知り合いの老婆の名を。老婆の息子で、実の兄のように慕っていた青年の名を。

返事などあるはずもなく、灰を空へと運ぶ風が、無情に凧いでいるだけだった。

町は燃えていた。

見慣れていた、昔ながらの建物も、幼い頃によく遊んでいた公園も、自分の住んでいた家も、紅い炎が飲み込んでいた。視界に入り込んでくる風景のすべてが、彼女の記憶と食い違っていた。

言葉にならなかつた。呆然としたまま、ミルは立ちつくしていた。何かの爆発する音。そして、降りかかるガラスの破片。動かなかつた。動けなかつた。

「これなら、あのまま死んでた方がよかつた」

ガラスの破片で、右の瞼が切れた。瞳が血の色のフィルターをかけられ、炎の色は見えなくなつた。瞼の切れた痛みよりも、半分だけだろうと、何も見えないことのほうが楽だつた。

左目は灰の中で蠢く何かを見つけた。人影ではないかと考えたが、あまりにも巨大な影だつた。人間のものではない。

息を殺し、ミルは影へと歩み寄つた。灰をかき分け、奥から姿をあらわしたのは、ミルの身長のお二倍はある、竜に似た炎ポケモン、巨大なりザードンだつた。その巨体は猛火に包まれている。

「なんでりザードンが、こんなところに？」

りザードンは鋭い瞳を、ミルへと向けていた。眩い炎に包まれた、逞しい身体に反比

例するかのように、その瞳からは光が失われていた。

血の匂いがしてきた。ミルはおそろおそろ、リザードンの足もとを見やった。

腕。耳の欠片。それだけを認めると、ミルは眼を背け、胸元の水晶を握り締めながら、弾む息を殺した。地面に飛散していたのは、鋭い爪痕の残る老婆の醜い屍体。黒ずんだ血は、炎の熱で腐り始め、腐臭を放ち始めている。

「あんたが、殺したの？」

どうして殺したの？ どうしてこの町を灼いたの？ 何がしたいの？

ミルの頭に浮かんだ言葉は、言葉としてではなく、狂気を帯びた甲高い叫びとして辺りに響いた。

「どうやら『深海の涙』の力を使えば、あの御方の能力を借りずとも、『人形』を操ることができるようだ」

煙の中に、ファルズフは立っていた。炎すら灼くことを拒むような、黒く冷たい妖気を纏って。潰れたはずの瞳は、蒼い色をした眼となり。口許には、微笑みが見え隠れする。もはや普通の人間ではなかった。少なくとも、心は。

「そのリザードンに罪はない」軽く顎をあげ「少し遊ばせてもらっただけだ」

「何がしたいの？ あんた」

言葉は途切れた。言うべき言葉は、さっきの叫びがすべて抜き取ってしまったから。

「すべては、あの御方のため——とでも言えば納得するかな？」

「あたしのお父さんやお母さんを殺すことが、なんになるっていうのよ！」

「だから言ったじゃないか」彼は髪を掻き上げた「少し遊ばせてもらっただけだ、と」

思考が止まった。これ以上、この男のことを考えても無駄だと。ミルは、やっと悟った。なんで今まで気がつかなかったんだろう。あたしは、とんでもない大馬鹿だ。まったく——

こいつは人間じゃなかったんだ。

「あの御方って——」声が震えていた。理性でも本能でもない男の行動を、理解できない恐怖。獣でも、人間でもないのなら、こいつは一体、なんのために生きているのだろう。

「会っているよ、君は」男は言った「あの美しい『白い微笑み』こそが、あの御方そのものなのだから」

「じゃあ、そいつは何をしたいのよ」

「さあ？」小馬鹿にするかのように、男は首をすくめた。

「その珠を無闇に触ると、大変なことになるのよ？」

「もちろん知っている」

『深海の瞳』が、生物の魂を深く沈め、現世に実体化させる力を、『虹の瞳』が生物の魂と身体を癒やし、死の淵に立たされた者を甦らせる力を持っていることを。そして、

二つの水晶の持つ力は正反対であり、お互いが力のバランスをとりながら存在していたことを。

ファルズフは知っていた。口許に浮かべた笑みを消そうともせず、彼は知っていること、の殆どを語った。

「私の知らない力もあるようだ。そこかしこに焼け死んだ人間の魂が見える」

「あんたが殺したのよ」

「違う。この町の人間を殺したのは、そのリザードンだ」

「あんたが殺すように操ったんでしょ」

男は、それ以上何も答えることはなかった。ミルに背を向け、ゆっくりと歩き出す。

ミルは、たまらずに追いかけた。だが、彼女の行く先は既に消えていた。炎によって生み出された熱風は、ミルの進むべき道を、堅く阻んでいた。

ファルズフは、炎など見えていないかのように歩き続けていた。黒いローブが炎に灼かれようと、その腕が、黒く焼け爛れようと、足は一定の間隔で動き続けている。機械仕掛けの人形のように。

炎の奥に消えたファルズフの残したものは、冷たく感情のない笑みと、呆けたように立ちつくすリザードンだけだった。



「だから、あたしは何とかあの男を追いかけようとした。深海の涙を取り戻して、虹の瞳と一緒に封印し直さないと、大変なことになるから」

「大変なこと？」

静かな口調で、瑞穂は訊いた。

水平線に太陽が落ちて、数時間経つただろうか。辺りはオクタンの墨に沈んだように暗く、空に浮かんだ満月が雲に隠れてしまえば、波打つ海も、隣に寝そべっているミルの顔も見えない。仄かにしよっぱい潮風の音と、自分の小さな息づかいが聞こえるだけで、他に感じるものはない。

「そう、力の均衡が保てなくなつて、この星は滅びる」

精密な機械の歯車が少しだけ欠けたように。始めは目に見えない歪みが、気づかない内に大きな亀裂となつて、大地を飲み込む。

「そろそろ、小さな影響がはじめてるし」

ミルは腕につけたポケギアの電源を入れた。ラジオが聴こえる。エンジンシテイの騒動を伝えるニュースが流れていた。瑞穂が巻き込まれた、『黒い霧』の悪夢の惨劇を伝えていた。

「これが、その小さな影響なの？」

ミルは頷いたようだった。三つ編みの金髪が、瑞穂の白い頬を掠めた。

「あの男が、そのエンジュって街で、深海の涙の力をつかったのよ」

「でも、どうしてそんなことを——」

当惑したように、声の震える瑞穂を余所に、ミルは俯いた。

「それと、キキョウシテイにでたフリーザーも、崩れたバランスのせいで、あんな人の多い街まで来たんだと思う。どうして暴れたのかは、よくわかんないけど」

「あのフリーザーも——」

「それに、ほら」

闇を振り払うように、ミルは空へと指を突き立てた。人差し指の指し示す先に浮かんでいるのは、銀の満月だった。

「月が、どうかしたの？」

「あれさ、昨日も満月だったの。これもバランスの崩れた影響。少しずつ狂っていくのよ、こんな感じで」

ミルはおもむろに立ち上がると、モンスターボールを取りだし、月へ向かって放り投げた。切り裂くような眩い光が走り、その奥から巨大なりザードンが姿をあらわした。

「このりザードンが、ミルちゃんの言ってた……」

「そう。あのまま放っておくわけにもいかなかったし。あたし一人じゃ、心細かったから」

冷たくなった腕を温めるように炎へと手を伸ばし、瑞穂はゆつくと立ち上がった。

身体は大きく、表情も険しいが、リザードンは決して人を傷つけるようなポケモンには見えなかった。自分もリングマという、好戦的な性格のポケモンと一緒にいるせいだろうか、それが良くわかった。

「ミル姉ちゃんは、それでええの?」

突然、背後から響いた声に、瑞穂は反射的に後ろを振り向いた。

ゆかりが半身を起こして、リザードンとミルを交互に見つめていた。紅い炎に照らされ揺れている、ゆかり沈鬱な表情に、瑞穂は驚くと同時に、胸が痛んだ。

「ユユちゃん、起きてたの? それにさっきの話、聴いてたんだね」

頷かなかった。瑞穂の言葉など、ゆかりは聞いていなかった。

「ミル姉ちゃん、そのリザードンのこと、憎くないんか? そいつにみんな殺されてもうたんやで!」

「ユユちゃん——」

瑞穂は何も言えなかった。何も言えない自分が、憎らしいほどに情けなかった。ゆかりに対する注意も、ミルに対する慰めの言葉も、何も浮かばなかったから。

ここで何かを言うことは、自分が自分でなくなるような気がしたから。約束は破れない——

無言のまま、瑞穂はミルの方を見やった。ミルもまた黙り込んでいたが、彼女は小さく首を横に振っていた。

「なんでなん？ ウチやったら——」

「だって、このリザードンは、あの男に操られてただけだし。それに、もつと非道いこともあったしき——」

リザードンの尻尾の炎越しに見える、静かな暗い海を見つめながら、瑞穂は呟いた。
「例の船——グラシヤラボラスとフラウロスのことだね」



見えない殺意

ミルは月の光を背に向けて語った。

瞼を閉じれば甦る、炎の呻きと稲妻のように鋭い閃光。沸き上がる煙の中に見えるのは、焼け爛れ助けを求める人間の姿だけ。

「あたしは、あの男を追いかけてグラシヤラボラスに忍び込んだ——」

瞼を閉じれば甦る、容赦なく人を沈めていく荒波と叫び声を掻き消す風の音。いつも、いつでも、思い起こす度に瞼の裏が熱くなるのは、あの時の熱さを思い出すからだろうか。それとただ単に、流れ出てしまいそうな涙を堪えているだけなのだろうか。

「あの男は、船を沈めた。深海の涙の力で、あのポケモンを操って」

「あのポケモン——？」

炎の間から見える、二つの巨体。美しい歌声のようなあの鳴き声が、苦しみに悶え苦しむように歪んでいく。その歪みが限界を超え、すべてを焼き尽くす閃光が船を切り裂いていく——

ミルの冷えた指先に、瑞穂はそっと触れた。彼女の閉じられた瞼の裏に映しだされた、哀しみの連鎖の始まりを知るためには、そうするしかなかったから。



「あんた、まだ誰かを殺すつもりなの？ どうして、こんなことするのよ！」

船は沈みかけていた。眼下に広がる海は、大きな口をあけて悲鳴ごと人々を飲み込んでいた。

存在する意味を失った船の残骸は、生き残ろうと、浮上しようとする者の行く手を阻み、最期の泡と一緒に、海底へと消えていく。

運良く海面にでられた者も、高速で空回りするスクリューに巻き込まれ、紅い脣として青黒い海面を汚すだけだった。

「そんなに理由が欲しいか？」

黒いローブの男は言った。嘲笑うかのように。あの時と同じ笑みで。あの時と同じ、余裕に満ちた眼で。

怒りよりも、許せないという気持ちよりも、嫌悪感が真つ先に全身を包んだ。灼けるような炎の中にいてなお、鳥肌がたった。

「わけわかんないわよ……なんで理由もなしに人を殺せるの？ こんなことして、あんたに何の得があるっていうのよ」

「理由は無いわけじゃない。強いて言うなら、しつこく私の後を追いかけてくる、君への見せしめだな」

男の声に感情はこもっていなかった。いかにも頭の中で適当に並べ立てた言葉を、ぼんぼんと口から放り投げるような言い方だった。

嫌悪の波が通り過ぎていくと同時に、怒りの感情が遅れて、ミルの胸に沸き上がってきた。歯を食いしばり、男の全身を睨み付ける。

「あんたねえ……」

ミルが怒りにまかせて、何かを言いかけた、その時だった。男の脇をすり抜け、ミルと同じくらいの年の少女が飛び出してきた。眼は狂ったように明後日の方向を向き、海へ向かって半身を乗り出すと、身体を振るようにして胃の中のものを吐き出し始めた。

泣きながら、何かを呟きながら、少女はすべてを吐き出し終えた。その名の通り、からっぽの抜け殻になってその場に座り込んだ少女は、言葉にならぬ嘆きの声に濡れていた。

「——非道い。あんた、こんなこととして、本当に平気なの？」

大きくうねる波。船は傾き、少女は海へと投げ落とされた。ぷくぷくと泡とともに少女は沈んでいく。魂の抜けた力のない瞳は、ゆらゆら揺れる海面をじっと見つめ続けた。

ミルは男からも、少女からも目をそらし、黒煙の中で蠢いている二つの巨体を見やっ
た。今まで彼女が出会ったポケモンの中で、最も大きなポケモンだった。

「あのポケモン、絵本で見たことがある——たしか、カイリユーツて名前で」

竜の姿をしたカイリユーツという名のポケモンは、お互いに争っているようだった。た
だ争っているのではなく、暴れる片方を、もう片方が抑えつけているように見えた。

その証拠に、暴れている方のカイリユーツの眼は、あの時——町を焼きつくした時のリ
ザードンのそれと全く同じだった。血走った瞳に映っているのは、狂気への道しるべだ
けだった。

片方の暴走を抑えていた方のカイリユーツが海面になぎ倒された。暴走したカイ
リユーツは口を開き、大きく息を吸い込むようにして仰け反った。

閃光が走る。カイリユーツの破壊光線が船の残骸を縫うようにして、海を切り裂いた。
傷痕から浮かび上がってくるのは、黒く焼け焦げた無数の屍体。その屍体の中には、
さつきの少女も含まれていたかもしれない。だが、もう誰が誰なのか判別することすら
できなかった。

「もう、やだ——やめさせてよ。こんなこと、こんなこと」

呆然と呻くミルを余所に、ファルズフは静かに歩き出し、赤く滲んだ海面を覗き込ん
だ。愉快なショーでも見物しているかのようには瞳を大きくを広げ、男は言った。

「これでわかったかい？　もう、私やあの御方には関わらないことだ。虹の瞳を渡して、故郷へと帰れ」

「うるさい！　みんなを焼いたのは誰よ！　しらじらしい」

「だから帰れと言っている。両親の元へと」

ファルズフは手に持った深海の涙に力を込めた。海に向かって破壊光線を乱射していたカイリユーが振り向き、ミルへと標準を定めた。

カイリユーの口から光が漏れた。あまりの眩しさに、ミルは両手で眼を覆った。波が、数秒後に迫った衝撃波を予知しているかのように、静まり返る。

だが、破壊光線はミルへは放たれなかった。光は空へと伸びていき、上空に広がる黒煙を突き抜けて消えた。ミルは恐る恐る両目を開き、カイリユーへと視線を向けた。

カイリユーは動いていなかった。ただ空を見上げ、苦しそうな瞳で、もう片方のカイリユーを見つめていた。

暴走を抑えようとしていた方のカイリユーの腕を、真つ赤な鮮血が滴った。その血は、暴れていた方のカイリユーの喉元から流れ出ていた。カイリユーの短いながらも鋭い爪が、もう片方のカイリユーの喉笛を引き裂いていたのだ。

二匹のカイリユーは、もつれ合ったまま海に倒れた。その衝撃で生まれた赤い波は、グラシヤラボラスに最期の時を告げた。船はこれ以上分解することもなく、消えていく

波に引きずられるように、海中へと沈んでいった。

海へと投げ出されたミルは、同じく海へと投げ出されたはずのファルズフを探した。だが、目立つはずの黒いローブは何処にも見当たらなかった。男は、深海の涙の輝きを隠したまま、どこかへと消えていた。



「あのカイリユーは、あたしを守るために——というより、これ以上、誰かを殺させないために、自分の仲間を殺した」

握り締め、汗ばんだ掌を海水で洗い、ミルは濡れた指で火照った頬を冷やした。笑っているわけでもなく、哀しみに沈んでいるわけでもない、奇妙な表情をしていた。鬱ぎ込んでしまいそうな哀しみの気持ちと、それに拮抗するかのように明るく振る舞おうとする気持ちが入り混じっているのだろう。

これ以上、痛々しい表情もないな、と瑞穂は思った。腰を浮かし、静かな海へ顔を覗かせる。小さな波を隔てて映りこんだ自分の表情は、ミルとは対照的に感情そのものが消えていた。

心が沈みきっているこんなとき、どんな表情をすればいいのか、瑞穂は感覚的に知っ

ていた。今まで何度も悲しいことがあるたびに、涙を流すたびに、少女は悲しみを最小限に抑える方法を覚えていった。

悲しむ顔を誰かに見られるから、余計に悲しくなるのだと。いったん涙を流してしまえば、決壊したダムのように歯止めが利かなくなるのだと。射水 氷と同じように表情そのものをなくしてしまえば、悲しみは最初の一波だけで終わる。

だが、その表情は、ミルのそれよりさらに痛々しく見えた。所詮は、涙で汚れた顔を仮面で隠しているにすぎないのだから。瑞穂は微かに瞳を細め、両手で海水をすくいあげ、顔を洗った。冷たく凍りついた自分の表情を拭い取るように。

「人のこと、言えないね」

さっぱりとしたように、つぶらな両目を大きく広げ、瑞穂は軽く呟いた。ミルが思わず振り返り、不思議そうに瑞穂を見つめる。

「なんのこと?」

「ううん、なんでもない。それよりも、そのカイリユーの話、昔話で聞いたことがある」「昔話?」

「うん。あ、昔話っていつでも、私もつい最近、知り合いに教えてもらったばかりなんだけどね」

焦れたようにミルは首を大きく横へと振った。「誰もそんなこと聞いてない!」

「ご、ごめん……」

「それで、その昔話のこと、教えてくれる？」

「うん……それはいいけど。それよりも、あのあと、どうなったの？」

「なにが？」

「そのカイリユーのことだよ。私たちの乗っていた船——フラウロスが爆発した原因は、そこにあるんじゃないかと思うんだけど」

ミルは視線を足下にそらし、ゆっくりと立ち上がった。金色の三つ編みが、朝焼けの眩い光を反射してキラキラと揺れる。

「まだ、終わってないよ。この話は」

「終わってない？ それって……」

「あいつらが、途切れてた鎖を繋ぎなおしたから」

憎しみの連鎖という名の、鎖を。



空は荒れていた。蠢く黒雲が、強い潮風と止めどない雨を振り下ろしてくる。時折、雲の間が光り、轟音とともに大地を雷が貫く。

雷鳴とともに、一斉に光を失うアサギの街を灯台より見下ろし、ジムリーダーの少女、ミカンは小さく息を呑んだ。ガラスに触れるその指先に、微かな冷汗が浮かぶ。

焦げついたような朝焼けを見たときから、不吉な予感はしていた。ジムリーダーとしての仕事を早々に切り上げ、デンリユウの様子を確かめに灯台へ上ったとき、それは予感ではなく確信に変わっていた。

酷く怯えるデンリユウと、灯台から見渡せる、静まり返った紫色の海。底から響く不気味な音。

「アカリちゃん」

ミカンはデンリユウへと振り向き、ゆっくりと手を伸ばし、首筋を撫でた。

「そんなに怯えなくても大丈夫よ」

パチパチと火花をたてて放電するデンリユウを宥めながら、ミカンは再び窓の外を見やった。アサギの街は、悲鳴のような軋みをあげる窓ガラスの向こう側で、どんよりと暗く沈んでいた。

ミカンは懐からモンスターボールを取りだし、握り締めた。デンリユウの額を撫でつつ、彼女は立ち上がり、仄かに光る海原を見つめた。

「来た……！」

ミカンの声に呼応したかのように、海面が瞬いた。鏡が砕けたように波紋が広がり、

その輪の中心から、太い光の帯が空へと放たれた。強力な破壊光線である。破壊光線の衝撃は海を沸騰させ、灯台の窓ガラスをすべて粉々に砕いた。

ミカンは握り締めていたモンスターボールを割れた窓から外へと放り投げた。

「いくのよ！コイル！」

モンスターボールからあらわれたのは、磁石ポケモンのコイルだった。左右のユニツトで重力を遮断し、コイルは海上をふわふわと浮遊している。

「コイル！ 海の中に何がいるのかを探知して！」

指示どおりにコイルは超音波を発し、海中の様子を探った。解析が終わると、コイルは回転しながら上昇し、ミカんに金属音を出した。

「大きな……大きなポケモン……？ いままでで、一番大きな……！ 私のハガネールよりもっ！」

コイルは頷いた。ミカンは海面を見やった。先程と同じく、眩い光が満ちている。

「次が来た！ 避けて！ そのあとにソニックブーム！」

第二波が海中より放たれた。不規則な浮遊能力を活かして、コイルは寸前のところで破壊光線を避けた。遅れてやってくる衝撃波は、ソニックブームでなんとか威力を相殺した。

「コイル、大丈夫？」ミカンの問いに、コイルは金属音を返す。だが、その姿は見えない。

いつの間にか、破壊光線の熱によって蒸発した海水が、水蒸気となってアサギの街を包んでいた。白い水蒸気の奥から響いてくる声は、歌のようでもあり、なにかの鳴き声のようにも聞こえた。

やがて水蒸気は晴れていった。朧気だった影は、段々とその輪郭を露わにしていく。海面からあがる水飛沫の中央から顔が覗く。巨大なカイリユウの姿が海の裂ける音とともにミカンの目の前に現れた。彼は何かを嘆くように咆哮し、澄んだ歌声を掻き消す。

割れた窓から身を乗り出し、ミカンはカイリユウの悲しみに満ちた瞳を見据えた。

「このポケモン——何かを悲しんでる、一体何を悲しんで——」



彷徨いの末と衝動

——あんたも、一人つきりになっちゃったんだよね

波の音が聞こえた。他には、誰も声も聞こえることなく、無数の想いが今にも海面を染め上げてしまいそうなほど、水平線は純白で、それでいて不思議なほどに動かない。

三つ編みの少女は身体についた海水を払い落とすと、砂浜の上に仰向けに横になり、小麦色に焼けた掌で太陽の光を遮りながら、カイリユーと青空を交互に見比べた。

「あたしも一人つきりなの。みんな死んじやったからさ」

ミルが何を話しているのか、カイリユーは正確に理解することはできなかつた。ただ、自分と彼女は似た境遇にあるということだけは、彼女の口ぶりからわかつた。

お互い、帰る場所もなく、これから行くあてもない、ということ。自分の居場所を失つた者と、自分の居場所を探し続けて彷徨う者。少しの違いはあつても、二人を結ぶ共通点であることに違いはなかつた。

カイリユーは一人で延々と話し続けるミルを眺めた。彼女が明るい少女だったのは、カイリユーにとつて幸運だった。内に秘めた悲しみを心の底へと押し込めながらも、絶えることのない彼女の笑顔は、カイリユーの大きな心の支えとなつていたからである。

この無人島へ上陸してから数日の間で、ミルとカイリユーはお互いに必要な存在となっていた。

ミルは立ち上がり、背伸びをした。背中についた砂を払い落とすと、少女は遠くへと目を凝らし、一言呟いた。

「あれ、人影だよ。小さなヨットみたいなのに、誰かが沢山乗ってる」

カイリユーは顔を上げた。ミルの視線の先には、確かにヨットのような小船に複数の人間が乗り込んで、こちらへ、かなりのスピードで向かってくるのが見える。黒いユニフォームを着た、怪しい男達だった。

「あの人のさ、どう見たって、海のおまわりじゃないような気がするんだけど」

怪訝そうに眉をひそめ、ミルはカイリユーへと振り向いた。

「おかしいじゃない、あんな全身、黒づくめで。あたし思うんだけどさ、ああいうのって大体悪い奴等って、決まってるんだよね。そう思わな……」

突然、ミルの声が途絶えた。同時に鋭い激痛がカイリユーの足を貫いた。

ミルの小麦色の肌から血の気が引いていく。何が起こったのかもわからずに、彼女は胸の辺りに手をやった。生暖かい液体の感触と、鼻をつく血の匂いが同じタイミングでミルを襲った。

唇が震え始めた。感情によるものではなく、急激な出血による痙攣である。左右に泳

ぐ少女の瞳は、真つ赤に充血し、その動揺の大きさを物語っていた。

「痛……」

搾るような声で、それだけを呟く。

カイリユーは痛みを堪え、ミルを見やった。全身を血に染め、でくの坊のように突っ立っているミルの胸元は、彼女の腕よりも太い銚によって貫かれていた。銚はそのままカイリユーの足に突き刺さっていた。

「ハハッ！ まさか『サンブル』採取の帰りに、こんな大物に出くわすとはな」

黒づくめの男達が口々に叫んだ。

「もしかしたら、あいつも『サンブル』の可能性があるんじゃないかねえの？」

「どちらにせよ、俺らで奴を捕獲するぞ！」

カイリユーは頭を持ち上げた。男達の乗る船の先端には鋭く太い銚が数本突き出ているのが見えた。その内の一本が、ミルの身体を貫き、自分の足に突き刺さっているのだ。

ミルは嘔みしめていた口を開いた。涎とともに溢れ出てくる、真つ赤な鮮血。胸に突き刺さったワイヤーのせいで、倒れることも、しゃがみ込むこともできずに、痛みに喘いでいる。

カイリユーは、足に突き刺さった銚を抜き取り、ワイヤーを引きちぎった。荒い息づ

かいで男達を凝視し、大きな口をゆっくりと開く。

支えを失ったミルは、砂浜に倒れた。白い泡を交えた波は、次第にミルの血によってピンクに染まっていく。血と海水に濡れながら、半身を起こし、カイリユーと黒尽くめの男達を交互に見つめた。

「おい、あのポケモン、俺らロケット団に歯向かうつもりらしいぞ」

男の1人が言った。カイリユーの大きく開かれた口の意味にも気付かず。

「ロケット団……ロケット団が、どうしてこんなところに……」

薄れていく意識の中で、ミルは眩いた。

「それに、『サンプル』って、一体、なんの……」

声がでなくなった。代わりに猛烈な痛みと黒々とした血の塊が、胸の奥からこみ上げてくる。額と頬が灼けるように熱く、変に粘りけのある汗が、全身から噴き出してくる。

だが、熱さの原因は胸の傷だけではなかった。カイリユーの口から高温と眩い光が漏れていたのだ。

「まさか……」

咄嗟に、ミルは海の中へと飛び込んだ。カイリユーは破壊光線を撃とうとしているのだ。

ミルの予想通り、破壊光線は放たれた。巨大な光と熱が、海を切り裂き、男達の身体

を焼き尽くす。物凄い轟音が、男達の命と悲鳴を次々と飲み込んでいく——



「なんで、あたしだけが生き残るのかな……」

胸の宝玉を握り締めながら、ミルは語った。

「そりゃあ、この珠がある限り、あたしは死なないし、死ねないよ。少なくとも、もう一つの宝玉を取り戻して、お互いの力を封印するまではね。だから、グラシヤラボラスが沈んだときも、カイリユートの破壊光線に巻き込まれて、数ヶ月も海の中を彷徨っても、私はこうやって、とりあえずは生きてる。だけどき——」

ミルは力なく項垂れていた。軽く日焼けした肩に、一粒、二粒と小さな雫が降り注ぐ。どんよりと暗い空は、彼女の心を反射し映しだしている鏡なのではないか。と、瑞穂は思った。勢いを増していく雨は、歯止めの利かなくなつた彼女の悲しみ、そのものなのではないか。

「なんで、あたしだけなの？　あたしの行く先々で、みんな……全員だよ、死んじやうななんてさ」

まるで、あたしが疫病神みたいじゃない。小さく小さく眩く。

「最近、思うんだけどき。もう、こんな面倒なこと止めて、死んじやおうかなって思うことあるんだ。自分から死ぬのは簡単なんだよ。この珠を——手放すだけだから」

ミルの手の中で、赤い珠は虹色の光を放っている。ネックレスから外し、拳の力を緩めるだけで珠は重力に従って落下し、海の砂へと埋もれることだろう。そして彼女は完全に消滅する。彼女の身体を生かし続けているのは、『虹の瞳』の力なのだから。

「そんなの……」

「そんなん、あかんで！」

瑞穂が言う前に、ゆかりは言い切った。眠そうに目を擦りながらも、瞳の奥は鋭く尖っていた。

「ユユちゃん——」

「あんな、お姉ちゃん、そんなことしたって、意味ないで」

ゆかりは雨に濡れた手で、ミルの頬をつねった。

「ちよつと！ 痛いじゃないの！」

「死ぬのは、もつと痛いんやで！」

「ふたりとも、やめなよ」

少し照れたように口許を緩め、瑞穂は二人の間に割って入った。大きく溜息をつき、ミルはゆかりと瑞穂に背を向ける。

その時だった。ミルの胸の珠の輝きが微かに増した。彼女は胸に手を当て、激しく鼓動を続ける心臓へと珠を押しつけた。びくん、びくん、びくん。背中が一定の間隔で、大きく振れる。

「どうしたの？」

「珠が、反応してる。大きな力と、大きな悲しみに」

「大きな……悲しみ……？」

ミルは何も言わずに、モンスタールボールからリザードンを呼び出した。リザードンは雨に怯むこともなく、空へ向かって大きな炎を吹いた。

「あのカイリユーが、アサギの街で暴れてる。あたしのせいだ——あたしがいるから、こ
うやってどんだん人が死んでいく。止めに行かなきゃ」

痛みを堪えるように目を閉じ俯いて、瑞穂は首を横に振った。

「それは違うよ。別にミルちゃんは悪くないし……」

「それじゃ、約束して」振り向きざまに、ミルは叫んだ。

「え？」

唐突に叫ばれ、瑞穂はどぎまぎしたように目を見開いた。ばつの悪そうに指をもじもじさせ、上目遣いでミルの怒っているような顔を見つめた。

「約束って、何を？」

「瑞穂ちゃんは、死なないでね——」

それだけ言うと、ミルはリザードンに飛び乗った。鼻から小さく火を噴き、リザードンは背中に生えた大人二人分ほどの大きさはある羽根を羽ばたかせる。

「ちよつと待つて！」リザードンの巻き起こす風に負けじと、瑞穂は声を張り上げた。「なんで？」

ミルの問いかけに、答える前に瑞穂はゆかりを抱きかかえ、ミルと同じようにリザードンに飛び乗った。

「ちよつと！ 何考えてるのよ」

「私達も行く」

「バカ？ 死ぬかもしれないのよ」

リザードンは大きく咆哮し、飛び立った。島には、リザードンの羽ばたきによって生じた砂煙だけが残った。

「このまま、ほつとけないよ。それに、誰かを助けるのに理由はいらないでしょ」

「もう知らない。勝手にすれば？」

呆れたように吐き捨てたあと、ミルは小さく呟いた。

「約束破ったら、ぶん殴ってやる——」



「コイル！ 電磁砲！」

コイルはカイリユーへロックオンし、電磁砲を放った。だがカイリユーに決定的なダメージを与えることはできなかった。一瞬だけ身体が光り、小さな煙が上がるだけで、怯む気配はどこにもない。

「やはりコイルだと、あのカイリユーには力不足のようね」

ミカンは透けるように白い指先で、額から流れ落ちる雨を拭った。冷たい雫を振り払い、空を仰ぎ見る。

「雨……これがなければ」

滝のような雨は、コイルの空中での移動速度を極端に低下させるとともに、電磁砲の威力を分散させてもいた。ミカンは数回の攻撃で、それを悟っていた。

意を決したように頷くと、ミカンはもう一つモンスターボールを取り出した。コイルに合図を送り、そのまま灯台の頂上から飛び降りる。

「今よ！ ハガネール！」

モンスターボールから飛び出したのは、鉄蛇ポケモンのハガネールだった。ハガネールは、カイリユーに勝るとも劣らない巨大な体を捻り、カイリユーへと向き直った。

一方、ミカンは下で待機していたコイルの電磁壁によつて、無事に地面へと降りてきた。

「ハガネール！ 日本晴れ！」

ハガネールの巨体が白く輝きだし、空を照らす。黒雲は光を避けるかのように消滅していく。眩いばかりの太陽が顔を覗かせ、あたりの日差しが強くなった。

「そのまま嫌な音で攻撃！」

ミカンの指示どおりに、ハガネールは身体を振らせ、全身から嫌な音を鳴らした。

「これで、あのカイリユウの攻撃力を封じることが……」

眩きながら、ミカンはカイリユウを見やった。だが、カイリユウの姿は見えない。強い日差しを遮るほどの、大規模な白い霧がカイリユウの身体を覆っていたのだ。

霧の奥で光が集まっていく。それまでの黄色い光ではなく、赤い炎の色をした光が。ハガネールは咄嗟に防御の姿勢をとり、ミカンを守ろうとした。

「これは、破壊光線じゃない。だめ！ 逃げて！」

ミカンの叫びも虚しく、強力な威力の炎攻撃、大文字がハガネールの身体を包み込んだ。地面に頭を何度も打ちつけ、もだえ苦しむハガネールを前にミカンは何もできずに立ちすくんだ。

カイリユウが破壊光線の体勢をとった。ミカンもろともハガネールを消し去ろうと

しているのだ。ミカンは仕方なく、ハガネールをモンスターボールへとしまい込んだ。これで終わり——ミカンの脳裏にその一言が浮かび上がった。目を閉じる。瞼を隔ても、破壊光線の光は眩しく、熱い。

アサギの街を守りきれなかったという無念さから、ミカンの肩は震えていた。それと同時に、カイリユウの瞳に浮かんだ、不可解な悲しみと怒りの意味を知りたかった。何故なら、自分は——アサギの街は、カイリユウに殺されるのではなく、そこに秘められた悲しみと怒りによって破壊されるのだから。



波は荒れ、熱線は放たれ

「あなたの悲しみは、私を殺す——それであなたの悲しみが消えるの？」

ミカンの言葉に呼応するように、カイリユーは破壊光線を発した。凄まじい威力の衝撃波が、ミカンの服を引き裂きいていく。

「リンちゃん！ 破壊光線！」

正反対の方向から、別の破壊光線が発射され、カイリユーの破壊光線をはじき返した。驚きの表情を隠さず、ミカンは即座に後ろを振り返った。衝撃波によってひび割れた大地の上に、リンググマの巨軀がそびえ立っていた。裂けたように大きな口からは、白煙がもうもうと上がっている。

「ミカンさん。大丈夫ですか？」

頭の上から声がした。ミカンは眩しそうに、日差しの強い空を見上げる。リザードンが空中を旋回しながら飛んでいた。

そのリザードンの背中から、一人の少女が飛び降りてきた。小さく細い身体に、水色のツインテール。白く大人しい顔に、ミカンは見覚えがあった。数日前、ジムに挑戦に来たトレーナーの少女である。

「あなたは、たしか……」

「お久しぶりです」

「瑞穂さん——どうしてここに？ たしか、タンバシティに向かったんじゃない」

「途中で止めました。ミカンさんに負けたままじゃ、他の街へは行けません……って、そんな場合じゃないですね」

瑞穂は身体を捻らせ、カイリユウの方向を見定めた。晴れていく白い霧の中から覗くその巨体は、悲しみと怒りを内に漲らせていた。雨で洗い流すこともできず、霧で隠すこともできなかった。それは、涙に含んで吐き出してしまうほかに、取り除く方法はないように瑞穂には思えた。だが、このカイリユウはそれすら許そうとはしない。

破壊光線を相殺され、通用しないと判断したのか、カイリユウは上空に雷を発生させた。辺りは再び黒雲に覆われ、雷鳴が轟く。鋭い一閃がミカンと瑞穂の上空に降り注いだ。

「グラちゃん！ それとポニちゃん」

瑞穂は咄嗟にグライガーとポニータを呼びだした。強烈な雷も、グライガーの皮膚に遮られてしまえば効果はない。グライガーが完全に電撃を防いだのを確認すると、瑞穂はポニータに飛び乗った。

「ミカンさんも乗ってください。ずっとこの場所にいるのは危険です」

小さく頷き、ミカンはポニータに乗った。瑞穂はポニータに合図を送り、それにタイミングを合わせたようにポニータは短く嘶き、走り出した。

破壊する目標を失ったカイリユーは、その鋭い瞳をアサギの街へと向けた。港を跨ぎ、灯台の間をすり抜けるようにして、アサギシティに上陸した。重みで、アスファルトの地面が陥没する。

カイリユーは破壊光線を発射するために、再びエネルギーをチャージする。その頭上を旋回していたリザードンは、おもむろに火炎放射を浴びせた。

「ミルちゃん……」瑞穂が呟く。

リザードンの背中から、ミルは大声でカイリユーに叫んでいた。

「あんたねえ、何してんのよ！ 何バカなことしてんのよっ！」

リザードンの火炎放射がまったく通用していないのと同じように、ミルの声もカイリユーには聞こえていないようだった。

カイリユーは太い腕を振り上げ、うるさい蠅でも追い払うかのように、リザードンを叩き落とした。リザードンは地面に墜落し、ミルとゆかりは海へと放り投げられた。

「ミルちゃん！ ユウちゃん！」瑞穂は思わず、ポニータから身を乗り出した。

瑞穂の声に反応したのか、カイリユーは疾駆するポニータの姿を目で追い始めた。口を開き、カイリユーは破壊光線を乱射する。ポニータは軽い身のこなしで、次々と降り

注ぐ破壊光線を避けていく。だが、避けることはできても、破壊光線を止めることはできず、辺りの地形が抉れていくだけだった。

「これじゃ、埒があかない。というより、こんな大きなポケモンを止める事なんて——」

瑞穂は突然、ポニータから飛び降り、ポニータに叫んだ。

「ポニちゃん！　せめてミカンさんだけでも安全な場所にお願い！」

ポニータは、それに応えるかのように嘶くと、得意のジャンプで灯台を跳び越え、アサギの街の方へと走り去っていった。ミカンは懸命に何かを叫んでいたが、瑞穂は背を向け、彼女の声を聞こうとはしなかった。それどころか、瑞穂の身を案じるミカンの声を掻き消すように呟いた。

「とりあえず、犠牲は少ない方がいいから——」

犠牲——瑞穂の中で、とても哀しい意味をもつその言葉が、胸の奥に重くのし掛かってきた。それを振り払うかのように、瑞穂は声を詰まらせながら、呟き続ける。

「もちろん、このまま死ぬつもりなんて、ないよ——」

ポニータを見失ったことにより、カイリユーは破壊の標的を瑞穂へと変更したようだった。短い鋭い爪が、頭上から一直線に振り下ろされる。

瑞穂は目をつむり、腕を空高く掲げ、リングマに自分の入る場所と、次の攻撃指示を出した。

「リンちゃん！ 破壊光線！」

リングマの放った破壊光線が、カイリユウの腹部に命中した。カイリユウは衝撃波で弾き飛ばされ、海へと転落した。

「もう、やめよう——こんなこと。こんなことしたって意味ないよ！」

起きあがり、海から顔を出すカイリユウに、瑞穂は自分の限界とも思えるほどの大きな声で話しかけた。

「こんな事したって、あなたの探しているものは、見つかりはしないよ！」

その時、瑞穂の背後でリングマが倒れた。息を吞んで、瑞穂は振り向き、リングマの重い上半身を抱き起こした。破壊光線の連続発射はリングマの身体に、瑞穂が思っていた以上の負荷をかけていたのだろう。

「リンちゃん——ごめん」

瑞穂は、自分の全身の血液が一気に冷えていくのを感じていた。こんな巨大なポケモンにかなうはずがないことはわかっていたが、頭で考えるのと、実際に追いつめられるのとは、だいぶ違っていた。

「リンちゃんは、もう戦えないし、いくらグラちゃんの防御皮膜でも、あの破壊光線は防げない——か」

瑞穂は腰のポーチから、ナゾノクサとイーブイのモンスターボールを取り外すと、グ

ライガーに手渡した。

「グラちゃん。ナゾちゃんとイーちゃんをお願い。私は、ここでリンちゃんを見てあげなきゃいけないから」

グライガーの表情が曇った。いやいやと首を横に振る。瑞穂はグライガーの態度に、戸惑いを隠さなかった。

「どうして？　お願いだから、私の言うことを聞いてよ」

グライガーはモンスタールボールを放り投げ、瑞穂のか細い胸にしがみついた。瑞穂が呆れ半分でグライガーの身体を引き離そうとしたも、グライガーの袂は強く瑞穂の服を捉えて放さない。

「もう……グラちゃんったら。いいよ、もういい。グラちゃんには頼まないから」

瑞穂はグライガーの放り投げたモンスタールボールを拾い上げ、開いた。中からはナゾノクサとイーブイが飛び出す。

「ナゾちゃん達だけでも逃げて！」

ナゾノクサは瑞穂の言葉には反応しない。聞こえていないような素振りですつぽを向くだけで、その場から離れようとはしない。イーブイも瑞穂の言葉に耳を傾けることはなく、戸惑いながらも瑞穂の足に頬をすり寄せるだけだった。

「二人とも何してるの？　どうして、私の言うこと——みんな、聞いてくれないの？」

瑞穂の瞳は悲しみに覆われているかののように、潤んでいた。白い頬を赤く染め、精一杯の声で叫んでも、誰も動こうとはしないから。

一方、カイリユーは再び上陸し、瑞穂へ狙いを定めていた。紅蓮の炎が口の奥に広がり、そして一齐に放たれる。

瑞穂は目前まで迫った炎に気がついた。頬がジリジリと熱くなる。咄嗟に、胸にしがみついたグライガーとイーブイを庇うようにして、姿勢を低くする。全身が熱い。瑞穂は半ば諦めたように、目をつむった。

突き刺さるような熱さが、瑞穂の身体を突き抜けた。だが、痛みはなく、意識も途絶える心配はない。瑞穂は恐る恐る顔を上げた。全身は、さつきまでの焦げるような熱さではなく、柔らかい暖かさに包まれていた。

ゆっくりりと瞳を開く。ゆっくりりと眩く。自分の目の前に駆けつけてきた、ポニータへ向けて。

「どうして——戻ってきたの?」

カイリユーの大文字は、瑞穂へ到達する前に消えていた。ポニータの白い炎の前では、どんな炎であろうと効果は失われるのだ。

「ポニちゃんまで……みんな、何を考えてるの?」

「バカね——」

「え?」

少女の声がした。瑞穂はハツとした様子で、ナゾノクサの方を見つめた。自分を睨む瞳が、そこに二つ輝いている。瞳は紅い色に染まっていた。底の見えない瞳で、瑞穂を見据え、ナゾノクサは話しを続けた。

「バカよ。こんな簡単なことに気がつかないなんて」

「簡単なこと?」

「みんな——あなたに傷ついて欲しくない。それだけよ」

瑞穂はポカンとした表情で、呟いた。

「私に、傷ついて欲しくない?」

「あなたも、この子達が傷ついたら哀しいでしょ」

俯き、小さな領きを瑞穂は返した。

「それは、そうだよ——だ、だから私はみんなを傷つけないと思つたから、みんなを

——苦しませたくなかつたから——」

言い訳しながら、瑞穂は自分の言葉に矛盾と偽りを感じていた。違う、違う、違う——

——私は——

「それは嘘よ。思い上がりでもある。あなたは、ただこの子達が苦しむのを見て、自分が悲しくなるのがいやだっただけ。違う?」

瑞穂に、反論の言葉は見つからなかった。

ナゾノクサは瑞穂に抱きかかえられているリングマに視線を移した。

「この子達が、今まで——そして今も、何のために闘っていたと思うの？」

「リンちゃん達が、闘つてた理由……」

瑞穂はナゾノクサから眼を背けた。そんな瑞穂へ、ナゾノクサは蔑するような視線を流した。

「みんな、あなたが好きなのよ。あなたが、みんなを好きなように。だから、闘う。あなたのために」

ナゾノクサの鋭い視線を避けるように、瑞穂は押し黙った。

「あなたにできることは、この子達を逃がす事ではなく、この子達を信じてあげることじゃないの？ それが、トレーナーとして、ポケモンに対する、最低限の礼儀ではないの？」

頬に手を当て、今にも泣き出しそうな顔で、瑞穂は一度だけ、こつくりと頷いた。

「そうだよ。私、みんなの気持ち、もっと受けとめてあげなきゃいけなかったんだ……」

瑞穂は眼を伏せた。

「私、みんなのこと考えてるふりして、自分のことしか考えてなかったのかも——」

項垂れる瑞穂。ナゾノクサは、少女の細い腕を優しく撫でた。

そんな中、グライガーとポニータは、カイリユウの進行をくい止めるために、必死の抵抗を続けていた。カイリユウの強力な攻撃を、素速い動きでグライガーが引きつけ、その隙にポニータが炎の渦で、カイリユウを足止めする。その繰り返しだった。空中、海上ではともかく、地上での動きは遅いカイリユウにとつて有効な戦い方ではあるものの、相手にダメージを与えるところまでは行き着かない。カイリユウの分厚く強靱な表皮の前では、グライガーの爪も、ポニータの炎も圧倒的に力不足だったのだ。

「誰も、戦いたくなんかない。戦うのは、理由があるからよ。あの子達もあなたも、私も——ライムも——」

ナゾノクサの言葉が不明瞭になり始めた。それに従い、彼女の瞳の紅い輝きが薄れていく。自分の内で張り裂けそうなほどに満ちている意志を、搾りきるようにして言葉を吐き出し、ナゾノクサは倒れた。

瑞穂は立ち上がった。倒れたままのナゾノクサを胸に抱きかかえ、一人で呟いた。

「戦う理由——か」

瑞穂は屈み込み、ナゾノクサをリングマの横へと寝かせた。

「あなたは、何のために。どうして、暴れているの？」

小さな声で、素速く、誰にも聞こえないような、囁きにも等しい呟きを発し、瑞穂は

駆け出した。目の前で無数に転がっている瓦礫やアスファルトの破片を押しつけながら叫ぶ。

「やめて！ もうやめて！ こんな戦い誰も望んでない！ 怒りにまかせて誰かを傷つけても、そのあとに残るのは何も無い——いや、あなたには“力”がある分だけ、あなたの“力”が大きい分だけ悲しみだけが残る！」

カイリユーは咆哮した。大きな音が辺りに響いた。あの歌声のような美しい鳴き声だが、どうしてここまで醜く歪んでしまわなければならないのか。瑞穂はその疑問の答えに、悲しみと怒りだけではないもう一つの感情を見つけた。

「似てる。似てるよ……駄々をこねてる子供に。子供の私が言うのも変だけど。一人で、独りぼっちで遊んでる子供に似てるよ」

大きな叫び声で瑞穂の言葉はかき消せても、言葉の意味まではかき消せない。

「私の周りにもいた。独りぼっちで、人形を壁に叩きつけたりして、壊して遊んでる子供」

寂しいこと、周りに誰もいないこと、孤独なこと。感情はストレートに、誰の制止も受けることなく、行動へと移る。負の感情は、直接に破壊衝動へとつながっている。

「だけど、それは本当にあなたが望んでいることじゃない！ 自分の中にある殺意なら、自分で捨てることができる！」

瑞穂は胸に手を当て、続けた。

「自分を見失ってしまったら、あなたはそこで終わってしまう」

——自分を見失う——

その言葉に反応したのか、思い出さなくもない過去が、瑞穂の脳裏を掠めた。まるで記憶をピンポイントに検索したかのような精度で、映像が何度も何度も切り替わる。一瞬であつても、自分を捨ててしまったあの日のこと。怒りに任せるままに、男達を半殺しにした、白銀に光る満月の夜のことを。

孤独な二重奏

甦つてくる森の空気の冷たさと、男の血糊の生臭さに手が震えていた。瑞穂が一番嫌いな類の震えだった。いずれ全身まで震えは拡がり、唇が動かなくなるから。

「私は力が無かったから、誰も守れなかったし、誰も殺せなかった。でも、あなたの悲しみは誰でも傷つけることができる、誰でも、何人でも殺すことができる。だから、こんなことはやめようよ！」

カイリユーは首を大きく横に振り、唸るような声を響かせた。瑞穂の声に動揺しているのか、それともただ単に、怒り狂っているだけなのか。

巨大な尻尾を振り回し、カイリユーはグライガーとポニータを弾き飛ばした。瑞穂は瓦礫の山の頂上へと飛んでいく二匹の方へ視線を移した。

「グラちゃん！ ポニちゃん！」

瑞穂は叫んだ。瓦礫で全身を傷つけ、二匹は痛みに喘いでいる。少女は瓦礫の山をよじ登り、二匹の横へ座り込んだ。先程の手の震えが、肩にまで及んでいた。耳から聞こえるのは、爆発音でも、瓦礫のはぜる音でもなく、自分の荒い呼吸音だけ。

だがその音は、すぐに掻き消されることになる。背中の方で閃光が弾け、轟音が轟い

たのだ。極太の破壊光線が、カイリユウの胸を直撃していた。カイリユウは前と同じように弾け飛び、地面へと叩きつけられた。

そいつに、今、何を言っても無駄だよ。

気を失っていたはずのリングマが目を覚まし、起きあがっていた。訥々と瑞穂へ話しかけながら、口からもうもうと沸き起こる煙を片手で払っている。

「リンちゃん。大丈夫?」

さあ、もう駄目かもしれないよ。ただ、これだけは姉さんに聞いて欲しい。

リングマは、起きあがろうとしているカイリユウへ身構えながら、続けた。

姉さんは力がなかったから誰も殺せなかったんじゃない。そりゃあ、姉さんは背も低いし、やせっぽちで胸もないし、腕相撲も弱いし、足が速いのだけが取り柄だけ……。

「胸はこれから大きくなるよ。たぶん……」

だけど、姉さんは弱くはなかった。だから、誰も殺さずに済んだ。でも、あいつは姉さんほど強くない。だから、姉さんの言葉が届いていても、意味ないよ。あいつを止めるには……。

「止めるには?」

もう殺すしかない。

「殺すのはだめ! それに、いくらリンちゃんでも、あのカイリユウは倒せないよ!」

そんなことない。僕の破壊光線は、あいつに通用してる。このまま連続で攻撃すれば、あいつを殺せる。殺せるんだ。

リングマは口を開き、大きく息を吸い込んだ。空気中に小さな光の粒が浮かび上がり、それらが口の中へと吸い込まれ集まってくる。薄い光がやがて眩いほどに濃くなり、轟音と衝撃波とともに発射された。起きあがりかけていたカイリユーの頭部へ命中する。爆発音と悲鳴が混ざったような音が木霊した。

「やめて、リンちゃん。殺しちゃだめだよ。私は、これで終わりにしたいから——」

瑞穂の言うことを無視し、リングマは破壊光線を連射し続ける。

カイリユーの充血した瞳から涙が流れ落ちた。血を含んだ、真っ赤な涙だった。同時にリングマの口からも、鮮血が流れ出た。荒い吐息と一緒に吐き出す白煙が、微かに赤みを帯びている。

「やめてよ！　これ以上、破壊光線を撃っちゃだめ。カイリユーだけじゃなくて、リンちゃんも死んじゃうよ！」

瑞穂は瓦礫の山を飛び降り、リングマの肩にしがみついた。

「お願いだから、やめて……やめてよ」

肩にしがみついた瑞穂をリングマは振り払う。反動で、瑞穂の身体にリングマの熱い鮮血が飛び散った。沸騰でもしているかのように湯気が立ち上っている。

カイリユーはリングマの破壊光線に耐えながら口を開いた。リングマと同じように、口の中に光が集まっていく。泣きながら、じつとリングマと瑞穂を睨み付けながら、エネルギーを貯める。そして放つ。両者のエネルギーが空中で衝突した。

だが、二つの破壊光線は消えた。掻き消されていた。両者は呆然とした様子で、辺りを見回した。その時、瑞穂は海上に佇むもう一つの巨体を見た。

「リンちゃん、あれ……あれを見て」

瑞穂の指し示す方向へ、二匹が視線を移した。暗い波の上に立っていたのは、また別のカイリユーだった。先程まで暴れていたカイリユーとは対照的に、優しい眼をしている。

口からは白煙があがっていた。その様子を見つめ、即座に瑞穂は気付いた。先程の破壊光線を掻き消したのが、このカイリユーであると。そして、このカイリユーが幻でも幽霊でもなく、実体のある存在であるということも。

優しい眼をしたカイリユーは、全身が傷だらけの鋭い目つきのカイリユーを舐めるように見つめた。悲しそうに俯き、首を横に振った。鋭い目つきのカイリユーは硬直したように動かないでいる。

その優しい瞳を閉じて、カイリユーは空を仰ぎ見、透き通るような美しい声で鳴いた。歌のような鳴き声は、冷たく暗い海に響きわたった。辺りは静寂に包まれ、黒雲の

隙間から差し込む日の光が、海を明るく照らした。光に導かれるように、歌声は空へと広がっていく。

血塗れでふらつくリングマを抱きかかえ、彼を支えながら瑞穂はその美しい声に耳を澄ませた。

「優しい歌、だね」

リングマはこつくりと頷いた。彼の首筋から、ぽたぽたと数滴、血の雫が滴り落ちる。凶暴な鋭い目つきが緩んでいく。カイリユーは朱色に染まった涙を拭い、大きく口を開いた。相手の歌声を返すように、彼も同じく美しい声で鳴いた。先程まで、すべてを焼き尽くす破壊光線を放っていた口から、今はまったく正反対のものが流れている。

「昔話と同じ……。私やっつと、ちゃんと理解できた。あのカイリユーが暴れていた理由。彼は、ただ単に仲間を失ったのが悲しかったわけじゃないんだ」

優しい瞳のカイリユーは歌いながら、相手のカイリユーから離れていく。戸惑うような表情を見せ、鋭い目をしたカイリユーがそれを追う。だが、優しい眼のカイリユーは溶けていた。まるで、自分が存在してはいけなものであるかのように、再度首を振り、白い波に溶けだすように消えていく。

「どうして、どうして溶けてるの？」

瑞穂の呟きは、カイリユーの歌声の意味とシンクロしていた。彼は歌いながら問いか

けていた。いや、歌声そのものが、相手への問いかけだった。

誰の言葉にも、歌声にも応えることなく、優しい瞳のカイリユーは消えた。最後に残った泡に、柔らかい虹色の光が映りこんでいた。

「もしかして、これが、虹の瞳の力——」

瑞穂はリングマの横に座り込むと、呆然と呟いた。呟きは歌の響きに消された。

カイリユーは消えた仲間を追いかけるようにして、海中へと沈んでいく。次第に大きくなつていく波の音、上空を旋回するヘリコプターのジャイロ音。

やがて、カイリユーの姿は完全に消えた。それでもなお、歌声は消えない。少なくとも、瑞穂とリングマの二人だけには聴こえていた。

彼の歌を聴いたのは、少女が最後だった。



「あーもう！ 死ぬかと思つた！」

水平線の奥へ沈んでいく太陽に向かって、ミルは叫んだ。

騒めくアサギの街とは対照的に、砂浜は、さざ波と同調でもしているかのように静かだった。今にも消えてしまふような細い夕日が、瓦礫に埋もれた砂浜を、血に満ちた戦

場のように紅く染め上げている。

「お姉ちゃん。少し静かにしてや」

ゆかりが、いかにも迷惑そうな表情をつくり、ミルへと訴えた。

「しかたないじゃん。恐かったんだもん——」

「なんでやの。ウチらはただ海に落ちただけやん。瑞穂お姉ちゃんなんか、もつと恐かったはずやで。そやろ？ お姉ちゃん？」

瑞穂は瓦礫の山の頂に立ち尽くしていた。胸に手を当て、次第に色を失っていく海を、ただただ虚ろな瞳で眺めているだけだった。

「お姉ちゃん？」

ゆかりの問いかけで、瑞穂は我に返ったようだった。瓦礫の山をゆつくりと下り、薄暗くなつていく砂浜を横切り、アスファルトの段差に腰掛ける。

「お姉ちゃん、何しとつたん？」

「あの歌声、まだ、聴こえるかなって思ったんだけど」

「あの歌声？」

「うん。でも、もう聴こえなかった」

瑞穂は、ゆかりの小さな掌を握り締めた。ゆかりは瑞穂の膝の上にちよこんと座り込む。

「それにしても、あいつ……なんで、暴れたりしたんだろう。少なくとも、あたしと一緒にいたときは、あんなに大人しかったのに」

吐き捨てるように呟き、ミルは足もとの瓦礫を蹴飛ばした。砂がはぜ、白い波の中に小さな波紋をつくる。

「霧の夜、一匹の大きなポケモンが、海を彷徨っていました——」

瑞穂は小さく呟いた。ミルは怪訝そうに瑞穂の顔を覗き込む。

「何それ？」

「2年くらい前に、ハナダシティに旅行に行つてね、その時に教えてもらった昔話」

「こないだ言つてたやつね」

「うん。この世界で“最後の一頭”になったポケモンが、ずっとずっと自分と同じ仲間を探して、海を彷徨うお話」

「最後の一頭——」

アサギの街に、少しずつ光が灯る。蒼く、白く、様々に彩られた光が、瑞穂の横顔を薄く照らす。

「あのカイリユーム、自分と同じ仲間を探して、ずっと海を彷徨っていたんじゃないかな。その証拠に、世界各地で、大きなポケモンは目撃されているしね。それも、何百年も昔から」

「それじゃ、あのカイリユーは、やっと見つけた仲間を？」

「自分の手で、殺してしまった——それに、自分の周りで、たくさんの命が消えていくのに耐えられなかったんじゃないかな。だから、壊れた」

「壊れた？」

「あの時の、私みたいに——」

ゆかりの握り締める力が強くなった。掌には微かに汗が滲んでいる。瑞穂は静かにゆかりを抱きかかえ、立ち上がった。

「そ、それにしても凄いな。その虹の瞳の力。死んだはずのカイリユーを甦らせるなんて」

「ああ、そのことなんだけどね……」

ミルは躊躇いがちに胸の珠にふれ、小首を傾げた。

「たしかに虹の瞳には、死んだ者の意識を強くする力はあるけど、一度滅んでしまった肉体まで再生させることはできないんだよね。私みたいに、ちよつと傷ついただけならまだしも、もう何週間も経ってるわけだし、そもそも場所が違うし」

瑞穂は息を呑んだ。ミルの言うことが正しいのならば、自分が見た、もう一匹のカイリユーは何だったのだろうか。

「でも、あれは幻じゃなかったよ。実際に破壊光線の威力を相殺してたし」

「だから、これにそんな力は無いって。あの近くにカイリユウの意識を実体化させることのできる媒介、もしくはカイリユウの肉体そのものが存在してたのなら、話は別だけど」

首を小さく傾げ、考え込む瑞穂とミルに、ゆかりは声をかけた。

「なあ、そんなことより、どっか行こうや。ウチ、お腹すいたんやけど」

「あ、それじゃ、今日は私の手作りスープで……」

「それは嫌や」



ここなら遠くまで見渡せる。

街の光も、波の音も、ここなら届くことはない。辺りは絶無の闇に覆われていた。

黒く灼けた灯台の、一番高い場所に瑞穂は佇んでいた。その澄んだ瞳を閉じ、風の音に耳を傾ける。だが、あの歌声が風に流されて聴こえてくることはなかった。

「リンちゃん……」

後ろには、リングマの巨体が立っていた。彼は瑞穂のか細い背中を見つめていたが、少しだけ視線を上へと移す。

「これで、良かったのかな?」

リングマは首を縦に振った。瑞穂は小さく肩をすくめた。

「もう誰もいないのに、ずっと仲間を探し続けるんだよ、あのカイリユーは。それでも?」

瑞穂の言葉に、リングマは何も反応を示さなかった。自分の答えを変えるつもりはないらしい。

それきり、誰も、何も言わなかった。風の音だけが、無惨に破壊された灯台の隙間を通り抜けていく。

瑞穂は瞳を開き、海を見つめた。少しも動くことなく、水色のツインテールだけが、風に揺られて靡いている。

この海の、遠い何処かで、あのカイリユーは自分と同じ仲間を探し続けているのだろうか。返ってくることはない歌を歌い続けながら、自分の命が尽きるまで永遠に。

瑞穂は、リングマの方へと振り向いた。

「そろそろ、帰ろうか——」

早足で階段を降り、瑞穂は灯台を出た。しばらく無言のまま歩き、アサギの街へ入る前に、もう一度だけ、少女は灯台の方へと振り返った。

風いだ海から、微かに美しい歌声が聴こえたような気がした。あのカイリユーの孤独

な二重奏が。

歌声は、すぐに騒然とした街の音に紛れて消えた。

瑞穂は海から眼を背け、その場から立ち去った。歌声は簡単に消えても、内に秘められた哀しみは、少女の胸の中で響き続ける。

会いたい、君に会いたい——その歌詞とともに。

